

# ひと葉 ～参の巻～

亜空@UZUHA

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ついに忍界大戦勃発!!!◆木ノ葉への復讐に突き進むサスケと、彼と道を違えた主人公。イタチを失った二人の想いの行方は……◆原作沿いですので『参の巻』からでもお気軽にどうぞ◆最終章(完結まで)

# 目次

## 第1章 復讐編

剥ぎ取られた心

1

覚悟の色

5

秘密

10

天運

17

殺意

21

終わりの意味

28

救うひと

32

二人の未来

37

乾いた決意

42

瞬き

48

## 第2章 九尾編

楽園

56

一蓮托生

60

器となる者

67

千切れた鎖

72

暁の鮫

79

切願

84

共食い

91

わがまま

97

## 第3章 開戦編

開戦

103

弱き意志

109

連合本部騒乱

113

ぬくもり	290
未来のこと	285
記憶の続き	279
命の在り処	270
憤激の眼	261
儀式	253
影	247
残骸	234
透明、実情	227
散華	219
ウソツキ	211
勝機	203
眼	194
思恋（しれん）	182
第4章 共闘編	
今度こそ	176
涙、ふたつ	170
遭遇	165
月夜	158
波間	152
あぶく	145
外道魔像	138
命令	134
琥珀の浄瓶	130
参戦	119

陰と陽

母と父

第5章 決着編

不完全なる光景

今、戦場に居ない君

囚われ

手をとつて

契約と絆

繋げる

決着

流れ星

冷たい肌

依頼

天秤

黒い意志

しつそう

夢眼（ゆめ）

寂寞の軌跡

紺青の月

幸せだった

愛しいひと

迅雷は繰り返す

徒花（あだばな）

かげろう

想い降る

300

305

309

316

322

326

339

347

355

363

373

378

395

401

412

424

432

440

449

459

464

474

481

493

第6章 終末編

思慕

転生者

産まれぬ命

陽に開いて陰に潜む

救世主

戯曲

想いを繋ぐ人

娘

隣に

溶けた祈り

革命

朝焼け

償い

君の居ない世界で君の居ない未来を

天藍（てんらん）

最終章 風花

また、今度

枯野に咲く

桜紅葉を揺らす風

星孔雀

月兎耳

月下美人

仙人掌

倒景

689

681

673

666

656

641

633

619

611

598

592

586

580

575

567

560

550

541

532

526

519

508

499

風花	826
天涯	813
残花	803
羽化	785
何度別れを繰り返しても	771
石蓮花	755
花嵐に散る涙	749
飛花の残影	733
星彩	722
燦爛(さんらん)	696

## 第1章 復讐編 剥ぎ取られた心

木ノ葉襲撃から数日。

未だ傷の言えぬ木ノ葉隠れの里に、雲隠れの里から雷影の使者が現れた。

彼らは怒りや怨みを纏ったままこう言った。

『うちはサスケの情報をよこせ』  
と。

理由はこうだった。

『木ノ葉の抜け忍、うちはサスケが暁に組みし、自分たちの師である八尾を殺した』

そして彼らはこうも告げた。

『うちはサスケは国際的な犯罪者となった。いずれかの忍によって始末されるだろう』  
と。

サスケの「親友」として、ナルトはその阻止に動いた。

彼が考えたのは、五影会談の招集を要請し、サスケ抹殺のために中心となって動き出した雷影に会って、直に抹殺の中止を訴えることだった。

カカシは背中を押してくれた。ヤマトも一緒に来てくれた。

二人が止めなかったのはナルトにとって意外だった。

暁はもはや、国際的なテロ組織と見なされている。その組織の一員となったサスケに、雷影は弟を殺された……。

それが真実であるなら、いち忍に過ぎない自分がサスケの助命を訴えたところで許されるとは考えられなかった。

頭の隅ではわかってる。が、動かざるを得なかったのだ。

案の定、ナルトの嘆願は『若さゆえの甘さ』と一蹴されて終わった。  
雷影に容赦はなかった。



無駄とはわかっていたが、かすかな望みを信じてでも行動せずに行かれなかったナルトは、少なからず落ち込んだ。心に影が入り込み、追いかけて続けたきたサスケの姿を見失いかけていた。

そんな時だった。

彼の前に暁の衣を着て妖しげな仮面を付けた男が姿を現した。サスケ捜索中に一度会った男だ。イタチとサスケの戦いのことを知っていて、ナナの名も口にしていた謎の男……。

男はカカシの予測通り、自身が『うちはマダラ』であるとはつきり名乗った。

マダラはイタチとサスケの間に何があつたのかを語った。サスケがイタチを倒したことと、そして……『イタチの真実』を。

マダラの話すことのひとつひとつが、すんなりと脳に入らずいちいちフィルターに引っかかった。とても受け入れがたいものだったからだ。

が、全てを受け入れることを拒んでいても、イタチの眼と、サスケの眼、そして、ナナの涙が瞼に鮮明に浮かんで来る。

「そんなの、う、うそだろ……」

マダラはあからさまに動揺するナルトと、それを隠すも、より陰しい表情になったカカシとヤマトを見回して言った。

「信じるも信じないもお前たちの勝手だ。が、サスケが真の復讐者となったことは理解できるはずだ」

ナルトはついに言葉を失った。カカシはマダラに向けて準備していた雷切を解き、低い声で問う。

「それを……」

残酷な答えが待っている予感に漂っていた。

「ナナも知っているんだな？」

が、確かめざるを得なかった。

「ああ、知っている」

マダラはあっさりと言った。

「ナナは二人の戦いを全て見ていたし、サスケとともに『イタチの真実』を聞いた」

「そ、そんなっ……」

ナルトの耳奥に、

『どうして、まだ『信じる』ことができるの?』

あのナナの声が蘇った。

『どうやったら……コレを抱えて……生きて……いける……の……?』

ソレの本当の意味が今更わかって、ナナがどれほど深い悲しみと絶望に沈められているか知った。

「誰からも愛されず、望まれない生を受けたナナにとって、イタチは“全て”だった……。ナルト、お前ならわかるだろう?」

マダラの問いに、ナルトはうつむいた。

言われなくてもわかっている。たったひとり……自分を“見て”、認めてくれた存在の大切さを。誰かとの繋がりを。かけがえのない“愛”の大きさを。

「ナナってば……イタチのことを……」

「愛し、信じ、頼り、そして身も心も守られてきた」

マダラは言葉を繋げた。

「イタチもまた、過酷な運命の中でナナへの愛を手放さなかった」

それはあまりに残酷な言葉だった。

「ナナは最期までイタチを信じた」

ナルトも、カカシも……知らないナナの一面を突き付けられ、戸惑う。

「イタチは最期までナナを守った」

それは知らなかったことへの悔恨でもあった。

「それゆえに、真実を知ったナナの絶望は誰よりも深い」

雪が、屋根に空いた穴からはらはら舞い落ちてきた。まるでナナのように、白く……冷たく……儂なかった。

「だからナナは、サスケと共にには行かなかったのだ」

マダラは少し首を動かす、カカシを見た。

「ナナにはサスケのような復讐心はない」

そしてナルトを見た。

「あるのは深い絶望だけだ」

絶望……それは現在と未来をあきらめること……。

「怒りも憎悪も、もうナナは感じない」

「で、でも……っ……」

そう認めてしまえば、ナナとの“未来”は無い。

「ナナは木ノ葉を護るために戦った!!」

ナルトはそれが千切りとられないように、マダラに向かって再び叫んだ。

「絶望に飲み込まれたヤツが、みんなを護るために命を懸けて戦えるか!!」

「それは“護る”のとは違うな」

が、枯れた言葉に潰される。

「そう見えたか？ ナナが自分の意志で、周りへの“愛”がゆえに護っているように見えたのか？」

「え……？」

否定する言葉を失ったのは、気づいていたから……。

「ナナが今、木ノ葉で何を想うか……お前たちにわかるまい」

面の奥で、マダラは冷ややかに笑った。

「全てを剥ぎ取られたナナの望みを考えるがいい……」

その言葉に誘われたかのように、視界に闇がかかっていくのを感じていた。

## 覚悟の色

『まずは一人目だ……兄さん……ナナ……』

サスケの聲がして、目を開けた。

彼の憎しみに染まった声は、なぜだか心地が良かった。

「ナナ……！ おいつ、ナナ!!」

何度か肩を揺さぶって、ナナはようやく「現実」に焦点を合わせた。

「シカ……マル……？」

「ナナ、大丈夫か?!」

木ノ葉病院の仮設小屋を訪れたところ、医療忍者が「ナナが目覚めた」と言って慌ただしく走り回っていたところだった。

駆けつけると、ナナは布団の上に起き上がり、死人のような表情の無い顔で宙を見つめていた。

「ナナ?!」

ナナは虚ろな目でシカマルを見て、そして今度は目を伏せた。

「胸……が……イタイ……」

うつ血するような声色に、シカマルは一瞬言葉を失った。

そこに自ら傷をつけ、おびただしい血を流しながら里を護ったナナの姿が、鮮やかに蘇ったから。

「傷が痛むか？」

気休めにもなりはしないと知りつつも、シカマルはナナの背をさすった。

「ナナ……お前のおかげで、里が全滅せずにすんだし……みんな生き返った」

そして、見たこととナルトから聞いたことを踏まえて、ナナに言う。「ありがとな」

だが、ナナは弱々しく首を振った。まるで、「そうせざるをえなかつ

た」とても言うように。

「胸が……イタイ……」

そしてか細い声でまた呟いた。

傷口は、サクラたちが処置をしてとつくに塞がっているはずだった。生き返ったシズネも含めて、ナナの治療は特に慎重に行っていたから、傷の具合は心配いらないと聞いていた。

だが、ナナは「イタイ」とつぶやきながら、爪が白くなるほど強く胸を抑えている。

「ナナ……」

痛みの訳を聞くのは躊躇われた。

木ノ葉襲撃のずっと前……、ナナがサスケとイタチを止めるために単独で里を出たことを、シカマルも知っていた。

それが叶わなかったことも。

ナナにとっての“うちはイタチ”の存在も。

だから……。

「ナナ……」

折れそうな細い手首をとり、しわくちやの寝間着から引き剥がす。

思ったほど力はいらなかった。彼の手の中で、ナナの指先は素直に力を失った。

冷たい皮膚から、ナナの痛みが伝わった。

ナナは……わかっていているのかもしれない。

そう思った。

だから、敢えて言う必要はないはずだった。

この、痛みに抗うことすら止めてしまった傷だらけのナナに、言うべきことではなかった。

が、

「ナナ……サスケが……」

彼は告げた。

「サスケが暁の一員として八尾を襲撃し、……犯罪者として国際的な指名手配を受けることになった」

やはり、ナナの顔色は少しも変わらなかった。

「オレたち同期のメンバーは、自分たちでサスケを『処理』すると決めた。サクラも承諾済みだ。今はナルトの説得に向かっている」

七班の説得には自分から名乗り出た。

彼らを大切な仲間だと思っていたからこそ、自分の役目だと思っただ。すでに時代の真ん中を歩き始めた同期の中、嫌われ役は自分が適任だとわかっていたのだ。

だが、それだけではない心境も働いていた。

「お前は……、こうなると知ってたのか……？」

問いかけて初めてこれが目的だったのだと、彼自身気づく。

わざわざ意識が戻ったばかりのナナにサスケのことを告げたのは、ナナが知っていたのかどうかを知るためだったのだと。

「知って……た……」

ナナはため息をつくように、それでもはつきりと答えた。

シカマルは、もう一度考えた。

何故、確かめる必要があったのか。

「お前はもう……」

答えは案外、あっさりとまとまった。

「『覚悟』があるのか？」

『覚悟』……。同期の者たちが、ついこの間持った覚悟。サクラが涙を無理やり止めて、掲げた覚悟。ナルトもどこかで、持たされているはずの覚悟。

ナナがそれを持って目覚めたのか……。

それが知りたかった。

「サスケは……」

ナナは惜しげもなく、ありのままを見せて来た。

「ダンゾウを殺してくれた……」

それは、どろりと垂れる呪いの言葉だった。

「ダ、ダンゾウって……今は六代目火影だぞっ?! なんでサスケがダンゾウをつ……」

「木ノ葉にも……必ず来る……」

ナナの覚悟のイロは、サクラのそれとは全く違っていた。

「私は……サスケと……もう一度『出逢う』覚悟がある……」

何にも染まらず、何もかも染めてしまうような闇の色。それがあまりに濃く、『覚悟』の真意は見えなかった。

「ちやんと……サスケと『戦う』から……」

そして、ナナは歪な笑みを浮かべた。

「ナナ……お前は」

その笑みに向かい、何を言おうとしたのかわからない。

ただ何かが口について出ようとしたとき、

「シカマルさん、こちらですか?!」

医療忍者が入って来て、緊急の用件を伝えた。

「シカク様から招集がかかっています。カカシさんの忍犬が到着したとかで……」

「わ、わかった……!」

正直、遮られてほっとしたところもあった。

「ナナ……オレは行かなきゃならねえ。お前はちやんと休んで、とにかく体調を戻せ。今はオレたちに任せろ」

ナナに何を言うかわからない自分がいた。自分で切り出したくせに、もう何も言いたくなかった。

シカマルはそっと、ナナの手を布団の上に戻した。

「ナナ……オレたちは木ノ葉を護る。敵が誰であろうとだ」

「うん……わかってる……」

意外にもすぐにうなずいたナナに、悲壮感はない。もちろん、吹っ切れた笑みでもない。

何も……何一つ無い青白い顔……。

「けど、オレはお前を……」

「ナナ、目が覚めたって?!」

お前を……。

言いかけて、また言葉は遮られた。

「シカマル君?! ここにいたの? シカクさんの招集がかかってるわ

！」

今度はシズネだった。

「ああ……今聞いたんで、すぐ行きます」

てきぱきとナナの身体を看るシズネと、無反応なナナを交互に見て、シカマルはその場を後にした。

『オレはお前を……』

途切れた言葉が、熱いまま喉の奥にぶら下がっていた。



## 秘密

木ノ葉病院の仮設小屋。

ナナが寝かされている部屋の扉を、いのはそつと開けた。

部屋の外では、医療班がやけにそわそわとこちらをうかがっている。

ナナはシカマルが来たときに一度目を覚まし、シズネの治療の後、また眠りについたと聞いていた。

今もまだ、ナナは弱く寝息をたてていた。

意識が安定しないのも無理はない。

ほんとうなら死んでいてもおかしくないほどの出血量。自力で息をするのもままならないくらいだった。

今も、点滴の管から気休め程度に増血剤と栄養剤がナナの体内へ流れている。

「ナナ……こんなに傷ついて……」

いのは目尻を拭った。

サスケのことを聞かされて以来、涙腺は弱くなっていた。

ナルトに自分がそれを伝えるのだと、決意を持って里を出たサクラの背を、黙って見送るしかない自分。

それすらも悲しかった。

ここに、もつともつと傷ついて、死人のような顔色で眠るナナがいるのに……。

いのはナナのかすかに揺れるまつげを見下ろし、ため息をついた。

ナナの気持ちは知っていた。

いや、サクラと同じで、それ以前にサスケの気持ちの方を知っていた気がする。

だからこそ……。

イタチとサスケの決闘を単独で止めに行き、イタチの死という結果で終わった今、ナナが何を思うのか……想像するのも怖かった。

正直、サスケと一緒にいてくれれば……と思うこともあった。

「どうなっちゃうのよ……あんたたち……」

いのはもう一度ナナに呟いて、点滴を確認した。  
その時、

「いの、ここか？」

シカマルが難しい表情で入って来た。

「どうだ、ナナの様子」

「まだ眠ってるわ」

シカマルは戸口からナナの姿を見つめたまま、いのに言った。

「ナルトたちが帰って来た。オレたちに話したいことがあるってんで、みんなを集めてる」

「サクラも一緒なの？」

「ああ」

いのはナナを見つめるシカマルを見上げた。

彼の仏頂面は子供の頃から見慣れていた。が、こういう顔は最近知った。

「じゃあ、医療班の人にまかせて私も行くわ」

いのは点滴をもう一度チェックして立ち上がった。  
と、

「……わたしも……いく……」

掠れた声をした。

「ナナ……!?!」

フラフラと起き上るナナを、シカマルといので慌てて支える。

「私も行く」

ナナは焦点を無理やり合わせようと瞬きしながら言った。

「ダメよ！ まだ起きられる状態じゃないんだから！」

「行きたい……」

ナナは目を伏せたまま、かたくなに言う。

シカマルはそれをじっと見つめていた。

「お願い……」

いのは彼の横顔に助けを求める。いや、判断を任せた。

「わかった……」

「シカマル……?!」

眉間の皺をより濃くして、シカマルは言った。

「ナナは七班のメンバーだ。行かなきゃだめだろ」

「でも……」

シカマルを青ざめた顔で見上げるナナは、医療忍者としての目で見るまでもなく、消えかけたろうそくの火のように危うかった。

「オレが背負って行く」

いのはシカマルの決断にうなずいた。

彼がナナを心配しきっているのは知っている。それでもナナを連れ出すことを決意したのだから、任せるしかなかった。



「サスケを一人でやるって、ボクたちには手を出さなっただけですか？」

「そんなんで私たちが納得できるわけないでしょ?!」

「お前のわがままに付き合う訳にはいかない。なぜならこれは里の問題だ」

「お前、そうやってサスケとは一人でやるって言っときながら、本当はサスケを庇おうとしてるんじゃないやねーだろうな」

里のはずれの資材置き場で、驚きと否定の声が上がっていた。

ナルトは集まった同期のメンバーに事実を語った。

ダンゾウがサスケの手で殺されたこと、新しい火影のこと、そしてサスケと戦ったこと……。

カカシからの連絡による、「サスケが五影会談を襲撃した」というところまでしか知らなかった彼らは一様に驚いた。サスケの所業と、ナルトとサクラがサスケと「戦った」ということに。

が、さらに告げられたナルトの決意を聞いて、いつそう大きな声を上げていた。

「今のサスケとは誰も闘っちゃダメなんだ。闘えるのはオレしかないねー」

ナルトは落ち着いた口調でそう言った。

「が、同期のみんなでサスケを……と決意した矢先に、突然「自分ひとりでサスケと戦う」と宣言されても、納得する者はいない。」

「一体何があったんだ？ 詳しく説明しろ」

シカマルは皆のようにならで感情を昂らせてはいなかった。だから、  
“味方”のつもりで問う。

だが、

「言うべき時がきたら言うってばよ」

ナルトは彼らしくもなく、明らかに何かを伏せた。

「そんなんで納得できるわけねーつつってんだろ！」

「そうよ！ ちゃんと理由を説明しなさいよ！」

それ以上口を開こうとしないナルトにしびれを切らした者は、今度はサクラの表情をうかがった。

サクラは困惑の顔でナルトを見ていた。

ナルトと共にサスケと合いまみえたサクラだったが、彼女もまた賛成の様子ではなかった。

事態は収拾がつかなくなっていた。

シカマルの頭にも、良い考えどころかマシな台詞さえ思いつかなかった。

と、

「私は……ナルトに従う……」

誰より弱く、誰よりきつぱりと、そう言う者があった。

「ナルトがひとりですとサスケと戦うって言うのなら……私はそれに従う……」

皆、息をのんだ。

「ナナ……」

ナルトだけが、彼女と向き合った。

「ど、どういふことだよ、ナナ!？」

「なんで賛成するのよ！」

ナナは疲れた顔でナルトを見上げたまま、訳は言わなかった。

騒ぎ立てる周囲に構わず、ナルトもまた理由を尋ねることなく、静

かにナナを見つめ返していた。

「ナナ！ お前はサスケと……」

急に嫌な予感がしたシカマルは、そう言いかけて言葉を飲み込んだ。

目覚めたばかりのナナの口から、『サスケと “戦う” 覚悟がある』と聞かされたばかりだった。

その真意ははっきりとわからない。

が、どんな悲しい結果になろうとも、ナナはサスケと『もういちど “出逢う”』ことを望んでいるのだと思った。

そのナナが、全てをナルトに託すと言っている……。

あの言葉はただの気休めではなかった。もっと重く、深く、悲哀に満ちていたはずだ。

が、やはりここで真意を確かめる勇氣はなかった。

だから、ただ奥歯を噛みしめた。

シカマルの沈黙に引きずられるように、次第に皆も言葉を失くしていった。

なにより、ナルトとナナが互いの瞳を見つめ合ったまま一言も発さなかったからだだった。まるで、視線だけで会話を交わしているかのよう。

そして、ナナは唐突に打ち明けた。

「知っている人もいると思うけど……」

力のない足で立ち上がり、ナルトだけを見て、言った。

「私は……ナルトを殺すために産まれて来た」

感づいていた者はうつむき、予想もしていなかった者は息をのんだ。

「私は……ナルトの中の封印が破れて九尾が暴走したときに、ナルトから九尾を引きはがし、新たな器になる者として産まれたの」

ナルトはまだ、静かにナナの言葉を受け止めていた。

「そういうチカラを持って産まれて来るように、父や里の者たちが術

を使って私を産み出した……」

ナナはゆつくりと、胸に手をやった。

「ここにあつた刻印は、九尾を封じるためのモノだった。ここには九尾のチャクラが少しだけ埋め込まれていて、九尾が暴走した時には私がある場所に現れるように術式が組まれていた……」

シカマルは、目の前で文字通り「消えた」ナナと、空を切った己の腕を思い出し、背筋が冷えるのを感じていた。

「私が和泉の里から木ノ葉にやって来たのは、より近くでナルトを見張るため……」

声をあげる者は無かった。皆、息をひそめてナナの言葉を聞いていた。

それぞれが、その言葉をもてあまさぬよう、必死で受け止めようとしていた。

「私がナルトの側にいたのは……、そのため……」

ナルトを傷つけるようなことを告白しながら、ナナが自分自身を傷つけていることがわかったから。

「……私とナルトは……初めから『九尾』で繋がっている」

ナナはそつと、刻印があつたという場所を撫ぜた。

「『姉』に刻印が潰された今でも、それは途切れてはいなかった」

ナルトも己の腹に手を置いた。

「だから、私は……」

その手を見つめ、ナナは己の決意を口にした。

「ナルトと運命をともしにする……」

『運命』……その言葉が、全員に重くのしかかった。が、拒絶することはできなかった。

彼らにとつては、それすらおこがましいほどの、崇高なナナの『生』だった。

「だからきつと……ナルトが死ねば私も死ぬ」

もちろん、否定もできなかった。

ナルトとサスケが戦えば……二人とも死ぬ。そして、ナナも死ぬ。みんな死ぬ。

その構図が見えてしまっても、シカマルには否定などできなかった。

だからこそナルトの意見には反対なのだ……と言うことも正論の  
はずだった。だがそれができなかった。

それこそが『運命』なのだと思い知ってしまったから。

きっと皆も肌でそれを感じている。だからこそ、誰も声を発するこ  
とができないのだ。

長い沈黙の後、

「んじゃ、オレってば腹が減ったから一樂に行くってばよ！」

ナルトは急に明るくそう言った。

「ついでにナナを病院まで送ってく」

皆が曖昧な視線を送る中、ナルトはナナの手をとる。

「じゃあなー」

残された者たちは、去っていくナルトとナナをただ見送るしかなか  
った。

サクラでさえ、遠ざかる二人の背を黙って見つめていた。

シカマルは己の感情を確かめることすらできないまま、なんとなく  
己の手のひらを見つめた。

ナナに触れた感触が、風に流されようとしていた。

## 天運

「ナナ、身体は大丈夫か？」

彼らから十分距離をとると、ナルトは木陰で立ち止まった。背からナナを下ろし、正面からナナを見る。

「うん」

ナナの瞳は儂いイロをしていた。

とても、あのサスケの憎悪に満ちた瞳を受け止めることなどできないくらい脆かった。

『二人で戦えば、どっちも死ぬ』

あの眼を前にして生まれた自分の言葉が蘇った。

サスケと戦えば、自分もサスケも死ぬと思っている。それは確信だった。

そして、

「お前も……気づいてるんだな……？」

もうひとつ確信……。

「サスケの中にあるモノ……」

泣くことすら忘れたナナが、変わらぬ表情のままうなずいた。

みんなの前では伏せていても、やっぱりナナは知っていた。それが、その力や想いが、ナナ自身を苦しめているのに。

「……うん……」

ナルトは不意にナナを抱きしめた。

サスケの中にあるモノをナナも感じたとしたら……。気休めとしてもそうせざるを得なかった。どちらかというと、自分のために。

「九尾のチカラがないと、サスケとは戦えねえ……」

ナナの肩は、今更少しも震えなかった。

「そうだったら、ナナは……」

そして、自ら身体を離して言った。

「言ったでしょう？」

ちゃんと、ナルトの目を見つめて。



「私はナルトと運命をともにするって……」

ナルトはゆっくりとうなずいた。

今更その真実に驚きはしなかった。

ナナがその「運命」に従って自分の側にいたわけじゃないことも、わざわざ口にするつもりはなかった。

そういう存在が「ナナ」で良かったとも思った。ナナを苦しめることになっても、自分が守れる可能性を諦めたわけじゃなかったから。

だが、もうひとつの真実は、彼の中でまだ受け入れられずにいた。

「オレさ……聞いたんだ」

だから、初めて躊躇いをともにしながら、穏やかな表情のままのナナに言った。

「イタチの……真実ってやつを……」

「え……？」

ナナが初めて目を見開いた。

「だ、誰……に……？」

「暁の、面をしたヤツが……オレたちの前に現れたんだ」

自身の運命を口にしたときは呆れるくらいに静かだった表情が、一転、必死で驚愕を抑え込んでいた。

「カカシ先生とヤマト隊長と、オレだけの極秘事項になってる」

「……………」

ナナはナルトから目をそらした。

「ナナも……知ってるんだってな……」

だんだんと、その頬が諦めの色に染まっていく。

「お前にとってイタチがどんな存在だったか良くはわかんねえけど……、オレにとってのイルカ先生みたいな存在だったとしたらって考えたら……、オレも苦しい……」

少しの沈黙……そして、

「イタチは……」

ナナはゆっくり囁いた。

「私にとって、親で、兄で、友達で、憧れの忍で……夫となる人だった

……」

はらはらと、初めての言の葉が二人の間を舞った。

「だから……それを聞かされた時……」

まるで、ため息のような声色。

「サスケは復讐を誓ったけど……私にはそんな『前に進む』力は残ってなかった……」

皮肉にもならない言葉が力を削いでいくようで、ナルトは気休めに拳を握った。

「だから……サスケとはそこで別れたの……」

再び、憎悪に満ちたサスケの目を思い浮かべた。そして、ナナの眼に浮かぶ諦めの色を見つめた。

「別れた」という言葉が、ナルトの心に『異物』として引つかかっていた。

それを信じて、ナルトは言った。

「ナナ……オレ、前にイタチに会ってる」

「え……？」

「サスケを探し回ってた時、イタチに会ったんだ」

ナナの瞳がまた震えた。

「あの時、一対一の状況だったのに、イタチはオレを攻撃するとか、戦おうともしねーで、ただ確かめるみてーに、『サスケが木の葉を襲ったかどうか？』って聞いてきた」

務めて淡々と、あの時のイタチの様子を伝える。

「オレが、『木の葉も守ってサスケも連れ戻す』って言ったなら……」

ナナの瞳の中の、脆い光に向かって。

「イタチはオレに『力』をくれた」

「チカラ……？」

気づけば、ナナの指が袖をきつく掴んでいた。

「『その力を、使う日が来なければいいがな』……ってイタチは言っただけで、すぐ消えた」

「……………」

ナナはナルトの双眸をしばらく凝視して、疲れたように目を伏せ

た。

それ以上、イタチを思い出すことに……イタチを思い浮かべることが耐えられないというように。

「ナナ……」

ナルトはナナが消えてしまわないよう、両手を伸ばした。

「オレはサスケを……」

その時、

「いずみナナ、ここにいたか」

突然、木の上から暗部の男が二人降り立った。

「な、なんだってばよ……?!」

「里の上役たちがお呼びだ」

ナルトは無意識のうちにナナを背にかばったが、暗部の男はそれを無視して淡々と要件を告げる。

「緊急の呼び出しだ、すぐに来てもらおう」

ナルトはナナを振り返った。

と、

「ナナ……?」

今まで弱々しかったナナの眼が、刃の切っ先のような光を放っていた。

「わかりました」

ナナは冷たい声で短くそう言って、

「じゃあね、ナルト」

ナルトに束の間の笑みをよこして別れを言う。

「ナナー」

「大丈夫だから」

そして、歪な風を残して、暗部の男らと共に消え去った。

## 殺意

自身の火影就任について、ご意見番のコハルとホムラに報告に行く途中、カカシはずっとサスケの言葉を考えていた。

正直、これまでの経験の中でも特に厳しい状況だった。

まさか、教え子を殺す決意をさせられるとは……。

が、あそこでサクラに重荷を背負わせるわけにはいかなかった。

七班をバラバラにしてしまったのは自分の不甲斐なさ……サクラにそう言った通り、心底そう思う。

彼の中で後悔が渦巻いた。

サスケの言葉は、それを引きずり出すようだった。

『お前は本当はわかっているはずだ』

そう言った時にサスケが返したのは、

『全員……笑ってやがる……』

激しい憎悪。

『イタチの命と引き換えに笑ってやがる!!』

あれほど激しい憎悪とは初めてまみえた。

長く忍の世界にいて、その暗黒の部分は見尽くしてきたかと思っていたが、そうではなかった。

『今のオレにとって、お前らの笑い声は軽蔑と嘲笑に聞こえる!!』

本物の闇を見せつけられた。

『その笑いを悲鳴と呻きに変えてやる!!』

その闇が連鎖となって、今のサスケという存在をつくりだしてしまった。

『オレの憎しみとナナの悲しみを知れ!!』

いくらナルトでも、止められる軽さじゃない。深い深い……憎しみ。

……いや。

カカシは思わず足を止めた。

『ナナの悲しみを思い知れ』

サスケはそう言った。

あんなふうに憎悪をまき散らしながら、全てが敵だという目をしながら……。「ナナの」……と……。

「サスケ……お前は……」

サスケはまだ……、ナナを想っている？

それに気づき、カカシは目を伏せた。

よけいに辛い真実……。

ナナに深い傷が刻まれたことも、彼の憎悪を大きくしていた。ナナへの想いがあるからこそ、それがさらに憎しみの浸蝕を加速させているのだ。

おそらくナナ自身も、それに気づいているのだろう。

それが悲しかった。

ナナは……ナルトやサクラにサスケのことを聞いて、どんな顔をするだろう……。

カカシは思った。

どんな顔……といっても、もうナナが心から笑った顔など思い出せない。

ナナの笑顔も守れなかった。

また後悔を大きくし、無理やり足を進めた。

こんな自分に、火影が務まるとは思っていなかった。

気が進まないのは本当だった。

が、ここまで来て、木ノ葉に対して無責任なこととはできない。

犠牲になった者たちのためにも、犠牲になった想いのためにも……今、できることをしなければならなかった。

コハルとホムラはカカシの報告を受けてダンゾウの死を素直に悼んだ。

そして、

「こうなっては仕方がない。私らもお前を火影に推すことにしよう。同盟の砂からもお前にと推薦があった」

ため息交じりで、二人はカカシの火影就任を認めた。

カカシはその言葉を引つ張り出すや否や、すぐに立ち去るつもりだった。自分からサスケのことを皆に話すと言ったナルトの様子や、ナナの容体が気になっていた。

が、そこで彼は思わぬ足止めをくらうことになる。

「ちようど良い、カカシ。お前も立ち会え」

「何にです?」

コハルは皺くちやの顔で淡々と言った。

「九尾の件でいずみナナを呼んでいる。そろそろ来る頃だ」

「え……?」

ナナに、九尾のことで里に定期報告をする義務があることは知っていた。

先のペインとの戦いでナルトの中の九尾が表面化したことも聞いていた。

だから、ナナがその時のことを報告に来なくてはならないこともわかっている。

だが、

「ナナはまだ……」

「意識が戻っているのなら、早いほうが良い」

「暁との戦いで九尾に何があったかをあの娘に聞かねばならん」

「ですが……」

「マダラに九尾が狙われているという今、この件は早急に話合おうべきだ」

コハルとホムラは、カカシの言葉をバツサリと切った。

そして、

「失礼します」

タイミングよく戸口で声がした。

「いずみナナを連れてまいりました」

カカシは思わず身構えた。

が、

「入れ」

コハルが言った瞬間、身構えたことを無駄にするように、身を切りつけるような風が目の前を通り過ぎた。

戸が開く音も聞こえなかった。足が床を踏みぬく軋みもなかった。気がつけば、ナナがコハルとホムラの鼻先に手の平を突き付けて立っていた。

「ひっ……」

二人は気圧されるように、尻餅をついて、指の間からナナの眼を見上げていた。

ナナの手は、二人に触れてはいなかった。まして、凶器を突き付けていたわけでもない。

だが、身に纏う殺気が二人の身体を束縛していた。

真白い入院着が死に装束のように見えた。

カカシですら、息を止めていた。

これほどの殺気は感じたことがなかった。数多の戦場でも、暗部の任務でも、あのサスケにさえも。

ナナから発せられる冷たい気は、その場を完全に制圧していた。

「わかりますか……?」

誰も、息すら満足にできない状態の中、

「私が……」

ナナは言った。

「どれほどアナタがたを殺したいか」

静かな声で、滑るように。

「わかりますか……?」

カカシはかろうじてナナの横顔に視線を向けた。

まだ青白く、唇にも色はなかった。

が、怒りと、憎しみと、悲しみが入り混じったような瞳は、二人を見下ろして危険な光を放っている。

「私は……アナタがたを許さない」

言葉は、

「ほら……」

冷やかにすべり、

「手を触れなくても、アナタがたのことは簡単に殺せる……」

まるで彼らに最期の審判を下すようだった。

コハルとコムラの二人も、地べたに手をついたまま、ナナを見上げて硬直している。魂を吸い取られる前の哀れな生贄のように。

「でも……」

その場全体が、ナナの……ナナにしか使えない和泉の術にでもかけられているようだった。

「止めておきます」

ナナは彼らを弄ぶように言った。

「それは、サスケに任せますから」

そしてサスケの名を口にした。

「なっ……なにを……」

「お、お前っ……」

コハルとホムラは、わずかに身じろいた。

が、再びナナの殺気に囚われる。

「来ますよ……？ サスケが」

美しくも恐ろしい顔で、ナナが笑ったから。

「アナタたちを殺しに……」

空気さえも怯えて無くなったかのように、彼らの呼吸が止まった。

カカシは手を伸ばそうと試みたが、指一本動かすことも叶わなかった。

が、ナナが突然膝をついた。

それから一拍置いて、ようやく彼女の身体が弱まっていることを思い出す。

「……ナナ……い！」

カカシは駆け寄った。

だが、よりナナの側にいたコハルとホムラが辛うじて反応し、先に



カカシを制した。

さらに、控えていた暗部装束の部下たちが、遅すぎる登場をする。

「わ、我らに手を上げるとはっ……………」

「な、なんということだ……………」

しわがれた声は、まだ震えていた。

暗部の男たちも、血の気のない少女一人を取り押さえるのに、三人がかりで囲んでいる。

「このような狼藉はゆるされん！ 牢に入れておけ！」

コハルは威厳を持ち直すようにそう叫んだ。ホムラも、明らかに苛立っていた。

「お、お待ちください!!」

カカシは抵抗した。

「ナナはまだ、医療班に安静を言い渡されているはずですよ！ 牢に入れるのは……………」

「黙れカカシ！」

必死のカカシにコハルはむきになって言う。

「私らにこのような態度をとるとなど、本来であればその場で処刑だ！」

「しかし、ナナは里を救ったばかりです。さっきの行為には訳が……………」

「どんな理由であれ、これは謀反じゃ!!」

暗部の男に乱暴に引き起こされているナナは、先ほどまでとはまるで別人だった。

呼吸すら奪うような殺気は全て剥がれ落ち……………それどころか生気すら失っているようだった。

「せめて監視つきで病室に戻していただけませんか！」

「火影になるお前が秩序を軽んじてどうする!!」

「さっさと連れて行け！」

連れて行くこうとする男たちの行く手を遮り、カカシは食い下がった。

「身体が回復するまで勾留は待ってください!!」

だが、コハルとホムラの怒りは…………いや、羞恥と恐れは強まるばかり

り。

「お前が正式に火影として承認されるまでは我らが命令を下す側だ」  
そして錆びついた権威を振りかざした。

「ナナ……!!」

そうしている間も、ナナは目を伏せたままだった。

あれだけの立ち振る舞いをしておいて、今は何の意志も持たない人形のような人だった。

されるがままに、暗部の男たちに引きずられて行く。

「ナナ！ オレがすぐに出してやるから！」

カカシの声ですら全く届いていなかった。

コハルとホムラはそう言ったカカシをひと睨みし、低く呟いた。

「和泉の化け物め……」

「ついに本性を表したか……」

扉が閉まった時、カカシは無力感と怒りと、そして戸惑いに耐えるよう、きつく拳を握り締めた。

## 終わりの意味

「聴取に協力してやってるんだから、スイーツの差し入れとかしろよな！ ていうか、さつきから言っているだろう、ウチも『被害者』なんだって」

事情聴取のあと、再び牢に戻されたカリンは、扉の小窓から暗い通路に向かつてぶつぶつ言っていた。

「だいたいこの牢、シヨボいんだよ。もつと柔らかいベットじゃないと身体が痛くて眠れねーんだよウチは」

誰も答えないことは知っていた。だが、こうしてくだらないことを悪態づいていた方が気が楽だった。

「情報提供者としてむしろ丁重に扱えよな……」

何かに向かって口を動かしている間は、「サスケのこと」を思い浮かべなくてすむから。

それでもやはり言葉は尽きて、代わりに溜息しか出なくなったとき、新たに人の気配を感じた。

感じ取ったチャクラは三つ。

そのうちのひとつは知っているような、知らないような……今まで感じたことのない不安定なチャクラだった。

「なんだ……う？ コイツ……」

一度感じたチャクラは全て記憶している。判別できないことは今までなかった。だから、このもどかしい感覚は初めてだった。

「誰だ？」

小窓の限られたすき間から、カリンは暗い通路を覗く。

足音はだんだんと近づいて、ついに彼女の前を通り過ぎた。

「あ……」

思わず声を上げた。

不可思議な感じのチャクラの持ち主は、ちゃんと知っている者だった。

「いずみナナ……?!」

両側を看守の忍に拘束され、手には枷をつけられて、頼りない足取りで歩いて来たのは、いずみナナだった。

「お前、なんで……?!」

声をかけたつもりはなかったはずが、自然とそうしてしまっていた。

しかし、ナナはその声にまったく反応を示さなかった。ただ看守がひと睨みよこしただけだった。

カリンは癖でナナのチャクラを注意深く感じ取った。

やはり、まるで一瞬ごとに周波数を変えているかのように、不安定で不思議な感じがする。

そして、死の間際の人間のように弱々しい……。

「なんでアイツが……」

少し離れた牢の扉が開かれ、また閉じられた音がした。

再びカリンの前を通ったのは、看守の忍だけだった。

「何があっただんだ?!」

思わずそう尋ねた。当然、忍からの答えは返って来なかった。

ナナに何があるうと関係ない……という気持ちはあった。

それでも、正直ナナのことは意識していた。

本当に、サスケのことが好きだったから。

サスケが愛した女のことを、意識しないはずはなかった。

いたずらにナナの存在を明かしたのは、大蛇丸だった。あの妖しい

笑みで、サスケに「想い人」がいることを告げてきた。

その名前を知ってから、カリンにとって『いずみナナ』は「敵」だった。

木ノ葉を抜け、大蛇丸を殺したサスケが現れ、『蛇』が結成されても、ナナへの敵対心は消えなかった。

悲しい女のさが……なのか、目の前にサスケがいても、木ノ葉に捨てて来たはずの「ナナ」を、まだ想っていることを知っていたから。

遠くから、サスケの心を支配する「ナナ」が憎かった。どんどん憎しみに染まるサスケが、それでも捨てきれない「ナナ」への想いに嫉妬した。

だから、初めてナナに直接会った時、最大の切り札を出して致命傷を負わせてやった。サスケの「イタチへの憎しみ」に「ナナへの想い」を掛け合わせ、攻撃した。

あの絶望したナナの顔にはせいせいした。ナナに背を向けたサスケに満足した。

それなのに……。

「あれは……なんだったんだよ……」

イタチを殺したサスケと、それを見ていたというナナは、ただ黙って抱き合った。

潮風が強く吹き付ける浜で、自分たちに背を向けて、二人で“なにか”を終わらせていた。

サスケに切願を達成した歓喜はなく……ナナには悲哀しかなく……。新たに「木ノ葉潰し」という目的を掲げたサスケに、ナナは別れを告げた。

サスケもナナを振り返らなかつた。

何の終わりか、わからなかつた。

ただ……。

おそらく、自分だからわかつたのだとカリンは思う。

代わり果てた冷たいチャクラをまとったサスケは……己の憎悪に加え、ナナの悲しみも抱えている……。木ノ葉への復讐という目的には、自分自身の想いだけじゃなく、ナナの想いも含まれているのだと。

イタチとサスケに何があつたのか、詳しくは知らない。どうてい語つてなどもらえない。

が、サスケはイタチの死に対する復讐を始めた。

限りなく濃い闇の中……それは、確かに“ナナの傷”に対する復讐でもあつたように思う。

サスケのチャクラと心を探っていた自分だから、そこまで感じ取つてしまった。

「くそっ……」

だから、今になつてもやはりナナを意識せざるをえない。

「アイツは何を……」  
サスケにとって、それほどに大切な存在を。

## 救うひと

翌日の朝、カカシは大名との会議に向かおうとしていた。正式に火影就任するには、大名から任命される必要があるからだ。

集会所の火影邸の前には、カカシの他、上忍班長として会議に同席する奈良シカク、重役であるコハルとホムラ、そして彼らの部下の姿があつた。

暗部装束をまとつたコハルとホムラの部下は、しつかりと二人の側に張り付いて、まだ里の中心部だというのに周囲を警戒していた。

昨日の今日だ……無理もない。

カカシは思った。

たつたひとりの、歩くこともままならないほど弱っている少女に命を取られかけた。死の間際に追い込まれたような、凄まじい殺気を浴びせられたのだ。

二人も、その場にいたあの部下たちも、さうとう神経を張りつめているだろう。

彼自身、あの感覚を思い出すと腹の底が冷えた。

が、牢に放り込まれたナナを思うと、当然その畏怖よりも案ずる想いが勝つた。

ペインから里を護るためにこん睡状態から目覚めてすぐ大術を扱ひ、力を使い果たしたはず……。

イビキに内密に連絡をとり、治療を受けられるようお願いをしていたが、心の方はどうにも処置が難しい。すぐに飛んで行って牢をぶち破り衝動をずっと抱えていた。

だが、今は何事にも慎重に動かなければならない。今ここで無理をして動けば、火影に任命されることはなくなる。

自分には荷が重い、里のためには一刻も早く火影を決めて事態の収拾を図らなければならぬ。これ以上、木ノ葉が後手に回るようなことは避けたかった。

万が一、コハルとホムラが側近や鷹派の忍を火影に推せば、色々と

動きづらくもなる。

誰かにナナの側に付いていてやって欲しかったが、ナナが拘束されたことは誰にも告げていない。ナナを診られるはずのサクラにも、だ。

言えば、どうしてナナがそんなことをしでかしたのか問われる。その疑問に答えることはまだできなかった。

特に、ナルトをまるめこむ自信などなかった。

「カカシ、どうかしたか？」

上忍班長として同行するシカクが言った。

らしくもなく……後ろを振り返ったからであろう。

「いえ、何でもないですよ」

感情を押し殺すことは得意だった。

が、やはり里でも抜きん出た知力を持つシカクの前では、それも無駄だった。

「ナナのことか？」

シカクはコハルとホムラ、そして二人の部下たちに聞こえないように言った。

「……やっぱり、知ってましたか」

軽い口調で答えるも、いつものようにとはいかない。

「イビキたちから連絡を受けている。心配するな、”手はず”は整えてある」

シカクは前方をゆく者たちに気取られぬよう、そっぽを向きながらそう言った。

彼も里内に独自のネットワークを持っている。状況の分析力もずば抜けていた。

それに、ナナのことはシカクも気にかけているのをカカシは知っていた。

直接の部下でもないのに、何故……。

「オレはナナが中忍に任命された時の保証人でもあったからな」

シカクは、わざわざそんな古びた理由を出した。

「そうですね、あの時はオレが寝込んでたから……」



カカシも笑った。

まるで傍から見れば、他愛のない談笑。が、その内容は重要な意味を持つ。

「お前が火影になり、赦免状を書いたらすぐに釈放されるように手を回しておいた」

通常、警務部隊や上層部の権限で拘束された者は、たとえ火影の赦免状があっても簡単には保釈とならない。

警務部隊や情報部による十分な取り調べで「安全性」が確認された後、上層部の合意があれば、ようやく火影の名の元に罪が末梢される。だが、ひとつだけ「例外」があった。

「お前は火影になったらすぐに暗部の継承を宣言しろ」

そう……火影直属の暗部の人間であれば、他の誰の合意も得ずに火影の独断で釈放が可能となる。

ナナはイタチとサスケの戦いを止める任に就くとき、ツナデによって暗部に任命されていた。略式ではあったが、記録は残っているはずだ。

暗部は火影がその都度、直々に任命するものだが、ツナデも三代目の暗部メンバーをほとんどそのまま継承した。だから、カカシも同じく継承すれば、ナナはカカシという火影の暗部という形になる。

「気はすすまないが、それが一番早い。書類はすでに取り揃えた。あとは「上」の邪魔が入らないよう、いかに速く動くかだが……それも段取りは揃っている」

「さすがシカクさんですね」

いろいろな意味を込めてカカシは言った。

ナナが拘束された理由など、あの場にいた者しか知らない。

当然シカクも知らないはずだが、彼は無条件にナナの釈放のために動いていた。

普通なら、その「罪」を考慮するはずであるのに……。

「お前は火影として当分は動けないだろうから、シカマルに迎えに行かせる。連絡用の使い羽も仕込んでおいた」

シカクは完全にナナを信用していた。

何故重役に拘束されたのか、全く聞く気はないようだった。

普段の態度のわりに情が厚い男だから、ナナのことをかわいがつてもいたと思う。もちろんナナが木ノ葉に来た事情も知っていたし、今回のペインの件以前から、里への貢献度を評価していた。単純に、シカマルの同期ということも、親身になる理由のひとつだろう。

それに……。

「シカマルなら安心です」

カカシは本心から答えた。

部下たちの中で最も頭の切れる男は、父に似て情愛も厚かった。

それに……おそらくシカクもだろうが、彼の想いもわかっていた。

「ああ、ナナのためなら絶対にうまくやるさ」

シカクも父親らしい口調で言った。

ナナの同期メンバーの誰にも告げなかったのは、彼らの動揺と事態の混乱……それにナナ自身の精神面を考慮してのことである。

が、シカマルならきつとうまくやってくれる。

カカシもそう思った。

ナナにとつてもそれが良い……と。

少し安心したことで、カカシはシカクにも気取られぬくらいさりげないため息をついた。

ナナは……「想われている」はずだった。

シカマルだけじゃない。あの風影でさえもそうだった。

五影会談のことを伝えに来たとき、風影……我愛羅は「影」を名乗るにふさわしい忍になっていた。ナルトにも、彼しかできない助言をしてくれたと思う。

その彼が、最後に尋ねた言葉は、

『ナナはどうしている……？』

会談のこと、これからのこと、ナルトへの言葉……それらと変わらぬ声色で、我愛羅は尋ねた。

彼がどこまでナナを知っているのかはわからない。だから、「ちやんと木ノ葉にいる」とだけ答えた。暁と戦って里を護り、今は回復のために休んでいる……と。

だが、我愛羅が聞いたかったのはそんなことじゃない。変わり果てたサスケを実際に目にした我愛羅は、そのことでナナの「心」を案じていた。

カカシ自身、左目の写輪眼に頼らずとも、人より洞察力はある方だと自負している。

我愛羅が暁にさらわれた件で砂へ行ったとき、そこには和泉の里に  
いるはずのナナがいた。

ナナと我愛羅の様子を目にしてなんとなくわかった。

二人がどういう関係だったのかを。

ナルトたちとの再会を素直に喜ばず壁を作っていたナナが、護れな  
かった我愛羅に寄り添っていた。

我愛羅の想いは本物だと思う。

木ノ葉へ帰ると決意したナナと、それを見送った我愛羅。

あの別れの先にも、我愛羅の想いはあった。

こんなにも想われているのに……。

それだけに、カカシはうつむかざるを得ない。

どれだけ深く思われていても、ナナは救われない。誰もナナを笑顔  
にすることはできない。

そればかりか、どんどん深く刻まれていく傷をただ、傍観するしか  
ない。

自分も含めて……。

そう思うと、やりきれなかった。

カカシは前方をゆくコハル、ホムラの一团に視線をやった。

少し鋭くなってしまうたそれをシカクは見逃さなかっただろうが、  
それでも良かった。

マダラの語った「イタチの真実」が本当なら……ナナを救える者は  
無い……。

そう思った。

## 二人の未来

大名との会議の真ただ中、綱手が意識を取り戻したとの一報が入り、カカシの火影就任は直前で取り止めとなった。

会議の終了が告げられるやいなや、カカシは真つ先に綱手の元へ向かった。

そして目覚めたばかりの綱手に対し、『イタチの真実』の部分を省いて、ナナが拘束された経緯を話した。ただ「上役の二人と何らかの確執が生じての行為」と。

綱手もまたシカクと同じだった。無条件にナナを信じていた。

本当の理由はいずれ本人に問いただす……として、すぐに赦免状をしたためた。

ナナがイタチとサスケの戦いを止めるために里を出た時、すでに綱手はナナを暗部に任命していたから、綱手の赦免状ひとつでナナの釈放が可能となった。

カカシが留置所に駆けつけると、イビキが待ち構えていた。彼は綱手の赦免状をろくに確かめもせず、すぐにカカシを「医務室」に通した。

ナナは檻の中のベッドに寝かされていた。傍らには点滴のスタンドが数台あった。

「ちようど点滴がはずれたところだ。担当医の話では、危険な状態からはとりあえず回復しているが貧血がひどいらしい……まだ二、三日は安静が必要だそうだ」

イビキが扉を開いた。鍵はかかっていなかった。

カカシは簡潔に礼を言って側に寄る。

白いまぶたは静かに閉じられていて、眠っているのかただ目を閉じているだけか、わかりかねた。

「ナナ……」

呼ぶと、ナナはゆっくりと目を開いた。

まるで、「観念」したかのようだった。

「カカシ……先生……」

それでも、その瞳がこちらを向いたことにカカシは安堵する。

「どうして……『火影様』が……こんなところに……?」

ナナは気だるそうに身を起こした。

それを支えながら、カカシは努めて明るく言った。

「綱手様の意識が戻ったから、オレが火影をやる必要はなくなった」

ナナは綱手の回復に対し、短く「良かった」とだけ呟いた。

「さっそく赦免状を書いてもらったから、帰ろうか」

「……………」

ずいぶんと軽く言ったつもりだったが。

が、ナナのまとう空気は重く、のそのそとベッドから降りる。

「先生、ごめんなさい……」

あの「殺意」を放った少女とは思えないほど、か細い声。

「ごめんなさい……」

フラつく身体を支えるカカシの腕に、遠慮がちにつかまってまた言う。

「いいから」

カカシは敢えて、そのまま手を引いた。ここで抱きしめても、ナナには何の意味もないことを知っていた。

「病院は嫌だろ? ナナの家もまだできてないから、とりあえずオレの家においで」

病院に戻せば、おそらくまだコハルとホムラの部下による監視が入るだろう。体力の回復だけなら、ヤマトが建てた新築の自宅に連れて行く方が良いと判断した。

「ナナの家も、明日にでもヤマトに造ってもらおう。ま、アイツならすぐにやってくれるさ」

うつむくナナに反応はなかった。

カカシはナナの視界に何も入っていないことに気づきながら、半ば強引に自宅に連れ帰った。

「先生、迷惑かけてごめんなさい」

真新しい部屋に入れ、水を渡すと、ナナはまたそう言った。

「どうしても……止められなくて……」

先ほどよりも少ししつかりした声だった。

「わかってるよ」

カカシはそう応えるしかなかった。

「イタチのこと」はマダラに聞かされた」

また、ナナは拒絶反応のように肩をビクンと揺らした。

「わかってるんだけど……」

それでも、言葉を……心を伝えようとする。

「あの人たちも……、ダンゾウだって、その時のそれぞれの立場で、自分たちなりに里を護ろうとしたって、わかるんだけど……」

震える声を無理やり平淡に抑えようとして、

「それでも私は……」

渡したマグカップの小さな水面が、代わりに揺れている。

「イタチを想うと……許すことができない」

己の憎しみにすら抗って、溢れ出す殺意にも怯えているようで、

「わかってるよ、ナナ」

カカシはベッドに浅く座るナナの隣に腰を下ろし、ナナの頭に手をやった。

「お前の痛みも、サスケの憎しみも……わかるから」

本当なら「秩序」とか「総意」とか、それを教えるべき立場だった。

だが、そんなことはできなかった。

マダラに聞かされたことについては深く考えさせられた。

あの男の言葉が本当に真実とは限らない。『マダラ』を名乗っていること自体が胡散臭いのだ。本来ならばあんな男の言葉など全て疑ってかかるべきだった。

だが、サスケもナナも信じたからこそ「こう」なっている。

カカシも考えた。

中忍試験後、イタチと対戦した時に思ったはずだった。「その気に

なれば殺せるはずなのに、なぜそうしないのか」と。

実際に、あの時、イタチの實力は遙か上だと思った。うちのは正統な血、写輪眼の開眼、生まれながらにして持った戦闘センスに経験が加わってもいた。

とうていかなう相手ではなく、あつさり、「月読」にかけられた。命はイタチの手に握られたはずだった。

が、幻術攻撃だけで、彼は自分を殺しはしなかった。彼らにとって自分は、明らかに邪魔な存在であるはずなのに。

まるでただの時間稼ぎ、いや、その場をやり過ごすための一戦のような戦い方だった。

『オレの憎しみとナナの悲しみを知れ!!』

『それは、サスケに任せますから』

二人の声が耳の奥に張り付いている。

カカシはその声をなだめるように、ナナの頭を撫でた。

サスケとナナの……未来が見えるようだった。

『来ますよ……サスケが……アナタたちを殺しに』

木ノ葉に憎しみをぶつけるサスケと、それを「待つ」ナナの姿が。

「ナナ……お前は……」

カカシは手を止め、ナナを上向かせた。

ナナは全てを諦めたような黒い瞳で、カカシの右目を見返した。

「待っているのか……?」

ナナは『待っている』……。だから……だからペインから木ノ葉を護った。全てを剥ぎ取られてもなお、あそこで死ぬわけにはいかなかった。

何故なら……。

『全てを剥ぎ取られたナナの望みを考えるがいい……』

マダラの嘲笑が聞こえた。

何故ならナナは、

「サスケが殺しに来るのを待っているのか?」

ナナは答えなかつた。

ただ、ほんの一瞬、コハルとホムラに向けた死の微笑を浮かべ、すぐに面倒くさそうにうつむいた。

カカシの手は、ナナの頭の上で止まったままだった。



## 乾いた決意

雷影の招集で再び五影会談が開かれた。

木ノ葉からはもちろん綱手が復帰し、その付き人はシカクが務めた。

会談の内容は、未だ暁に狩られていない八尾と九尾に対し、どういった措置をとるかに焦点が絞られた。

各里の長たちは、八尾のキラール・ビー、九尾のうずまきナルトを保護する意見を出した。

綱手は二人も戦力だと主張したが、我愛羅の言葉で折れた。

「アイツは仲間のためなら無理をしすぎる」

砂漠の我愛羅……。元は一尾の人柱力の忍。ナルトとは、中忍試験の時に木ノ葉で激しく戦ったと聞いている。

そしてその後、風影となった。

ナルトとの戦いが彼を変えたに違いはないだろう。だからこそ、ナルトのことを最もよく理解する者のひとりと思つてよい。

綱手は若き風影を冷静に観察した。

確かに経験不足はいなめないが、なかなかしつかりとした忍道を持つているようだ。

「では、雷影様のご提案どおり、八尾と九尾はここ雲隠れの里で匿うことにいたしましょう」

水影が言い、皆が同意した。

綱手も横目で我愛羅を見ながら同意した。

決して仲の良い者同士の和やかな集まりではなかったが、敵を同じくする者たちはそれぞれの健闘を約束してその場は解散となった。

綱手も席を立ち、シカクとともにその場を後にした。

と、

「火影に話がある」

不意に呼び止められた。

綱手とシカクが振り返ると、我愛羅がこちらをまつすぐに見上げて

いた。

「風影か……」

彼の少し後ろにテマリがいるだけで、他の「影」たちは別々の出口から出て行ったため気配はなかった。

「聞こう」

同盟国という理由だけでなく、ナルトを理解する者として、綱手も我愛羅を信用していた。

「八尾とナルトの監禁には、いずみナナも同行させて欲しい」

が、彼の口から意外な名が出たことには警戒した。

「どういう意味だ?!」

すぐにムキになるのは悪いクセと思いつつも、若き風影の主張を聞いたです。

「ナナにナルトと八尾を見張らせろというのか?!」

シカクが一瞬止めようとして黙ったのが気配で分かった。彼も風影の意図を探っている。

「そういうわけじゃない。ナナが「刻印」を失くしたことはオレも知っている」

が、我愛羅はあっさりと木ノ葉の最重要機密事項を口にした。

後ろのテマリも表情を変えないところを見ると、自分たちが思うよりも、彼らがナナのことを理解しているとわかる。

「だったらどういう理由だ?」

綱手は直接的に尋ねた。

「それでもナナには「力」がある」

反対に、我愛羅は遠回りに話す。

「九尾を封印する「刻印」を失ったとしても、特別な「力」があることに変わりはない」

腕組みをしたまま淡々と。

「尾獣を「狩るヤツら」が、尾獣を「封じる力」に興味がないとは限らない」

「まさか……」

背筋にかすかな衝撃が走った。

「『封じる力』は尾獣のコントロールに繋がる可能性もある」  
それは確実に真実に近づいていった。

「ヤツラがナナの力を……『血』を欲しがるかもしれない」  
ついにそう告げた時、綱手は我愛羅の瞳の中にひとつの発見をした。

「八尾やナルトと共に、ナナも護るべきだ」

淡々とした口調の中にも滲み出すモノ。

彼はそれを隠しめせず、テマリも全て承知のようだった。

「シカク……」

綱手はシカクを振り返った。

彼も同じものを見つけたのか、すぐにうなずき返す。

「風影様の意見に賛成です」

綱手は再び我愛羅に視線を戻し、ナナを思い浮かべた。

そう……ナナは護らなければならない。

「わかった、助言に感謝する」

風影として『和泉の力』が敵の手に渡ることを心配したのではなく、  
一人の人間としてナナの身を心配しているのがわかるから。

「うずまきナルトといわずみナナ……二人が無茶をしすぎないように押し止めることを願う」

「ああ、約束する」

綱手は若き風影に、誠心誠意をこめて誓った。

我愛羅は一瞬だけ目を伏せ、もう一度念を押すように視線を上げた。

そして、テマリと共に立ち去った。

我愛羅が目を伏せた瞬間に、ナナに想いを馳せたことを、綱手は確信していた。

里に戻った綱手は、仮ごしらえの執務用の机に肘をつき、部屋に入って来たカカシとナナを交互に見渡した。

「綱手さま、お元氣になられて良かったです」

ナナは穏やかに笑った。

その顔を、綱手は無遠慮にじつと見つめた。  
カカシから「あの件」の報告は受けていた。

カカシの目の前で、九尾に関することを報告に来たナナが、里の重役であるホムラとコハルに手を上げた……と。それが謀反とみなされ、二人の命によつて拘留されたのだと。

カカシが語った原因は「予測」だった。

彼はこう言った。

九尾のことでナルトを目の敵にする二人に対し、ナルトを大切に思うナナがついに反抗したのだろう……と。

ナナに真意を問いただす必要があった。里の長である綱手には、それが義務でもあった。

が、ナナはただ穏やかな顔で立っている。

報告義務があることを知らないような愚かな娘ではないことはわかっている。それでも、ナナは自ら口を開こうとはしない様子だった。

だから、綱手は呼び出した目的をこう告げた。

「ナルトと八尾を暁から遠ざけるため、監禁措置をとる。お前はナルトとともに行け」

ナナは驚きの欠片も見せず、薄く笑った。

「でも、今の私には八尾や九尾を抑える力なんてありませんよ?」

自嘲すら含まぬ、まるで他人ごとのような声だった。

「いざとなつたらお前の力を借りることになるだろうが、目的は『ソレ』じゃない」

カカシの右目の影を確認し、綱手は冷静に言う。  
と、

「ああ……」

ナナは表情を変えずに言った。

「私を重役たちから遠ざけるためですね」

そして、

「その件は、本当にご迷惑をおかけしました」  
深々と頭を下げた。

綱手はもう一度カカシを見た。が、彼にここで何かを言うつもりはないようだった。

「それも確かにある……が、真の目的は違う」

ナナは答えを待つように首をわずかに傾けた。

だが、その目に興味の光が一粒もないことを綱手は知っていた。

穏やかに佇みつつも、ナナは触れることすら叶わぬ“壁”を感じさせていた。そしてそれが、カカシにすら手の施しようがないやつかいな“壁”であることは間違いなかった。

だから綱手は、最後の切り札のようにこう告げた。

「お前がナルトと八尾に同行するのは風影の提案だ」

作戦は功を奏した。

「え……？」

ナナが初めて肌に感情を滲ませた。

「我愛羅が……？」

綱手は敢えて、我愛羅の「願い」を「提案」と言い、目的をただ「同行」と表した。さらに、察しのよいナナなら一瞬にしてわかったであろうことも、口に出して言った。

「この措置は、お前を“護る”ためでもある」

想いのこめられた「この措置」を、ナナは受け止めるだろうか……。

正直、綱手にとっては不得意な賭けだった。

ナナはしばらく黙った後、曖昧に笑った。

「我愛羅が……私のチカラが利用されることを恐れて、そう言ったんじゃないことはわかっています」

ちやんと、意味をくみ取って。

それでも、笑みは歪んでいた。

「みんなに心配をかけて……ごめんなさい」

謝罪は確かに心からの言葉だった。

だが、かけられた心配……贈られた“想い”に対してはやはり他人事だった。もう、それを“もてあます”ことすら辞めてしまったかのように。

綱手は内心でため息をついた。

ナナの後姿を見守るカカシの眉も、素直に真ん中に寄っている。

「出立は明日7時だ。里の門に集合しろ」

「わかりました」

ナナは最後に、何も映さない瞳で告げた。

「ナルトと八尾は必ず護ります」

そんな乾いた決意を言葉にして、ナナは去って行った。

瞬き

「まったく信じらんねー……」

シカマルは火影岩の頂上で悪態づいた。

「明日の早朝に国外へ出発するってヤツが、何でこんな所で寝てんだよ……」

草が揺れ、小さな影が起き上った。

その背に向かって、彼はため息をついた。

「新しい家は？ カカシ先生に用意してもらったんだろ？」

そして、その隣に腰をおろした。

「だって、明日からまた留守にするのに、使っちゃうのももったいないなって」

ナナはケラケラと笑ってみせた。

その愛想の良い笑いに付き合う気にはなれず、シカマルは深いため息をついた。

『サスケともう一度 出逢う』 覚悟がある』

頭の中では、ナナの言葉がグルグルと回り回っていた。

酔いそうだった。気分が悪かった。

「こんなところにどうしたの？ シカマル」

それなのに、ナナは髪についた草を払いながら笑う。

「お前……」

額がピクリとひきつった。

「なんで重役に勾留された？」

責めるような低い声が出た。そんなつもりじゃないのに、ナナの笑みがいらいらを加速させていた。

「知ってたんだ」

「カカシ先生が火影に就任して釈放の書類を書いたら、オレがお前を迎えに行くよう親父に言われてた」

「ああ……そうだったんだ」

その他人事のような声色も、

「ごめんね、シカマル」

申し訳なさそうな「作り笑い」もうんざりだった。

「なんでお前が重役と敵対しなくちゃならないんだよっ」

だから彼は声を荒げた。

「意識が戻った時、『サスケがダンゾウを「殺してくれた」』って言ったことと関係があるんだろ!？」

憎しみすらこめて、ナナの瞳を見た。

「どういう意味なんだ?!」

歯止めの利かない怒りの感情は初めてだった。己の無力さを伴う絶望的な怒りだった。

「何があつたんだよ!!」

言っちゃいけない……わかっているのに、

「ナナ!!」

警報は鳴り響いているのに、

「お前っ……」

彼はナナの腕を掴み、叫んだ。

「うちはイタチとサスケの戦いで、何があつたんだよ!!」

風が流れた。無遠慮にも、穏やかに。

ナナは、全ての感情を捨てた顔で、目を伏せた。

「ナナ……!」

それでも彼は、力を緩めなかった。

「お前……サクラに言つたんだろ?」

ただ、声だけは擦り切れて……、

『サスケが来るまで死ねない』って……」

そうつぶやいた。

「そんなふうに言うのも全部……イタチとサスケの戦いが原因なんだろう……?」

取り返しのつかないことになろうとも、今この瞬間だけは、あるがままの感情に全てを委ねた。

ナナは……ゆっくりと空を見上げた。

その瞳には、無数にある星たちのどれも、映ってなどいなかった。



星の輝きからも見放された存在。誰も知らない秘密を抱えた孤独な存在。気高い血で、稀有の技を使いながらも、闇に魅入られたかのように深い傷を負い続ける……。

「オレに……こんなことを聞く資格なんてねえのはわかってる」  
誰より……愛しい存在がどどん遠ざかって行く。

それがわかっていた。

「わかってるが……」

だから、わかっていると言わずにいられない。

「オレはずっとお前を見てきたんだ」

イタチと再会し、心を乱したナナも……。サスケに去られ、涙したナナも……。姉と戦い、傷ついたナナも……。

傍に居て、言葉を交わして……。触れてきたつもりだった。

だからこそ、今ある感情は抑えきれぬほど簡単な造りはしていない。

「お前のことを、ずっと……」

やっと、ナナは目を合わせた。

遠くの星の瞬きがそこにあつた。

「前に河原でお前が言っていた『あの人』って……うちはイタチのことなんだろう？」

あの日の懐古で、その光はかすかに揺れた。

「今ならオレにもわかる……」

そしてナナは、腕を掴んでいるシカマルの手に自分の手を乗せた。

ナナの骨を軋ませんばかりに力を込めていた彼の手は、いつしか力を失っていた。

「あの時……言っただろう？」

その手で、ナナの手を握り返した。

「お前が疲れた時、オレはお前の休憩所になってやる……って」

そのわずかなぬくもりに、全てを込めた。

「オレの気持ちは、あの時と少しも変わらねえ」

ピクリと、ナナの指先がシカマルの手の中で動いた。

後悔はなかった。たとえナナを傷つけたとしても、この指先が、ナ

ナがまだココに居ることを表したから。

「シカマル……」

ナナは、掠れた声で名を呼んだ。

そして、今度はしつかりと手を握った。

「私は……あの時から……ずいぶんと変わったよ」

シカマルは、思わず目を見開いた。

言葉の意味じゃなく、ナナが幼げな笑みで彼を見つめ返していたから。

「私は……」

ナナは歪んだ唇から言葉を零す。

「サスケに想いを告げられて……自分の想いに気づいて……イタチの想いを知って……」

心を削るようにして、言った。

「あの時よりだいたいオトナになったつもり……」

まつ毛を揺らし、ナナは笑う。

「だから、シカマルが言ってくれたことの意味は……シカマルの想いは……もうちゃんとわかった」

抱きしめることすら忘れて、魅入った。

「ありがとう……シカマル……」

そしてナナは、あの時のようにそつと身をすり寄せた。

今度はちゃんと、涙をこぼして。あの時隠したはずの、涙を。

「今は……思い出すことも辛くて……苦しくて……」

押しつぶされそうな心を曝け出し、ナナはシカマルにしがみついた。

「言葉にするくらいなら死んだ方がましだけど……」

やっと、シカマルはその震える肩を抱いた。

「でも……もし、これから話せる時が来たら……」

天で見守る星たちからすらも隠すように、しつかりと抱きしめた。

「その時は……一番最初にシカマルに言うから……」

ナナは無理やり笑みを浮かべてシカマルを見上げた。

「その時は、今の想いが消えてても……聞いてくれる？」

抱えた痛みの方だけ、美しく光っているかのような雫。  
それを指ですくつて、シカマルは息をついた。  
簡単に、うなづくことなどできなかつた。

『想いが消えてても』……そんなことは考えられない。ありえない  
と思っていた。

そして、『もし、これから話せる時が来たら』……そんな時も来ない  
と思つた。

だから、

「お前は……」

また、あの言葉を繰り返す。

「サスケに殺されるつもりか？」

否定と諦めとが入り混じつた感情で、シカマルは問う。

もう、苛立ちや無力感はなかつた。

ただ、静かにナナの答えを見守つた。

「それが……私の最後の願い……」

ナナは悲しい願いをあつさり吐き出して、疲れたように体重を預けてきた。

「もう……お前にはそれしかないのか？」

そして、うなずいた。

「そっか……」

ナナの髪を少し撫ぜた。さらりとした感触が、ナナの未来を突きつけるようだった。

それでも、頭と心は納得していた。

ただ、ナナが願いを口にくれたことが嬉しかった。救いだつた。

「だつたら……」

シカマルはナナを上向かせた。

やはり、その瞳には天の星がちやんと映っていた。  
だから……。

「せめて『その時』までは、生きろ」

滑稽な台詞を吐くことができた。

ナナは表情を変えて彼を見上げた。

その儂げな輝きにもう一度、

「『その時』まで、ちゃんと生きてろよ」

そう言って、小さく笑った。

ゆっくりと時間をかけて、ナナはその意味を飲み込んだ。

そして、

「ありがとう……シカマル」

受け止めた。

その笑みは、宙の光も気圧されるほど美しかった。

「へんなの……」

輝きをまき散らすように、ナナは笑う。

「誰にも会いたくなくてここへ来たはずなのに……」

しっかりと、シカマルの身体にしがみ付き、

「今は、夜が終わるまでシカマルと一緒に居て欲しい……」

肩には頭を乗せて。

「ありがとう、シカマル……」

シカマルがその頭を抱いたとき、ナナは小さな子供のように安心し  
きった顔で彼を見上げ……そして静かに瞼を下ろした。

その頬に伝う滴をそっとぬぐい、シカマルもまた、ナナの体温を感  
じながら目を閉じた。



出発の朝。

里の門で、サクラはナナを捕まえて強引に巾着袋を手渡していた。

「いい？　これが増血剤と鉄剤、ビタミン剤。これとこれは1日3回2錠ずつ飲むのよ。こっちは1日2回、朝と寝る前に1錠ずつ。それからこれはブドウ糖を混ぜた私特製の栄養剤だから、毎朝、朝食後に一粒ずつ水と一緒に飲んでね。忘れちゃダメよ」

「ありがとうサクラちゃん」

「本当ならまだ安静が必要なんだから、絶対に無理しないでよ？　ちゃんと疲れたらヤマト隊長に言うこと！」

「うん、わかってる」

ナナは素直に全てを受け取って微笑んだ。

「それと、ナルトのことよろしくね……って、本当ならナルトに『ナナのことよろしく』って言いたいんだけど、アイツの場合は頼りないからなあ……」

「大丈夫だよ、サクラちゃん。ナルトはちゃんと護るから」

そして簡単にそう約束した。

その笑みに、昨日までのような陰りは無いように見えた。

「ナルトが無茶しないよう、ちゃんと見張っててネ」

ナルトに檄を入れたに行ったサクラに替わり、カカシがそう言うど、

「うん。八尾のヒトともうまくやれるように気を付ける」

ナナは自ら言った。

「いきなりケンカになっちゃったら困るけど……ナルトならありえるし」

そして、向こうでサクラにどつかれているナルトを向いて笑う。

やはり……その瞳にはちゃんと「ナルト」が映っていた。

「ナナ……」

呼ぶと、ナナはまっすぐに彼を見上げた。

そこに自分の姿を確認し、問う。

「少し吹っ切れたみたいだけど、何かあった？」

ナナはわずかに驚いたように眼を動かした。

そして幼げにうなずいた。

「昨日……シカマルと話した」

カカシは驚くほど単純に納得した。

「そうか……」

シカマルが……、離れてどこかに漂っていたナナの“心”を引き寄せた。

「よかったね」

ナナは再びうなずいた。

シカマルがナナに何を言ったのかはわからない。どんな顔をして、どんなふうになナと話したのか想像もつかなかった。

まだ若い忍である彼が、ナナを見守りながら歩んできた道の中でみつけた、彼だけにしか言えないことがあったのだろう。

今のナナにとつて、最も安心する言葉が……。

「じゃあ、行つてきます」

カカシは黙ってナナの頭に手を置いた。

「先生も、無事でいてね」

ナナの手がその手首をつかんだ。

「また死んじゃったりしたら嫌だからね……!」

そしてギュツと握った。

「ああ、もうお前にそんな心配はかけないよ」

そこから伝わるナナの肌の冷たさと、心の痛みを感じながら、カカシは笑ってナナの頭を撫でまわした。

## 第2章 九尾編 楽園

木ノ葉の一行が雲隠れの里に入ると、すぐに里の忍によつて港へと案内され、大型船で孤島に向かうことになった。

甲板の上、ナナはずっと雲の流れを眺めていた。

具合が悪そうでもなく、思いつめていてもなく……ただぼーっと眺めていた。

ナルトといえば、そんなナナにちよつかいをかけたり、他の忍たちの間を歩き回ったりと、相変わらず落ち着きがなかった。

ヤマトは二人の様子をさりげなく観察し続けた。

カカシの心中を思えば、そうするのが当然だった。

一応、木ノ葉の一団の団長を務めるのはガイだった。が、彼は船に乗り込んで間もない頃から、船酔いのため船室で伏せていた。

「ナルトのやつ……まだ気づいてないみたいだけど……」

ヤマトはため息をついた。

ナルトから洩れた九尾のチャクラを抑えるのが、木遁使いである自分の使命。同じ立場のナナには、絶対にさせられない……という決意は自分なりにあった。

カカシやナルトに比べれば、ナナとの付き合いは浅い。それでも彼らの想いはあくびのように伝染していた。

これ以上、あのコを傷つけられない。

何のためかはわからないが、彼自身もそう思っていた。

やがて、島が見え始めた。

島は侵入者を拒む様に切り立った断崖を剥き出しにし、空には暗雲が立ち込め、カラスが不気味に旋回していた。

ナルトが蝦蟇仙人の予言に聞いていた「楽園の孤島」とはまるで違

うと騒いでいると、突然船が大きく揺れた。横からの波ではなく、下から持ち上げられるような揺れだった。

すると巨大なイカが現れ、十の足で船に襲いかかろうとしていた。

「1、2、3、4、5、6……ナナ、コイツつてば足10本だよな？」

「……9、10……うん、10本あるみたい」

「つてことは予言のタコじゃなくてイカか？」

「……タコは8でイカは10だよな？」

？ 気な会話の間にも、巨大イカの足は船体に絡みつく。決して小さな船ではなかったが、船体は大いに悲鳴を上げた。

「足数えなくても見りやわかるでしょ二人とも！ ナルト、やるよ！」

「おっしや、ナナは下がってろつてばよ!!」

ようやくナルトも戦闘態勢に入った時、木ノ葉の大木ほどもある太さの足がナルトに巻き付いて、あっさりと彼をさらって行った。

「ナルト!!」

ヤマトが焦り半分、呆れ半分でそれを見上げた時、

「イカはすつこんでろ、以下省略!!」

別の生き物がまた海から現れ、ラップを唄いながら巨大イカをあつさり撃退した。

その衝撃派で船全体が宙に浮くほどだったが、

「……7、8……、こつちはタコだー!!」

ナルトはイカの足から解放されるやいなや、楽しげにナナの前に帰って来た。

「ナナー!! 今度こそタコだつてばよ！」

「あれ……タコなの……？」

ヤマトも疑問に思ったが、案内役の雲隠れの忍がその正体を明かした。

「キラビー様ア!!」

あの巨大な「タコ」は、キラビー……つまり八尾ということだった。

「お前ら遅せーじゃねーか、ばかやろーこのやろー！」

そう言いながら、巨大「タコ」は人の形に姿を変え、甲板に降り



立った。

「タコのオツサン、ありがとだってばよー!!」

ナルトはその彼が八尾とも気づかずに、力いっぱい叫んだ。

「……だってばよー……?」

キラビーは手帳を取り出してぶつぶつと何か呟くと、またラップを唄い出した。

ナルトは啞然とし、ヤマトとナナは思わず顔を見合わせた。



「休暇」と言われて昔修行したこの島に来たが、木ノ葉から「客人」が来るとも聞いていた。

せっかくの「休暇」だから、とりあえずは演歌ラップのネタづくりに励みたかった。

自分が以前に却下した「だってばよー」のフレーズを口にするガキもいる。ガキは元々好きではないから、客人といえど関わるのは面倒だった。

とりあえず、兄、雷影に言われたとおり島に彼らを招き入れ、さつさと森で「相撲」でもしようか……そう気だるく考えた時。

『おい、ビー……あの「ナナ」と呼ばれてる娘……』  
身体の奥から声がした。

『あの木ノ葉の娘には「挨拶」しとけ』

中に住まう八尾だった。

「なんだ? どうした?」

『「あのお方」は和泉の姫だ……』

「ふーむ」

ビーはナナを見た。

ナナもまた、彼をまっすぐに見ていた。

「見透かされるような目……」

『あの姫は「オレたち」を使役するほどの力を持つ』

「ふーむ」

『この世で最も高潔な血族だ』

ビーは八尾に言われたとおり、口を閉じてナナに近づいた。

ナナの側にいた忍が警戒したが、ナナの方からビーの前に進み出した。雲隠れの忍も木ノ葉の忍も、息をのんでその場を見守っていた。

「な、なんだー?!」

「だってばよー」のガキが素っ頓狂な声を上げ、忍たちがざわめいた。

彼らの目には、ナナの前でうやうやしく跪く自分の姿が異様に映っているのだろう。

だが、ビーは何も言わずナナへと手を伸ばした。

ナナは戸惑いながら二回、瞬きをした。そして急に納得したように笑んで、ビーの手に自分の手を乗せた。

その仕草には、〃和泉の姫〃に相応しい崇高さがあつた。

ビーは満足して口の端を上げた。腹の中で、八尾も厳肅に伏せているのがわかつた。

「お初にお目にかかる」

ビーはサングラス越しにナナの瞳をまっすぐ見上げながら言った。

「はじめまして」

まだ幼さを残す〃和泉の姫〃は、多くの戸惑いの視線を集めつつも、物おじせずそう答えた。

「あー……！ タコのおっさん！ なに勝手にナナに触ってんだってばよー!!!」

そして「だってばよー」のガキがまた騒ぎ出すまで、ナナの小さな手から伝わる不思議なチカラを感じていた。

## 一 蓮托生

数々の猛獣に出くわしながら、雲隠れの世話役モトイに案内され、一行は宿舎に到着した。

それぞれが宛がわれた部屋で休んでいたが、ヤマトの部屋にはナナがいた。

「……というわけなんで、この島の『生態調査』つてことでナルトを信じさせているから、疑われないように注意しておいてくれ」

「ただの『生態調査』がSランク任務？」

「……まあ、少しでも疑われないようにハツタリをかましてるわけだけど……」

「ナルトなら大丈夫でしょう？」

ナナはそう言って笑っていた。作り笑いではないようだった。

「よく、賛成したね。ナナ」

だから、ヤマトは少し突っ込んだことを聞いてみる。

「なにがですか？」

「五代目様と一緒に……ナナもナルトをこうして『監禁』する策には、反対する気もしたんだけど……」

ナナはヤマトの目を探り、意図を察したように口の端を上げた。

「ああ……」

それは先ほどの笑みではなく、もっと、大人びた妖しい笑みだった。

「だって……、どう足掻いても変えられない運命だから」

「何のことだい？」

自然と身構える自身に、ヤマトは気づいていた。

「引き離しても……二人がどこに居ても……」

ナナはゆっくり、氷のような頬で言う。

「ナルトとサスケは絶対に戦うことになる……」

まるで預言者だった。

「その宿命は、誰にも変えられない……」

何の根拠もない言葉。だが、否定する気力を微塵も与えない声。

「だから私は、ナルトと一緒にいるの……。『その時』まで、ずっと……」

ナナはその声のまま、己の意志をさらけ出した。

「ナナ……君は……それを望むのかい？」

ようやく絞り出した言葉も、

「望んでも望まなくても、変えられないの」

悲哀すら滲まない声で返される。

「私はただ、待っているだけ……」

最後の言葉と同時に、ナナは目を伏せた。

ヤマトは大きくため息をついた。

マダラが語った『真実』は、彼も聞いている。それをナナが知っていることも。

正直、彼の中でその『真実』は処理しきれずにいた。

だいたい、それを語ったマダラの存在でさえ確立されているとは言い難い。だからこそ、カカシも極秘事項として釘を刺したのだ。

「大丈夫です、ヤマト隊長」

しかしナナは、彼を励ますように言った。

「ナルトは覚悟を決めています。私も、ナルトに全てを託しました」

「ナナは……それでいいのかい？」

今更、ありきたりな不安を口にした。

「だって……」

ナナは少し影を和らげて答えた。

「私の存在は産まれたときから……じゃなくて、産まれる前からナルトに委ねられているから」

それは、ヤマトの心に影を落とす事実だった。

「『重い』はずなのに……ナルトは全部、受け止めてくれたから」

目を閉じた。

ナルトの強い光が見えた。

ナナを、闇ごと抱えるナルトの光が……。

「そうか……」

自分が何か言うべきことではない。

そういう結論が出た。

火影から命じられた任務はやり抜く。が、宿命は認める。

「わかったよ、ナナ」

簡潔に答えた。

だが、ナナにはちゃんと伝わった。

「ごめんなさい、ヤマト隊長」

その証拠に、ナナはそう言った。

その時、扉の向こうから大きな声が響いて来た。廊下でナルトが騒いでいるようだった。

「やれやれ、最初の試練だな。モト伊さんの部屋の方だ……」

「ほんと、全然じつとしてないんだから、ナルトは」

話は途中である気がしたが、任務遂行のため、どこか楽しげなナナと共にモト伊の部屋へ向かうことにする。

ドアを開けながら、さりげなくもう一つの懸念をナナにぶつけた。

「ところでナナ。具合は大丈夫なのかい？」

ナナは後に続きながら笑って答えた。

「具合が悪いのはガイ先生でしょ？ アオバさんがまだ看病してるみたい」

その表情は、部屋に入って来た時の笑みに戻っていた。

ひとまず安堵しながら、ヤマトは頭に蠢く「宿命」の文字を、脳の奥に精一杯押しやった。

そうしてナナと共に廊下を曲がると、モト伊がナルトを『ビーの修行場』へと案内するところだった。

なんだか嫌な予感が漂いつつも、ヤマトは当然二人に同行する。

ナナの意志を確認する必要は無かった。

ふと横を見ると、ナナがナルトに笑いかけていた。

その瞳はすぐるようでも拒絶するようでもなく……、どこことなく眩しそうだった。

「ここは『真実の滝』と呼ばれている場所だ」

モトイに連れられて来たのは、荘厳な滝だった。

ここでは尾獣のコントロールではなく、その『前段階』を行うという。

「ここに座って目を閉じろ、ナルト」

モトイは、滝とこちらの岸との間にある小さな陸地を指した。

「そうすれば、お前の真実が見えるはずだ」

そう言った。

ナルトはその場所に行き、滝を向いて座った。

何も起こらなかった。

ただ滝の水音が大量で鳴り響いているだけで、ナルトの背はピクリとも動かない。

「どうなってるんです?」

しびれをきらして聞くヤマトに、モトイはその場所について説明した。

そこで集中すれば己の精神世界へ入ることができ、滝が己の真の姿を映し出す……と。

「今、ナルトはもう一人の自分と戦っているところだ」

抽象的な表現に素直に納得はできず、ヤマトは隣でナルトを見守るナナを見る。

と、

「ナナ、大丈夫かい?」

ナナはじつとナルトを見据えたまま、肩をかすかに震わしていた。

ヤマトがその肩に触れようとした時、突然ナルトの背が揺れ、咳き込みだした。

「ナルト、何があった?!」

急激に悪い予感がして、ヤマトはナルトに駆け寄る。

ナルトは嫌な汗を浮かべながら、息を切らしていた。

「オレと『同じヤツ』が出てきた……! そいつは……!」

「何だ?」

ナルトは一拍置いて言った。

「……闇の部分のオレだった」

モトイは彼に、「それに勝たなければ尾獣の力を操れない」と告げた。が、具体的な策は何も言わなかった。

ナルトはちらりとナナの様子をうかがってから、モトイにビーの話をするよう頼んだ。

ビーがどんな人間かわかれば、ビーが「アレ」に勝てた理由がわかると思っている。

モトイはビーの過去、そして自分の過去を語った。

幼い頃はビーと親友のような関係だった。が、自身の父親が前任の人柱力の暴走を止めようとして死んでしまった。そこから八尾への憎しみが生まれ、新たな人柱力となったビーを殺そうとしてしまった。

話しの終わりに、彼は「懺悔」のつもりだと言った。「懺悔」のつもりで、同じ人柱力であるナルトに話したのだと。

「いつかはビーさんにもちゃんと全てを話さなければと思っている。……でなければ懺悔にはならない……」

モトイの声の響きに偽りはなかった。贖罪の想いが表情からにじみ出ていた。

だが突然……ナルトが思いつめたような顔をして、彼らに背を向けた。

「ナルト、どこ行くの？」

「少し一人にしてくれればよ」

ヤマトの問いかけに暗い声で答えると、ナルトは海の方へ歩き去った。

「ナナ……ナルトがどうしたかわかるかい？」

ヤマトはそれを黙って見送るナナに問う。モトイもナナの答えを待った。

「ナルトの……闇が……」

ナナは寝起きのように、ポツリポツリと言った。

「闇が……深くて……」

「ナナ……？」

「憎しみが……」

そして、ギョツと胸を抑えた。

ナナがナルトと同じものを感じたことが、自然とヤマトには理解できなかった。

「ナルトがアレに勝てても……」

そしてナナは、誰に告げるともなく……、

「私は、絶対に……勝てない……」

そう、黒い言の葉を零した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ヤマトとモトイはしばらくビーについて話をしたあと、ナルトを探しに行った。

ナナは一緒に行かなかった。ここで待つように言うヤマトに、ただ黙ってうなずいた。

ひとりになり、改めて「真実の滝」を眺めた。

荘厳な滝の音は、ナナにとっては懐かしいものだった。

和泉の里で多くの時間を過ごした場所によく似ていた。あれは動物すら遠慮して寄りつかない、神聖な場所。だいぶ大きくなってから知ったのだが、「地上で最も神聖な場所」とされているらしい。

小さく、ため息をついた。

ナルトの闇……。

正直、これまで意識したことはなかった。

ナルトの光、明るさばかりを追いかけていたから、本人すら気付かない場所に根付いていた闇など見えなかった。見ようともしなかった。

だが少し考えれば、それがどれだけ深く、濃いものか理解できた。簡単なことだ。ナルトの闇と自分のそれとは同じモノなのだから。

孤独……周りから忌み嫌われ、疎まれ、愛されず、認められず。生きる価値や意味を問わない日はなかった頃。



そこから生まれた闇は、同じだった。

ナルトは今、初めて自分の闇と向き合っただろう。

闇に浸かって溺れそうで溺れない、そんな日々を送って来た自分とは違う。

だから、珍しく暗い声でひとりになりたがった。

だが……。

ナルトはちゃんとそれと向き合い、克服するだろう。

持っている光は、闇をも凌駕する眩しさであることは間違いない。

ナナはそう信じていた。

ナルトなら、答えを見つける。自分自身の光へ導く。

闇に溺れる自分と、闇に染まったサスケが、目を細めるほどの光。

ナナはそれを信じている。

やがて、ナルトがヤマトらとともに戻って来た。ビーも一緒だ。

ナルトはやはり、ふっきれたような顔をしていた。碧い眼が、快晴の空のようだ。

「ナナ、待たせたなっ！」

ナルトは傍まで来て、手を伸ばす。

それにつかまって立ち上がりながら、ナナは問う。

「ナルト、見つけた？」

短い問いかけに、ナルトは満面の笑みを浮かべた。

「ああ、もう迷わねえってばよ!!」

気圧されるほどのすがすがしさ。

「オレは、オレ自身を信じてみる」

「それが、答え……?」

「ああ」

ナルトの返答もまた、こぎつぱりとしたものだった。

だが、ナナは理解した。

そしてナルトは、ビーに促されて再び『真実の滝』へ向かった。

そのまっすぐな背を見て、この光が全ての闇を照らせればいいのに……と、そう思った。

## 器となる者

「これから九尾のコントロールをやるぞ！　今からオレがお前の師匠♪　覚悟を決めろ、でないと死傷♪」

己の闇を克服したナルトに、ビーが軽快にそう言った。そしてナルトを伴い、*「真実の滝」*の向こう側へと進む。

「ナナ、君も行くのかい？」

一緒に歩き出したナナに、ヤマトはその意思を確かめた。

ナナはすでに滝の向こうに消えたナルトの背を見つめながら、蒼白の顔のまま、少し笑って頷いた。

滝の向こうは広大な洞窟になっていた。

通路の両側には石の彫刻が並び、壁には荘厳な壁画が描かれている。まるで遺跡のような場所であった。

ビーは、ここは昔から人柱力に選ばれた者が禊を行う神聖な場所だと説明した。そして、ここで尾獣と対話するのだ……と。

その意味を理解できぬうち、ビーはひとつの扉の前で立ち止まり、皆を促した。

中は不思議な*「空間」*だった。

「この中で目を閉じて精神を集中させる。そうすれば尾獣と会うことができる」

「滝のときと同じ感じだつてばよ」

人柱力の二人は、どことなく二人だけでわかっているような雰囲気だった。

「ナルト、お前の封印式はどんなのだ？」

「四象封印です」

ナルトの代わりにヤマトが答えた。

里の最重要機密である。ナルト本人さえも詳しくは知らないだろう。が、今この場で伏せていてもすでに意味はなかった。

「鍵は持ってるのか？」

「うん！」

鍵のことはナルト自身もわかっているようだ。

そして、その返答はヤマトの予感も当たったことを意味した。

「やはり、封印を解くんですね？」

「ああ、そうだ」

「もし、コントロールに失敗して九尾が復活したらどうするんです?!」  
焦りというよりも警告だった。

「その場合は、この部屋に閉じ込めて封印する。ナルトごとな」

ビーの声色が明らかに変わった。

「ここはそういう場所だ」

一瞬の沈黙。

それをビーがいつもの調子で破った。

「新たな人柱力を連れて来るまで九尾はここに封印。お前らそれに  
ブーイング?♪」

調子は崩された。

「しかし……」

だが、懸念事項は全て払っておきたかった。

木ノ葉のためじゃなく、ナルトを想う者たちのためにも。

が。

「先に、言っておきたいことがあります」

今まで黙っていたナナが初めて口を開いた。

「刻印を失っていても……私の『存在』は、まだナルトの封印と繋がっています」

躊躇いがちに、だが言葉尻ははっきりと。

「え……」

三人の中で、ヤマトだけが怪訝な顔をしていた。

「ナルトの封印が解ければ、私の『役目』が発動するように組み込まれてるんです」

だからナナは、ヤマトに視線を合わせて告げる。

「そして……ナルトが失敗すれば九尾は私に『乗り移る』……」  
が、今度はビーまでもがサングラスを光らせた。

「封印する”じゃなくて、”乗り移る”？」

「それが、君の”役目”だっっていうのかい？」

ナナは一度ナルトを見た。

そして、問いかけには答えず、こう言った。

「もしそうだったら、”私”が最初の瞬きをする前に、殺してください」

皮肉にも、これがナナから発せられた最も力強い言葉だった。

ヤマトは三人を見回した。ビーもナナとナルトを見ていた。

二人はしっかりと見つめ合っている。運命をともにする者同士しか交わせない視線だった。

「そうはならねーってばよー！」

ナルトがまっすぐにナナを見て、力強くそう言った。

ナナはかすかに笑んで、うなずいた。

それを見て、ビーが威勢よく言う。

「オツケーそれじゃ始めるぜ♪」

ビーとナルトが向かい合って座った。

ナナはそつと寄り添うようにナルトの隣に腰を下ろす。

「精神の中で九尾とあいさつしたら、まず封印を解け」

ビーとナルトが互いの拳を合わせ、瞑想を始めた。二人の精神の中で、九尾の封印解除が始まったのだろう。

ヤマトは緊張感を振り払うように、ひとつ息をついた。

と、ナナは意識を失ったようにナルトの肩にもたれかかった。

伸ばしかけた手を辛うじて押しとどめた。

これから始まるのは、”尾獣の器となる者”にしかわかり得ない、精神世界の戦いだった。



ナルトが封印を解いて九尾が飛び出しても、ナナはまだ、檻の中で立ち尽くしていた。

相変わらず、足はその場に張り付いてピクリとも動かない。

八尾の援護を得てナルトが九尾と戦っているのは見えていたが、やはり声は出なかった。

まるで、檻の柵の一部と化したように、ただじつと、そこに佇んでいた。

九尾の強さは、初めて目の当たりにした。

膨大なチャクラを纏い、強大な体を俊敏に動かす、まさに人の理解を超えた生き物だった。

それを相手に、ナルトは仙人モード、影分身、螺旋丸で対抗する。その戦いは熾烈を極めた。

ナナの足元は、地上であればとつくに地が裂けているほどに大きく揺れ、膝までであった水は足首まで引いていた。

ふと、ナナは戦いから目を逸らし、足もとを見た。

白い袴の裾……そこから延びた足首に巻きつく「枷」に、今更ながら気がついた。

おぞましい鎖だった。

形を成さぬものが、無理に鎖としての役割をさせられているように、常に蠢き、それでも残酷にナナに絡みつく。

金属音はなかった。ただ、その物体が出す気泡がボコボコと音を立てていた。

それは、呪いのように、黒よりも暗い色をしていた。

その鎖の先がどこに繋がれているのか、見なくてもわかったが、ナナはあえてそれを辿る。

鎖は浅くなつた水底を這うようにして伸び、九尾の尾へと繋がっていた。

「九尾……」

やっとわかった気がして、ナナは声にならない呟きを零した。

「アレは……わたし……?」

向こうでは、九尾のチャクラとナルトのチャクラの引き合いが始まっていた。

そこで漏れ出た、九尾の精神……。

『憎い……!!』

『苦しい……!!』

ナルトの勢いが弱まった。

だが、ナナは何も感じていなかった。

『殺してやりたい……!!』

ナルトは明らかに“それ”に侵され、その場に膝をつく。光を失い始めた彼を見て、ナナは目を閉じた。

一瞬の暗闇。そして再び目を開くと、目の前に“ナルトが見ているモノ”があった。

『何もかもイヤだ!』

『復讐してやる!!』

ナルトの心の揺れが伝わってきた。ナルトの意識と完全に同調したのだ。

だが……、ナナの精神はやはり何も感じなかった。

ナルトの精神がわかるだけで、ナナ自身は何も変わらなかった。

何故なら……。

『何故自分を産んだ?!』

『こんなチカラいらいない……!!』

九尾の憎しみが、ナナのそれと同じ深さ、同じ色、同じ濃さをしてきたから。

『消えてしまえ!』

『お前なんか誰も認めやしない!!』

折れそうになるナルトの意志を感じながらも、ナナはただ傍観していた。

実際、どうすることもできなかった。

九尾の憎しみに抗う術などない。それは自身の精神と同じ形をしていたのだから。

だが、

『いいえ』

突然どこからか優しい声が出て、ナルトが顔を上げた。

『ここに居ていいのよ』

彼の目の前に、赤い髪を長く垂らした女が立っていた。

## 千切れた鎖

「一体どうなってるんだ?!」

ビーでさえ匙を投げた。

ナルトの身体は、どんどん九尾のおぞましいチャクラに覆われていく。ナルトに触れるナナにまで、そのチャクラは侵食していった。

「くそっ、このままじゃ……!」

ヤマトは当然、ナナをナルトから引き剥がしてナルトのチャクラを抑えこもうとした。

が、ナナに手を伸ばしかけて初めて気がついた。

九尾の赤いチャクラは、ナナの身体を侵しはしなかった。まるでナナがナルトの身体の一部であるように、チャクラは二人ともを覆っていた。

ヤマトは伸ばした手を押しとどめ、術を躊躇した。

そうする間に、何故かナルトから九尾のチャクラは引いていった。

そして、まるでつられて引き込まれるかのように、ナナは目を閉じたままナルトに強くしがみついた。



クシナのチャクラに抑え込まれた九尾が、ナルトの攻撃を受けて倒れた。

ナナはまだ、檻の中からそれを見ていた。

「母」に会い、ナルトは力を得た。「愛」という名のチカラだった。

それをナルトの意識の中で見ていたナナは、初めて其処から出ようとした。「愛」というチカラが何なのか、知らなかったから、見届けたかった。

が、九尾が尻もちをついても、辺りが揺れても、足は少しも動かなかった。

ただ突っ立ったまま、ナナは憎しみを押し返すナルトのヒカリを見つめていた。

「ナナ」

と、柱の陰からバシヤバシヤと足元に大きな音を立てて駆け寄る者があつた。

ナルトの影分身だつた。

「ナナ!!」

ナルトは目の前で立ち止まり、唐突にナナの両手を掴んだ。

碧の瞳は、今までで一番強い光を持っていた。

(ナルト……)

やはり、声は出なかった。

だが、ナルトは手の力を強くして笑つた。

「オレがここから出してやる!!」

子供のような、無邪気な顔だつた。

ナナはうつむいた。

ナルトが眩しかつたのと、向こうで九尾と戦う本体が心配だつたのと、足に絡まる呪いの鎖を知らせたかつたから……。

ナルトはソレを見ても、何も言わなかつた。初めから知っていたかのように、また笑つただけだつた。

そして、ぐいつとナナを抱き寄せた。

と……、びくともしなかつたどころか、感覚すら持たなかつたナナの足が、ふらりとよろめいた。

「ナルト……?」

ナルトの肩で零れたのは、確かに自分の声だつた。

「オレが、ここからお前を出してやる……!」

再び自分の声を聞く前に、ナルトは言った。

「その『枷』をお前から『外す』ことができるのは、きつとオレじゃねえ」

少し身体を離し、またあの力強い視線を落としながら。

「けど、その鎖は今、オレが千切つてやるつてばよ!!」

そして、向こうで九尾が再び封印されたと同時に、螺旋丸でナナの



鎖を壊した。

「ナルト……!!」

余波でよろめいたナナを、ナルトはしっかりと抱きとめた。

まだ足首にはまったままの枷から、千切れた鎖が垂れている。が、ナルトはそのままナナを抱えて、一息で檻から外に出た。

「ナルト……私っ……」

少し走ったところで降ろされたとき、その足もとで初めて鎖が『音を立てた。

ジャラン……。

とても寂しげで滑稽な音だった。

「私は……」

ナナはソレの重さと冷たさと、そして足首の痛みとを初めて感じた。

「お前はお前だつてばよ」

だが、それを全て吹き飛ばすようにナルトは言う。

「お前がどんなふうになんて産まれて来て、どんな存在かなんて、もうどうでもいい」

少年の笑みを浮かべたまま。

「オレは今ここに居るナナが好きだつてばよ!!」

「ナルト……」

襟元を強く握った。

「ナナはオレの大切な仲間だ!!」

ナルトはその手引き剥がして握りしめた。

「ずっと一緒にいるんだろ?」

ナナはうなずくことも忘れ、その瞳に魅入った。

「オレはさつき母ちゃんに教えてもらった」

が、指は自然とナルトの手を握り返していた。

「『愛』ってヤツが、きつとお前のその鎖を外すんだ」

「あい……?」

子供のように、ナナはその言葉を繰り返す。

「お前の鎖が外れるのを、オレはずっと、一生……一番近くで見守るつてばよ!!」

ナルトの手は、今度は頬に触れた。そこからじんわりと温もりが広がっていく。

「だから、『九尾』とか『和泉』とかは関係ねえ」

まるで促されたかのように、許されたかのように、涙が零れた。

「そんな繋がりじゃなくても、オレたちはずっと一緒だつてばよ!!」

「ナルト……!」

ナナはナルトの首にしがみついた。ナルトは力いっぱい抱き返してくれた。

やがて、ナルトの影分身は煙と消えた。

と同時に……、ナナの身体もそれに溶け込むように無くなった。

ただ、その足にはまだ、千切れた鎖がぶら下がっているのがわかった。



ヤマトはビーと顔を見合わせた。

いつしかナナは、ナルトにしがみついて泣いていた。

後から後から流れ出る涙を全て、自分自身に染み込ませるように。

「一体……何が……」

そして、ようやくナルトが目を開けた。しっかりと、ナナを抱きしめて。

「ナナ……」

ナルトは見たこともないほど大人びた顔で、ナナの身体を起こした。

「ナナ、ありがとな」

しゃっくりあげるナナに笑みを向け、時間をかけて涙をぬぐった。

「ナルト……」

ナナは言葉にならない嗚咽を漏らしていた。

そして、乱暴に袖で涙をぬぐい取った。何度も、何度も。そのナナを抱えながら、

「おっしやー!!!」

ナルトは勢いよく叫んだ。

「ナルト! それで、うまくいったのかい?!」

「とにかくいろいろあつて……!」

たまらず問いかけたヤマトに対し、ナルトは充実した顔で答えた。そしてビーが差し出した拳に己の拳を合わせる。

ナルトとビーはそれだけでわかり合っていた。

九尾が一体どうなったのか全く理解できていないヤマトは、焦れる心を押さえ込み、ひとまずもうひとつの懸念をぶつける。

「で……ナナは……?」

ナナは相変わらず、幼い子供のようになやつきりあげながら、とめどなく流れる涙を拭いていた。

ナルトは彼女の震える肩をしっかりと抱いている。

「ナナは大丈夫だ」

ナルトはその手を少し低いナナの頭に乗せた。

「ナナは今までずっとオレと一緒に居てくれた。これからも、ずっと一緒だつてばよ!」

ヤマトはナルトとナナを見比べた。

正直、ナルトの答えの意味はわからない。だが、二人の絆は「九尾の入れ物」だけじゃないことは分かっている。

「そうか」

それだけで、納得できる気がしていた。

心配を安堵に変えて、今頃、里でまだ「心配」しているはずの力カシを思い浮かべた時、ナナはゆつくりとナルトを向いた。

「ナルツ……トツ……」

ひどくしゃっくりあげながら。手の甲でも、手のひらでも、腕でも、涙を拭きながら。

「ありが……とうつ……!」

だが、しっかりとそう言った。

「わたしっ……」

まだ、その背に絶望を背負ってはいた。

「ナルトでよかった……！」

その頬はまだ冷たく冷えていた。

「初めてっ……」

が、それでも何かを見つけたように。

「産まれてきてよかったって……思えた……！」

言いきって、ナナはその想いの強さを主張するように、唇を真一文字に引き結んだ。

「ナナ……」

ナルトでさえ、かすかに目を見開いた。

ナナは慟哭を抑え、ナルトの眼を見つめて、もう一度その言葉を解き放つ。

「産まれてきて、ナルトに出会えて、よかった……」

皮肉にも、これまでナナが己の“生”を憎んでいたかがわかった。

それは“ナナの生”をともに過ごしてきた者にとって、虚無感を誘う。

だが救いなのは、それと同時に、ナナが今、初めてその“生”を受け入れたと知れたこと。

だからこそ、この瞬間は大切だった。

「ナルト……ありがとう……」

ナナは頬を涙に濡らしたまま、笑んだ。

弱く、歪んだ笑みだった。

が、それがナナの全てだった。もう覆うものは何も無い、さらけ出されたナナの心だった。

だから。

「へへへへ」

ナルトは何の言葉も返さず、ただ笑みを返した。

彼らしい、強く、まっすぐな笑みだった。

## 暁の鮫

九尾の説明に移ると、ナナはようやく泣きやんでナルトの傍らに立った。

目は真っ赤に充血し、頬は透けるように青白かった。

が、その眼はまるで親鳥に命を預ける雛のように、しっかりとナルトを見つめていた。

「九尾のチャクラは、オレの中のちゃんととつてある。『別の場所』にあつて、いつも使つてるわけじゃねえ……」

ナルトはそう言つて、容易に九尾のチャクラを引っ張り出した。「使つた時の感じはこうだつてばよ」

そのチャクラは生命力に満ち、ヤマトが木遁で出した木の柱が芽吹くほどだった。

と突然、

「それで隠れてるつもりかよー！」

ナルトがビーの背後を睨みつけた。

ヤマトも素早くその方向を向く。

が、誰も居ない。

「チャクラじゃない……！ もやもやした嫌な感じがする！」

ナルトはそう言つて、ビーが背負う刀……鬼鮫から奪つた『鮫肌』を指さした。

瞬間、刀は意思を持った生き物のようにビーの背中から飛び出て、すぐに形を変えた。

多足の虫のような形へ……、そしてすぐ『顔』が浮き出た。

「これが、九尾のチャクラをコントロールした人柱力の力というわけですか」

それは、

「お前は暁の鮫ヤロー!!」

「なぜだ？ あの時こいつの首は刎ねたはずだ♪」

ナルトとビーが、そしてナナも見知った顔だった。

「あ、おい!!」

その男……干柿鬼鮫は状況的に不利と悟ったのか、すぐに脱出を選択した。

彼は奥深く護られたはずのこの場所で、容易に扉を開ける。

「扉の開け方を知っているのか!?!」

ビーすら戸惑いを見せる中、

「愚問ですね。私はスパイとしてここにいるんですよ」

鬼鮫はそう言いながら、自ら開いた扉へと向かった。

その時、ビーとヤマト、そしてナナの横に閃光が煌いた。同時に鬼鮫が取り付いた壁が音を立てて割れていた。

「瞬身の術……?」

「閃光走っていきなり先攻♪」

光の正体はナルトだった。

今まで彼らの側にいたはずのナルトが、一瞬にして扉を出ようとした鬼鮫に体当たりをかましていた。

「これじゃまるで……黄色い閃光!!♪」

ビーがそう言った。

黄色い閃光……。木ノ葉の忍でなくても知っているその通り名は、まさしく四代目火影のもの……。

「くっ……」

鬼鮫は血を吐きながら、なおも逃亡をはかる。が、依然としてナルトの射程距離内だった。

ところが、

「うわっ! 足がつ!!」

ナルトの足は勢いのまま壁に埋め込まれ、身動きができなくなってしまった。

「突っ込みすぎたア!!」

「さすがにまだ四代目のようにはいかないみたいだね……」

すぐさま、ヤマトが救助に向い、ビーは鬼鮫が追った。

そしてナナは……。

「ナナ?!」

ナルトとヤマトの前を通り過ぎ、ナナはビーとともに鬼鮫に向かって行った。

去り際に見えたナナの横顔に、強い意志のようなものを感じた。

その頃、『真実の滝』の前にはガイ、アオバ、モトイが立っていた。ナルトの修行のことを聞きつけてやってきた彼らだったが、突如としていないはずのない「敵」と遭遇することとなる。

それはまさに、ナルトが居た場所から脱出してきた干柿鬼鮫だった。

「うおおおー！」

ガイの最初の一撃で、鬼鮫は滝の岸壁に埋まった。

すぐにビーとナナが追い付き、鬼鮫が暁のスパイであることを知らせる。

と、鬼鮫の身体と一体化していた「鮫肌」が、鬼鮫の身体を離れてビーに迫った。

それで鬼鮫の姿がはつきりと表れ、アオバもその正体に気づく。

「こいつは確か、イタチと組んでいた暁の鮫男……」

その言葉に、ナナの肩がピクンと震えた。

が、事態はお構いなしに進行していく。

鬼鮫は水中に入り、鮫肌を通してビーのチャクラを奪っていた。さらに、アオバの術からも逆にチャクラを吸い取り、次のガイの攻撃を受け止めるほどに回復をしていた。

そして体術で攻撃されたのを良いことに、ガイの身体を掴んだままチャクラを吸収した。

「ぐっ……力がっ……!!」

鬼鮫はそのまま水遁でガイを遠ざけ、海の中の鮫のようなスピードで水中から逃亡した。

「島の結界の外へ出したら終わりだ！ 感知ができなくなる!!」

モトイの声に最初に反応したのはガイだった。

が、船酔いの体調不良が治りきっておらず、さらにチャクラが吸い



取られた状態で、動きは普段通りとはいかなかった。

その隙をつくように、細い影が彼らの間をすり抜ける。

「なにっ?!」

それは、まだ瞼を腫らしたままのナナだった。

「私が行きます」

走りながらそう言った。

「ナナ?!」

誰も止める間もなく、ナナの背は森の中に溶け込んだ。

「ナナはまだ、木ノ葉襲撃の一件から回復してないんじゃない?!」

アオバがガイを振り返る。もちろん、それはガイも重々承知だった。

が、

「ああ、そのはずだ……!」

そう言いつつも、ガイは走り去ったナナの横顔がこれまでと大きく変わっていたことを見逃さなかった。

あの瞳から、今までの「仕方なく生きている」のではなく、ようやく自らの意思を持って生きていると感じ取れた。

それがどんなものなのか、彼にはわからなかった。

意思を持った表情……といつても、お世辞にも生き生きとした表情であるとはいえない。その頬は未だ絶望に染まり、腫れた瞼は悲哀をかもしだしていた。

それでも、抜け殻の状態よりは救われた。

ナナ自身ではなく、周りを取り巻く彼らの方が救われた気分だった。

そんな思いで、ガイはナナが去った方角をみやった。

上空に白い鳥が現れた。

それがナナの仕業によるものだということが、ガイにはすぐにはわかった。

「とにかく追いかけてよう!!」

膨大なチャクラを取られて動けなくなっているビーを残し、ガイとモトイはナナを追った。

アオバはヤマトとナルトに知らせるため、逆方向に走った。  
この時点では、ナナがひとりで鬼鮫と戦うなど、誰も思っ  
てはいなかった。

## 切願

鬼鮫は『真実の滝』から遠く離れた場所で水から上がった。そして口寄せで呼んだ鮫に、情報を記した巻物を託す。

その瞬間だった。

ろくに波も立てず、目の前にひとりの少女が降り立った。

「ほう……」

鬼鮫はニヤリと笑った。

「アナタは……イタチさんの……」

ナナもまた、冷たく笑った。

ナナとの出会いは二度目だった。

一度目は、イタチとともに中忍試験直後の木ノ葉を訪れた時。

あの時、ナナはサスケとイタチの前に立ちほだかり、「イタチと戦う」と口にした。

そして二度目の今は……。

「私をクロスつもりですか……？」

過去のどれとも違う、深い漆黒の眼をしてここに立っている。

「あなたに、聞きたいことがある……」

その色は憎悪でも怒りでもなく、悲哀の色だった。

「イタチさんのことですか？」

その名を出しても、ナナの顔色は変わらなかった。が、その問いが間違いでないことはわかった。

実際、イタチとこの少女がどういう関係だったのかはわからない。

イタチの少女に対する行動は尋常ではなかった。

あのイタチが「ただの忍」の少女の言葉を遮った行為は、彼にしてみればかなり不自然だった。

一族を皆殺しにし、実の弟すら月読をかけて精神を破壊し、暁という凶悪犯罪組織に組する天才忍者が、ちっほけな「ただの忍」を相手にするなど……。

不可解ではあったが、それをイタチに聞くことはなかった。よく似

た顔の少年については聞けても、イタチを悲しげに睨み上げていた少女のことは聞けなかった。

こんな自分にも、わきまえていることはある。イタチの領域を侵すことは躊躇っていたのだ。

「イタチは……」

少女はゆっくりと口を開いた。

「いつから病気だったの……?」

重苦しい空気をまとったまま、無理やりその問いを絞り出すようだった。

「何の病気だったの……?」

まるで、そう聞くことすら自身にとつての罰のように。

「知ってるでしょう? アナタなら……」

それでも聞かずにいられない……知らずにはいられない。少女はそんな苦渋の表情で立っていた。

「お願い、教えて」

若くしてそんな表情ができることに、鬼鮫は素直に敬意すら感じた。

今まで殺してきた者たちには、少なくともこんな気をまとう者はいなかった。

「イタチのことを、教えて……」

この言葉は、要求ではなく切願だった。

再び鬼鮫は笑った。

馬鹿にしたわけではない。痛みを耐えて絞り出すように言いながら、纏う空気には隙はない。それが小気味よかった。

「アナタがイタチさんの『何』だったのか……正直私も気になりますよ」

その気圧されるほどの悲壮な姿に、鬼鮫は本心を打ち明けた。

「ただの木ノ葉の忍……というわけでもないのでしょうか?」

そして疑問も軽く投げかける。

すると、ナナの口の端が上がった。

「私のこと……マダラはアナタに話さなかったんだ」

「マダラ」という名を、〃ただの忍〃だったはずの少女がいとも自然に口にしたことに、驚きはしなかった。

それこそが明かされるひとつ目の真実だった。

「彼のことも知っていましたか……ますます興味がわきますねエ、アナタに」

かすかに気分が高揚した。どんな豪傑と対峙するより、このか細い少女の〃謎〃のほうがぞくぞくした。

「もし、アナタの要求通りイタチさんのことを話したら、ここは見逃してくれますか？」

遊んでいる暇はない。

が、昂る気持ちのまま、鬼鮫は忍の戦場にあるまじき甘い言葉を吐いた。

一瞬、ナナの眼が揺れた。

それは鬼鮫にとって少し意外だった。

忍として生きてきた中で、木ノ葉の忍ほど〃仲間ごっこ〃が好きな連中はいないというのが常識だった。

「そうですね……」

が、今ここに立つ木ノ葉のくノ一は、死んだ男の話を聞くためだけに、重要参考人を取り逃がすこともいとわなない顔をしている。

「それほど、イタチさんのことを……」

感情の無い顔をしながらも、見えない何かを抱えていたイタチが思い浮かんだ。

目の前のナナは、それと容易にダブって見える。

「どのみち、間もなくさっきの珍獣たちが駆けつけるでしょうから、お嬢さんとお話してる時間はありませんがね」

その幻影を切り裂くように、鬼鮫は吐き捨てた。

するとナナは、また意外なことを口にする。

「さっき上空からこの辺り一帯に結界を張った。ここからアナタを逃がさないし、ガイ先生たちも入れない」

仲間の援護を自ら断つとは……。

その理由が、ナナの〃勝算〃でないことはすぐに気づいた。

援護がなくても勝てるから……ではなく、先ほどの疑問とその答えを、彼らに知られたくないからであろう。

うちはイタチは木ノ葉にとつては悪人だったはずだ。その彼の情報を得たいのは、個人的な理由なのだろう。

やはり、少女はイタチを慕う者か……。

「アナタひとりで、私を拘束するつもりですか？」

痩せた少女にたったひとりで立ちはだかれて、普段なら笑い飛ばすか呆れた溜息を洩らすところである。

が、この日は違った。

目の前の少女は、何かが違う。それがわかりかけている今、油断はなかった。

「できませんかねえ、こちらには地の利もある……！」

鬼鮫は素早く印を結んで無数の鮫を作り上げた。

「水遁！ 千食鮫（せんしょくこう）！！」

先ほど巻物を持たせた鮫は、いく千もの鮫の中に紛れ込む。

少女の実力は知らなかった。

イタチと関わりがある人物かもしれない……というだけの理由で、ただの若い忍でないという認識だけはあった。

だが、この無数の鮫に対抗する術は持っていないと判断した。

「イタチのことは、ぜったいに教えてもらおう……」

そんな中、少女は場違いにゆっくりとつぶやいた。

「もう……アナタにしか聞けないから……」

そして、津波のようにそびえ立つ鮫たちの上に立つ鬼鮫に向かって、

「風遁！ 須麻流之珠六連珠（スマルノタマロクレンジュ）！！」

風遁を発動させる。

印を結ぶ少女を中心に、直径5、6メートルのつむじ風の塊が六連珠になって鮫たちに襲いかかった。

それに斬られた鮫は、形を失くしてばしやばしやと水面に墜落した。

「なかなかやりますね」

思った以上のチャクラ量だったが、

「ですが、残念ながら水遁に対して風遁は不利ですねえ」

属性はこちらが有利であった。

しかし少女は、顔色ひとつ変えずに答える。

「わかっている。どうせ水中戦になるんでしょう？」

その表情は、まるでイタチを思い出すほど静かで冷たかった。

(アナタにとっては皮肉なのでしょうがね)

鬼鮫は嘲笑しながら水面下に潜る。

少女に言ったとおり、地の利はあった。相当の手練でなければ、水中ではまともにやり合えるわけがないと思っていた。

しかし少女は躊躇わずに目の前に現れた。

呼吸を保ち、身体を濡らさないよう、身体の周囲に結界をはっている。

「なるほど……」

その青白い光に、鬼鮫は呟いた。

「アナタが、何なのか、少しわかってきた気がしますよ……」

そして両手を握って力を込める。

「水遁！・大鮫弾の術!!」

かなりの大技だった。

小さい山ならそのまま飲み込んでしまうほどの巨大な鮫を作り上げ、水圧とともに少女に襲いかかった。

「水遁！・ワタツミ……!!」

それに対して少女が放ったのは、風遁ではなく水遁だった。

「……水の性質変化も持っているとは……!!」

彼女の術が生んだのは、鮫に対抗する巨大な水龍だった。両者は互いの歯を剥き出しにして真っ向からぶつかり合う。

「これほどとは……さすがイタチさんの……!!」

正直、想像をはるかに超える力だった。

しかし、水遁の使い方、戦い方、場数、そしてチャクラ量……その全てで自分が勝っているのは確実だった。

水龍はほどなくして大鮫に押され始める。

「術もろとも、アナタを喰って差し上げますよ」

龍の牙が折れ、少女の周りの結界が歪んだ。

が、それで終わりではなかった。

「火遁、天狼（テンロウ）……!!」

龍が蒼い炎を吐き出した。

炎は水の中にあっても激しく燃え盛り、大鯨を徐々に煮えたぎらせる。

「なんと……火遁まで……?!」

風、水、そして火……。

表の世界でも裏世界でも無名のくノ一が3つの性質変化を得ていることは、さすがに衝撃だった。

3つ以上の性質変化を使いこなすのは上忍クラスと、どこの里でも相場が決まっている。

「これほどとはっ……さすがですよ、イタチさん……!!」

大鯨の勢力は徐々に押し返された。初めて、命の危機を肌で感じた。

「ですが……」

だが、それでも鬼鯨には勝機があった。

なぜなら、この「大鯨弾の術」は、ただ相手を攻撃するのではなく、術そのものが相手のチャクラを吸収するのである。

つまり、対峙している相手のチャクラが強ければ強いほど、術の威力が増していくのだった。

鯨は龍の喉元に噛みついて、チャクラを吸い始めた。

「形がなくなるまで喰らい尽くしてあげましょう……!!」

水流の向こうに見え隠れする少女の姿は、千切れて漂う海藻のようになっぽけだった。

それを見て、鬼鯨は勝利を確信する。

「すぐにイタチさんのところへ送ってあげますよっ……!!」  
が、

「どういうことですか……?!」

少女のチャクラを吸収しているはずなのに、大鯨弾がちつとも大き



くなっていない。

一体なぜ……？

「これはチャクラの気弾ではないのか?!」

そう気づいた瞬間、

「陰陽忍術……」

なぜかすぐ耳元で、少女の囁き声があった。

「七曜……破軍星（はぐんせい）……!!」

背筋が凍る感覚がして、反射的に少女の方を見る。

「そ、その眼……!!?」

彼女の眼に、一瞬ひるんだ。

その刹那、まさに星の煌きがしたかと思うと、少女のか細い腕から眩い光が放たれ、龍もろとも大鮫を貫いた。

その光は、鬼鮫までも飲み込んだ。激しい痛みというよりは、全ての力、呼吸、思考までもが奪い取られるような感覚だった。

遠のく意識の中、鬼鮫は“少女の存在”をはっきりと確信していた。

（流石ハ……ウチハ……イタチ……ノ……）

そして、イタチの“何”であるのかも……。

## 共食い

森の向こうで爆音がした。

木々の上空には蒼い煙が立ち上り、巨大な雲をつくった。

衝撃は、彼らの所まで走っていた。

「うっ、うわぁっ!!!?」

瞬身の術を使った影響で足をひねっていたナルトは、バランスを保てず尻もちをついた。

「なんだ?! 今の光は……!」

ヤマトでさえも、飛んで来る枝や石の勢いに押されて立ち止まり、たまらず顔を覆った。

「ナナだ……!!!」

立ち上がりながら、ナルトが言った。

「あの光はナナの光だってばよ!!」

確信を持ってそう言い切った。

その時、堪えきれずに根元から倒れた大木の向こうに、ガイの姿が見えた。

「ガイさんっ?!? ナナは?!?」

ヤマトはすぐに声を掛ける。

いの一番に鬼鮫とナナを追ったはずのガイが、未だ戦闘に加わらず、ここに居ることが不自然だった。

ガイは木片を避けながら振り返った。そして、黙って前方に手をかざした。

「なんなんだってばよ?!」

ナルトたちが見守る中、ガイの手はバチツと音を立てて「見えない壁」に弾かれる。

「こ、これは……」

「結界だ♪!」

ビーが言った。

「和泉の姫の結界だ♪!!」

やがて……空に浮かんだ雲が霧になって消えた時、彼らはようやくその先に進むことを許された。

術が解けた……つまり、術者が破れた……。

誰もがその方程式を知っていたから、必死で爆発の中心へ向かった。

森を抜け、水辺に出た彼らは、一様に足を止める。

水面に静かに佇んでいたのはナナだった。その足もとには、鬼鮫の巨体がぷかりぷかりと浮かんでいる。

水面はまだ激しく波打っていたが、二人の周りだけは不思議としんと静まり返っていた。

ナナは片手に巻物を持って、ちゃんと立っていた。

辺り一面を揺るがすほどの衝撃を放つ戦いをしておきながら、ナナの顔には擦り傷ひとつなかった。それどころか、身体は少しも濡れていない。

「ナナ……!!」

ガイは水上を駆け、ナナの元へ向かった。

声をかけても、ナナは静かに鬼鮫を見下ろしたままにいる。

同じように彼も鬼鮫を見下ろすと、鬼鮫は白目を剥き完全に意識を失っていた。

「殺してはいません」

ナナが淡々とそう言った。

「でも少しやりすぎちゃって……これじゃ尋問に答えられないですね……」

言いながら差し出された巻物を受け取って、ガイは言った。

「問題ない。アオバは脳内の記憶を読み取る能力を持っている」

と、ナナは初めてガイを見上げ、薄く笑った。

「……よかった」

眼の奥が妖しく光ったように思えた。

が、ガイは不審な顔を引っ込めて、ナナの肩に手を置く。

「よくやったな、ナナ!!」

その身体は恐ろしく冷たい。

動揺を引つ込めて、ガイが鬼鮫を担いで陸地に上がると、

「ナナ！ お前、コイツをひとりでやつつけたのか?!」

ナルトがナナのもとへ駆けて来た。

「ナルト……」

ナナは息を吐いて、ナルトにもたれかかった。

「ナナ！ 怪我してんのか?!」

慌てて確かめるナルトに、ナナは首を振った。

「少し疲れただけ……」

木遁で鬼鮫を拘束したヤマトも、ナナの様子をうかがう。

「ナナ、大丈夫かい？ だいぶ無理したんだろう……？」

ナナはゆつくりと彼を見上げた。

「鬼鮫を外に出さないためだったとしても、援護を待たずにひとりで決着をつけるなんて無茶だったんじゃない……」

誰もが同じ事を思い、ナナの言葉を待つ。

「でも、ちゃんと勝ったでしょう？」

ナナは少し笑った。

「慣れない術の使い方をしたから、ちょっとバテちゃったけど……」

そして肩をすくめ、ナルトを見つめた。

「ね、ナルト。私、ちゃんとお仕事したでしょう？」

「ああ、さすがナナだってばよ！」

納得のいかない表情をしたままの大人たちを横目に、ナルトは大きな声で言った。

「ナナってば、いつも知らねえ間に強くなってるだもん！」

最もナナを気遣うはずのナルトがそう言ったことで、ヤマトらもそれ以上何も言えなかった。

おそらく、ナルトも彼らと同じ言葉をナナにぶつきたいのだろう。

何故ひとりで危険を犯したのか……。

そう追及したいに決まっている。

が、ナルトは何も言わなかった。だから、ヤマトたちもあえて口をつぐんだ。

やるべきことはまだある。

ナナが全力を出し切って倒した鬼鮫から、情報を搾取しなければならなかった。

「では始めます……！」

ここで進み出たのは山城アオバである。

彼の能力は、敵の脳内に入りこみ思考を読み取ることだった。

「イノイチさんほどではありませんが、必ず情報を抜きとってみせます！」

鬼鮫の思考を覗くことができれば、暁の作戦や情報を知ることができるとは思っていた。

誰もが期待を込めてアオバを見つめる中、彼は片手を鬼鮫の額に、もう一方を己の額に置いて術を発動させる。

しばし沈黙が流れた。

普段からおとなしいとはいえないナルトとビーも、黙ってアオバの背を見つめていた。

が、思わぬ結末が訪れる。

意識を失い、ヤマトの木遁で身動きを失っていたはずの鬼鮫が、突如目を開いたのだ。

それは己の舌を噛み切るといって、最後の手段だった。

「こいつっ、情報を取らせまいと自力で舌をつっ！」

鬼鮫は血を吐き出しながら笑い、雄たけびとともに身体を抑えていた木を破壊した。

「ウオオオオ!!!」

ただの木ではない。これはヤマトの術であり、鬼鮫のチャクラを完全に抑え込んでいるはずだった。

が、鬼鮫はそれすら撥ね退けて、勢いのままに破片をまき散らす。その風圧が、アオバはもちろん見守っていた全員に襲い掛かった。

当然、消耗の激しいナナの身体が吹っ飛んだ。

「ナナっ!!」

受け身をとる力すら残っていそうにないナナを、ヤマトがかるうじて抱き留めた。

「往生際の悪いやつめ!!」

ガイが向かって行った。

だが、一瞬早く鬼鯨が術を繰り出す。彼が得意とする『水牢の術』だった。

水の牢はガイではなく、鬼鯨自身を護るように囲った。さらに鬼鯨は、口寄せで牢内に数匹の鯨を呼び出す。

彼の巨体を上回る大きさの鯨だった。

「いくら暁の忍でも、この状況では何もできない!」

ヤマトが言ったとおり、自身が生んだ水の中で鬼鯨はゴホゴホとせき込んでいた。

「ボクが捕らえます……!!!」

ヤマトが再び木遁を発動させた。

その時、傍らでナナが叫んだ。

「待って……!!!」

ヤマトに……ではなく、『鬼鯨に』だった。

「待って! まだっ……!!!」

ナナの悲痛が再び悲痛に叫んだ瞬間、彼らは信じられない光景を目にした。

水中の鯨が、術師である鬼鯨に喰らいついたのである。

「じつ、自分に……?!」

ガイさえもその場に突っ立ったままそれを見届けていた。

鬼鯨の肉体が鯨の牙に食いちぎられる音。骨が噛み砕かれる音。

そして、水に滲む血潮……。

やがて鬼鯨が死すと、水牢は解けて赤く濁った水たまりになった。

鯨たちも、ボンッと音を立てて消えた。

「自分の口寄せした鯨に己の身を食わせるとは……」

ガイが低く呟いた。

これが、『霧隠れの怪人』と恐れられた男の最期だった。

ヤマトは傍らで膝をつくナナを見下ろした。

さつき言いかけたのは、どういう意味だったのか……。

『待って! まだっ……!!!』

ただ単に暁の情報を聞き出せていないから……というのには、今の苦悩の表情と釣り合わない気がしていた。

「ナナ、大丈夫かい？」

あえて何も言わずにそう尋ねる。

と、ナナは絶望したように、深いため息をついた。

わがまま

「新たな情報は取り損ねたが……ナナがコレを取り返してくれたおかげで、こちらの情報が暁に漏れないですんだ」

ガイが巻物を手にして言った。

「その情報を確認しておこう。奴らの知りたかった内容がわかれば対処もしやすい」

モトイの言葉で、皆、ガイを取り囲む。

ガイはゆつくりと巻物を解いた。

その瞬間、巻物から大量の水が飛沫を上げた。

「重い水！ 『水牢の術』か?!」

それはキサメが巻物に仕掛けておいたトラップだった。

水が彼らに絡みつくように吹き出して、そのままひとりずつ牢の中に捕らわれていく。

「くそっ、ナナ!!」

ヤマトはとっさにナナを引っ張り寄せた。今のナナには、自力で牢を破る力などとても無い。

さらに、牢の中には鯨が現れた。

「うわあっ鯨がア!! く、食われる!!」

狭い水中でも、自由に動けるのは鯨の方だった。彼らは水圧のせいで、まともに動くことができない。

その上、一匹の鯨が巻物を加えると、もがく彼らを尻目に泳ぎ出す。

「しまった! 海の方へ……!!」

あつという間に、その背びれは波の狭間に消え去った。

術を破り、ビーが巻物を奪った鯨を追いかけたが、その頃にはすでにどの方向へ泳ぎ去ったのかも分からなくなっていた。

モトイはすぐに知らせを放った。

今回の情報漏れの件で、この場所が暁に知られるのは間違いなかった。

ビーとナルトの移送が必然とされたが、この場所は単なる島ではな



かった。

島と思われたその地は、巨大亀の背であった。

モトイは、船での移動より島ごと移動するほうが得策ととった。

向かう先は雲隠れの里、本土。

最重要任務は、ナルトとビーに「監禁」の事実を悟られないことだった。

事実を知ったナルトがどういう行動に出るのか……。

その危険を、ヤマトは一番よく知っていた。

ナルトの行動力と「力」なら、この大戦をぐちやぐちやしかなない。

彼には「この島の生態調査」と説明している。それを最後まで信じさせなければならなかった。

「フーツ……実戦より難易度が高いな……」

ヤマトは心からのため息をついた。

そしてもうひとつ、不安なことがある。

「ナナ、身体は大丈夫かい？」

ナルトが傍にいないことを確認すると、ヤマトは木によりかかって休むナナの様子を確かめた。

先ほど、ナナの身体に触れた時にわかった。

自力で立つのも困難なほど、筋に力が入っていない。それどころか、体温が恐ろしく低かった。

「慣れないことをしたから、ちよつとダルい……」

先ほど見せた絶望の表情を完全に隠し、ナナは幼い笑みを返した。

「慣れないことって、一体どんな術を使ったんだい？」

おそらく、ナナの「血」にしかできないことなのだろうが、ヤマトはあえてそう聞いた。

「君の身にかすり傷ひとつないまま、あの忍を倒すなんて……よほど圧倒しないと不可能だよね？」

ナナはわずかに首を傾げ、一本ずつ指を折った。

「陰陽術の結界術と風遁と水遁と火遁の忍術と……あと攻撃系の陰陽忍術」

そんな大それたことを言いながら。

「……ナナ……君は……」

ヤマトは思わず言葉を失った。

ナナの「血」のことは知っている。

彼女がどこから何のために木ノ葉に来て、どんな力を持っているのか……。

重要機密ではあったが、彼は立場上、火影やカカシから正式な情報を得ていた。

だが、改めて本人の口から聞かされるのは想定外だった。

「知ってるでしょう？ヤマト隊長。私が「すべての」性質変化を持つてること」

「あ、ああ……聞いてはいたが」

「一応、前から風遁以外も練習してたんだけど……実践で使ったのは初めてだったし、いきなりあんな大きな術を連発するとは思ってなかったから、チャクラの使い方がめっちゃくちゃになっちゃった」

ナナは「ナルトのように常識ハズレなチャクラ量がないから」と笑ってみせる。

「雲隠れの医療班が帯同しているから、一応診てもらおう」

そして念のためそう言うと、笑いながら首を振った。

「私が「何者」かバレちゃいますよ？ それって木ノ葉の最重要機密でしょう？ ビーさんには初めからバレちゃってますけど」

「それはそうだけど……」

「大丈夫。たぶん、点穴を無理につかったから、ちゃんと働いてないだけだと思いますから」

ヤマトはナナの手をとり、無遠慮に腕をまくった。

白い皮膚の下が小刻みに震えている。

「それより、私がバテたせいで、この島に張った結界まで破られちゃって……」

それを見たヤマトの感情などおかまいなしに、ナナは目を伏せた。

「張り直すにはもう少し回復しないと……」

ヤマトはナナの袖を戻した。

「いいよ、ナナは。休んでいて」

「でも……」

「ナナ」

そしてナナの言葉を遮った。

「もう一度聞くけど……鬼鮫と戦うのに、わざわざ結界を張って一になる必要はなかったんじゃないかい？」

「あのヒトを逃がさないためだったとしても？」

「ちやかすようにそう聞き返すナナは、ヤマトが何を言いたいのかとつくに気づいている。」

そう確信しながらも、ヤマトは言った。

「無茶な戦いをして、命を無駄にするな……!」

ナナは少し黙ったまま、ヤマトの瞳を見つめていた。

そして、

「違うんです」

全てを諦めた表情をして、

「あのヒトに……どうしても聞きたいことがあったから」

そう答えた。

「聞きたいこと？ 暁の情報のことだろう……？」

ヤマトは悪い予感を抑えきれずに、続きを待つ。

それほど待たせず、ナナは呟いた。

「イタチのこと……聞きたかったの」

その顔は、この世の全ての苦悩を知ったような憂いを浮かべていた。

「だから、結界の中で独りで戦ったのは私のわがまま……」

ひとりごちのような呟きは風に消えた。

「そうか」

これ以上間を与えたら、その口からは言わなくても良い謝罪が零れる……。

そう思ったヤマトは、ポンと肩に手を置いた。

「わかった。オレはそれを責めないよ」

忍の世界では「甘い」ととられるかもしれないが、ヤマトは本心を告げた。

マダラから聞かされた「真実」が本当に「真実」なら……、ナナの傷は消せない。今のナナを、誰が責められよう……。

「ヤマト隊長……」

ナナはしばし彼の目を探るように見つめていた。そしてクスリと笑った。

「なに？」

「カカシ先生にそっくり……!」

その笑みは正真正銘、普通の少女が浮かべる笑みだった。

「何がだい？」

ヤマトは少し安堵して、言葉を返す。

前髪を払いながら、ナナは言った。

「私のことを甘やかすところ……!」

瞬時に、ナナを見守るカカシの視線を思い出した。

急に老けこんだようなその雰囲気は、部下を案じる上司というより、歳の離れた妹を案じる兄だった。

「そうかな」

ヤマトも笑った。

あんなふうには、自分もナナを案じているのだろうか……。

心で問いかけながらも、答えはすでに決まっていた。

「ダメですよ。私なんかを甘やかしちゃ……」

子供のような大人のような眼。そこに明るい光は無かった。

一瞬、言葉に詰まった。

「いいんだよ」

だが、やはり答えは決まっていた。

「君はもっとボクらに頼っていいんだ……」

今度はナナが沈黙した。

そして、

「じゃあ……」

と言って、両手を伸ばす。

「移動先までおんぶしてください！」

見慣れぬ姿のはずなのに、ヤマトは何故か安心感を覚えた。

「ハイハイ……」

呆れたように言って、ナナを背負う。

体重は素直に預けられた。

が、服を通して感じるナナの体温はやはり、まだ生きた人のものとは思えぬくらい冷たかった。

### 第3章 開戦編

#### 開戦

「わーわー！ ちょっと、ナナ！ ナナ!!」

まじめに島の生態調査を行っていたナルトは、突然の大地震発生に慌ててナナのところへ飛んで行く。

休んでいたナナを抱きかかえた瞬間、なんと島の天地がひっくり返った。

ナナをかばいながらも動物たちと共に地面に倒れたナルトは、外を見に行くとは騒ぎたてる。

が、ヤマトとアオバがうまくなだめ、ナルトは生態調査の任務を続行することとなった。

ナナはまだ疲れた顔をしていたが、鋭い目でヤマトと視線を合わせた。

ヤマトは秘かにうなずいて、ナルトに気づかれないようその場を去った。

しばらくして、再び天地がひっくり返った後、アオバはモトイとともにナルトたちの元へ戻った。

ナルトが再び外へ出ると騒ぎ立てるのを、ビーがどうにか別の目的を与えて抑え込んだ時、

「ヤマト隊長は……?」

ナナがそつとアオバに尋ねた。

ナルトの隣では平然としていたが、今は素直に不安を表に出している。

「今、増援隊として来られた土影様と打ち合わせをしている……」

不安げな影を消さぬまま、ナナはとりあえず息をついた。

「暁の襲撃……ですか?」

「ああ、とりあえず追い払ったよ」

ナナは一度、ナルトの方へ視線を送った。ビーと修行するナルトが、こちらを気にする気配はない。

「ここは見つかっちゃったんですよね？ どうするんですか？」

「土影様の術で、今、この島は雲隠れに向かって移動中だ」

「今、移動してるんですか？」

「ああ、空を飛んでいる」

「空を……」

島自体を空に『浮かす』という術がどんなものか考えることで、ナナの気は少しまぎれたようだった。

「開戦は近い。雲隠れに到着後、オレたちも本体の方に合流する」

「わかりました」

ナナは急に感情を押し込めて、こくりとうなづく。

アオバの言った「オレたち」に、自分が含まれていないことをナナは知っていた。

「この調子なら、ナルトは修行に夢中で気づかなそうですね」

ナナは九尾チャクラの修行を始めたナルトを向いてそう言う。

「だいたい……」

「あとは、ガイ先生が回復しないと……船酔いも治ってないのに、鮫をやっつけるために八門遁甲なんて使ったから、だいぶへばっちゃってますね」

「雲隠れで医療班に診てもらおうよ」

「そうですね。本隊にはサクラちゃんたちもいるし」

さらに仲間の姿を思い出したのか、ようやくナナは少し笑った。

それを見て、アオバも安堵する。

が、これ以上の情報をナナに伝えるわけにはいかなかった。

ナルトと違って、ナナは聞き分けがいいと思っている。

『ヤマトが攫われた』ことを除いて全て話して聞かせても、ナナは火影の命令を破らず、ナルトの側に居続けるだろう。

が、それだけじゃなかった。

「ナナも護りたい」という火影たちの気持ちを理解していたし、アオバ自身もそう思っていた。

火影のナナへの接し方、カカシの心配そうな目、ヤマトの気遣い……自分が尊敬する忍たちが、そろいもそろってナナに対しての情が深かった。

自身も、ペインの木の葉襲撃で、身を削って里の者たちを護ったナナの姿を目にしている。

ナルトだけじゃない。

ナナも護らねば……。

そう強く思っ、アオバは口をつぐんだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

また大きな地震が起きたとき、アオバはガイを連れて去った。

ナナは彼に伝えられていた情報から、島が雲隠れに着地（到着）したのだと知る。

何も知らないナルトは、九尾チャクラのコントロールの修行を続けていた。

「なあなあナナ、今のはおしかったよなー？」

ナルトに修行をつけるビーが、サングラス越しにこちらの表情を伺っているのがわかった。彼にも、モトイからこの情報がこっそり伝わっているはずだった。

「ほんと、おしかったね！」

「すぐクリアしてやるってばよー！」

「ナルト、今までの修行の中で、一番上達が早いんじゃない？」

ビーが課した「修業」とは、九尾のチャクラを具現化して“手”を造り、その“手”でもって瓦礫を積み上げるといふ単純なものだった。

だが、九尾の力を使いこなすこと自体が簡単にできるものでないことを、ナナはちゃんと知っていた。

「オレってば、とっとと強くなっちまわなきゃいけねーからなー！」

快活に笑ったナルトに、一片の曇りもなかった。

ナナもつられて笑う。



強さが、〃サスケと戦うため〃に必要なのだとしても、ナルトに迷いはなかった。

「ナルト、がんばって」

そのことへの礼も込め、ナナは改めて言った。

「おう、まかせろ！」

ナルトは拳を突き出し、

「ナナはちゃんと休んでろってばよ！」

叫ぶように言って、再び修行を開始した。

ナナは彼に答えるように、ひとつ深く呼吸をした。

『今までの修行の中で、一番上達が早いんじゃない？』

と言ったとおり、ナルトの九尾チャクラコントロール 〃第一段階〃

は意外にあつさりと終了した。

螺旋丸の修行の時は、自来也の元で修行するナルトを実際にその目で見ていた。

その後のカカシとヤマトによる風遁の修行は、見てはいないものの、だいたいの時間は知っていた。

だから、こんなにも早くビーの出した 〃課題〃 をクリアするのは、意外でもあり、頼もしくもあった。

「ナナ！ ナナ！ 次は 〃最終段階〃 だってばよ！」

ナルトが声を弾ませて駆け寄る。

ナナはその向こう側に立つビーをちらりと見やった。

「オレってば、はやくこの修行をやっつけて、強くなってみせるからな！」

目を輝かせるナルトの後ろで、ビーがニヤリと笑う。

「それじゃあ場所を移動するぞ♪」

「えーまた移動かあ……なんか面倒くせえってばよ」

ナルトは口を尖らせたが、すぐに「シカマルみたいなこと言っちゃまった」と笑ってナナの腕を引っ張った。

「行こうぜ！ナナ」

「うん」

文字通り、疲れが吹き飛ぶようなナルトの笑顔に、ナナも素直にう

なずいた。

ビーが案内したのは、八尾の石像が建つ部屋だった。最初に「九尾との対話」をした部屋と造りは似ていた。

その時と同じように、ナルトがスイッチを押すと、重い扉が自動的に開いた。

「ナルト」

が、ナナは開いた扉を見つめたまま、奥へは進まなかった。

「ん？ どうしたんだってばよ？」

ナルトもビーも、怪訝な顔で振り返る。

ナナは軽い口調で答えた。

「私、ここで待ってるね」

それを聞き、ナルトはすぐに駆け戻る。

「な、なんでだってばよ？」

「だって、修行の邪魔しちや悪いし」

「そんなことねえって！」

今までだってそんなことはなかった。ナナが見ていてくれて心強かった、と、ナルトは言う。

が、ナナは笑って首を振った。

「結構回復してきたし、私も自分の修行しようかなと思って」

そう言えば、ナルトが納得することを知っていた。

「でも、あんまし無理すんなってばよ」

「わかってる。ナルトもね」

ナナは腰の後ろで手を組んで首を少し傾けた。

「ビーさん、ナルトをよろしくお願いしますね」

ビーがラップで答えると、軽くツツコミを入れつつ、ナルトが去る。

「がんばってね」

扉が音を立てて閉まるまで見守って、ナナはふうつとため息をついた。

太い石柱を背にして、座り込む。

つい先ほどまでは、ナルトの修行を最後まで見守るつもりだった。

九尾への責任などではなく、そうすることが自然だったが、

「あの……感じ……」

ナナの「血」が、感じてしまった。

ここへの移動の際、久しぶりに流れ込んだ「外の風」を浴びた時、

「魂が……」

現世ここにあるはずのない「魂」が、いくつもいくつも……漂っていることを。

## 弱き意志

その場でナナは目を閉じた。  
自分の中の、「和泉の血」をたぎらす様に、  
霊力を高める。  
間違いなかった。

「この世」にあるはずのない、あつていいはずのない「死者の魂」  
が、捕らえきれぬほど漂っているのがわかる。

空気の「質」が変わったような感覚。まるで不純物が紛れ込んで  
いるかのごとき感覚。

和泉の里から木ノ葉へ来たばかりの時、これを感じては密かに鎮魂  
術を行っていた。

が、そんなものとは比べ物にならない規模に、ナナの肌は鳥肌をた  
てる。

「いったい……何が……」

ヨミガエリ……。

何故それが起きているのかわからなかった。

今、「敵」は暁。うちはマダラと名乗る男。そしてサスケ……。

その「敵」のうちの誰かが、こんな術を使ったのか……。

ナナはちらりと、ナルトが修行する部屋の扉を見やった。

死者を蘇らせる術として知っているのは、陰陽術の『泰山府君の術』

……それで姉の魂が戻った。

そして、砂のチヨバアが使った転生術、『己生転生』。あれは我愛羅  
を生き返らせた。

最後に触れたのは、長門の『外道輪廻転生の術』。それがなければ、

木ノ葉の皆や……カカシは生き返ることがなかった。

あとは、伝え聞いた『穢土転生』という忍術。これは大蛇丸が木ノ  
葉崩しの時に使ったという……。

「大蛇丸……！」

その名を思い出し、ナナは眉をひそめた。

サスケの身体を乗っ取って、呪わしい言葉を垂らした姿が、容易に

甦る。

「まさか、その術が……」

そして気づく。

大蛇丸は暁の一員だったという。ならば、あの術が暁に渡っていたとしてもおかしくはない。

もしくは……大蛇丸の手下だった、あのカブトという男が術を会得していたか……。

「……っ……！」

ナナは思わず立ち上がった。

いずれにせよ、こんな術が“忍の戦争”に使われているのを知って、平然としていられるわけがなかった。

人の世の理を犯す蘇生術は、遠い昔に和泉一族が生み出した。今、禁術として伝わるすべての蘇生術の由来は、和泉の陰陽術にある。

だからこそ、忍の戦争にこんな禁術が使われるのが許せなかった。

ただ“理”に背くから……そういうわけではない。それを憎んでいたら、我愛羅やカカシが蘇ったことを喜べるはずもなかった。

今、胸の奥から怒りが込み上げているのは、蘇った者と……彼らに再び出会ってしまった生ける者たちが、どれほど傷つくかわかるから。

「まさ……か……」

呟いて、ナナは拳は強く握った。

「イタチ……も……？」

誰もいないその場所に、ナナの呼吸音が震えた。

無理に心を静めようと、ナナは再び目をつむった。そのまま、死者たちの魂を探る。

もし、イタチが蘇ったのなら……想うことはただひとつ。

喉が締め付けられそうになり、思い切り唇を噛んだ。

冷静に……力を……。

深呼吸して島の外に意識を這わす。

が、やはり数が多すぎるのと、場所が遠いので、「魂」の特定は困難だった。まして、その術者の位置も。

「どうしよう……ナルト……」

ナナは無意識に、本当に意識せずにそう呟いた。その目も、また扉を捕らえていた。

“その時”までナルトと共にいる。“その時”は、ナルトとサスケの闘いの時。

それが、イタチを失い、サスケと道を別ったナナの、最後に残された意思だった。

もう、それ以外はなかった。それしかなかったからこそ、あれほど冷静に、淡々と、ペインから木ノ葉を護るために戦えた。

そんな心に気づいても、カカシは何も言わなかった。シカマルは認めてくれた。

だから、それだけのはずだった。

だが、今思うのは、新たに生まれた「意志」は……。  
もう、イタチに傷ついて欲しくない。

誰だか知らないが、あれほど残酷な運命を遂げたイタチを、これ以上操ろうとしているならこの手で止めたかった。

たとえ術で蘇ったイタチに意識はなくとも、誰よりも強く平和を願ったイタチを、こんな戦争で戦わせたくなかった。全てひとりで抱え込んで逝ったのだから、静かに眠らせてあげたかった。

それにもし……サスケがイタチと再会したら……。

悲しいことに、ナナの中に良い想像は少しも生まれなかった。

どちらも、もう悲劇は終わったはずなのに、不要な傷を負うに決まっている。

だから……。

「ねえ、ホクト」

ナナは助けを求めるように、その名を呼んだ。

音もなく、気配もなく、空気すら揺らさず、ホクトは暗がりから現れた。

「私って……」

瑠璃紺の目を見つめ、ため息のように言った。

「つくづく意志が弱いよね」

自嘲の言葉に、ホクトは何の反応も返さなかった。

「本当にもう、ナルトの側で『待つ』だけって……、ただ『待つ』だけだって、そう決めてたはずなのに」

かわりにナナがしゃがみ込み、ホクトに視線の高さを合わせる。

「それしか……残ってないはずだったのに……」

くすりと笑うと、ホクトは初めて三股の尾を床に打ち付けた。

音はなかった。白銀の尾が、羽のように揺らいただけだった。

「また、やらなくちゃって思うことができたみたい……」

噛みしめるように言った言葉を聞き終え、ホクトは二度、瞬きをした。

瑠璃色の瞳が美しく光ったとき、そこには『二人のナナ』がいた。

「あの時と一緒に……」

「イタチと、サスケを探したとき……」

同じ顔で、同じ声。表情も全く同じ、少し困った笑み。ただ違うのは、身に着けているもの。

「ナルトの側で、『その時』を待つ……」

「この世に蘇った死者を『送る』」

忍装束のナナと、白袴のナナが交互に呟く。

「イタチは……この手で送る……」

「うん。必ず……」

二人のナナは、同じ願いを瞳に浮かべた。

## 連合本部騒乱

第四次忍界大戦開戦……。

忍連合の各部隊はすでに『うちはマダラ』を名乗る者が仕向けた“敵”と交戦している。

雷の国、雲隠の里。そこに設置された忍連合軍本部は、戦場と同様に慌ただしかった。

その紛乱のさ中、忙しく立ち回っていた誰もが思わず足を止める事態が起こる。

「なに!? いずみナナがここへ?!」

雷影がそう叫び、火影が反射的に立ち上がった。

報告にあがった中忍の男は、自分の言葉に何か不都合があったのかと、顔を引きつらせる。

「ナナが来ているのか?」

睨むような視線を送る火影に対し、男は額に汗を浮かべて答えた。

「あ、はい! お二人に面会の許可を求めています……」

火影と雷影は思わず顔を見合わせた。そんな仲ではなかったが、状況的にそうなった。

が、困惑して黙り込んだ彼らをよそに、廊下が騒がしくなり、やがてその喧騒がこの部屋にまで入り込む。

「お前っ……!」

「な、何者だっ?!」

止めようとする警備の忍たちを振り切って、風の速さで駆け込み、あつというまに火影の目の前で膝をついたのは、そのいずみナナだった。

「ナナ……、どうしてここに……」

ナナは片膝をついたまま、まっすぐに火影を見上げ、混乱を起こしたことを謝罪した。

火影は視線だけで、追ってきた警護の忍たちを下がらせる。

そして、



「ナナ、どうしてここに来た？」

動揺を押し込めて、改めて当然の問いを投げかける。

彼女がナナに与えた任務は、「ナルトとビーの側にいること」である。二人を「護れ」とも「見張れ」とも言っただけだが、確かに二人の側にいるように命じたはずだった。

が、

「大丈夫です」

ナナは切羽詰まった感情を押し殺すようにして言った。

「もう一人の私」が、ちゃんと二人の側にいます」

誤魔化すような、曖昧な視線ではなかった。

だからこそ、雷影も口を挟まず聞いている。

「分身のようなものか？」

「そんなところですよ」

が、敢えてナナは言った。

「私にしか使えない技……です」

そしてかすかに口の端を上げてみせる。

「命令違反は犯していません。ただ、お願いがあつて参りました」

目には、強い意志を浮かべていた。

「お願いだど？ 一体、なんだというのだ?!」

やつと雷影が口を開く。

彼の大きな声は部屋中に響いたが

「雷影様、火影様」

空気を切るように、さつと頭を垂れたナナの仕草がそれをピタリ止めた。

いつしか、部屋中の誰もがナナと火影、雷影を見守っていた。

全ての視線を集めて、ナナは願いたいという名の決意を口にする。

「私に、参戦の許可をください……!」

「懇願」というには細い声。「必死」というにはゆっくりとした声。

が、うやうやしく頭を垂れる小柄な体からは、雷影、火影をも黙らせる迫力がにじみ出ていた。

「参戦だと……?」

「お前がか？」

少しの沈黙を破り、火影と雷影が真意を問う。

ナナはグイッと顎を上げ、なかば睨むように二人を見上げた。

そして、

「死者の魂が……この戦争に使われているではありませんか？」

まるで咎めるように言った。

「な、何故それを……」

雷影はそう言いかけて、言葉を飲み込んだ。

二人の「影」を前にして堂々と己の意志を突き付けるこの若い忍が、「何」であるかは火影から明かされていた。

彼は火影を見やった。彼女は険しい顔でナナを見下ろしていたが、その目に迷いが生じているのはわかった。

そして、それを受け止めるナナの、気品すら漂う顔に視線を移した。まるで、二人の「影」を脅迫しかねない威迫……。

『地上の神』と謳われた伝説の一族の末裔と信じるに相応しい姿と思った。

「穢土転生」で、次々と死んだはずの強者たちが蘇り、戦場に投入されている」

火影は最新の情報をナナに告げた。

総大将である雷影は、その許可を問われなかったことに意を唱えなかつた。

「誰が、それを……？」

ナナの目に暗い影が宿つたのを、二人とも見た。

「薬師カブトだ」

その名に、影はどす黒く、くすぶるように揺らめいた。

「カブトが暁と……うちはマダラと手を組んだということですか？」  
「そうだ」

ナナは全てを飲み込んだように、床に視線を落とした。  
そして再び願い出る。

「行かせてください、お願いします」

今度の声は、憎悪すら滲むような低い声。

「だが……」

「死者の魂を鎮めるのには慣れています」

そして、わずかな自嘲を含む声。

「私の専門ですから」

火影は迷いを濃くして黙った。

「封印班よりも、効率よく働けると思っています」

雷影も決断に戸惑った。

そこへ、冷静な声がナナにかけられた。

「『穢土転生』で蘇ったのは、当然のことながら名のある手練ばかりだ。封印班は主に数人がかりで一人を封印するのがやっとなのだが、お前はそれ以上の術が使えるのか？」

今まで火影の後ろでじっと状況を見守っていた奈良シカクだった。

ナナはそちらを向くと、先ほどの影をひっこめた。

「たとえば相手が上忍クラスの忍だった者としても……血系限界でなければいっぺんに5、6人は『送れ』ます」

ナナが「封印」ではなく、「送る」と言ったことで、その場の空気が変わった。

「お願いします。行かせてください！」

それを感じてか、ナナはすかさず再度頭を下げた。

「こんなことつ、一刻も早く止めさせたいんです……!!」

願いは悲痛な叫びに変っていた。

火影も雷影も、そしてシカクも、死した『仲間』と向き合うことがどれだけ残酷なことかわかっていた。

愛した『仲間』が、カブトの手で永久の眠りから無理やり呼び戻され、戦わされ、傷つけさせられ、傷つけられている……。そう思うと、悲哀をしみ込ませた怒りが沸く。

「早く終わらせなくちゃ、みんなが……負わなくていい傷を負う……！」

ナナは肩を震わせた。

この、まだ若い忍は……彼らが抑えようとしていた感情を全身で表している。

「ナナ……」

火影はシカクと顔を見合わせた。シカクの眉間には覚悟の皺が寄っていた。

次いで、火影は雷影を見た。

判断は、総大将の雷影に委ねられた。

「お願いします！」

睨むような視線が、再び雷影に突き刺さった。

「わかった」

火影もシカクも、心の奥底では『不許可』を望んでいたに違いない。それに気づきつつも、雷影は言った。

「木ノ葉隠れ、いずみナナの参戦と単独行動を許可しよう」

強い視線は変えず、ナナは口元に笑みを浮かべた。

「ありがとうございます！」

火影は何も言わなかった。

代わりにシカクが、ナナを大机に呼び寄せる。

「ナナ、戦況を説明する。各隊の現在の配置だけでも頭に入れて行け」

「ハイ」

平然とした態度……いや、冷たい視線を取り戻し、ナナは彼に駆け寄った。

「……というわけだ。が、戦場は生き物だ。刻一刻と状況は変わる。

その都度、対応しなきゃならないぞ」

「ハイ」

「総大将も単独行動を許可してください。お前にしかない能力もあるだろうから、自分の判断で行動しろ」

「ハイ」

真剣な顔で地図を見下ろすナナに、シカクが父親のような視線を送ると、

「ナナ、必ず一時間ごとに定時連絡をよこせ。戦場を移動する場合もだ。できるな？」

「ハイ、式神を飛ばします」

「単独行動といっても、忍連合の一員なんだ。ひとりで全部やろうとするんじゃないぞ」

「ハイ、わかってます、火影様」

火影も姉のように言う。

「〃私〃も、もう一人の〃私〃も大丈夫です」

ナナは二人に向かって安心させるようにニコリと笑った。

「んじゃ、行って来い」

最後に、シカクがポンとナナの頭をなでた。

ナナはもう一度シカクを見て、火影を見て、そして雷影を見てから、来た時よりも速くその場を去って行った。

## 参戦

歪んだ風を感じながら、ナナは森を駆けていた。

目指すのは、シカクに教えられた『ダルイ第1部隊』の戦場である。そこが最も「空間のねじれ」を感じる地域だった。つまり、「死者の魂」が最も集まっている場所である。

蘇った者のそれだけならまだよかった。その中には、確かに「今」、魂となったものもある。

遠い黄泉から返った魂、そして肉体から離れたばかりの魂。目指す戦場は、それらで渾然としている。

その中に、ナナは「イタチの魂」を探した。

多数の魂の中から特定の魂を感じ取るなど、集中しなければ難しいことだった。

が、ナナには自信があった。

それは、自分の中を流れる色濃い和泉の血のためでなく、深すぎるイタチへの想いのためだった。

イタチがこの先の戦場にいるとは限らない。蘇っているとは限らない。

が、胸騒ぎは抑えきれなかった。

悪い予感、いつも当ってしまっていたから。

「イタチ……イタチ……いるの？」

念じるわけではなく、声に出して呼んでいた。

焦り、不安、そして願い。乱れる心を落ち着けて、ナナはイタチを探した。

殺気、轟音、怒声、地鳴、死臭……そして死者の魂。

イタチの応えがないまま、戦場といわれる場所にナナは辿り着いた。

神経を集中させてイタチの魂を探す。

が、感じ取れない。わかるのは、チャクラの強い者たちの魂が多数

動き回っていることだった。

今はもう、迷いはなかった。

ナナは一番近くの魂が集まる場所へ急ぐ。

十数名の忍たちが、「死者」や「白いモノ」との戦いを繰り広げていた。

双方に知っている顔はない。「白いモノ」にも特に興味はなかった。

ナナは一気に彼らの中央に躍り出ると、短く印を結んだ。

ナナの出現に気づいた者は、敵と対峙しながらもその整然とした姿を目にする。

敵の何体かが、絶好の獲物とばかりに飛びかかった。

「2……3……4人……」

数と位置を確かめると、ナナは口内で呪文を呟く。九尾の封印術などとは比べ物にならないくらい、た易い術だった。

飛び付こうとした「死者」の足が、ピタリと止まる。忍に襲いかかっていた「死者」もまた、動きを止めた。

ナナの足もとから、地面に青白く光る五芒星が浮かび上がる。

半径50メートルほどのそれに、「死者」は全て収まっていた。

そして、

「さよなら」

ナナが短く別れの言葉を捧げた途端、「死者」は新たな肉体からその魂を引き剥がされ、あるべき場所へと帰って逝った。

「な、なんだ？」

「ふ、封印術か……？」

戦っていた忍たちは、突然、肉塊と化した敵を見下ろし、しばし啞然とする。

「お前は……木ノ葉の忍か？」

ナナの額当てに気づき、誰かがそう言った。

彼らがナナの存在に興味を持ちかけた時。

「こ、これは！ ゆ、遊叉（ゆさ）じゃないか!!」

誰かが悲鳴のような声をあげた。





あるのは少しの焦燥感と、怒り……。それを噛みしめる三人の後ろに、突如として冷たい風が巻き起こった。

「みんな……ゴメン……」

戦場にはいるはずのないナナだった。

その声は、彼らよりも沈んでいた。

「ナナ?!」

振り返ったシカマルは息を呑んだ。

ナナの目は、ここに居る誰よりも苦悶の影を浮かべていたからだった。

「間に合わなくて、ゴメン」

ナナは千切れそうな声で言った。

「『こんな想い』をして欲しくないから、私はここに来たはずなのに……!」

周囲は激しい戦闘で騒然としていたが、彼らの周りだけはシンと静まり返っているようだった。

「ナナ、何でここに居るの?」

「ナルトと一緒にいたんじゃない?」

いのとチョウジが涙声のまま、まるでナナを慰めるように言う。

が、ナナの『望み』を知ってしまったシカマルは、困惑のあまり言葉を見つけれずじっとした。

「大丈夫」

ナナは少し笑った。

「本部の許可はもらって来たから」

いつもなら、いのとチョウジが顔を見合わせる場面だった。

が、チョウジは巨大化していたためそれは叶わず、かわりに二人はシカマルを見た。

「ナナ、お前……」

そのシカマルがナナの真意を問おうとした時、

「『穢土転生』で蘇った人たちは、私が送り返す」

ナナが先にそれを告げた。

「もうこれ以上、誰かがアタたちみたいな想いをしなくていいように……」

射抜くような鋭い視線には、久しく隠れていたナナの強い意志が確かにあった。

「この術は、絶対に許さない……。蘇った人たちを送って、術者を倒す……！」

崖の方から地鳴りがした。

巨大化したチョウザたちが、数人の“死者”と戦っている。

「チョウザさんが戦っている相手も、木ノ葉の忍……？」

ナナは3人から視線を外し、飛んで来る瓦礫に構わずそちらを見据えた。

いのとチョウジが、ナナからそちらへ注意を逸らす。

それと同時にそこに向かって歩みを進めたナナの背に、シカマルは初めて言葉を発した。

「ナナ、まさかアレを全部片付けるつもりなのか?！」

ナナはゆつくりと彼を振り返り、笑みを浮かべてうなずいた。

自信の笑みではない、儂い笑みに、シカマルは悪寒を覚える。

「お前、まさか!」

だが、ナナは彼の言葉をやんわりと遮った。

「大丈夫。命と引きかえになんてこと、しないから」

いのも不安げに歩み寄る。

「ほ、本当なの? ナナ……」

自らを犠牲にするようにして里を救ったナナの姿は、まだ記憶に新しかった。

「うん。私は、まだ死ねない」

静かに言って、ナナはまた彼らに背を向けた。

そこに向けて、

「なんでだ、ナナ!!」

シカマルは叫んだ。いや、咎めた。

彼の中に、サクラから伝え聞いた『サスケに会うまで、まだ死ねない』というナナの言葉が甦っていた。

そして、あの夜の星の瞬きも……。

「お前はもう……」

言い淀んで、それでもなりふり構わず想いをぶつける。

「『サスケの手で死ぬ』ことだけが、最後の望みじゃなかったのか?!」

湧き上がるのは、『心配』じゃなく『怒り』だった。

「え?」

「どういうこと?」

困惑するのとチヨウジをよそに、ナナは彼の怒りを受け止めるように静かに言った。

「『今の私』は、別にやらなくちゃいけないことがある……」

「別……に……?」

あれほど絶望したナナに残されたのは、「最後の望み」だけだった。それはあまりにも悲しすぎる、「サスケに殺されて逝く」こと。

シカマルが、そのためだけに『生きて』いいと言ったことで、ナナは楽になっただけじゃなかった。

その「最後の望み」すら覆すことが、まだナナにあったのか……。

シカマルにとって、決して嬉しいことではなかった。

ナナの中の奈落の深さを感じていたから、むしろそれは邪魔だと思った。誰よりナナの『望み』への『覚悟』を決めていたから、彼は怒った。

「さっき言った目的だけじゃないの」

が、

「戦争中にこんなこと言うのは、ただの我がままだと思うけど……」

ナナはそれを、この場でちゃんと口にした。

「イタチの魂がこの戦争に利用されているのなら、私がそれを送らなくちゃならない」

暗く沈むような声で。

「私はもうこれ以上、イタチに傷ついてほしくない」

だが……、きつぱりと。

「ありがとう、シカマル」

そして笑む。

「あの時、シカマルがあの言葉をくれなかったら、私はここにはいなかった」

いのとチョウジは押し黙った。

「ナルトの側でただ膝を抱えて……じつと、その時」を待つだけだったと思う」

シカマルもまた、抗えない何かに耐えながらナナの言葉を聞くしかなかった。

「こうやって、最後に戦う意志を持てたのは、シカマルのおかげだよ」  
地が割れ、石つぶてが降っても、その場はひやりとした静寂に包まれていた。

「だから、私は大丈夫」

ナナは再び歩き出す。

「この前」みたいに、情けない意志で戦うんじゃないから」  
いのは思わず、ナナの背に手を伸ばしかけた。

が、はっとして隣で深くうつむくシカマルを見た。

「じゃあ、行ってくるね」

「恨むぞっ!!」

去りかけたナナを、そのシカマルのどす黒い声が止めた。

「オレは恨むぞっ！ お前の運命さだめを……!!」

やりきれない苦悶が浮かび、ナナは振り返って彼を見た。

「シカマル……」

「お前は許されたはずだった！ 全てを諦めることを……。お前はそれほど深く傷つき、絶望したはずだ!!」

シカマルは喉が潰れるほどの勢いで叫ぶ。

「もう、戦えないはずだった……それなのにつ……!!」  
激怒だった。

言葉通り、シカマルは見えないナナの運命に、怒り狂っていた。  
「お前にまた、戦わなきゃならねえ理由ができるなんてっ……!!」

ナナの表情も変わった。

「お前はもう……」

二人の視線が合わさって、

「これ以上、傷つかなくていいはずだろ……!」

シカマルは掠れた声を絞り出す。

「シカマル……」

ナナはゆつくりと彼に近づいた。

いのちもチヨウジも、息を止めて二人を見守っていた。

「私は、姉に言われたとおり、もがいて、苦しんで、抗って……醜く生きる運命だったみたい」

ナナは笑っていた。

「だから、実際、すごく辛くて、情けない人生だけど……」

その腕は、静かにシカマルに伸び、

「優しいことや、あったかいこともあった……って、今、はっきり思える」

しっかりと、彼を抱きしめた。

「ナナ……!」

シカマルはナナを抱きすくめ、

「行くな……!」

ナナにしか聞こえない声で叫んだ。

ナナは彼の腕の中でそっと目を閉じて、

「ありがとう」

シカマルにしか届かない声で囁いた。

その声に、確かな意志が滲むのを、シカマルは絶望的な気持ちで聞いた。

「ナナ……!」

が、彼らがそれ以上の言葉を交わすことは許されなかった。  
海の方で爆音が起こった。

そこは、開戦時からダルイが金角・銀角兄弟と、死闘を繰り広げていた方角だった。

「危ない!!」

そこから飛んで来る砂の入り混じった岩を、チヨウジが止めていなければ、彼らは岩の下敷きになっていただろう。

「なんだ!?! あれはっ……!!」

その戦場にいた者たちが、全員、同じ方向を向いて動きを止める。彼らの眼に映ったのは、九尾の衣をまとって暴れる金角だった。

「なによ、アレ!!」

いのが悲鳴に近い声をあげた。

大気をも震わす強烈なチャクラが、そこから発散されている。

「アレじゃあ、完全に九尾じゃねえか……!!」

シカマルはまだナナの腕をつかんだまま、そう言った。

そして、はつとしてナナを見下ろす。ナナはじつと九尾化したモノを見つめていた。

その時、

『シカマル、チヨウジ、イノ、よく聞け!』

彼らの頭に、シカクの声が響く。

『猪鹿蝶の連係でお前たちが九尾を封印するんだ!』

シカクの作戦はこうだった。

まず、チヨウジが肉弾戦車で九尾に突っ込む。体勢が崩れたところを、シカマルが影真似の術で拘束する。その瞬間を狙っているのが心転身で九尾の精神に入り込み、あとは本部から転送される『琥珀の浄瓶』という宝具に封印する。

『“琥珀の浄瓶”は、持っている者の呼びかけに答えただけで封印される仕組みだ』

「じゃあ、私がアイツの中から返事をすればいいってことね?」

『そうだ。術を解除するタイミングに気をつけろよ』

「わかってるって」

彼らはすでに走り出していた。

そして、ナナも。

『ナナ、お前には三人の援護を頼みたい』

すでに援軍が駆けつけて来ているはずだが、三人の術をよく知っているナナに近くでサポートをして欲しいと、シカクは言った。

が、彼らが九尾化した金角とダルイが戦う場所を見下ろす位置で立ち止まった時、ナナは言った。

「その作戦、変えてください」

シカマル、いの、チョウジがナナを振り返る。

ナナはシカクが何か言う前に、宣言した。

「封印は私がやります。みんなにはそのサポートを」

「ナナ！」

いのがすぐさま反論しようとした。シカクも同様だった。

だが、

「九尾化したヤツの精神になんか入ったら、いのちゃん壊れちゃうよ」  
ナナはいのを向いて涼しげに笑う。

「だから、絶対にダメ！」

だが、言葉は強かった。

「でもナナ！ その『琥珀の』なんかかっていうのには、呼びかけに答えさせないと封印できないって……」

チョウジも不安げに言うが、ナナは落ち着いた口調でシカクに問う。

「その『琥珀の浄瓶』って、ただの宝具じゃないんですよね？」

『あ、ああ。八尾を封印してきた五つの宝具のうちのひとつだそうだった……』  
と言いながら、ナナは左の手袋を外した。

「強制的にそこに封印できます」

何のことはない、というように。

「でも、ナナ！」

「心配しないで、いのちゃんも、みんなも」

「ナナ……！」

「本物の九尾に比べたら、あのくらい何ともない」

「で、でもっ!」

不安げな仲間の前で、ナナはそつと手を胸に当てた。

無言で示す、己の存在理由……。

3人は自然と口をつぐんだ。

眼下では、荒れ狂う九尾のチャクラの塊に何十人もの忍が倒されていた。

ナナの意志を覆している暇はない。

「その替わり、みんなはサポートをお願い。それだけでもけっこうキツイはず」

彼らにとつて、その「お願い」だけが救いだった。

そしてナナは、左手を顔の横まで持ち上げて、

「全部終わったら、アスマ先生は私の手でちゃんと送るから」

細い五指をパキリと鳴らした。



## 琥珀の浄瓶

地が抉られ、大勢の忍が倒れ伏す最前線。

ダルイは九尾の衣をまとった金角と対峙していた。

そこへ、本部から『琥珀の浄瓶』が送られて来る。

「どうやって、これに封印するんだ?!」

対象に“返事”をさせないと、封印できないことは知っていた。

だから、その方法を見つけ出さねばならない。

が、

「アナタがダルイさんですか?」

緊迫した状況の中、現れたのは木ノ葉の額当てをつけた小柄な忍だった。

「お、お前は?」

「木ノ葉のいずみナナです」

普通の忍であれば、ここでナナを追い返す場面だった。

だが彼は雷影の側近であったため、「いずみナナ」が“何者”かを知っていた。

「まさかお前が……」

「私がアレをソレに封印します」

そのあまりに簡潔な言葉に一瞬だけ気を緩めた隙について、金角は九尾チャクラの尾で攻撃を仕掛けて来る。

が、黄ツチが現れて二人を防御した。

さらに、追いついたシカマルたちもナナとダルイの前に立ちほだかる。

「ナナ、術の発動までにどのくらいかかる?!」

全て割り切ったシカマルが、ナナに背を向けたまま問う。

「30秒」

「わかった」

その場でシカマルは、チョウジといの、黄ツチに的確な指示を出す。それを見て、ダルイも覚悟を決めた。

「一斉援護だ！ クナイを投げまくれ!!」

後方の増援を含めた数百人の軍勢に叫ぶと、たちまちクナイの雨が金角に振りそそいだ。

「ナナをお願いしますよ、隊長!」

シカマルがダルイにそう言っつて、仲間とともに金角に向かって行った。

それを見送りながら、ダルイは『琥珀の浄瓶』の蓋を外す。

底は暗くて見えなかった。横で印を結ぶナナなど、すっぽりと収まってしまう大きさだった。

ナナは左手をクナイで傷つけると、その血を『琥珀の浄瓶』の中に滴らせた。

チヨウジが金角に肉弾戦車で体当たりした衝撃が、二人の場所まで伝わっている。

ダルイは戦況と、ナナの術を交互に見守った。

ナナは短く呪文を唱えると、血をにじませた左手を『琥珀の浄瓶』に押し当て、右手を金角の方へ差し伸べた。

まるで傀儡師のようにその指を動かすと、遠くの金角の動きが自然になった。

シカマルたちとその他の援護によつて、ナナの術に抗う集中を削がれる金角は、ナナが腕を引くごとに、徐々に『琥珀の浄瓶』の方へと引き寄せられていく。

「いいぞ、もう少しだ!」

地鳴りのような唸り声を上げて抵抗する金角に対し、ナナの表情には殺気が浮かんではいなかった。

「ダルイさん、一瞬、アレの足もとを崩してもらえませんか?」

ナナの静かな指示にうなずくと、ダルイは前方に向かって叫んだ。

「前、開ける!」

シカマルが振り返って、印を結ぶダルイの姿を確認する。そして速やかに周囲に指示を出す。

ダルイから金角への道が開けた。

そこへ、

「雷遁・黒斑差（くろばんさ）!!」

残り少ないチャクラで、ダルイが黒い雷を撃つ。

金角の両足にそれが到達し、金角の巨体はバランスを崩した。

「そういうことかー!」

シカマルも影縫いの術で影を金角の足に絡ませ、足元をすくう。黄ツチは土遁で足元の土を抉った。

怒りの声とともに、金角の体勢は大きく崩れた。すると、

「血晶封印……!」

冷涼な声が響き、金角の身体がそちらへと引つ張られていく。

『な、なんだ、あの小娘はっ……!!』

が、金角は咆哮とともにチャクラを全開放した。

慌てて抑え込もうとしたシカマルの影真似の術もあっさり弾かれ、暴れ出す『尾』によって忍たちが一掃される。黄ツチの土遁での包囲も、金角の拳一発で破壊された。

立ち上る土煙りと悲鳴、そして怒声に、ダルイは思わずナナを振り返った。

「くそっ、おい、どうする?」

ナナはわずかに視線を鋭くした。

そして、今更のように、金角の名を呼ぶ。

「キンカクー!」

が、『琥珀の浄瓶』の使い方を熟知している金角がその呼びかけに応えるはずはなかった。

九尾の衣をまといつつ、金角はニタリと笑ってナナを見下ろした。

しかし、ニタリと笑ったのは、ナナも同じだった。

「成功……!」

その眩きを聞いたのは、一番近くにいたダルイだけだった。

「え……?!」

ナナのその声と同時に、金角は細いチャクラの線になり、風を切る勢いでいつきに『琥珀の浄瓶』に吸い込まれて消えた。

「ダルイさん、蓋を」

言われなければ、彼はその場に立ちつくしてしまっていた。

「あ、ああ……」

辛うじて蓋を拾い上げ、『琥珀の浄瓶』に乗せる。

ドブン……と、中で金角だった『塊』が揺れたのがわかった。

「ふう……」

ナナは安堵した顔で息をついた。

周りからも歓声が沸き起こる。

「お前……」

ダルイはじつとナナを見た。

そして、問う。

「さっきの眼……」

シカマルたちも向こうから走って来ていた。

ナナはそれをチラッと見てから、じつとダルイを見つめる。

「みんなには言わないでください」

表情は変わらなかったが、声には有無を言わさぬ強さがあった。

「お願いします」

ダルイはナナの漆黒の瞳に真意を探った。

そして気づく。ナナの両の眼尻がかすかに痙攣していた。

迷った末、

「わかった。約束しよう」

抗えない何かを感じ、ダルイは諦めたように言った。

「雷影様にも言わない」

「ありがとうございます」

疲れた顔もせずに笑うその姿は、九尾のチャクラを封印するという大技をやったのけたと思えぬほど、幼く見えた。

## 命令

八尾の修行部屋の外……、ずっと音沙汰の無かった扉が開くなり、ナルトはそこへ飛び出した。

戸口には、そこで待っているはずのナナの気配はなかった。

ナルトはそのまま外へ向かって走る。

と、行く手を阻む者たちが現れた。

「イルカ先生?! なんでこんなところに……?!」

イルカやシノの父親、奈良家の者、秋道家の者……木ノ葉の手練たちだった。

彼らは火影の命を受け、ナルトが外に出ることを阻止する目的でここにいた。

それらしい言葉を並べたて、ごく自然にナルトを説得しようとするイルカたち。

が、それに大人しく従うナルトではなかった。

「外に出て直接確かめる!!」

ナルトは仙人モードになり、一気に彼らを看破して真実の滝を突き破った。

が、外に出た瞬間、奈良の者に影真似の術で拘束される。凄まじいしぶきを浴びながら、彼らは皆動きを止めた。

と、

「何だよ……これ……」

ナルトの脳裏に、信じがたい光景が入り込む。

「何でこんなことになってんだてばよ!」

“見えた”のは、激しい戦闘を繰り広げる仲間たち、必死の治療、負傷者の列、そして屍の山……。

「うちはマダラが戦争を仕掛けて来たんだ」

イルカはついにその事実を告げる。

その上で、ナルトに戦場には向かうなどと説得する。

ナルトの九尾が敵の手に渡れば世界が終る。ナルトを護るために

皆が必死で戦っている。ナルトは己自身と闘え……と。

だが、ナルトが聞き入れる余地はない。

「この戦争はオレが一人でケリつける!! 憎しみも痛みも全部オレがまとめて引き受ける!! それがおレの役目だ!!」

そう吐き捨てるように叫んだ。

イルカも冷静さをかなぐり捨てて言う。

「お前の中には九尾がいる! お前だけの問題じゃないんだ!」

二人の感情がぶつかり合った。

「オレを一番最初に認めてくれた先生が……!! 何で九尾のことばかり気にして、オレを信じてくれねーんだ!!」

「だだをこねるな!! オレにとってお前は大切な生徒の一人だ! そして……」

ここでイルカはひと呼吸置き、

「弟のようにも思っている……」

まっさらな感情をナルトの前にさらけ出した。

「そんなお前を、狙われていることがわかっていて、みすみす行かせたいと思うわけないだろう……」

ナルトの口も閉じられる。

「それに、お前ばかりが全部を背負い込むことなんてないんだ……」

しばし、誰も口を開かなかった。

「オレってば、もう昔と違う……。あれからずっと強くなった」

ナルトが沈黙を破り、イルカの足もとに転がった己の額当てを指して言った。

「それに、その額当てをくれたのはイルカ先生だろ?」

イルカがのろりとその額当てを拾い上げた時、

「待って、ナルト」

ナルトの背に、静かな声がかけられた。

「ナナ……?!」

現れたのは、白い袴姿のナナだった。

見慣れない姿に、ナルトさえもナナがゆっくりと歩み寄るのを黙ってまっ見つめる。

「いずみナナ、お前もナルトの拘束に協力しろ……!」

木ノ葉の誰かがナナにそう言った。

ナルトが反論する前に、ナナはうつすら笑みを浮かべてこう言った。

「私が火影様から受けた命令は、『ナルトの側にいること』です」

滝の音が静まった。

「だから私は、『ナルトの行く所について行く』だけ」

無邪気ともとれる答えに、木ノ葉の大人たちは一瞬、息を呑む。

「ナナ……お前……」

ナルトだけが別の視線をナナに向け、ナナはそれを捉えて聞いた。

「ナルト……私がわかる……?」

白い袂が揺れた。

それを見て、ナルトは深くうなずいた。

「ナルトが行くのなら、私も行く」

そして、その言葉に笑みを返した。

そんな二人を見て、イルカはゆつくりとナルトに歩み寄り、額当てを手渡した。

だが、

「それでもお前を行かせるわけにはいかない!」

再びそう言って、ナナごとナルトを結界に封じた。

しかし、今のナルトに彼の術は通用しなかった。

ナルトは九尾チャクラを引き出し、結界を破る。さらに、影真似をも外した。

「行かせん!!」

シノの父が奇壊蟲を放つが、ナルトは全てを弾き飛ばした。

そして、グイッとナナの腕を引っ張り、

「行くぞ、ナナ!」

木ノ葉の忍たちに背を向け、イルカを置き去りにして走り去った。

「ナルト、イルカ先生はああするしかなかったんだよ」

「ああ……」

「イルカ先生は、ちゃんとナルトのことわかってくれてる」

「……わかつてるってばよ……」

釈然としないナルトに、ナナは淡々と言った。

「帰ったら、ちゃんとお礼、言わないとね」

「お礼って……」

初めての理解者と思っていたイルカに、「九尾の人柱力」として見られた気がして、ナルトは失望していた。

その苛立ちを抑えるように、ナナすら置き去りにするスピードで森を駆けた。

そして、額当てを結びかけてようやく気付く。

「これって……」

鉢がねの裏に、一枚の紙切れが挟まっていた。

それは、イルカからの手紙だった。

そこに書かれていたのは、まるで「兄」としての言葉。絶対に、生きて帰って来いと……ナルトの背を押し、無事を願う心だった。

「イルカ先生……」

イルカの想いの全てを吸収するかのようには、ナルトは手紙を飲み込んだ。

「ね、ナルト。帰ったらイルカ先生にお礼、言いなよ」

額当てをきつく結び直すと、ナナが満足そうにほほ笑んだ。

ナルトは無言のまま、その笑みに力強くうなずき返した。



## 外道魔像

八尾と九尾を閉じ込めるために結界班が造り上げた特別強力な多重結界を、ナルトとビーが難なく看破した。

「島」の外に出たその頃には、すでに日は傾いていた。

「ナルト、どこに向かう？　すでに尾獣モード使う？」

ナルトの九尾チャクラにより、暗い森でも行く手は照らされていた。

彼は再後方のナナに尋ねた。

「ナナ、さつき、九尾のチャクラを感じたよな？」

ナナは二人の後を追いながら、淡々と答える。

「アレは、もう一人の私」が、みんなと封印したから大丈夫だよ」

「もう一人のナナ」って、さつき仙人モードで感知できたけど……。アレってばナナの分身か？」

「違うよ、私は私んだけど、別の存在なの」

「ふーん」

ナルトもナルトで、理解が曖昧なまま納得をする。

「二人目のナナ」ってコトか」

「そう。影分身と違って、チャクラが減ったりしなくて良いでしょ？」

ナナにしか使えない術があることを、ナルトは理解していた。ビーもまた、二人のやり取りには口を挟まない。

ナルトはナナの答えを聞いてこう決断した。

「とりあえず、一番近い戦場に向かうってばよ!!」

その時、ナナがかすかに息を呑んだ。

枝が軋む音で、その気配は前の二人には気取られなかった。

ナナは、ナルトの言葉に何かを思ったのではない。他に、気配を察知したわけでもない。

何故、その顔色を変えたのか……。

それはその頃、ダルイ第一部隊に居る「もう一人のナナ」が、信じがたい光景を目にしていたからであった。

戦場では、ナナが次々と「死者」たちを送り返し、ダンや角都ら手練の「死者」の拘束にも成功していた。

また、無数に襲来した「ゼツ」も、ダルイらによって殲滅された。暗くなり始めたその場所で、彼らが潮風の中にようやくの安堵を嗅ぎ出した時、最悪の事態が起こる。

静まりかけた戦場の中央に、突如として強大な「魔物」が出現したのである。

それは、マダラが口寄せした『外道魔像』であった。

チョウジやチョウザよりも数倍大きいそれは、九尾化した金角と比べ物にならないほど膨大なチャクラをまき散らし、大音量で吠え、夕空を震わせる。

「アレは……」

ナナは眉をひそめた。

「人」が操って良いものではない……。

漠然とそう感じたのだ。

「鎮めなきや……いー」

何をどうすれば良いのか明確な策は浮かばない。

だがとつさに、連絡用に準備しておいた式神を出そうとした。強大なアレを封じるには、多くの「手」が必要だと思ったのだ。

が、形代かたしろがいつもの童子になる前に、目の前に黒い影が浮かび上がってナナの視界を遮った。

「アナタは……」

影は無言のままナナを制止する。

いつの間にか、周りにいた忍たちは血を流して倒れていた。

「あの絶望の淵から、よくもまあ「そんな姿」で再び立ち上がることでできたものだ」

両目が開いた面……。

「うちは……マダラ……」

前とは違う面をつけてはいるが、ナナには目の前の人物がマダラだ

とわかった。

彼は面の下でフッと笑う。

「お前はやはり、オレなどの想像の範疇には収まらなかった」

マダラの口から出たのは、皮肉ではなく素直な賛辞だった。

「イタチの復讐を誓ってサスケと共に行くのでもなく、虚無感の中でサスケに与えられる死を待つでもなく、イタチに教えられた強さを取り戻して戦うでもなく……。」

マダラはまるで思い出語りでもするように、緩やかに話す。

「わざわざ “そんな姿” を使つてまで参戦しているのは、仲間のためか……？ それとも……」

ナナは黙って、次の言葉を待った。

「再びイタチに逢いたいからか？」

マダラの眼が、面の奥で残酷に光っている。

「いずれにせよ、あのどん底から這い上がるとは……」

ナナはじつとそれを見つめた。

「さすがは、イタチとサスケにとつて特別な存在だ」

そしてその台詞に、今度はナナがフッと笑った。

「ムダ……。」

“そういう攻撃” には、姉との闘いで免疫ができてるから

『外道魔像』が巻き起こす混乱によって、まだ二人に気づく者はない。

二人の方も、忍たちの狂乱をよそに静かに声を発す。

「アレは何？ 何のために存在してるの？」

「あれは『外道魔像』という。なに、お前が恐れることはない。あれはただの尾獣のチャクラの入れ物だ」

「アレにさっきの “九尾の切れっ端” を入れるつもり？」

「まあ、そうだ」

「それで、アレはどうなるの？」

「知りたければ一緒に来るか？ 忌まわしい禁術を始めたカブトにも会わせてやるぞ」

まるで仲間にも言うように、マダラは言う。

「……カブトは自分で探して倒す」

「そうか？ オレと共に来ればサスケにも会わせてやれるが……」

ナナは一步、前に足を進めた。

「さんざん放置しておいて、今更私を連れに来たの？」

「カブトの名にも、サスケの名にも、眉ひとつ動かさぬか……」

マダラも、同じく一步だけナナに近づいた。

「まあ、連れて行ってもいいが……正直、〝お前の方〟には、用がない」

ナナのこめかみがわずかに引きつった

「オレが欲しいのは、絶望に打ちひしがれ、ただ死のみを願う〝ナナ〟だけだ」

戦場から巻き上がった砂煙が、二人の間を駆け抜けた。

「まるで、私のことを全て知ってるみたい……」

「ああ、この眼が〝お前〟を見抜いている」

マダラは自身の左目を指さした。

「その眼……。長門って人の眼を奪ったの……？」

「ヤツはオレのコマだった。コマが役目を失えば、打ち手がコマを回収するのは当然のこと。『奪った』とは検討違いの見解だ」

その理屈に、ナナは反論しない。

ただじつと、マダラの左目に収まった輪廻眼を見据えていた。

「〝私〟に用が無いのなら、どうして今、目の前に現れたの？」

そして再び問う。

マダラはすぐに単調な答えを返した。

「お前がどんな顔をして、戦場こゝろに居るのか、興味があっただけだ」

ナナはますます視線を鋭くした。

面で隠れていて表情は見えない。声も淡々として心の動きがわからない。

それでも、わずかな情報を得てマダラの真意を探ろうとした。

が、マダラははぐらかすように軽い口調で言った。

「そういうわけだから、オレは『外道魔像』を連れてそろそろ退散する」

そしてすぐ、ナナの前から消え去った。

「全部、アナタの計画どおりになんかさせない……!!」

ナナはすぐさま彼を追った。  
といつても、マダラが走る姿はどこにもない。  
ナナが『琥珀の浄瓶』を振り向いた時にはすでに、マダラはそこにいた。

『外道魔像』が暴れ出した戦場では、誰も『琥珀の浄瓶』に注意を払っていなかった。

『琥珀の浄瓶』の周りで警護に当たっていた忍たちも、突然現れたマダラによって声を上げる間もなく倒されていた。

そんな中、『外道魔像』が出現した理由、いち早く察知した者があった。

「その忍具は渡さねー!」

雷のダルイと、

「その九尾チャクラを、あのデカいのに封印するってワケか……?」

木ノ葉のシカマルだった。

「連合にもセンスの良い人間が多少はいるようだな。お前たちは敵にしておくには惜しい」

マダラはすでにシカマルの影真似の術で拘束されていた。

が、それでも余裕のある口調で、二人にそう言った。

「シカマル! ダルイさん!!」

そこへ、ナナが駆けつけた。

「お願い! 少しでも、その人を抑えてて!」

そして『琥珀の浄瓶』の前で印を結び、陰陽の術を発動した。

「利用される前に、私かコレを『浄華』する……!」

「じよ、じようか……?」

「なんだ、それ……」

ダルイとシカマル、そしてマダラまでもがナナの横顔を注視する。  
が、ナナは冷たい靈気をくゆらせながら、呟くように答えた。

「完全にこの世から『消す』ってこと。発動まで少し時間がかかるから、何としてもその人を抑えて……」

その意味を素早く理解したシカマルは、反射的にナナを押しとどめる。

「お前、そんなことして大丈夫なのか?！」

ナナは横目でシカマルをちらりと見て、すぐに「琥珀の浄瓶」に視線を戻した。

「私は大丈夫」

言いながら、両手を「琥珀の浄瓶」につけて呪文を唱える。

コトリと中で音がして、ナナの髪がふわりと浮いた。

「ナナ!!」

ナナの言葉など信じられないというように、シカマルは再び躊躇いの声を上げる。

「琥珀の浄瓶」とナナを交互にみやるダルの顔にも、迷いの色が浮かんだ。

その時、

「なるほど、見たところ、お前がナナの新しい『騎士<sup>ナイト</sup>』か?」

「なに?」

マダラが嘲笑しながらシカマルを見る。

続けて、

「なかなかのキレ者のようだが……」

ナナのピクリとひきつったこめかみを見ながら、こう言った。

「イタチやサスケに比べたら役不足だな」

二人は同時に歯を食いしばった。

だが、そんな言葉でナナもシカマルも術を弱めたりはしないはずだった。嘲られたシカマルはじつとマダラを睨み据えて印を結んでいたし、ナナも九尾チャクラに意識を集中させていた。

そのはずだった……が、あまりに術に集中することに神経を注いだために、逆に視界が狭められていた。

突然その場に吹き付けた土交じりの潮風……、その方向に目をやった時にはもう、そこは巨大な影に覆われていた。

「くそっ……!!」

シカマルとナナ、そしてダルイが上を見上げると、『外道魔像』の巨大な足が、頭上から踏み下ろされようとしていた。

あぶく

ナナ、シカマル、ダルイの三人が頭上を見上げた時、『外道魔像』の片足がそこにあった。

巨体に似合わぬ速さで、その足は一気にそこへと振り下ろされた。最期の瞬間に、『外道魔像』がつくる影の下で、ナナとシカマルは互いに視線を合わせていた。

「大丈夫か?!シカマル!!」

ちっぽけな小石のように、粉々に踏み潰されることを想像していたシカマルは、声を掛けられて初めて、無事であったことを知る。

「た、助かったぜ、チョウジ」

『外道魔像』の足の下敷きになる寸前で彼を救ったのは、チョウジだった。

シカマルはすぐに、ナナの姿を確認する。

すぐ傍に、いのに抱きかかえられるナナがいた。

「ありがとう、いのちゃん」

「間一髪よ、危なかったわ……!」

わずかに戸惑いの表情を浮かべていたが、ナナは無事だった。

シカマルは安堵し、息をつくと同時に痛み出した胃に手をやる。

そして、ダルイもまた、黄ツチによって救助されていた。

「奴は?」

「忍具ごと消えちゃった……」

マダラはシカマルの影真似の術が解けた瞬間、あの空間をすり抜けるような忍術で消え去っていた。

『外道魔像』が足を踏み下ろした衝撃で、地が抉れ、海の水が跳ね上がり、地震と塩水の雨が彼らを襲っていた。

「じき、夜だ。戦局は一気に不利になったな……」

「くっ……」



「本部との連絡を密にして立て直すぞ！」

「分かってるっス」

黄ツチとダルイ、二人の隊長が言葉を交わす中、ナナがシカマルに  
呟いた。

「九尾のチャクラ……持つて行かれちゃったね」

「……ああ……」

あの場合は仕方なかった。

術を続けていたらナナは『外道魔像』に踏み潰されていたし、シカマルもマダラを拘束したままだったのでは、今頃は跡形もなく砕け散っていただろう。

「くそっ……」

シカマルは、塩辛い雨の向こうにそびえ立つ『外道魔像』の巨体を  
見上げて悪態づいた。

その『外道魔像』も、耳をつんざく咆哮ひとつ残して煙となった。

「目的を達成して、とっとと退いたってわけか……」

シカマルが再び舌打ちをした時、その背に……。

「目的はもうひとつあった」

そこに居ないはずの声がかかる。

振り返って確かめるまでもなく、たった今、用事を済ませて去った  
はずのマダラだった。

「もうひとつの目的だ?!」

「なんだ、それは!？」

シカマル、いの、チョウジ、ダルイ、黄ツチ、そしてナナの六人は、  
いつせいに身構える。

他の忍たちは『外道魔像』の『足』から避難していて、まだその場  
からは離れたところに居た。

救援は望めなかったが、数は少なくとも忍連合の隊長が二人もいる  
中で、それほど窮地に立たされているという感覚は誰も持っていな  
かった。

「オレの計画に、ひとつ邪魔なモノができたようだ」

が、マダラは余裕の口ぶりで、傍に落ちていた忍刀を拾った。

「動くな！」

黄ツチが土遁の印を結んで威嚇するも、マダラは品定めするように刀を見る。

そして、

「お前、は邪魔だ」

「いのちゃん、離れて!!」

ナナの後ろでマダラの声がしたのと、ナナがいのを突き飛ばしたのは同じタイミングだった。

「ナナ!？」

六人が睨みをきかす中、マダラは一瞬にして消え、瞬きするより早くナナの背後へと移動していた。

「ナナを放せ！」

マダラはナナの首を片腕で絞め上げる。

いや、それだけではなかった。

「……………!!」

ナナの身体を、光るものが刺さっていた。

「……………?!」

それが何を意味するのか、木ノ葉の三人には理解ができなかった。ナナの身体を貫いたそれは、切っ先から紅い滴を地に垂らす。それにつられるように、ナナの額当てもほどけて落ちた。

「おとなしく、絶望の淵に沈んでいけばいいものを……………」

マダラはナナの耳元でため息をつくように言った。

「たとえば動機は『イタチに逢う』だけとはいえ、お前にあんな術をさされては計画が狂いかねない」

いち早く事態を把握したのは、黄ツチとダルイだった。

二人は、ナナに攻撃が当たらぬ位置に回り込んで、それぞれ土遁、雷遁の印を結ぶ。

しかし、マダラはつまらなそうにナナから刀を引き抜くと、

「また会おう」

倒れゆくナナにそう言い捨てて、彼らの前からまた姿を消した。

「ナナ！」

「ナナ……?!」

シカマルがナナを抱きとめた。

「……………」

まだ、ナナに息はあつた。

すぐにいのが治療を開始する。が、彼女の顔がみるまに青ざめる。

「いの、ナナは……?!」

チョウジのその間に、いのは答えなかった。ナナの胸にかざしたいのの手は、目に見えるほど震えていた。

シカマルはただ、ナナの名を呼んだ。チョウジは必死で涙をこらえた。ダルイと黄ツチさえも、茫然と立ち尽くす。

「シカ……マ……ル……」

そんな中で、動いたのはナナだった。

「ナナ?!」

ナナはもう虚ろな目でシカマルを探し、切れ切れに言った。

「わたし……は……だいじょうぶ……」

「ナナ、しゃべるな！」

「わた……し……もう……ひと……り……い……から……」

そして、何を思ったかいのの手を払いのけ、自分で服を引き裂いて、胸をさらけ出した。

「ナナ、何を?!」

治療を再開しようとするいのを拒み、ナナはシカマルに言う。

「わた……し……もう……ひとり……い……る……」

『もうひとり』……? な、何言って……」

色を失いかけた手は、シカマルのベストを強く握った。

「おね……がい……シ……シカ……マル……」

「ナナ?!」

唇ももう、紫色になっていた。

「おねが……い……いま……すぐ……わたし……を……」

ただ、ナナは必死で言葉を残そうとしている。



コレも関係ねえだろ！ 今思い出すな！

『わた……し……もう……ひとり……い……る……』

ナナは自分が「もうひとり」いるって言った。

「もうひとり」ってどういうことだ？

分身か？

『う……みに……し……し……し……ずめ……て……!!』

分身だったらやられた時点で消えるはずだ。

だとしたらこつちが本体か？

いや、それはマズイだろ……！

『わたし……は……だいじょう……ぶ……もう……ひと……り……い

……から……』

ナナはさつき「大丈夫」って言ったんだよな？

くそっ………どういことだ………？

『きず……み……みて……!』

だから急所を刺されて、お前は……！

「……?!」

シカマルは改めて、さらけ出されたナナの傷を見た。

溢れる血。医療忍者じゃなくともわかる。その場所は心臓………間

違いなく急所だった。

「シカ……マル……!」

もう、ナナの声は声にならなかった。

呼吸も止まろうとしていた。

とうとうイノとチョウジが顔を覆った。黄ツチとダルイもうなだれた。

だが、彼だけは逆に、勢いよく立ちあがる。

「ちよ、ちよっど?!」

「シ、シカマルっ!」

死に際のナナを抱きかかえて。

「何するのよ、シカマル!!」

いのの制止を振り払い、シカマルは一目散に海へ走った。

瓦礫をとび越え、池のような水たまりもものともせず、波間に着くまで誰も追いつけない速さで走った。

そして、揺れる波間にゆっくりナナを横たえる。

「シカ……マ……ル……」

ナナはようやく、安心したようにかすかに口元を緩めた。

「ナナ……信じていいんだよな……い！」

シカマルは涙をこらえるように、少し怒った口調で言った。

「お前を信じるからな！」

ナナは確かに笑った。

「また、逢えるんだよな?!」

うなずく力も失くしたナナは、

「あり……がと……」

最期にその言葉を残して、逝った。

「ナナ……!!」

ナナを呼ぶシカマルの声も、もう“声”ではなくなっていた。

## 波間

いのとチョウジがシカマルとナナの元に辿り着いた時、もう、ナナの息は途絶えていた。

シカマルはそつと、波の上でナナの身体を離れた。

指先まで、名残惜しそうに……。

ナナの身体は、揺れる水の中に、ゆつくり、ゆつくりと沈んで行つた。

二人は黙ってナナを見下ろすシカマルを押しつけるようにして、ナナの名を呼んだ。

暗い海に、ゆつくりと沈んでいく身体……。

チョウジは、それを引き上げようとすらした。

「なんでよ、シカマル！　なんでこんな所にナナをつ……!!」

いのが泣きながらシカマルを咎めた。

が、シカマルは口を横に引き結び、影を帯びた視線をナナに落とすばかりだった。

「ナナ、ナナ……!」

いのは諦めたように、再びナナを見下ろした。

と、横でチョウジがすつとんきような声を上げる。

「へ……?」

三人が見守る中、ナナの身体がかすかに青白い光を帯びていた。

「ナナ……?」

「ひ、光ってる……?」

いのとチョウジの涙が、一気に止まった。

光は弱かった。

が、確かにナナの身体全体を包み……いや、ナナの身体が光りになるようで、彼らには何が起きているのかわからなかった。

「ナナ……」

海に沈んで視界から消える……。

それを覚悟していたはずのシカマルが、小さく呟いた。

「ッナナ」が消える……」

ナナの光は水に溶けるように消えた。

「ど……どうということ……？」

「ナナが……消えちゃった……」

いのとチヨウジは、答えを求めるようにシカマルを見た。

しばらく、彼は黙っていた。その顔は、諦めているようでもあり、戸惑っているようでもあった。

「ナナは……、確かに消えたわよね？」

「も、もしかして、今のはナナの分身だったんじゃない……」

「でも分身なら、刺された瞬間に消えてるはずよ……。それに、治療した感じは確かに実体だったわ」

「じゃ、じゃあ……なんで……？」

二人の目は、継るような目が変わった。

が、シカマルはまだ言葉を発さなかった。

「ねえ、シカマル……！」

「シカマル！」

とうとう二人が叫んだとき、シカマルはギュツと目をつむった。己の中の何かをかみ砕くように。

そして、

「ナナは……『自分はもうひとりいる』って言っていた」

絞り出すようにそう言った。

「た、たしかに……そう言ってた気もするけど……」

「どうということなの……？」

この悲痛を破り、安堵したい。

それは、シカマルの言葉を待つ二人も、*「予測」*を紡ぐシカマルも同じ気持ちだった。

「ナナの傷……見たか？」

今度はシカマルがいのに救いを求めるような顔で聞く。

「み、見たけど……確かに急所が貫かれて……」

「その傷じゃない」

シカマルは己を落ち着けるように言った。



「あそこに、あるはずの傷痕がなかっただろ……?」

いのは困惑の表情を浮かべた後、目を見開いた。

血が噴き出していた急所は心臓……そこには、宿命である『刻印』を姉に潰されたという傷痕があったはずだ。その上、木ノ葉で皆をペインの術から護った時に、自らつけた新しい傷の痕もまだ癒えていないはず……。

「そういえば……傷がなかった……」

「え? どういうこと?」

シカマルが、ついに己の予測、そして希望を口にした。

「さっきのナナは、今までオレたちが見てきたナナじゃない……」

いのとチョウジの目にも、同じものが灯った。

「もうひとりの『ナナ』が……『ホンモノ』が別にいる」

願いを込めた台詞だった。

「じゃあ、さっきの『ナナ』は?」

シカマルの言葉が信じられない……いや、信じたい。チョウジは、ナナが消えた場所を見つめて聞く。

「わからねえ……けど、最期にナナが『海に沈める』って、ワケわかんねえこと言ったのは……、きつと今の消える瞬間を、他のヤツらに見られちゃマズかったからじゃねえのか?」

シカマルにしては珍しく、自分の意見を問うように言った。

そして、その『意見』が少しでも強くなるように、

「影分身でもねえ……例えば『式神』とかいう、ナナだけが使える和泉の術だったのかもしれないねえ」

可能性をひとつ加えた。

「ナナは最期に……『信じろ』と言った」

希望がわずかに増した。

「オレは……信じる……」

まだ、心は揺れていた。

が、シカマルはそう告げた。

「シカマル……あんだ……」

「シカマル……」

強い言葉を吐き出しながら、シカマルは涙をこぼした。雫が、ナナが消えた海に溶けた。

いのとチヨウジは顔を見合わせ、シカマルに言った。

「信じるわ、私も」

「ボクも。ナナはちゃんと、まだ『ここ』にいるよ……」

最初に言ったはずの、シカマルを慰め、説得するように。

「ああ……」

シカマルは掠れた声でうなずいて、二人と共に陸へ向かって歩き始めた。

後ろの波間は、振り返らなかった。



遺体の収容、負傷者の救助、そして拘束した「死者」の封印……。戦場はまだ、混乱していた。

が、最も混乱していたのは、木ノ葉の三人が沖から戻るのを迎えた黄ツチとダルイだった。

三人はナナに別れを告げて来た……。そう解釈するのが普通だった。

だが、マダラとのやり取り、そしてナナが言い残した言葉を考えると、普通の解釈では収まらないことに気づいていた。

「大丈夫か？」

気遣うように、ダルイが言った。

そして、シカマルにあるものを手渡す。

「ほら、コレ」

「……………」

黙ってシカマルが受け取ったのは、ナナの額当てだった。

少しだけ、沈黙が流れた。

シカマルは額当てを見下ろして、それをゆつくり握りしめ、それか

ら二人を見上げて言った。

「お二人ももう、気づいてると思うんすけど……」

連合の部隊長を任されている二人は、各里の「影」の側近だったから、前置きはいらさない。

それを知っているシカマルは、簡潔に説明する。

「たぶん、さっきのナナは、「特殊な術」で存在した「もうひとりのナナ」ってやつだったみたいっす」

黄ツチとダルイは表情を変えなかった。

「その術が特殊なのは、「いずみナナ」がどういう存在なのか、考えてもらえればわかると思うんすけど……」

反応をうかがうシカマルに、二人はそれを肯定するように問う。

「和泉一族の術……陰陽術ってことか？」

「その特殊さゆえ……術が解ける瞬間を誰にも見られないように、向こうへ移動したのか？」

そして、

「いずみナナの「本体」は、ちゃんと生きてんだな？」

ダルイが、皆が口にしたことをはつきり言った。

「たぶんそうっす……ただ……」

が、答えながら、シカマルは視線を落とした。

「これは予測だ……!」

大切な仲間の死を目にしておいて、簡単に『今のはニセモノ』と思えるはずはない。

それは黄ツチもダルイもよくわかっていた。

実際、ナナがちゃんと生きているところを見るまでは、安心することとはできないだろう。

「状況を分析しただけの予測にすぎないことと、ナナの一族の秘匿性を考慮して、このことはオレらだけの話に収めてくれないっすか？」

信じたい……。

シカマルからも、黙ってシカマルに説明をゆだねるのとチョウジからも、必死の心の声が聞こえてくるようで、黄ツチとダルイはわざと表情を崩した。

年若い忍たちが抱える、不安という重い「気」が、少しでも軽くなるように。

「わかった」

「他の者たちには、何も告げないでおこう」

二人の気遣いに応えるように、敢えてシカマルは言った。

「本部以外には、このまま、『いずみナナは死んだ』ってことにしてください」

口にするだけで痛みが走ることは知っていた。

その証拠に、シカマルの眉間にピクリと皺が寄った。

「了解した」

「本部にはオレから報告を入れる」

黄ツチとダルイは、再び簡単に答えを返す。

ようやくシカマルは、ほんのわずかに安心したような息を吐いた。

## 月夜

日が落ちた。空には丸い月が浮かんでいる。

戦乱は一時の収束を迎えていた。

嵐の前の静けさ……。

各戦場では、決戦に向けての束の間の休息を与えられていた。

いのとチヨウジも医療班の手伝いがひと段落し、支給された食料を持って情報部のテントへ向かった。

「シカマル、はい、水」

「おにぎりも、シカマルの分ももらって来たわよ」

シカマルはテント脇に置かれた丸太に腰掛けて、外灯を頼りに地図を眺めている。

「ああ、サンキュ」

案外、素直にそれを受取って口にする。

いのとチヨウジは、ひそかに顔を見合せて安堵した。

『こつちへ来る前、本部に現れたいぞみナナが、“もうひとりの自分”がうずまきナルトと一緒にいる……って言っていたらしい』

部隊の撤退後、本部と連絡をとったダルイがすぐに彼らに教えてくれた。

それを聞いたシカマルは落ち着いた声で、

『雷影と火影を前に、いい加減なことは言わねえだろ』

二人にそう言った。

そして明日の敵の出方を予測し、対応策を検証すると言って、この場に座り込んで地図と睨めっこを続けていた。

「明日は敵も総力戦で来るだろうな。今日以上に、臨機応変に対応しねえと」

それ以来、シカマルの口から『ナナ』の名前が出ることはなかった。

あの額当ては、彼のベストの内ポケットにひっそりとしまわれたままで。

「今の各部隊の配置をさつき聞いてきた。お前たちも見とけよ」

おにぎりをほおばりながら地図を広げて見せる仕草も、いつもと変

わからない。口調もすっかり普段どおりに戻っていた。

が、いのとチョウジは再び顔を見合わせた。

二人とも、シカマルのことはよくわかっていた。幼いころから知っているし、三家は家族ぐるみの付き合いでもある。

それに、下忍になってからもシカマルだけが中忍になってからも、離れずにつつと一緒に戦ってきた。

だから、あの時のシカマルがどれだけの不安に押しつぶされそうになっていたのか、よくわかっていた。

『ナナは最期に……「信じろ」と言った』

じつと水面を見下ろすシカマルの瞳から、

『オレは……信じる……』

音もなく涙が零れ落ちた。

そんなふうに泣くシカマルを、二人は見たことがなかった。

いつしか二人は、シカマルの“分析”は完璧だと思っていたから、彼が自分で言ったことに不安を抱いていることなど信じられなかった。

シカマルは自分で二人に強く宣言しておいて、逆に自分に言い聞かせるようだった。

だから二人は、シカマルに同意する言葉を、シカマルに言い聞かせるように言ったのだ。

『信じるわ、私も』

『ボクも。ナナはちゃんと、まだ……』にいるよ……』

シカマルは大人びた顔でうなずいて、戦場に戻ろうとした。

いつになく頼りないその背に並びかけた時、いのとチョウジは再び見たこともないシカマルの姿に出会った。

『信じられるかよっ……』

彼は肩を震わして、水面に吐き捨てた。

『いくら頭で分析して解釈したって……』

その横顔は、怒りと恐怖、悲哀で壊れそうなくらいだった。

『オレの……この腕の中で……』

いのとチョウジは完全に言葉を失っていた。

『“ゴ”で、“ナナ”は死んだんだぞっ……?!』

己の腕を見下ろし、消えゆくナナの命を思い出し、シカマルは震えていた。

『どんだん、力を失って……息を……すんのを止めて……!』

その姿は、二人に恐怖すら与えていた。

『“こんだけ”“ナナ”の死を感じといて……』

シカマルはついに膝をついて、海面を思い切り両手で殴りつけた。

『簡単に信じられるわけねえだろっ!!』

バシヤンと跳ねた飛沫は、いのとチョウジの顔を濡らした。

『くそっ……!!』

そのままうずくまるシカマルに、やはり、かける言葉は見つからなかった。

三人はただ、情けなく水面で揺られるだけだった。

『シカマル……』

チャクラのコントロールさえ放棄して沈みかけたシカマルを、チョウジが無理やり引つ張り起こした。

シカマルはよろめきながら、だが、ちゃんと自分で立ち上がった。

その表情はひどく冷たくで、まるで死人のようだった。

『たのむ……』

シカマルはうつむいたまま呟いた。

『こんなこと……お前たちにしか、頼めねえ……』

珍しい彼の「頼み」とは……。

『オレに……“信じる”力をくれ……!』

初めて響く、悲痛な叫び。

『ガキの頃から、一緒にいるお前たちにしか……こんな情けねえこと頼めねえ……』

初めてさらす、情けない姿。

「信じる」と決めた。状況から分析して、たぶん大丈夫……。

彼の脳みそはそう判断している。

が、あまりに強烈な“ナナの死”が、彼の思考を乱す。決意を鈍らせ、心を犯し、不安をあおる。

何故なら……シカマルの心の中で、ナナの存在がそれだけ大きかったから。『ナナの死』でそこにぽっかり穴が開き、代わりに恐怖が棲みついた。

『気休めでもいい……』

シカマルはまさに、それに抗いながら二人に言う。

『信じさせてくれ……！』

いのとチョウジは視線を合わせ、同時にいつも二人を支えてきた頼もしき仲間の背を、どうじにポンと叩いた。

二人は同時にその背中を見つめる。

いつもどおり少し丸まっていて、だが萎れてはいなかった。

自分たちの存在が、彼の力になっているのだろうか……。

二人はもう一度顔を見合わせた。

その時、テントから情報部の忍が飛び出して来た。

彼はぐるりと辺りを見回し、誰かを探して走り去った。

テントに吊るしてあった外灯が大きく揺れ、彼らの影も揺らめいた。

「夜明けまで戦闘はないだろう。交代で寝とけよ」

シカマルはそう言って、いつもどおり眠そうに伸びをした。

とりあえず……いつも通り。

あれから二人が彼に何かを言ったわけではなかった。気休めの言葉も、特に口にしなかった。

が、『ナナが生きていること』を心から信じることにした。『ナナは生きている』と信じ込んで、シカマルと接した。

それが、『ガキの頃から一緒にいる』二人にとって、シカマルに「信じさせる」最良の方法だとわかつていた。

「ふあ……」

シカマルはまた、普段と同じ調子であくびをした。

いのとチョウジもようやくほっとして、少し笑った。

と……。

「おい、お前たち！」



先ほどの情報部の忍とともに、ダルイが走って来た。そしてたった今、本部から届いたばかりの情報を告げた。

「雷影と火影が、今しがた『ナナ』に会ったそうだ!」

一瞬、三人はポカンとする。

今まで、意識して信じてきたコトが現実となつて、逆にすぐに飲み込めない状態だった。

「ちゃんと『ナナ』は生きてるぞ!」

ダルイはもう一度、きつぱりそう言った。

「やっぱ、そうっすか……」

いのとチヨウジは、またシカマルの見たこともない顔を横目で見ながら、抱き合つて喜んだ。

「つたく、ナナのヤツ、ちゃんと説明しろっつーの!」

やつとのことと彼らしい台詞を言いながら、シカマルは懐にあるナナの額当てをギュつと握っていた。

「『もうひとり』なんて言われたって、ボクたちにわかるわけないじゃないか!」

「そうよ! ナナつたら、忍者学校の頃から、いーつも言葉が足りないんだから!」

三人は大げさにため息をつきながら笑った。

説明されたところで、あの『ナナの死』を目にした以上、どの道同じ心理状態になることはつわかつていた。

が、三人はわざわざ憤慨してみせた。

「あ! 今思つたんだけど、ナナの術って、綱手様のカツユ様みたいなもんだつたんじゃない? 『分身』じゃなくて『分裂』的な?」

「ああ……なるほど! それならわかるよ」

安心……それを強く感じたかったから、軽口を言う。

「けどよ、ナナとナメクジなんて、結びつくわきゃねーだろ」

「それもそうか……」

そして、声を上げて笑った。

「お前ら、いくらなんでも陣中で不謹慎だぞ！」

「なにより、シカマルだつて珍しく声出して笑つてんじやない！」

「二人とも、さすがに声が大きいつて……！」

月の下、そう言いながらも笑い続ける三人の目尻に、同じような光の粒が滲んでいた。



猪鹿蝶の三人が泣き笑う少し前、綱手は「ナナ」と対面していた。参戦を巡つて雷影とナルト、ビーが争っていたが、すでに決着がつき、ナルトとビーの参戦が認められていた。

ようやく空気が鎮まつて、綱手は改めてナナを真正面から見下ろした。

「ナナ……」

白袴姿のナナを見た瞬間から、綱手は安堵と不安の入り混じった感情をおぼえていた。

その姿にどんな意味があるのか……。色々と考えてしまつて、言葉が見つからない。

「本当に、もうひとりいたのだな」

すると、綱手の気持ちを代弁するように雷影がナナに言った。

「しかし、本部に現れたほうとは、姿形は同じだが雰囲気違って見えるが……」

綱手は雷影の言葉に同意していた。

ナルトとビーが雷影の説得をしている間、ナナはその様子を少し離れたところで傍観していた。終始ひとことも口を挟まず、ナルトの仕事ひとつひとつを、ただ見つめている……。そんな感じだった。

さつそうと本部に現れて、半ば必死な形相で参戦許可を訴えた「ナナ」と比べ、その目に強い光が無かった。

「ナナ……お前……」

このナナの顔を知っていた。

「極秘任務」を言い渡した時の無感情な様子。全てを諦め、ただ流れ

に身を委ねたような、絶望に飽きた女の顔。

目の前のナナはそれだった。

「もうひとり」のお前は、マダラに倒されたらと戦場から連絡があったが……大丈夫なのか？」

だが、綱手は敢えて「身体」の方の心配をした。

「はい。完全に別の身体ですから。シカマルたちにもそう伝えていただけですか？」

「すでにカツユを通して連絡してある。……だが、「お前」も相当疲れているように見えるぞ？」

綱手にとっては、顔色を見ただけで相手の体の状態を知ることにはたやすかった。

「私」の方は、暁の鬼絞って人と戦ってから、まだ力が戻ってなくて……」

雷影と綱手の視線をかわすように、ナナはさらりと言ったのける。

「でも、私はナルトと一緒にいきます」

それが任務だったからではなく、自分の意志として言ったことが、綱手には救いだった。

ほんの少しだが、任務を言い渡した時とは違っているような気がした。

「わかった。行ってこい」

綱手は、そのほんのわずかな変化に賭けた。

「はい、行ってまいります」

ナナは決意などまったく籠らない目で答え、ナルトとビーの後に続いた。

登り始めた朝日は、ナナの白い袴を赤く染めはしなかった。

## 遭遇

ナルトは九尾のチャクラで「悪意」を感知し、最初の戦場で味方に化けた「白いもの」を粉碎した。

「よっしゃ！ 次、行くぞー！ ビーのおっちゃん、ナナ!!」

そして一瞬たりとも足を止める間もなく、眩しいほどの明るいチャクラを纏ったまま次の戦場へと走り出す。

その姿はまるで、昇り始めた朝日と溶け合うようだった。

「モヤモヤしたもの」と彼は言ったが、それを感知して迷わず向かっているのだろう。

ナナは気だるい感覚の中、光に導かれるようにナルトの後を追っていた。

身体はまだ回復していない。それに「ホクト」……つまり「もうひとりの自分が」が見たモノが、さらに気を重くしていた。

あの、マダラが呼んだ『外道魔像』。

まさかマダラがあんなものまで扱うことができるとは……。

それに九尾のチャクラも守り切れずに奪われて、ホクト自身もあっさりとマダラに消されてしまった。

そして、強制的にこの世に呼び戻された死者たちと、得体のしれない無数の「白いもの」。

もう、ナナにはこの戦争の規模について、少しも想像がつかなくなっていた。

だが今は、ナルトの側を離れない。

たとえその行動が戦況とは関係なくとも、彼の側にいることだけが身体を……そして脳を動かす唯一の意志だった。

今はもう、ホクトが消えたことで「もうひとつの意志」は摘み取られてしまった。

この戦場のどこかに……イタチがいるのなら……。彼を探し回ることはもうできない。

だからせめて、彼がもしナルトの九尾とビーの八尾を奪いに来たら……いや、来させられたら、自分が戦おう。

ナルトを制してでも。必ず……。  
そう思った刹那。

願いが通じたのか……それとも誰かが仕組んだ残酷な罠か……。  
すぐ近くに「彼」を感じた。

忍が五感で感知できる気配ではなく、ナナにしかわからない「魂」  
の気配が……。

「ナルト」

ドクンと心臓が波打ったとき、すでに足を止めていた。

「ナナ？ どうしたんだってばよ？」

「光」に向かって言う。

「こっち……」

方向を変えて走った。

「光」を先導するのは不思議な感じだった。が、ナルトは何も言わ  
ずについて来てくれた。

彼がどう思っているか、おそろくいぶかしく思っているのだろう  
が、それに配慮して説明する余裕はなかった。

気が急いだ。

「彼」が近くにいるということは、つまりたった今想像したとおり  
……いや、期待したとおり、ナルトとビーの中にあるものを目的とし  
て動かされているのだろう。

どうせ対峙するのなら、まっすぐに向き合ったほうがいい……。

それが自分の、我儘だとしても。

そして……二人より先に、彼と戦おう。

彼が自らの命を賭して護った世界の「敵」になってしまいう前に、そ  
れを阻止することが自分の役目だ。残された役目……。たったひと  
つ、今からでも彼にしてあげられることだ。

悲哀が胸を刺した。

が、躊躇わずに進んだ。

冷涼な風の吹く川辺。そこで足を止め、顔を上げた。

「イタチ……」

もう逢えないはずの彼が、そこにいた。

「うちはイタチに……長門?!」

後ろでナルトが素っ頓狂な声を上げた。

ナナはじつと、二人を見た。

穢土転生……その忌まわしき術による“蘇り”の姿は、どこことなくヒトとしては不完全で、死臭を纏っているように思えた。

が、まぎれもなく、その偽りの肉体から感じるのは、うちはイタチと、木ノ葉崩しの時に出会った長門の“魂”だった。

「イタチ……」

それをこれほどまでに身近に感じていても、言葉が出てこなかった。

たった今まで決意を持ってここに立ったはずなのに、身体じゅうの細胞が固まったように動かなかった。

「ナナ……」

イタチの目も、こちらを向いていた。

死者の証しのような……黒と赤の瞳。何かもの言いたげで、何かを諦めたような、憐みのような……。

が、彼は少し笑って言った。

「懐かしいな……その姿……」

たったそのひとことで、ナナの脳裏に過去の情景が押し寄せる。

和泉の里で出逢った、白袴をまとった幼い自分と、まだ少年だった忍装束のイタチ……。

目を、逸らしそうになる。

彼は穏やかなまなざしで、ゆるい笑みを口元に浮かべていて、本当に懐かしそうに自分を見ている。

そして少し悲しそうに。

思い切り歯を食いしばって、それに耐えた。

ああ……なぜ……なぜ、イタチの意識をも拘束してくれなかったのか。なぜ、イタチをイタチのまま蘇らせたりするのか。

心から術者を……カブトを憎んだ。

その憎しみで、ようやく立っていられた。

「アナタたちは……私が……」

敢えてあのメガネの奥で光る陰険な目を思い浮かべつつ、

「私がこの手で送り返す……!」

決意を口にした。

イタチは、かすかに嬉しそうに笑んだ。

懐かしい笑みだった。

そうだ、イタチはずっと、こういう自分の姿を見守ってくれていたのだ。「強い」自分を、折れない姿を、耐えることを、認めてくれていた。

だから、愛してくれていた……。

もう、何も聞かないことにした。

マダラが話したイタチの真実の是非を、彼には問わないことにした。

本当は、イタチ自身の口から聞きたかった。

「そうするしかなかった」のだと、自らの傷をちゃんとさらけ出して欲しかった。

そして、彼に謝りたかった。

護れなかったこと、ちゃんと側にいなかったこと、何も報いることができなかったこと……。

だが、そんなことはもう無意味だった。

最初からマダラの話の嘘と思えなかったし、それが何よりイタチの生き方そのものと思えた。

それに、イタチにそれを認めさせることは、彼を余計に傷つけることだった。

問いただきたいのは自分のため。懺悔はただの自己満足。

だからこそ、口をつぐんで強い心でイタチと向き合い、やるべきことをやらねばと思った。

昔の、幼い頃のように……。あの時のような強さを……。

「大丈夫だよ。ちゃんと私が終わらせるから」

笑って言えた。

あの頃と同じ、水の調べを聞きながら印を結ぶ……。

「さようなら」

満月の下、血の匂いにまみれたイタチと、別れた時のように。

「ナナ」

と、肩に温かい感触があった。

「お前はちよつと下がってろ」

今まで黙っていたナルトが、少し前に進み出る。

「え？」

光が、彼の周りで花びらのように舞った。

「お前はイタチと戦っちゃだめだつてばよ」

奥底に隠していた弱い部分を、照らし出されたようだった。

「で、でも！」

「ぜつてーダメだ！」

揺らぐ心を必死でこらえようとしているのに、ナルトはまっすぐな声で言った。

「お前の気持ちはわかってる！　けど、お前はイタチと戦っちゃだめだ。代わりにオレが戦う！」

「ナルト……」

そして、振り返って笑う。

「お前は二人を『送る』役目だつてばよ!!」

光が強さを増していた。

「ナルト……」

向こうでイタチと長門が、静かに笑んだ。

が、そのイタチが急に片手で印を結び、こちらに向けて火遁業火球の術を放った。



涙、ふたつ

イタチが放った赤い炎の塊が三人を焼き尽くす前に、ビーが『鮫肌』でそれを真つ二つに切り裂いた。

「イタチ?! 急にどうしたんだってばよ……!」

「後ろで操ってる奴の言いなり……! 攻撃もいきなり♪」

突然のイタチの攻撃に慌てるナルトに、ビーが言う。

「操ってる奴」……すなわち術師である薬師カブトが、イタチと長門の身体を操っている。その偽りの身体だけを……。

「サスケはどうなった?」

攻撃を仕掛けながら、イタチがナルトに問う。

「サスケは……『暁』のメンバーに入っちまった! 木ノ葉へ復讐するつもりだってばよ!」

それを懸命にかわしながら、ナルトが答えた。

その言葉にイタチは眼を見開く。

「なぜだ? サスケは里へ帰らないのか……?」

「アンタの『本当の極秘任務』のことを聞かされて……。それでサスケは里を潰すことを選んだんだ!」

ビーもイタチに向けて鮫肌を振るう。

が、イタチの身体は彼自身の動揺と関係なしに、難なくそれをかわしていた。

「まさか……マダラが……」

「オレもアンタの本当のことをマダラから聞いた……!」

そしてナルトが、叫ぶようにこう言った。

「ナナも知ってる……!!」

一瞬、静寂が訪れた。

双方、間合いをとる。

イタチはナナを見た。ナナもそれを受け止めた。

「……そういうことか……」

イタチがそう呟いた。

「マダラが言ってたことはやっぱ本当だったんだな?! うちは一族が

木ノ葉をのつとろうとしたってのも、それをアンタが……」  
「もういい」

ナナを見つめたまま、イタチはナルトの言葉を遮った。  
それはまぎれもなく肯定の証しだった。

ズキリ……と、胸の奥が痛んだ。

もうとつくに慣れたはずの感覚なのに、未だに痛みとして感じる。

「ナルト、サスケのことはお前に任せる」

「ハナからそのつもりだ！」

ズキン……もう一度。

深く、息を吐いた。

長門が巨大な怪獣を口寄せして足元が揺れても、ビーがタコ足で地をえぐつても、ナナはそこに、じつと立っていた。

カブトはどうやら、目的のモノ以外は眼中にないらしい……。

イタチと長門が、ナナに向けて攻撃を仕掛けてくることはなかった。

『お前はイタチと戦っちゃだめだつてばよ』

ナルトの言葉が蘇る。

彼がどんな意味を込めてそう言ってくれたのか、よくわかる。それくらい、今、心は静まっていた。

もう一度、ゆつくりと印を結んだ。

指先は情けないほど冷えきっていたが、さつきまでの震えはなかった。

「イタチ……」

もう一度、彼を見る。

すでに声が届かぬところで、戦闘が繰り広げられていた。

「私がちゃんと、終わらせるから……」

眩いた。

無理に笑ったせいで、目の下がひきつった。

“呪”を唱えた。葬送の術の、禁術に値する呪文だ。

ナルトがイタチを倒したら……いや、イタチがナルトを倒す前に、自分がイタチの魂を送り返せるように。いつでも術を発動できるよ

うに。

術をかけるには、相手の“魂”を捕らえる必要がある。

意識のうちで捕らえる……というか、それを感じとればいいのだが、これだけの激しい動きをされればそれも難しかった。

地が揺れ、風が荒れ狂い、砂塵が舞う。穏やかな川の流れなど滑稽に映るほどに、目の前の光景は凄まじい。

それに、彼らほどのチャクラを持つ者であれば、きちんと術をかけなければ“外される”……あるいは“返される”可能性があった。

ナルトとビーが、彼らの動きを止めてくれなければ、術を発動し得ない。

が、激しさを増す戦況とは逆に、心はどんどん冷静になっていた。

ナナは片手で印をもう済んだまま、もう一方の手で髪についた葉っぱを払いのけた。

長門の怪獣が、さつきよりも頭の数を増やしている。ナルトはその背に乗っていて、鳥の姿をした怪獣が彼を見下ろすように空中にとどまっていた。

長門とイタチは怪鳥の頭部にいる。

ビーは少し離れた河原に立っていた。

劣性……と思った。

が、加勢は無意味だった。今は力も足りないし、ナルトの言葉を信じたかった。

「ナルト……?」

そのナルトが、突然、口から黒い塊を吐き出した。

影……? 墨……? いや、カラスだった。

突然現れたカラスは空を少し旋回して、ナルトの肩に乗った。

次の瞬間、獣の頭に黒い炎が上がる。

そして、長門と怪鳥の身体にも……。

「え……?」

それが何を意味するのか理解しきる前に、イタチが目の前に現れた。

「うわー！ ナナ!!」

ナルトが慌てて駆けつける。ビーも鮫肌を構えて走って来たが、

「大丈夫だ。オレはもう操られていない」

イタチはそう言った。

そうして淡々と状況を説明する。

かつて、「木ノ葉を守れ」という幻術を自分自身にかけていたのだと。

その幻術を仕込んだ眼をあのカラスの左目に埋め込んで、イタチ自身の万華鏡写輪眼に呼応して現れるよう細工した。そして、それをナルトに託していたのだと。

その眼とは……。

「うちはシスイの、万華鏡写輪眼最強幻術『別天神（ことあまつかみ）』だ……」

イタチはその眼の持ち主だった者の名を口にした。

ナナの目を見て。

「うちは……シスイ……？」

名前は聞いたことがあった。

誰に聞いたかは思い出せない。サスケだったか、カカシだったか、里の噂か……。『最強の写輪眼使い』ということで、その名を聞いていた。

が、今イタチの口からその名を聞いて、点と点が繋がった。

イタチが昔、一度だけ話してくれた「親友」の話……。

『誰よりも里の平和を願い、忍のあるべき姿を知る忍だ。オレは彼のようになりたいたいと思っている』

たしかイタチはそう言っていた。珍しく少しだけにはにかんで。

その『彼』が、うちはシスイだったのだろう。

その証拠に、

「陰から平和を支える名もなき忍……。それが忍のあるべき姿だと、シスイがオレに教えてくれた」

イタチは今、彼のことをそう語った。

そして彼から、「里を守るために使え」……と、その眼を託されたと

言った。

最強の万華鏡写輪眼を持つシスイの片目は、あのダンゾウに奪われた。が、シスイは残る眼をめぐって争いが起きぬよう、イタチにそれを託し、自ら眼を潰したように見せかけて死んだという。

自己犠牲……。彼は己の信念の通りに死んだのだ……。

「なんで……オレにそれを渡したんだ？」

全てを聞いて、ナルトが問う。

イタチははつきりとした声ですぐに答えた。

「お前がシスイと同じ思いを持つていたからだ」

ナルトはまだ理解できていないようだったが、ナナには次にイタチが何を言うのか全てわかった。

だから、少し目を伏せた。

イタチはナルトにこう言った。

「オレが残したサスケが里の脅威になるのだとしたら、シスイの思いに反することになる。それを正すことができるのは、お前しかいなかった」

そうだ。

イタチはそれをナルトに託していたのだ。自分じゃなく、ナルトに……。

それがイタチの優しさだと、今でははつきりわかっている。

それに、イタチが何を願っていたのかも。

イタチは自分にサスケを「正す」のではなく、ただサスケの側にいてやって欲しいと……それを願っていたのだ。

だからあの時……「連れて行ってくれ」と頼んだ自分を、「イタチと一緒にいたい」と言った自分の手を取りはしなかった。優しく笑って突き放したのだ。

そして自分もまた、そうしなかった。本当は自分もサスケの側にいたいのだと、思い知らされただけだった。

やり残したことを終わらせたらず会いに行く。その先は絶対にずっと離れない……。

そう約束しておいて、それを破った。

イタチとの初めての約束を、破ったのは自分だった。それもきつと、イタチの願いだった。

あれほどこちんと、「愛おしい」と言ってくれたのに……。

(イタチ……)

涙がこぼれそうだった。心の芯がまた震えだした。

だが。

「イタチ……。オレのこと、信頼してくれてありがとう」

託されたナルトはそう言った。

「アンタはもう十分、里のためにやった。あとはオレに任せてくれ！」

そう……。それが今、イタチにかけるべき言葉だ。

謝罪じゃなく……。もう十分だと、あとは任せてくれと、そんな言

葉がイタチの思いに報いるのだ。

「弟は、お前のような友を持って幸せ者だな……」

イタチが嬉しそうに笑んだ。

とうとう、涙がひと粒零れ落ちた。

ナルトが言った言葉を、本当はイタチに向かって言いたかった。あの笑みを、こちらに向けて欲しかった。イタチに安息をあげたかった。

だが、その切れ端さえも口にできなかった。

歯を食いしばって、こぶしを握って、もうひと粒の涙をこらえているというのに、芯に力が入らなかった。

「ナナ、準備はできているな？」

イタチが大人びた眼差しで言った。

「うん」

袖で頬をこすりながら答えるのが精いっぱいだった。

イタチの合図で、イタチ、ビー、そしてナルトが、いっせいに長門に向かって行った。

それを見送って、再び印を結んだ。

手が、小さく震えていた。

## 今度こそ

空に吸い込まれるようにして、瓦礫や木々が根こそぎ大地から剥ぎ取られ、飛んでいた。

それらは徐々に一点に集まり、ひとつの塊になっていく。ついこの間、木ノ葉隠れの里で目にしたモノと同じだった。

ペインの術……星を降らす破壊の術……地爆天星だ。

ナナはあの時とは別の印を結ぶ。

イタチの須佐能乎が、ビーと尾獣が、そしてナルトが風遁で、空に上がった塊に向けて攻撃を放つ。

塊の引力がそれらを加速させ、三方向からまともに攻撃を受けて、塊はただの瓦礫となった。

それを見届けずに、ナナは礫の降り注ぐ場所へと走った。

「すまなかつたな……いずみナナ……」

長門の顔は穏やかだった。

彼の魂は、完全にナナが掌握していた。

「何か……言い残すことは？」

長門は少し笑って、ナナの後ろに駆けつけたナルトに向けて最後の言葉を遺した。

彼の足もとに、青白い光が現れる。迎えの星だった。

「じゃあな」

長門はそう言って笑った。

「さようなら」

ナナは誰にも聞こえないくらい小さくささやいて、術を終えた。

星の光は長門を包み込んで、その身体をかき消した。

塵の後に残ったのは、誰か知らない人間の変わり果てた姿だけだった。

「サンキューナナ！ お前のおかげで長門は安心して戻れたってばよ！」

「さすが和泉の姫！ 和泉の秘術は初めて！♪」  
振り返って笑わなきゃ……そう思った。

さつき抑え込んだはずの涙が、また、情けなく溢れそうになっていた。

何故なら……。

ナナにとつては何も終わってなどいなかった。

長門を送り返しても……イタチは……イタチ自身の意志をもったままここにいる。この、手を伸ばせば届くすぐ側に、言葉も交わせる状態で。

だが。

「うん、よかった。あの人が苦しまなくて」

もうこれ以上、見せてはいけないのだ。弱くなってしまった自分を。

「あの人、ナルトにいいこと言ってたね」

今さらだが、見せなくてはいけない。昔のように強い自分を。

「あの人には、結局カカシ先生や里のみんなが助けてもらったから、ちゃんと送れてよかった」

イタチが見ているから。

「ナナ！」

ナルトが安堵したように笑う。

「イタチは……」

だからまっすぐに

「本当に、もう操られていないんだよね？」

イタチを見上げることができた。

「ああ……」

イタチの目は、何か言いたげだ。懐かしい、心配を押し殺したような目……。

が、その色がにわかにな変わった。

「穢土転生はオレが止める」

イタチは唐突にそう告げた。

「マダラはお前たちに任せる」



とても、静かだった。周りにはまだ天照の黒い炎がくすぶっているのに、とても静かだった。

イタチの言葉に反し、自分ひとりで引き受けると言い張るナルトを、彼は静かに諭した。

その声は、懸命に平静を装う心にじんわりと染み渡った。

「火影になった者がみんなに認められるんじゃない。みんなに認められた者が火影になるんだ」

ナルトに向き合う姿は、まるで……。

「……仲間がいることを忘れるな」

まるで、「兄」のようだった。

ナルトは素直に彼の言葉を聞き入れた。

くすぶっていた黒炎も、ようやく消えた。

対してイタチは、うちはシスイの目を持つ先ほどのカラスを天照で焼き消した。

シスイの眼はもう十数年使えないから、「サスケの時」には使えないだろう……と。

それに……。

「ナルト、お前はシスイの眼以上のものを持っている。今のお前なら、この眼を使わなくてもサスケを止められるだろう」

ナルトの心を認めた。

イタチの台詞のひとつひとつがあまりに淡々としていて、胸を刺すような痛みは感じなかった。

ああ……イタチは本当にナルトを信じて、サスケを「託した」のだ……と、漠然とそう思っただけだった。

だからイタチは、

「今ならアンタも直接サスケに会える！ だから今度こそ！」

そう叫んだナルトに、

「いや……」

大人びた笑みで応えた。

「オレは全てひとりですしょうとし、失敗した……。だから今度は……、今度こそ『仲間』に任せる」

仲間だから……サスケの親友だから……ナルトだから……。だからイタチは何の思い残しもないような清々しい顔でそう言ったのだ。何より大切な存在であるサスケを、ナルトに託したのだ。

そう、自分ではなく……。

「ナルト」

安堵感と、少しの寂しさが入り混じった感覚を覚えたとき、一粒の「意志」がふわりと浮いた。

「ごめん、ナルト」

このカタマリを感じるのもずいぶんと久しぶりだな……と自嘲しつつ、ナルトに言った。

「私、イタチと一緒に行く」

何か言いかけたイタチを制し、まっすぐ、ナルトに言う。

「ナルトの側にいるって約束しておいて、しかも火影様の命令を破ることもなるけど……でも……」

イタチが死んでから無くしたと思っていた、まっすぐの想い。

「私はもう、イタチをひとりで戦わせたくない」

自分勝手だろうが、命令違反だろうが、それでも周囲を突き破るほどの、まっすぐな……。

「イタチが穢土転生を止めるなら……それはイタチが消えちゃうってことになるけど……私は……」

自分の言葉に涙が出そうになっても、笑って言える「意志」だった。

「それを見届けたいから」

また、彼の「死」を目の当たりにすることになろうとも。もう一度あの絶望を味わうことになろうとも。

「ナナ、お前はナルトと行け」

イタチはきつとそれを知っていて、少し強く言った。

その理由はよくわかっている。

ナルトとともにある存在……まるで最初から彼の影のように産ま

れた自分を、一番理解してくれていたのがイタチなのだから。使命を受け入れて生きて来た自分の「強さ」を、イタチは愛してくれていたから。

今、「この時」に使命を果たさぬ自分を、彼は案じてくれている。そう……「案じて」くれているのだ。

「イタチ」

また、心配を忍ばせた目。

そこに向けて、伝える。

「今さら」だけど、私はアナタと一緒に行く」

本当に今さら……だが、ずっと言いたかった言葉。

「私を……連れて行って……」

風が流れた。急に水の香が強くなった。

ナルトもビーも、何も言わなかった。

イタチは目を伏せた。

(大丈夫……大丈夫だから……)

彼に向けて想いを飛ばす。

今度こそ……今度こそイタチと一緒にいきたいと、強く願っている。

たとえ火影の命に反することになろうとも。使命を果たすという生き方を、ここで変えることになろうとも。また別れを繰り返して、苦しむことになろうとも……。

覚悟はできている。

だから、大丈夫だから……。今度こそ……。

「ナナ……」

イタチは今度も応えてくれた。

「わかった。行こう。一緒に」

彼に向かってうなずいた瞬間、油断したのか、涙がこみ上げた。

それを堪えて、言った。

「ナルト、イタチと穢土転生を止めたら、必ずアナタのところに戻るか

らね！」

ナルトは、心から嬉しそうに笑ってくれた。

「ああー、待ってるってばよー！」

また、背中を押された。

本当はナルトに謝りたかった。

自分の存在自体が、無意識にも彼の負担になっていたことを知っていたから。

だが彼は、自分を護ったり、九尾の始末をする使命などもう忘れろ……とは一度も言わなかった。

この「使命」……など、今はもう、逆にナルトの重荷でしかないのに。

「ありがとう、ナルト」

彼のそのやさしさに向けて、そう言った。

「使命」を「絆」に変えてくれた彼に。

「ぜってー戻って来いよ!!」

その「光」に再会を誓ってうなずいたとき、イタチがほつと息をついたのがわかった。

ようやく安堵してくれた……そう思うと、うれしかった。

そして、再び戦いの場へ向けて走り出したイタチの背を、もう見失うことはなかった。

## 第4章 共闘編

### 思恋（しれん）

イタチの背は、暗い森の奥へ吸い込まれていくようだった。

あれから一度も振り返らない。交わす言葉もない。視線も交わらない。決意を確かめ合うことも……。

二人にその時間が許されていないことは十分にわかっていた。

だが、もう彼の姿を見失うことはない。ちゃんと、ついて行くから……。

『私を連れて行って』

その願いが、やつと叶った。

本当はあの時、必死で呑み込んでいた言葉。幼い自分が、涙と一緒に押し留めた言葉。

『私を連れて行って』

そのことを深く後悔している。

我愛羅が死んだ日。約束の場所に逢いに行かなかったことではなくて……。

もつとずつと、最初の話。

イタチが木ノ葉を抜けて、いつもの場所に現れた日……。

風の強い夜。空には不気味なほど輝く円い月。

あの場所に、イタチは冷たい眼をして現れた。全身から血の匂いを漂わせ、傷の入った額当てを身に着けて。

あの気味の悪い満月の下で、馬鹿みたいに意地を張って、この言葉を言わなかった。

それを今、とても後悔している……。

イタチに初めて会ったのは、まだ3つときだった。

あまり顔を合わすことがない父と母に呼ばれ、『木ノ葉隠れの里』というところから、客人が来ると聞かされた。

疎遠な両親との貴重な対面だったから、その時のことはよく覚えている。

姉が、その客人への「ご挨拶」を何度も言いつて聞かせた。意味はよくわからなかったが、日々読まされる呪文より簡単だったから、すぐに諳んじることができた。

イタチは、とても静かなコだった。

そして、それまで自分に向けられてきた他者からの視線とは異なる目で自分を見つめた。

和泉の里にいる間中、表情を変えることはなかったが、その目を見ただけで不思議と理解できた。

この人はやさしい……。

だから、また逢いたかった。

二度目の対面で、イタチに式神を渡した。

イタチにとって本家は居心地が悪そうだったから、自分だけの領域だったあの滝の場所へ来られるようにと。

逢いたかったから、そうした。

そしてイタチは、ちゃんと逢いに来てくれた。

もちろん、決して頻繁ではなかった。

二月に一度か……いや、三月に一度だったか……あの頃の幼い自分にとつて、里の中が世界のすべてであり、修業だけの毎日だったから、あまり時間の概念がなかった。

だから曖昧ではあるが、たぶんそのくらいの頻度だった気がする。

最初の頃の話は、出会いの時以外、正直あまり覚えていない。

そのくらい幼かったのだ。

ただ、毎回イタチの姿を見つけた瞬間、嬉しくて飛びついたのは覚えてる。

そしてだんだん気づかされた。

自分の日常が、どれだけ平坦でつまらないものなのかを。自分の周りの人間が、どれほど自分を怖れ、忌み嫌っているのかを。

イタチの愛情があったからこそ、イタチへの思慕があったからこそ、そういう逆の感情もまた、ひとつひとつ覚えていったのだ。

もしイタチに出会わなければ……。

イタチとの別離の後、何度も考えた。

もしイタチの存在がなければ、もしかしたらもつと楽に生きられたのかもしれない。こんなふうには、イタチとの別れで深く傷つくこともなく。背負った使命を重く感じることもなく。

サスケのことも知らないで……。

今とは全く違う自分になっていた。

何も知らず、何も考えず、何も感じない……ただ、九尾の人柱力を見守るだけの存在。その器が欠けたときは、それを完全に破壊して、自分が変わりの器となる……そのためだけに生きる存在だった。

今は……痛みを知って、絶望を知って、憎しみも覚えて、そして……愛情も知った。苦しくても、弱くても、それが生きるということだとわかった。

イタチに出会わなければ……生きられなかった。

(イタチ……)

今、胸が潰れそうに痛む。

この痛みは、彼にももらった生きる人としての「感情」に違いない。

(ねえ、イタチ……)

あの夜に、言えばよかった。

『私も連れて行って』

こんなふうには、イタチがひとりでも何もかも背負って苦しむことがわかっていたら……あの時そう言えばよかった。

彼のことが誰よりも大切だと、ちゃんとわかっていたのに。

あの時の自分はまだ幼くて……とても愚かだった。子供のくせに涙まで我慢して……。

「使命」から逃げずに生きることが強い生き方だと、勝手に思い込んでいた。

結局、イタチという存在よりも、つまらない自我を選んだだけ。

何が使命……何が強い自分……。

そんなモノに必死にしがみついていた頃を、心底後悔している。イタチと一緒にどこへでも行っていたなら、イタチの側に居られた

なら、イタチの背負ったものを少しでも分けてもらえたかもしれないのに。

少なくとも、イタチがずっと孤独に生きることはなかったのに。

(ごめん……ごめんね、イタチ……)

二人の別れが宿命だと、さつさと悟っていたくせに、そのことを一度も口にできなかった。

(ごめんね、イタチ……)

イタチはそんな自分を認めて、愛してくれた。「強い」と言ってくれた。

けれど……今は、それを完全に否定する。

自分は何もしてあげられなかった。イタチに生かされたのに。

自分にとつてイタチは特別で、大切で……親であり、兄であり、親友であり、師であり、憧れであつて、そして未来の夫だつた。

それなのに、少しも彼を護れなかった。何もわかっていなかった。彼の苦しみを、ひとつも見つけてあげられなかった。

これから……「サスケの側にいる」とすら言えずに……。

今さら遅すぎることはわかっている。イタチに何もしてあげられない、その事実が少しも変わらないこともわかっている。

でも……せめてイタチを、もう二度と孤独のままに逝かせたくはない。

たとえ、また繰り返されるただの自己満足だとしても……。

イタチを……、イタチの“生”を、最期までちゃんと見届けたい。

この醜く廃れた心に、イタチの想いを刻み付けたい。

イタチはきつと許してくれるはず。

暗い影を背負ったままでも、それでもあの世界に忘れられたかのような場所まで逢いに来てくれていたから。

(イタチ……今度こそ私がアナタの側にいる。もう、最期まで離れない。イタチのことが誰より大切だから……)

しかし、それを伝えることはできない。

イタチは決して立ち止まらない。

彼はいつも己の成すべきことを知っているから。己の成すべきこ



とを一番に考えるから。そして必ずやり遂げるから。

この禍乱の歯車を、彼は止めようとしている。

自身のことなど考えず、すでに起きてしまった悲劇を止めようとしている。

だから、彼は立ち止まらない。この想いを伝える間は少しも与えてくれない。

それが「イタチ」だから仕方のないことだった。

痛んだとしても、苦しくとも、また全てを飲み干して彼を見送ろう。

(ちゃんと、笑って……)

もう一度、彼の背を見つめた。

いつもいつも、見送っていた彼の背。それに今はついて行っているだけでも良かった。

(きつと、この姿をサスケに伝えることはできないだろうけど) 痛む。

けれど……これが自分。この痛みは、イタチがくれた痛み。イタチがくれた「私」。

だから……。

イタチの想いを抱えて、サスケに……。

(ごめんね、イタチ……)

声にはならなかったはずだった。

だが。

「身体は大丈夫なのか？」

彼が不意に振り返った。

「え……？」

間の抜けた声が出たと同時に膝が崩れた。

まっすぐに前だけを見ていたはずの彼の瞳が、こちらを向いている。

「鬼鮫をひとりで倒したと、ナルトから聞いたが……」

心配されぬよう、懸命に体勢を立て直す。

「うん。大丈夫だよ」

はためくマントを見ながら、平静を装って答えた。

「お前が、あの鬼鮫を倒すほど強くなったとはな」

イタチがほんの少し笑っているのがわかった。

嬉しかった。

イタチは暁で鬼鮫と組んでいたから、その強さをよく知っているはずである。だから、ちゃんと認められた気がして嬉しかった。

「だが……」

イタチはかすかに目を細くして言った。

「何故、ひとりで戦うような無茶をした？」

あの時の状況は知らないはずなのに、イタチはその行為を「無茶」と決めつけた。

まるで、空から見ていたかのように。

「だって……知りたかったんだもん」

自然と、子供のような口調になった。

「イタチのことを、鬼鮫つて人から聞きたかったんだもん」

イタチは黙った。

足は止めない。が、口をつぐんだ。

「イタチがどんなふうにごしていたか……私の知らない間のイタチのことを、何でもいいから聞きたかった」

あの時の必死な気持ちがある。

今それを言っても仕方がない。止めようという気はあったが、足を

止めない代わりに口も止まらなかった。

「……イタチの……病気のこと……」

少しの沈黙。

ポツリ……。森の隙間から雫が落ちた。

「マダラに聞いたのか……？」

「うん……」

雫はにわかにも雨となり、二人に降り注いだ。

「原因はわからない……不治の病だった……」

湿った空気が、イタチの言葉をゆつくりと運ぶ。

「あの時」すでに、オレはもう長くはなかった」

「あの時」……サスケとの戦いのさ中、血を吐くイタチの姿を思い出す。

あれはサスケの攻撃によるものでも、自身の術の影響によるものでもなかった。

また焼けつくような後悔がどっと押し寄せる。降りしきる雨が、あの時と同じ冷たさに思える。

遠くで雷鳴が轟いた。

耳の奥で、サスケの音がする……。

『雷鳴と共に散れ』

イタチと一緒に逝こうとしたあの時に、最期に聞こえたサスケの声  
が……。

その瞬間、鼻の奥がスツとした。まるで思い切り冷気を吸い込んだ  
時のように。

それは一気に脳の奥まで入り込み、凍らせた。

「ナナ、どうした？」

一瞬目の前が眩んで、気づけばぐちゃぐちゃの地面に膝を付いてい  
た。

「ナナ」

頭上でイタチの音がした。

「イタチ……」

言葉が出ない。身体が動かない。息が切れる。

見上げたイタチの黒い目に、こんな自分は映らない。

「ナナ、やはり身体が……」

イタチも膝を付いた。

そして、肩に手を……。

「お前はここで休め。穢土転生はオレが……」

「だめ!!」

反射的にイタチの胸倉を掴んだ。

初めて、彼は驚いた顔をする。

「ナナ……」

脳が震える。肺が震える。心臓が震える。心が……震える。それを捻じ伏せ、掴みかかるようにして叫んだ。

「どうして平気なの?! 何も言わないで!」

自分の膝とイタチの膝が、ぐちゃりと音を立てた。

「全部ひとりで抱えたまま逝っちゃって……どうして平気なの?!」

面倒なこの手を振り解いて、イタチはひとりで穢土転生を止めに行ってしまう……。

その恐怖は確かにあった。

今さら無駄だ……という諦めも、彼を困らせてしまう自己嫌悪も。

だが、そんな理性は感情に追いやられていた。

「私は……、私はアナタに言いたかったことがたくさんあるのに……

! 聞きたかったこともたくさんあるのに……!」

イタチがどういう人か、良くわかっているのに。

「また、このまま何も言わないで逝っちゃっても平気なの?!」

彼の言葉を欲することも、想いを伝える時間を願うことも、勝手な我がままに過ぎないこともわかっているのに。

「願うことは……あったでしょう?!」

彼は「無念」をひと粒だつて零さない。

だったらせめて、「願い」を遺して欲しかった。

「イタチ!」

彼が悪いのだ。

また、こちらを見たりするから。また、言葉をくれたりするから。また、氣遣ったりするから。「あの時」の話なんてするから……。

「ナナ……」

困るなら、迷惑なら、不愉快なら、さつさとこの手を振り払って「成すべきこと」のところへひとりで行ってしまっても良いと思った。望んだ最期ではないけれど……。イタチが愛してくれた姿とは違ってしまったけれど……。

もう、どうしようもないのだ。

いつそ怨みすら込めながら、歯を食いしばり、彼を睨みつけた。

「ナナ」

が……、イタチは手を振りほどいて突き放すことはなかった。目を逸らすことも。

むしろ、静かに口元を緩めた。

「お前だって、オレに言いたいことや聞きたいことがあったのに、今までそれを言わなかった」

「え……？」

「それは、お前が『全て』をわかっているからだ」

イタチのものではない黒い目の中に、かつての優しい光が見えた気がした。

「今、話している時間などない。一刻も早く穢土転生を止めなければならぬ。でなければ仲間が傷つく。たくさん殺される。死ぬ……それがわかってるからだ」

その目には、いつも心の奥底を見透かされてきた。

「ナナ、お前は昔からそうだ。何も変わっていない。自分のすべきことがちゃんとわかっている。そして誰かのためなら己を殺す……、芯の強い子だった」

まるでイタチのことを言っているよう……。

そんな、不思議な感覚だった。

「オレは、そんなお前と出会えて幸福な生涯だった」

偽りはなかった。偽りの身体でも、彼の魂は本物だったから、その言葉は真実だとわかった。

だが。

(それだけ……?)

そう思った。

満足感も、幸福感も、達成感も感じなかった。  
本当は、『もう一つ』あることを知っていた。

『サスケの側にいてやってくれ』

イタチはそう願っているはずだ。願っていたはずだ。初めから……今も。

が、彼はそれを口にしない。最期の最後まで、はっきりと願いを示してはくれない。

サスケのことはナルトに託した……。

(だから……?)

いや、違う。

それはやはり、彼が優しいからだ。彼こそ「全て」を知っているからだ。

「本当の願い」が自分を苦しめることをイタチは知っている。

だから、思い残すことなど他にはないような顔をしてこちらを見つめている。

(相変わらず……)

お互いにわかり合っていて馬鹿だ。

そう思う。

今ここで『サスケを護る』と言っても、彼は信じないだろう。『サスケに殺される終わりを待っている』と言えば、彼を困らせるだろう。『穢土転生を止める前にサスケに会って。話をして』と願っても……、彼はそれを拒むだろう。

もうこれ以上、自分だって何も言えないのだ。

「イタチ……ありがとう……」

想いを口にした。

「私もだよ……。アナタに出会えて本当に幸せだった」

後悔を呑み込んだ。

そして。

「行こう、イタチ」

願いを捻じ伏せた。

「最後は二人でやり遂げよう」

先に立ち上がる。

力が泥に吸い取られて行くようだったが、目尻の水玉は雨が攫ってくれた。

「ああ」

うなずいたイタチの顔は、満足そうだった。

「行くぞ」

最後に少しだけまたこちらを気づかって、イタチは再び木の枝に飛び上がり駆け出した。

泥で汚れた袴を蹴り上げ、ナナも飛んだ。

また、彼を追う。少しも離されないように。

(きつと、この姿をサスケに伝えることはできないだろうけど)

痛みがループした。

(もう一度だけ……。イタチとサスケ……。二人で話すことができたら……)

捻じ伏せたはずの願いはまだ、心に指を掛ける。

性懲りもない。情けない。

が、もう足は止めない。

(サスケ……)

久方ぶりにサスケに想いを飛ばしながら、イタチを追う。

(ねえ、サスケ……。イタチはここにいるよ……)

すっかり濡れそぼった叶わぬ願いを握りしめて、彼の背を追う。

(サスケ……)

再び死に逝くイタチよりも、無様に大きく膨れた無念から目を逸らさずに。

(サスケ……！)

その時だった。

(ナナ……?!)

確かに、聞こえた。

「え……？」

確かに、響いた。

「ナナ、どうした？」

わずかな息遣いに気づいたのか、走り続けたままイタチが問う。

「イ……イタチ……」

予感が勝手に膨れ上がって、うまくしゃべれない。

「い、いる……」

恐怖ではない怖れが、声を震わせていた。

イタチは振り返った。

目が合った。

やはり、彼は悟ったような顔をした。



## 眼

耳の奥から自分の鼓動が聞こえた。

イタチは黙りこくったまま、走るスピードを少しも緩めない。

彼の濡れそぼったマントから視線を逸らし、木々の下を垣間見る。予感はずでに確信だった。この感覚は、初めてではなかった。

風に揺れ、雨水を滴らす枝の向こう……下方の根元に、彼は居た。

「ナナ……？」

この距離では聞こえないはずのかすかな呟きが、鼓膜を震わす。

「サスケ……」

思わず足を止めた。

彼の眼は、薄闇の中で赤く光っていた。

驚いたような……困惑した表情。

そして視線は、イタチの影へ……。

「待てー！」

サスケは一瞬にしてナナを置き去りにし、ひた進むイタチの後を追った。

「ま、待ってー！」

反射的に身体が動いた。

イタチは止まらない。サスケはそれを追う。

濡れそぼって千切れそうな心を抱えたまま、ナナはそれを追いかけた。

「イタチなのか?！」

サスケの問いに、イタチは答えない。

「待ってって言うてんだろうが！」

サスケが須佐能乎の手をイタチに伸ばす。

それを……イタチも須佐能乎の手で払う。

「まさか……お前も須佐能乎を使えるようになっていたとはな……」  
ようやくイタチが言葉を発した。

「なぜだ?! なぜアンタがここにいる!? アンタはあの時死んだはずだ!」

サスケの戸惑いが、風を伝って来る。

「お前と話している暇はない。オレにはやらなければならないことがある」

「そんなの知るか! アンタには聞きたいことがある!」

「後にしろ……と言っても聞かないか……」

「アンタが前に言ったんだろ! オレと同じ眼をもってオレの前に来いと!」

イタチはまた黙った。彼の思いもまた、同じ風を伝って来る。

奥歯を強く噛みしめた。

先ほどのイタチの言葉を思い出す。

『オレは全てひとりです。でしようとし、失敗した……。だから今度は……、今度こそ“仲間”に任せる』

その意味はちゃんと理解したつもりだった。

イタチはサスケをナルトに託したのだと、そう悟って納得もしたつもりだった。

真実を求めるサスケと、それを拒否するイタチ。サスケの想いも、イタチの想いも、どちらもわかっている。

一刻も早く、穢土転生の術を止めなければならないという事情も、ちゃんとわかっている。

だが、

「待つて、二人とも!」

もうこれ以上……後悔をしたくないと、強く思う。

「待つてよ!」

二人に声は届かない。

「オレはアンタの全てを知った! だから『木ノ葉を潰す』と決めたんだ!」

まるで打ち返されるようにして、サスケの意志が突き刺さっても……。

「オレはもうアンタの幻術を見抜ける! これは……“アンタの眼”

だ!! だから真実を話せ!」

新たなる事実を突き付けられても。

「オレは死人だ……。今さら話すことはない……」

イタチの拒絶を目の当たりにしても。

「待って! 二人とも!!」

もうそれを、ただ見ていることはしたくなかった。

互いに誰より大切に想いながら、だからこそ傷つけ合ってしまう兄弟を、今度こそ止めたかった。

「待ってよ!」

何度叫んでも届かなかった声。

「イタチ! サスケ! 待って!」

どんどん開くだけの距離。

「待ってってば!」

無力だった己の存在。

「二人とも……!」

もう、そんなのは嫌だった。遠ざかる二人の背を見ているのは、もう……。

足元にチャクラを込めて、思い切り杖を蹴った。

サスケを追い越し、イタチを追い越し、雨を追い越して……二人の前に回り込む。

二人の、よく似た顔を見て、叫んだ。

「一回くらい私の話を聞いてよ!!」

印を結ぶ。体内のチャクラを、いや、想いを沸騰させる。

二人の足がようやく止まった。

いや、身体全体が固まった。

「ナナ……?」

「ナナ?!」

本当に……よく似ている……。

そう思いながら、その場に膝をついた。全身の力がにじみ出ていくようだった。

「おい!」

「ナナ！」

心配そうな声が、ふたつ……。

「二人とも……お願いだから……私の話を聞いて……」  
息が切れていた。

が、立ち上がった。

二人の目が見開いた。

「その……眼……」

どちらからともなく、つぶやく。

「写輪眼……なのか……?」

イタチの驚いた表情は久しぶりに見た……と思うと、少し笑えた。

「まさか……! 青い写輪眼だど……?!」

サスケの戸惑った顔も懐かしい……。

「やっど、私を見てくれた……」

正直な感想だった。

二人が見てくれている。嬉しかったから、目が酷く痛むのはどうでもよかった。

「ナナ、お前……」

「その眼……」

「イタチ、サスケ、少しだけでいいから私の話を聞いて」

同時に話し出す二人を、ナナは制した。

やっど、彼らと向き合っている自分を実感したから、ちゃんと立っ  
ていられた。二人の眼を、まっすぐに見つめることができた。

今まで本当に臆病だった。

二人が傷つけ合うのを直視するのが怖くて、止めることができない  
自分の弱さが嫌で、少し離れて傍観するだけだった。彼らの過去と向  
き合うことも、未来を見出すことも、怖くてできなかった。

今は違う。

もう、二人を見ているだけの自分じゃない。

「サスケ」

立ち尽くすだけのサスケに向いて、言う。

「今、穢土転生の術が戦争に利用されている」

「戦争に……?」

「そう……死者が蘇って、忍のみんなと戦わされてる……。イタチも、呼び覚まされた一人だった」

もう諦めてくれたようで、イタチは口を挟まなかった。

「でもイタチは自分で術を破ったから、術者の支配を受けていないの。今は自分の意思で動いている」

「自分で術を破っただと?」

「それでイタチと私は、穢土転生を止めるためにその術者のところへ向かっていたの」

「術者が誰だかわかってるのか?!」

「薬師カブト……よく、知ってるでしょう?」

皮肉めいた口調に、サスケは黙った。

「サスケ……」

サスケが疑問ばかり口にするのも無理はない。

だが、ひとつひとつに答えている時間はなかった。

「戦場のみんなは……穢土転生で蘇った『大切な仲間』と戦わされて  
いる」

「……………」

「シカマルたちも……アスマ先生と戦わされていた」

怒りと疑問、焦りが交わった朱い眼。

「私とナルトも……イタチと……」

その奥に見える、確かなもの。

「この術で、みんなが負わなくていい傷を負わされる……だから……  
だから、一刻も早くこんな術は止めなくちゃならない」

サスケはわずかにうつむいた。

「ナナ、術を解け」

それを見て、イタチが言った。

「お前が言うように、急がなければならぬ」

だが、術は解かなかった。

「イタチ……」

今度は彼を向いて言う。

「アナタがサスケと話そうとしない理由はわかってる」

イタチの顔に、またかすかな驚きが浮かぶ。

「アナタが死者だから……本当はここにいないはずはないから、だからサスケに話しをするべきじゃないって思ってるんだよね？」

珍しく、彼が言葉を探している。

「アナタがサスケのことを『生きている仲間』に託したことも……。それが、『私じゃない』ことも……」

サスケは小さく身じろいだ。

「わかってるけど……昔みたいに私の我がままを聞いてほしいの」

雨音が邪魔だった。

が、言うべきことははっきりしている。

「サスケの話を聞いて。サスケに話をしてあげて」

「ナナ……！」

そして、やるべきことも決まっていた。

「穢土転生は、私が止めるから」

ほんの少しの間、雨音だけが三人の間に響いた。

「何を言う、お前では……」

「無理じゃないよ」

先に口を開いたイタチを制す。

イタチの不安も、サスケの困惑も、ちゃんとその眼に映っている。

「私にも考えがある」

二人が、この眼に映っている。

「ナナ、駄目だ。お前一人で行かせるわけには……」

「だって……」

三人で、ここに居る。

「今、ほんのちよつとだけ、私の夢が叶ったんだもん」

胸が詰まった。

「夢……？」

「ナナ……」

「夢」と認識したのはだいぶ成長した後だった。

が、その単語を知ってから、これが確かに「夢」だった。

「イタチとサスケと私……いつか木ノ葉の里で、三人で遊べたら……って、子供の頃、思ってた」

二人がわずかに息を呑んだ。

「ここは木ノ葉じゃないし、楽しく遊んでるわけじゃないけど……」  
交互に、ついに黙りこくった二人を見る。

「イタチがいて……サスケがいて……私もここにいる……」

強がりじゃなく、そう思った。

「夢が、叶ったような気分なの」

もう、二人が戦う必要は無い。サスケがイタチを憎む必要は無い。  
イタチがサスケを傷つける必要もない。

だから……。

「だから、すぐくうれしくて……、今ならちゃんと戦えると思えるの」  
両手を握った。

指先まで冷えていたが、こぶしの中にはちゃんと力の種がある気がした。

「ナナ……」

それでも、二人が納得しないのはわかりきっていることだった。

「イタチ……本当は、アナタは私が『送る』はずだった。そしてアナタが穢土転生を止めるなら、アナタが逝くのを見届けようと思った……」

雨が少し、弱まった。

「それなのに、私がこれからアナタを消すことになっちゃって……ごめんね」

「ナナ、お前は……」

「でも……」

この兄弟の鬼胎を振り切って、雨の向こうへ進まなければ。

「サスケがアナタを見送るから、いいよね？」

二人はまた、「術を解け」と繰り返す。

雨粒が二人の周りで弾けていた。

「だからイタチ……、私はアタとここで別れだから……」

それは薄明りの森の中でも、とても、きれいに見えた。

「最期のお願いを聞いてくれるよね？」

イタチに向けて……。

「サスケと話して」

二人にとって最初で最後の、とき真実の刻を願う。

「サスケ……」

サスケに向けて……。

「また、会えてよかった」

手向けの言葉を残し。

「穢土転生は、私が必ず止めるから」

決意を突き付ける。

「ナナ!!」

「ナナ、待て!!」

二人は激しく動こうとした。

が、何度やってもその両足を浮かすことすらできなかった。

「いい加減、仲直りしなよ、二人とも!」

そんな二人に、笑って見せる。

満足だった。二人がこれから過ごす時を思うと、この上なく幸福だった。

たとえそれがほんのわずかでも。それをこの手で終わらせることになってしまっても。

この瞬間が二人にとって貴いものになると信じている。

「……………」

さようなら……は言いかけてやめた。

もう、去ろう。その一言すら残さず、綺麗に雨霧の中に消えてしまおう。

どうか二人の、この刻を……。

願いを込めて二人を見つめ、森の奥へ走った。



後ろから聞こえる二人の声は、すぐに雨音にかき消された。

## 勝機

イタチの進む方角から、だいたいの目的地は割り出せた。あとはその辺りで、妖しい結界が張られているところを見つければいいだけだった。

それを見出すのは本来、得意とするところである。

それにより、今はこの眼がある……。

自分の呼吸音に集中しながら、前へと進む。

二人は穢土転生が止まるまで……イタチが消えるまで、ちゃんと話をしてくれるだろうか。

正直、不安だった。

頑固なイタチと、意地っ張りのサスケが、今さらまともに話し合えるとも思えない。先ほどの二人の様子からして、ほぼ絶望的かもしれない。なかつた。

「ほんと……しようがないな、二人とも……」

独り言がこぼれ出た。

もう……すれ違った二人の想いは、とつくに手遅れなのかもしれない。このほんのわずかな時間で、隙間を埋めることなどできないのかもしれない。

が、それでもイタチがいて、サスケがいる。ちゃんと向き合わずとも、二人が一緒にいるのだ。

術を正しく使えて本当によかったと、改めてそう思う。

眼は……開けても閉じても、奥の方が刺すように痛かった。

“この身体”で写輪眼を使ったのは、これが二度目。

一度目は、鏡に映る姿を確認した時。あの時はそれだけでバテてしまった。

だから、ちゃんと「力」を使ったのはこれが初めてだ。

ただ、ホクトがすでに“実戦”で使っている。あの海辺の戦場でキンカク相手に発動させて成功している。

だから、できないことはないのだとわかっていた。

二人にかけた術は、何のことは無いただの「金縛りの術」だ。それをこの「異色の写輪眼」で発動し、さらに陰陽術の封印結界を織り交ぜた。

だから、いくら天才的な忍術センスを持つ二人とて、簡単には破れない術だった。

彼らがあの場から動くことはない。その間にカブトを倒して、穢土転生を止める。

久しぶりに、本当に久しぶりに、気分は爽快だった。顔を上げて、まつすぐ、前を向くことができている気がした。

今はもう、二人が戦う必要は無い。これ以上、サスケがイタチを憎む必要は無い。二度と、イタチがサスケを傷つける必要もない。

それが、こんなにも心を軽くするのだと、改めて実感した。

ぼんやりと結界に包まれた空間を木々の向こうに確認した頃、雨は止んだ。

薄暗く、湿った洞窟だった。いたるところに水たまりがあり、カビやヨケの臭いが鼻をつく。

あの嫌な笑い方をする男の隠れ家にふさわしい……。

そう思いながら、広々と開けた空間へ出た。

「まさか……君がここへ来るとは……」

「黒い眼」が、マントを被った男をとらえた。

彼はこちらを向いて驚いた顔をする。

「ボクの結界を破って入って来るなんて、ただの忍じゃないと思ったら……、まさか君がね……」

そしてすぐに、ニタリと笑う。

「君、一人なのかい……?」

少しの警戒を込めて。

「アンコさん……?」

彼……薬師カブトの傍らには、みたらしアンコが倒れていた。

気を失っているのか……それとも死んでいるのか、今はわからなかった。

「イタチ君と一緒にいたはずだろう？ 彼はどうしたんだい？ もしかして、彼も君が消しちやっただのかい？」

カブトはその視線に気づきつつも、アニコの状態と、彼女がここで倒れている理由について説明をする気はないようだった。

「ボクがせっつかく蘇らせた者たちを片っ端から消してくれたのは、ちゃんと見えていたんだけど……、急に戦場から消えてしまったよね？ あれは君の影分身だったのかい？ あれと今の君は明らかに違う者だよね？」

ここでようやく、ナナはカブトをじっくりと見つめた。

マントのフードを深くかぶっているものの、その下から覗く眼は狡猾さと悪意を隠そうともせずにはつきりと浮かべている。皮膚は青白く、わずかに頬が鱗のように盛り上がっており、まるで「蛇」の肌のようにだった。

そしてマントの裾からは、まさに一匹の蛇がカブトの尾のように伸び、かまをもたげている。

大蛇丸のしつぽを追いかけ、そのマネごとをして力を得たと勘違いしている男の、成れの果て……。

そう見えた。

少なくとも、この戦争を動かしているような「大物」にはまるで見えなかった。

「たった一人で、こんなところまで何しに来たんだい？」

息を吐いた。

「決まってるでしょう？」

「この空気は、少しだっただけ吸いたくはなかった。

「穢土転生を止めるために来た」

カブトはまた一瞬だけ驚いた顔をして、そして笑った。

「君が？ そんな状態でかい？」

「ここはかなり薄暗いというのに、メガネのレンズが光った。

「ボクが医療忍者だっただけで、忘れちゃったのかな？ 今、君の身体がどれだけ弱っているか、ひと目でわかるよ？」

傍らの蛇も、赤い舌をチラリと出す。

「ああ……それとも、和泉一族の秘術でボクを殺すのかい？」  
楽しげに言いながら、カブトはゆつくりと立ち上がった。

「その術にも興味があるけど……。でも、教えておいてあげるよ」  
蛇も彼の頭と同じ高さまで伸びた。

「穢土転生の術はボクを殺しても止まらない……。術を始めたボクにしか止められないんだよ。つまりは、君はボクを殺せない」

さあ、どうする……。？ というように、カブトは肩をすくめる。  
が、術のネタを明かされても、特段驚きはしなかった。

「アナタに『術を止めさせれば』いいんでしよう？」  
簡潔な答えだった。

「自信があるのかい？ それとも、イタチ君と戦わされたショックでヤケになっているのかな？」

頭上に垂れ下がっている鍾乳石が、生臭い水滴を肩にたらしめた。  
それを合図にするように、ナナはゆつくりと印を結んだ。

カブトが笑ったまま身構える。

「イタチの名を……。口にしないで……」

そう言いながら、『彼ら』を呼んだ。

一体、二体……。どこからともなく、現れたそれらは、この血が使役する者たち……。式神と呼ばれるそれだった。

「これは?!」

カブトが興奮したように叫んだ。

「姿を現せ」と命じてあるから、それらがどんな動きをしているのか彼の目にも見えていた。

全部で十二体の式神は、全て人と獣の間の姿をしていた。

まるで御伽話に聞いた『鬼』……。初めて彼らを呼び出したときはそう思ったものである。

背丈はナナの腿のあたりまでしかない小柄な子鬼たちだが、力は強力だった。

今はナナだけの眷属となるそれら十二の式神は、「十二天将」というらしい。

一族の間では、至極の力を得た陰陽師にしか従わない、いわば最高

位の式神と言われていた……。

「さすが、和泉の一族……!」

十二の式たちは、わらわらとカブトと蛇にとりついた。声もなく、音もなく……。

カブトはむしろ狂喜した。洞窟に笑い声をこだましながら、何匹もの蛇を身体から発す。

蛇は一匹ずつ式神に噛みついた。

もっと力を与えれば、式神たちにとって俗物の蛇など取るに足らぬ存在のはずだった。

が、今の術者……ナナには霊力が十分になかった。

だから最強であるはずの式神たちは、へびに噛み砕かれるようにして、順々に消えてしまった。

「なんだか不思議だよ……。和泉一族の本家の姫君である君の術を、このボクが破ってしまうのは」

蛇をまとわりつかせながら、カブトはおおげさに両手を広げて見せた。

「体力が弱っているから、忍術や体術じゃなく、和泉の術で向かって来たんだらうけど……。この程度の攻撃ではいくらなんでも一般人のボクにだって破れるよ」

言い返す言葉は無かった。その気もなかったし、実際、すでに息が切れていた。

「やっぱり……。イタチを自らの手で消してしまったことで、自暴自棄になっているのかい?」

カブトは舌なめずりをした。

異様に赤く、人間のそれとは明らかに違う長さだった。

「……でも、アナタの動きは封じた」

カブトはわずかに身じろいで足元を見た。

青白い星が、彼の足もとで薄く光っていた。

「これは……陰陽術の『五芒星』ってやつかい?!」

アレがある限り、カブトはそこから動けないはずだった。

その彼に向かって、枯渴した体力で目いっぱいチャクラを練って、

風遁、火遁を続けざまに発した。

「そこからだと、アッコに当たるよっ。」

カブトは言ったが、その心配はすでに失せていた。

「あれ？」

彼の傍らに、アッコの姿はない。

なぜなら先ほど式神が消されたとき、何体かに彼女を向こうへ運ばせていた。

だが、持てる力で思い切り術を発動したにもかかわらず、カブトの身体には少しも影響を与えられない。ただ天井の湿った岩にひびが入り、瓦礫が凄まじく振って来るだけだ。

彼の蛇たちが、全ての攻撃を薙ぎ払っていたのだ。

「風と火の属性か……さすがにただの忍ではないね」

マントの裾を仰々しく払いながら、カブトが言う。

彼にはまだ、たっぷりと余裕があった。

「たしか和泉一族は、全ての属性を使えるんだよね？ 君はもうその力を手にしたのかな？」

また長い舌がだらりと口から垂れ下がった。

それをめがけ、足を蹴って彼に急接近した。

「アナタに術を止めさせるためなら、なんだってする……！」

体術も……土遁と水遁の攻撃も交えて攻め立てた。

が、攻撃はひとつも当たらない。

「星縛り」の術はまだ破られていないから、彼はそこから一步も動けないはずだったが、それでもまとわりつく蛇に邪魔されて、礫のひとつも当てられなかった。

だが、わずかに……わずかな隙が必然的に生まれた。

瞬間、印を結ぶ。

身体のバランスは崩れていたが、膝を付きながらまつすぐに彼を見る。

眼の奥に、刺すような痛みが走った。

「そ、その眼は……!？」

カブトの顔は明らかに驚愕した表情に変わった。

「ま、まさか……写輪眼……？ 君が……？」

彼はそう気づくと同時にうつむいた。

さすがに頭の回転は速いらしい。

「まさか……何故、和泉一族の君が写輪眼を？ しかも、青い写輪眼だなんて……そんな……」

眼を合わせないようにしながら、平静を保とうとしつつ分析をしている。

「輪廻眼とも違う……いったい何故……?! まさか君は……」  
ゆつくりと立ち上がる。

彼を動揺させることは成功したが、術にはめることは失敗だった。

「け、けど……ソレが写輪眼だったとしても、ボクには効かないよ!!」

カブトが今までで一番の大声を出した。

「その眼さえ見なければ、ボクには何の術も影響しない……。あの、最強の写輪眼”でない限りね!”

ゴソゴソとフードを深くかぶり、自ら視界を遮る。

すんでのところ、「幻術」が外されていた。

まだこの眼の扱いに慣れていないせいで、術を発動するのが一瞬遅れたのだ。

「それが君の切り札だったのかい?! たしかに恐れ入ったよ！ そんなモノを出してくるとは、ボクにも予想がつかなかったからね!!」

確かに眼を合わせなければ、金縛りも幻術も効力をなさない。

この一瞬で眼を合わせ、カブトを幻術にはめるといふ流れは失敗に終わった。

もう二度と、この策は彼に通用しない。

「切り札」はかわされ、体力も尽き、完全に手札がない状態だった。だが、それでも勝機は間違いなくあった。

「いつそれを開眼したんだい？ うちの写輪眼とは違うの？ イタチ君や、サスケ君の写輪眼とは……」

カブトは眼を伏せながらも、肩を震わせて興奮を露わにする。

「かかった」……そう思った。

「ほんとうに君は興味深い存在だよ……」



彼はそう言いつつ印を結んだ。

「来る」……と思ったときにはもう、蛇が急激な速度でこちらに向かって伸長して来ていた。

それを、避ける間も力も無かった。

「君の方から飛び込んできてくれるとは、本当にラッキーだった」

一匹が左腕に噛みついた。強烈な痛みを感じ、後ろによろめく。

が、もう一匹が右の肩に噛みついて、しりもちをつくのを止めた。

そして……。

「やっぱりボクは、君が欲しい……」

カブト自身の身体がまさに蛇のように伸び……首元に噛みついた。

まるで……かつて『死の森』で、大蛇丸がサスケに呪印を与えたと

きのように……。

## ウソツキ

龍地洞……仙人モード……龍……。

カブトが何か耳障りな単語を並べ立てているが、そんなことはどうでもよかった。

イタチとサスケが並んで、戦っている。

それがただ、うれしかった。

眼が激しく痛んだが、つむっているのがもつたいなかった。この眼にちゃんと、二人の姿を焼き付けておきたかった。

向き合って傷つけ合うのではなく、隣り合って共に戦う姿を。できるだけこの時間が続けばいいと思いつていた。

戦争……そのことは忘れたわけではないけれど。

ただ、ほんの少しのわがままが許されるなら、一分でも、一秒でも、二人の姿を見ていたかった。

それなのに、視界は突然奪われた。

蛇だか龍だか……醜く姿を変えたカブトの術だった。

洞窟内は目も開けられないような閃光に包まれ、高い不協和音がこだまする。空気が振動し皮膚にビリビリとした衝撃を与えた。

視界と聴覚が奪われた。骨が軋んで全身が麻痺するようだったが、どうせ動けぬ体では何の意味もなかった。

ただ二人の姿が見られないことに苛立った。

耳を塞ぐのも億劫で、無防備に座り込んでいた。と……、身体がふわりとかすかに温かい空気に包まれたのがわかった。

不快な空気が消えたから、うつすら眼を開けた。

何かに身体が囲われている。紅蓮と紫炎の二重に……。それはまるで焔の揺らめきようだった。

「まさか……君たちはボクのチャクラを感知できているのかい？」  
術を成したカブトが、向こうの方でわずかに驚いている。

「いや、ちがう」

ぶつきらぼうに、サスケが答えた。

そして。

「お前がどこを狙うかはハッキリしていた。だからそこを守ればいいだけだ」

イタチが冷静に言う。

それでナナも理解した。

身体を包むのは須佐能乎の手だ……。今、二人に守られた……。

「なるほど！　それが君たちの絆……、いや、愛ってやつかい?!」

カブトは饒舌だった。自分の身に起きたことを語り、遂には大蛇丸を超えた存在と宣言し、その力を誇示した。

そして得意の心理戦を展開したつもりか、イタチの生き様を愚弄した。

イタチが根っからの「嘘つき」だと。

そして自分もイタチと一緒にだと。イタチも自分も己や周囲に嘘について木ノ葉のために働いたのに、見返りは汚名と不名誉だった……と。

それはイタチ自身を追い詰め、そしてサスケを動揺させる台詞のようだった。

もちろん、少し離れたところでそれを聞かされるナナにとっても、

確実に「攻撃」となった。

だが、イタチは示した。

「里がどれだけ闇と矛盾を抱えていようと、オレは木ノ葉のうちにはイタチだ」

己の存在を。

ふと、また昔のことを思い出した。

こんな時にも、それは鮮明に瞼の裏に映し出される。

一人で和泉の里へ自分に会いに来てくれた、まだ子供だったイタチ。少し汚れた忍装束をまとい、忍刀を背にし、額宛てをしつかりしめて。

あの頃から、イタチはきつと心に闇を抱えていた。一族と里の狭間に立ち、それぞれから背負わされたものを受け止めていた。

それでも確かに、イタチは木ノ葉の忍である自分自身を誇りに思っていた。

まだほんの幼い子供だった自分にもそれは理解できた。詳しい話など聞いたことはなかったが、少なくともイタチは戦うことから背を向けてはいなかった。

何故なら……、そんなイタチを見て育ったからこそ、忍に憧れた。木ノ葉隠れの里に行ったら、忍になると決めていた。

それが、あの頃の自分にとって未来へのただひとつの希望だった。そして今、サスケと自分は、イタチを思っただけで里への憎しみを抱えた。だがイタチは……。イタチの愛は、深すぎる……。

「イタチ……」

過去の姿と、現在の姿。少しも変わらぬその生き様に、胸が痛んだ。そして、イタチに並ぶサスケが今何を思っているのかを考えて、眼が痛んだ。

この痛みには耐えるから……。だから、どうかもう少しこのまま……。

そんな浅はかな願いが叶うはずはなかった。

うちの二人は強かった。二人の兄弟は強かった。

やがて、カブトの動きが突然止まった。

イザナミ……。

かつて同じ時を過ごした兄弟にしか成し得ない術でカブトを追い詰め、イタチがそれを発動したのだ。

術の内容はよくわからなかった。

が、

「これより穢土転生の術を止める」

唐突にイタチが告げた。

瞬間、これで全て終わったのだと悟った。

二人が勝った。二人の力が合わさって、勝ったのだと。

それは本当にうれしかった。

だが。

「なら……兄さん、アンタも……」

サスケが口にした。

そうだ。穢土転生を終わらせることは、イタチとの別れを意味する。

今度こそ、永遠の別れ……。

「オレは木ノ葉隠れの忍として、もう一度この手で里を守ることができた」

イタチはそう言う。

「だからもう、この世界に未練はない」

サスケとしつかりと見つめてから、こちらを向いて。

「なぜだ?! 兄さんを苦しめた木ノ葉のために、なんでまた兄さんが犠牲になる!」

サスケの背が、震えた。

「兄さんが許せても、オレが木ノ葉を許せない!!」

それは鎮まるはずのない、確かな怒りだった。

「この世に未練がないだど!? オレたちをこんなふうにさせたのは兄さんなんだぞ!」

「オレたち」……と、サスケは言った。さつきから一度もこちらを見ないのに。

眼の奥と、胸の奥が同時にズキリと軋んだ。

「お前を変えられるのは、もうオレじゃない」

なだめるように、イタチは言う。

「ナナを護るのも、オレじゃない」

サスケと、やっぱりこちらを見つめて。

「だからせめて……、この術を止めることがオレの今できること」

眼が合って、イタチが何を言うのかわかってしまった。

「あとはナルトに託した……」

ああ……そうだった。サスケの怒りと同調していたから、半分忘れかけていた。

イタチがサスケのことをナルトに託したのだと、あれほどしつかり理解していたつもりだったのに。

それなのに、今はあと少しの時間を欲している。二人の間に流れる

時間を止めてしまいたいと思っている。穢土転生なんて、止まらなくていいと思ってしまうている。

「イタチ……」

そう呟いたのを見届けるようにして、イタチはカブトと向き合った。

ゆっくり、立ち上がる。膝から崩れ落ちそうだったが、ここで止まるわけにはいかなかった。

（イタチ……）

去りゆく彼を、ちゃんと見送らなければならぬ。

とうとう、イタチの幻術にかけられたカブトが穢土転生を解く印を結び始めた。

「もう……何を言っても無駄か……」

低い声で、サスケが言った。イタチの背を見つめたまま、想いを。

「トビやダンゾウの言ったことは本当だったんだな……」

サスケも自分も、イタチに会って確かめられた。皆に聞かされたイタチの真実が、本当に「真実」であることを。

だが、サスケが知ったのはそれだけじゃなかった。

「アンタといると昔を思い出す……。兄を慕っていた、幼い頃の気持ち……」

イタチを誰よりも慕っていた頃の気持ちがあるからこそ、今もまだ心の中に色濃く残っていることを、サスケは思い知ったのだ。

（サスケ……）

彼はわずかにうつむいていた。

「だからこそなんだ……！」

そして葛藤を吐露した。

イタチを慕っていた気持ちがあるからこそ、イタチを理解するにつれ、イタチを苦しめた木ノ葉への憎しみが募ることを……。そしてそれが、どんどん増していくのだと。

「アンタがオレにどうしてほしいかわかっているつもりだ。アンタはオレの兄だからこそ、オレの意思を否定するだろう」

やっとな、サスケの側まで来ていた。

「でもオレも、アンタの弟だからこそ止まらない……」

その震える背を見つめながら、彼の言葉をはつきりと聞いた。

「ここで兄さんが里を守ろうとも……、オレは必ず木ノ葉を潰す……！」

憎しみ……ではなかった。

サスケの声には逃れられない何かがまとわりついていて、サスケ自身もそれを知っているようだった。

その想いは今もなお、手に取るようにわかった……。

「サスケ……」

サスケの拳が、ゆっくりと握られた。

そしてイタチは何も答えぬまま、カブトが印を結ぶさまを見守っている。

「さよならだ……」

大人びた声音で、サスケが言った。

それは今までで一番、心の奥深くに突き刺さり、冷たく鈍い痺れを与えた。

その瞬間。

「ナナ……？」

身体はサスケの想いに突き動かされたように反応し、サスケを通り越してイタチの前に歩み出していた。

右手が、しっかりとカブトの手首を掴んでいる。

印が止まった。

言葉も出てこなかった。

「ナナ……」

イタチが困ったような顔でこちらを見下ろす。

その顔も、もう涙で滲んでほとんど見えなかった。

「待って……」

言葉も千切れて、情けなくこぼれ出るだけだった。

「もう少し……」

左の手で、イタチのマントを強く握る。

「もう少しだけ……！」

何に願えばよいのかわからなかった。  
が、

「お願い……!!」  
懇願した。

「あと少しだけっ……!!」

どうか、時間をください……。どうぞ、許してください……と。

「ナナ、お前には感謝している……」

イタチはかすかに笑った。懐かしい笑みだ。

「お前のおかげで、オレは何の未練もなく逝ける……」

この優しい声も、懐かしい。

「イタチっ……」

「嘘つき」と、そう叫びたかった。

嘘ばかり。サスケと話なんかしなかったくせに。サスケのことをナルトに託したって心配なくせに。自分に、サスケをたのむとは言うてくれないくせに……。

それらのひとかけらすらまともに言えなくなった自分に対し、イタチは……。

「さよならだ、ナナ」

そう、言った。

「イタチ……!」

肩が震えるほど強く、彼のマントを握った。

「いけないで……!!」

最後の願いを吐き出して、唇を思い切り噛みしめる。

イタチは笑った。本当に、綺麗に笑った。

そして、

「サスケ」

弟の名を呼ぶ。

「イタチ……!!」

左の手が、イタチの両手に包まれた。

「やだ! やだよ!!」

体温などない、死人の手……。



「お前と出逢えて、幸福だった」

今度こそ、それは別れの言葉だった。

願いは届かなかった。あと少しの時間も許されなかつた。イタチの意志を揺るがすことなどできなかつた。

手が、引かれる。

少しよろめいて、カブトの手を放した。もう、身体に力が入らなかつた。

そしてイタチは、黙って側に立ったサスケを向く。

左手からイタチの冷えた手が離れ……代わりにサスケがそれを握った。

「イタチ……」

イタチは再びカブトと向き合つた。

サスケに手を握られたまま、それを見守ることしか、もうできなかった。

サスケは何も言わない。イタチも黙っている。

カブトが静かに印を結ぶ。

ナナの呼吸音だけが、哀れに響く。

そしてついに、カブトは最後の印を結んだ。

風が起こり、イタチの身体から天に向かって光が生まれた。

サスケの手が、ほんのわずかに力を強めた。自分の手が、情けなく震えているのがわかつた。

(いけないで……)

性懲りもなく、まだ、そうつぶやく心。叫ぶこともせずに、ただ、涙とともに想いをこぼすだけ。

サスケの手を、握り返すことさえもできないで……。

## 散華

光に包まれたイタチの身体の表面が、まるで立ち枯れた木の皮のようにチリチリと剥がれていった。

イタチは意識を失いながらもこちらを向いた。

そして、ナナとサスケにゆっくりと歩み寄る。

「最後に、お前たちに全てを伝えよう」

耳に届いたのは。

「“あの夜”のことは、お前たちが聞いた通りだ」

確かな真実。

「お前たちに……全ての真実を見せよう」

息を呑んでイタチを見た瞬間、二人は幻術に捕らわれた。

それはただの幻ではなく、イタチの真実……彼の記憶だった。

木ノ葉の里か……どこか知らない崖の上で、イタチはうちはシスイと語っていた。

うちはのクーデターの話。彼の眼のこと。そして、目の前から消え去る様……。

イタチの記憶は、どれも悲しかった。

里の上役の前で、シスイのことを秘めたまま、一族の計画を忠実に報告するイタチ。うちはへの畏怖と敵意を一身に浴び、それでも木ノ葉の忍としてあるイタチ。

ダンゾウの密命と、密約。トビとの接触。彼との交渉。

そして……あの夜。

幼いサスケをひと目見て、父と、母を、手にかけるイタチ。

両親の最期の様子も、言葉も、イタチ自身の震える手も涙も血の匂いも……、ありのままに。

あの不気味な月で記憶を閉じ、イタチはサスケに向き直った。

そして、彼にまた“術”をかける。今度はナナにも……。

イタチはそれぞれに術をかけた。

彼に「その光景」を見せられて……、手の温度がますます冷えていくのがわかった。自分だけじゃなく、サスケも同じだった。

しかしそれと反対に、握り合う手の力は強まっていた。

やがてイタチは完全に術を解き、身体から塵を舞い上げらせながら言った。

「サスケ、オレはいつもお前を遠ざけて来た……。巻き込みたくは無かったからだ……」

消えかけながら、途切れ途切れに……。だが、しっかりと。

「だが、今は思う……。お前がうちはを変えられたかもしれない……」

震えているのはサスケの手か、それとも自分の手か……。ナナにはわからない。

「オレがお前とちゃんと向き合っていれば……」

頭が酷く鈍っているようで、イタチの言葉をただ聞くことしかできない。

「ナナ……お前にも……」

イタチは両手を伸ばした。

「オレはお前に癒しを求めながら、結局逃げていたのはオレの方だ……」

その手は、漫然と握り合うサスケとナナの手をとって、

「失敗したオレが、今さら多くを語っても伝わりはしないだろう……。しっかりと包み込む。」

「だから、今度こそ本当のことを、ほんの少しだけ……」

そして、イタチはかすかに笑って、二人の肩に手を置いた。

「サスケ……お前はオレのことを、ずっと許さなくていい」

やさしい兄は、

「ナナ……お前はもう、何も背負わなくていい」

唯一心を許せた者は、

「お前たちがこれからどうなろうとも……」

二人をそつと、抱きしめた。

「オレはお前たちを、ずっと愛している」

言葉とともに、イタチは散った。

柔い光に包まれ、ふわりと浮いて、花びらのごとく、舞い散った。その顔は満足げで、確かに、なにも憂いてはいなかった。

(イタチ……)

光が消えると同時に力が抜けて、膝から崩れ落ちた。すぐるようにサスケの手だけを握っていた。

そして、彼の手に額を押し当てて……泣いた。

こみ上げる涙を押し留めることなどできなかった。

何もかもを失ったようで、空虚だったにも関わらず、涙は後から後から溢れ出た。

サスケはじつと、動かなかった。まだ、イタチが逝った虚空を見上げたままだった。

それでも、手を離しはしなかった。

やがて、サスケは膝をつき、激しく震える肩を抱いてくれた。

何も言わず、躊躇いもせず。

「うっ……サスケっ……！」

思い切り彼にしがみついた。うまく力が入らなくて、全身が震えた。

「サスケっ……イタチがつ……」

「ナナ、しゃべらなくていい」

信じられないくらい静穏な声。

どうして彼が、これほど穏やかでいられるのかわからなかった。

サスケの腕は、次第にきつく身体を抱きしめた。とても力強く。牢乎として。

「サスケ……！」

うまくしゃべれなかった。

が、どうしても伝えなかった。

いや、押し付けたかった。抱えきれなかったから、サスケに半分押し付けたかった。

今、胸を突き破るほど強く感じている痛みを……いや、説明のつかない「想い」を……。

「イタチが最期に……！」

まるで最後の枷が外れたように、

「見せて……くれた……！」

その根源を突き付けた。

「サスケが、まだ……小さかった時のこと……！」

過去への真実の旅を終えた後、わざわざイタチが自分だけに見せてくれたのは、幼いサスケとの記憶だった。

「サスケが……『兄さん、兄さん』って……！」

無邪気で、眼が生き生きと輝いていて……陰りなど少しもなく。

「イタチにくつついてまわって……！」

まっすぐに兄を見上げるサスケは、心から……。

「イタチのことが……大好きでっ……！」

憧憬、愛慕……サスケは小さな体からそれを惜しげもなく発していた。

その姿は、イタチに聞かされて想像していた「サスケくん」そのままだった。

「サスケがっ……！」

こうなってしまった分、そんなサスケが痛ましかった。

サスケがイタチをどれほど慕っていたか、そしてイタチがサスケをどんなに大切に思っていたか、わかりすぎて辛かった。兄弟の幸福な時間があまりに短すぎたことが残念でならなかった。

いろんな感情……想い……痛み……。

一人で持て余したから、サスケにこうして押し付けた……。  
だが。

「ナナ……オレも見た」

サスケはそれを避けもせず、突き返すこともなく、ほんのり包むよ

うに言った。

「幼いお前を、イタチが見せてくれた」

自分もまた同じように、イタチの記憶を見たのだと。

「お前はいつもイタチの姿を見つける前から、イタチに向かって走って来て……、全身でイタチに飛びついてた」

呼び覚まされる、あの頃の記憶。

「今と違って髪が長かったが、同じように白い袴姿だったな」

それを、サスケが物語る。

「あの頃のお前は、よくしゃべり、よく笑い、よく怒って……いろいろ表情が変わるヤツだったんだな」

サスケの知らないはずの時間がサスケの口から漏れ出でて、なんだか不思議だったのに、涙はひと時も止まらなかった。

「ナナ……イタチは最期に、オレたちに“イタチの思い出”をくれたんだ」

サスケの胸に顔をうずめて、うなづくことさえできなかった。

天真爛漫なサスケと自分……。二人の幼い姿が脳裏で重なって、いつそう胸が詰まった。

それでもサスケは、さらにきつく抱きしめてくれながらも、ますます口調を穏やかにして告げた。

「お前がオレたちに術をかけて去った後……、イタチはこう言った」

一瞬、息を止めた。

「『ナナは生来、純真無垢で高尚な気質の子供だった』と」

「え……？」

聞き返すことすら満足にできず、かすれた声が漏れた。

首を回して見上げると、サスケはどこか遠くを見ながら続けた。

『ほんの子供のうちから、人の闇の部分を知っていて、自分が背負うものもわかっていて……、それでいて何も知らない子供のようにならぬ無邪気でいられる崇高さがあった』……とイタチは言っていた」

何のことかわからなかった。誰のことを言っているのかわからなかった。

それが本当にイタチの言葉なのか……。本当に幼い自分のことを

指しているのか。

いや、それより……。

『仙人や妖精がいるとしたら、“ナナ”がそうなのだと、本気で思っていた』そうだ」

サスケはこちらに視線を戻し、少し笑った。

どこか寂しそうに。

「どうしてっ……!」

その、傷も影も浮かべた瞳に向かって言った。

「“あの時”に、どうしてそんなこと……!!」

鼻声だった。

が、ちゃんと声は出た。

「どうしてっ…… “あの時”にそんな……!」

サスケの着物を握る手が、自然と力を込めていた。

サスケの言葉はどうしてもよかった。イタチの言葉に意味はなかった。

ただ、“あの時”……「最期に兄弟の刻を」と願った“あの時”に、何故そんな話をしたのかと、怒りに似た感情が湧いた。

「イタチがオレに伝えたかったんだろう……」

サスケはあつさりと、答えを示した。なだめるように、少し腕の力を抜いて。

「でも……!」

あれほど強く願ったのに何故……。

「確かにオレは、お前のことも知らなすぎた……」

涙で滲んだサスケの顔がさらに歪んだ。

思わず口を閉ざす。

と、

「だからイタチは……オレに伝えたかったんだ。“あの時”に」  
自分だけ納得したように、サスケはぽつりとつぶやいた。

「イタチは話の最後にこう言っていた」

再び腕に力がこもった。

そしてサスケは、こちらに視線を落として言った。

『無垢なナナを汚し、 “この世界” に引きずり下ろしたのはオレだ』  
……と」

そんなことを告げるイタチの顔が浮かんだ。孤独で、優しい、イタチの顔が……。

そして耳に蘇った。

『オレたちをこんなふうにしたのは兄さんなんだぞ！』

サスケの声が。

「お前を……イタチが変えたんだ」

……サスケ……。

「お前はイタチによって、深く傷つき、純真さを失った」

サスケ……アナタも……。

記憶の中の自分自身の姿と、ついさつき知ったサスケの幼い姿が重なった。

一方はオトナの心の内など何も知らない天衣無縫な子供。もう一方はそれを知っていても天真爛漫に振る舞う子供。

中身は全く違っていても、同じだった。イタチが誰よりも大好きだったことは、同じだった。

イタチによって全て奪われ、イタチに深く愛されたことも……また同じ。

「サスケ……！」

胸が潰れそうなほど傷んだ。

「お前も、 “あの夜” に全てを無くしたんだ……」

サスケは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「オレだけじゃなく……お前も……」

「サスケ……!!」

サスケの言葉が、深く染み入る。

それは決して冷たさを与えるものではなく、また心地よいものでもなかった。

「私……」



何か言いかけて、幼いサスケの笑顔が浮かんでとどまった。  
いや、最初からサスケに言うべき言葉などなかった。

『兄さん!』

無邪気なサスケが兄を呼んでいる。

目の前にいるのは、暗い闇を負ったサスケなのに……。

「サスケ……!」

「ナナ……何も言わなくていい」

大人びた声で、サスケは言った。

「今は……気が済むまで泣いてくれ」

与えられたぬくもりは心地よく、思考を融解するようで……。

「今度はオレが……受け止める……」

サスケが頭の後ろに手を回し、また強く引き寄せた。

両手でしっかりと、サスケの背中にしがみついた。

そして、堰を切ったように声をあげて泣いた。

この感情が何なのか未だわからないまま……ただ泣いた。

最初の別れで流したのは、「絶望」と「憤り」。マダラの話聞いて  
激しい「後悔」の涙を流した。

今は……。

何に泣いているのかわからなかった。

後悔……それはある。絶望……それもある。憤りもないわけじや  
ない。

それに、イタチへの思慕、悲哀、そして感謝……。サスケへの共感、  
想い……。

様々なものが入り混じったようで、感情が定まらない。

その荒れただれた心をさらけ出すように泣いた。

彼の胸で、激しく。いや、喚いた。

声が枯れるほど、いつそ心も枯れるほど。

烈しく、哀れに、泣き続けた。

## 透明、実情

どのくらいそうしていたのか……。

暗い洞窟の中で、時間の経過はわからなかった。

ただ、疲れていた。横隔膜が激しく痙攣を繰り返し、眼と、頭が酷く痛んだ。

それをなだめるように、いつの間にかサスケの手が、そつと背中をさすっていた。

「サスケ……」

情けなく、すり切れた声だった。

すぐ側に彼の顔があつた。まだ、眼は見られない。

「サスケ……」

呼びかけてみたものの、言葉が見つからなかった。

いや、言うべき言葉など見つけられないことに気づいた。

「うっ……」

喉の奥から、声にならない音が出る。

「ナナ……」

サスケはゆっくりと体を起こし、

「眼は、大丈夫か？」

あっさりとして、この眼を見つめてきた。

「痛むか？」

返事どころか、うなづくことすらできない。

だが、サスケは答えを求めはしなかった。ただゆっくり、ぐちやぐちやの顔を袖で拭ってくれた。

それでもにじみ出る涙を見て、サスケはフツと笑った。

漆黒の眼に、闇はなかった。

その代わり、澄んでもいなければ、光もなかった。

「サスケ……」

知らずとしがみついていたサスケの背中を、改めて掴みなおした。

「いつ、開眼した？」

もう一度指で涙をすくいあげて、サスケは問う。  
この答えは、待っているようだった。

「……イタチが死んで……アナタと別れた後……」  
しゃっくり上げながらも正直に答える。

サスケは「そうか」とだけ言った。

答えに何を感じたのか、声と表情からはわからなかった。

「サスケ……」

震える胸を押さえつけ、今度は逆に問う。

「どうやって……ここへ、来たの？」

別に今さらどうでもよかったのに、自然と口を付いた問いだった。

「陰陽術のことを、オレもイタチも少し知っていた」

サスケは小さく笑いながら、そう答えてくれた。

写輪眼による「縛り」の術はともかく、陰陽術の結界はそう簡単に破られまいと思っていた。

が、イタチのことだから、和泉の里に伝わる陰陽術のことを調べていたのだろう。

それに……サスケは「姉上」を知っていたのだと思い出し、合点がいった。

「そっか……」

ガンガンと、頭の後ろ側で痛みが響いた。

「無茶な使い方しやがって」

サスケは慰めるように、頭を撫でた。

不自然なくらい彼は優しく、そして落ち着いていた。

「サスケ……」

違和感があった。彼の心がかめなかった。こんな感覚は初めてだった。

「これも……なんとかしないとな」

サスケはそんな戸惑いなどお構いなしに、そつと左の首筋に触れる。

そしてそのまま、頬に手を添えた。

「カブトの細胞が、少し同化しているようだ……」

不快感を表わしながらも、指の感触から躊躇いは伝わってこない。「痛むか？」

彼が何故、こんなにまで落ち着いているのか、穏やかでいられるのか、わからなかった。

こんなサスケに全てを、押し付けて、泣いたくせに、今さら彼のことを気にかけている自分が滑稽だった。

「ナナ？」

答えを促され、かろうじて首を横に振った。

その時、気がついた。

サスケの眼が、深海のごとく暗く静かなのは……。

「ナナ……オレは今、これからどうすべきか迷っている」

気づいたことが形になる前に、サスケは告げた。

はつきりと、瞳に浮かべた「迷い」を言葉にして告げたのだ。

「サスケ……？」

「復讐自体は迷ってはいない。木ノ葉への憎しみもさらに深くなった」

こんなにも質実に心を打ち明けられたことがあつただろうか。

「だが、イタチの真実を知って……イタチの想いを知って……」

さらけ出されたサスケの想いに竦んでいた。

「イタチとは……うちは一族とは……里とは……忍とは何なのか……」

オレはあまりに知らなすぎることに気づかされた」

迷いも葛藤も、そして焦燥も……サスケはありのままを見せていた。

「そして、オレはいつたい……」

サスケはそうつぶやいて、目を伏せた。

こんなサスケは、見たことがなかった。

これまでずっと「わかる」からお互い言葉にしてこなかった。不安も怒りも戸惑いも、何も口にしないままここまでできてしまった。

それが、今になってサスケは己の感情を口にする。

その姿に驚いて、ただ戸惑った。情性で流れていた涙も止まるほどに。

「サスケ……私は……」

“何か”を言いかけた。

が、途中で糸が切れたかのようにプツンと止まってしまった。

何を言おうとした？ 何か、彼に答える言葉は在ったのか？

自問する。

それを見透かしたかのように、サスケは大人びた笑みを浮かべてやさしく頭を撫でた。

「ナナ……お前は少し休め」

「え……う」

サスケは全部わかつているかのようにこう言った。

「何も考えなくていい……。自分自身の想いも、何が正しいのかも、考えなくていい」

息を呑んだ。

「最期……イタチに言われただろう？」

サスケの声に誘われるように、ついさつき贈られた言葉が蘇る。

『お前はもう、何も背負わなくていい』

イタチがそう言った意味をまだ理解できてもいないのに、サスケはそれを軽やかに誘う。

「もう強くあろうとしなくていい……。少し休め」

そして、イタチの言葉と同調する。

「サスケ……」

枯れたはずの涙が、またそぼそぼと流れた。

初めてだった。

選ばなくていいことも。何が正解なのか考えなくていいことも。意志を持たなくていいことも。心を預けられることも。

こんなふうに、サスケの側にいられることも。

「お前はオレと同じ傷を負っていたのに……。いつもオレを受け止めてくれていた……」

サスケがわずかにうつむいて、

「だから、これからは……」

憂いを浮かべた顔をして、言った。

「何があろうと、オレがお前を受け止める」

それが……この姿の訳か……。

頭が痺れているかのようになり、ぼんやりとそう納得した。

サスケがこんなに静穏としているのは、二人の過去に共感したからか……。

いや、それだけじゃない。

イタチの記憶……真実を知って、憎しみの的を見失ったからだ。

自分自身で口にしたように、彼は進む道を迷っている。

今までずっと、「復讐」という道を歩んできた彼にとっては、立ち止まらざるを得ない状況になってしまったのだ。

ようやく、彼の心が理解できた。

それはとてつもない安堵だった。

「サスケ……」

それは決して、幸せな気持ちなどではなかった。

お互いに。今さら、痛みは癒せない。漂う悲壮感も消せない。笑い合うことなどできない。

だが、

「ありがとう」

素直な気持ちで、言葉にした。

「手を握っていてくれて……」

もしサスケがいなかったら、こんなに辛くはなかっただろう。

この苦しみも悲しみも……こんなふうに“二人分”の絶望を感じることはなかったはずだから。

だが、彼がいなければこの安堵感もなかった。イタチが散り逝く様子を、ひとりで見送らずにすんだ。サスケが手を握って、隣にいてくれたから。

「あの時みたい……」

ふと浮かんだ記憶。

「お前の姉が死んだ時か？」

サスケは見透かしたように言う。

「お前、あの時はオレの前で泣けなかったな」

そして、懐かしそうに小さく笑む。

「あの時もオレは、自分ばかりが傷つき、憎しみを抱えていると思いついでいたから……お前のことをちゃんと受け止めてやれなかった」

その台詞に、あの時のもどかしい気持ちに蘇った。

「私……イタチが去ってからは……絶対に泣かないと決めていたから……」

今なら、あの時のことが話せる気がした。

「私は……『イタチのことを知ってる』って、サスケに言えなくて……ずっと……苦しかった」

声は情けなく掠れていたが、驚くほど淡々と、あの頃のことを口をついて滑り出る。

「ああ、わかってる」

サスケも、心を揺るがすことなく聞いている。

「アナタを騙してるみたいで、嘘をついてるみたいで……。ときどきどうしようもなく、アナタの目をまっすぐに見られなくなった」

「ああ……」

「あの時も、サスケが海まで連れて行って……そこでイタチの話をして……『私もイタチを知ってる』って言いたかったのに、どうしても言えなかった」

「ああ……」

「なんにも言えないまま、私はアナタが里を抜けるのを黙って見送った……」

静かに相づちをうつサスケの手を、握った。

「私がアナタのことをこんなに好きじゃなかったら、もっと早く、イタチのことを話せたのに……」

罪悪感と愚かさに、自然と口の端が上がった。

「ナナ」

サスケは言葉の代わりに、手を握り返してくれた。

「怖かった……」

きつくもなく、緩くもなく、ほどよい強さで指が絡む。

「アナタが憎んでいたイタチが、私にとっては大切な人だったから……。イタチのことを話して、アナタに背を向けられるのが怖かった」

だから、躊躇わずに想いを吐露することができた。

ぼろぼろの心が、少しだけ軽くなった気がした。

「ナナ、オレは……」

手が再び離れた。

そしてサスケは、もう一度しっかりと抱きしめて言った。

「もう二度と、お前に背を向けない」

指の先から力が抜けた。

サスケの声には熱など少しもこもっていないくて、むしろ冷めたように聞こえたが、それでも心は安らいだ。

互いの過去……幼い姿に出逢って、全てを知った。迷いも、罪も、後悔も、言葉にしてさらけ出した。互いの心に、同じ傷を見た。互いに相手の存在こそが傷を抉っていると気づきながらも、その存在に安堵していることを知った。

心が……深いところで繋がっているのを感じた。

「サスケ……」

今、彼への想いが何の色をしているのかわからない。

同情か共感か、依存か……例えば愛じゃなくとも。

「ありがとう」

ここに居てくれてよかったと心から思った。

彼の言葉に安らいでいた。

だからもう、サスケに心を……全てを預けた。



## 残骸

水月と重吾は、大蛇丸のアジトで見つけたとっておきの「ある物」を手に、サスケの元へ向かっていた。

水月にサスケの居場所を感知する能力はなかったが、重吾にはそれができた。

ずいぶんと離れたところにいるようだったが、彼らは裸足のままひたすらにそこへ向かった。

水月はある大きな期待を抱いていた。そのために、サスケの元へ行くという目的があった。

今手にしているもの……それは大蛇丸が遺した一本の巻物だった。

偶然にもアジトの隠し部屋を見つけ、大蛇丸の極秘資料を見たときは心底驚いた。その中でこの巻物を見つけ、書いてあることを目にしたときにはすこぶる高揚した。

隠し部屋の壁に記録されていたのは、初代から四代目までの火影に関する詳細なデータ。

そこには彼ら全員が、『屍鬼封尽』しきふうじんという術によって封印されていることが示されていた。

さらに、穢土転生で彼らを蘇らせるという計画も……。

そしてこの巻物には、まさにその術を解く方法が書かれているのだ。

これがあれば、四人もの火影を蘇らせ、意のままに操ることが出来る……。そうすれば戦争など瞬く間に終焉を迎え、この世界は必ず自分たち『鷹』の手のうちに入るだろう。

そう考えると興奮した。

木ノ葉隠れの里に……いや、この世界に深い憎しみを持つサスケなら、きつとこの話に乗るはずだ。

仲間としての意識が強いとはいえないが、彼には類稀なる力があることは認めている。

そして彼にはうつつつけの話だという自信もあった。

重吾が示したサスケの居場所は、深い森の中の洞窟だった。大好きなじめじめとした空気の中、鍾乳石の間を縫って奥へ進む。重吾が一気に床を突き破った。瓦礫と共に下の空間へ飛び降りると、そこにはちゃんとサスケが居た。

が、その光景はどこか不可思議だった。警戒し、構えていたサスケの後ろに、白い影がたたずんでいる。それには見覚えがあった。

いずみナナだ。

あの時と同じく白い袴姿をしている。

ナナはサスケの後ろに隠れるように……いや、サスケがかばうようにしていた。

それにまず、違和感をおぼえる。

そして彼らの近くには、木ノ葉の忍の死骸が無残に横たわり、その奥には腹から大蛇が突き出た気味の悪い男が突っ立っていた。

とりあえずこちらへの警戒を解いたサスケが、ここで起こったことを話した。

その不可思議で壮大で残酷な内容のわりに、サスケの口調はやけに淡々としていた。

だが実際のところ、話の中身は七割ほどしか頭に入らなかった。

瓦礫に腰かけて話すサスケの傍らに、まるで幽霊のように青白い顔で座るいずみナナの姿が、視界の端に張り付いたようで話に集中できなかつたのだ。

思い切って、水月はまっすぐにナナを見た。

ひと目でわかる、涙の跡。鼻先はまだ赤い。腫れた瞼。眼に光はなく、どちらかといえば虚ろで、何も映してはいないようだった。青紫がかかった唇は真横に引き結ばれ、言葉を忘れたかのように開くことはなかつた。

そして何より、襟元から覗く白い肌……首筋から左頬にかけて、皮膚が鱗のようにかすかに盛り上がっている。

はつきり言つて、彼女の姿は不気味……に映つた。

『いずみナナ』の名前は以前から知つていた。大蛇丸がその名を何度か口にしていたからだ。

和泉一族という伝説の陰陽師一族の末裔で、大蛇丸がその身体と血を欲した存在。木ノ葉の忍で、元はサスケの仲間だった。

そしてサスケが標的とする兄、うちはイタチの許嫁。

マンダの腹から二人で出て来た時……。あの時の絶望的な顔は、まだ鮮明に覚えている。

少しだけ、ほんの少しだけ、彼女に同情したことも。

サスケといずみナナとの関係を詳しく知りはしなかったが、興味が無かつたわけでもないのです、二人の間に何があつたのかを吟味した。

香燐がかけた言葉、その「攻撃」に明らかに怯えた姿からも、彼女のことがなんとなくわかつたような気がしていた。

あの時、サスケはナナを拒絶した。

『……お前も一緒に殺してやる……!!』

あのサスケの声は今でも覚えている。本物の殺意さえあつたとも思う。

今のいずみナナの打ちのめされたような様子は……絶望に沈んだ姿は、あの時と同じだった。

だが、今のいずみナナは一切の感情を見せなかった。

いや、終に心を失くしてしまったようだった。

ナナに気を取られながらサスケの話を聞き終えたとき、要件を伝えるはずが重吾に後れをとつた。

「マダラとかいうヤツの穢土転生は止まっていないうだぞ」

サスケの表情が険しくなった。

が、やはりナナは瞬きすら調子を変えなかった。

「そ、そんなことより……!」

水月は気を取り直して、懐から巻物を取り出した。

今はいずみナナのことなどより、サスケに目的を示すことが需要だった。

「これ、見てよ!」

ナナを意識しながら、巻物をサスケに手渡す。

その行方すら、ナナの視界に入っていないのがわかった。

「これだ……」

サスケの反応を心待ちにしていたのに、隣で空を見つめるナナが気になってしまっていた。

だから、危うくサスケの呟きを聞き逃すところだった。

「全てを知る人間……」

「え？」

サスケは巻物をナナに手渡した。

ようやくナナは反応を示し、素直に巻物に視線を落とした。

読んでいる最中も、読み終えてサスケにそれを返す時まで、やはりナナは何の感情も示さなかった。

が、それをサスケは気にする様子もなく、さっさと巻物を丸めた。

「会わなければならない奴ができた……。オレは行く」

「誰？」

「大蛇丸だ」

その言葉に、やっとサスケの方に集中した。

「は？ 何言ってるの？ 大蛇丸は君がぶつ殺したはずじゃ……！」

さすがの重吾も驚きを隠せないでいる。

そもそもサスケ自身がこの情報と巻物を利用すると思っていたのに、自ら殺した人間の名を口にするのが全く解せなかった。

「ボクは君がコレを……！」

サスケの耳に、言葉は届いていないようだった。

「大蛇丸は誰よりもしぶとく執念深いヤツだ。あれくらいではくたばらないだろう」

独り言のように、倒れている木ノ葉のくのいちを向いて言う。

「またヤツの顔を見るのは胸クソ悪いが、どうしてもヤツにやってもらわなければならぬことがある」

とても低い声で。

「一族……里……全てを知る人間に会いに行くために……！」

それは確かに彼の決意だった。

が、水月にはやはり何のことかわからなかった。

カブトとの戦い、うちはイタチとの再会で、何か劇的なことが起こったのは察しが付く。いずみナナの様子を見ても、普通じゃないことがこの場で起きたのだ。

だが、サスケから聞かされた話では、彼らの心理を推し量ることはできなかった。

「だからなんでわざわざ大蛇丸？ どうやってヤツに会うの？ それに『全てを知る人間』って何なの？」

苛立ちはしなかった。それだけ絶対的なカリスマ性をサスケに感じ取っているのは認めている。

だから疑問をそのまま並べ立てた。

「……お前たちには関係ないことだ」

サスケは一瞬だけ口をつぐんでからそう言った。

だがやはり、腹が立つことはなかった。

ただ、反論した。

大蛇丸を復活させることの危険性。たとえサスケが『巻物の術』を大蛇丸にさせようと考えていようとも、その存在はあまりに危険すぎた。

「お気に入り」と自負するほどの部下だったからわかる。あの大蛇丸の恐ろしさ、いや、不気味さは言葉に表せないほどだ。

それに、サスケなら今すぐに大蛇丸を復活させて術を成さなくとも、時間をかければサスケ自身が術を会得できると思っっている。まさにそのために、わざわざ彼を探してここまで足を運んだのだ。

だがサスケは、まったく耳を貸さなかった。

「大蛇丸でなければできないこともある」

サスケはナナを振り返った。

言葉もなくうながされたように、ナナはおとなしくサスケの傍らに立つ。

その様子に、またわずかに気を取られたが、

「大蛇丸がこの戦争のことを知ったら乗っかるに決まってるよね?! ヤツも木ノ葉を潰したいんだし！ そしたらボクらも戦うことに

なっちやうんじやないの?!」

目いっぱい反対の意思を突き付けた。

いくらサスケがこちら側にしようとも、大蛇丸と戦うのは御免だった。せつかく支配から脱したのに、今さら再会など望むわけがない。

しかしサスケは、まくしたてるように述べた反対意見を全て聞き流し、

「少し黙ってる水月。それより、そのカブトの体の一部をえぐって持って来てくれ」

命令口調で言う始末。

「人の言うことを聞かないやつと言うことを聞くとと思う?」

皮肉を言うのが精いっぱいだった。

とりあえず大げさにため息をついてせめてもの抵抗の跡を残し、横目でチラリとナナを見る。

まるでこのやり取りが耳に入っていないかのように、サスケと横たわるくのいちを傍観していた。

水月はもう一度深くため息をついた。

所詮、強引に逆らつても無駄なこと。サスケに勝てるとは思えないし、重吾はサスケ側につくと決まっている。もう観念して、成り行きを傍観するしかないのだ。

いずみナナのように……。

重吾は「仙人化」とかいう気味の悪い術で、カブトの体の一部をえぐり取った。そしてそれをくのいちの首に押し当てる。

よく見ると、そこには見覚えのある大蛇丸の呪印があった。

(へえ、この人も大蛇丸の……)

諦めて見守っていると、

「重吾、ナナを護れ」

サスケが重吾に命じ、重吾は言われるがままナナの前に立った。水月自身も、慌ててカブトの影に回り込む。

サスケは術を発動した。何の術かはわからない。

が、くのいちの首元からは大蛇がぬめりと首をもたげ、その唾液まみれの口がパカリと開いた。

そして、長い舌と共にあの大蛇丸が姿を現した。  
吐き気をもよおす……とまではいかないが、不気味な光景だった。  
そしてやはり、身体にしみついた恐怖が肌を泡立たせた。

「まさか……あなたたちの方から私を復活させてくれるとはね……」  
しわがれた声と陰気な笑みは、まさに大蛇丸のもの。本当に、彼は  
復活したのだ。

ごくりと唾を飲み込んだ。

大蛇丸の視線がこちらを向く。

「ど、ども……お久しぶりっス！」

カブトの影から、愛想笑いを試みる。

大蛇丸はこちらには一瞥をくれただけで、カブトを見つめたまま何も言わなかった。

「大蛇丸、アンタにやってもらいたいことがある」

サスケは大蛇丸に対して警戒もせずに口を開く。

「いちいち説明してくれなくていいわよ。アンコの中で全部見ていたから」

やはり大蛇丸は特別な人間だった。

「意識体」で他者の中に存在していたとは、とても普通の人間が為せる技じゃない。

いや、水月にとって大蛇丸はもはや人間とすら呼べない域にいた。

「だったら戦争のことも知っているのか？」

「もちろん……。ただそれについて一つだけ断っておくわ。水月」

突然、自分の名が呼ばれた。悪態づいた心の中が見透かされたのかと、全身に緊張が走る。

が、大蛇丸はこう告げただけだった。

「私……この戦争には興味ないわよ」

思わず驚きの声を上げる。

と、大蛇丸は口の端を上げて説明した。

「他人が始めてしまった戦争なんてね。未だに興味があるとすれば……サスケ君、アナタのその身体ね……そして……」

大蛇丸はサスケと重吾の後ろに立つナナを見た。やはり、ナナの表情は変わらなかった。まるで、大蛇丸の存在が目に入らないかのように。

サスケもまた、大蛇丸の言葉に顔色を変えない。挑発と知って聞き流しているかのようにだった。

そして黙って、あの巻物を大蛇丸に差し出す。

「彼らに会ってどうするつもり？」

「オレは……あまりに何も知らなすぎる。だから、奴らに全てを聞く」  
二人が対峙するのを、もう一度唾を飲み込んで見守った。

「そもその始まりは何だったのか……。オレはどうあるべきであり、どうすべきなのか……」

「復讐を迷っているの？」

「違う。復讐自体を迷っているわけではない。イタチと再会したことで、木ノ葉への憎しみは増した」

大蛇丸はニヤつくような笑みを引っ込めて、サスケの決意を聞いている。

「ただ……汚名を着せられ死してなお、木ノ葉の忍として里を守ろうとしたイタチが、何を想っていたのか……」

サスケは目を伏せた。

その姿に、彼がもう憎しみの色だけに染まっているのではないことが、水月にもわかった。

「全てを知り、己の意志と眼で成すべき答えを出したい」

彼が明らかに、生き方を変えたことを知った。

大蛇丸は何も言わずこちらに向かって歩いて来た。危険を察知して、水月は慌ててサスケの元へ走り寄る。

「カブトの力を全て吸い取ってパワーアップするつもりだよ！ 用心したほうがいいって！」

サスケは黙って大蛇丸の様子を見たまま、動かない。

重吾もそれに従い、ナナはナナでやはりどこを見ているかわからなかった。

「今のアナタ……悪くないわね」



大蛇丸はサスケに向かってそう言つて、カブトのチャクラを吸い取つた。

……ように見えた。  
だが。

「いや、カブトの中にあつた。自分の”チャクラを取つただけだ。カブトのチャクラには手を付けていないようだ」

重吾が落ち着いた声でそう解説する。

それを信じ切る前に、

「いいわ、協力してあげる。ついて来なさい」

大蛇丸は何を企んでいるのか、上機嫌な口ぶりでそう言つた。

耳を疑つたが、サスケは勇んだ。

「場所はどこだ？」

「フフ……アナタもよく知っている場所よ」

不気味に笑む大蛇丸。あくまで目的を達成することだけを考へているサスケ。

水月は一瞬迷つた。

大蛇丸はもう自分に興味はないようだし、サスケにこれ以上つて行く義理は無い。 ”全て” を知つたサスケが出す答えも、サスケが言つた通り自分にとつては関係のないことだ。

だが、この先に起こらうとしていることが気にならないわけでもない。ここから一人で行動するのも面倒だ。

それに……。

水月はまたナナのほうをチラリと見た。

彼女がこれからどうなるのか……ほんの少しだけ興味があつた。  
と、

「その前に……」

そのナナの方を、大蛇丸が改めて向く。

さすがのサスケも身構えた。重吾も手を広げてナナの姿を隠そうとしている。

かすかな殺気が湿つた空気に漂つた。

「ナナちゃんのソレをどうにかしなくちゃならないわ」

ゆつくりと、大蛇丸がナナに近づく。

サスケもナナの側に寄った。

「カブトの細胞が少し、皮膚に同化しちやってるようね……。早く取り除いておいたほうがいいわよ」

サスケは大蛇丸を睨み上げた。

「何とかできるのか？」

「簡単なことよ。さつき、私がカブトのチャクラを取るところを見てたでしょ？ あれと同じよ」

重吾がサスケと大蛇丸を交互に見ていた。

その気持ちはよくわかる。大蛇丸がナナに手を出さない保障はないが、サスケにはナナを護る強い意志があるはずだった。

今までの様子を見るからには……。おそろく……。

「身体への影響は？」

「見るからに消耗しているようだから、少しきついかもね」

「後遺症はあるのか？」

「細胞を全て取り切れば大丈夫よ。そして私には確実にそれができる」

しかし当の本人であるナナは、まだ虚ろな目でサスケだけを見ていた。

「若い身体だもの、カブトの細胞は死滅しないでナナちゃんの中で徐々に増殖してしまうわよ？」

水月にとっては文字通り他人事だったが、それでも大蛇丸の「治療」を受けなきゃだと思っただ。

「わかった」

サスケの決断は早かった。

側にいた重吾も、それにはかすかに驚いている。

「支えてあげなさい」

サスケはナナを座らせ、後ろから抱きかかえた。

「ちよ……」

言いかけて口をつぐんだ。

ここで心配してやる義理もまた、水月にはなかった。

ただ、ナナ本人の意思を確認せぬまま事態が動こうとしていることに、今さら違和感を覚えたのだ。

「ぼ、ボクは知らないからね……」

自分を納得させるようにつぶやいた。

重吾でさえ躊躇して、サスケと大蛇丸、そしてナナを見ている。

が、自分の役目を思い出したかのように、大蛇丸に対して警戒の意を示した。

「そんなに殺気立たなくても大丈夫よ、重吾。今の私ではサスケ君に敵わないから」

大蛇丸はニタリと笑い、印を結んだ。

サスケがナナに身体に回した腕に力を込める。

水月はその様を自然と凝視していた。

大蛇丸の手が、ナナの首筋にかかる。サスケはナナを抱きかかえたまま大蛇丸から視線を外さない。

ナナは……術が発動して初めて顔を歪めた。

「うっ……」

痛みか不快感か……水月にはわからなかったが、ナナは苦しげに目をつむる。

と同時に、醜い鱗がナナの白い肌の上で蠢いて、大蛇丸の手のひらに吸い込まれるようにして消えて行った。

「終わったわよ」

意外にあっさり、儀式は終わった。

「ナナ」

サスケが呼びかける。

ナナはすでに、意識を失っているようだった。

「それで、このコはどうするの？」

大蛇丸は手のひらに浮いた何かを地面に捨てるような仕草をしながら尋ねた。

その答えには、水月も大いに興味があった。

「連れて行く」

サスケはナナを背負いながら、さも当然のように答えた。

「そう」

それ以上、大蛇丸は何も言わなかった。重吾もサスケの行為に異を唱える気はそもそも無い。

自分だけが、動揺していた。

「ちよつと、大丈夫なの？」

すでに洞窟の出口へ向けて歩き出そうとしているサスケを、思わず呼び止めた。

「何がだ？」

「そのコだよ」

サスケの背でぐったりとしている、いずみナナ。

薄汚れた白い袴は、それでもやはり俗世離れしていて、  
『和泉一族』という特別な存在であることを意識させる。

「本当に連れて行くの？」

本当は、「連れて行ってどうするつもりか」と問いたかった。

が、これまでのサスケの態度があったから、そこまでは憚られた。

「ああ」

こともなげにサスケは言う。

「でもさ、相当へばってるみたいだし……それに……」

これではまるでナナのことを案じているようだ……と思つて、口ごもつた。

大蛇丸の愉快そうな口元も視界の端に見える。

それに少し苛立つて、こう言った。

「君がどんな答えを出すか知らないけど、どっちにしろそのコ、君の邪魔になるんじゃないの？」

あの時の香燐の顔が脳裏に浮かんだ。

いや違う……香燐とは違う……そう、言い訳するようにサスケを睨む。

「お前には関係のないことだ」……またそう言われるのだと思つた。だが、違った。

「ナナは連れて行く。たとえオレの知りたいたいことを、知りたくなくて  
もな……」

よくわからない言い回しだと思った。その黒い眼からは、何も感じられなかった。

決意も、同情も……ナナへの愛すらも。

ただそれが、自分たちの及ばない力が働いて決められたこと……そう、*「運命」*であるかのように、サスケは言ったのだ。

*「行くぞ、水月」*

戸惑ってたたずむ間に大蛇丸とサスケは行ってしまった。

重吾に促され、水月はやっと足を進める。

*「よくわかんないな、まったくとく」*

悪態づいて、暗く湿って居心地の良いはずの洞窟を後にした。

## 影

闇夜の森を走ることに飽きてきた頃、ナナはサスケの背で目を覚ました。

そこで始めて休憩をとった。

水月は二人分の水を汲んで来て、巨木の根に腰かけるサスケに両方とも手渡した。

サスケはそれらを受け取ると、黙ってひとつを隣のナナに差し出し、ナナも自然な手つきで受け取って水を飲んだ。

やはり、違和感があった。

サスケの仕草は、義務感でもなく、労りでもなく……何か違うものを醸し出している。決してナナを慈しんでいるようには見えない。かといって、義理で面倒を見ているわけでも決してない。

「具合はどうだ？」

「平気。もう歩ける」

二人が交わした会話はそれだけだ。

少なくとも、水月の前では……だが。

そんな様子を、重吾は気にしていないようだった。大蛇丸は何もかも見透かしたような顔で、遠巻きに二人を見ている。

水月だけが大いに気になっていた。

今の二人の状態を……。

「そろそろ行きましよう」

大蛇丸のしわがれた声で、二人も腰を上げた。

その頃にはすでに、大蛇丸に目的地が木ノ葉隠れの里であることを告げられていたが、ナナは目覚めてもそのことを問いはしなかった。

一行は、いよいよ木ノ葉隠れの里に足を踏み入れた。

里の周囲に張られている結界は、全員がすり抜けられるように大蛇丸が何とかしたらしい。「これには慣れている」とニヤニヤしながら言っていた。

大蛇丸はまず初めに里の外れの森へと向かった。空にかかる月は大きく明るかったが、その森には光が十分に届いてはいなかった。

そこで思わぬモノを感じ取る。

殺気ではなかった。木ノ葉の忍の気配でもない。

もつとずつと、遠い場所から伝わって来るモノ。強烈なチャクラ……。

その異常事態に、誰も声を上げなかった。おそらく、全員が感知しているはずであるのに。

「行くぞ。さっさと案内しろ、大蛇丸」

サスケも大蛇丸を促し、得体の知れないチャクラに対して無関心を決め込んでいた。

むろんサスケに寄り添うナナは、ぼーっと空を見つめたままで……、何かを感じたのか、何も感じなかったのかわからなかった。

そんな彼女が突然、あらぬ方向を向いた。はつきりと「目的」を持った視線で。

「ごくろうさま」

今夜初めて聞くナナ自身が発した声は、夜露のようにか細かった。だがそんな感想を抱くよりも驚いたのは、いつの間にかナナの前に見知らぬ子供が立っていたことだった。

「え？ 誰？」

子供は薄青の着物姿で、黒髪のおかつぱの童女だった。

童女は表情のない顔でナナだけをまっすぐ見上げ、手に持っていたものを差し出した。

それを一枚だけナナが受け取ると、童女はサスケにも同じものを差し出した。

それが何なのか思案する前に、童女は水月の前にも来た。

間近で見ると、幼いはずなのに見透かしたような漆黒の瞳で、不覚にも戸惑った。

「受け取れ、水月」

サスケが言い、自身が受け取ったものを広げる。

それは何の変哲もない、黒い布のマントだった。

「あ、ああ……どうも」

童女は無表情のまま大蛇丸と重吾にもマントを渡し、配り終わると再びナナの前に立つ。

「もういいよ」

ナナが短く言うと同時に、童女は煙すら残さず消え去った。

「な、なんだよ、あれ……」

眩く声に、

「あれが陰陽師の使う式神よ」

大蛇丸が楽しげに答えた。

「式神」という単語に聞き覚えはなかった。

隣の重吾は関心も興味も示さない代わりに、戸惑いも見せない。

こんなことなら、もつと『和泉物語』でも読んでおけばよかったと思っただが、すでに後の祭りだった。

それに、そんな後悔などしている間は無かった。

大蛇丸はどんどん進む。足取りはどことなく軽い。

そうしてマントに身を包んだ一行は、しばらくの間無言で歩き続けた。

木ノ葉の忍の警戒網は張られていない。それほど里の中心部からは離れているようだった。

しかし用心に越したことはなく、全員がマントのフードを目深に被っている。

やがて、朽ちかけた建物が木々の向こうにぼんやりと見えた。

ちょうど月明かりに照らされている。柱も梁も折れ、建物としての役割は完全に放棄している姿だった。

ただ、正面に飾られた木ノ葉のマークは健在で、ここが目的地なのだとすぐにわかった。

「ここがうずまき一族の納面堂よ」

道すがら、大蛇丸はこの納面堂にある面を使って屍鬼封尽の死神を憑依させる……などと説明していたのを覚えている。

「やっぱり……。長いこと放置されていたようね。四代目が死んでか



らかしら……。けど、結界はまだ生きているようだわ」

大蛇丸は右手を広げて前に出した。

そのとたん、バチつと音がして、手が「見えない壁」に弾かれたように見えた。

「こ、これが結界？ 破れるんすか？」

ここへ来る途中に、里全体に張られた結界を難なく破った大蛇丸なのだから可能であるはずなのに、水月は思わずそう尋ねた。

それほど、この場所はなんだか異様な雰囲気醸し出しているように思えたのだ。

「ええ、もちろん破れるわよ。だからあなたたちをここへ連れて来たんじゃない」

大蛇丸は口の端を持ち上げた。

「ただ、うずまき一族の結界は少しやつかいでね……。ちよつと時間がかかっちゃうけど。まあ我慢してちょうだい」

そして印を結ぶ。

時間がかかるということ、木ノ葉の忍に感知される危険があることだ。そのくらい、水月にもわかる。

やれやれ、こんな「敵」の本陣で逃げ回るのか……と、ため息をついたとき。

ナナが下草を踏む音もなく進み出て、刀印を結んだ右手を前にかざした。

すると横にいたサスケが、スタスタと「壁」の向こうへ歩き出す。

「え？ ちよつと……！」

サスケの身体が「壁」に弾かれることはなかった。

そして何事もなかったかのように、崩れて傾いた扉の隙間から中へ入っていく。

ナナもそれに続いた。

「ナナちゃんが結界を破ってくれたのよ。さすが、一瞬だったわね」

大蛇丸がそう説明する。

「このぶんじゃ、ここでは私の役目は無さそうね」

その口調は心底楽しそうだった。

「あのコ、協力する気はあるのか……？」

水月は心の引つ掛かりを、そのまま声にした。

ただ傍観していたように見えたナナが、自ら協力的な行為を働いた意味がわからなかったのだ。

それに、最初から気になっっているサスケとナナの距離感……。

ここまで黙って見てきたが、その不可解さは説明のしようがなかった。

「フフ……」

心中を察したように、大蛇丸が薄気味悪く笑った。

「ずいぶんと気になるようね」

「べ、べつにそういうわけじゃないスけど」

皮肉に受け取れたのでつい言い返した。

すると大蛇丸は、案外さっぱりとした答えを吐いた。

「アレが、同じ絶望に堕ちた二人の姿よ……」

相変わらず笑ってはいたが、いままでの愉快そうな口ぶりではなかった。

何度か目にしたことがある。これは、新しい術を試す時の興奮を交えた笑みだ。

それに気づき、水月はなんとなく納得をした。

なるほど、残酷な視点で見れば解せるのかもしれない。

サスケがナナに対する様は、自分が感じたとおり、慈しみでも愛情でもない……。

かといって、ただの義務感でもない。

そしてナナも、五感の全てをサスケに委ねたような姿でいつつ、サスケの目的に自ら力を貸した。

それはまるで……ナナがサスケの影であるかのような光景……。それが一番、しっくりくる解釈だった。

そんなことを思いつつも、重吾とともに朽ちた建物の中へ入る。

廊下は腐り、ところどころが抜け落ちていて、忍の彼らでなければ無事に目的の堂に入ることはできなかった。

大蛇丸の後に続いて一番奥の部屋に入ると、壁一面に角の生えた鬼

の面が飾られているのが目に入った。

サスケはすでに、その中からひとつ気味の悪い面を持っていて、大蛇丸に手渡した。

「これだな？」

「ええ、そうよ」

どうやら目的の面は無事に手にしたようだ。

まだ儀式を始めてもいないのに、水月は全身に疲労を感じていた。

## 儀式

一行はそこから里の中心部へ向かった。

次の目的地は街中を通らないと行けないのだと大蛇丸は言う。

もちろんフードを深く被ってはいたが、一行を気に留める者はいなかった。

さすがに戦争中というだけあって、里の防衛に残った忍たちが哨戒して回っているが、すれ違っても特に警戒されることはなかった。

そんななか、ふとサスケが立ち止まった。

そして、

「来い、ナナ」

ナナの腕を引っ張ったかと思うと、そのまま抱えて近くの建物に登った。

鮮やかな身のこなしで、屋上の給水タンクの上に立ってフードを取る。

「サスケ、急にどうしちゃったの？」

見上げながらつぶやくと、大蛇丸はため息をつくように言った。

「私が木ノ葉崩しをやる前と同じだわ……」

「何が？」

「たとえば里や彼自身が変わってしまったとしても、ここは彼の故郷に変わりない。感傷に浸って過去をなぞることで、己の決意を再確認する。そういう儀式なのよ」

ふーんと納得したようにうなずいて、水月はサスケとナナを見上げた。

里を見下ろすサスケ。そして、ただ寄り添うナナ。

二人が今、どんな気持ちで“故郷”を眺めているのかなど、わかりはしなかった。

何事もないまま街を横切って、再び里の外れにたどり着いた。

そこは復興が進んだ街の光景とは違い、集落の建物が完全に崩壊し

た瓦礫の散乱地帯だった。

そこに、うちは一族の『南賀ノ神社』なかのじんじやが建っていた場所があった。サスケはある地点の瓦礫を退けると、写輪眼を発動した。

すると、彼の足もとの3畳分ほどの岩が地面から切り離されたように持ち上がり、宙に浮いた。そしてその下に、地中に続く階段が現れた。

「行くぞ」

サスケは味気なくそう言っつて、暗い地面の下へと降りていく。もちろん、ナナは静かに後に続いた。

中はひんやりと涼しかった。

サスケは階下の奥まった空間で立ち止まる。

そこは案外広々としていた。「うちは」の家紋と重々しい石碑が置かれ、どうやら一族の集会場のようだった。

なるほど、一族が里に隠れて密議するにはもってこいの場所だ。

サスケは石碑の横に火をとます。冷たい石壁に5つの影がぼうつと浮かび上がった。

水月はナナを見た。

石碑を眺めている。その顔は明かりが差しても青白く、未だ死人のようだった。

「それじゃ始めるわよ」

大蛇丸がマントを脱ぎ捨てて言う。

この先の「儀式」については、道中すでに聞かされていた。

大蛇丸が面をつけて「屍鬼封尽の死神」をその身に憑依させ、その腹を裂く。大蛇丸はとりあえず自分が「人柱」になるつもりらしい。

腹が裂かれると、死神に封印されていた大蛇丸の両腕の力が戻る。それと同時に、同じく死神に封印されていた「4つの魂」も解放されるということだ。

「ナナちゃんなら、こんな回りくどいやりかたじゃなくても、死神を操ることができると思うけど……」

大蛇丸はニヤリと笑って横目でナナを見た。

和泉一族の人間はそんなこともできるのか……と、先ほど納面堂で

のことを思い出しつつ感心するが、

「ナナには力を使わせない」

サスケがきつぱりと断った。もちろん、ナナは聞こえていないかのように反応を示さない。

「わかってるわよ」

大蛇丸は肩をすくめて面をつけた。

少しの間……そして。

「グアアツウウ!!」

大蛇丸が不気味なうめき声を発するとともに、その背後に“死神”の姿が見えた。

重吾のひと回りもふた回りもある大ききで、実体はないのかもしれないが、とにかくその姿は強大でおぞましい。死神というよりまるで鬼……そう言われた方がしつくりときそうだった。

“死神”は痩せこけた手で短刀を握っていた。そしてそれを唐突に己の腹部に突き立て、真横に切り裂いた。

「ぐふっ」

同時に大蛇丸の腹から鮮血が飛び出る。どうやら本当に“死神”が憑依して、一体となっている状態のようだ。

そして“死神”の腹からいく筋かの光が飛び出し、宙を彷徨う。

「戻ったわ……!」

そのひとつが大蛇丸の手に触れ、中に取り込まれるようにして消えた。

大蛇丸に力が戻ったということか……。

事前に段取りを聞いていたおかげで、水月はどうにか理解する。

ということは、ここから自分にも役割が回ってくる番だった。

「サスケ、水月、重吾、準備なさい!」

面を取った大蛇丸が血を吐きながら合図する。

やることは頭に入っていた。

まず重吾がサスケの身体から「ゼツ」とかいうトビの監視役を引き出す。重吾の呪印仙術の力で、大蛇丸の予測通りサスケの身体から「ゼツ」が出た。全部で6体だ。

次に、大蛇丸が噴出した己の鮮血を利用して、穢土転生の式印を床に描く。重吾はその4つの式の中に、ゼツを1体ずつ転がした。

「水月、重吾、残りの2体は任せるわよ……」

苦しげに、だが相変わらぬ威圧的な口調で命を受ける。

水月自身にも出番が回って来た。

「了解っすー」

残りの2体のうち1体を捕らえ、馬乗りになって押さえつける。そしてその口を無理やり上下に開かせた。

もう1体を重吾が始末したのを見届けると、大蛇丸はいよいよ穢土転生の術を発動させる。

式印の上に寝かされた4体のゼツたちは、いつせいに苦しみ出した。

「さあ、来るわよー」

同時に、大蛇丸は身体を捨て……何度見てもおぞましいものだが……口から蛇が飛び出し、水月が拘束するゼツの口の中へ入った。

全力で押さえつけていたゼツは、見る間に大蛇丸へと姿を変える……。

そして、つぶやく。

「全てを知る者たち……」

水月は大蛇丸の上から退けるのも忘れて、悲鳴を上げる4つの塊を見た。

やがてそれはゼツの形からチリの塊に変化したかと思うと、だんだんと人の形になっていく。

そして現れたのは……。

「先代の火影たちよ」

『伝説』の初代火影以下、先代までの火影がそこに並んでいた。

「これが……初代火影。『忍の神』と謳われた柱間……」  
思わず唾を飲み込んだ。

「忍の神」といえば、忍ならば誰でも知っている。たとえ木ノ葉の忍でなくとも……だ。

すぐに火影たちは目覚め、こちらを見た。

さすがの彼らもこの状況を掴めていないようだったが、大蛇丸と最も関わりの深かった三代目火影が的確な予測を立てる。

「初代様、どうやら我々は再びこの世に蘇ったようです」

三代目がそう告げたことで、歴代火影たちの会話が始まった。

錚々たる顔ぶれを前に警戒をしないわけにもいかないので、水月はそつとサスケの側に寄る。

サスケはじつと彼らを見つめ、その横にいるナナもまた同じものを見ているようだった。

だが、その表情からはやはり感情をうかがい知れなかった。

彼女を気にしないようにして、注意深く火影たちを見る。その視線がいつこちらを向くのか怯えていたが、彼らに興味があるのもまた事実だった。

初めに抱いた感想は、初代火影が思い描いていた忍と少し違ったということだ。

思わず警戒を緩めてしまうほど、初代火影は“人間らしい”という印象を受ける。今のところ特に強烈な威厳も感じなければ、表情を良く変えるところは伝説の『忍の神』らしくないように思う。

それに、弟である二代目からの辛辣な言葉にしよぼけるところと見ると、貫録すらないように映った。

だが、いつまでも彼らのやり取りを観察しているわけにもいかなかった。

「今回は少し事情がありましたね……。私の用事ではないのです。彼のたつての希望で話し合いの場を設けさせていただきました」

そう、大蛇丸がやけに丁寧に切り出すと、火影たちの会話が止まった。

「オレはうちはサスケだ」

サスケは当然、臆することなく火影たちに名乗った。

「アンタたちに聞きたいことがある」

三代目が気づく。

「サスケ……か?!」

そして、



「ナナちゃん?!」

何故か四代目がナナの姿を見て声を上げた。

「ナナ……?!」

三代目もサスケの影にいるナナの姿を見とめて、さらに驚いた顔をする。

ナナは静かにマントを脱ぎ去った。

「おお……その白い袴、もしや和泉の……!」

「まさか、本家の娘か?!」

その姿に、初代と二代目さえも顔色を変えた。

「何故、和泉の者がここにおる?!」

「うちはの者ならわかるが、何故大蛇丸とかいう悪党と一緒にいるのだ?」

「扉間、そういう言い方はよせ!! うちには……」

「兄者は甘いのだ!」

「しよ、初代様、二代目様、彼女は『九尾の件』で和泉より派遣されたのです」

兄弟の争いを、三代目が鎮めた。

「私が死ぬきっかけとなった九尾襲来事件というのがありました……。その後、和泉の里から『九尾の抑え』として来てくれた術者があのコです」

四代目がそう補足する。

「本人の希望で、木ノ葉に来てからは忍となりました」

水月は、今さらながらに「和泉一族」の人間がいかに稀有な存在であつたかを思い出した。

だが当の本人であるナナは、まったく周囲の出来事に興味がないかのように、能面のような顔で突っ立っている。

「ナナちゃん……なんだか前とは雰囲気が違うようだね……」

四代目もその様子に気づいたのか、案ずるように言う。

「じゃが……サスケと共にいたのか……」

続けてため息のようにつぶやいた三代目は、まるで安堵したかのようだった。

「オレたちのことはいい……聞きたいことがあると言ったはずだ」

ナナへの視線を遮るかのように、サスケが口をはさんだ。

火影たちを前にするには危険すぎるほど高圧的な態度だ。大蛇丸が彼らの動きを握っていないければ、水月はこの場から退散していたであろう。

「三代目」

しかしサスケは、低い声で目的の問いを口にした。

「イタチになぜあんなことをさせた……？」

三代目の表情がまた変わった。

「全てを知ったようじゃな……」

「イタチは……オレが殺した。一族を殺された復讐として……」

ろうそくの炎に照らされた火影たちの影が、向こうの壁で一樣に揺らいだ。

「その後、トビとダンゾウに本当のことを聞いた。そしてオレは、木ノ葉へ復讐することを決意した……。だが……」

サスケが一度、言葉を止めた。

水月はサスケの横顔を見る。そして、その向こうのナナの顔を……。

ナナは目を伏せ、じつと床だけを見つめている。

「だが、アンタの口から聞いておきたい。イタチの全て……『真実』を」

彼女の心中は察し得なかった。相変わらず、灯も照らせないほど青白い顔をしていたから。

だが、確実にこう思った。

これから耳にする『真実』は、ナナにとっては凶器となるのだ……と。

『ナナは連れて行く。たとえオレの知りたいたいことを、知りたくなくてもな……』

不意に、あの洞窟でサスケが言った言葉を思い出した。

ナナはサスケと違って「知りたくない」のだ。この先、火影たちが語ることを。

だが、それを拒絶する力ももう枯れてしまったのだ。

意思も気力もなく、ただ、サスケと運命をともにする……。サスケもそんなナナを受け止める。

……そういうことか、と、ようやく納得できた気がした。

## 憤激の眼

水月がナナとサスケを観察している間に、三代目が『うちはイタチの真実』を語った。おそらく真摯に、洗いざらい……全てを。

聞き終えて、サスケは目を伏せ、

「……やはり……そうだったのか……」

ゆっくりとつぶやいた。

「うちはがすでに壊滅状態とはな……。やはりうちは一族は呪われた運命だったのだ」

そう言う二代目の声には、明らかに蔑みが混じっていた。

「いずれはそうなると思っておった。うちはマダラの意志を継ぐ反乱分子がくすぶっていたからな」

「二代目、うちはを追い込んだのはあなたが作った警務部が原因とも言えるわ」

「何だど？」

口を挟んだ大蛇丸は、そのまま淡々と説いた。

二代目がうちはを里の警務部としたことで、取り締まられる側がうちはに嫌悪感を抱くようになったこと。さらに警務部という権限がうちはに思い上がりを生んだこと。そして、一族を里の隅に追いやったことで、マダラの反乱分子を助長させたのだと。

自らが死して後の話を聞いた初代は、二代目に対し食って掛かる。

「扉間！ あれほどうちは一族をないがしろにしてはならぬと念を押したではないか……！」

「うちには奴らにこそできる役職を与え、こちらも次のマダラが出て来たとしてもすぐ対処できるよう考えた結果だ！」

しかし二代目火影も、それを己の信念であったとして譲らない。

再び兄弟が言い争う。

水月にもすでに、初代と二代目の間ではうちは一族に対して見解の相違があることを理解していた。

「兄者も知っているだろう、奴らうちはは……」

そして、二代目がうちはを蔑視し続けてきたことは明白だった。

「悪に憑かれた一族だ……!」

言い切ったと同時に、サスケから殺気が放たれた。

眼は朱く……万華鏡写輪眼となっている。それは水月が知っている文様ではなかった。

「基本巴ではない……。万華鏡写輪眼か……」

「貴様、すでに開眼を……」

初代と二代目は押し黙り、三代目と四代目も黒い眼を瞬いた。

しかしサスケは、反論するようなことはしなかった。

怒りを堪えているようでもなく……、ただ単に、不快感に対して殺気を放っているようだった。

そしてナナは……やはり虚ろに床を見つめていた。

「二代目火影、アンタに聞く」

サスケはさつきと写輪眼を収め、二代目に問う。

「うちは一族とは何なんだ？ アンタは何を知っている?!」

二代目は大きいため息をつき、腕組みをすると話し始めた。

うちはと千手が長きにわたって戦い続けてきた歴史を。千手は「術」でなく「愛情」を力にすることに對し、うちはは「術」の力を第一と考えてきたのだと。

だが、

「だが……本当は逆だったのだ……」

それを自ら否定した。

これには大蛇丸さえも怪訝な顔をした。

「うちはこそが愛情に深い一族だった。他の一族……おそらく千手よりもな。だからこそ、うちははそれを封印してきた」

二代目は言った。

うちの者が愛情を知ると、押さえつけてきた情が溢れ出し、千手をも超える力に目覚めてしまう……と。

「……ならいいんじゃないの？ その強い愛情の力だったので千手や他のヤツらともうまくいくでしょ？」

水月は思わず口を挟んだ。

聞いたところ、うちはが愛情の力を持つ一族ならば、それを発揮すれば対立した者ともうまくいくと思えた。

聞いていたうちの歴史とサスケの様子から見て、想像していたうちは一族とは反対のことを言われたので、単純にそう思ったのだ。

だが、二代目はこちらを一瞥して続ける。

「ところがそううまくはいかなかったのだ。うちはの強すぎる愛情は暴走する可能性を秘めていた」

愛を知ったうちの者がそれを失ったとき、それが強い「憎しみ」となってしまう。そしてその時に、決まってある症状が出るというのだ。

うちはの者が大きな愛の喪失や自分自身の失意にもがき苦しむ時……、脳内に特殊なチャクラが吹き出し、視神経に反応して眼に変化をもたらす……。

「それこそが心を写す瞳……『写輪眼』なのだ」

なるほど……と、二代目の説明に納得した。

水月自身、写輪眼の力や仕組みに興味は無かったが、サスケのそれが「進化」する様は見ている。

もつとも、最初に開眼したときは知るはずもなかったが、イタチとの戦いの後で万華鏡写輪眼を開眼し、新たな力を得て、さらに今さつき確かにそれとはまた違うカタチの眼を目の当たりにしていた。

「喪失」「失意」……確かに、サスケの身に起きたのはそれだ。そしてそれがきっかけで、彼の眼は変化を遂げたのだ。

だから、写輪眼が心の力と同調して個人の力を急速に強くさせる、という二代目の説明も、それが心の憎しみと共にあるという彼の解釈ももうなげた。

さらに二代目は、うちはは繊細な者が多く、強い情に目覚めた者は闇に捕らわれ悪に墮ちる……とまで言った。

「闇が深くなればなるほど瞳力も増し、手が付けられなくなる……。まさに悪……。マダラがそうだった」

最後は吐き捨てるような口ぶりだった。

「マダラは弟思いの男だった……」

しかし初代は情を込めたようにつぶやいた。

ここで水月は再びサスケを見やった。

まっすぐに火影たちを見据えながらじっと立っている。怒りを燻らせながらも、彼の心は鎮まっているようだった。

そして……傍らのナナはやはり、サスケの影のよう……。

二代目が言葉を続けた。

「ワシはうちの力が里に貢献できるよう、形を整えて導いたつもりだ」

あの嫌忌を持ったまま。

「それなのに、役目を捨てて自滅したのならそれも仕方のないこと。滅びることで彼らも里の役に立ったということだ」

彼は言い過ぎた……このとき水月は直感した。

「貴様の兄はよくやった。うちの者が自ら一族に手を下してくれたことは、里にとってまさに理想だ。サルよ、よく命じた」

その時。

「扉間！　そういう言い方はよさぬか！」

「大事なのは里だ。兄者もそれはわかっていよう」

たしなめた初代と、受け流そうとする二代目の動きが突然止まる……。

「な、なんじゃ……?!」

「これは……?!」

三代目と四代目までも。

「何」が起きたのか、水月にはすぐに察知できなかった。が、「何か」が起きたことはすぐにわかった。

自身の身も固まったように動かない。いや……その場に立ち竦んでいた。

背中に冷たい筋が通る。膝が震える。

すぐ側にいる大蛇丸さえもとっさに結んだ印を止め、肩を震わしている。

「な、なにが……」

まともに声が出なかった。少し後ろの重吾の様子を振り返ってうかがうことすらできない。

「ぐっ……うう……」

声を上げたのは火影たちだった。あの歴代の火影たちが揃ってうめきながら苦しげに頭を抱え、その場に膝を付いた。まるで重力に引っ張られたかのように……。

そして彼らの身体が青白く光り始める。

穢土転生の影響か？

いや、術者である大蛇丸もこの状況に明らかに戸惑っている。

では、この金縛りは誰かの攻撃か……？

いや……ただの金縛りではない。身体が動かないだけでなく呼吸も制限されている。空気そのものに圧迫されるようだ。

背筋もどんどん寒くなる。ただ竦んでいるのではない。内側から身体が冷えて行くような感覚だ。

これは何……？

ほんの一瞬のうちに、脳が揺さぶられたかのように思考が混乱した。

だがかろうじて「逃げなければ」と頭に警鐘が鳴った。

この際、自分だけでも逃げるのが上策だ。幸いにも自分は「特異」な体質である。

こんな所までのこのこついて来たことを後悔しながら、身体を液状化しようと試みたその時。

「じつとしていなさい、水月。重吾も……。魂を消されちゃうわよ……」

大蛇丸が低い声で告げた。

「え……？ た、魂を消され……？」

「いいから……、黙っていなさい！」

目だけを動かして大蛇丸を見た。その額には汗が浮かんでいる。これまで見たことのない表情だ。身体をこわばらせたまま、視線だけが横のサスケを向いている。

「サ、サスケ……！」



震える骨を動かすようにして、水月も視線をサスケへ向ける。

だが、視界の端に彼の姿を捉えることができた瞬間、この展開が彼の力によるものでないことを察した。

「ナナ……」

サスケは困惑……というよりひどく悲しげな顔をして言った。

「……よせ」

ようやく、ここに居たもう一人の存在を思い出す。そして全身に力を込めて彼女に目をやる。

その途端、水月は腰が砕けてその場に崩れ落ちた。

「な、なんだ……?!」

ナナを見た瞬間、この異常な空間を作り出したのが彼女であることがひと目でわかった。そしてそれに気づいたことで、まともに威圧を受けてしまった。

尻もちをついたまま身動きひとつとれない。全身の骨が抜き取られたような感覚だ。

大蛇丸の忠告どころではない。

動けば狩られる……まるで捕食者に睨まれた野生のノウサギになったかのような危機感を覚えた。

床にへばり付いたまま、ごくりと唾を飲んだ。実際には本能的にそうしようとしただけで、身体はピクリとも動かなかった。

が、視界の下の方にこの「現象」の原因を見た。

古びた床に青白い「光」が走っている。何本も。

それはナナの足元を中心に、何らかの文様を描いているようだ。そしてここにいる全ての者がその文様の中に捕らわれている。

「ナナ……よせ!」

サスケは両手でナナの頬を挟み、祈るように言った。

「その眼を使うな!」

(眼……)

かろうじて見えたナナの眼……。それは碧く燃え、そこには「文様」が浮き出ていた。

「清らかでもあり、禍々しくもある……」。

横からでは文様の形が何なのかわかり得なかったが、“それ”とこの現象”がただの瞳力でないことは良くわかった。

「ナナ……！」

サスケがナナの眼を覗き込む。

危険だと思っただが、止める術もそんな義理も無かった。

「うっ……」

と……、ナナは急に苦しげに顔を歪め、ぎゅっと眼をつむった。

同時に彼女の力の作用がプツリと切れたかのように、床を這う不気味な光の文様が掻き消えた。

気管に詰っていた呼気が、一気に口から飛び出した。当然、咳き込む。

重吾もそうだった。大蛇丸も……、火影たちでさえも。

皆、体勢を整えきれぬまま、ナナを見た。水月も当然そうした。

「ナナ……」

「……サスケ……」

サスケの呼びかけに、ナナは初めて答えた。

ひどく霞んだ声だった。

「ナナ、大丈夫か？」

ナナは一瞬、ここがどこであるかを忘れたかのように周囲を見回した。

だが、やはり眼を開けてはいられなかったのだろう。また眼をつむって、痛みで……というより絶望した様に顔を歪めた。

そして、先ほどの自分や火影たちのように、ガクンと床に膝をついた。

「ナナ……！」

サスケがすぐに身体を支える。

ナナは水月がかろうじて聞きとれるほどのか細い声でつぶやいた。

「……眼……が……痛い……」

自身の両手で眼を抑える。

サスケはその手をどかし、指で頬を拭った。その指に着いたのは、目尻から流れた赤い血だった。

「サスケ……、私……」

ナナは自身の力に怯えているように見えた。

無理もないと水月は思う。自分だって、大蛇丸や火影でさえも、今しがたその力にた易く殺されそうになったのだから。

そう……、「殺されそうになった」のだと、改めて実感する。

「大丈夫だ、ナナ」

サスケは落ち着いた声で言った。

気づけば二人から目を離せずにいた。恐らく大蛇丸や火影たちも。

「大丈夫だ……」

サスケは黙ってナナの背をさすっていた。こちらからはその表情は見ることができない。

ナナは身体を震わせたままへたり込んでいる。両手で目を覆い、その手の隙間からは赤い血がポタリと流れ落ちていた。

それが泣いているからなのか、水月にはわからなかった。

意識的に二人から目を逸らし、大蛇丸を見た。

「凄い力だったわね……。あの眼……」

明らかに様子がおかしかった。

ナナの力を欲していたはずの大蛇丸が、今は白けているように見えた。

「恐らく、ナナちゃんが火影たちの魂を強制的に消しちやうところだったのよ。私が穢土転生の術でそれらを縛っているにもかかわらず……ね」

聞いてもいないのに、大蛇丸が小声でそう説いた。

この身に……いや、この場で起きたことに比べて、やけに簡素な説明だった。

「た、魂を消す……？」

久しぶりに声を出した気がした。

「あの眼の力よ」

話ながら、大蛇丸が密かに息を整えているのがわかった。

「うっかり私たちまで消してしまうくらい制御ができていなかったみたいだけど……。怒りで暴走したのでしょね。まあ、私たちのこと

なんてどうでもよかったのかもしれないけれど。サスケ君がいてラッキーだったってところかしら。あれを止められる人間なんてそうそういないでしょう。私の力なんて、あのコのあの眼の力にとってはゴミくず同然ってことかしらね」

大蛇丸が饒舌なのはいつものことだったが、自虐的な台詞を聞くのは初めてだった。

「『眼』とは……?」

さすがの重吾も今回ばかりは血の気が引いている。尋ねる声が見えなかった。

「あれは……」

「貴様……! その眼……!」

大蛇丸が答える前に、ようやく口がきけるようになった二代目が叫ぶ。

「どういうことだ? それは……写輪眼、いや、万華鏡写輪眼なのか?!」

初代も戸惑いを隠さない。

「なんと……。あ、青色の……?!」

「ナナ……」

三代目はまだその場に片膝をついていた。

「貴様……、いったい何者だ?!」

## 命の在り処

「貴様……、いったい何者だ?!」

二代目がナナを睨みつける。殺気を飛ばしているようにさえ見え  
た。

「いずみナナ……和泉菜々葉は……、九尾襲来を予知できず、またその  
力を封印できる術者を送れなかったことへの“代償”として、和泉一  
族から木ノ葉へ送られて来た娘です」

しわがれた声で三代目が答えた。

「九尾の人柱力が九尾を抑え切れずに暴走した際、人柱力から九尾を  
抜き取り、自身の身に宿らせ、その命をもつて九尾を永久に封印する  
と……。そのために、幼い頃から和泉の里にて修業を続けてきたのだ  
と……」

まるで言い訳でもするかのように。

「そして、今の和泉にはそれだけの力を持つ者がいないゆえ……“意  
図的に”産み出された子だということですよ……」

当のナナは……。

何が話されているのか気づかぬように、ただ座り込んでいる。

「意図的に……転生か……?」

「なるほど、それであるような力を持ったか。だが、あの眼は確かにう  
ちはの写輪眼……。いや、万華鏡写輪眼の文様と瞳力であった……」

怪訝と猜疑、そして、

「ナナちゃん……君は成葉の……」

憂慮。

それらをないまぜにぶつけられても、ナナは動かない。

が、代わりにサスケが火影たちを振り返った。

「四代目……。アンタは“ナナの母親”のことを良く知っているんだ  
ろう?」

そして唐突に問いを口にする。

「え……?」

「ナナは『和泉成葉の生まれ変わり』としてこの世に転生した……と。三代目たちもそう聞いていたはずだな?」

三代目、四代目……ナナを知る二人の火影は、予期せぬことに口をつぐんだ。

水月も思わず重吾と顔を見合わせる。

「ナナ自身もそう聞かされて育った……。木ノ葉に来てからも、ずっとそう思っ生きていた。だが……」

いやな緊張が胃を締め付けた。

それをまぎらわすように大蛇丸のほうをうかがうと、意外にも面白がっている様子はなく、どこことなく神妙な面持ちでサスケの声を聞いている。

「でも、違った……。ナナは……」

まるで恨み言のように、サスケは『ナナの生』を明かした。

「和泉成葉の『産まれなかった子』の生まれ変わりだそうだ……」

驚いたのは三代目と四代目、そして水月と重吾だった。

「え? どういうこと?」

水月は思わず声を上げた。

自分より詳しい事情を知っていた香燐から聞いていたのは、いずれもナナは希代の陰陽師であった故人である『和泉成葉』の魂を一族本家の娘に転生させて産まれた……という話だった。

大蛇丸のお気に入りだった香燐の話を疑う余地はない。

だから今の今まで、彼女は『和泉成葉』の生まれ変わりにして、和泉一族本家の人間であると思っていた。だからこそ人柱力の『保険』になり得る力があるのだと……。

いや、だが……さっきの眼……蒼に文様の入ったあの眼は、二代目が問い詰めるまでもなく『写輪眼』に似ていると、水月も心のどこかで思っていた。

「じゃあ君は……あの時、成のお腹にいた……?」

「だから……」

サスケは一転して気だるそうに言った。

「四代目、あんたは『ナナの父親』のことも知っているな?」

そんなサスケの手の中で、ナナの細い肩はまだ震えている。

「……うん……」

四代目は自分の気持ちを抑えるように、ゆっくりと答えた。

「確かに……うちは一族の人だったよ……」

それが全ての答えだった。

「げ、マジ……？」

水気は思わずつぶやいた。

「だからどう」……ということはわからなかったし、はつきり言っ  
自分には関係のないことだった。

だが、すでにその血が持つ力を目のあたりにしてしまった。いや、  
唐突に骨身に感じてしまったのだ。

あの命が剥ぎ取られるような悪寒を思い起こさせるように、サスケ  
は続けて告げた。

「和泉成葉でなく、〃その子供〃を転生させるよう仕組んだのは『うち  
はマダラ』だと……イタチが明かした」

背後の灯りが、突き付けられた真実に呼応するかのように大きく揺  
れた。

二代目さえも難しい顔のまま黙り込んだ。

「ナナちゃん……」

唯一、驚きよりも憐みの色を濃くした四代目が、何か言葉を飲み込  
んだ。

恐らく彼は知っている……。

水月にもわかった。

サスケの口ぶりでは、四代目はその〃和泉成葉〃と懇意であったと  
いう。であれば、ナナの父親を彼は知っているはずだった。

だが、四代目はその名を口にしなかった。サスケもそれ以上は聞か  
なかった。そしてナナも……。

「〃あの眼〃を開眼したのは、ナナの中にうちはの血が流れているか  
らだ」

先ほどの二代目の問いにサスケはただ淡々と答えた。

「イタチの最初の死で写輪眼を……。そして二度目の死で、万華鏡写

輪眼を……」

「イタチの死」という台詞でさえ、淡々と……。

そしてナナも、やはり何の反応も示さない。

「ま、待て……」

その流れをせき止めたのは三代目火影だった。

「ナナはイタチを知っていたのか？」

しわがれた声で問う。

「ナナが木ノ葉に来た時、すでにイタチは……」

知らないのか……。そう思った。

当時の里長は、ナナが木ノ葉に行く前に、うちとは和泉に関わりがあったことを知らないのだ。もちろん、ナナが木ノ葉で暮らし始めてからも。

水月だって詳しいことは知らない。

ただ初めて会った時、焼け焦げたようなマンダの傍らで聞いた。

『お前、うちはイタチの許婚だったんだろ？』

蔑むように言ったのは香燐だった。

あの時のやり取りで、だいたいのことを察したつもりだ。

そして、あの海辺の別れ……。あれは本当に特別だった。

イタチを殺したサスケと、止めようとしていたはずのナナ。二人、波打ち際で抱き合って……。

あれはまるで、イタチの死を二人だけで悼んでいるように見えた。

そして二人は、穏やかに別れた。

あの光景を見て、水月は人並みに二人の関係を察していたのだ。

今も……『二度目のイタチの死』を見届けた二人も……。

「ナナとイタチは許嫁だった」

サスケはまた淡々と告げた。

だがその声は、あの時の香燐のものよりもずっと冷え切っているように思えた。

「よ、よもやナナとイタチがそのような関係にあったとは……」

三代目火影はため息をつくように言った。

彼は本当にこの事実を知らなかったようだ。彼の兜が左右に何度



も揺れている。

「あの秘境の一族が……最初からうちとは組んでいたということか?!」

その「事実」をとうてい信じられないといったように、二代目も大きく頭を振る。

「その娘は自分がうちはの血を引いている者の生まれ変わりとは『知らなかった』と、お前は先程言っていたではないか。知らなかったふりをしていただけではないのか?!」

冷たい風を振り払うかのように、二代目はますます声を張り上げた。

「本当は最初から知っていて、許嫁のイタチとやらがうちはを亡ぼした後も『九尾の抑え』という口実で木ノ葉に来た。そして『父方』の悲願を果たそうと時を待っていた。だからサルにも黙って……」

「ナナちゃんはそんなコじやありません!」

二代目の台詞を途中で切り捨てたのは四代目火影だった。

「彼女は『九尾の人柱力』である僕の息子にいつも寄り添い、仲間としてその心を信じ、一緒に戦ってくれました。一族の大人同士が木ノ葉に対してよからぬことを企てていたとしても、イタチ君もナナちゃんも本当にそうするつもりはなかったと思います!」

「二人ともその事実を隠すことが最善と考えたのでしよう。現に二人は『木ノ葉の忍』として立派に務めを果たしてくれています!」

四代目の言葉に、三代目もまた遠くを見るような表情で口添えする。

「ナナちゃん……」

二代目が思案気に口を閉ざしたのを見計らって、四代目がわずかに身乗り出した。

「イタチ君の『死』が……君を変えたんだね……」

彼はナナのことを気遣っているようだった。

水月はナナを注視した。今まで以上に。

四代目の問いが「是」であることはわかりきっていたが、ナナが何と応えるのかはまったく予想がつかなかったのである。

だがナナはやはり、まるで周囲が自分のことを話しているのに気づいていないかのようにならだ眼を抑えてうつむいていた。

「さつき二代目が言ったとおりだ」

「またも、代わりに答えたのはサスケだった。」

「深い愛情と喪失……。それがナナをこんなにした……」

斬りつけるような声で。自分自身をも斬りつけるような声で。

「『イタチの真実』によつて、オレたちは生き方を変えられた」

水月はやつと理解した。

「だからその原因となった全てのこと……。イタチにあんなことをさせた『里』とは、『忍』とは何なのか……」

サスケは己の欲求だけでここにいないのではない。ナナの呪いも背負っているのだと。それを火影たちにぶつけているのだと……。

「全てを話してもらおう」

歴代の火影たちを前に発したサスケの言葉はまるで『脅迫』だった。水月がヒヤリとするほど高圧的な声色で……。

だが火影たちは撥ね付けることも一笑することもなかった。

少しの沈黙が流れた。空気が乾く……。

「全て……とな？」

大きく息を吐くように、初代がそれを破った。

水月もようやく呼吸を思い出す。

「……兄は木ノ葉に利用された。それを全て承知の上で、命を懸けて里を守り、木ノ葉の忍であることに誇りを抱いて逝った……」

サスケは静かに語りながらナナから身体を離し、ゆっくりと立ち上がる。

「家族……。一族を殺してまで、自分が死んでまで守ろうとする里とは何だ？」

ナナを背に、サスケが影を強めた。

「こんな状況をつくりあげ……。それをよしとする忍とは何なんだ？」

サスケの眼は闇よりも暗く、まっすぐに初代火影を見据える。

「アンタの言葉を聞いて……本当のことを知ってから、オレは自分で答えを出す」

そして、何かが燻っているような想いを突き付ける。

「木ノ葉に復讐をするのか……それとも……」

初代火影とサスケは睨み合った。

だが、当然サスケの言葉を聞き流せない者がいた。

「木ノ葉へ復讐だ?!」

「死体」であるはずの二代目から、火影として申し分のない殺気が放たれる。

「うちの悪に憑りつかれた小僧と、それに加担する和泉の娘……!!  
ワシがここで……!!」

先ほどのナナから放たれたモノとは違っていた。この感覚は水月もよく知っている、忍の「殺気」というものだ。

だが、規模が尋常ではなかった。

今まで感じたことのない鋭い……死の感覚。物理的な攻撃への恐怖が沸き起こる。

しかし、

「よせ、扉間……」

初代が彼を睨みつけた。

瞬間、空気が割れたように音を立てた。

悪寒が高ぶって、水月は大蛇丸の背に身を隠した。すでに身体は液化しかけている。

重吾はサスケをかばうように前に出た。

そしてサスケは……ナナの姿を隠すように立ち、まっすぐに火影たちを見据えていた。

「扉間、指を下ろせ」

初代火影が言う。

床や壁に幾本もの亀裂が走り、破片が飛び交う。

「わかった……。わかったからそうチャクラを荒立てるな……兄者」

観念したように、二代目はため息をついた。

それを見て初代も力を収め、その場は余韻を残しつつも鎮まった。

「ガツハハハハ」

そして彼は突如、豪快な笑い声を響かせる。

「いやあ、すまんすまん」

この場にそぐわぬ表情で、

「しかし……よい兄をもったな、サスケとやら。オレ以上の忍ぞ」  
そう言った。

少なくとも水月には、それが誤魔化しや皮肉には聞こえなかった。  
「里について話してやってもよいが、ちと長くなるぞ」

「できれば早急にこの子の聞きたいことを話してあげてください。あまり時間がないので」

大蛇丸が口を挟み、うちはマダラが復活し戦争が起こっていることを告げた。

その台詞を聞いて、水月は今が大戦のさ中であることをすっかり忘れていたことに気づく。

火影たちはそれぞれに、遠い戦場でのチャクラの動きを感知したようだった。

「確かに、2時の方向に禍々しいチャクラを感じる……!! これは……マダラのもので間違いない!!」

「ならばワシはその戦場へ向かうぞ！」  
二代目、続けて三代目が勇んで口を開く。

「戦場へ向かいたいなら話を済ませてからにしてください、猿飛先生」  
「話は後じゃ！ お前はマダラが復活したことの重大さをわかってい

るのか?！」  
「私はこの子に付きます。この子が納得しなければ、あなたたちを

使って木ノ葉を潰すことにもなりかねませんよ?」  
かつての師弟、三代目火影と大蛇丸が睨み合った。

「大蛇丸とやら、貴様は何か勘違いをしておる……」  
そんな中、二代目は黒い目で大蛇丸を睨みつけた。

「そもそもこの術を考案したのはこのワシだ。貴様ごときの穢土転生

に縛られるわけがなからう！」

再び放たれる殺気。

だが、大蛇丸は不敵に笑った。

「二代目様、確かにあなたなら無理やり私の縛りを解くことができるかもしれないね……。けど、あのコは私の縛りどころかあなたの抵抗をも凌駕する。さっきのでお気づきになっているはずですよ」

皆、いつせいにナナを見る。

「彼女は現世で最強の陰陽師です。いえ、あの眼を持つ以上、もしかしたら史上最強と言ったほうが正しいかもしれない。あなたがたの魂をどうこうすることくらい、きつと簡単なことと思えますが……」

二代目は黙りこくった。

先ほど味わわされた力はもとより、もともと「陰陽師」、「和泉一族」の力について、彼は良く知っているようだった。

「くっ……」

二代目は行動を起こすことを諦めた。

そんな苦虫を噛み潰したような顔の二代目の横で、初代が大きくうなずいた。

「わかった」

先ほどのように大きな笑い声で空気を変えることはしなかった。

「嘘偽りなく全てを話そうぞ……。里のこと、忍のことには、その娘の

“生”を操作したうちはマダラが深く関わっておる」

彼がそう言っても、ナナはサスケの背後でうつむいたままだった。

## 記憶の続き

柱間は、始まりから終わりまで全てを語った。

忍の戦乱、マダラとの出会い、一族同士の争い、親しい者たちの死……そして夢。絶望的な殺し合いの末に、友となったマダラと叶えた夢の里。そこからのすれ違いも、繰り返された闘争も……その果ても。

そして、和泉一族との関わりも、ほんの少しだけ。

二代目以降の火影たちもまた、柱間の紡ぐ物語に想いを馳せ、己の無力さに苛まれていた。

死した彼らが纏うのは、一様に“現世”への後悔だった。

「サスケ君、彼らの言葉を聞いてどうするの……？ このまま里を潰すのかしら……」

それを尻目に大蛇丸は問う。サスケの意思を。

サスケは目を閉じ、思索した。

しばしの静寂……。

そして、

「オレは戦場に行く。……イタチの生を無にはさせない！」

そう、強い想いを吐き出した。

隣でそれを聞いたナナは初めて顔を上げ、なよらかな視線をサスケに向けた。

やがて、一同はうちは一族の集会所を出て、火影岩の頂に会した。里を見下ろして、火影たちはそれぞれ郷愁に浸る。

ナナは相変わらず何も言わなかった。ただ風に吹かれにでも来たかのように、皆と違うところに視線を流して突っ立っていた。

香燐が現れてその場が騒がしくなっても、大蛇丸に協力するようお願いわれた彼女が、しぶしぶといった台詞で同意しながらサスケにすり寄っても。

「ああっ!! お、お前—!!」

香燐がナナに気づいて、大声をあげても。

「お前もいたのかよ！ あ、相変わらずお前のチャクラはわかりずれーんだよ！」

それでも乱れた前髪を気にもせず、たたずんでいた。

「な、なんだよ……！」

が。

「え……？」

ナナは不意に香燐をまつすぐに見た。

そして、笑んだ。

「お前……ま、また、チャクラの感じが……」

香燐が思わずそう漏らす。

その時にはもう、ナナはサスケを向いていた。

「サスケ」

ナナは自分から口を開いた。

「ナナ……」

サスケの黒い髪もまた、ナナと同じように風に乱されている。

「私は、行けない」

その風に、ナナは想いを乗せた。

誰もが息を止めて二人を見守っていた。

「イタチが死んで……、もう本当にどうでもよくなって……、どうやって生きればいいのかわからなくなつて……。アナタは『もう何も考えなくていい』って言うってくれたけど……」

その顔にはやはり色がなかったが、口元は穏やかに笑みを浮かべていた。

「でも、まだ『しちやいけないこと』だけは、ちゃんとわかつてるつもり」

まるではにかむように言うナナに、先ほどまでの絶望は無い。

そして、

「私は戦場に行っちゃいけない」

声には力があつた。確かに意思が宿っていた。

「『ホクト』が戦場でマダラに言われたの。『『お前』は邪魔だ』って……」

ちやんと、自分の言葉でナナは語る。

「もともと、私をこんなふうに変生させたのは『マダラ』だって、イタチが言ってたし。……それが『本物のマダラ』だったのか『偽物のマダラ』だったのかはわからないけど……」

その顔には、かすかな諦めが浮かんでいた。

「どつちにしろ、ずいぶん前から『計画』があつたはずなのに、今まで私を放っておいたのはおかしいよね？ あの時だって、私を簡単に拘束できたはずなのに」

誰も、サスケですらうなずきもせず、そんなナナをじつと見つめている。

「きつと……必ず『私』を手に入れる方法があるからだと思う」

ナナは時折目を伏せながら、まるで自分をモノのように言う。

「だから……『マダラ』のいる戦場には、行けない」

崖下からの風が、彼らの間を強く吹き抜けた。

ナナは乱れた髪をそつと払い、サスケを見る。

ナナの言葉に異を唱える者はなかった。

柱間と扉間は難しい顔で腕組みをし、猿飛は残念そうに目を伏せた。ミナトは唇を噛み、大蛇丸は不敵な笑みを引つ込めていた。水月、重吾、香燐も、ナナが語ったことに納得をしている。

サスケは……。

「……わかった」

静かに、そう答えただけだった。

だが、ナナは満足したように笑み、向きを変えて言う。

「四代目様」

ミナトは一步、ナナに近づいた。

「ナルトの側にいられなくて、ごめんなさい」

ナナが彼に言ったこともまた謝罪だった。

「君が選んだ道だ。それに対してどうこう言うつもりなんて、もとか



ら無いよ。むしろ、今まで本当にありがとう。それより……」

首を横に振った後、ミナトは一度言い淀んだ。

「君の、お父さんのことだけど……」

「いいんです」

ナナはそれがわかっていたかのように、顔色を変えずに答えた。

「母は和泉の人間ですから、たぶん木ノ葉の人たちにも一族にも知られないほうがよかつたんだろうし……。だからこれからも、お互いのためには知らないほうがいいんだと思います。私と……イタチのことのように」

その大人びた台詞に、ミナトは言葉を失った。

やはり、ナナの言ったことを否定する者は無かつた。

「ただ、ひとつだけ……」

しかしナナは、わずかに躊躇いながら問う。

「あの……。母は……私のこと……」

「成はとても喜んでいたよ」

今度はミナトが先回りして答える番だつた。

「君を授かつたことを、とても幸せだと言っていた。とても……幸せそうだつた」

噛みしめるようなその答えに、ナナは大きく瞬きをした後、笑つた。

今度はとても、幼げな笑みだつた。

「それで十分です。もう、行ってください」

ナナは皆を見回して言った。

「四代目様、向こうでナルトとカカシ先生に会えたら、『ごめんね』つて伝えてくれますか？」

ミナトは曖昧にうなずいた。

「火影様……、木ノ葉の忍として戦場に行けなくて、本当にごめんなさい」

三代目も言葉無く、ただうなずく。

「私は結界でも張って……隠れています。情けないけど……」

ナナが最後に柱間と扉間に向かって言うと、扉間が同意した。声に、ほんのわずかな同情をにじませて。

「それがよからう。むろん、マダラは戦場から逃さんようにするが、用心に越したことはない」

今度はナナがうなずいた。

それを見て、柱間が気を取り直したように言う。

「では行こう火影たちよ!!」

その豪快な声とともに、四人の火影はその場から消えた。

「サスケ君、私たちも先に行くわ」

続けて大蛇丸も風のごとく走り去り、

「え？ ちよ……!! 大蛇丸様、ま、待って……!!」

すぐに重吾が続き、水月も困惑しながら駆け出す。

香燐は残ったサスケとナナを見て何か言いたそうにしたが、無言のまま立ち去った。

「ごめんね、サスケ」

二人になって、先に口を開いたのはナナだった。

「私は結局、一度もアナタと一緒に行けなかった」

はつきりと、後悔の言葉を口にする。

「ナナ……」

サスケの漆黒の瞳は、ナナをしつかりととらえた。

「お前の『生』は……誰にも利用させない」

そしてその口で、

「必ずオレが護る」

揺るがぬ想いを告げる。

「だから、安心して待っている」

熱が籠っているわけではなかった。ただひたすらに、当たり前の強い心を、当たり前の言葉にただけだった。

ナナは小さくうなずいた。

そして……。

「私ね、いちご味が好きなの」

それは突拍子もない台詞だった。

「ああ……知ってる」

サスケは戸惑いもせずに答える。

第七班の最初の顔合わせでナナがそう言っていたことを、サスケは律儀に覚えていた。

「子供の頃、イタチが『おみやげ』って言って、いちご味の飴をくれたの」

ナナは昔話を続ける。

「お菓子なんて食べたことなかったから、すごくおいしかった」

「そういえば昔、うちに置いてあったな……。イタチは補給のためにと、任務に持って行っていった……」

それに、サスケは付け足した。

「そうなんだ」

「オレはあまり食べなかつたがな」

「サスケは昔から甘いものが苦手なんだね」

ナナは笑う。何の屈託もなく。

「ナナ……」

サスケはその頬に、唐突に左の手を添えた。

「サスケ……?」

「終わったら……」

同じように黒い瞳が合わさる。

「戻ったら、イタチの話をしよう……」

サスケはまっすぐ、ナナの目を見てこう言った。

「最期にイタチがくれた記憶の『続き』を……二人で話そう」

ナナは少しの間、じつとサスケの双眸を見つめ返していた。彼の意思の色を確認するように。

そしてサスケは再び言う。

「全てを終わらせたなら……、必ず迎えに来る……」

吐息のようなその台詞に……、

「うん」

ナナは憂いのない笑みを返した。

## 未来のこと

誰も居なくなつて、ナナは少し離れた場所へ移動した。めつたに人が来ることはない、火影岩の片隅。大好きで、大嫌いな場所……。

ここで、よくサスケと二人で会った。たいていナナが先に来てぼーっと里を眺めているところに、修業を終えたサスケが現れた。そして特に話をするでもなく、二人で並んで沈む日を見送っていた。

その時間だけは、確かに二人の間に絆を感じられた。きつと、サスケも……。

だから、ここが好きだった。

だがここは、サスケに別れを告げられた場所でもあった。はつきりと、「イタチを殺す」と告げられて……そして。

『オレは……ずっとお前が好きだった』

そう言つてサスケは去つて行つた。

心に大きな穴が開いた瞬間だった。

そこにあつたのが「恋」だったのだと、終わった瞬間に気づかされた。

だから、ここは嫌いだった。

……と。

そんなふうには、感慨にふけっている時間は残されてはいなかった。だがどうしても、もう一度この場所で……まだ熱を帯びたサスケの言葉を噛みしめたかったのだ。

『必ずオレが護る』

サスケは初めて「護る」と、そう言つてくれた。

『だから、安心して待っている』

何度も繰り返し返された別れの時に「待っている」と言われたのも、初めてだった。

『全てを、終わらせたら……』

全てが終わったら、サスケは戻つて来る……。

そんな「約束」は、したことがなかった。

全て……と、そう言ったサスケの心はよくわかっている。

火影たちの話を聞いて、歴史を知って、彼らの想いを知って、サスケはまた、前に進んだ。

『オレは戦場に行く。この里を、イタチを……無にはさせん！』

戦場に向かったサスケが「何」を終わらせるつもりなのか……。

サスケが迷いを捨てて掲げたその意志は、ちゃんとこの眼に映っている。

サスケは本当に「全て」をその手で終わらせるつもりだ。戦争だけじゃなく……これまでの忍世界の「負の連鎖」を。

過去を断って、終わらせて……そうやってイタチの想いを新しい未来へと繋ぐつもりなのだ。

きっと、その意志は周囲からすればひどく歪なものだ。ナルトの想いとは必然的に相反することになるだろう。サスケ自身も、いつそう深く傷つくことになるはずだ。

そんな歪んだ未来を望みながらも、サスケは今、「二人の未来」を語った。

たとえ全てを終わらせようとも、全てを断ち切ろうとも、二人の繋がりは決して終わらない。この絆は過去にはならない。

それはサスケが「終わらせた世界」にも、自分の存在があるということなのだ。そういうつもりで、未来の話をしてくれたのだ。

未来……。

そんなもの、とづくに望まなくなっていた。

ただでさえナナにとつて「未来を想像する」といえば、それは訪れるかもしれない危機に対してのことだった。

自分の幸福な未来など考えたこともなかったし、そういう発想すらなかった。

一時だけ、「イタチとサスケと自分と三人で、木ノ葉の里で遊べたら……」という願いを持った。ごくごく、幼い頃に。

しかしそれも「夢」と意識する前に掻き消えた。

だから、第七班結成の時の自己紹介で「夢」を発表する時にとても

戸惑ったのだ。

あの時、思ったまま口にした「夢」。

ナルトが火影になったのなら、それを支えられるような忍になりた  
い……。それは彼と彼の中の九尾を「見張る」のではなく、見守り、寄  
り添うことだった。

共に生きたい……。と。

が、それでさえも、もう望まない。そんな未来さえ、もう見えない。  
サスケも、それを知っているはずだった。

イタチが死んだとき、物悲しい波打ち際でそつとサスケと抱き合っ  
て……。互いにはつきりと別れを告げた。

その時に、サスケは確かに知っているはずだった。泣き枯れてし  
まったこの心が、サスケにはちゃんと見えているはずだった。

「木ノ葉を潰す」と決意したサスケに、きつぱりと別れを告げた理由  
が。

もう、何も見たくないから。木ノ葉を潰すなら、その時に「敵」と  
して殺して欲しかった。

それが叶わなくても、もしサスケがナルトを殺したのなら、その時  
はナルトと共に死のうと思った。

サスケはその仕組みもわかっているに違いなかった。ナナがナル  
トと運命を共にするという仕組み、その意味を。

九尾の人柱力であるナルトをサスケが殺せば……。溢れ出た九尾を  
収めるのはナナの役目だ。それは己自身の命と引き換えに、九尾を永  
遠に封じる禁術だから……。だから、ナルトとナナは一蓮托生だった。

サスケはそれを琴葉に聞いているはず……。いや、誰よりも自分のこ  
とを理解してくれている彼なら、きつとすでに悟っている。

だから、あの時。

ちゃんと、殺してね……。

潮風に乗せた声にならないその想いを、サスケはちゃんと受け止め  
てくれていた。

願いを叶えてくれるはずだった。望まない未来を……。ちゃんと断  
ち切ってくれるはずだった。

だが。

『最期にイタチがくれた記憶の “続き” を……二人で話そう』

サスケは今になってそう言った。偽るものがない表情で。

頬に振れた手はとても温かく、強く、優しくかった。

一度も、思い描いたことのなかった、サスケとの未来……。

今、その言葉がとてもうれしかった。

「ありがとう……サスケ……」

とても、幸せだった。

歪な未来でも、サスケがこの絆を望んでくれていることは、とても幸せだった。

それがたとえ、愛じゃなくとも……。歪んだ世界で、血を垂れ流し続けていたとしても。二人の魂が闇に堕ちて救いようがなくなってしまうとも。

『お前たちがこれからどうなろうとも……』

イタチが最期に言っていた。

『オレはお前たちを、ずっと愛している』

たとえどんな姿になろうとも、たとえどんなふう生きようとも、愛している……と。

だから。

「だから、サスケ……私も……」

イタチにももらった愛を胸に、想いを口にする。

「アナタを、ずっと愛してる……」

おぞましい光を放つ満月を、まっすぐに見つめた。

サスケに「キライ」と言ったあの夜の嘘を、今、真実で包み込んだ。

「サスケ……」

涙がひとつぶ、右目の端から零れ落ちた。

もうとつづくに、枯れ果てたと思っていたのに……。

「ありがとう……」

溢れる想いを片手で拭って、大きく深呼吸をした。

赤い月光に照らされた里を見回して、それから。

「ごめんね……」

もう一度そつとつぶやくと、ナナはその場から走り去った。

サスケとの未来は……やはり、望めなかった。



## ぬくもり

この里の中心部から、再び郊外へ……。

闇を縫うようにして、ナナはそこへと向かった。

急がなければならぬ。

戦場がどうなっているのか、わかるすべはなかった。

が、残された時間が多くはないことを予感していた。

家も畑も、忍者学校の広い演習場でさえも通り過ぎてたどり着いた、里の者がめつたに訪れない場所。

先ほど大蛇丸の案内で訪れたうずまき一族の納面堂より、もっと深い森の奥。

ナナは「和泉神社」の鳥居の前に立った。

木ノ葉崩しの被害も、ここには全く届いていない。

が、鳥居に塗られた朱は剥げて、参道には雑草があちらこちらから顔を出していた。

「おいでなさいませ」

突如、透き通った声がした。

いつの間にか目の前に姿を現していたのは、式神の女だった。

「どうぞ、姫様」

式神特有の抑揚のない話し方で、ナナを案内する。

境内はそう複雑に入り組んでいるわけでもなければ初めて訪れた場所でもないのです、案内など必要ないのだが、これがこの式神の主な配慮なのだろう。

ナナは黙って、式神に続いた。

拝殿を通り越しその裏手の丘を行くと、この地を守る者の住まいがある。わざわざ境内の奥に隠れるように建てられているのは、この神社の特性ゆえであった。

つまり、このの神主や巫女となる者は和泉一族の者であり、すなわちそれは特別な人間として隔離されるべき者だったからである。

事実、木ノ葉隠れの里においても和泉神社の存在は公に知られてい

た。が、ここは『伝説の和泉一族を祀った』陰陽道系の神社であり、その修業を積んだ者が神主や巫女を務めているとされていた。

実際に和泉一族の末裔がその場所にいるなどとは……いや、和泉一族が存在しているなど、一部の者を除いては誰も知り得なかったし、考えもしなかったのである。

ナナはこの巫女になるはずだった。

“九尾のコ”の暴走が起きないよう朝から晩までひたすらに祈りつつ、安穩で平坦な日常を死ぬまで送り続けるはずだった。

だが、ナナがここに住むことは無かった。

和泉の里から木ノ葉へ来て忍者学校アカデミーに通うまで……、町に住まいを与えられるまでのほんの数日間だけ過ごした場所にすぎなかった。

唯一の思い出といえば、姉の力で“過去”に飛ばされた時、ここで“母”と過ごしたこと。四代目火影や実葉、そして若い力カシに出会ったこと。

あの日のことは、今でも鮮明に思い出す……。

が、実際は忍者学校の生徒の頃、姉の死を聞かされて以来、ここへは来ていなかった。

だから、

「お久しぶりでございます」

扉の前で深々と頭を下げている老女を目にして、いくばくかの懐かしさを覚えた。

「お久しぶりです。静葉様」

杜松色みるいろの着物をきちんと纏ったこの老女は、和泉神社を守る者としてここで数十年暮らしている和泉静葉であった。

ナナがこの里へ来た時、初めに世話をしたのが彼女である。

和泉一族が地上の神であると心から信じ、その血を引かない“人間”と話すことすら嫌う女だった。

ナナのことは『和泉本家の娘』として敬いつつも、和泉の里に暮らす者たちと同様、そのチカラを怖れ、何よりその出生に嫌悪感を抱いていた。

自身の親族であった和泉成葉の生まれ変わりという存在であるか

ら、なおさら因縁は深かったようである。

なにより、自分の後を継いで和泉神社の巫女の座に就き、木ノ葉の里のことは一切任せられるはずであったのに、ナナが忍になどなってしまうたから、彼女がナナに対して抱くのは「失望」が大きかった。だから、ここで彼女に出会ったことが意外だった。

「先日の木ノ葉崩しの時に、和泉の里へ帰られたかと思っていました」それをそのまま口にした。

忍里になんぞ送り込まれて疎外感と劣等感の塊になっていた老女が、あれだけの惨事を目にしてもなお、ここに留まっていたことは予想外だった。

おそらくは『木ノ葉崩し』を理由に、故郷へ逃げ帰ってその任を解かれることを望んでいたはずである。

「いえ……今さらそのようなことは……」

老いてわずかに濁った瞳が、月の下で細い光を浮かべた。

「里の全壊を、姫様がお止めくださいましたので……」

静葉はまるで言い訳をするかのように、横を向いてそうつぶやいた。

ナナはため息をついた。

今さら、この親族の女の心境など推し量る気は無かった。

あまり世話になったという意識もない。郷里で受けたものと同じ視線を、ここでも与えてくれてありがとうという皮肉しか出てこないのだ。

が。

「木ノ葉崩しとこの戦争で、いろいろなことが変わりました……。ここはもう、木ノ葉にとって「必要のない場所」となったでしょう」

本家の娘として、彼女にあげられる言葉をかけてやることにする。

「アナタは和泉の里へお帰りください。当主様もそれをお許しになるはずです」

老いてもなお、待ち望んでいるであろう言葉を。

「今までありがとうございました」

静葉の表情に変化は見られなかった。

ナナの真意を探っているようでも、諦めているようでも、ましてや喜んでいるようでもない。ただその言葉を聞き流したという感じだった。

「姫様は……」

その様子はまたしても意外だった。

数十年間、彼女が欲しがっていた言葉に違いないのに、何の反応も示さないとは……。

「姫様は、戦場に行かれるのですか？」

今度はナナが目を逸らした。

「いえ……」

また、ため息が出た。

「他に、やるべきことがあるの……」

静葉は小さく、「そうですね」とつぶやいた。

彼女への義務は果たした。次はここへ来た目的を果たす番だ。

ナナは少し足を踏み出しながら言った。

「成葉様の懐刀を貸してくださいますか？」

ナナの「事情」を知らないはずの静葉には、あえて「母」ではなく

「成葉」で通す。

「はい。奥に……」

静葉は特に何も問わず、建物に入るよううながした。

成葉の御霊は奥座敷の小さな祭壇に祀られていた。それは、ここへ初めて来たときから知っている。

その形見のひとつに、和泉の人間が生まれたときに当主から与えられる短刀があった。

もちろんナナも自分の物を持ってはいたが、木ノ葉の里へ来て早々に捨ててしまっていた。

「こちらです」

静葉は暗い座敷に灯りもともさず、漆の箱の中からそれを取り出して渡した。

かすかなカビの臭いが鼻につく。が、鞘の蒔絵はまだ美しいままだった。

「ありがとう」

ナナは礼を言って祭壇を見た。が、手は合わせなかった。

ここに「母」はいない。それがよくわかっていたから。

そこに祀られているのは、ただ成葉が生前身に着けていたものや、大切にしていたものだけだ。

高価なものではないが、髪飾りや櫛、手鏡などが、短刀と一緒に漆の箱に入れられて祀られていた。

特別な存在であるから遺骨などない。写真もない。

ただ和泉の家紋となっている五芒星の幕が下がっているだけである。

可憐なりンドウが一輪だけ、その下でそつと揺れていた。

「それだけでよろしいのですか？」

静葉はそう言いながら、箱を祭壇に戻した。

「何に使うのか」と問われなかったことで、ナナはわずかに息をつく。

おそらく……静葉は何かを察しているのだろう。それでいて、もう諦めている。

それに、何かを言う義理も権利もないのだ。

灯りひとつない建物を出ると、赤みを帯びた満月が眩しく思えた。

相変わらず、嫌な存在だった。

「それでは……」

ナナは静葉に別れを告げた。静葉もただ「お気をつけて」と言った。いつもと同じ、淡白な別れだ。が。

「ひとつ、聞いてもいいですか？」

ナナは振り返った。

静葉の伏せられた目が、おもむろにこちらを向く。それはまるで、ナナの問いかけを待っていたかのようにだった。

それならば都合がよい。

そう思った。

静葉は余計な詮索をせず、聞きたいことだけに答えをくれるだろうと予測した。

「成葉様の……夫にあたる人のことで、何か覚えていませんか？」

それは「父」にあたる人間についての問いだった。

そもそも成葉に子が出来たという知らせは、和泉の里にも届いていなかった。

報告義務が、静葉にはある。

だが、何も知らない子供の頃も、まだ自分が和泉成葉の生まれ変わりだと信じ切っていた頃も、その「夫」となる男については、周囲に誰一人語る者は無かった。

それは自分に対する遠慮などではなかった。当主に憚っているようでもなかった。

よく思い起こせば、おそらく誰も知らなかったのだ。

和泉成葉の死について聞かされた時、それはあまりに幼い頃だったが、たしか……親族の者がこう言っていた。

『南家の成葉は「どこぞの男」との間に子などをもうけ、ソレが腹に在ったために襲来した九尾を抑えることもできず、ソレのために命までも落とすことになった』

詳細には覚えていないが、蔑んだ口調と恨みを込めた言い回しはつきりと覚えている。

叔父だか分家の男だったか……これを告げた者は、九尾襲来時に和泉一族の沽券を背負って事態を収めることができなかった和泉成葉と、その事態を作り出した彼女の夫に対して確かに怨恨を抱いていた。

その時でさえも、その夫が誰であるのか彼は口にしなかった。

一族全体が憎む相手ならば、はつきりと名を覚えるはず。仮に知っているのなら「木ノ葉の忍」くらいは言いそうなものだ。

が、「どこぞの男」とだけ吐き捨てるように言っていたのはうっすらと記憶している。

つまりは、報告すべき静葉が、それをできなかつたのである。

「恐れながら……あの子は私には何も言いませんでした。和泉の里か

ら怒りを買うから……と私を氣遣って」

静葉は伏し目がちに答えた。

「おそらく、相手の男の名を知っていたのは実葉様と……そして四代目火影様のみでございます」

予想通りだった。

そして成葉がそう判断したことはやはり正しいと思った。

伝説の和泉一族の女と木ノ葉の忍であるうちは一族の男が結ばれたなど、世間は知らないほうがいい。

和泉の里は本家の当主の力を遥かに凌駕し、あげく輿入れを断つた女の幸せなど、快く思うはずはない。それに、うちは一族にとっても和泉一族との特別な繋がりには、里での立場を悪くするに違いなかった。

そう……あの頃は、うちは一族と里との確執が表面化していた頃だろう……。

第一、イタチも何も告げなかった。ただ「父」がうちは一族の男であることを、初めて教えてくれただけだった。

きつと誰も知らなかった。

だから、「父」がうちはの人間だと知らされて、実際にその血を体現してからも、彼について考えることはしなかったのだ。

「そうですよね。ありがとうございます」

実際、「父」がうちは一族の何という名前の者かなど、どうでもよかった。いつ、どこで、何故、死んだのか……も、気にはならなかった。

きつとサスケとイタチの父とは、あまりよい関係ではなかったのだろうと思った。

それでもこうして静葉に尋ねた訳は、「父」と「母」が愛によって結ばれたのか……それが知りたかったからだ。

だが、それも無駄なことだった。

静葉が「父」の存在を快く思っていないことは明らかである。

ただ少し、四代目の言葉に惹かれて……それで静葉にも聞いてみたくなった。

それだけだ。

「では」

すっかり気が済んで、ナナは軽く頭を下げて暗がりには視線を移した。

と、

「菜々葉様……」

数回この場で繰り返した別れの中で、初めて静葉に呼び止められた。

振り向くと、静葉が額の皺を濃くしてうつむいている。

「静葉様？」

この老女の顔に、こうもはつきりと感情が浮かぶのは初めて見た。

「お伝えしておきたいことがございます」

今生の別れの時のように、静葉は思いつめた顔で言った。

「成葉は……心から、相手の男を慕っていました」

「え……？」

最初、静葉が何を言っているのかわからなかった。

それほどに、静葉の言葉は唐突だった。

だが、静葉はしわがれた声で続ける。

「あの子は何も話しませんでしたでしたが……ここに居る間、それはそれは幸せそうな顔をしていて……」

静葉の目がこちらを向いた。その奥に隠されていたものを、初めて見た気がした。

「あの子は……その男との間に子供を授かったことを、本当に喜んでいました。立派な……木ノ葉の忍に育てるだのと言って……」

静葉は知っているのだろうか。

そう思う。

和泉ナナという存在が、和泉成葉の生まれ変わりではなく、その娘の生まれ変わりであることを。自分自身、つい最近知ったばかりの、その真実を。

「残念ながら、お産のときに成葉は命を落としました……。まあ、これはあなた様もご存じでしょうね……」



静葉の声には温かみがあった。

「産まれた子も、その行く末を案じた実葉様がどこかへお連れになり、さらには『裏葉ウラハノジユツの術』をかけられたので……、今は生きているのか死んでいるのかさえ、誰もわかりませんが……」

彼女のそんな声は、もちろん初めて聞く。

だが確かに、彼女が成葉を慈しみ、成葉の死を悲しんでいることが伝わって来る。

「静葉様……」

「成葉は和泉の才に恵まれた反面、小さい頃から身体が弱くて……」

いくつも皺が刻まれた目じりに、光るものが浮かんた。

「そのわりに底が抜けたように明るくて、お転婆で、生意気で、ちつとも言うことを聞かなかったのですがね……」

骨ばった指で、静葉はそれを拭う。

彼女は確実に何かを悟り、今このことを伝えている。

今までずっと、木ノ葉に追いやられたことを恨み、自分の身の上を嘆いてばかりの老いた人間と思ってきたが、彼女の心に確かな感情が見えた。

「静葉様……」

ナナは初めて、自ら彼女の身体に触れた。

痩せた肩は頼りなく、それでいて自分なりに自分の道をしっかりと歩んできたような固さが感じ取れた。

「もう十分です。静葉様」

「菜々葉様……わたくしはあなたに……」

そして、にじみ出る後悔も……。

「いいんです。私こそ、ごめんなさい」

彼女を弱い人間だと決めつけていたことを恥じながら、ナナは言った。

「成葉様とその『夫』だった人のこと、教えてくれてありがとう」

「母」が、この老女にこの場所で守られながら過ごしていたことが、ちゃんとわかった。確かに「父」を愛していたことも。

そして、

「成葉様の、子供のことも……」

「自分」のことも、言葉に表してくれてうれしかった。

「もう十分です、静葉様」

もう一度そう言っつて、ナナは静葉を抱きしめた。

「アナタは私に良くしてくださいました」

「菜々葉様……それは……」

「私はもう、ここに来ることは無いでしょう。だから……アナタは和泉の里へお帰りください。本家も、もう木ノ葉とはあまり関わろうとしないはずですから」

静葉はしばし迷って、小さくうなずいた。

「今まで、木ノ葉を守ってくださってありがとうございました」

身体を離して礼を言った。

木ノ葉の忍として、それから和泉本家の娘として。

静葉は声もなく泣いていた。

「さようなら」

そつとささやき、ナナは彼女の前から消えた。

彼女の白檀の香が、なんだか懐かしかった。

## 陰と陽

和泉神社からここまで、休みなく駆けてきた。

静葉から思いがけずに与えられたぬくもりを抱いて。そして「母の短刀をしっかりと握りしめて。

滝の水音が耳障りなこの場所は、あまり好きなどころではなかった。

が、ナナはここを選んだ。

木ノ葉の里で、いつしか『終末の谷』と呼ばれるようになったこの場所を……。

荘厳な滝を挟んで、うちはマダラと千手柱間の巨像が向かい合っている。かつては敵で、いつしか親友となり、そしてまた宿敵となった二人の像……。

数年前に、同じように「宿敵」として闘った二人の姿と、否が応でも重なる。

実際に間近で見ていたわけではなかった。

が、二人が闘ったあの光景は姉の仕掛けた術によって余すところなく見せられた。

だから今でも、とても鮮やかに思い出すことができた。

サスケとナルト。

二人が巡り合ったのは運命だった。

互いに惹かれ合い、親しい友となり……そして敵対したこともまた運命だと思った。

なぜなら、二人の中にはきつと初めから潜んでいたのだ。まるで「同種の力」が……。

それを初めて意識したのは、まさにこの場所での二人の闘いを目にしたときだった。

姉との私闘のさ中、見せつけられた二人の姿からおぼろげに感じ取った。それは能力による感知などではなく、ただの感覚でしかなかった。

あの時は自分自身のことには精いっぱい、二人のことを「想う」とはできても、「考える」ことができなかった。

だから、ひどく曖昧だった。

仲間、ライバル、親友……そこから形作られたような「絆」のようなものだと思っていた。深く理解し合った二人にしか、持ち得ないような力なのだ。

だが、その力をもう少し具体的に感じ取る機会があった。

『お前も……気づいてるんだな……？ サスケの中にあるモノ』

ペインによる木ノ葉崩しの後だった。

サスケと再会して、連れ戻すことはできずに帰還したナルトがそう言った。

二人きりの話だった。

あの時点で、ナルトも知っていたのだ。自身とサスケの中にあるモノを……。

いや、前から気づいていたことが、再びサスケと対峙したことで確信に変わったのかもしれない。

その時に、ようやくナナにも見えた。

二人の中にある「同種の力」。

それは互いに「対」となり、それでいて「二つでひとつとなる力」……。

味気ない言い方をすれば、「陰と陽の力」。

そう思えた。

陰と陽……この力には誰より詳しい一族の出だから、二人よりは具体的に見えているつもりだった。

運命だ……だから、足掻いても仕方ない。

強くそう思った。

サスケとナルト……陰と陽はやがてぶつかり合い、互いを取り込もうとするのが必然なのだ。

そして自分は、その行く末を見守り、受け入れるしかないのだ……と。

事実、そうだった。

イタチが死んで、サスケと別れて……自分で道を歩くことを止めました。

ただの傍観者となることを決めた。

『私は……ナルトと運命をともにする……だからきつと……ナルトが死ねば私も死ぬ』

あの時、同期の皆の前でそう告げたとおり、ナルトに全てを委ねることにした。

それしかなかった。

ナルトと共に木ノ葉を守るふりをして戦って、サスケの前に立ちほだかるから……、そうしたら今度こそ殺して欲しかった。

サスケがナルトを斬るのなら、その時はナルトと共に死のうと思っ

た。

それでも、今になって聞かされた想い。

『最期にイタチがくれた記憶の“続き”を……一人で話そう』

もう嘘ではないその言葉が、うれしかったのは事実。

だが……サスケの未来に、自分はいられない。

それも“必然”と悟ってしまった。

今度もまた、全てを終わらせようとするサスケを、ナルトは命がけで止めるのだろう。

それを、もう見守ることすらできない。

見えてしまったから。

あの時、二代目火影の言葉を耳にした時に……。

感情は擦り切れていたはずなのに、心底でわずかにくすぶっていた怒り、悲しみ、憎しみ、失望……。

『貴様の兄はよくやった。うちはの者が自ら一族に手を下してくれたことは、里にとってまさに理想だ。サルよ、よく命じた』

イタチの生を軽んじる言葉がきっかけとなり、それらがいつぺんに弾けてしまった。

その時にこの眼が開いて……見えてしまったのだ。

ようやく……手に入レタ、ワラワの完ペキナ身体……！

この眼がどんな色をして、どんな文様を浮かべているのかはわからない。この眼が持つ能力すらも、まだわからない。

きっと、これがうちの血が成す『万華鏡写輪眼』というものなのだろうということは理解している。

ただ、見えてしまったのだ。

世界を……シハイする……！

自分自身が、終に「陰」に取り込まれる瞬間……、いや、時代ときが。皆、養分と……ナレ……！

今まで「陰」の存在だったはずの自分が、これでも「陽」だったと言えるほど、深い闇からの「陰」の存在に囚われてゆく未来が……。

夢……ヲ……！

自分の中にも、「それ」があったのだ。

月の……チカラ……！

思い知ったその瞬間から、「この眼」に映る景色は色を失くしてしまった。

コノ……眼デ……！

だから、サスケがくれる未来など……もう見えない。

恐怖はない。絶望も。

あの時はただ、驚いてしまっただけ。

諦めるのに時間は必要なかった。火影岩の頂上に移動した時にはもう、すっかり受け入れていた。

そう……、諦めだ。

だから、悲しまずに済む。足搔かずにいられる。後悔さえも感じる間も無い。

ちゃんとしていたかはわからないが、サスケと「お別れ」もできた。あの冷たくて綺麗な眼を見て、別れを言えたつもりだ。

仕方がない。仕方がないことだ。どうしたって変えられない。

自分が……「器」であることは。

サスケは気づいているのだろうか。

いや……きつと、彼はまだ知らない。

だから、未来の話なんてしてくれただ。だからこそ、あんなにもサスケの手は温かかったのだ。

「ごめんね、サスケ……」

つぶやきは水の流れに吸い込まれた。

ほの暗い川底から、「あの眼」がこちらをじっと見ているようだった。

## 母と父

「ごめんね……サスケ……」

もう一度だけ、そうつぶやいた。

そっと、胸に手をやる。

やはりそこに後悔はない。失望もない。絶望も。

サスケが望んでくれた未来を捨てることになっても、悲しくはなかった。

なぜならば、最初からそんなものは存在しなかったのだから。

だから今はむしろ、サスケがくれた想いで心は満たされていた。

(サスケ……)

それを確認して、母の短刀を目前に掲げる。

これは和泉の里に産まれた者が皆、本家の当主から賜るものだ。

その刀が持つ意味は……そう、“自害”のためのものだった。

稀有の存在である和泉の一族が、その力を、血を、“外界”の人間たちに利用されることがないように、いざというときには自らを始末するために持たされる刀。

刃には代々の当主が受け継ぐ術式で、特殊な封印の呪がかけられている。

この刀で自害した者の魂は、永遠に封じられることになるのだ。

それはまさに、後世の術者に魂を利用されないための慣わし……つまり、“転生”することをも防ぐ呪術となっていた。

(キレイ……)

漆塗りに葛の葉の蒔絵が美しかった。

自分が持っていたのはどんなだったか忘れたが、これと大して変わらない装飾だったように思う。

ただ、本家の娘ということの下緒は特別な銀糸でこしらえられていた。

あれを捨てたのは、そんな和泉のしがらみから抜け出したかったからだった。



ずいぶんと浅はかで幼い考えだったと思う。

あの頃は木ノ葉隠れの里に来られたことがうれしくて、ただうれしくて……和泉一族ではなく、早く木ノ葉の忍になりたかった。

今は……誰よりあれが必要だったと、思い知らされている。

深くため息をついて、左手に鞘、右手に柄をしつかりと握った。

そういう性質を持つから、本来、この刀は所持する本人にしか抜けない呪がかけられていた。

が、ナナにはこれを抜くことができると思っていた。

たとえ和泉成葉の生まれ変わりではなくとも、その「魂」を受け継ぐ者だと自覚していたからである。

それに、十分な「覚悟」もあつた。

軽く左右に引いた。

すんなりと、月明かりを照り返す刃が現れた。

「え……？」

それを目にした瞬間、息を呑んだ。

波紋が美しかったからではない。切っ先があまりに鋭く研ぎ澄まされていたからではない。刃が外気と化学反応を起こしたように、青白い光をまとったからでもない。

「この……シルシは……」

刃の柄に近い部分……そこに、『うちは』の家紋が彫られていたのだ。

「お母……さん……」

思わず、呼びかけるように口を開いた。

「ここ」に「これ」が刻まれた意味がどういふことであるのか、一瞬で理解できた。

「母」の想いが時を超えて伝わった。

実葉の『裏葉の術』でも決して消えることのないこの刃に、「母」は「父」への想いを刻んだのだ。

「お母さん……」

思わず叫んでいた。

過去で出逢った、優しく、明るく、幸せそうな、少しお腹が膨らん

だ母を思い出した。

そして初めて「父」の姿を思い描いた。

『成葉は心から、「相手」の男を慕っていました』

さつき聞いたばかりの、証言がそれを後押しする。

『あの子は……子供を授かったことを、本当に喜んでいました』

『君の命が宿ったことを、とても幸せだと言っていた。とても……幸せそうだった』

鞘に封じられた刃の「証」は今、ナナの手で解かれた。

「よかった……」

これは母が父を愛していた証だった。そしてきつと、父も母を愛していたはずだ。

この印は、二人の心が確かに通じ合っていたという証なのだ。

だから……自分の命も、その「証」なのだと思った。

初めてだった。今まで一度も実感できなかった想いだった。

望まれて産まれたにもかかわらず、愛されてはいなかった。畏怖と嫌悪に包まれて、自分で自分の命を尊べなかった。

それでも今、生まれ変わる前の真の魂は、母と父に愛されて産まれたのだと思った。母の胎内で、しっかりと慈しまれていたのだと知った。

息を整えて、改めて刃を見た。

一度も使われないままのそれは、美しくも儂く見えた。

「最期」に、とても大切なことを知ることができて良かった。

この生涯に、失敗したことは山ほどある。やり残したことも無いわけではない。

それでも、これでよかったと思っている。

運命から逃げるような形だったとしても、もう抗う術はなかった。

これで皆を救える……。

その可能性があるのなら、むしろ嬉しかった。

「お母さん、お父さん……」

少し歪な紋を見つめて、大きく息をした。

彼らに恥じることはひとつもない。悲しくもない。

戦争も、きつとナルトたちが勝つと信じている。

サスケの未来は少し心配だった。

だが、自分では彼の闇を照らせない。

「イタチ……」

イタチ……イタチに逢いたい。今から、逢いに行く。

刃の青白い光は、月光と交わってさらに強く煌めいた。

この光に身を任せれば、もう、誰からも呼び出されない。転生など、二度とすることは無い。

たとえ六道の輪廻眼でも……。

力を失った入れ物の肉体は、目の前の激流に飲み込まれて、うちはマダラと千手柱間の間を流れ、そのまま誰にも見つかることは無いだろう。

だから、安心だ。

「さよなら、みんな」

言葉で別れを。

（ありがとう……）

心で感謝を唱えた。

最期にやっぱりサスケの顔が浮かんで……。

彼の未来を祈りながら、刃を喉に突き立てた。

## 第5章 決着編 不完全なる光景

ナナが『終末の谷』に着いた頃、戦場にうちはサスケが到着していた。

共に中忍試験を戦った同期たちが皆、彼の姿に驚き、警戒する。が、サスケは「木ノ葉を守る」と宣言した。そしてナルトと肩を並べて戦う意思を示した。

今この戦場にかつての仲間たちが揃い、敵に対峙する。

ただひとり、いずみナナを除いては……。

大ガマガエル、大ナメクジ、そして大蛇。新しい時代の『三竦み』がここに現れた。

それぞれを呼び出したのは、うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケである。

彼らが伝説の三忍の弟子であることを知っている者は、少なくともなかった。

誰かが言った。

「あいつらが新しい時代の『三忍』だ！」  
と。

だが、シカマルはひとり、吐き捨てた。

「ナナが……いねえっ……!」

新たに若く強力な力を得て高揚する戦場……その中で、彼だけが鬱屈とした心情を抱いていた。

ナルト、サクラ、サスケ……彼らにはもう一人、仲間が確かにいたはずだ。

だが、今はその姿はない。まるでその存在は忘れられたかのようにだった。

少し前、サスケがここに突如として現れたとき、ナルトと話していたのを聞いた。

『サスケ、穢土転生のことは……』

『全て知っている。オレはイタチに会った』

『そうか……。じゃあ、ナナにも会ったよな？』

『ああ……』

低く答えるサスケの声は、夜風に乗って彼の耳にも届いた。

『アイツは木ノ葉に……置いてきた』

ナナは木ノ葉にいる。

それで良かった。ナナにとってはそれが最も安全だと思った。サスケが「置いてきて」くれて良かったと思った。

だが、目の前の光景はどこか物足りなく感じられ、彼は少し憤った。

「ナナ……」

ここに居なくて良かったはずなのに、ここに居ないことが理不尽に思える。

そんな自分の矛盾した心を強く実感しつつ、彼はベストの上から、懐に忍ばせた“額当て”を握りしめた。

いつからこの感情を抱くようになったのか……。この感情が何であるのか……。

それは彼の頭脳をもつてしても、簡単には答えを出すことができなかった。

いや、自身を納得させる答えが出なかったのである。

最初……。

ナナが木ノ葉に来た時は、正直、好感など抱かなかった。

いのとチョウジはなんとなくナナに興味を持ち、その異様な幼さと、どこかしら浮世離れた振る舞いに対して、自然と気に掛けるようになった。うになっていた。

が、彼自身は違った。

もちろん、『里の外から来た少女』で『忍の修業は初めて』で『忍の一族ではない』という経歴に加え、まるつきり忍になり得ようもないほど華奢で幼げなナナに、全く興味がないわけではなかった。

彼はこう考えていた。

(どっかの大名かお偉いさんの隠し子か何かだろ？ わざわざ忍にさせるなんて悪趣味だぜ)

だからナナを憐れむ気持ちはあった。大人の都合で、忍の一族でもない子供が過酷な忍の道に進まされることになったのだ……と。

面倒なことを嫌う彼としては、それが相当な面倒事に感じられたのだ。

その程度だった。ナナに対する想いなど……。

事実、ナナは当然のように忍者学校アカデミーの授業についてこられず、ナルトと「ドベ」を争っていた。

心配したイルカが成績優秀者のサスケと組ませるから、女子の嫉妬を一身に受けていたことも憐みを誘った。

それが、いつからか別の印象に変わったのだ。

ちゃんとしたきっかけは何だったか思い出せない。彼にとってナナは理解し難い存在であった。

だが確かに、中忍試験の頃にはナナに対してのありきたりな同情は消え去っていた。

残ったのは別の憐みだった。

いつの間にか、ナナは強くなっていた。いや、ナナが元より強かったことに気づかされていた。

忍術や体術だけでない。周りの目に危うく映るほど頼りない様子だったナナには、強い意志の力があつた。

死の森で音忍と戦ったとき、その片鱗を見たような気がした。

第三の試験の予選では、かつて見たことがない強さをもって砂忍を打倒した。

その本戦は、サスケ到着までの時間稼ぎをも行いつつ勝利した。

どれも、忍者学校でのナナの姿ではなかった。

下忍として任務を行った数か月で何かが変わったのか……。

最初はそう思ったが、すぐに否定した。

たった数か月で変わるほど、忍の世界は甘くはない。

だとすれば、ナナにはもともと力があつたのだろうか……。それを忍者学校では隠していたのだろうか……。いったい、何のために……？

先の先の手まで考えることが癖になっている彼は、ナナのことが頭

の片隅に入り込んで以来、気になって仕方がなかった。  
そして……。

中忍試験が終わって間もなく、川原でひとりうずくまるナナを見つけたあの日、ナナの本当の感情を初めて見た。

ナナはその直前にうちはイタチに会っていて、イタチがサスケを痛めつけるところを目にしていたという。

当然のことながら、あの時はその「意味」がわからなかった。

ナナがサスケの見舞いに行かなかった訳も、ひとり川原でうずくまっている訳も。

しばらく後から知ったのだ。

ナナにとつて、抜け忍であるうちはイタチが大切な存在だったという  
ことを……。

もちろん、うちはイタチが何をして木ノ葉を抜けたかは知っていた。彼の中でうちはイタチは血継限界を持つ天才忍者で、凶悪な殺人者でしかなかった。

それに、サスケの内に広がる憎しみにも気づいていた。

そんな男とナナが親しかったと知ったとき、一体ナナが「背負うもの」が本当は何なのか、当時はいくら考えてもわからなかった。

ナナが『和泉一族』の人間で、九尾が暴走したときに新たな器となり、それを封印するための存在であること。そのために和泉の里から木ノ葉隠れの里に送り込まれてきたこと……それすら、ナナが姉との戦いで命を失いかけたときによく知ったのだ。

だから、「別の痛み」が生まれた。

背負いきれないほど重い運命に抗ってナナが懸命に生きるから、正直、頭痛がした。

サスケが里を去り、ナナは彼を止めないで……それを知ったサクラが怒りをぶつけたとき。

あの涙も……。

サスケ奪還に向けて共に戦う姿も……「死んだはずの姉」だか何だか得体の知れないモノと戦わされ、ズタズタに切り裂かれて血まみれの姿も……。

シカマルにとつては十分に胸を締め付け、そしてその理由を考えあぐねて脳天を殴打されるような光景だったのだ。

(そうだ……。だからヤツは……)

暗い宙の彼方に見える影を、シカマルは一瞥した。

憤りは先ほどより明らかに膨らんで、少し呼吸を乱すほどだった。

この感情の先に居るのは、もちろんマダラ……。いや『うちはオビト』だった。

あの男はナルトに……。いや、ここに居る忍たち全員に告げた。

『この世界に希望などどこにもないと知れ……!!』

絶望に染まり切った人間の姿で……。いや、絶望の塊そのものとなつて、忍たちの頭上に言葉を轟かせた。

『現実には生きる必要がどこにある?』

父が死んだ。ネジも死んだ。

大切な仲間が……。そう親しくなかった者たちも、理不尽極まりない状況の中で死んでいった。

己の無力さを思い知り、敵の強さへの恐怖も覚えた。この現実には『希望』などないと言う彼の言葉に、首を振る力を無くしていった。

それをさらに削ぎ取るように、オビトは言った。

『お前たちも悟ればいい……。いずみナナ』のように……。!』

まるでもう、ナナが“そちら側”に居るかのよう。ナナの姿はすでに深い奈落の底に落ちて、見えなくなってしまったかのように。

それに対して、あのナルトでさえも異論を唱えることができずにいた。

『どれほど人を愛しても、どれだけ命を削って戦っても、この現実の絶望には抗えない……。哀れなナナは今、それを悟り、そこに居る』

ナナの闇は知っている。

雲隠れへの出発の前夜、自分だけに見せたあの瞳を、あれから絶えず思い浮かべている。

『お前たちの大切な仲間である“いずみナナ”のことを想えば、この現実を終わらせることの意義もわかるはずだ』

だから……。



オビトが突きつける闇に、ナナがとつくに引きずり込まれてしまっているように思えてしまった。

自分はもう、戦う意志を持ち直した。

父の希望やネジの想い、ナルトの言葉、そしてヒナタの姿……。チョウジやいの、里の仲間たち、他里の忍たち……。彼らの存在で、まだ『希望』を胸に抱くことができている。

だが、ナナは……。

はつきりと見て取れたナナの『希望』は『サスケの手で死ぬ』こと。それだけが粛々と、あの瞳の奥に煌めいていた。

この戦争に勝つたら……。『希望』が勝って『現実』が生き残ったなら……。ナナは何を得られるのだろうか。

そう考えずには居られない。

『絶望』に染まったナナの瞳に、『希望』が映ることはあるのだろうか。この『現実』が続くことを、ナナは本当に……。

シカマルは首を横に振った。

隣でいのが怪訝そうにこちらを見たが無視をした。

こんな考えは自分の中に押し留めなければならぬ。この不安を彼らにうつしてはならなかった。

また、そつと「ナナ」の額当てをベストの上から握った。

あんな姿で、それでも海辺の戦場に現れたナナ……。使い果たしたはずの意志を持って、皆を救ったナナ……。

余計にいっそう……。ナナの『希望』の形がわからなくなった。

「シカマル！ 私たち第十班は猪鹿蝶のコンビネーションよ!!」

「フォーメーションEでいくよ!!」

それでも、もう一度ナナに逢いたいと思うから……。

「はあ……。つたく」

『新しい三忍』と呼ばれ始めた者たちの背を追うようにして、印を結んだ。

「中忍試験じゃあるまいし、班で張り合うこたアねーだろが」

できるだけいつもの調子で、ちよつとだけ「昔」のことを思い起こしつづ。

「影掴みの術！」

。。。  
親しい仲間たちと共に、ナナもいるはずの“明日”への戦いを

## 今、戦場に居ない君

『どれほど人を愛しても、どれだけ命を削って戦っても、この現実の絶望には抗えない……哀れなナナは今、それを悟り、そこに居る』

オビトが戦場の忍たちにそう告げた。

わざわざ『ナナ』の名を出してまでそう言ったのは、自分への「攻撃」のためだったのではないかと思う。

その証拠に。

「カカシ。お前は肩書ではナナの担当上忍だったな？」

オビトは目の前でこう言った。

「だがお前はナナのことを何も知らない。オレのほうがナナをよく知っている」

かつての親友の言葉は胸を抉った。

(ナナ……。オレはお前のことを何も知らなかった。オレはお前に何もしてやれなかった。本当に、何ひとつ……)

カカシは大きいため息をついた。今まで生きて来た中で感じた幸せや喜びを、全て吐き出すかのように。

そうしてナナに想いを馳せた。

ナナは誰だって投げ出したくなるような重い使命を背負わされて木ノ葉に来た。

それなのに、担当上忍としてそれを少しも軽くしてやることができず……。

九尾の人柱力のナルトと、うちは一族の生き残りのサスケ……。危なっかしい生き方をせざるを得ない二人を、サクラと一緒に見守ってくれていると思っていた。

それはあまりにも勝手な解釈だった。

ナナだって、十分に守ってやらなければならぬ存在だったのに。

ナナには術を伝授することも、修業をつけてやることも……ちゃんと言話を聞いてやることさえもできなかった。

それ以前に、ナナのことを何も知らなかった。

人生の先輩ぶって上司風を吹かせ、ナナのことを理解しているつもりでいた。

ナナはナルトやサスケと違って素直で優しく、それでいて芯が強い子だと思い込んで。ナナが抱える「使命以外のモノ」に気づきもしなかった。

第七班の初めての顔合わせの時、皆には自己紹介をさせた。

好きなもの、嫌いなもの、それから将来の夢……。

ナナの答えは、正直あまり気に留めなかった。

『好きなものはイチゴ味で、嫌いなものはコーヒー味です。それから、しょうらいの夢は……』

ナナは少し思案して、笑顔でこう言った。

『じゃあ……ナルトが火影になった時、ちゃんと支えられる忍になりたいです』

下忍としては適切な目標だった。ナルトの友としても真つ当な答えだった。

だが、もつとその意味を深く考えるべきだったのだ。

ナナがどんな気持ちでそれを言ったのか……。

もちろん事情は全て知っていたから、ナナが何を願っているのかは知っていた。

ナルトが九尾の力を暴走させることがないように。ナルトをこの手で殺す日が永遠に来ないように。

ナナはそれを願っていた。わかっていたから、それ以上のことを考えなかった。

『将来』という単語に言い慣れていなくて、少し考えて『じゃあ』と付けた理由もわかっているつもりだった。

あの時すでに……、ナナはイタチのこと、そしてサスケのことを胸の奥に抱え込んでいたのだ。

だから隣でサスケが将来の『野望』を語った時……、ナナはそれが何を意味するのか知っていた。そしてイタチとサスケ、二人への想いをそつとしまっていた。

その痛みを……未だに想像すらできずにいる。

「ナナは写輪眼を開眼したぞ、カカシ」

オビトはそう告げた。蔑むような顔で。

初めは耳を疑った。何故なら、ナナは……。

「お前は知らなっただろう？ ナナが半分うちの血を引いていることを」

何故かその言葉を否定できなかった。『敵の戯言』であつても良いはずなのに。

ナナが背負うものが大きすぎて、受け容れてしまっていた。それよりも、『写輪眼を開眼した』ことの意味に気を取られてしまった。

写輪眼……。それはうちは一族の一部の者が開眼する特別な眼。

うちは一族ではない自分は、オビトから託されていながらその眼のことを良く知らなかった。

師であるミナトから少しだけ聞いたのは、『喪失』『失意』が眼に影響を及ぼす……という曖昧な説明。

もつとも、ミナトもうちはの人間でなかったからそのくらいしか語れなかったのだと思う。

それに、あの頃の自分は部下としてまだ若すぎた。

火影として里の一族についてももう少し詳しいことを知っていたとしても、里でも特に秀でた血継限界のことだから、ガキには話せなかったのかもしれない。

だが、自分にはミナトの説明で十分だった。

十分に、オビトの自分自身への『失意』を目の当たりにしていた。そして、彼の想いごと受け継いだつもりでいた。

だからナナが写輪眼を開眼したのだとしたら……やはりイタチやサスケのことに関わるのだらうと思う。

ナナがイタチと懇意だったことは知らなかった。

当然、ナナがイタチをどう想っていたのかはわからない。今となつては、イタチへのナナの想いは推測でしかない。

が、ナナのサスケへの想いには気づいていたつもりだった。

いや、それも……自分は本当にダメな上司だったからひどく察しが悪かった。

ナナがサスケに対して、他の……クラヤいのたちとは違った見方をしていることは最初から知っていた。サスケの表面だけじゃなく、彼が決して見せようとしないう内面の部分まで、ナナだけには見えていたようだった。

たとえばサスケがイタチへの復讐を糧に生きていること……そのことを誰より深く考え、密かに心を痛め、それらの想いを全て押し殺していたように見えた。それでいて自分の与えられた使命を全うしようと、健気にナルトを影から支えていた。

サスケもまた、そんなナナだけには唯一真正面から向き合っていた。周囲を遠ざけるような態度をとっていても、明らかにナナにだけは心を開いていたようだった。

出会った頃のサスケはまだ子供だったから、『ナナのことが気になる存在』というふうには、大人の自分からは見えていたが……。

成長するにつれ、サスケは『復讐』、ナナは『使命』……それぞれが自分の道を突き付けられ、そこに進まざるを得なくなかった。

が、それこそが二人の想いを強くしたのかもしれない。

いや、どうしようもなく惹かれ合う想いを実感したのかもしれない。

そう思う。

だが一方で、ナナはそのサスケが『復讐したい相手』をも大切に想っていた。

大切なサスケが殺したい、大切なイタチ。

ナナはずっと、その秘密をひとり抱え込み苦しんでいた。

葛藤と罪悪感、そして無力感……。ナナは涼やかに笑いながらも、その痛みをずっと抱えていた。

サスケを想えば想うほど……心は深く傷ついていたのだろう。

そして遂に、ナナは二人の大切な者たちが殺し合う場面を目の当たりにした。

イタチが死んだ。サスケがイタチを殺した。そのうえ……『イタ

チの真実”を聞かされた。

こんな自分なんかが想像するだけでも胸が痛むのに、ナナはひとり  
で……。

(何故……もつとそばにいてやれなかった？ 何故、もつと理解して  
やれなかった？)

それでもナナは立っていられるのだろうか。

大切な者を失って、絶望の淵に突き落とされて、自分の存在さえも  
……。

ナナは強い。自分よりもずっと。

それでも限界はある。

(今、どこにいる？ 今、何と戦っている？)

何も……ナナに何もしてやれなかった。最後に会ったあの瞬間の  
自分でさえも、呪いたいほど愚かだった。

何かひとつでも、ナナが望む言葉をあげられたら良かった。

いや、ちがう……。

ナルトの側において “最期” を望むナナ……。その姿を否定して打  
ち砕いてでも、ナナの本当の心を晒させてやればよかった。

そして、全部を包み込めるほど自分に力があればよかった。

ナナを守る力が。せめてナナが泣けるように。ナナが安堵するほ  
どの力があれば……。

(自分自身に失望したのは何回目だ……？)

カカシは自問自答した。己の過去と目の前の親友を見据えて。

ナナには何もしてやれなかった。本当に、何ひとつ……。

拳句の果てに、絶望に染まり、死を願う姿を包み込んでやることさ  
えできなかった。

「そうやって “師” のような面をしているのを見ると、苛立ちを通り  
越して哀れだな……」

だから、そう言うオビトの言葉には賛同できた。

今までのナナに対する自分は、蔑まれるに値する。

だが。

「お前は今回もただ見ているといい。オレはナナを手に入れる。それ

がこの戦争の目的でもあるからな」

オビトの「攻撃」は初めての外的な方向に逸れた。

「ナナはお前には渡さない！」

決意だけは、かろうじてまだ手の中にあつたのだ。

「今ここでお前を止める！」

もうこれ以上……。生きることさえ放棄したようなまだ稚いナナを……。これ以上、傷つけたくはなかった。

たとえ彼女が、手の届かないような絶望の奥底に沈んでいようと。せめてもうこれ以上……。深みに堕ちぬように。

「わかっている、カカシ。お前がそう息巻かなくとも、ナナがこの戦場に来ないことはわかっている」

オビトは少し、距離を作つて穏やかに言った。

「ナナは賢い娘だ。ナナ自身、すでにその運命を悟っているからな」  
「なんだと……。？」

こうも淡々と連続して叩きつけられる「ナナのこと」が、全身の血流を鈍くさせているようだった。

「どうしても抗えない『さだめ』があるということだ」

さだめ……。ナナを思い浮かべるほどに、心当たりがありすぎて胸が苦しい。

今、これ以上、どんなさだめがナナを縛り付けているのか。

「言つたはずだ。オレはナナを良く知っている……」

オビトは、ゆっくりと言つた。

「ナナは……。この世界に生まれたその時から、『二つの術』に囚われている」



## 囚われ

「どう……して……？」

たつぷりと時間が経ってから、そうつぶやいた。  
まだ、呼吸は止まらない。鼓動も鳴りやまない。

「どうして……？」

喉元に突き立てた刃の切っ先を見下ろした。

終わりを示すはずの赤い血が、それを染めることはなかった。

「なんで?!」

もう一度声を上げて、柄を両手で握りなおす。

さつき別れを告げた「現実」に、もう一度同じ想いを残す余裕など  
なかった。

だから今度は目を閉じずに、切っ先の行方を見据えたまま、それを  
喉に突き立てる。

キン……

清澄な音が響いた。

刃は……その身のずっと手前で止まっていた。

切っ先が突き立ったのは薄い皮膚ではなく、「青白い星」……だっ  
た。

五芒星。

それはすぐに空気に解けて消えたが、見紛うはずはなかった。

和泉の一族が扱う陰陽術。

今ここで、この凶器を拒んだのは、間違いなくそれだった。

なぜか……。

もう、つぶやく余地もなかった。

何も考えず、手は再び短刀を自身に仕向ける。今度は心臓に……。  
だが。

キン……

同じく、身体の手前で星が現れた。

もう一度、次は短刀を右手に持って、左の手首に押し当てた。

キキイ……

ぐいっと引いた刃は、やはり皮膚に触れることはなく、ただ星の盾を滑り行くだけだった。

「どうして……？」

何故、こうなっているのか。

何が、そうしているのか。

誰が、こうしたのか。

何一つわからないまま、夢中で刃を身体の急所に突き立てた。

何度も、何度も。

が、幾度となく繰り返してはみても、刃が肌に触れることさえなかった。

「そんな……」

絶望が背中から覆いかぶさるのを感じた。

今まで浸っていたそれではない。そんな無機質で空虚な闇ではない。

もつと大きくて冷たい……いてもたってもいられないような焦りと恐怖を呼び覚ます闇だ。

死ねない……。

この、今さら突き付けられた事実が、とてつもなく恐ろしかった。

「お母……さん……？」

「母」が、この短刀に術をかけたのか……？ いつかこうなることを予言していた……？

いや、一族の誰かがこの短刀で惨めに命を消すことがないように、術をかけていたのか……？

まさか静葉が……？

柄を握りしめた。力を込めているはずなのに、手は情けなく震えている。

刃に彫られたうちはの家紋が、厳かに煌めいた。

「ちがう……」

困惑の中、導かれるように答えがわかった。

この術はこの命を「守る」ためのものと思ったが、その考え自体が

間違いだ。

そもそも、この術は短刀にかけられてはいないのだ。

この身に起きたことは、愛を注いでくれていたはずの『父』と『母』の力が由縁ではない。

守られているわけではない。はつきりとわかる。

何故なら今、その愛情を微塵も感じないのだから。少しも『守られた』という感覚を得ることがないのだから。

この術は、『この身体』にかけられた術だ。

そう、この命が終わらないために……。

簡単な答えだった。

死んでは困るから。

九尾の器が壊れたときの保険となる者が、居なくなつては困るから。

わざわざ転生の術を使つてまで産み出した存在が、自身でその役目を終わらせることがないように。たとえ運命に絶望しても、途中で放棄することができないように。

これは、この命を生み出した者たちが、それを有効に利用するために、予め施していた術なのだ……。

「いつから……」

残っていた力が全て抜けた。濡れて黒ずんだ河原にへたり込む。

一族が放つ術を、返せないはずがない。

それは間違いがなかった。

当主である父ですら、自分を妬み、恐れていた……。だからこそ今の関係に至っている。

だからきつと、この力が確立される前……赤ん坊の頃にでも、術にかけられたのだろう。『決して使命を放棄するな』という、この術を……。

「うっ……」

悔しくはなかった。悲しいわけでもなかった。

今さら、一族の者たちに思うことなど何も無い。恨みも憎しみも、憐みも、感じることは何もない。

だが、涙が出た。

これは……怖れだ……。目の前に広がる「恐ろしい未来」を断ち切ることができなくなつたという、怖れだ……。

「どう……したら……」

ざわざわと、焦りが全身を包んだ。

いつ、目の前にうちはマダラが現れるとも限らない。

戦況がどうなっているかわからないが、すでにマダラが倒されていると楽観できるほど、もう心は強くない。単純に「仲間」たちを信じることができないくらい、心はもう歪んでしまっている。

それに、自分の中に眠る「何か」がいつ目覚めるかもわからない。

誰か……たとえばマダラに無理やり引き出されるかもしれない。

怖い……。

誰でもいいから、この先に必ず来る「恐ろしい未来」を今すぐに閉ざして欲しかった。

「誰か……！」

応えるはずもないのに、そうつぶやいた。

「お願いっ……誰か……！」

水の音が、声も願いもかき消していく。

「誰か……私をつ……！」

「泣いているのか？」

一瞬、川の流れが止まったような感じがした。

「え……？」

「ずいぶん彷徨つたが、ちゃんとお前の元に辿りつけた」

応えるはずもないのに……誰もここには居なかつたはずなのに、すぐ後ろで声がした。

「誰……？」

ゆっくりと振り返る。

「最期に願ってみれば、叶うものだな」

そこに立っていたのは……。

「ネジ……くん……？」

戦場にいるはずのネジだった。

手をとって

「どうし……」

言葉が途切れた。

目の前にネジが居る訳……。わざわざ言葉にして尋ねなくてもわかってしまう。

戦場を抜けて逢いに来てくれたわけでも、まして、戦争が終わったわけでもない。

「どうして……」

だが、ナナはそう叫んだ。

理由を尋ねたわけじゃなく、何故こんなことになってしまったのかという、言いようのない腹立たしさからだった。

「ネジ君！」

「ナナ……」

ネジはなだめる様に言った。

「泣いてくれるのか？ ナナ」

「だって……ネジ君……」

穏やかな彼の表情に、苛立ちが募った。

何もかもを取り払って自由になったというような、清々しい顔。それがうらやましくもあったから。

だが、ネジはそれをも受け止めるように、さらりと事実を述べた。

「ナナ……オレは戦場で死んだ」

「っ……!!」

そんな事実は嫌だった。

まるで聞き分けのない子供のようにだと自覚していても、とうてい受け入れられなかった。

「ナナ、この戦争は予想を超えた規模に拡大した。『本物のマダラ』が復活して、十尾を操っている。なんとかナルトの力に引っ張られる形で忍連合も対抗しているが、状況は厳しい」

ネジが淡々と語る戦況に、興味はなかった。

ただ、「どうして」と壊れた玩具のように繰り返しつつぶやいていた。

「ナナ、戦争に犠牲はつきものだ」

「でも……！」

頭でわかっているつもりでも、「どうしてネジが」という思いが胸を締め付ける。

こんなふうにはネジを困らせたくはないのに、暴走する感情を少しも止められない。

「オレは、ナルトを守って死んだ」

「え……？」

それを切って捨てたのは、ネジの言葉だった。

「大切な仲間の楯となって死ねたんだ。オレは後悔していない」

誇らしげに、ネジは笑った。

「オレはオレなりに、自分の忍道を貫けた」

ネジの白い眼は優しかった。

そしてその額からは、あの刻印が消えていた。

「ネジくん……」

その視線に気づき、ネジは少し距離を縮めた。

「最期の瞬間、オレはお前のことを考えた」

「え……？」

「できれば、もう一度お前に会いたいと……」

小石を踏む音は聞こえない。

ただ、川の流れが静まった。

「こういうことはお前の専門だろうが……、オレはおそらく“魂”というやつになって、ここへ来られた」

涙をぬぐった。

目の前のネジが、もう“人”ではなくなったネジが、そうまでしてここに来た訳を、改めて考えた。

「ネジ君……」

「お前と初めて話をしたのは、中忍試験が終わった日の夜だったな」

その言葉に誘われて、あの日の夜風を思い出す。

中忍試験大詰め、大蛇丸による木ノ葉崩し。そして我愛羅との出会い、一尾の封じ……。

戦いの中、里の長である三代目が命を落とし、夜気は人々の戸惑いを絡めて吹いていた。

あの日、病院の中庭にたたずむネジを見つけた。

ナルトと戦った日向一族の忍。

天才と言われ、ヒナタやナルトを落ちこぼれと見下し、才能だけを肯定していた彼は、ナルトとの戦いのさ中で変わっていた。

だが……彼が言っていた言葉は胸に突き刺さっていた。

彼がいかに変わろうと、その棘に似たモノだけは変わらずそこに在ったから。

彼と話がしたかった。いや、ただ言いたいことがあった。

『……私ね、ネジ君の言っていたこと、「そうかな」って思う……』

ネジは不思議そうな顔をした。

唐突だったから無理もない。

だが、彼は聞いてくれた。

『ナルトに言っていた……人の……運命っていう話……。私も、人の運命は決められているんだって、時々思う……』

彼に言っても仕方のないことだった。

自分の背負う運命を彼に告げることはできなかったし、『運命は変えられる』と悟ったばかりの彼に、わざわざそう言うなど残酷だと思っただが、どうしても言いたかった。

『……私も、運命は変えられないって、思うことがある……』

我愛羅の中にあるモノを見て、感じて……。

初めてだったから。尾獣を封印するために生み出されたくせに、直接触れたのは初めてだったから。

己の運命を改めて実感した。現実を突き付けられた。

『私も……この血に運命を決められて……』

ネジがそれを知る由もなかった。告げていいはずもなかった。それでも、ネジは心をくれた。

『ナナ、お前が何を背負っているのか、オレに聞く権利もない……だが』

少し不器用に。

『オレは、うずまきナルトと戦ってみて、目が醒めた』

でも、優しく。

『運命は変えられると……、そう思えるようになったんだ』

精一杯、心を夜気に乗せてくれた。

『「思えてくる」だけじゃなくて、ホントに運命は変えられるのかなあ……』

ナルトのヒカ리를思い浮かべて呟いたとき、ネジはこう言った。

『オレにもまだわからない……』

簡単に同意しなかったことは、ナナにとって救いだった。

そして次の言葉は、揺らいだ心をなだめてくれた。

『だが……、「変えようとしてみる」気にはなった……』

たとえこの疑問の『答え』がどうであれ、『答え』がわかるその日までは抗い続けるのだと……。

それが大切なこと……そう、教えてくれた。

これこそが、あの時、欲しかった言葉だった。

『お前とオレは、少し似ている……』

ネジの白い眼は、この心を見透かしているようだった。

そう……似ているのだ。

ネジの額に印されたモノと、この胸に印されたモノ……。さだめの

刻印。

『似ている……』

そう言われた時に、ネジを心から信頼するようになった。

その彼が、木ノ葉を出るときに唯一引き留めてくれた人だった。

サスケ奪還に失敗して、ナルトも自来也との修行に入つて、自分は

……姉を倒すための修行と言って和泉の里に行こうとした時だ。

あの白い眼には、それが半分“口実”であると見透かされていたことだろう。

本当は……半分は逃げたかった……ということも。



『今は、「運命は変えられるものだ」とはつきり言える』

だからわざわざそう言ってくれた。

共に音の忍と戦った彼は、また戦いの中で確実に何かを得ていた。嬉しかった。心に響いた。

だが……作り笑いを返すことしかできなかった。

一刻も早く、逃げたかったのだ。

サスケを連れ戻せなかった結果。傷を負った仲間たち。サクラの失望。姉から受けた憎悪。

それから……それから、目の前から立ち去ったサスケと、追わなかった自分。

逃げたかった。

だからネジの優しさに背を向けて、消えたのだ。

それでも……ネジはずっと、優しかった。

二年後、砂の里で再会を果たしたときも、心は脆く崩れかけていた。砂を守れず、挙句、我愛羅を死なせて……イタチと再会した。

無力感と喪失感に打ちのめされた弱い心は、イタチとの未来を求めた。

『お願い……私を連れて行って……』

とうとうイタチに言ったのだ。もう、イタチがくれる想いしか、すがれるものがなかったから。

イタチの言葉も、いつもの突き放すようなものではなかった。

嘘の仮面を外して、イタチは言った。

『オレは……お前が愛おしい……』

初めてイタチの心が露わになった。

子供の頃にも決してはつきりと示さなかったそれは、嬉しくもあり、また苦しくもあった……。

早くその痛みを取り去りたかったから、そのまま連れて行って欲しかった。

が、イタチはそうはせず、“道”を示したうえで約束をしてくれた。

自分の中で答えは決まっていた。次の朝、イタチとの約束を果たすと心に決めていた。

我愛羅を送って、親切にしてくれた砂の者たちに礼を言って、木の葉のみんなには別れを告げず……と。

が、我愛羅がチヨバアの術で生き返って、急に頭がはつきりとした。見えなくなっていたモノが見えて、イタチに見えていたモノがわかった気がした。

イタチが今さら指し示した「道」の意味を知ってしまった。全てを放り出そうと思っていたのに、手の中にまだ在るものに気づいてしまった。

それで、めちやくちやに混乱した。

我愛羅は生きていた。

彼には恩がある。特別な想いも……。命に代えても彼を護りたかった。

彼の元を黙って去って……仲間との絆も断ち切って、イタチ元へ行って良いのか？

「道」は？ 「約束」は？ 「忍道」は？ 「未来」は？

何が、正しい……？

情けなく取り乱していたさ中、ネジが現れた。

ネジはやはり、何かを悟っていて……。彼も何かが見えていた。

それを教えてはくれなくて、この先のことは「自分で決めろ」と言った。

最初から、そのまま木ノ葉に帰るつもりがなかったことを知っていたようだった。

だから、それだけで何も言ってくれなかった。

我愛羅も、ネジも、選ばせようとするだけで、答えを示してはくれなかった。ナルトのように、自分の気持ちを知らしめてもくれなかった。

『無理だよ……もう……ココから一步も進めない……』

だからあの時、とうとう思考に限界が来て、その場にしゃがみ込んだ。

客観的に思い起こせば、本当に手間のかかる子供だった。面倒くさい人間だった。

自分のことは何も語らない癖に、悩みを押しつけて……本当に情けなかった。

が、ネジは優しく頭を撫でてくれた。

『ナナ、迷う必要はない……』

まるで、催眠術をかけるように……。

『お前の心の“一番奥”を見つめればいいだけだ……』

そのとおりにした。

ネジの誘導に従うように、心の一番奥を見つめて……深く、深く……錆びついた扉で閉ざしていたその奥を……。

そこを覗くのは、とても怖かった。開けてはいけないと、無意識のうち、ずっと自分に言い聞かせていた場所だったから。

『私……サスケに逢いたい……』

答えはネジの前にさらけ出した。

彼は何も言わなかった。

全部知っていたかのように……やはりその目で見透かしていたかのように、穏やかに笑った。

「ネジくん……」

彼との時間を思い出し、ナナは言葉を零した。

「ありがとう……」

涙と共に。

「いつも……私を見守っていてくれて……」

ネジはあの夜のように笑った。

二つ年上の彼は、もつとずっと大人びていた。

「ネジくん……お願い……」

だから、ナナは安堵にまかせて言った。

「私を……連れて行って……」

彼なら今も見抜いてくれる。

その確信があった。

願いを叶えてくれる。

その奢りもあった。

だが単純に、優しい彼にすがりたかったのだ。

「ナナ……」

ネジは驚かなかった。ただ困った顔で首を振った。

「オレにはできない」

「大丈夫！」

一度、涙を拭った。

「手を……」

濡れた手を彼に差し出す。

「手をとって……そのまま引つ張ってくれればいい……！」

彼の身体はうつつすらと光を纏い、その輪郭が揺らぎ始めていた。

このまま、彼と共に逝ける……。

「ナナ……」

「お願い、ネジ君！」

願い……いや、そんな個人的なものではないつもりだ。

この身が闇に染まれば、世界が滅びる……。

大げさとしか言いようなない悪い予感が、さつきまでよりもずっと

強くなっていた。

「違うの、私は……！」

だから、叫ぶように言った。

「逃げてると思うかもしれないけど、でも違う！ 私の存在は危険な

の！ マダラか……、他の何かにこの血が利用されたら、大変なこと

になる。もうすでに“計画”は始まっているの。きつと、初めから

……」

結局ここで、変えられない“運命”を彼に突き付けているようで、

心が痛んだ。

が、どうしようもなかった。

「お願い、ネジ君！ 私、そんなふうになりたくない！ だから私は自

分で終わらせようとした……。けど、駄目だったの！ 自分の力じゃ駄目なの……！ だから、だから……」

ネジがその眼で、現状と少し先の「避けられない未来」を見越してくれることを信じて。こんな時にも働く和泉の血が、はつきりと予言する「黒い未来」を、彼が見てくれることを祈って。

「お願い、私と一緒に連れて逝って!!」

そう叫ぶと、荒ぶる息をそのままに、ネジの答えを待った。

拙い言葉だった。

が、それ以上説明ができないのも事実だ。

実際、この先に何が起こるのかわからない。

ただ、この身が、血が、眼が……すでに何か呪いのようなものに囚われていることだけは強く感じるのだ。

それは抗いようのないもので、これこそが絶望なのだ。と今さら気づかされるほどに、その前ではまるで無力だった。

「ナナ……」

ネジの声音に、落胆した。

「ネジくん……お願い……」

それでももう一度、願う。

「ナナ、すまない……」

あたりまえだ……。

ネジが、うなずいてくれるはずがなかった。

「お前を困らせるつもりはなかった」

目を伏せた。

わかっている。ネジが謝る必要など何もないのに。

「オレはただ、どうしてもお前にただ伝えたいことがあったんだ……。オレの我がままだ」

我がままを言って困らせているのは、自分のほうなのに。

だが、ネジはさらに光を強くしながら言った。

「ナナ、オレの眼を見てくれないか？」

悲しさと後ろめたさで、顔を上げられなかった。

が、ネジは続ける。

「この眼に映るお前は、いつも強かった」

極めて弱い心をさらけ出したはずなのに、ネジはそう言った。

「中忍試験の時、死の森で仲間を命がけで護ろうとする姿も。リーの誇りを守るために戦った姿も。そして……深く傷つきながらも、サスケを追おうと決意した姿も」

「でも……」

思わず首を振った。

それらはどれも、まっすぐな意志を掲げて戦っていたわけじゃない。

サスケの呪印、ナルトの封印、そして、自分の血……サスケの言葉、サスケへの想い。とても誇れる姿ではなかった。

だが、ネジは言う。

「実の姉と戦い、瀕死の状態に陥ったお前も。うちはイタチとサスケの戦いを止められず、ボロボロになって帰ってきたお前も。それでも、里のみんなを暁から守ったお前も。オレはちゃんと見てきたつもりだ」

徐々に、視線を上げた。

「お前がナルトの中の九尾が暴走した時、『代わりの器』となるために木ノ葉に来た和泉一族の人間ということは、だいぶ後になって知った。それに、うちはイタチと幼い頃から関わりがあったということもな……。だが……」

もう、ネジの身体の向こう側の景色が見えていた。

「それでもオレの眼に映るお前は、強く美しかった」

ネジの言葉は居心地が悪かった。

だが、伝わってくる空気は、心地よい安らぎに他ならなかった。

「だから、ナナ……」

ネジは風にそよぐように笑った。

「お前は今でも、強い」

そこに吹いた風は、初めて話をした夜の涼やかさと同じで……あの時よりずっと柔らかかった。

「ネジくん……」

全部見えているはずなのに、それでも「強い」と言うのか……。

彼の真意を探るため、両目でしつかりと彼を見た。

「たとえばお前が戦場から遠く離れたここで、ひとりで死を選んだとしても……、オレの眼にはお前が弱いようには映らない」

こんなに情けない自分を肯定する彼の言葉に、憐情は含まれてはいなかった。

「お前はよく戦った……」

与えられるのは愛憐だった。

「戦場に居ないお前に、どうしてもそれを伝えたかった」

許された……。

そう感じた。

「ネジくん……私……」

手を伸ばせば触れられた。

だが、触れても温度を感じられないことを知っていた。

「ナナ、オレはお前が言った通り、ずっとお前を見守ってきた。……見守るだけだった」

優しい風……。

まるでネジはそこに溶けていくようだった。

「あの時もそうだったな。砂隠れの里の……お前が初めて本心を見せた夜も……」

あの夜とこの夜が、ネジの光の中で交わっているように思えた。

「オレは、木ノ葉に戻るかどうか迷っているお前を知っていた。だから声を荒げてでも、『一緒に帰ろう』と言いたかった。説得したかった。だが……オレはそうしなかった。できなかったんだ……」

ネジは後悔をさらけ出しつつも、満足げに笑った。

「だから、ナナ……。オレは今さらお前を連れて行くことはできない」「ネジくん……」

彼の眼を見て、醜く垂れ流した要求を全て飲み込んだ。

「ごめん、ネジ君」

本当の心を、惜しげもなく露わに伝えてくれた彼の優しさに、心から感謝をしていた。

「こんなふうに出逢いに来てくれたアナタを、困らせてごめんなさい」  
そして……。

「本当は、私がアナタをちゃんと送らなくちゃいけないのに」  
やっと、己の役目を思い出した。

「ナナ……」

ここへきて、ネジは少し困った顔をした。

「すまない……結局オレは……」

「謝るのは私のほう！」

だから、やっと彼の想いに応えるべき言葉を紡ぎ出すことができた。

「いつも私を見守っていてくれて、ありがとう」

改めて、彼の存在を心に感じた。

病院の中庭も、木ノ葉の門へ続く道も、風影の屋敷の庭も、全ての夜が大切だった。

「アナタの優しさと、強さと、それから忍道……。全部、私の中にちやんと残しておくから……。だから、少しだけ向こうで待っていて」

もう、彼の姿は完全に光に包まれてしまっていた。

「ああ……ナナ、笑ってくれたな」

こんなに近くににいるのに、声も遠くから聞こえて来る。

「ネジくん……」

印を結んだ。

彼が迷わず向こうへ渡れるように。そこで、必ず大切な人たちと再会できるように。

そう、例えば彼の父親とか……。

「さようなら」

呪しゅは必要なかった。

想いだけで送れると思っていた。

「ナナ……これからお前を……見守っている……」



「うん……ありがとう……」

ネジだった輪郭は完全に消失し、光の塊になって……やがて、それは煙のように立ち上って消えた。

「ネジくん……ありがとう……」

ネジが逝って光が消え、闇が再び全身を覆い尽くすようだった。

「ありがとう……ネジくん」

そのまま何度も呟いた。闇の中で呟いた。

その闇を、振り払うことができないのだから、仕方がなかった。

## 契約と絆

闇の中、本当は立ち上がることもさえも億劫だった。湿り気を含んだ重い空気に、全身が押し潰されてしまいそうだった。

が、再び顔を上げることができたのは、ネジが最後に笑ってくれたから。清々しい笑顔で、己の生に少しも「悔い」を滲ますことなく逝ったから。

そして。

『ナナ……これからもお前を……見守っている……』

そう、約束してくれたから。

だから、ナナは再び立ち上がった。

彼に見守られながら、やるべきことはわかっている。

濡れそぼった小石の上に落ちた短刀を拾い上げる。

刃に泥がついていた。袖でそれを拭う。

歪なうちのはの家紋が、再び月明かりに煌めいた。

キンと大げさな音を立てて鞘に収め、懐にしまった。

水の香りを胸いっぱい吸い込む。

闇の中にそびえる、うちはマダラと千手柱間の巨像に一瞬だけ視線を送ると、明けない夜の中、再び木ノ葉に向かって足を踏み出した。

その時。

『オイ、和泉の姫!!』

聞き慣れない……それでいて良く知っている声が聞こえた。

滝から落ちる水の音に少しもかすまない、強く響く声……。

その存在を意識した瞬間、目の前の景色が一瞬にして変わっていった。

ここには来たことがあった。声の主も誰だかわかっている。

『和泉の姫、力を貸せ!!』

見上げると「それ」が居るとわかっているからうつむいた。

薄暗い中、己の足首が水に浸かっているのが見えた。そしてそこに

はまだ、枷と千切れた鎖があった。

『十尾から尾獣どもを抜き出す！ お前の力を貸せ!!』

“それ”の叫びで波が立った。

少しよろめく。

「九尾……」

“それ”は、変わらずそこに居た。

「どうして……？」

ナルトが“鎖”を千切ったはずだ。もう、ナルトの中の九尾が暴走したとき、ナナがそれを封印するという“契約”は、ナルト自身の手で破棄されたはずだった。

それなのに何故、またこうして意識の中で九尾と“ここ”で顔を合わせているのか……。

『あの時、ナルトがお前との契約を断ったが、お前の中にあつたオレのチャクラはまだ残っていた』

九尾はいつそう低い声でそう説明した。

が、その口調は以前とは明らかに違っていた。

あの時……、九尾の檻の“内側”で初めてその姿を目にした時は、噴き出すような憎しみしか感じられなかった。

そして、自分に対する憐れみと蔑みを清々しいまでに突き付けられた。

が、今は……。

『そんなことはどうでもいい！ 和泉の姫、お前の力が必要だ!!』

相も変わらず高圧的な物言いはあるが、巨体からほとぼしっていた憎しみが感じ取れない。

「なに……？」

九尾の心に何があつたのか……。

そもそも九尾には、憎しみや蔑みのような負の心しかないのだと思っていた。

だがそこには明らかに、それと違うものがある。

だから、いったい今までに何があつたのか問いたかった。

が、九尾はその問いを「戦場で何が起きているのか」という意味に

受け取ったようで、若干早口になりながらこう説明した。

『十尾の人柱力になったうちはオビトから、ナルトとサスケが尾獣どものチャクラを引つ張り出す！ 完全に切り離すにはお前の力が必要だ！』

ナルトとサスケが……。

九尾がそう言ったことで、思わず目を見開いた。

『お前、まだ死んじやいねーようだな……』

それを九尾が目聡く指摘する。

紅い目は心を鋭く見透かしたようだった。

『お前には、人柱力から尾獣を引き抜いて封じる力があるだろう。その力を利用して尾獣のチャクラを十尾の人柱力から引っぱり出せ！』  
そして、ナナの力の全てをも知り尽くしているように、差し当たつての目的を告げた。

また、うつむいた。

九尾がナルトの中でずっとナルトの成長を見守ってきたのと同じように、この胸の奥からも自分を見ていたのだろうか……。

だからこそあの時、この運命を嘲る言葉を的確に吐き出せたのか。今もまた、抱える恐怖と、これからやろうとしていることを見抜いているのだろうか。

そう思案した。

『さっさとしろ！ オビトの方へ引き戻されるぞ！』

足元を浸す水が、温く揺らいだ。

『十尾が存在すれば、大樹が成長して花を開く。そうなれば、ヤツは無限月読の術を発動しちまう！』

九尾が鼻先を近づけた。

熱い息が全身にかかる。

『そうなりやお前ら人間どもは、幻術世界の中に閉じ込められて終わりだ！ それでいいのか?!』

ぐらりと身体が揺れて、二、三歩、後ずさった。

『オイ！』

大きく鋭い牙が露わになった。

「だめなの……」

顔を背けて、初めてそう応えた。

「そつちには、行けない……」

この力……幼い頃から会得してきた尾獣を封じる力が、そして和泉一族の特異な血が、戦場で役に立つかはわからなかった。

「少しはまし」になるかもしれないし、「全く歯が立たない」かもしれない。それとも、「みんなを救うことができる」のかもしれないかった。

だが、それ以上に……。

「九尾、アナタならわかるでしょう?!」

さきほどからずっと怖れていることがあるのだ。

それを、九尾に気づいて欲しかった。

『お前の眼と、血と、力のことか……』

白い牙の隙間から、吐き捨てるような台詞が漏れ出た。

『確かにお前は、この世に存在していちやいけねえのかもしれない』

それでも、台詞の意味は「同意」だ。

「だから……そつちに行けないの」

思い切って顎を上げた。真紅の目を見つめる。

「私」が利用されたら、この世界は壊れる……!」

言い返すと、逆に九尾は黙り込んだ。

「アナタならわかるでしょう?」

うまく伝えられないのは仕方がなかった。

だが、わかってくれると確信していた。

何故なら、九尾こそが長い歴史の中で、常に「利用される」立場に居続けた存在だからだ。

ある意味、今現在のナナの心境を一番よく理解してくれるのが九尾であるはずだった、

ネジにも曖昧にしか告げられなかったし、自分でもはつきりと認識しているわけではない、ただ漠然とある恐怖や予感も……。

『ああ、わかつている』

九尾はいつそう低い声で応えた。

だが、

『だが、〃今〃十尾を倒さねえと、戦場の奴らは〃死ぬ〃』  
体制を変えないまま、静かな口調で言った。

『お前の力が〃世界を壊す〃前に、アイツら……ナルトも、サスケも、みんな〃死ぬ〃ぞ』

反射的にこぶしを握った。

九尾の言う通りだ……。

腹に響く声は理路整然としている。

「でも……」

だとしても……。

「今の私に、あの術をする力なんて無い……」

術の手順は脳で考えなくとも発動できるほど、幼い頃からすでに身体に浸み込んでいる。

が、今は身体も心も疲弊しきっていた。

おそらく自分が戦場へ行っても、「少しはまし」になる程度とみるのが妥当だろう。

『そんなはずはない！』

しかし、九尾は再び音量を上げた。

さきほどより大きい波が足元をすくう。

『お前なら尾獣も忍のやつらも、全員救えるはずだ！』

耐え切れなくて膝をついた。

『それに……』

冷たい……いや、生ぬるい水が、袴と袖をじわりじわりと濡らしていく。

『お前は、ヤツらを見捨てることなんかできやしねえ』

いつそののまま、溶けてしまったかった。

「でも……」

サスケの顔が浮かんた。ナルトも。カカシ、サクラ、シカマル、我愛羅……そして、ネジ。

仲間たちの顔が浮かんだ。

彼らの世界を壊したくないから、自分を終わらせようとした。

彼らをこの手で傷つけないから……。

だが九尾の言う通りなら、そうなる前に、今にも彼らは幻術世界に引き込まれてしまう。彼らの世界が終わってしまう……。

『急げ、和泉の姫！ 十尾の力は、ナルトとサスケの力でも引きずり込まれるほどの代物だ！』

ナルト、サスケ……みんな……。

彼らを救えるのか？

この手で。この、情けなく濡れそぼった手で……。

「どうして……？」

こぶしを握った。

が、力が入らなかった。

「どうして、私を信じるの？」

ただその訳を問いかけた。

「どうして……？」

自分で出せない答えを、九尾が出すことこの理由が知りたかった。

『お前は……』

九尾は急かすのを止め、以前のようによく口調でこう答えた。

『一度も、ワシを「敵」として見たことがないからだ』

思わず顔を上げた。

『最初から、ナルトを憎んでいなかったからだ』

陰険に睨みつけるだけだったあの目が、まっすぐにこちらを見下ろしている。

そこに皮肉は無かった。あからさまに率直だった。

「九尾……」

やすやすと語られた二つの理由。

“この存在”に、こんなふうに言われる日が来るとは想像もしなかった。こんなにも、“この存在”と心を通わせることができるとは思ってもよらなかった。

冷えていた胸が熱くなった。

『急げ！ お前が誰より、アイツらを死なせたくなはずだろうが！』  
水に浸かったこぶしを握った。

今度は、自分の体温を感じた。

『後のことは、何とかなる……！ なんならワシがお前を噛み殺してやる!!』

そう……大切なのは、今、この瞬間。

怖れを超えろ……。

「わかった……」

選択を間違えたくはなかった。

後で取り返しのないことになるとはわかっている。

それでもやはり、目の前のできることに背を向けることはできなかった。

きつと、これが自分の忍道なのだろう。

ずっと掲げることができずにいた忍道……。

醜く足掻いても、愚かでも、目の前のできることに立ち向かう。

やっとみつけた己の忍道。

そうであれば良いと思った。

きつと、イタチも笑ってうなずいてくれる。ネジも。

だから、ナルトとサスケが“共に”戦っている。そこへ……。

「連れて行って、九尾」

さつき、ネジに言ったのと同じ言葉を九尾に言う。

「私、戦場に行く」

正反対の目的で。

『ど真ん中に飛ばすぞ！ すぐに術を始めろ!!』

「わかった」

覚悟を決めた。後悔は、これ以上したくない。



（イタチ……ネジくん……私を、見ていて……！）  
最後の戦いをするために、戦場へ……。

## 繋げる

(イタチ……ネジくん……私を、見ていて……！)

そう想いを込めて、九尾の紅い目を見上げた。

それがキラリと光ったとき、一瞬にして視界が変わる。

そこには、禍々しい紅い満月があった。

急な浮遊感に景色がぶれたが、身体は落下することなく止まった。

足元に青白い五芒星が光っている。これが“この術”の発動と共に現れる、いわば“最初の手順”だった。

その星の彼方……遥か下方へと視線を移す。

黒い大地に、赤いチャクラの塊が無数に散らばっていた。

あそこに、良く知っている仲間たちがいる。一尾のチャクラを懸命に掴む我愛羅の姿も見える。

そして、一段と明るい光の中にサスケとナルトがいた。サスケの須佐能乎とナルトの九尾……。

二人は、一緒に居る。

(よかった……)

口元に自然と笑みが浮かんだ。たとえそれが一刻のことでも、二人が共に戦う姿を見られて良かったと思った。

『あれが“うちはオビト”、十尾の人柱力だ！』

九尾に促されて、正面を向く。

『ちなみに奴は暁の面を被り、“うちはマダラ”と名乗っていた男でもある……』

そこには男が居た。ナナと同じように、この不気味な宙に浮いている。

(あれが……カカシ先生の……)

“次の手順”の印を結びながら、頭の片隅にカカシの部屋で見た一枚の写真を思い出す。

カカシとオビト、そしてリンという人。彼らの後ろに立つのは四代

目火影だった。

その自分たち第七班と同じ構図の写真に、否が応でも興味を惹かれた。

が、カカシ以外の者たちがすでにこの世にないこともわかっていたから、詳しくは聞かなかった。

そして『慰霊碑』に刻まれた彼らの名を見つめるカカシの右目は、普段とは違うイロをしているのを知っていた。

あの写真の男が、あの面の男……。『うちはマダラ』と名乗り、イタチの真実を語った暁の男だったのか。

「九尾、カカシ先生は？」

『オビトの万華鏡写輪眼で作られた異空間に飛ばされたままだ。オビトが弱ればきつと出て来るから心配するんじゃないやねえ！ それより今は術に集中しろ！』

脳裏に浮かぶあの写真と暗い部屋の光景を全部かき消すように、九尾が叫んだ。

『今、ナルトが持っている尾獣どものチャクラで、十尾に吸収された分のチャクラを引っ張り抜こうとしている状態だ！ お前の術はアレを援護できるはずだな?! ナルトとサスケの力が弱まる前になんとかしろ!!』

畳みかけるように言われても、不思議とナナの中に焦りはなかった。

眼下の光景を見て、すでに状況は把握した。

「カカシが戻って来る」というやけに楽観的な九尾の台詞も、あつさり信じられていた。

「もう、術は発動してる」

ゆっくりと九尾にそう返す。

やっと自分の「忍道」を見つけて、本当にやるべきことがわかって、心は驚くほど鎮まっていた。

（サスケ……）

こんな時でも、強く感じるのはサスケの視線だった。

ここへ来たのとはほぼ同時にそれを感じとったから、たぶん真つ先に

自分に気づいたのはサスケに違いない。

(私やっぱり、みんなと一緒に戦うから。アタタと一緒に、戦うから……)

きつと、サスケはこの空に浮かぶちっほけな『星』を見つけて戸惑っているだろう。

木ノ葉の里で「戦うことを止める」と宣言したはずなのに……。

ここに瞬く、足掻きの星を……。

(サスケ、私を見ていて……)

ナナはあの眼を発動させた。この身体に半分だけ流れる、サスケと同じ血をたぎらせて。

脳を打ち抜かれるような痛みはあった。

が、少しも怯まずにいられた。

その眼で、あの写真とはずいぶん変わり果ててしまったうちはオビトを見つめる。

そして、彼に取り込まれている尾獣たちの『核』を見抜く。

やり方はもちろん十二分に心得ていた。

深く息を吸い込むと、そこへ自分の力を放った。

ナナの両腕から伸びた青白い光が、まっすぐに尾獣たちのチャクラに向かって駆ける。

『いけー!』

九尾がまるで、祈るような台詞を内側から叫ぶ。

と、光は九つに別れてそれぞれのチャクラにたどり着き、星の形を作った。

ドクン……と、鼓動が跳ねた。

「繋がった……!」

低くつぶやいた。

この術を、ナルトに向けて放つために生きていた。この力で、九尾を引きずり出す修業ばかりを重ねてきた。

それが今、その九尾やナルトと共に戦っている。

だから絶対にこの術を成功させる。

世界を守るためじゃなく。みんなを守るためだけじゃなく。この

“生”に誇りを持てるように。

十尾の力は強かった。

九体もの尾獣をいっぺんに引き抜くなど、もちろん修業の想定外だ。和泉の里の人間も、誰一人として想像していなかったことだろう。

それでも、絶対に成功させねばならなかった。

だから、和泉の里で覚えた手順“以外”のことを実行する。自らの意志で。

「九尾、私にもアナタのチャクラを貸して」

『しかし……』

九尾が初めて戸惑いというものを見せた。

陰陽道の流れを組む“六道”を良く知っている九尾にはわかって  
いた。

忍術の“チャクラ”と陰陽術の“力”は、似て非なる物である。

チャクラが大きいからといって、陰陽の力が強いわけでもなく、またその反対もあり得ない。膨大なチャクラで忍術を発動できることと、強力な陰陽術を扱えることは全く別の話である。

だから、九尾は己のチャクラを与えても、この陰陽の禁術には無効であることを知っていたのだ。

が、ナナにはちゃんと考えがあった。

それは、木ノ葉の里で忍になってから自分の意志で身につけてきた  
“戦うすべ”だった。

「大丈夫。アナタにもらったチャクラを、陰陽の力に“変換”して使  
うから……!」

言い終えるや否や、身体の内側から熱い塊が産まれた。

それは激しく燃える炎のように全身を包み込む。

が、共に存在することなどあり得なかったはずの九尾と、一緒に  
戦っているのを実感して、少しくすぐったかった。

「ありがとう、九尾」

『やれるか!?!』

「もう、今さら迷うのは止めたから。必ず成功させる……!」

九尾から受け取るチャクラを、片っ端から陰陽術の力に変換していく。

それは予想以上に莫大な量で、つまりはその変換作業だけでも多大な労力を強いられた。

が、術は間違いなく力を増している。

その証拠に、オビトの身体が揺らいだ。

そしてさらに……下から風が吹き上げた。

この夜の空に吹く風は肌を冷やす冷たい風であるはずなのに、それはとても暖かく、ナナに吹き付ける。

(みんな……?)

視線を落とす。

地上の無数の赤い星たちがキラキラと瞬いて、やがて九つの塊になっっていた。

そして尾獣たちのチャクラを掴むと、一斉に引っ張り始めたのだ。

それはまるで、木の根のように大地にしっかりと張り付いて、さらに長く伸びようとしているようにも見えた。

「みんな……!」

自然と声が出ていた。

「遅れてごめん……」

九尾のチャクラを通して、皆に伝わると思った。

「でも、ちゃんと戦うから……! 私全部の力を『この術』に懸けるから……! だからお願い、もう少しだけがんばって!」

『この術』の意味を、親しい仲間たちならわかってくれるはずだった。

「なるべく、尾獣たちにつけた『星』を意識して引っ張ってほしい」

『星』の意味を悟る者が現れても構わなかった。

「絶対に、十尾から尾獣たちを解放するから……!」

まっさらな決意を吐き出す。

と、それに呼応するかのようには、忍たちの力が勢いを増した。

(みんな……)

彼らの声はここまで届かなかった。

それでも、応えてくれているのが風を通して伝わった。

九尾のチャクラの熱と、逆に凍てつくような陰陽の力を同時に扱っていても、耐えられた。

笑みさえも浮かんだ。

『このままいけるか?!』

気の緩みを咎めるようなタイミングで、九尾が声をあげる。

その高圧的な言いぐさにも、必要以上に大きく響く声にも、もうすっかり愛着が湧いていた。

「九尾……もう一度、力を貸して」

『バカヤロウ！ これ以上はお前の身体がもたねえだろう』

「ちがうの」

苛立ちながらも気遣うような台詞を言う九尾が、なんだか好きになっっていた。

「まだ、アナタ以外の尾獣たちとの繋がりが弱い……」

『どうする!?!』

「『言霊ことだまのじゆつの術を重ねる』

次に思い浮かんだ『自前の手順』を口にし、心の中でこうつぶやいた。

(ごめんね、九尾)

九尾に対する想いの変化を実感しながら。

『一度も、ワシを『敵』として見たことがないからだ』

『最初から、ナルトを憎んでいなかったからだ』

九尾はそう言ってくれた。

自分を正当化するわけではないが、確かにそのとおりだった。

べつに、九尾の存在を敵視していたわけじゃない。ナルトの存在を憎んだこともない。

ただ、自分の『生』にこだわっていただけ。それがともうしろめたくて、足掻いていただけ。

彼らの存在が『悪』ではないのに、それをクロスただけに産まれ

てきた自分が嫌だった。危急の時を待つだけの自分を、どうしたって好きになれなかった。

でも、それが彼らのせいだとは考えたこともなかった。

ただ、今はそれしか知らなかった頃より弱くなってしまった。

想いや、意思や、希望……仲間や、里。いろいろ知って、自分のことを別の角度で意識するようになったから、恐怖も芽生えた。

予測されたこととは、別の未来への期待。存在意義を変えられるかもしれないという希望。大切な仲間との繋がり。

……それらを失いたくない恐怖だ。

だが、今ここにいるのは、九尾が信じてくれたからだ。

もう一度、ここで戦える。ここで戦うことで、もう一度、自分の産まれた価値を確かめることができる。

初めは一本しかなかった道だったはずが、こうして別の道を選び取ることができる。

(ごめんね、九尾)

もう一度つぶやいた。

自分がどんどん弱くなっていかなければ、もつとちゃんと向き合えなくてはならない……。

(こうして引き寄せてくれて、ありがとう……)

特別な存在である九尾に、特別な思いを抱く。

『コトダマの術だ?!』

九尾はもう、こちらの心は覗いてこなかった。

彼はまっすぐ前を向いている。相棒である、ナルトのように。

「名前で“縛る”術だから、繋がりを強められるはず。強制的になっちゃうけど……」

『そんなこと、今はどうでもいい。で、どうすりゃいいんだ!?!』

ナナはまっすぐに九尾を見上げた。

「尾獣たちの名前を教えて」

縛ろうとはしていても、それを知るとはとても重要だった。

「アナタの名前も……」

本当の名前を呼ぶことで、繋がりが強まると思えた。



『一尾から順に言う……』

九尾はほんの一瞬だけ躊躇って、すぐにつらつらと尾獣たちの名を告げた。

一番最後に、自身の名も。

『コトダマでもなんでもいいから、さつさと術を成功させろ！ 〴〵いずみナナ〴〵！』

九尾の低い声が、腹の底まで響いた。

「わかった、ありがとう」

(九尾が名を呼んでくれた……)

眼を閉じて、印を結びなおした。

風が全身に吹き付ける。

大きく息を吸って、彼らの名を呼んだ。

「シユカク、マタタビ、イソブ、ソンゴクウ、コクオウ、サイケン、チヨウメイ、ギユウキ……クラマ」

最後に九尾の名を呼び終えたと同時に、ギユン……と、身体に纏った陰陽の力が向こうに引き付けられるのを感じた。

「みんな、無理やり縛ってごめん。でも、今は少し我慢して……！」  
彼らにそう呼びかける。

次の瞬間、また〴〵内側〴〵の世界に引つ張り込まれていた。

そこはとても静かで薄暗い……が、九尾の檻とは違う場所だった。

## 決着

「ここつて……」

『よくここまで来たな、和泉の姫』

『まさか、アンタがここへ来るとはね』

『あのナルト意外にここへ来られるヤツが現れるとは……』

360度ぐるりとナナを囲むのは、今しがたその名を知ったばかりの尾獣たちだった。

『和泉の姫！ 久しぶりだなあ』

一尾のシユカクが軽い口調でそう言った。

「シユカク……ほんと、久しぶり……！」

シユカクと“対峙”したのは、中忍試験の時だった。

我愛羅がナルトに敗れて意識を失った時、シユカクは彼を乗っ取るうとした。

それを鎮めたことが、我愛羅と、そしてシユカクとの最初の邂逅だった。

『なんだシユカク、お前、和泉の姫と知り合いか？』

『ああ、前にちよつとな。この姫はホンモノだ。このオレ様が保証するぜ。なんたつてあん時や……』

『オイ、クソダヌキ、お前は引っ込んでろ！ 今はくっちゃべってる場合じゃねーだろうが！』

クラマが怒声をあげた。

『いいかお前ら、こいつは“いずみナナ”。ナルトが“制御”できなくなつた時に、オレを封じる役目を背負わされて産み出された、哀れな和泉一族の娘だ。ついでにうちの血も引いている』

彼は、シユカクはおろか、他の尾獣たちの反応をも無視するように話し出す。

そのぶつきらぼうな紹介を、ナナは黙って聞いていた。

『だが、コイツはオレらの敵じゃねえ。お前らが人柱力の中から受けていた他の人間どもからの感情を、コイツは一度も持たなかった。だ

から、コイツはナルトの友でもある』

一瞬の静寂の後。

『なるほど……』

『和泉とうちはの混血ですか、どうりでその眼……』

『あのナルトの友か……』

尾獣たちはそれぞれの想いをつぶやく。

『お願い、みんな……！』

ナナも彼らに向かって言った。

「確かに私はクラマを封じるために産まれてきたし、そのためだけに修業をして……生きてきた。アナタたちにとっては、**敵**となる存在かもしれない。でも……」

首を思い切り上向けて、ぐるりと彼らを見回す。

「私はアナタたちを助けたい。今は私自身の意志で戦ってる。だから……」

言葉は自然と流れ出た。

「一緒に、戦って欲しい……」

初めて目にする姿なのに、何故だか懐かしい感覚をおぼえながら……。

『お前がオレたちを助けるだど？』

『その力か……？』

返って来たのは冷ややかな台詞……。

『十尾からワタシたちを引き抜いた後、アナタが私たちを封印するのでは……？』

「そんなこと、私にはできない。今でさえ、クラマの力を借りないと術を完結させることができないくらいだし……」

だが、ナナの心は落ち着いていた。

「それに、私はただアナタたちを解放したいだけ」

九つの巨体から落とされる視線を、肩にずっしり感じる。

が、不快でもなければ緊張感もなかった。

「もちろん、忍のみんなも助けたい」

ただ、必死だった。

「それから……」

ただ、彼らと真摯に向き合っていた。

「私が産まれて来たことの意味を、ここで変えたい……!」

誠心を、告げた。偽善でなく、欲望を、虚心坦懐に告げた。

『へっ』

思いがけず、笑いが降った。

『オイオイ、要するに、ここでお前が戦ってるのは自分のためか?!』

「そっだよ」

が、悪意は感じないから、グイッと顎を上げて答える。

「私は、私の忍道を掲げてみんなを守る。そのためには、自分の血とか使命とか……最初から決められていた運命と向き合って、それを変えなくちやダメなの」

この世界に生まれ落ちる前から、決めつけられた“さだめ”を……。

「“戦う”って、そういうことでしょうか?」

誰かを守るため……、自分の意志で戦うのなら、己の“さだめ”を超える。

「アナタたちは、人柱力になった人たちがそうやってずっと戦ってきたのを見てたでしょう?」

ナルトのヒカリを思い浮かべた。

「本当はアナタたちも、一緒に戦って来たんでしょ?」

クラマなら知っている。

自身の“さだめ”と向き合い、それを超えたあの強烈な光……。

その光と正面から向き合い、激しくぶつかって、心を通わせるようになったクラマなら。

『オイ、お前ら』

最初に口を開いたのは、クラマではなくソンゴクウだった。

『この娘を試すのはもう止める。時間がないんだ』

すぐに、他の尾獣たちもうなずく。

『確かに、さっさと十尾から解放されたい』

『アレはごめんだぜ……』

『それに……』

再びソングクウが言った。

『ここへ呼んだ時点で、オレたちはお前に“協力”するつもりだ』  
「ソングクウ……」

キキつと、彼が鳴いた。

『ただちよつとばかり、お前を見てみたかっただけだ』

『おいソーン！ 素直に「助けて欲しかった」って言えばよ！』

『まったくだ。逆に、この姫を恐れていたのでは？』

彼らの言葉にソングクウが反論すると、足元が大きく揺れた。

が、自然と笑いがこみ上げた。

「みんな、仲がいいんだね」

それに対し、口々に怒声が降りかかる。

彼らに対して深い親しみが湧いた。

彼らとは、互いに“敵”ではなかった。彼らを恐れても憎んでもい

なかったし、彼らも自分を嫌悪していたわけではなかった。

それがわかって、嬉しかった。

『オイオイ、グズグズするなよお前ら！ それとナナもだ！』

クラマが急かした。

戦場で、しかも危急の事態というときに、こんなにも穏やかな気分  
になれたことがおかしかった。

「ごめん、クラマ。そろそろ戻して。いつきにみんなを引っ張り出す  
から」

早く彼らを救いたかった。

きつと、我愛羅もシユカクを待っている。

今、ここにはいないナルトも……。

『ちよつと待て！』

その時に、呼び止めたのはソングクウだった。

彼は言った。

『お前なら、もっと強くオレたちを縛れるはずだ』

「え……？」

その言葉の真意を、他の者たちが口々に代弁する。

『あなたにはその写輪眼があります』

『それで我々に幻術をかけ、十尾から抜けるよう支配すればよい』  
「でも……」

彼らの意思は同じようだった。

『無意識に縛られたほうが、力を発揮できる場合もある』

『そうだ、それがいい！ どちらの馬鹿ギツネも写輪眼で支配されたことがあるらしいがな！』

『黙れ、クソダヌキ!!』

皆がまた、いつせいにナナを見た。

「でも……」

『気にするな。お前の命令なら皆、聞く』

『というか、さつさとしないか？ 和泉の姫よ』

気は進まなかった。

せっかく心を通わすことができた彼らを、自分の力で操ることなどしたくはなかった。

だが。

『ナナ！ さつきとしろ！ お前のダメなところはそういうところだ！ いつも周りを気にしすぎて、やるべきことの優先順位が見えなくなる……』

クラマが怒鳴りつけた。

だが、それがとても親しげな意味を持っていることがわかったから、またうれしかった。

『今はオレたちの意思がどうのこうのと考えている場合じゃねえだろう！ お前の忍道とやらで、とつととここの奴らを救ってみやがれ!!』

食い殺さんばかりの迫力に、ナナは苦笑した。

「うん、ごめん」

クラマはそれ以上何も言わなかった。

そして……。

『忍たちも踏ん張ってはいたが、そろそろ限界だ。ナルトとサスケもだいぶ疲弊している。すぐに決着をつけろ！』

『いいか！　すぐにだぞ！』

『私たちはアナタの眼をまつすぐにみつめます』

皆が言った。

最後に、

『ナナ、お前がその力で決着をつけろ！』

クラマがそう言った。

その言葉にただ深くうなずくと同時に、景色は夜の空へと戻っていた。

「みんな、ありがとう……」

彼らに会えてよかった……。

そう思いながら、片手で印を結ぶ。

正面のオビトが懸命に抵抗し、眼下の仲間たちの勢いがだんだん弱まっているのが見えた。

ナルトとサスケも、先ほどよりも身にまとう光を減らしている。

万華鏡写輪眼……その眼で、尾獣たちを見た。

「シユカク、マタタビ、イソブ、ソングクウ、コクオウ、サイケン、チョウメイ、ギユウキ……クラマ」

もう一度、彼らの名を呼ぶ。

皆の眼が、瑠璃色に光る。

「ここ」ではチャクラの塊にしかすぎない彼らでも、こちらを向いてくれているのがわかった。

「ソコから出て、こつちへ来て！」

写輪眼よりも強い……万華鏡写輪眼の瞳力で幻術をかける。

イタチやサスケのようにすればよいと思っていたから、初めて使う眼でも戸惑うことはなかった。

力の解放と共に、眼から後頭部に突き抜けるような激しい痛みが発生する。と同時に、尾獣たちがビクンと反応したのがわかった。

胸に星を抱いた彼らは、今までで一番強い力で十尾から抜け出そうとする。

「みんな、頑張つて……！」

名を知って、語らった尾獣たち。そして、忍の仲間たち。……と、ナルト、サスケに向けて言った。

体中の力を空にするように、ナナは力を絞り出した。

クラマのチャクラを変えるよりも早く……。和泉の力と、うちの力を……。

ゆっくりと、視線をオビトに向けた。

どこを見ているのかわからない。ただ力任せにチャクラを保持しようとしているだけで、意識は半分どこかへやっっているように見え

た。

(きつと、ナルトが……)

尾獣たちの意識と共に現れなかったのならば、きつとナルトはオビトの意識の中に居る。

それがわかった。

(ナルト……その人を救うつもり……?)

あの光は、どんなに深い闇をも照らし出す。

ずっとそれを信じてきたから、彼が今、何をするのか理解できた。

(いくよ、ナルト……)

彼と心を合わせるように、そう告げた。同時に全ての力を吐き出す。

視界が大きくブレた。

強大なチャクラたちが、大気を揺らしている。熱くもあり、冷たくもある風が戦場を吹き抜けた。

忍たちが這わす「根」が、一斉に広がった。

『こつちだ！ シュカク！』

我愛羅の声が聞こえた。

それから……。

『ナナ……！』

サスケの想いも聞こえた気がした。

気がつくくと、戦場は水を打ったように静まり返っていた。

しかしそれも一瞬のことで、巻き起こる土煙とともに忍たちの大歓



声がそこに湧いた。

まっすぐ正面に浮いていたオビトは、操り人形の糸が切られたように真下に墜ちた。

彼の身に何があったのかは定かでない。カカシの友であったはずの彼が何故、ここでこうして、忍の敵として在るのかわからない。

だが、彼は『マダラ』としてイタチの真実を語った。サスケと自分を、絶望の底のその下まで突き落とした。

そうして、この絶望に染まる世界を終わらせようとした……。

その彼を、ナルトは殴り飛ばしただろうか。無理やり「ソコ」から引っ張り出しただろうか。熱い想いをぶつけて、以前の彼の想いを取り戻させたのだろうか。

それとも優しく手をとって、導いたのだろうか。

いずれにしても……。

うちはオビトは十尾の人柱力ではなくなった。

十尾という存在は消え、そこに囚われていた尾獣たちは解放された。

大地は歓喜に満ちていた。

勝利への喜び、安堵、忍としての誇り、そして……この世界への愛。赤いチャクラをまとった忍たちは、惜しげもなくそれを散りばめる。

この「現在」を、ナナは噛みしめた。

この世界は救われた。この世界はまだ続く。

たとえ絶望に染まり切った世界でも。まだ、続いていくのだ……。

その「先」を意識した瞬間、思考が弾けた。

そのまま何も考えられなくなって、身体を宙に投げ出した。

考える力などない。もう、身体を支える力もない。まともに呼吸を繰り返すことも、困難になっている。

これまでになく身体は冷え切っていた。

だから、吹き付ける夜風の冷たさも、もう感じなくなっていた。

## 流れ星

ナルトが呼んでいた。

仲間を信じる心を強く感じた。

だから、自分たちの力も信じられた。

ナルトから託された螺旋丸を、十尾の人柱力にぶつける。

それは頭で考えれば難しい芸当だっただろうが、身体は自然に動いた。

心が合わさった力は甚だ強く、人柱力が作る六道の盾をひと突きに貫いた。

ナルトとサスケも力を合わせて、盾の向こうの人柱力に槍を穿つ。すでにナルトの九尾と、須佐能乎とかいうサスケが操るものは、共通というより合体を遂げているように見えた。

敵対しつつも“友”であるという二人の凄まじい槍の先もまた、確かに敵対するものに届いた。

強大なチャクラが九つ、人柱力の身体から放出された。

まるで、ナルトとサスケのチャクラに呼応しているように見えた。それらが十尾に吸収されていた尾獣のチャクラで、ナルトの方に引き寄せられているということは、尾獣について詳しくは知らないシカマルにも理解できた。

七つのチャクラが、ナルトたちのチャクラ……スサノオから伸びた九尾の“尾”と繋がった。

他の二つの塊が弾かれたのもわかった。

その一つを我愛羅が引き寄せ、もう一つはビーがしっかりと掴んだ。

まるで綱引きだった。

地が揺らぐほどの、いや、空気さえもが大きく震えるくらい壮大な綱引きだ。

ふと気づけば、大樹の成長が止まっていた。

十尾の人柱力の方もおそらく必死だ……。

今まで余裕の表情を浮かべながら、忍たちを……あの歴代火影たちをも子供のように扱って来た十尾の人柱力が今、まさに、その力を繋ぎとめるギリギリの戦いをしている。

だが……。

それでも一度吸収したチャクラを引き寄せるほうが、引つ張り出す力よりも強かった。

徐々にナルトとサスケ、そして我愛羅とビーが引きずられていく。

「くそ……!!」

先ほどの螺旋丸でまだ息が切れていた。

が、思い切り悪態をついた。

となりでいのが、まだ地に手をつけて呼吸を整えている。チョウジは喘ぐように戦況を見つめるのが精いっぱいの様相だ。

「くそっ……」

ここまでできて……。

と、シカマルは再び悪態づく。そして何か方法はないかと再び頭を働かせる。

父はもう居ない。ここで自分が考えるしかない。

その責任を重荷に感じる暇など、とつくになくなっていた。

(考える……何かできることは……)

天を仰いだ。

暗い空に浮かぶ赤い月。

そこに。

「なんだ……?」

儂げに、だが美しく光る、星があつた。

「え……?」

シカマルは自分の目を疑った。

この暗い空に浮かぶにはあまりに明るく、それでいて青白い光は儂くも見える。

その『違和感』の正体をもうわかりきっていたから、目を疑ったのだ。

「ナナ……?」

眩きは、いのやチョウジには聞こえなかったようだ。が、自分自身の声が耳に入ると同時に膝が震えた。

あの星の正体がナナだと……シカマルは確信していた。

(ナナ……！)

目を凝らす。

例の綱引きの風圧で、しっかりと目を見開けない。砂塵も視界を奪う。

だが、この空には確かにナナが居た。

白い袴姿で、胸の前で印を結んでいる。

表情は見えない。

が、彼女がまとう空気はこの喧騒とは裏腹に静穏としていた。

「あれは!？」

誰かが叫んだ。

「誰だ?!」

「新手か?!」

「また穢土転生で蘇った者なのか?!」

いのとチョウジも気がついて、何か言っている。

が、ちゃんと耳には入らない。

周囲の脈絡のない動揺が、膝の震えを加速させる。

「シカマル、あれって……」

いのが恐る恐るといった様子で言うのが、ようやく耳の奥に届いた。

「ねえ、シカマル、あれってナナよね?」

激しく動揺する彼女もまた、ナナのことを良く知る仲間としての、あの姿がここに在ることを信じ得ないでいる。

「どうしてナナが……」

さらにチョウジが、彼にしてはずいぶんと早口で呟いた。

彼らに対する答えは無かった。何も応えられなかった。

「あれは、木ノ葉のいずみナナだ!!」

どこかで誰かが、確信を得たかのように叫んだ。

と同時に、一瞬だけ風が止んだ。

やっとまともにナナの姿を捉えることができた。

それはつまり、そこにナナがいることをこの目で認識することもあった。

「ナナ……」

彼女がどこを見ているのかわかった。

ナナはまっすぐに、あの引き合う尾獣たちのチャクラを見つめていた。

その眼の色……それが、地上からでもやけにはつきりと見えた。

青よりも暗く、瑠璃よりも明るく、この空の色によく似ていた。

当たり前だが、ナナの眼の色は漆黒だということは知っている。

ナナが木ノ葉を出る前夜、その目を間近でしっかりと見つめたのだ。闇より深い黒の瞳に、星が瞬いていたのを、しっかりと……。

だから、ナナの眼が青く煌めくはずはなかった。

「あの眼って……」

「あ、青いよ……?」

いのとチョウジも気がついた。

もちろん二人とも、ナナの眼があの色をしているところを見たことはなかった。

そこへ、さらに混乱を煽る誰かの叫び声……。

「あの眼は……しゃ、写輪眼だ……!」

反射的に声のした方を向く。

その言葉を発したのは、日向一族の者だった。

「ひ、ヒナタ……!」

いのが少し離れたところにいたヒナタに叫んだ。

「う、うん……」

先ほどの螺旋丸で消耗していたヒナタも、すぐに白眼を発動させる。

「ほ、ほんとだ……」

そして、細い声で呟いた。

「ナナちゃんの眼に……サスケ君の写輪眼と同じような模様が……」

写輪眼……。

その眼のことはシカマルも知っていた。

木ノ葉隠れの里の名門、うちは一族の者が開眼する特異な眼。

もちろん、サスケがその眼を持つことも知っている。

だから、和泉一族であるナナがその眼を得ることはないはずだった。

だが、ヒナタの言葉を疑う理由などどこにもないのだ。

何故、ナナが『写輪眼』を……。何故……？

そればかりが、頭の中を急速に回転する。

ナナ、お前はあんなになつてまで戦つてくれた。

海辺の戦場に駆けつけてくれた。

自分は絶望を抱えたまま、アスマのことを気遣つてくれた。

アスマと戦わされたオレらのことも。

金角と銀角の封印は、和泉の術を用いてまで成し遂げた。

そして、偽のマダラに死を与えられてもまた……こうしてここに来てくれた。

そんな見慣れない白い袴の姿をしたまま…… “そんな眼” で……。

まだ戦うのか？

世界のために？

みんなのために？

「ナナ……！」

呼びかけて、ナナに届く距離ではなかった。

吹き荒れる砂塵、そして忍びたちの喧騒も妨げとなっている。

だが、シカマルはもう一度叫んだ。

「ナナ!!」

どうしてお前は、そんなになつてまで戦うのか……と。

ナナはまるで彼の問いに答えるかのように、術を放った。

“何”の術なのかはわからない。

が、確実に何かナナの手から尾獣たちに向けて放たれたのを感じた。

それは強い光ではなかった。ナナの足もとに浮かぶ星と同じく、そこはかとなく儂げな光だった。

だが、それこそがナナの力だと思えた。

ナナの意志、ナナの想い、ナナの強さ……そう思えた。

「ナナ……」

深く深く傷ついて、救いようがなくなつて、絶望の奈落に引きずり込まれて……死を願つてもなお、戦うナナ。

決して消えない光だ。

涙がこみ上げた。

痛み……じゃない。

何か崇高なものを眼前にしたような、一種の感動だった。

「いのー！」

心の最深部が突き動かされたと同時に、身体が動いた。

「な、なに？ シカマル」

「力を貸してくれ!!」

すぐに、いのの術で戦場の忍たちに“声”を繋いでもらった。

言うべき言葉も、自然と流れ出た。

「みんな、聞いてくれ!!」

尾獣チャクラの“綱引き”への参戦を、シカマルは皆に呼びかけた。

「九尾のチャクラを纏つてるオレたちなら、尾獣チャクラを吸着できるはずだ！」

皆、すぐに走り出した。

とても他里の忍たちが入り混じっている場とは思えないほど、その行動がすぐに統制された。

「ナナ、オレたちも戦う……！」

シカマルはそう宣言して、チョウジらとともに最前列で綱引きを始める。

思った通り、尾獣チャクラに取り付くのは容易だった。

「ナルト！ 手を貸せつつったのはお前だ！ 手出しさせてもらうぜ！」

キバがそう言った。

四代目火影も、自らの九尾チャクラを伸ばして忍たちに掴ませる。

「よっしゃー!!」

ナルトが叫んだ。

「みんなあー! 『せーのオ』でいくつてばよ!!」

その号令と共に、皆の力が尾獣たちを引っ張り始める。

手元は重かった。

十尾の力はまだ強大で、気を抜けば自分まで引きずり込まれるような感覚を覚える。

が、確かな手ごたえを感じた。

その時。

『みんな……!』

声が降った。

『遅れてごめん……』

よく知っている声だ。

『でも、ちゃんと戦うから……! 私の全部の力を“この術”に懸けるから……! だからお願い、もう少しだけがんばって!』

夢げで、それでいて強い……。

『なるべく、尾獣たちにつけた“星”を意識して引っ張ってほしい』  
それは遥か遠くから響くのに、はつきりと聴こえた。

「ナナ……」

「ナナだ……」

「ナナ……!」

皆にも聞こえていた。

ゆっくりと、その声の主を見上げる。

『絶対に、十尾から尾獣たちを解放するから……!』  
星の輝きが増していた。

「ナナ……」

それでもやはり、胸は痛かった。

『遅れてごめん』……なんて言わなくてよかった。

『私の全部の力を“この術”に懸けるから……!』……なんて言っ



て欲しくなかった。

本当は、ナナはここへ来るはずじゃなかった。もう戦うはずじゃなかった。そんな必要は無かったはずだ。

“この術”の意味も……ナナを知っている者たちからしてみれば、悲しく響いた。

ナナが持つて生まれた“使命”。

いや、その命さえその“目的”のために存在していた。

ナナはそれを今、全力で成し遂げると言った。

もう戦わなくていいはずのナナが、呪いのようなその術に全てを懸けると言ったのだ。

『なるべく、尾獣たちにつけた“星”を意識して引っ張ってほしい』  
示された星はとても美しかった。

ごく平凡なこの目にも、尾獣たちの胸に浮かぶ星の印を見て取れる。

陰陽道のそれは『五芒星』というらしい。

ナナを、ナナの生を象徴する、美しくも儂げな星。憐れに……それでも強く光る星。

『絶対に、十尾から尾獣たちを解放するから……！』

ナナがその生とまっすぐに向き合っているのが、声から伝わった。ただそれだけが、シカマルにとって救いだった。

ペインの木ノ葉崩しの時、皆を守って戦ったときのような、あの悲しげな姿ではなかったから。

あの時よりさらに深い傷を負っているはずなのに、今はちゃんと、己の意思で皆を救おうとしている。

忍だけじゃない。尾獣たちも含めて。

(やっぱり、ナナはナナだった……)

漠然とそう思った。

その時。

「あ……」

ヒナタが息を呑んだのがわかった。

彼女は白眼でナナを見上げたままにいる。

「どうしたの?!」

いのの問いに……。

「ナナちゃんの……眼の様子が変わったの……」

そう応えると同時に、風がいつそう強く巻き起こった。

砂粒手が尾獣たちのほうから吹き付ける。

そして、手元の尾獣チャクラが明らかにこちらへ引き寄せられたのが実感できた。

「あとひといきだ!!」

「いつきに引っ張りましょう!!」

キバとリーが叫び、それに合わせて全身の力を込める。

忍たちにも伝わったのか、後方でもさらに力が強まるのがわかった。

地鳴りを上げて、ずりずりりと下がっていく。

我愛羅やビー、そしてナルトとサスケも、最後の力を振り絞っているようだった。

とても長い時間に思えた。

だが、結局のところは、ほんの数分の出来事だった。

チャクラの引っ張り合いは、ついに十尾から尾獣たちを引き抜く形で勝利する。

思いつきり尻もちをつき、さらに数十メートルも荒地を滑った。

チャクラの塊だった尾獣たちは解放され、それぞれの姿になって地に着いた。

九つもの巨体は、大地を大きく揺るがす。

が、同時にその規模に匹敵するほどの大きな歓声も上がった。

前方の十尾の人柱力……うちはオビトが、力を失って真逆さまに落下するのが見えた。

それを見届ける間も惜しむように、シカマルはあの星を探した。

「ナナ……!!」

オビトが堕ちてすぐ、その星も闇の空に掻き消えた。

そしてそこに居たナナの身体も、オビトと同様に宙から落ちる。

「ボクが行く!」

すぐに反応できたのはサイだった。

彼は自ら描いた鳥で、ナナを迎えに飛び立った。

「ナナー・よかった!!」

上空で無事にサイに受け止められたナナを見て、仲間たちは口々に安堵の言葉を吐きだした。

シカマルは何も言えなかった。

オビトとの戦いに勝ったのは事実だが、当然、戦争が終わったわけではない。

が、それだけではない気がした。

(これでナナの戦いは終わったのか……?)

力尽きたはずのナナを目にしても、何故か胸騒ぎが収まらない。

ナナの行く末から目を逸らすように、下を向いた。

足元にはまだ、土埃が蔓延していた。

シカマルはまた、胸に潜めたナナの額当てを片手で思い切り握りしめた。

## 冷たい肌

「ナナ……！ 大丈夫かい?!」

地上よりはるかに冷たい風が吹く上空で、サイはナナを抱き留めた。

その身体は「あの時」よりも、もっと、ずっと冷たかった。

仲間、想い、心……。

それが何であるのか具体的な形で見せつけられて、あの時のサイは変わりかけていた。自身の変化をはっきりと感じ取って、少し戸惑ってもいた。

だが、抵抗する気は起きなかった。

今までの価値観が大きく揺らいでいても、何故だか心地がよくなっていた。

「姉」との再戦に発ったナナの援護、および救出……それを火影から命じられたのはそんな頃だった。

ナナを見つけたのは、同じ任を受けたヤマトやサクラではなく、サイだった。

そこはナルトとサスケが以前戦ったという、『終末の谷』の滝の側だった。

「死んで蘇った実の姉」という理解し難い敵と戦ったナナは、ちゃんと生きていた。

丁度決着がついたタイミングだったようで、湿った岩場に倒れこむナナを間一髪で抱き留めた。

一瞬で彼の芯をも凍らすほど、ナナの身体は冷え切っていた。

全身に滝の飛沫を浴びていたからでないことくらい、彼にもわかった。

流れる血などないかのごとく、まるで死人のようで……。顔はますます青白く、呼吸も限りなく浅い。

あと数秒もすれば、絶える命……それを抱えているような恐怖を感じた。

感情など良く知らなかったのに、自然と、確かに、恐怖を覚えた。それを今でもはつきりと思い出せる。

今は……あの時よりもずっと強く恐怖を感じている。

もう言葉にして他者に説明ができるほど理解した、恐怖という感情。

それが、じわりじわりと肌の上を這いずり回る。

「ナナ!!」

あの時より強く呼びかけた。

「ナナ!!.. しっかり!!」

ナナはすぐに、目を開けた。

「……サイ……」

弱い笑みは、あの頃のまま。

「ナナ……」

言うべき言葉が見つからなかった。

この窮地を救ってくれた札なのか、無事であったことへの安堵か、力を使い果たしたことへの心配なのか……。

口ごもったのは、初めてだった。

「大丈夫……だよ……」

臆病な声を慰めるかのように、ナナはあの時と同じことを言った。

「す、すぐにサクラのところへ……!」

やっと出た適切な台詞の欠片だった。

だがそれを、ナナはなやかに拒絶する。

「いいの、サイ……。医療忍術じゃ……。回復……。しないから……」

ナナは少し笑んでいた。

氷のような身体で、死人のような顔色で、この冷たい夜風の中。

「知ってる……でしよう……?」

再び言葉を失った。

ナナという存在。それは『根』に居た頃から聞かされていた。

あそこに所属する者たちは、ダンゾウによって里の重要機密をも知らされている。

それはダンゾウの何があっても木ノ葉隠れの里を守るといふ考え

からだった。

その点では、ダンゾウのしていたことの意味も理解できた。

ナナはダンゾウから、九尾から里を守る「最後の砦」のような存在として示されていたのだった。

それが初めて会った時には、ひどく顔色の悪い小さな少女に見えて拍子抜けした。

和泉一族の末裔ということであれこれ想像はしていたものの、その中のどれにも当てはまりはしなかった。

ナナは弱く見えた。

何かに打ちのめされたような、何かを諦めたような……少なくとも『根』で聞かされていた印象とはかけ離れていた。

サイにとつて「いずみナナ」という存在は、人として最高位の血をひき、忍には理解し難いような禁術を扱う、それはそれは尊く哀れな存在だった。

だが、それほど一緒に過ごした時間は無いというのに、ナナに対する感情は変わった。

いや、ナナに対する感情を知った。

ナナは強い。

サイが知り得る者たちの中で、最も強い存在となった。

ナナの本質は、ナルトやサクラのほうが良く理解しているに違いない。

だが、より客観的にナナを見ていたからこそ、その強さをしっかりと受け止められているように感じられた。

ナナはどんなに傷ついてボロボロになっても戦った。逃げようとしながらも、逃げきれずに結局は戦った。

姉との戦いも。イタチとサスケの戦いへも。サスケへの感情にも。イタチという人への感情にも。

ダンゾウに囚われながらも。ペインの木の葉崩しの時も。

感情を知れば知るほど、ナナの絶望を理解できるようになって……それはとても強い痛みを知ることとなった。

感情というものを学ぶにつれ、ナナの心を見つめているような感覚

だった。

だから。

「ナナ……じゃあ、サスケのところへ……」

そう口にした。

サスケが「置いて来た」と言ったナナが、ここへ来た。

二人に何があつてそうなったのかは知らないが、ただ、ナナの心が求めるものを間違うつもりはなかった。

が……。

「……いいの」

ナナはかすかに首を振った。

「サスケとは……もう……話をしたから……」

視線は宙を向いていた。

「でも……」

「ありがとう……」

自分の直感が正しいと思う根拠を述べる前に、ナナは礼を言った。それは本当の拒絶だった。

「お願い、サイ……」

そして、望みを口にした。

「シカマルのところへ……」

わずかな違和感を覚えた。

が、ナナが挙げた名がナナを想う仲間の名前だったことには安堵した。

「シカマル……ここに、いるよね……?」

「うん、すぐに連れて行くよ」

速やかに鳥を降下させた。

冷たい風がナナの氷の肌を切り裂かないよう、急ぎつつもゆっくり旋回しながら。

きつと、この冷えた身体はシカマルが護るはずだ。そう思えた。

少しだけナナを抱く腕に力がこもった時、ナナは呟いた。

「サイ……、今まで、何度も助けに来てくれて、ありがとう……」

途切れ途切れのかすれた声。

「姉と戦った時も、ダンゾウに捕まっていたときも……サイが、助けに来てくれたんだよね……」

もう一度、ナナの眼を覗いた。

さつきまで青く、そして今は漆黒の双眸。

それが、か弱く煌めいた。

「ボクには……」

言葉を選びながら、でも思ったことを返した。

「そういう役目があるのかもしれないね」

自分で言ってみて、不思議と嬉しかった。自然と笑っていた。

ナナも、かすかに笑ってくれた。

その頬に、ほんの少しだけ赤みが戻ったように見えた。



## 依頼

最初、サクラのいる方角へ向かおうとしたサイの鳥は、すぐに向きを変えて旋回しながら降りて来た。

そう……シカマルの方へ。

それは彼にとつて、全くの想定外だった。

ナナが向かう場所は当然、医療忍者であるサクラのところだと思つた。たとえナナに意識がなかったとしても、サイが連れて行くはずだった。

が、そうはならなかった。

サクラのところで回復するのではないならば……、やはりサスケの元へと行くはずだった。

サスケが「置いて来た」はずなのに、ナナはこの戦場に現れて皆を救つた。

だから、二人の間にあつたはずの「別れ」のその「続き」を話すことが必然と思えた。

が、そうもならなかった。

ナナは目の前に現れた。

ナナを抱きかかえたサイが、その身体をこちらに預ける。

触れた身体は、布越しであってもとても生きている人間とは思えないほど冷たかった。

「シカマル、ナナを頼んだよ。ボクはナルトと、本物のマダラの封印へ……！」

「あ、ああ……気を付けろよ」

動揺していたから、慌ただしく次の任へと発つたサイに対して気の抜けた返答しかできなかった。

本当に、腕の中にいるモノが生き物なのかどうか、彼の知識が現実を受け止めることを邪魔していたのだ。

「シカマル……」

紫色の唇が動いた。

「ナナ！」

いのやチヨウジが、まっさきに声をかける。

「よく来てくれたわ！」

「お前のおかげで助かったぜ！」

キバも、ヒナタやシノでさえも、再会の喜びを素直に表している。

だが、シカマルはナナが懸命に身を起しても、それを手伝うどころか声もあげられずにいた。

「ナナ、身体は大丈夫なのか？」

「見たところ、だいぶ弱っているようだ」

「少しだけど、私が回復させるわ！」

「いいの……大丈夫。この状態は、医療忍術じや、ダメだから……」

ナナは皆に弱い笑みを返しながら、シカマルの正面に向き直った。

「それより……」

ナナの呼吸は限りなく浅かった。

あれだけの大術を成したばかりで激しく疲労しているはずなのに、息を切らすこともできないくらいに衰弱しているようだ……。

まるでナナの言葉を聞くことを躊躇うかのように、シカマルはただナナの姿を見ていた。

「シカマル……」

かすれた声に、背筋がゾクリとした。

「お願いが……あるの……」

ナナがそう言いながら懐から何かを出すのが、やけにスローで見えていた。

「これ……」

差し出されたのは漆塗りの短刀だった。

それを目にした途端、その刃を突き付けられたかのように悪寒の波に襲われた。

「ナナ……っ？」

その刀が何を意味するのか……ナナが答えを口にするのを止めたかった。  
が……。

「これで……私を……刺して……」

ナナは弱々しくもきつぱりと言った。

「な、何言ってるのよ!」

「なんでお前を刺さなくちゃいけないーんだ!」

一拍の後……、最初に反応したのはやはり、周囲の仲間たちだった。シカマルはただ、ナナの視線に囚われたように固まっていた。

「お願い……シカマル……」

ナナはキバやいのの声に応えず、ただシカマルを見つめる。

「アナタにしか……頼めない……」

ゴクリと唾を呑みこんだ。

このままでは、ナナの幻術にかかってその要求を受け入れてしまいそうだった。

「ナナ……」

ざわめく胸を押さえつけ、無理やり喉をこじ開けた。

「な、なんでそんなこと言い出すんだよ……!」

ひどく単純な台詞だった。

ナナの表情は変わらない。

「アナタなら、わかってくれるはず……」

しかし、その声はだんだんと強さを増していった。

「私は、『ゴゴ』にいちやいけないうってこと……」

反して、シカマルは全身の力が削がれていくのを感じる。

「シカマル……わかってるでしょう……?」

ナナの口調はまるでこちらの全てを責めるようだった。

その不可解さを感じ取ったのか、いのやキバたちは黙り込んだ。ただ息をひそめて二人のやり取りを見守っている。

「さつき……、『写輪眼』……見たよね……?」

ナナはここで小さく咳き込んだ。

それでも、淡々と冷めた言葉を繋いでいく。

「私は……和泉一族の血と、うちの血を引いてる……。」

ナナの漆黒の瞳は、今にも碧く光りそうに思えた。そしてナナは唐突にもつと過去の話をし始めた。

「シカマル、あの浜辺でのこと覚えてる……？ 私”が、偽物のマダラに言われた言葉……」

ナナに問われなくても、あの時からずっと耳の奥にこびりついて離れない。

『面のマダラ』がナナの身体を刀で貫いて、言った言葉……。

『お前に用はない』……て、言ってたでしょう？』

ナナは自らそれを蘇らせる。

「あの時の”私”は、”もうひとりの私”だったから……。だから必要なかった」

そこまで、ナナ本人が言わなくともわかっている。

おそらくは、いのたちもナナの要求の意味がわかりかけているだろう。

「でも、今のこの”私”には特別なチカラがある……。それを、マダラはずつと前から狙っていた……」

たまらず、ナナから目を逸らした。

「ねえ、シカマル。私は……『和泉成葉』の生まれ変わりじゃなかった……」

ナナが語る”真実”はまだ、彼の中では幻だった。

「私……本当は、和泉成葉の”子供”の生まれ変わりだったの。……父は、うちは一族の人間だったって……」

本人さえもまだ他人事のように話すその”真実”と、どうして向き合えようか。

「そのことは誰も知らなかった。もちろん私自身も……。それに、和泉の一族や本家の両親でさえ知らなかった。知っていたのは……」

彼はとうとう、逸らした目をつむった。

『和泉成葉』じゃなく、『和泉成葉の子供』を転生させようと仕向けた、”うちはマダラ”だけ……」

いのたちが言った。

そんなことはひどすぎる……だの、あまりに勝手だ……だの。

だがシカマルは、憤りを感じることもできなかつた。

何故なら、脳はとづくに「そんな感情を抱いている場合ではない」という指示を出してしまっている。

「シカマル」

たったひとり、何の感情も示さなかつた自分に、ナナはさらに熱のこもった声で告げる。

「もう、気づいてるよね？ あの人は……最初から私を利用するつもりで、私をつくり出した……」

「最初から」という単語が、むなしく鼓膜に張り付いた。「つくり出した」という言葉に戦慄した。

「そんな人が、いつまでも私を放っておくはずないよね……？」

まるで「脅し」だった。これから訪れる凶事を予言しているかのようだった。

「ちよ、ちよと待ってよ、ナナ！ あんたが言う『うちはマダラ』って、あの面の男でしょう？ あれは偽者のマダラだったのよ！」

ここでやつと、呪縛から放たれたように周囲が動きを取り戻す。

「そ、そうだよ！ あの時ナナを脅したのは偽者のマダラで、そいつが十尾の人柱力になったから、ええと……ほら！ 今みんなで倒したんじゃないか！」

「なんだよ、そういうことかよ!! じゃあ、お前を狙つてつたヤツはもう虫の息ってことだな！ もう利用される心配はねーぜ！」

「確かにもう安全だ。何故なら、尾獣を抜かれた人柱力は、やがて死ぬと聞いている」

「す、すでにカカシ先生が拘束しているみたいだよ」

仲間たちはやけに明るい声で言った。赤丸までも、大きく吠える。

彼らの身にも、これまでのナナの「予言」は得体の知れない黒い霧のようにまとわりついていたようだった。

が、シカマルの肌にはびこるそれは、とても拭いきれるものではなかつた。

ナナの視線が、ナナの言葉が、そして自身の思考が……身体を冷たくきつく縛り付けている。

「シカマル……」

ナナは、いのたちの言葉を肯定も否定もしなかった。ただただ、シカマルを見つめている。

その目は、睨みつけているかのように鋭かった。

「本物のマダラも……、か……」

思わずこぼれ出た。

ナナの視線に答えを促されていた。

そのため息のようなつぶやきに、またも仲間たちが反応する。

「本物のマダラもって、どういうこと？」

「本物のマダラも、ナナのことを狙ってたつてのによよ!!」

ナナは相変わらぬ姿勢だった。

まっすぐシカマルだけを見て、何かを待っている。

「この戦争は……初めから、偽のマダラ……つまり『うちはオビト』と、本物の『うちはマダラ』が計画していたことが、さっきまでのあいっらのやり取りでわかったら……」

仲間たちにその答えを告げていても、ナナの方を向けなかった。

「本物のうちはマダラが死んだ後も、オビトってやつは偽のマダラとして、本物のマダラの計画を続けていたんだ。だから……おそらく、ナナのこと……」

ナナのことも計画の内に……と、全部を口にすることはとてもできなかった。

「じゃ、じゃあ、本物のマダラも倒せばいいんじゃないか!」

「ナルト君が、もう向かってるよ……!」

「全員でかかればきつと倒せるわよ!」

「ボクたちも行く!!」

希望の欠片を持つ者たちは、そう言った。すぐにでもマダラの元へと駆けだそうとしていた。

彼らの言葉に何の不自然さもないことは、シカマルにもわかってた。

だが、彼らと同じ希望を持つことはできなかった。

「そんな余裕なんてないことを、もうわかってるんだよね? シカマ

ル」

それを見透かす、漆黒の眼。

「ど、どういうことなの？ ナナ……！」

「あいつを倒せば、お前は安全なんだろう?!」

いのやキバたちのように、むきになってナナに言いよりたかった。笑い飛ばしたかった。

いや、突っかかりたかった。

が、冷静な思考を絶えず心がけてきたおかげで、もう一人の自分がそれを制止する。

「イタチが死んだとき……」

ナナは誰に告げるともわからない抑揚で声を滑り込ませた。

「私は面のマダラと会っていた。ずっと一緒にいたのに、私はずっと無防備だったはずなのに……あの人は、サスケと別れた私を引き止めることもなかった……」

零れ落ちる辛い記憶に、砂塵も立ち消えた。

「私が必要なら……あのまま拘束することができたはずなのに、そうしなかった」

シカマルはうなだれた。

「それって…… 〴〵いつでも私を捕まえられる方法がある〴〵 ってことだよね……？」

そう……それが彼の中に浮かぶ忌々しい答えだ。

「最初から私を利用するつもりでつくり出して、この戦争でこのまま利用せずに終わるはずがないよね……？」

わざわざナナ自身が口にしなくとも、とつくにわかりきっているのだ。

「だ、だから、あのマダラはもう……！」

当然、周りは反論を繰り返す。

が、ナナはほんの少しも表情を変えずに告げた。

「二人が計画していたんだから、二人とも 〴〵その方法〴〵を知ってるはず……。そうでしょう？ シカマル……」

同意を求められることが辛かった。

「本物のマダラもきつと、私を手に入れる方法を知ってる。ていうより、本物のほうがオビトっていうひとに教えたんだと思う……。だから、それをしないままやられちゃうなんてありえないよね……。？」  
染み入るような、ナナの言葉。

うなずいてしまうのを、理性で止める。

「オビトっていうひととはもう、〃その気〃がないかもしれないけど……。でも本物のマダラの方は、ナルトにやられる前に、きつと私のチカラを使うはず……」

ついに、いのたちも黙りこくった。

ナナの言っていることが、彼女らには半分〃屁理屈〃に聞こえてくるだろう。

だが、ナナの纏う空気が全てを〃真実〃だと証明しているようだった。

「私の中にあるチカラは……絶対に表に出ちやいけないもの……」

ナナはいつそう強い視線をシカマルに向けた。

「この眼を開眼したときに、見えちゃったから……！」

無理やり引き寄せられるように、その眼を見た。

血の気のない顔に、目だけが血走っている。

「あまりに強すぎて、どうしようもできないの！」

ナナは感情を加速させる。

シカマルのそれが、ますます追いつけないほどに。

「こんなチカラがあるなんて……知らなかった……！」

必死……だった。

ナナの懇願が、確かにこの場を威圧していた。

その迫力に、いのたちももう口を挟めずに突っ立っている。

「見て、シカマル……」

わずかに声を和らげ、ナナは短刀を抜いた。

一度も使われない真新しい刃が、ナナの顔の前で煌めいた。

「これ、特別な術がかかっている刀なの。これで刺せば魂が封印されて、二度と転生することはないから……」

いい加減、自分を〃モノ〃のように言うのは止めて欲しいと、吐き



出したかった。

「だから、この先も誰かに利用されることはなくなる……」  
が、まだ声を出すことができない。

「このチカラも、もう誰にも呼び覚まされることはない……」  
それがナナの切なる願いということは痛いほどにわかった。

自分の内なるチカラが悪に利用される……。それを恐れ、必死で抵抗することは当然だった。

忍であれば、ほとんどの者がその考えだ。

実際、敵に捕らわれた場合は情報提供者として利用されないために、自ら命を絶つことが鉄則である。

まだ火影からそんな任務を仰せつかったことはないが、忍である以上、それが常識だと疑っていない。

ナナであれば、そう思うのもなおさらだった。

ナナはどの血族より優秀な和泉一族の血を引いている。そして血継限界であるうちは一族の血も……。

その特殊性ゆえ、ナナは取り乱しそうなほどに強い怖れを抱いている。

「シカマル……アナタは私を許してくれた……」

ナナの瞳が、あの時と同じように揺らめいた。

「だから、アナタにしか頼めない……」

いや、覚悟の光がそこに浮かぶ。

「アナタを苦しめることになって、本当にごめん……。でも……本当にもう、アナタにしか頼めないの……！」

そして、綺麗な涙も。

「ま、待って！ ナナ！」

「ちよつと落ち着けて!!」

ナナの声色が穏やかになったところで、いのとキバがやつと二人の間に割り込んだ。

「そんなのぜったいダメよ！」

「何か他に方法があるはずだ！ マダラを倒すまでどつか結界に入っておくとか……」

「それで大丈夫だったら、和泉の里に帰ってる」

ナナが初めて、周りの意見に応えた。

不意をつかれて、いのとキバは反射的に口をつぐむ。

「私が和泉の里に暮らしていたとしても、いつかは利用するつもりだったはず……。だとしたら……」

皆が、息をのむ。

「和泉の結界でさえ、隠れられないってことだから……」

諦めの台詞だった。

が、ナナ本人は失望した様子は見せなかった。  
ただ。

「もう、足掻いてもダメなの……。これしか思いつかないし、もう時間がない……」

成すべきことだけを、すらすらと口にする。

「お願い！ シカマル！」

まるで彼らを責め立てるように。

「アナタに頼むしかないの……！ ほら、見て！」

ナナはおもむろに、両手で刀を握りしめた。

刃の切っ先は、己の胸を向いている。

「お、おい！」

「ナナ?!」

誰かが止める間もないまま、ナナは何の躊躇もなく、その刃を自身に突き立てた。

キン……

耳を、やけに澄んだ高音が劈いた。

「え?」

「どういうこと……?」

ナナの行為は驚くほどためらいがなかった。その両手の勢いも迷いも恐れも感じさせない、清々しいほどに力が籠っていた。

が、ナナの白い着物は、赤く染まりはしなかった。

「刃が、止まった……」

シカマルは呟いた。

「星が……」

彼にははつきりと見えたのだ。刃を受け止める、青白い星の印が。先ほど宙に浮かんだのと同じ星が。

「自分じゃ駄目だった……」

彼らの惑いを全て無視して、ナナは言った。

「自分じゃ始末をつけられないように、私は誰かの術にかけられていたの……。だから……」

また、自分を粗末に扱う台詞を言いながら、ナナはシカマルの手に刀を握らせた。

「お願い、シカマル！ アナタが終わらせて……！」

まだ冷たい肌が触れ、恐怖すら湧いた。

このただでさえ儂い存在を、永遠にこの世から消せと言うのか？  
この手で……。

「お願い、シカマル！ 私……自分のチカラでみんなを傷つけるなんて嫌なの……！ 壊したくないの……！ だからっ……！」

彼は歯を食いしばった。この理不尽さに腹が立った。己の無力さが恨めしかった。

「もう時間がない……。お願い！ シカマル！」

何度も願いを零すナナの唇を、塞いでしまったかった。

「シカマル……」

何を言うこともできない彼に、ナナは一呼吸おいて言った。

「私を……救って……」

その眼に、声に、口元に……少しも後悔はなかった。悔いも恨みも、何もなかった。

ただあるのは、焦りと怖れ……そして、決意。

「ナナ……」

それを確かめて、シカマルは柄を握りなおした。

ナナは少しほっとした表情で、姿勢を正す。

「シカマル……」

ああ……、こんなにも穏やかなナナの表情を見たのは、いつ以来だろう……。

漫然とそう思った。

そしてそれがとてつもなく理不尽なことだと、すぐさま思い直した。

「でっ……い！」

ナナの表情が崩れる。

が、噛み付くように叫んだ。

「できるわけねーだろ!!」

怒りがあつた。

二人の『マダラ』への確かな怒りも、こんな世界への漠然とした怒りも、ナナ自身へのむき出しの怒りも……。

「シカマル……い！」

「たとえ次の手で詰んだとしても、お前が死ぬ理由にはならねー!!」

ナナにも怒りがあつた。絶望に絡みつく、明け透けな怒りが。

「お前を利用しようとするヤツらはオレらが倒す！ 今、ナルトやサスケも戦ってる！ もう一度だけ信じろ!!」

「もう一度だけ」と、思わずそう言った。

何度も絶望を見たはずのナナだから、祈りを込めるようにそう言った。

ナナは押し黙った。

暗い目で、こちらを見ながら……。

「え……」

その眼が碧く光った。

冷たく、鋭く……。

そして。

「なっ……」

息が止まった。いや、心臓が止まった気がした。

当然、脳も停止する。

……。  
ナナの顔が見えない。視界が暗い。誰の声も聞こえない。喧騒も  
ただひとり、暗くて寒い場所に立っている。いや、赤くて熱い地に  
立っている。

そこで“満足”している。

それは自分のものではない。

極寒の氷の世界、マグマが流れる灼熱地獄……。それらを“作り出  
した本人”の感情だ。

「シカマル……！」

ふと我に返った。

陰の光景も感情も一瞬にしてかき消され、物騒な世界に舞い戻る。

「シカマル……！」

目の前にいるのはナナだ。

黒い瞳の。

そのナナが、こちらにそつと手を伸ばす。

「……っ……！」

反射的に、それから逃れるように身を引いた。

「え……？」

小さく声を上げたのは自分自身だ。

「ちよ、ちよつとシカマル！」

「どうしたのよ?!」

周りの声がやけに遠くから聞こえる。

一体どうしたのか……。今、一瞬何が起こったのか……。

懸命に状態を分析する。

「シカマル。私が怖い？」

それを遮るようにナナは乾いた声で言った。

「え……？」

「怖いでしょう？ 私の“未来”」

ミライ……。とは何のことだったか。

今さつき見せられたそれが“未来”だということか……？

「ナナ……！」

だとしても、その記憶はもうどこにもなかった。  
思い出そうとしても、何も浮かんでは来ない。  
まるで、本能がそれを封印してしまったかのように……。

「お、お前……、幻術を……」

無理矢理喉をこじ開けた。

そのおかげで脳が少し働いた。

ナナは幻術を見せたのだ。恐ろしい幻術を……。

だから、そう……この得体の知れない恐怖はナナが作り出したものでしかない。そのはずだ。

「ナナー！」

そう言い返そうとした時、ナナの身体がグラリと傾いた。

いのが支えようとするが、何故だか彼女も手を引つ込めた。

ナナが乱れた前髪の影から、血走った目をこちらに向けていた。

「アレは幻術なんかじゃない……！ 真実なの！ 必ず来る未来なの……！」

(だったら……!!)

その台詞が滑稽すぎて、また脳が動いた。

そうだ。ナナは自身のチカラに怯えるあまり、妄想を膨らませてしまっているだけなのだ。

思いがけない出生の秘密と、思いもよらないチカラに慄いて、考えが悪い方向へと一直線に向かっているだけだ。ものすごい加速度で。  
だから……。

「シカマル……！」

ナナは肩で息をしている。

今の幻術で写輪眼を使い、もう身体は限界なのだ。

だから……。だったら……。だとしたら……。何故？  
(なんでオレに幻術をかけて殺させなかった？)

本気ならばそうしたはずだ。

今の幻術で妄想を見せることに最後の力を振り絞るくらいなら、目的のために有無を言わずこちらの身体をコントロールしてしまえばよかったのだ。

何故、それをしなかった……？

「ナナ、お前……」

本気じゃなかった……。

そう考えられれば楽だった。

取り乱してただけだとだめて、大丈夫だからそんなことするなと笑い飛ばして、あの短刀を鞘に収めればよかった。

そして、ここにいる仲間たちと協力して、ナナをどこか遠くへ……。だが、そんなものではないと気づいてしまっている。

ナナを見てきた。だからわかる。

ナナはほんの一粒の「納得」をくれようとしたのだ。

幻術をかけて自分を殺させれば、ナナの目的は否応なしに果たされるだろうが、それでは誰も納得しない。血まみれの自分がただ傷つくだけ。見ていた仲間たちも混乱するだけ。

が、確かな理由を突きつければ……。それが「真実」と説得できたならば……。

傷つくのは同じこと。混乱も避けられない。

だがそれでも、ただ幻術をかけて目的を果たすよりは一粒だけでも「納得」する可能性を握らせることができる……。

ナナはそう思ったのだ。

(バカヤロウ……！)

そうまでして……。

ナナは取り乱してなどいかなかった。ただ怯えているだけでもなかった。

ナナはここにいて誰より冷静なのだ。全てわかったうえでの言動と行動なのだ。

それしか選択肢はないと……。

ここへ来るまでに決めていたのだろう。

夜空で綺麗な星となっていたあの時も。皆に力強く声を飛ばしたあの時も。

「ナナ……」

脳が割れるほど奥歯を強く噛みしめた。

そして、差し出された短刀を手に取った。

「ちよ、ちよつとシカマル……!」

いのたちが制止する。

が、彼女たちも戸惑いに揺さぶられ、行動に移せはしなかった。

「シカマル、アナタがこれを罪に思わないで……。アナタはこの世界を守るし、私を救ってくれるんだから……」

ナナの言葉は甘いささやきだった。天から降るような、慈悲に満ちた言葉だった。

手が震えた。息が苦しかった。頭が痺れた。

もうすでに、この事態を回避する作戦を練ることなどできなくなっていた。

こんな時に限ってちつとも働かない唯一の取り柄である頭脳を恨めしく思った。

「どうしても……変えられねえのか……?」

足掻きは無駄だった。

「初めから、決められていたことだから」

仲間たちはまだ何か言っている。

が、耳には入らなかった。

「何か、方法が……」

「本当に、これしか思いつかなかったの」

シカマルにはもう、ナナの声しか聞こえない。

「こんなんじや……お前は……!」

「シカマル……『変えられなかった』んじやなくて、私はこうして運命を『変える』んだよ」

ナナは笑った。

自分を誇らしく思えて……。それが幸せだとでもいうように。

「アナタに背負わせてごめん……。でも、私は諦めたわけじゃない……」

「これが……お前の戦いなのか……?」

「うん」

ナナの周囲の景色は、もう視界の中でぼやけたようだった。



「ナナ……」

もう一度、刀を握り直した。

「ありがとう、シカマル……」

ナナの着物の襟から、白い喉がむき出しになった。

視界が揺れるほど歯を食いしばって、柄を握る手に力を込めた。

瞼を閉じる。

心の中は目も当てられないほど混乱している。頭の中も、ハチの巣をつついたような大騒ぎだ。

だが、もう考える暇は与えられない。

理性が、勘が、思考が……体中の全てが、ナナの言葉に『納得』してしまっている。その予感に抗う武器を、どうしても見つけられないでいる。

「ナナ……、オレはっ……！」

「わかってる……」

ナナの声だけが、耳に届いた。

「ありがとう、シカマル……」

それはまるで呪文のように、彼を動かした。

「くそっ……!!」

腕を引いた。

ナナの顔は見られなかった。

その痩せた肩を左手で掴んで……シカマルは刃の切っ先をナナに向けた。

「くそっ!!」

そして身体の奥底にこびりついた力をめいっぱい引きずり出し、刃を突き立てた。

## 天秤

乾いた音を立てて刃が刺さる。

その固い感触に手が痺れた。

ゆっくりと目を開いた。

刃の切っ先に、静かに、ゆっくりと、光が集まっている。まるで、地面を滑るようにして……。

やがてその青白い光は、刃に吸い込まれるように消えた。

「シカマル……」

かすれた声が耳に入る。

のろのろと顔を上げた。

ナナの目は、半分近くまで地面に突き刺さった刀を見ていた。

「どう……して……？」

その視線が驚愕から失望に変わると同時に、ナナはシカマルの目を見た。

「どうして……」

うつすらと浮かぶ涙。

だが、彼はそれをねめつけた。

「できるわけねーだろ!!」

自分の声が頭蓋に響く。

「お前を殺すなんて……オレにできるわけねーだろ!!」

ナナの目が見開いた。

綺麗な黒檀だった。

驚愕も失望も、そして困惑もないまぜにした視線。

それでも、ナナの瞳は綺麗だった。

だから、彼は目を逸らした。

「わかってるさ……」

まだ刀を握る手が震える。

「お前の予測も、お前が恐れてることも……。お前が言うように、オレにもわかってる……!」

喉が潰れそうだった。胸が張り裂けそうだった。

ナナからにじみ出る絶望に吸い込まれそうな、そんな錯覚すら覚える。

だが、絞り出すように彼は言った。

「けどな……オレにはできねーんだ……!」

ナナが息をついた。それはかすかに震えている。

「たとえこの選択が世界を滅ぼすとしても……」

それでもナナが何も言わずに聞いてくれているのが唯一の救いだった。

だから、もう一度ナナの目を見つめて言った。

「お前と世界をハカリにかけても、お前を選んじまうほどオレは……」

確かな「理由」を……。

「そんなくらい、オレはお前に惚れてんだ……!」

ナナの唇が、ほんのわずかに動いた。

「シカマル……」

胸が詰まった。

決して伝えるべき思いではなかった。そんなつもりは全く無かった。

世界を守るための戦いをしてきて、そのために多くの犠牲も払ってきた。

それが、ここへきて世界が滅んでもいいという思考に至ったことは、正直、自分でも意外だった。

たとえば何があるうとも世界を救うために戦うのだ……そのために尽くすのだ……それが、自分の与えられた役割ということを、十分自覚していた。

父もそれを期待していたし、あるいは五影たちもそうであると自負している。

元を辿れば、アスマの思いがそうだったはずだ……。

が、それでもおそらく「正しい」と思われる道を選べなかった。そ

れが現実だった。

気づけば、自分の『影』のように、いつも足元に纏わりついていた  
想い……。生涯『影』のままで終わるはずの想い。

それが『理由』で、『答え』だった。

だから、吐き出すしかなかった。

涙をこらえた。

無念、無力。

心に文字を描くなら、『無』の字がそこを埋め尽くしているだろ  
う。

ナナを救えなかった。

絶望に墜ちたナナを……。それでも必死で自分の足で立っているナ  
ナを、どうしてやることもできない自分が呪わしい。

「シカマル……」

とうとう目じりが熱くなった時、柄を握った右手を、ナナの手が包  
み込んだ。

「ナナ……すまねえっ……」

やっと、それだけ言った。

顔を上げることなどできなかった。

もう、ナナの目に浮かぶ失望に耐えられそうにない。

「シカマル、ごめん……ごめんね……」

聞こえて来るのは、涙声。

「こんなにアナタを苦しめて、本当に……ごめんなさい……！」

ナナの手は、相変わらず氷のように冷たかった。

が、そこから伝わるのは、初めての何も飾らない想いのような気が  
した。

忍としての義務も、与えられた使命も、ナナ自身の意志も……全て  
を取っ払った、本物の想いだった。

「シカマル……」

やっと聞けたそれに応えるように、シカマルは顔を上げた。

ナナは雫を零しながらかすかに言った。

「ありがとう……」

少しだけ、手を強く握られた。

それはほんの一瞬だった。

細い指の先から想いを滲ませて、そして……シカマルの手からそつと刀を奪い取った。

「ナナ……」

ナナは唇を噛みしめながら、落ちていた鞘に刃を収める。

その姿はもう、いつもの『鎧』をまとっていた。

使命や意志という名の、『鎧』を……。

「ナナ……?」

「お、おい……」

ナナはゆつくりと立ち上がって、よろめいた。

慌てて手を差し伸べるいのやキバを制して、静かに笑う。

「ごめん、大丈夫」

そして、困惑を露わにした彼らに言った。

「みんなも、ごめんね……」

突然、この場に相応しくない風が吹き抜けたようだった。

シカマルは、呆けたように押し黙る仲間たちを見回した。

彼らの心境はよくわかる。ナナのあまりに強い決心と、シカマルが吐露したむき出しの想いに、彼らは圧倒されていた。

だから、再び立ち上がったナナを止めることもできない……。

「今まで、ありがとう……」

ナナは彼らにそう言った。

そこでようやく、仲間たちは声を発す。

「ちよ、ちよつとナナ……?」

「ど、どこに行くんだよ……?」

「ナナちゃん……?」

這い上がる不安……。

シカマルも再びそれを感じる。

それを知ってか知らずか、ナナはやけに明るい口調で言った。

「他の里の人なら、きつと……」

そして全員がその意味を理解する前に、ナナは背を向けた。

「ナナ!!」

「待ってよー!」

いのたちが手を伸ばした。

ナナの肩はそれをすり抜けた。

が、その場から消えはしなかった。

「え……?」

息を呑んだのは、ナナである。

いや、いのたちもだった。

ただ一人、シカマルだけが歯を食いしばる。

「シカマル……?」

ナナはゆっくりと振り向いた。

地に、足を張り付かせたままで……。

「行かせねえ……」

彼は低くつぶやいた。

ナナを引き留めたのは、自身の影縛りの術だった。

「シカマル……! 放して……!」

ナナが抗議をするのも構わなかった。

またその目に失望が浮かぶのも、もう気にしなかった。

「キバ!!」

ナナの視線をかわすように叫んだ。

「赤丸と一緒に、ナナを連れてここから離れろ!!」

キバも驚いたように、目をしばたかせた。

「できるだけ遠くへ……! とにかく距離を稼ぐんだ!!」

「お、おう……!!」

やっと言葉の意味を理解したキバが力強く答えた。赤丸も大きく吠える。

「シカマル!」

ナナはあの目で叫んでいた。

が、もうシカマルの中で選ぶ答えは決まっていた。

「いくぞ、ナナ!」

キバが無理やりにナナを抱えて赤丸の背に飛び乗った。

態度とは裏腹に、ナナには抵抗する力など無いようだった。

「シカマル……！」

まるで連れ去られるようにして、ナナの姿は一気に遠ざかった。ナナは見えなくなるまで、あの目でこちらを見つめ続けていた。

## 黒い意志

同じ眼……。

視界は繋がっていた。

カカシはひとり取り残り残された「異空間」から、現実を起こる光景を見ていた。

オビトの眼で。

そこに映ったのは、まつすぐな眼差しで戦うナルト。彼と共に戦うサスケ。

そして、空に浮かぶ碧い星……。もう、戦う強さなどとつくに剥ぎ取られてしまったはずの、ナナだった。

(ナナ……)

ようやく溜まったチャクラで、カカシは異空間から現実に戻った。手にクナイを握りしめ、オビトの上で振りかざす。

決着を……けじめを……。

その覚悟だった。ナルトとサスケが駆けつけるより早く、終わらせてしまいたかった。

オビトももう力が尽きたのか、意思も枯れ果てたのか、ぼうつとこちらを見上げたまま動こうとはしなかった。

だが、振り下ろそうとした腕は師であるミナトに遮られる。

彼はナルトたちをマダラの封印に向かわせた。

そして、かつて『ミナト班』だった三人だけになると、静かに語った。

リンのこと……。彼女を守れなかった、悔恨を。死してなお背負い続けて来たもの全てを、さらけ出した。

オビトも語った。

リンを失って、この世界に希望などないと確信するばかりだったと。写輪眼をもってしても、何も見えなかった……。と。

そこに伏すのは、絶望に染まり、孤独にまみえ、望みもへし折られた抜け殻の男だった。



彼は力尽きた今も、まだその目に迷いを浮かべている。

カカシは言った。

オビトの言うことは、本当は正しいのかもしれない。

だが、オビトがくれた眼を凝らして見ようとはしてきたのだと。

そしてナルトという光が見えた……そう、伝えた。

「そうかもしれないな……」

遠くで強く弾けるナルトのチャクラを感じながら、オビトは呟いた。

浮かべた迷いは、徐々に薄れていた。

きつと、今ならわかり合える……。

カカシは自分の言葉を聞き入れつつある親友に、そんな予感がした。

だがその時、オビトは激しく咳き込んだ。

喉の奥から、赤黒い血が吐き出される。

「オビト……！」

もう自分で口元を拭えないほど、オビトは弱っていた。

ミナトが「十尾の人柱力は尾獣を抜かれても死ぬことはない」と説く。

正直に安堵した。

このまま別れるのは、やはりやりきれなかった。

この戦場にいる全ての忍、サムライにとって、オビトは「敵」で「仲間の仇」ではあった。

それでも、カカシは彼との時間が残されていることを嬉しく思っていた。

しかし当の本人は、ミナトとカカシのやり取りにかまわずこう言った。

「カカシ……ナナを……まもれ……」

弱く掠れた声だったが、それはカカシの耳の奥にまっすぐに届いた。

「え？」

「ナナを、早く……まもるんだ……」

この三人の間に『ナナ』の名があがったことに、違和感を覚えた。しかも彼は「まもれ」と言い、またそれを急かしている。

「どういうことだい？」

一瞬早く動揺を抑えたミナトが尋ねる。

オビトはゆっくりと言葉を吐き出した。

「オレがナナを……ナナの眼を利用しようとしていたことは、さつき話したな……」

「まさか……」

悪い予感がした。

「それはもともと……マダラの計画だ……」

思わず背後を振り返った。

見えるはずのない、ナルトたちとマダラの戦域。

「マダラはどうとう寿命が近づいたとき、オレに『最後の計画』を打ち明けた……。うちは一族の、石碑に記されていたことだ……」

オビトの口から、マダラの計画とやらが語られる。

「無限月読は神樹の花が開いたときに完成する……。その花が開くためには『和泉一族』の血が必要だと……」

それは予感していたとおり、ぞっとする内容だった。

「オレもその後、実際に石碑を読んだ……。蕾が成るまでは吸い上げた人間のチャクラでいい。が、開花には人類で最も尊い和泉一族の血が必要になると、そこには確かに書かれていた……。だからナナの血が、今、最終段階で利用されようとしている……」

ナナの血が、まるで神樹に与える『肥料』とでも考えられていたように、カカシは憤りを隠すことができない。

が、これで全てではなかった。

「そして……」

オビトはさらにおぞましいことを告げたのである。

「マダラは……さらなる写輪眼の『進化』をも夢見ていた……」  
「どういうことだ?!」

憤りが頂点に達した。

オビトの言葉を、ただじつと耳に受けることができないでいる。

「マダラは、写輪眼の変化が『輪廻眼』で完成するのではなく……、この先もっと強大な力を持つ眼へ進化する可能性を語っていた……」

オビトは、目を伏せて語った。

「ゼツが探して来た『和泉成葉の産まれなかった子供』という存在は、うちは一族と和泉一族の混血であり……、写輪眼の『さらなる進化』を成し遂げるにふさわしかった……」

「だから……お前は……」

「そうだ……。マダラの言葉を信じたオレは、さつき言った通り、この世に『ナナ』を転生させるよう仕向けたのだ……」

カカシはオビトから目を逸らした。

あまりに馬鹿馬鹿しい理想を明かされ、憤りが一気に冷めたのだ。

「お前たちの目論見どおり……ナナは『青い万華鏡写輪眼』を開眼したというわけか……」

吐き捨てるように言った。

胸に湧くのは軽蔑以外の何物でもなかった。

「オレが仕向けるまでもなく……ナナはあの眼を得た。その力も……たった今、証明された。尾獣たちを、そこに実体がないにもかかわらず、いつぺんに……支配する能力……。それを、マダラも見ていたはずだ……」

異空間から見えた、ナナの瑠璃色の眼……。

その真新しい記憶が、やつとカカシの中の正常な心の形をとどめていた。

「オレは……ナナがオレと同じ絶望の淵に転がり落ちるところを見ていた……。そして、オレの理想との同調を期待した……。が、ナナは何度も立ち上がった。今も……希望など無いのに、それでも戦った。おそらく、すでにナナ自身も気づいているはずだ……。この計画に、自分の存在が利用されようとしていることを……」

カカシは思わずため息をついた。

ナナは見かけによらず鋭いところがある。冷静に物事を見つめ、自分の役割を考えて、まさに忍のように影で立ち回るのだ。

だから、「すでにナナ自身が気づいている」と言ったオビトの言葉は正しく思えた。

「だったらマダラを一刻も早く封印しよう。マダラをナナちゃんのところへ向かわせなければいいんだろ?! カカシ、君はナナちゃんのところへ……!」

ミナトが冷静に言う。

カカシはかろうじてうなずいた。

「カカシ……」

オビトは立ち去ろうとしたカカシを呼び止めた。

「ナナはおそらくお前に、『自分を殺せ』というはずだ……」

一瞬、言葉を失った。

が、すぐに納得した。

自分の存在を利用されることが避けられないと悟った以上、ナナはそれを願うはずだ。

ナナはそういう子だ。良く知っている。自分の犠牲など少しも考えない子なのだ。

「いいか、カカシ……」

そんなナナの強さが憐れだと……何度、思っただろう。

ナナを想うカカシに、オビトはさらに言った。

「ナナはとつくに……自分で自分の存在を始末しようとしたはずだ……」

また、不意をつかれて息を呑む。

「良く知っている」と自負したばかりの自分が、またオビトの言葉に深く納得してしまっていた。

そうだ……。

ナナならば、それに気づいた時点で自分で事を収めようとする……。

ナナはそういう子なのだ。

「だが、それは叶わないんだ……」

急に焦りで熱くなつた身体を冷やすように、オビトが言った。

「ナナには産まれた時から、『二つの術』がかけられていると言つたな……」

異空間で対決した時、オビトは今とは違う顔で愉快そうにそう言つていた。

その意味を、オビトは今になって明かす。

「ナナには……決して自決できないように、『封じの術』がかけられている……」

カカシは反射的にミナトを見た。

もう、オビトから語られるナナの真実に頭が割れそうになっていたのだ。

ミナトはその視線を受け止め、静かに言つた。

「その術をかけたのは誰だい？」

「和泉の人間だ……。オレと繋がっていた一族の者が、そう言つていた。ナナが……己の『使命』に絶望しても、決して逃れられないように、実の父らが術をかけたのだと……」

カカシは黙つた。

何に抗議していいのかわからなかつたし、言葉が浮かばないほど感情が激しく渦巻いていた。

「だから、カカシ……」

オビトはそんな彼に、ただ淡々と言つた。

「ナナを……異空間に隠せ……」

それは助言だった。

さつきまでナナを利用しようとしていた者の、ナナを護るための助言……。

「そこなら……『今のマダラ』では、手が出せないはずだ……」

カカシは彼のうつろな目をじつと見た。

息をするのもやっと……というほど弱っている。さつきまでの、理想を追い求めて世界に楔を打った男の姿からはずいぶん変わり果てていた。

かといって、昔の親友のまつすぐな眼差しともかけ離れている。が、これはまぎれもなくうちはオビトだった。

戦いに敗れ、全てを失い、起き上がることさえままならない、かつての親友。昔、火影を目指していた男なのだ。

「ナナの姿を捉え次第……有無を言わず、飛ばすんだ……」

「ああ、わかった」

カカシは彼の助言にうなずいた。

オビトがナナに対してどんな感情を抱いているのか、聞いてみたかった。

さつきまで“利用”することしか考えず、そのために自分が意図して産み出した存在と言い捨てていたナナを……今、オビトは確かに守ろうとしているように見えるのだ。

それは、ナナへの共感か……憐みか……贖罪か……。

が、その話をしている余裕は無かった。

「先生、あとを頼みます。オレはナナを探します……!」

改めて決意を固め、カカシは思い出したように全身に力をこめた。そして手のひらに自らの鮮血を塗り、印を結ぶ。

口寄せの術である。忍犬を呼び出し、ナナの居場所を感知しようとしたのだ。

だが、その手が地面につく前に、突然オビトが叫び声を上げた。

「オビト!」

ミナトさえも不意をつかれていた。

カカシは、オビトの顔の横から黒い手が二本、突き出したのを見た。「うぐっ……!」

黒い手はまるで蛇のようにうごめき、あっという間にオビトの腕に絡みついた。

そして、その頭部が地面から表れる。

「く、黒ゼツ……!」

オビトはそう言った。

『黒ゼツ』……それは、本部からすでに「捕らえた」という報告があった敵の名だった。

それが今、目の前で実際に動いている。

「ぐっ……!」

「オビト?!」

オビトはなけなしの力で必至に抵抗しようとしている。

だが、黒ゼツはカカシとミナトが止める間もなく、ニカワのようにベツタリとオビトの身体にとりついた。

「オビト!」

阻止しようとしたが無駄だった。

黒ゼツはあつという間にオビトの身体と一体化した。攻撃を加えればオビトの身体にも傷をつけてしまうのが明らかだった。

「オビトをどうするつもりだい!」

ミナトが殺気を込める。

が、黒ゼツは不気味な低い声で平然と言った。

「悪イナオビト……。オレハコノ瞬間ノ為ニイタンダヨ……」

そしてオビトの腕を我が物のように動かし、印を結ぶ。

「何だ?!」

何の印か……。カカシは見たことがなかった。

ミナトも同様に息を呑む。

オビトは抵抗しようとしていたが、その手は最後の印を結び終えたようだった。

こちらに対する攻撃……。ではない。

「オビト!」

黒ゼツはニヤリと“口の部分”を歪め、オビトの身体から離れた。

そして上半身だけ地面から出した状態で、じつとオビトの顔を見下ろす。

「な、何をした?!」

解放されたオビトは、残っていた最後の一滴まで搾り取られたように弱り切っていた。

彼は息を切らしながら、苦しげにこう答えた。

「マダラが……。生き返って……。しまった……」

カカシは耳を疑った。

が、すぐに思い出した。

ペインの木ノ葉崩しの時……一度死んだはずの自分がこの世に  
生き返った訳”を思い出したのだ。

「オビト……コレデオ前ハ用済ミダ。『輪廻転生』ヲシタオ前ハ、モウ  
死ヌ」

「輪廻転生」……その言葉、いや術の名を、確かに聞いたことがあつ  
た。

「オビトの身体を使って、輪廻転生の術でマダラを蘇らせたのか?!」

そう叫んだ。

だが、黒ゼツはカカシの声など耳に入らないかのように、オビトを  
見つめたままその手を伸ばす。

「サテ、最後ノ仕事ダ。オビト、ソノ左眼ハ返シテモラオウ」

反射的に身体が動いた。

オビトの身体から離れたのなら、黒ゼツへの攻撃は可能だった。

そう気づいたのはもちろんミナトも同じで、二人は同時に黒ゼツに  
飛びかかる。

だが一瞬早く、黒ゼツが動いた。再びその身体を自在に変化させ、  
影となってオビトにまとわりついたのだ。

「オレガ取り付イテイル間ハ、少シクライ長持チスルダロウ」

オビトのちようど左半身が、黒ゼツに覆われた。

「君はいったい何者だい？ 人間……ではないね」

ミナトは慎重に問う。

「人間ではない」という師の言葉に、カカシも賛同していた。

「オレノ存在ハ、マダラノ意志”ソノモノ……。マダラノ邪魔ヲスル  
者ハ、オレガ排除スル」

死にかけのオビトが、黒ゼツに半身を奪われて立ち上がった。

「マダラノ策ヲ遂行デキナカッタ役立たズダ。コイツガ死ヌマデノ  
間、コノ体ヲ使ツテオ前タチト戦オウ。最後クライハ役ニ立ツテモラ  
ワネバナ」



この状態からオビトをどうやって助け出せばよいか……。いや、どうやってこの黒ゼツと戦えばよいか……。

カカシは急速に頭を回転させた。  
だが。

「カカシ……」

黒ゼツを見据えたまま、ミナトが言う。

「君はナナちゃんのところへ！」

「先生……」

「君がナナちゃんを守るんだ！ 君はあのコの師だろ？」

ミナトの横顔は少しも変わらなかった。

ずっと憧れ、慕っていた、知的で強い眼差しだ。

「ハイ……！」

カカシは昔そうしていたように、勢いよくうなずいた。  
しかし……。

「ソウハサセナイ。『和泉菜々葉』ハマダラノモノダ」

黒ゼツは、こちらの意図など最初から全て承知しているといった速さで攻撃を仕掛けて来た。

カカシの足もとから黒い影が二本飛び出し、彼の足首を絡めとる。

「和泉菜々葉ハ、マダラガ造ル世界ニ必要ナ存在ダ」

カカシは懸命に黒ゼツの拘束から逃れようとした。

いや、この際足を切ってもナナのところへ向かおうと思った。

「カカシ！」

ミナトがそれを察知して救出に来る。

九尾のチャクラを纏った片腕で手刀をつくり、それを足元へ向けた。

カカシはタイミングを合わせて動けばよかった。

かつての師弟……互いに声をかけずとも合わないわけはなかった。

「よし！ 抜けたよ!!」

ミナトの攻撃は、黒い手を二本とも断ち切った。

「カカシ！ 行くんだ!!」

「ハイ！」

今度こそ、ナナの元へ……。  
ざわつく胸を押さえながら、カカシは遂に走り出した。

しっそう

「キバ……」

「黙ってる……!!」

ナナが口を開けば何を言うかわかっている。

だからキバは、何も言わせなくなかった。それを聞きたくはなかったから……。

それを正面切って言われたシカマルの痛みはよくわかっていた。

必死な顔で「自分を殺せ」と懇願されて……ナナに……懇願されて……。

今、彼がどんな思いを抱えているのか。

とうてい、自分には耐えられないと思った。

『シカマル、アナタがこれを罪に思わないで……。アナタはこの世界を守るし、私を救ってくれるんだから……』

ナナがそう言って笑んだ瞬間、ナナとシカマルの周りの空気が変わった。

キバの鼻でも「理解不能」な、不思議な空気だった。

気づいたときにはもう、二人との間には境界線ができていて……いのたちと一緒にシカマルを止めようとしたのだが、声は届かなかった。

ナナの周りの地面に星が描かれていた。

ついさつき、空に浮かんでいたのと同じ青白い星……。

それが、ナナがつくった「結界」なのだともわかってても、思い切り見えない「壁」を叩いた。

シノまでもが二人を止めようと声を荒げている。赤丸も爪で「壁」をひっかいた。

が、どうすることもできなかった。ナナの結界を破れる術などなかった。

向こうの声も聞こえない。ただ二人の間に漂う悲愴感だけが見え

ている。

シカマルは、明らかに普通じゃない目つきで刀を握った。いや、握らされていた。

そして、それをナナに向ける。

叫びは届かない。

いのもヒナタも悲鳴のような涙声だ。シノのあんな叫びは初めて聞いた。

シカマルの左手がナナの肩を掴み、引き寄せる。

その瞬間まで、「そんなはずはない」と思っていた自分に気づかさされた。

戸惑いは恐怖へと変わる。

だが、止めることは叶わない。

シカマルは刃を持つ腕を、思い切り引いた。

目に浮かぶ、悲しい結末。いや、鼻をつく血の匂い……。

喉がちぎれんばかりに叫んだ。拳の骨が軋むくらい強く結界を叩いた。

シカマルは……、ついにその刃を思い切り突き立てた。

ナナにではなく、地面に。

結界の中のその音は聞こえなかった。

が、何かを打ち砕くような音が確かに聞こえた気がした。

ゆっくりと、星の光はその刃に吸い込まれていった。

同時に、触れていた結界の「壁」が溶けていく。

『シカマル……』

ナナはかすれた声で言った。

『どう……して……？』

ナナが本気で失望していることが、キバにもわかった。

胸が痛んだ。

生きることに失望しなければならぬナナが、とんでもなく哀れだった。

だが、それを目の当たりにしてもまだわからなかった。

どうしてそこまで、ナナは未来を決めつけるのか。何故、それしか

選ばうとしないのか……。

『できるわけねーだろ!!』

困惑と安堵を引き裂くように、シカマルは言った。

『お前を殺すなんて……。オレにできるわけねーだろ!!』

彼の肩は震えていた。刃を握ったままの手も、その声も……。

ナナのことはさっぱりわからなかったが、シカマルのことは理解できた。

(シカマル、お前……本気で……)

改めてシカマルの想いを知った。

今までいつか彼をからかってやろう……と、そう思う程度だった。

ナナがもつと元気になって、サスケのこともうちはイタチのことも風化したら……シカマルをめいっばいからかってやろう。それだけだった。

だが、想いの深さを突き付けられて、足がすくんだ。

『けどな……オレにはできねーんだ……!』

シカマルはナナの言葉を理解しつつも、こう言った。

『たとえばこの選択が世界を滅ぼすとしても……。お前と世界をハカリにかけても、お前を選んじまうほどオレは……』

普段よりもつと、大人びた声で……。

『そんなくらい、オレはお前に惚れてんだ……!』

はつきりと、そう告げたのだ。

そしてナナをこの腕に託した。ナナを逃がせと、彼は言ったのだ。

それは彼の「願い」であったが、顔色を見る限り「希望」ではなかった。

何故なら、シカマルは「わかって」いたからだ。

正直、二人が交わした会話の内容を十分に理解できているかといえは、そうではなかった。

ナナは、自分がマダラ……未だ活動を続ける「本物」のマダラにも、利用されることが決まっている。

そんなふうに通っていた。

「最初から決められていた」と、ナナはそういう言い方をしたのだ。

そしてシカマルは、ナナの言うことを「わかっている」……と。  
しかし、キバにはそこまで理解できていなかった。

ナナの一族がどんな存在なのか、そこも詳しいわけではなかった。  
が、ナナが和泉一族であることを知った時、自分なりに慣れない調  
べ物をしたのだ。

ただの伝説、おとぎ話……そう思ってきた存在が、身近にいたこと  
には強い衝撃を受けた。

そしてナナの力を知った。その使命も。木ノ葉隠れの里に来たわ  
けも。

しかし、ナナにはまだ秘密があった。

さつき見せた眼。あれは『写輪眼』だという。

サスケと同じ、うちは一族しか持ち得ない写輪眼……それをナナは  
得ていた。

「ナナ……」

キバは、ナナの漆黒の目を見つめた。

焦りと諦めとが、混濁した目。

初めて出会った時は、もつとずっと澄んでいた。

だが、感情は浮かべていなかった。

あの時から、ナナのことは決して嫌いではなかった。

どちらかというと、忍者学校アカデミーの頃から気になる存在ではあった。

それはシカマルがナナに対して抱く感情とは違っていたが、例えば  
子犬の頃の赤丸に抱いていたものによく似ている気がした。

そのナナは、いつのまにか遙か遠くの存在となっていた。  
こんなにも強く抱いているのに、つかみどころのない存在に思え  
る。

変わったのはいつからか……？

中忍試験……いや、その後だ。ナナの存在を知るきつかけとなっ  
た、サスケ奪還作戦。

共に戦ったあの時に、ナナの本当の強さを知ったからだ。

我ながら鼻が利かない……。

そう思った。

「姉」とやらにめちやくちやにされて、心身ともにボロボロになったナナを目にして、初めてナナの本質に気づくとは……。

(ナナ……お前は、どんな気持ちで自分を……)

あの時のナナと、今のナナ……。

同じように儂さを感じる。

「キバ……」

ナナが再び口を開いたとき、すでに負傷者たちが退いた地点まで来ていた。

マダラのいる前線からはかなり離れることができた。

赤丸の体力も限界だったが、よく頑張ってくれている。

「ナナ、しっかりつかまってる……」

やはり、ナナの言葉は予め遮った。

いったいどこまでナナを連れて走ればいいのか、キバにはわからなかった。ただただ、マダラが存在が消えることを願っているばかりでもなかった。

何もわからなかった。

今のキバは、ひたすらナナを抱いて、赤丸とともに「遠く」へと疾走することしか考えていなかった。

「キバ、止めて……!」

それでも……ナナはか細い声で訴える。

「お願い、降ろして……!」

失望したナナはまだ、*「希望」*を口にする。

「いいから、黙ってるって……!」

乱暴な言い方しかできない。

それは、先ほどのシカマルの叫びに少し似ている気がした。

「お前はオレと赤丸で逃がす! シカマルに託されたんだ……!」

まっすぐ前を見た。

まだ開けない夜の闇。ところどころに横たわる、負傷者と遺体。

医療班はすでに前線に赴き、この戦場の外れで治療にあたる者はない。

「でも、キバ……言ったでしょう? 私は……」

「聞きたくねーよ！」

苦しげなうめき声ができる中を、キバは切り裂くように叫んだ。

「お前のソレはもう、聞きたくねー!!」

ナナはかすかに身じろいだ。

いや、力を込めて身体をよじろうとしたようだが、すでにその力さえも失っていたのだ。

「キバ……!」

「オレはっ……!!」

赤丸の毛が逆立つのを感じた。

同じ思いだ。

赤丸のことは誰より知っている。まるで分身のように、いつも一緒にいるのだ。

だから、キバは赤丸の分まで叫んだ。

「オレはシカマルみたいに頭がよくねーから、わからねえんだよ!!」

ナナは、色の薄い唇を真横に結ぶ。

「ナルトたちがマダラを封印するってことを……お前はどうしても信じられねーのかよ！」

喉に不快な塊があるのを意識しながら、キバは口をつぐんだナナに言った。

「サスケだつて、今は一緒に戦ってんだろ!!」

その目は静かに伏せられた。

キバはつられたように、声のトーンを落とす。

「お前は、もう運命は決まってるみたいに言うけどよ……。そんなのわかんねーだろ……?」

少しの沈黙。

夜風がいつそう冷たくなつて、ナナは口を開いた。

「わかるよ……」

ぽつり……と、雫を一滴、こぼすように。

「ナナ……!」

「わかるんだもん……」

「未来が見えてるつてのか? その眼で……!」



苛立ちともどかしさに、徐々に恐れが加わるのを感じた。

「見えたよ……」

ナナは不意に、顔を上げた。

「見えたの……。白い……。眼……」

「白い目……?」

「3つの……。目……」

「みつつ……?」

「どうすることもできないような……。強い、力……」

「力……」

「それが、私を……。覆い尽くす……」

ナナの言葉はまるで呪文だった。

返すことなど初めから無いような、一方的な言葉だった。

「すぐく……。こわいの……」

そのままナナはすすり泣いた。まるで小さな子供のように。

「私は……。これ以上、生きられない……」

キバの恐れは苛立ちを飲み込んだ。

「皆を傷つける存在になる前に……。終わらせたいの……」

それは焦りも戸惑いも取り込んで、彼の肌を泡立たせた。

「私が、私でなくなる前に……」

小さく身震いした。

赤丸も気づいてか、走るスピードが遅くなる。

「ナナ……!」

恐らくひとりではこの恐怖に飲みつくされていた。

が、赤丸がいたおかげでキバはもう一度、ナナを抱く手に力を込めることができた。

「だめだ、ナナ! シカマルが言っただろう……!?!」

あの、キレ者で面倒くさがり屋で、人一倍仲間想いのシカマルが言ったこと……。

「たとえば、お前が言ったとおりの未来が決まっても……」

自分も同じ想いで吐き出す。

「オレはお前を殺すことも、殺させることもできねー!!」

たとえそれが、今のナナには届かなくとも。ナナの言う未来が変わらなくとも。

ただ、ナナがこの腕に居続けることだけを願った。

「じゃあ、せめて……」

しかし、ナナは暗んだ声で言った。

「私から離れて、キバ」

皮肉にも、それは今までで一番しつかりとした声だった。

「マダラがいつ、目の前に現れるかわからない……」

キバは思わず、言葉を失った。

「もう『殺せ』なんて言わないから……。だから、私から離れて……。ぐるぐると、いろいろな想いが頭を駆け巡った。

ナナは死を諦めたのか……？」

それにしても、未来が変わることを期待している顔じゃない。

自分に「殺せ」と言うことだけを止めたということ、また他のヤ

ツにそうさせるつもりなのか？

だが、もう周りに人はいない。

この身体で、さっきのところまで戻るつもりか？

いや、そうじゃない。

キバは思い切り唇を噛んだ。人より鋭い犬歯が、かすかにそこを裂く。

「何、言ってたんだ……！」

はつきりと、胸に湧く熱を感じた。

「オレは……お前の仲間じゃなかったのかよ?!」

「キバ……」

「サスケ奪還任務の時、シカマルが言ってただろ?!」

「え……？」

「仲間は命がけで守る……！」

「……」

「それが木ノ葉流だって、言ってただろ?!」

あの時のことを思い出させても、遠慮は無かった。

ナナに対する怒りを吐き出さずにいられなかった。

「だから、ナナ!!」

そして、怒りと共に……。

「オレはお前を命がけで守る……!」  
確かな愛情を。

「頼むから……」

ほんの少しの、後悔と共に。

「オレをただの『知り合い』にしねーでくれよ!!」  
全部、ナナにぶつける。

「キバ……」

受け止めきれぬはずなどないことは、わかっていた。

こんな状況で、わけのわからない未来まで見据えてしまっていて、おまけに身体も弱り切っていて……。

不安も、絶望も、焦りも、そして想像もつかないような恐怖を抱えたナナに、自分の言葉が受け止められるはずない。

だが、そうせずにはいられなかった。

義務ではない、意志。薄っぺらじゃない絆。

わかって欲しかった。

本当にマダラが今、目の前に現れて圧倒されても、それでも死をいとわずに戦うと。必ずナナを護って戦うと。

全てを無くしたナナに、それだけはわかって欲しかった。

「な! 赤丸!!」

ナナの頬を伝う涙を拭いながら、キバは明るい声で言った。

赤丸はすかさず大きく吠える。

「キバ……赤丸……」

ナナが流す涙は温かかった。頬は死人のように冷たいのに、涙だけは温かかった。

「ありがとう……」

その言葉にも、ちゃんと想いが通っていた。

「っーか、そんなのあたりまえだろ!!」

頭にぽんと手を置くと、ナナは少し笑った。

だがやはり、ナナの姿はあまりに儚すぎた。

純白の着物に色を失った肌。異常に冷えた体温。今にも透けてしまいうようなほど、ナナは儂く見えた。

「ナナ、寒いか？ ほら、もつとちやんとつかまれ」

少しでも風に当たらないよう、キバはナナを引き寄せる。

ナナの身体は腕の中に、すっぽりと収まりそうだった。

「もうだいたい battlefield から離れた。今頃、ナルトのヤツがマダラをぶっ倒してるかもしれねーぞ」

「うん……」

くぐもつた声に、キバはようやく少しだけ安堵した。

「サスケもとりあえず一緒なんだし。ムカツクけど、あいつはやっぱり強えーしな」

「うん……」

「シカマルもいつも以上にキレまくってるからよ、そう簡単にマダラを battlefield から逃がしはしねーだろ」

「うん……」

ナナはわずかに身じろいで、キバの顔を見つめた。

「キバ……」

「な、なんだよ……」

その眼差しがあまりにまっすぐだったから、キバは前方に視線を移した。

「忍者学校の頃から、私のこと、気にかけてくれて、ありがとう」

涙声は、胸を突いた。

「そ、そりゃあ、お前が里の外からの転入生で、チビで、細っこくて、ナルトとドベ争いすんのが可愛そうだったからよ……。あ、赤丸も珍しく最初っから懐いてたし……」

思わず口ごもる。

「うれしかった……」

ナナは眩くように続けた。

「いのちゃんやサクラちゃんも……みんな私の面倒をみてくれて……。ヒナちゃんやシノ君、チョウジも、私のこと、心配して声をかけてくれた……」

賑やかなしい忍者学校での最後の一年が、キバの脳裏によりみができる。「みんなが、私の初めての友達なんだ……」

あの時のナナを思い出して、そして今のナナを見る。

「初めての友達」と言われて、それが大げさでも嘘でもないことはもうわかっていた。

だから、嬉しくて悲しかった。

「だから、私は……」

「ああ、わかってるよ……い！」

ナナの想いをくみ取って、そう告げた。

その時、赤丸が大きく跳ねた。

大きな岩が点々と転がる川辺に辿り着いていた。

赤丸には何も告げていないから、最初からずっと赤丸自身の判断で走り続けている。臭いと勘を頼りに戦場から、いや、マダラから逃げている。

赤丸はこのまま岩を避けつつ、上流へと上るつもりらしかった。

「ナナ、しばらくは足場が悪い。しっかり捕まれ」

手を離せば、軽いナナの身体はすぐに転げ落ちてしまいそうだった。

キバは腕をナナの腰にしっかりと回し、片手で赤丸の毛を掴みなおす。

ナナは、一瞬ためらった。

が、素直にうなずいて……その手をようやく、キバの首に回した。

だが……。

キバがそのかすかなぬくもりを感じることはなかった。冷たい身体を、今度こそちゃんと抱きしめてやることはできなかった。

ナナの存在が、突然腕の中から消えたのである。

「え……う？」

たった今までしっかりと抱えていたはずのナナのが、こつ然と消えたのである。

「あ、赤丸!!」

赤丸が気づきもしないほど、唐突に……音もなく……。

「ナナ……?!」

急いで辺りを見回した。

赤丸が立ち止まるより早く、来た方向へ走った。

が、ナナはどこにもいない。

だいたい、しっかりと抱きかかえていたのに落とすはずはない。

もともと臭いの薄いナナを、懸命に感知しようとした。

が、赤丸の嗅覚をもつてしても、ナナを見つけることができなかつた。

「ナナ?!」

声を張り上げた。赤丸も流水音をかき消すほど大声で吠えた。

下流へ向けて走った。

猛スピードで走りながら、岩の影にも、川面にも、そして闇の向こうへも目を凝らした。

「ナナ?! どこだ?!」

それでも、初めからその存在など無かったかのように、何の痕跡も得られない。

「ナナ?!」

ナナは、完全に彼らの前から消え失せた。

## 夢眼（ゆめ）

忍の力とナナの力が合わさって、十尾の人柱力から尾獣を引き抜くことができた。

オビトの脅威は去り、残る敵は『穢土転生』で蘇ったうちはマダラのみであった。

すでに初代火影の封印術で拘束されていたマダラに、サイが封印術を仕掛けた。

『虎視眈眈』……現れた「虎」がマダラの腕に噛みつく。

「よし… もう少し!!」

サイに手ごたえはあった。

同時に、マダラがいる場所で爆発が起る。

だがそれは封印術ではありえないことだった。

術者であるサイはもちろん、そこにいた柱間さえもそこを凝視する。

「やつとまともに戦える」

声が出た。爆心のマダラから。

「やはりちゃんとした身体でなければ!」

土煙の向こうにマダラの姿が見えた時、サイは自分の術が完全に遮られたことを知る。

墨の虎は、煙に飲み込まれたようにかき消されていた。

「血湧き肉躍つてこそ「戦い」だ!!」

だが、わずかに興奮したマダラの背後から黒い炎がメラメラと立ち上った。

「サスケ?!」

空を滑空する大鷹の背にサスケの姿があるのを、ナルトがいち早く見つけた。

「サスケ! こいつにただ術をぶつけても意味がねえ! こいつは忍術を吸収すんだーてばよ!」

『輪廻眼』を持つマダラに忍術は無効。

ナルトはそれを知っていた。

が、柱間は気づく。黒い炎はマダラに吸収されることなく、その身体で燃え上がり続けているのを。

マダラは両の目を閉じていた。そのままニヤリと笑い、燃えた服を脱ぎ捨てた。

「それは?!」

柱間は露わになったマダラの上半身を目にして驚愕した。

彼の左胸には、自分自身の顔が刻まれていたのだ。

「柱間、覚えているか？ かつて、うちの石碑の前でお前に語ったことを」

目を閉じわずかにうつむいたまま、マダラは話し始めた。

「石碑には、『相反する二つの力が協力することで本物の幸せが訪れる』、そう記されていると教えたな……。だが、別のとらえ方もできると言っただけだ」

このときには、ナルトもサイも気がついていた。

マダラの胸にある柱間の姿……。

それは、マダラが「柱間の細胞を取り込んだ」ということを表わすのだと。

「うちはと千手……相反する二つの力を手にした者が本当の幸せを手にする。そういうとらえ方もできやしないか？」

マダラは皮肉をこめてそう言うなり、ナルトとサイの目の前に現れた。

一瞬のことに避ける間もなく、二人はまともに殴られて後ろへ飛ばされる。

マダラは二人がまだ地面を転がっているうちに、そのまま柱間の元へ向かった。

その手が、柱間の首を掴む。瞬間、柱間のチャクラが一気に吸い取られた。

「これが仙術チャクラか……」

マダラの胸の柱間の顔に、仙法の印が浮き上がる。

「なんだ、この程度か……。これならば簡単に扱えそうだな」  
マダラがそうつぶやいた。



そのわずかな隙を狙って攻撃を仕掛けたのはサスケだった。  
サスケの刀がマダラに襲い掛かる。

マダラは両目を閉じたまま無駄のない動きで避けてはいたが、サスケの方がいく分速かった。

刃がマダラの腕を貫く。

かろうじてマダラは反対の手で刃を掴んでいた。

あと少しのところで、急所には届かなかった。

「感じるぞ。その万華鏡は……直巴か？　どうりでいい動きをする。オレの輪廻眼が戻るまで、お前のその眼をいただくというのもいいかもしれない」

マダラの口の端が上がった。

ナルトとサイは攻撃するタイミングを見計らっていた。このままサスケがマダラの動きを止めている間が好機であったからだ。

が、彼らの耳にマダラの愉快そうな声が飛び込んだ。

「だが、ここにはもつと良い眼があるようだ」

ナルトとサイは足を止めた。サスケも間近のマダラを睨み上げた。

「お前……やはり……！」

サスケの脳裏に、火影岩の頂で別れたナナの顔が浮かんだ。続けざまに、さきほどの空に現れたナナの眼も……。

「ナナの眼を狙っていたのか……！」

「ほう……あの娘、〃ナナ〃という名か」

ナルトとサイは、明らかに肯定されたマダラの目的に悪寒を覚えた。予感していたサスケは当然の怒りを覚えた。

だが、サスケの怒りが力に変換される前に、マダラは術を発動した。爆炎が起こり、周囲に熱した灰が飛び散る。同時にマダラはサスケの拘束を解いて移動していた。

「〃ナナ〃はお前たち忍の仲間か？　どういう血筋だ？　うちの血を引いていることは間違いないようだが、何と掛け合わせてああなった？」

足元に土煙をまわりつかせながら、マダラが言った。

怒りのあまり、サスケは言葉を失った。サイも、ナルトでさえも、奥

齒を噛みしめるにとどまった。

「柱間。お前は知っているのか？ この時代のことはお前も知らんか……」

柱間は、すでにマダラの術によって身体の自由を完全に奪われていた。チャクラも吸い尽くされ、まさに人形のように地に膝をついたまま動けない。

それでも言葉は話せたが、やはり彼も言い返すことはなかった。

「陰陽術を扱っていたということは、和泉一族の娘なのだろう？ まさか和泉とうちはの一世代目か……？」

マダラは自分で台詞を言いながら、次第に興奮していた。

「あの眼……あの写輪眼は確かに万華鏡だったな……！」

閉じた両目の裏側で、マダラはナナの青い眼を見つめているようだった。

「ナナには指一本、触れさせねーってばよ！」

ついにナルトが叫んだ。チャクラをたぎらせ、マダラを睨みつける。

その隣に、サイも並んだ。その表情には、はっきりとマダラに対する嫌悪とナナに対する決意を浮かべていた。

「お前はオレらがここで止める！ ナナのところには行かせねー!!」

ナルトは拳を突き出してそう言い放ちながら、サスケを向いた。

ただ静かにたたずむ彼の眼は、紅く燃えている。

「そうだろ!? サスケ!!」

サイもサスケを見た。

二人ともサスケの答えを知りたかった。いや、サスケの言葉を聞きたかった。

今、ここで怒りを露わにしないサスケが、抱えている想いを……。

「ああ……」

炎がくゆるように、サスケは低い声で言った。

「オレはナナを護る……そう、約束した」

悠然として、それでいて深い、むき出しの想い。

「サスケ……」

ナルトとサイは息を呑む。

サスケの想いが言葉になったのを聞いたのは、ナルトにとっても初めてのことだった。

「お前たち、少し早まっているぞ」

しかし、それさえも軽んじるようなマダラの声が響く。

「あの眼は興味深いが、今はそれよりももっと必要なものがある」

「用意はできてますよ、マダラ様」

マダラの台詞に続いて、乾いた土から「白い者」が姿を現した。

「白ゼツ」と呼ばれていた不気味なモノだった。

「待っていたぞ……」

白ゼツはマダラに何かを渡した。

それを、マダラは右の目に入れる……。

「これで、少しは楽しくなるか……」

マダラの右眼が開いた。それはまさに『輪廻眼』だった。

マダラはその眼で左腕の傷跡を眺めた。先ほどサイの虎が噛みついたところである。

まだ、血が滲んでいた。

マダラはそれを舂め、味を確かめたようにニヤリと笑う。

「オレの身体だ……!!」

そして声高らかに笑いだした。

「やはり、そうか……!」

柱間は気づいた。

未だ血が滲むマダラの「身体」。サスケの天照を吸収できなかったこと。一時、両目の輪廻眼を失ったこと。

そこから考えられるのは……。

「マダラは、もう穢土転生で蘇った身体ではない。完全に生き返ったのだ……」

ナルトとサイは、思わず柱間を振り返った。

「生き返った……?」

「完全になって……、どうやって……」

穢土転生の身体であったはずのマダラが、生き返った……。

いったい何故？

ずっとマダラと対峙していたはずの柱間にも、いつの間にそれが成し遂げられたのかわからなかった。

最初に、ナルトが気づいた。

「まさか……オビトで……」

彼は『人が生き返る』という術を間近で見たことがあったのだ。

それを成す眼が輪廻眼であることを知っていた。そしてその術は、術者の命を引き換えとすることも。

だが、オビトを案じている暇はなかった。

「左眼はもう少し時間がかかりそうだな」

「みたいですね」

マダラと白ゼツが、目の前の者たちの存在を忘れたかのように話し合っている。

「では、先に神樹の花を咲かせてしまおう。手はずは整っているな？」

「もちろんですよ」

「神樹の花」という単語を聞いて、柱間は神樹を仰いだ。

オビトから尾獣が抜け、人柱力がいなくなったことで、おそらくは成長を止めている神樹。

しかしその蕾はすでに大樹の梢に君臨し、月に向かって花開くのを待つばかりといった様子であった。

「マダラ様、呼んだらきつと、少しはオビトの奴を褒めてやりたくありませんよ」

「なるほど……。来るのはあの娘というわけか」

二人の会話の意味を、そこに居る者たちには理解できなかった。が、最後の言葉の意味には察しがついた。

「あの娘って……ナナのことか?!」

ナルトはそう叫ぶと同時に、サスケの背から鬨気が湧き上がるのを見た気がした。

「和泉の血、進化した写輪眼……まさか一石二鳥でしょ?」

「そうだな、最高のお膳立てだ!」

マダラは今ままで最も上機嫌に笑った。

「ナナは渡さねーって、言ったはずだ!!」

ナルトがまたも叫んだ。

だが。

「『式印』はどこだ」

「コレですよ」

マダラはその声を聞き流し、白ゼツに手を差し出す。

すると、白ゼツは右の手のひらの皮を剥いでマダラに渡した。

「右の手ですよ、マダラ様」

「『契約』は間違いないな?」

「もちろんですって」

目前の殺気を無視したまま、二人のやり取りは続く。

「少しはオビトを褒めたくありませんか?」

「まあな。だが、全てはこのオレの計画どおりだ」

「じゃあボクを褒めてくださいよ」

「調子に乗るな、白ゼツ」

この時、動き出した者がいた。

サスケだった。

「サスケ!」

すぐにナルトとサイも続いた。

だが、ここでマダラはようやく視線を彼らに向けた。

「うちのガキか……。その眼では、あの石碑に書かれていること全てを読むことはできなかったようだな」

サスケは立ち止まった。

「さつき言っていた石碑とは、うちの隠れ家にある石碑のことか?」

「あれを最後まで読めるのは輪廻眼を持つ者だけじゃないですか?」

白ゼツがからかうように横槍を入れる。

「何が書いてある?!」

「まあいい。説明するより見せてやろう。その方がわかりやすいからな」

マダラは薄く笑い、白ゼツの手の皮を己の手のひらに乗せた。

そして……。

「口寄せの術……！」

唐突にその術を発動した。印も結ばず、自身の血も使わず……。

だが、術は確かに発動された。

乾いた煙と共に、そこに口寄せされたモノ……。

「ナナ?!」

それは、白い装束をまとったナナだった。

## 寂寞の軌跡

マダラの右手の下に、ナナの頭があつた。  
サスケが最初に見たのはそれだけだった。

「ナナ……!?!」

マダラに頭を押さえつけられ跪いたまま、ナナは視線を彷徨わせていた。

「どう……して……?」

ナナは空気の漏れるような声で言った。

その顔は死者のように血の気が失せ、眼だけがキラリと光っていた。

「ナナ!!」

近くでナルトが叫んだ。

だがサスケはまだ、言葉を発することができなかった。

「ナナ、今助けるってばよ!!」

ナナは震えていた。

ナルトの声に気づきもしないで、自身の身に起きたことに激しく動揺しているようだった。

こんなナナを見るのは、初めてだった……。

「『ナナ』というそうだな」

そんな感想など構いもせずに、マダラが声を落とした。

「お前が驚くのも無理はない。この口寄せの契約は、お前が知らぬうちに交わされていたはずだ」

紫色のナナの唇がかすかに動いた。

「どういうことだってばよ!?!」

代わりにナルトが問う。

「全てはこのオレの計画ということだ。オレはオビトに、『和泉一族の人間に接触して、この口寄せの術式を一族の『誰か』の身体に埋め込ませるよう仕向けろ』と命じていた」

「伝説の和泉一族っていうのも、今じゃたいしたことありませんから

ね。オビトの幻術にさえ簡単にひっかかるヤツがいるくらい。うちの眼と和泉の血は天敵って話も、ただの伝説になっちゃったみたいですね」

白ゼツは場にそぐわぬ、明朗な笑い声をあげた。

「お前のこの頭蓋には、お前も知らないうちに口寄せの式印が刻まれていたということだ」

マダラはナナの頭から手を離さぬまま、言った。

「和泉の人間であれば誰でもよかつたんだが……。まさか、うちの血をも引く人間を手に入れることができるとはな」

「そうそう、そこんところはオビトもわりとうまくやりましたよね。まあ、黒ゼツの情報があつたからなんですけど」

攻め込む隙を与えぬまま、白ゼツは饒舌にマダラに説明してみせる。

マダラが死んでのち、うちの男と和泉の女……。『和泉成葉』の間に双子が授かったこと。

出産は、オビトが九尾を使って木ノ葉に攻め込んだ年だった。

ひとりは産まれてすぐ陰陽術にかけられて居場所を隠され、もう一人は産まれることなく母体と共に死んだこと。

翌年、和泉一族が九尾の人柱力の「抑え」"として、類稀なる才があつた『和泉成葉』を転生術によって蘇らせようとしたこと。

その情報を得た黒ゼツがオビトに報告し、オビトは一族の者に幻術をかけ、『和泉成葉』ではなく、うちの血をひくはずの「その子供」を転生させるよう仕向けたこと。

それが、『和泉菜々葉』だったということ……。

そして和泉菜々葉が産まれるとすぐ、オビトはマダラの計画に従って、和泉菜々葉の身体に口寄せの式印を刻むよう再び和泉一族の人間を操ったのだと。

改めて聞かされるナナのあまりに悲しい「生」に、ナルトとサイは攻撃意欲を削がれていた。

ナナ当人は、無防備にマダラの前で跪いたまま表情もない。

サスケは……。意外なほど怒りを感じなかった。ナナに対する憐み



もなく、心はおそろしく静まっていた。

「さて……お前をどうするかだが。あのうちのはガキに『見せてやる』と言ったからな。さっそく始めよう」

その言葉に、ビクンと肩を震わしたナナに。

「ナナ」

サスケは静かに声をかける。

「サスケ……」

ナナが初めてサスケの眼を見た。

その表情に浮かぶのは、驚嘆と絶望だった。

こうなることを恐れて、ナナは木ノ葉の里に残ったはずだ。

ナナは全部わかっていた。全部、*“あの時”* からこの状況を察していた。

だからナナは今、驚きもなく、怯えもなく、ただ絶望している……。

「ナナ、大丈夫だ」

ナナのことはよくわかっているつもりだった。他の誰よりも。ずっと前から、そうだったはずだ。

だから、ただ一言だけでよかった。

「*“約束”* しただろう」

ナナは唇を噛みしめた。

涙が一滴、頬を伝う。

早く、あれを拭ってやらなければ……。

サスケは単純に、純粹に、それだけを思った。

「死んだ人間の計画が、この世で実行されると思うなよ」

サスケはマダラに対して刀を構えた。身体の底から強烈に沸き起こる殺意を押さえつけながら。

それはマダラに対するものだけではなかった。

ナナの産まれに関わった者たち……ナナの運命を握りしめてほくそ笑んだ者たち全員に対する、冷えて滾る思いだった。

「サスケ……」

ナナは唇を引き結び、立ち上がろうとした。  
が、すぐに膝をつく。

すでに自力で立つこともままならないほど、ナナに力がないことは  
明白だった。

「きつきの術で力を出し尽くしたか？ アレは見事だったぞ」

マダラがナナを見下ろし、その襟首をつかんだ。

「この白い装束はたしか……。そうか、お前、本家の者だったか！」

そして、またナナの「生」に気づく。

「すっかり言い忘れてましたよ、マダラ様。『和泉菜々葉』の転生は本  
家の娘に対して行ったんです。でもそれはボクやオビトが仕向け  
たわけじゃなく、一族の当主らが勝手にそうしたんですけどね」

「なるほど、ますます興味深い」

ナナは眼を伏せ、こぶしを握りしめた。

ほとんど力が入らないのが、サスケの目には明らかだった。

（大丈夫だ、ナナ。もう、お前は何もしなくていい……）

そう告げた。

そして一気にマダラへ向かって跳ねた。

すぐにナルトが続くのがわかった。

だが、マダラも動いた。

「石碑に書かれた最後の文について説明しろと言ったのはお前だろ  
う。これからちゃんと見せてやるから邪魔はするな」

マダラは薄く笑うと、ナナを軽々と小脇に抱え上げた。

「だが舞台はここじゃない。柱間、残念だがお前はここで見ていろん  
だな」

そしてそう言い捨てて走り出した。

方角は神樹……。

周囲の忍たちをまさに虫けらのように踏み倒し、薙ぎ払いながら、  
マダラは恐ろしい速さでそちらへと向かって行った。

「行くぞ、サスケ!!」

ナルトに声をかけられたとき、サスケはすでに口寄せの術で大鷹を  
呼んでいた。

その背に乗って飛び立つまで、サスケは一言も声を出さなかった。口を開けば、どす黒い怒りの塊が腹から飛び出てきそうだった。それを抑えて冷静にならなければ、ナナを助けられないとわかっていった。

風を切り裂くようにして飛んだ。

少し後ろを、墨の大鳥がナルトとサイを乗せて飛んでいる。

下は見なかった。

地上はマダラの登場に気づいて混乱していることだろう。そして、そのマダラが抱えるナナの姿を視界に捉えている者がいるだろう。

そこに、ナナを救える者がいるとは思わなかった。

マダラは神樹の根本で足を止めた。

ナナは狩られた獲物のように、だらりと四肢を揺らしていた。

サスケはまっすぐに、マダラの正面に降り立った。

ナルトが横に並ぶ。その向こうにサイも。

「ナナを返せつてばよー！」

サスケの頬にまで、ナルトのチャクラがほとぼしる。彼は今にも突っ込んで行く勢이었다。

が、そうしないのは、まさにナナが人質のように囚われているからだ。

「ようやく舞台が整った」

マダラはナナを地面に転がした。

瞬間、サスケはマダラとナナのわずかな間に天照を発動させた。

同じタイミングで、ナルトがチャクラを手の形状にしてナナに伸ばす。サイも墨の虎を襲わせた。

サスケの天照とサイの虎が陽動となって、ナルトの「手」で一気にナナを奪い返す算段だった。

もちろん声など掛け合っていない。

が、三人同時に一瞬の隙を突いたつもりだった。

しかし、黒い炎が立ち上がると同時に、マダラはほんのひと息の風で振り払ってしまった。

それはナルトのチャクラさえもかき消し、同じく虎も跡形もなく消えた。

側にいたナナは、ぼろ布のように無残に吹き飛ばされて、神樹の壁のような幹に身体を打ち付けた。

術も策も簡単にあしらわれたが、それで諦めるわけではなかった。

今度は正面から攻撃にかかった。ナルトの影分身が二体並ぶ。もうどちらが陽動でもよかった。

刀に千鳥を流し込み、それをマダラに向けた。

稲妻がマダラの心臓めがけて走る。

だが、それが到達する前に、マダラがこちらを向いた。

視線……ただ、それだけだった。

それだけで指一本も動かしてなどいないのに、サスケの身体は動きを止められていた。

ナルトの影分身もまた、ピタリと足を止める。それどころか、勢い余って前につんのめる体制であるのに、倒れることすらなかった。

勢いに乗った刀だけが、手からすり抜けてマダラの足もとに転がった。

稲妻は消え、刃が土埃にまみれる。

金縛り……そんな単純な術でないことはわかった。

幻術にかけられたわけでもない。

いったい何の力が、細胞の活動を留めるのか……。

「く、くそ……」

「う、うごけない……」

それは、後ろの二人も同様だった。

「ナナ……」

ナナは目の前にいる。

だが、手を伸ばすことすらできない。

マダラは転がった刀を拾い上げ、横たわるナナに歩み寄った。

「お前たち、よく見ておけ」

そして、ナナの左腕をつかんで引つ張り上げた。

袖が落ち、細く、折れそうな白い腕が露わになる。

ナナはもがくことすらしなかった。

いや、すでにその力は身体にも心にも、ひと欠片さえ無かったのだ。

「や、やめろー!」

誰が叫んだか、もうサスケにはわからなかった。

自分か、ナルトか、それともサイという奴か……。

止める者がいないまま、マダラはナナの肌をゆっくりと刃で切り裂いた。

「ナナ!!」

ナルトの声が頭に響いた。

だが、サスケは気管が潰れたように声を出せなかった。

息も、できない……。

ナナの腕にできる一本の紅い筋。それが白い肌と着物を紅く、紅く染めていく。

「さあ、これでいい」

マダラは満足げに言って、ナナをただ地面に放り投げた。

ナナは声を上げることもなく、その場に倒れこむ。

溢れ出る鮮血が地に浸み込んだ。

マダラは刀に付いた血を舐めとってこう言った。

「これが、あの神樹の花を咲かせるための『養分』だ」

サスケは耳を疑った。

「うちの石碑に書かれていたのはそういうことだ」

マダラが何を言っているのかわからなかった。

この目障りな大木のことか、うちの石碑に書かれていた。そして

この大木とナナの血に繋がりがあった……。

それらを結び合わせて考えたことなどなかった。

「もともとチャクラの実を成す神樹は、太古の昔に和泉一族が植えたものだ。その花を咲かせるのには、和泉一族の血が要る」

マダラは味気ない結論を言いつつ、ナナを見下ろした。

ナナの顔色はますます蒼白で、苦痛すら感じることもできないほど、意識を失いかけていた。

サスケは懸命に身体を動かした。

全身のチャクラを駆け巡らせて……いや、それはただ本能的に動いただけだった。

やっと足が少し、砂利の音をたてる。

「案ずるな、この娘を殺しはしない。殺せばその眼が使い物にならないくなるかもしれんからな」

マダラは誰に言うともなくつぶやいた。

「だがこれでもう、あのやつかいな陰陽術は扱えまい」

ナナは虚ろな目を動かした。

マダラを見上げ……そして、サスケを見た。

さらに、その視線は神樹の遙か梢の方をとらえたようだった。

「逃げて……」

それは声にはならなかった。

だが、サスケの耳には確かに聞こえたのだ。

そして次の瞬間、はるか地底から突き上げるような振動が体を襲った。

## 紺青の月

まるで、あのガムブン太が直上に跳躍し、着地した時のような振動だった。

「な、なんだってばよ?!」

反動で彼らの身体は跳ね上がった。

反射的に着地点を探そうと足元を見る。が、安全な地面などなかった。

「見て!・根が……!」

「うわ!!」

宙に浮いた彼らを刺し殺すかのように、無数の木の根が地中から突き出して来たのだった。

「くっ……!」

サスケは大きく息を吸って全身を大きくひねった。

いつの間にか、身体の呪縛は解かれている。

耳のすぐ横を土まみれの根が通り過ぎて行ったとき、辺りに狂乱の風が吹いた。

悲鳴、爆音、地鳴り……周囲に集まり始めていた忍たちは、巨木の根から逃げ惑う。

蕾を付けたまま静止していた神樹が、生き物のように活動を始めたのだ。

地が割れ、根が天に向かって伸びたかと思うと、そこからさらに幾重にも別れた根が、人間を絡め取ろうとしている。

それはまさに、オビトが最初に神樹を口寄せした時のような光景だった。

サスケもちろん、その様子を思い出した。

そして、思った。

樹の活動の激しさは先ほどの比ではなかった。

今はもう、忍たちが地に足をつけることも危ういほど、樹は地底と地上とで縦横無尽に暴れ回っている。

「見る。神樹があれだけ喜んでいゝ。さすがは本家の血だ」  
マダラはナナに囁いた。  
と……。

「フフ……」

不意に、笑い声がした。

サスケが足場を確保しながら視線を向ける。  
笑っていたのはナナだった。

「どうした？ 自分の血で仲間たちが死んでいくのがおかしいか？」  
マダラがありきたりな皮肉を吐く。

「これほどの力が宿っていたことを知って嬉しいか？」  
が、サスケの耳にはそれが入ってすぐに流れて行った。

「ナナ……？」

ナナは蒼白のまま確かに笑っていた。それは見たこともない笑みだった。

「やつと今、わかった……」

ナナは言葉を発した。

「私は最初から……」

細くとも、この騒乱にかき消されぬ声で。

「産まれて来ちゃ駄目だったんだ……」

ナナはそう言い、息をついた。

失望でも絶望でもなかった。

ナナは明らかに、清々しい顔をした。

「なんだ……。そういうことだったんだ……」

身体は起こしたものの、切り裂かれた傷口を抑えることもしないから、溢れ出る血が地面に浸み込んでいく。

それでもその口元には笑みが浮かんでいた。

「ほう……。悟ったようなことを言う……」

そう返したマダラにも、口の端を上げて見せた。

恐ろしくも美しい……まさに、その表現が合っていた。



あれが「ナナ」でなければ、サスケ自身の脚も竦んでいたことだろう。

が、その顔がすぐに歪められる。

何かがナナの背後からものすごい速さで伸びて来て、ナナの血まみれの腕に絡みついたのだ。

サスケは赤い眼を凝らした。

新樹の幹から生えた細い蔓が何本も、ナナの腕の傷口に入り込んでいく。

それはまさに、ナナの体内の血をむさぼらんとしているようだった。

「ナナ!!」

次から次へと襲い来る根が邪魔をして、ナナの元へ駆け寄ることは困難だった。

それどころか、根は意思を持っているかのように、サスケの身体を確実に仕留めようと襲って来ていた。

ナルトとサイとの距離も開いた。

「これは想像以上だ。さすがは和泉一族本家の血……いや、和泉一族と我がうちは一族の『珠玉』の血だ……!」

マダラは自身にも向かって来る根を飛び越えながら、感嘆の声をあげた。

「これほど神樹が狂喜するとはな!!」

サスケは奥歯を噛みしめた。

あの男を倒すにも、この乱舞する樹をどうにかしなければならぬ。かといってここで須佐能乎を発動することはできなかった。

この樹は人のチャクラを喰らうのだ。

強大なチャクラを体現した須佐能乎は、樹にとっての大好物だろう。逆に力を与えることになるのは間違いない。

ナルトもそのあたりは心得ているようで、むやみにチャクラを放出するのを抑えているようだった。

サスケは根の「攻撃」を交わしつつ思案するナルトを横目で見た。が、一段と大きな地震が起こり、彼らはバランスを崩した。

「こ、この樹……、クラマたちまで……!!」

ナルトの視線をサスケも追った。

解放されたはずの尾獣たちが極太の根に巻き付かれて、再び自由を奪われている。

もちろん、彼らのチャクラは人間の比ではない。当然、それを喰らう樹はますます勢いを増していく。

忍たちが次々に倒れていくのも視界の端に映った。

サスケはナナに視線を戻した。

彼らを気にかけている余裕はない。今は一刻も早く、ナナを救い出さねばならなかった。

が、ナナは蔓に引つ張られ、その身体は完全に神樹の幹に捕らわれていた。

「ナナ!!」

もうその声も届かないほど、ナナから距離を開けられてしまった。

サスケは千鳥で迫る根を薙ぎ払う。

しかし、ナナの血はあまりにも神樹に愛されすぎたようだった。

「サ、サスケ!! 空がっ!!」

ナルトが叫んだ。

ナナを見つめていた眼を、わずかに上に向ける。

と、いつの間にか空の色が塗り替えられていた。

いや、違う。月の色が変化しているのだ。

先ほどまでは、不気味な赤い月だった。赤く不快な光が、天から地上に降り注いでいたはずだった。

それが今、月は赤から紫へ……そして、青へ……じわりじわりとその色を変えようとしていた。

そして改めて見上げて眼に入ったのは、神樹の梢に堂々と陣取る蕾だった。

あれほど赤く張り詰めていたはずなのに、今や蒼い塊となっている。

その色が何を、いや、誰を意味するのか、サスケにはすぐにはわかった。

息を呑むほど儼かな紺青……。戦慄するほど清雅な青白い光……。  
蕾はナナの血に染められ、月はナナの血に照らされている。

「お前は……神樹をも支配するか?!」

マダラは感嘆した。

……いや。

「この力……強すぎる……!」

先ほどまでのそれは一転、明らかに憂慮へと変わっていた。

根を吹き飛ばしながら、マダラはナナへ向かって行った。

それでもサスケはそこへ辿り着けない。

「もう十分だ。お前もこれ以上、血を流しては死ぬ」

マダラはその辺りに落ちていたサスケの刀を再び拾い上げ、ナナの頭上にかざした。

ナナの腕を狙っていた。

もう、蔓がぐるぐるに巻き付いて、ぎゅうぎゅうに締め付けられ、幹に吸収されかけたような、ナナの細い腕を。

「やめろ!!」

とっさに出した須佐能乎は、あっという間に根や蔦に絡めとられ、情けなく途中でしぼんだ。

だが、その刃が再びナナに突き刺さることは無かった。

ナナは、マダラを見上げた。

サスケはかろうじて、その様子を見た。

ナナは虚ろだった。鈍く首を動かしてマダラを見上げた。

その眼は、白かった。

「お前……!」

マダラが怯んだ瞬間、ナナの背の幹から数本の枝が伸びてマダラの胴体を直撃した。

その身体を突き破ることはなかった。

が、マダラはそのまま後ろに突き飛ばされて行った。

まるで、ナナの意思が樹に働いたようだった。

「ナナ……!!」

この計画を打ち立て実行した張本人のマダラでさえも、脅威に感じ

たその力。予想を大きく上回り、途中で止めねばならないと判断したこの力。

ナナが「あの時」から本当に恐れていたものは……？

火影岩で突然、昔のことを話し出したナナの眼を思い出した。

その完全な隙をついて、樹の枝がサスケの身体に襲い掛かった。

「サスケ！ 避けろってばよ!!」

ナルトの声で、辛くも避ける。

腕を少しかすった。それだけでチャクラが急激に減ったことを感じた。

このナナの力はマダラも制御できない。もちろん、ナナ自身も。いったいどこまで膨れ上がる？

この樹はどこまで成長する？

もう、花は咲くのか……？

「サスケエー！ とにかくこの木を倒すってばよ!!」

ナルトはまだ諦めてはいなかった。

「これじゃあナナんとここに辿り着けねえ！ ナナの腕も木と一体化しちゃまって、簡単に引き抜けねえみてーだ……!」

まだ、これを止められると思っていた。

「みんなで一点を狙うってばよ!!」

「ナルト！ オレが「本体」に穴を開ける！ そこを狙え!!」

いつの間にか、カカシがこの場に辿り着いていた。

「カカシ先生！ 樹に触ってなくてもチャクラが吸い取られるから、術は一瞬しか出せねーってばよ！」

「ああ、わかってる。だが、それを繰り返すしかない！」

尾獣が暴れ、いつそう地が揺れた。いつそ絡みつく根を地面ごと引き裂こうとしているようだった。

逃げ惑う者、諦めずに攻撃する者……彼らの行為もまた、この狂気を加速させる。

軋む根、そして枝の音。

樹はすでに自身の根と枝とを複雑に絡み合わせ、この戦場を全て覆い尽くす檻を作ろうとしているようだった。

騒乱で、カカシとナルトの声もかすかにしか耳に入らない。  
生きた「檻」となった樹は、触れていずとも周囲の生物のチャクラを吸い取っていく。

「ナナ……」

口内で呟いてチャクラを練ろうとした。

この檻を全て切り裂き、ナナへの道を切り開きたかった。

が、チャクラを形態化することすら、彼にも困難となっていた。

「神威！」

「螺旋手裏剣!!」

相次いで、カカシとナルトの声がした。

カカシが万華鏡写輪眼で睨みつける先……ナナが居る位置より下方の幹が、醜く歪んで引き裂かれるのがわかった。

だが、すぐにその動きは萎む。

開けられた穴は、直径1メートルにも満たなかった。

が、すぐさまナルトが頭上に掲げたチャクラの塊を「穴」へ向けて投げつけた。

それは急速に威力を弱めながらも、進行を妨げる樹を薙ぎ払いながら進む。

「そのまま行けえ!!」

ナルトの叫びは祈りに似たものだった。

そして、

「サスケ!!」

同時に彼を促すものでもあった。

「ああ、わかってる！」

サスケは、ナルトの萎みかけた螺旋手裏剣がかろうじて穴に当たると同時に、そこに天照を発動させる。

眼の奥が痛んだ。

目いっぱいチャクラを練ったせいで、膝から力がすり抜けて行った。

幹は悲鳴のように軋んだ。

が、螺旋の炎もすぐ、煙となって無くなった。

「くっそー！ もういつちよう!!」

ナルトが言った。

だが、彼もチャクラをうまく練られない状態になっているのは明らかだった。

サスケは顎の汗をぬぐった。

焦りが疲労を増幅させる。

早く……早くナナを……。

ナナへの視線を遮るように眼前に伸びて来た枝を、サスケは思い切り拳で叩き割った。

乾いた欠片の向こうに、再びナナの姿が映った。

ナナはこちらを見ていた。虚ろな、瑠璃色の眼で。

いや、それは不意にまた白く光った。

「サスケ……」

ナナがそう言った。

とてもか細い声だったはずなのに、確かにサスケの耳にはナナの声が聞こえたのだ。

「ナナ、待っている……!」

ナナの左腕は、もう完全に幹にめり込んで同化していた。

めくれた袖には枝が食い破った痕がある。

サスケは足元を狙うように襲い掛かる根を避け、前方に跳んだ。

ナナが呼んでいる……だから、行かなければならなかった。

ナルトがもう一発、螺旋手裏剣を放った。

先ほどより少しだけ大きいチャクラの塊が、元の穴をえぐる。

振動でサスケはバランスを崩した。それほどに、自身のチャクラも枯渇している。

「サスケ……」

また、ナナの声が聞こえた。

はつきりと、耳の奥で。

「ナナ……!」

「サスケ……お願い……」

ナナは虚ろな眼に、光を浮かべた。

「お願い……私を……終わらせて……」

また、ナルトがアレを投げた。

サスケの近くを高い音を立てて飛んでいく。薙ぎ払われた樹の破片が、サスケの頬に当たった。

サスケはそこに膝をついた。

衝撃が強かったわけではない。

「お願い……サスケ……」

まるで、ナナの願いが命を吸い上げたようだった。

幸せだった

「ナナ……」

「サスケ……お願い……」

まるで二人だけが異空間に閉じ込められたかのように、サスケの耳にはナナの声だけが聞こえていた。

「私を……終わらせて……」

言い終えて、ナナは咳き込んだ。

血が口の端に滲む。

それでも彼女に駆け寄る力が……いや、勇気が、サスケには無かった。

「終わらせろ……だと……?」

「もう……誰にも止められない……だから……」

ナナの願いは、まるで呪縛のように……。

「だから……アタタが終わらせて……」

サスケの首を絞めつけた。

「なに……言ってる……」

ギユウと締め付けられた喉の奥から、懸命に声を絞り出した。

「どうということだってばよ!」

よりはつきりと問い質したのはナルトだった。

彼は枝をかくぐって、再び近くまで来ていた。

「ナナ! それってば、どうということだってばよ!」

ナルトの全身から、怒りが惜しげもなくほとばしる。

が、サスケの心は凍てついたまま。そこから一步も動けはしなかった。

「この樹を止めるには……私を……」

「そんなこと、できるわけねえだろっ!!!」

ナルトはナナの言葉を打ち砕いて、腹からそう叫んだ。

彼に襲い掛かる樹さえも、躊躇うほどに。

「こんだけでつけえ樹でも、みんなでちよつとずつ穴開けて……ぜっ



てえ切り倒してやるから！ だから……！」

「この樹は倒せない……この、力は……」

今度はナナが、彼の言葉を断ち切った。

とても、静かに。

「ナナ……」

「わかってるでしょう……？」

ナナはナルトを見て、サスケを見た。

「アナタたちなら……もう、わかるよね……？」

サスケは突き付けられたモノから眼を逸らした。

「私の……中にある……チカラ……」

ナルトの声が遂に途絶えた。

サスケが思い知ったこの想像を絶する力の形が、ナルトにも見えて  
いるようだった。

何故なら……コレと同じ類のものが、自分と、そしてナルトの中にも  
あると実感していたからだ。

その正体はわからない。何故そうなったのかもわからない。自分  
たちがそれを得た訳もわからない。

が、確かにわかるのは、ナナが得た力と自分の中にある力。そして、  
ナルトの中にある力。

それが……見えない縁で繋がっているということ。

いつが始まりかも知らぬまま、誰が仕組んだかも知らぬまま。

だが、それがたとえ「不変の真実」だとしても……。 「運命」「さだ  
め」「宿命」……そんな陳腐な言葉で片づけられてしまう事実だったと  
しても。

サスケは……。

「ナナ、お前は……オレが助ける……」

どうしても、ナナの願いを肯定するわけにはいかなかった。

「約束しただろう……?!」

約束をしたのだ。ナナをまもる……と。

懐かしいあの場所で、ナナを傷つけたあの場所で、今度は護ると  
……。

今度こそ「本当の想い」を告げたのだ。  
が……。

「そうだよ、サスケ……約束……してくれただしよう……？」  
ナナは無慈悲にもこう言った。

「私を、もう……『誰にも利用させない』……つて……」  
言葉を失った。

確かに言った。だが、それはこんなことじゃない。

「サスケ……私、これ以上……こんな力で、みんなを……傷つけたくな  
い……」

自分のこと以上に他者を思うナナを、「終わらせる」ことじゃない。

「だから、お願い……」

こんなところで、終わるためじゃない。

「ナナ！ もうやめろ!! オレらが……」

ナルトが何か叫んでいるが、耳に入らない。

また足元の根がせり出して来たが、打ち砕くことはできない。

「やつと、わかったの……」

ナナは笑っていた。

「私は、最初から存在しちや駄目だった……」

痛みも悲しみもない、清々しい顔で。

「だから、生きることがこんなにも苦しかったの……」

内側から、絶望が溢れ出した。

「愛されるはずが愛されなかったのも、話したいのに話せないのも、力  
なんていらぬのに持っていたことも、殺したくないのに殺さなきや  
ならなかったのも……一緒にいたいのにいられなかったのも……全  
部……」

絶望は血流に乗り、全身を硬直させる。

「全部……、私の命が間違っていたから……」

ナルトさえも声を出せない。

奇妙な静寂の中、ナナは言った。

「それがわかったから……私は今、すごく楽になった……」  
つまらないこじつけや強がりなんかじゃない……。

ナナを良く知っている。だからわかった。

「仕方なかったって思えたら……やつと……楽になれた……」

柵からの解放……。

ナナは心から幸福そうに笑っている。

(なんで……)

出逢いさえも「間違い」だったというのだろうか……。

そんな疑問は独りよがりだとすぐに気がついた。

すぐ近くでナルトがナナに何か言っている。

だがサスケは言葉を失っていた。

わかつているのだ。ナナがどれほど苦しんできたか。

イタチを失って流した涙の冷たさは、まだこの腕の中にある。

ナナの心は傷つき果て、もうズタズタに引き裂かれているのだ。

そこには当然、自身がつけた傷もある。無意識に、仲間たちがつけ

た傷も。ナナ自身、避けようとしなかった傷もある。

それでもなお、何度も立ち上がり、前に進もうと必死で生きてきた

ことも。

よく、わかつている。

それらが全て「仕方がなかったこと」と、ナナは理解したのだ。

どんなに足掻いても、正しくあろうとしても、最初から間違ってい

たのだから直すことはできなかった……と。そして、これからも

……。

「だからもう、終わらせなくちゃ……」

全身から力が抜けて行った。

迫り来る樹の一部を掃う気にもなれなかった。

「サスケ!!」

ナルトの背が視界に入った。が、何を言っているのか理解ができなかった。

「サスケは叶えてくれるでしょう……?」

聞きたくはない、ナナの声しか聞こえない。

「私の……」

まっすぐに見つめてくる、瑠璃色の視線しか見えない。

「……願い……」

その残酷な笑みしか……。

「サスケ……」

ナナはマダラが落として行った刀へ右手を伸ばした。

左腕は樹に飲み込まれていて、身体は完全に自由を奪われている。少し顔を歪め、懸命に身体をよじって、やっと刀を握った。

そして唐突に、その刀で己の心臓を突き刺した……。

「ナナ!!」

ナルトの悲鳴が鼓膜を揺らした。

刃を握ったナナの手のひらからは鮮血が流れ出ていた。が、胸からのそれは無い。

刀は“盾”に当たって動きを止めていた。

また、あの青白い星の光だ……。

「サスケ……ごめんね……」

ナナはそんなことをしておいて、それだけ言った。それだけでも、サスケにはわかった。

ナナがそうしたのは、きっと今が初めてではない。

いつ……??

「あの後……か……」

サスケは喘いだ。

「……うん……」

ナナはやはり肯定する。

あの時すでに、ナナはこうすることを決意していたのか……。じゃあ、あの場所で唐突に七班が始まった時の話をしたのも……。

「ごめんね……サスケ……」

イタチの話をしよう……と言ったことも、ナナは……。

「私に……未来なんて、無かったのに……」

また、だ……。

また、ナナのことを一番よく知っていると言っていると自負しておいて、また、ナ

ナを独りで行かせてしまった。

「でも、仕方がないよね……」

何故そんなふうには笑うのか、仕方がないことなんてない……近くでナルトがそう叫んでいる。懸命に枝や根を払い除けながら。

ときおり無防備に立ち尽くすサスケの腕を引っ張って、立ち上がらせようとする。

だが、サスケはナナだけを見ていた。

「もう、終わりにしよう……」

その眼が、ガラス玉のように光った。

「サスケ……」

儂い願い。強い意志。

相反するその姿が、とても美しく、哀れだった。

そしてそれは、サスケにとってこの上もないほど冷酷だった。

「お願い……」

ナナは手にした刀を差し出した。

重い鉄の棒でも持たされているかのように、その腕は震えていた。

「私を……まもって……」

理不尽な誘いは、とても美しかった。  
が……。

「うっ……」

その笑みが突然歪んだ。

「ナナー！」

呼びかけたのはナルトで、やはりサスケは動けなかった。

「ほら……」

ナナは刀を落とし、手で額を抑えた。

しかしすぐにその手で乱れた前髪をあげた。

「ほら……見て……」

視線だけまっすぐにナナを捉えながら……サスケは見た。

ナナの額が醜く蠢いているのを。

「もう……止められないの……」

肌の内側で何かが激しく動いている。

そして……ナナが軽く咳き込んだ時、そこには真横に一線の筋が通った。

「もう、止められない……」

そこが上下に開きかけたその時、ナナは再び手で額を隠した。

その左眼は、白く濁っていた。

「私が私でなくなる前に……このまま……」

それでも、ナナの右眼の奥には確かに意志があつた。

「私」のまま……終わらせて……」

その光は、いつもサスケの心に在り続けた。

消そうとしても消えない光。決して強くはない儂げな光。

「サスケ……」

ナナのそれが、ずっと愛おしかった。

「私は……」

風が吹いた……。

「アナタを愛せて……幸せだった……」

幻のように、ナナは笑っていた。

「この想いが……消されちゃう前に……」

綺麗に笑って爽やかに言った。

「私を……殺して……」

幻術にかけられたように、サスケの足が一步動いた。

「ナナ……」

名前を呼んだ。心でいつも呼び続けていたその名を。

「ナナ……」

ナナの可憐な笑みに誘われた。

あれを歪ませてはならないから。もう、悲しませたくはないから。これ以上、傷つかないでほしいから。約束を果たさなければならぬから。

だから……。ナナの願いを叶えてやらなければならない……。

「サスケ!!」

肩をグイと掴まれた。久方ぶりに、耳に騒音が響く。

視界には、いくつもの棘を生やした太い枝が迫って来ていた。

「さがれつてばよ!!」

ナルトの声がして、目の前で枝が木端微塵に散った。

周囲には数人のナルトが息を切らして立っている。

「サスケ!!」

一人のナルトが、肩を強く揺さぶった。

「お前っ！ ナナを殺すなんて、お前ができるわけねえだろ!!」

そう叫ぶ彼の目の奥には、怒りの他に見たこともない色が彩られている。

「ナナを『まもる』んだろ?！」

その色を、サスケはよく知っていた。

「お前がナナをあそこから救い出さねえで、どうするんだってばよ！」

相変わらずの、強い言葉……。

だが、その色は「強さ」じゃない。

きつと、ナルトが初めて浮かべているであろう、単純な「恐れ」だ。

「カカシ先生が穴を広げようと神威で頑張ってる！ シカマルたちもこつちに向かっている！」

ナルトも悟っている。

「オレらもあそこの一点を狙うぞ!!」

強気という言葉と裏腹に、ナルトはすでに悟っている。

ナナの……宿す力の恐ろしさを。そして、変えられない未来を……。

「ナルト……お前……」

本当は、わかっている……。

「ナナは左腕を樹に食われちまって、目の前でみんなが倒れていくから、ちよつと弱気になってるだけだつてばよ！」

ナルトはこの状況には不自然な、やけに軽い口調で言った。

「このまま影分身で連続攻撃すつから、お前も千鳥で続けつてばよ！」

そして顎に滴る汗をぬぐった。

すでに、彼でさえも疲弊しているこの状況……。

サスケは改めて、周囲を意識した。

樹の動きはだいぶ鈍っていた。

もう、枝や根はこのあたり一帯を埋め尽くしていたから、それで満足しているのか、それとも自らの枝が邪魔して成長速度が落ちただけなのか……。

枝や根に囲まれて逃げ場を失った忍たちは、成すすべなくチャクラを吸い上げられ、そのほとんどが倒れていた。

抵抗する者はまだあったが、樹を破壊すると同時にそこを補うように別の根が伸びて来て、もはや脱出も不可能だった。

サスケの目で見通しても、この神樹の森の切れ間は見つからなかった。

尾獣たちは向こうで抵抗し続けていたが、地の揺れが弱くなっているところを考えると、彼らのチャクラのほとんどが、神樹の肥料となっているようだった。

「サスケ……」

ナナの声がサスケの視線を引き戻した。

もう、全く血の気の無い顔。唇に滲む血。赤く染まった着物。血みどろの左腕。白く濁った右眼と、冷たく光る黒い左眼。

それでもやはり、ぞつとするほど美しかった。

「サスケ！ 行くぞ!!」

胸をギユウとつかまれるような感覚を遮るように、ナルトが言った。

「樹を止めて、ナナを助け出すってばよっ!!」

サスケが抱く想いと、ナルトが秘める迷い……。そして、ナナが滲ませる恐れ。

それらを一刀のもとに断ち切るように、彼はいつも以上に大きな声を出す。

「カカシ先生ー!! もういっちょ頼むってばよ!!」

ナルトの分身が一体、力尽きて煙と消えた。



が、ナルトはそれを無視して下方の根に膝をつくカカシに叫ぶ。

「穴が修復する前に、オレらが攻撃する!!」

カカシは大きくうなずいて、先ほどから狙う一点に神威を発動させた。

幹がゆがむ。根や枝が怒りの咆哮を上げながら、カカシに襲い掛かった。

サスケの足場も、大きく揺らいだ。

「行くぞー！ サスケっ！」

ナルトは分身を連れて、そこへ一気に駆け出した。

一瞬、彼の膝から力が抜けたのを見た。

が、かまわず障害となる枝や根を打ち碎きながら、走って行った。

ナルトの背からまた、ナナに視線を戻した。

「サスケ……」

左眼が……白く濁った。

下で爆音が上がった。

ナルトが、かろうじて形を保ったままの螺旋丸を、カカシが開けたあの穴に投げ込んだのだろう。

また、大きく足元が揺れた。木片ときな臭い煙が二人のところまで上がった。

ナナはそれらに覆われながらも、サスケを見つめ続けていた。

光を失いゆく眼で……。

「サスケ……お願……い……」

切れ切れにそう言うと、額を抑えていた手をだらりと下ろした。

もうその腕に、力は少しも残っていなかった。

## 愛しいひと

何かが失われていくのを、サスケは感じた。  
愛しき者は、目の前に居る。

が、たった一人のそのひとが、この目に映らなくなってしまふ。  
奪われる。いや、消されゆく。

それは時が流れることと同じように、抗えないことのように思えた。

ナナが愛おしかった。

絶対に折れない心……その哀れさも強さも。少し浮世離れして天然なところも。苛立つほどに好きだった。

笑顔が可憐だった。

たとえその裏側に必死で闇を押し込めていようとも、それはやはり可憐に見えた。

苛立ち、怒った顔も、特別だった。

自分だけに見せる顔だったから嬉しかった。

涙は……今も、とびきり綺麗に光っている。身を削るような哀哭でも。絶望を超えた透きとおる雫も。全てを受け止めていたかった。

短くて癖のない黒い髪も、漆黒の双眸も、青白い頬も、目を奪われた。

気配を抑えて過ごす控えめな振る舞いも、悲しい理由を察しつつも惹かれていた。

何より自分にとって一番の、いや、唯一の理解者だった。言葉で伝えなくても、いつの間にかわかっていてくれる特別な存在だった。

春風のような涼やかさと、柔らかさが、心地よかった。

何気ない仕草にも、目はナナだけを追っていた。

本当は、最初からナナを護りたかった。ずっと側にいたかった。触れたかった。抱きしめたかった。

出逢ったあの日から、ナナを想わない日は一日もなかった……。

今さら……。そんな自分を思い知る。自分の想いを確認する。愛

が、これだけ深かったのだと気づく。

ナナがどれほど愛おしかったか、胸の痛みが証している。

目の前で、息も絶え絶えに“己の死”を懇願するナナは、やはり美しかった。

髪は乱れ、顔はぞつとするほど青白く、身体の半分が血まみれで、左腕は醜い木肌にめり込んでいる。

それでもやはり、美しかった。ずるくても、残酷でも、清白だった。そのナナが……奪われる。

何か手出しができない力に、消されようとしている。

サスケにははつきりとわかった。

きつと、ナルトも……。

ナナの幻妖な瑠璃色の眼から、弱くても美しかった光がしぼんでいく。

徐々に白濁していく瞳は、ナナのものではなかった。額には醜い何かが現れようとしている。

ナナはそれを恐れている。

はつきりと恐怖を口にした。いや、助けを求めた。

愛しいひとに救いを求められること。決して折れない心が弱る様を、さらけ出されること。全てを抱え込むほどの強いひとに、最後の頼みにされること。その“たったひとり”になれること。

嬉しかった。

ずっと、そうしてほしいと願っていたことでもあった。

この手で突き放し、傷つけ、それでも捨てきれなかった存在。同じこの手で、本当は護りたかった。

だから、ナナ……。

心は決まった。いや、初めから答えは決まっていた。

ナナを護る。

誰よりナナを愛した自分だから……そう自負しているから。

サスケは両のこぶしを握った。

力はまだある。ナナの眼を見つめ、それを確認する。

たとえ込めた力が片っ端から奪われようとも、枯れないだけの想い

があった。

「ナナ……」

応えはなかった。

萎む光。濁る瞳。止んだ風。

が、ナナは笑んだ。

それでももう、十分だった。

サスケは左の腕に千鳥を発動させた。

千の鳥が泣き喚く。

それを余すことなく喰らい尽くそうと、樹が激しく動いた。

サスケは跳んだ。

ナナの……下方の根へ。カカシが開け、ナルトが広げた穴へ。樹が無情にも自ら修復し続けるその場所へ。

チョウジがそこに体当たりをした。シノの虫たちもチャクラを吸い尽くされるまで穴にへばり付いた。墨の虎も噛みついた。

樹は碎け、穴は格段に広がった。焦げた臭いと白煙、そして木っ端が舞う。

サスケはそこへ突っ込んだ。

雷を纏った左腕をまっすぐに突き出した。

煙を散らすと、行く手には焦げ付いた穴……いや、木肌にできた“傷”が見えた。そして乾いた樹皮が、見る間にその傷を塞いでいく……。

その光景が、“白い影”に遮られた。

煙ではない。風……だった。

千鳥は風を切り裂いた。

青白い稲妻が爆ぜる。

ドン……と、風の向こうの樹が爆音をあげた。

この腕に痛みはない。痛むのは胸の奥だ。息もできないほどの、痛みだ。

あたたかかった。柔らかい風だった。まだ涼やかな、春の匂いがした。視界が歪んだ。膝が震えた。

だが、前を見た。目を見開いて、目の前を。

ナナが、笑っていた。

(ナナ……)

この安らかな笑みは、自分だけのものだった。

憐れな生を受け、壮絶な道を歩き、それでも可憐に生き抜いたナナは、最期に笑ってくれた。

ナナを、愛し抜いた。

深く想い合つて、魂で繋がっていた。

そんな、互いに唯一の存在だったからこそ……。

だからこの手で護り通さなければならなかった。自分こそが、救われねばならなかった。

懺悔、悔恨……それらを全部忘れて、ただひたすら愛のために、この身を捧げた。

左の腕を、引き抜いた。

崩れ落ちる体を、強く抱きしめる。

身体はすでに冷たくなっていた。

あの術のせいだとわかっていたが、最期まで「つれない」ところがナナらしいと感じた。

だが、この手で開けた胸の穴と、もぎ取られた左腕の傷口から溢れ出る……命。

それは確かに温かかった。清らかで気高い命が、サスケの身体を温めるようだった。

ナナの純白の着物が紅く染まりゆく。それさえも美しく見えている。

顔を見た。

口元の花笑み。それは泥と血とで汚れているのに、この世のどんな花よりも綺麗だった。

ナナを愛し尽した……。

この笑みは、ナナが遺したその証だった。  
だから涙は出なかった。

それでも、心は静かに音をたてる。

ナナ……お前の願いを、オレは叶えてやれたのか？

お前にずっと巻き付いていた枷を、本当に取り去れたのか？

お前は本当に幸せだったのか？

オレは、お前を救えたのか……？

あれほどわかり合えていたはずなのに、疑問の泡がぶくりぶくりと湧き上がる。

が、応えはもうないのだ。

その唇も、まぶたも、想いも……永遠に鎖されてしまった。

『アナタを愛せて……幸せだった……』

あの言葉を抱いて、この世界で息をし続けるしかないのだ。

ナナのいない、この世界で……。

あの言葉がナナの真実だったなら、それほど幸せなことはないのだから。

ナナ……。お前は、オレを愛してくれていたのか？

応えは、ない。

長いまつげは、もう風に揺れることもなかった。

ナナ……。オレは、お前を愛し抜いた……。

この想いに代わるものは何もない。永遠に消えることはない。ほんの少しも薄れることはない。

ずっと変わらず、この胸にあるから……。

だから、ナナ……。

お前はオレの永遠になった。

ナナ……。

たとえこの命が尽きても、想いは変わらない。

ナナ……。

これからは、ずっと……。

## 迅雷は繰り返す

カカシの目の前で、二十数年前と同じ光景が蘇った。  
いや、あの時はとは違う。あのとき主観で見っていた光景を、今は客観的に見ている。

あまりに完全な「一致」に、驚愕というより茫然とした。

信じがたかった。悲しむというより、疑問が湧いた。

……一体……何故……？

その後は、言葉カタチにならなかった。

オビトに後押しされ、ミナトの援護を受ける形でナナの元へ向かった。

だが、カカシがナナの元へ辿り着くことはできなかった。ナナが落ちた方角へ放った忍犬たちが、探索を止めたのだ。

「もう、あそこにナナは居ないようだ」と、パツクンが言った。

彼にもただ「ナナの気配が無い」というだけで、それがどういう訳なのかはわかり得ないようだった。

砂塵が舞う風の中、ただでさえ気配の薄いナナを感知することは難しかった。

ナナはいつたい、どこへ……？

焦る心を落ち着かせ、シカマルたちのところへ走った。

が、彼らから事情を聞く前に、異変が起こった。突然大地が鳴動し、大気が激震したのだ。

それはカカシでさえも足をとられるほどの激しさだった。

初めは、何が起きたのかわからなかった。

ナルトやサスケのマダラに対する攻撃がこの地を揺るがしたのだろうと思っただが、一発や二発の攻撃で止むような揺れではなかった。

地面から突き上げるような振動。続けて地表を突き破って現れた木の根を目にしたとき、やっと気がついた。

成長を止めていたはずの大樹が動き始めたのだ。

十尾が消えたことで歓喜に沸いた戦場が、再び阿鼻叫喚に包まれた。ナナ搜索のため頼りにしていた忍犬たちも、あつという間に全員が消えていなくなった。

無数の根や枝が、地中や空中から大蛇のように襲い掛かって来た。それらがチャクラを吸い上げていることは、すぐに気がついた。まるでこの戦場を樹の柵で取り囲むように、いや、忍たちを檻に閉じ込めて逃がさぬとでもいうように、樹は狂気の中にも意思を持っているかのように動き回った。

そんな時、懸命に樹の根を避けながらヒナタが言った。

「ナナちゃん……?!」

彼女らしからぬ悲鳴のような叫喚だった。

その視線の先を見た。白眼を持たないカカシには、そこにナナがいるのかわからなかった。

だが、

「ナルト君!!」

ヒナタには見えていた。

樹の幹……といっても、すでに山ほどの大きさに成長していたが……そこにナナとナルトが居るといふ。そして、サスケも。

「ナナちゃんが、こゝ、この樹に捕らわれているようです……!」

ヒナタは疲弊しながらも、懸命に状況を伝えた。

それはとても詳しい説明とは言えなかったが、想像だけでぞつとてきた。

そして、オビトが明かしたことで現状が重なって憤りを覚えた。

急いで上空を仰いだ。

四方八方から飛び交うように動き回る枝や根の向こうに、樹の幹

…… “本体” がある。

その頂に座す蕾。

『無限月読は、神樹の花が開いたときに完成する……。その花が開くためには “和泉一族” の血が必要だ……』

何故かはわからない。が、うちはマダラの計画が遂行されている。

あの蕾のために、ナナの “血” が流れているということなのだ



……。

「カカシ先生!!」

息を切らしながら近づいて来たシカマルたちに、カカシはオビトから聞いたことの全てを伝えた。

できるだけ、整然と。

当然、彼らは愕然とした。

ナナの血の力、そしてマダラの計画の真意に……。

が、彼らが現実を受け止めきれない理由が他にもあった。

「なんで、ナナが『あつち』にいるんだ!?!」

そしてその理由は、カカシにとっても耳を疑うものだった。

「どういうことだ?!」

「ナナはキバが連れて行っただろ……!」

「戦場から離れた場所へ逃がしたはずだ……!」

「なんでまったく逆の方向にいるのよ?!」

普段は冷静なシノまでもが声を荒げる。

だが、ヒナタの眼がとらえた光景に疑いようはない。間違いなく、あの大樹のところにナナがいるのだ。そして今、あの稀有の血が流れている。

「ヒナタ、詳しく話せ。ナナは今、どんな状況だ?!」

ヒナタはナナが「樹に捕らわれている」と言った。

その詳細が知りたかった。いや、生きているのか……知りたかった。

「左の腕が、樹の幹に吸収されているような形で……身動きが取れないようです……」

ヒナタは何度も視界を邪魔されながら、やっとナナの状態を告げた。

次いで。

「ナルト君とサスケ君が近づこうとしていますが、樹に邪魔をされて……」

反射的に叫んだ。

「オレも行く! 援護を頼む!」

この場に居る忍たち全員で樹を斬り倒すのが、おそらくこの現状とナナを救う最善の方法なのだろう。

が、連合の忍たちはチャクラを失ってその場に倒れるか、動けるものは樹を避けるのが精いっぱいの様子だ。

しかも恐怖と混乱に揺れる空気の中、彼らの意思を統一することは不可能である。

いのの術も、この状況では発動が難しい。

ここにいる、木の葉の若い忍たちの力を頼るしかなかった。

目に見えて精神を消耗しきっているシカマルが、それでもしやにむに頭を働かせて、最も効率の良い方法を考える。

彼を信頼しているカカシは、もちろんすぐさまそれに従って動いた。

周りの仲間たちも同じだった。皆、動揺と失望を抱えながらも、シカマルの指示に従う。

チョウジとシノが、シカマルが示した陣形から、太い枝をぶち抜いて道を作った。

カカシはそこへ突っ込んだ。

この仲間たちと、自身の左眼が頼りだった。

ヒナタが言ったナナの状態を想像するに、今の状態からナナを救出するのは困難だった。

だからやはり、樹を斬り倒すしかないのだ。この、意思を持ったように暴れ狂い、あるいは十尾よりも脅威であるこの大樹を。

蕾が開く前に。ナナの命が、そこに吸い尽くされる前に……。

この眼で樹を斬る。いや、せめてこの動きを抑えるくらいの外傷を与えたかった。

きつと、ナルトとサスケも同じことを考えているはずだ。

二人が一番ナナの身近にいて、どれほど目の前のナナを救い出したかと思っているか……カカシにはよくわかる。

二人が……サスケが……どれだけナナを想っているか知っているから。二人にとって、ナナがどれほど特別な存在であるか、第七班として過ごしていた時から、良く知っているから。

そして、自分も。

空が青黒く色を変え始めた。

頭上にちらちらと見え隠れする月。その色が、まるで邪悪な赤から神秘の青へ生まれ変わっていくようだった。

「サスケエー！ とにかくこの木を倒すつてばよ!!」

うねうねと視界を駆け回る根の向こうから、ようやくナルトの声が聞こえた。

「これじゃあナナんとここに辿り着けねえ！ ナナの腕も木と一体化しちゃまって、簡単に引き抜けねえみてーだ……!」

その明るい髪が垣間見える。

カカシは幹の方を見た。自らが闇雲に伸ばした枝のせいで、木肌が割れている部分がある。

とつさにやや上方にいるナルトに叫んだ。

「ナルト！ オレが『本体』に穴を開ける！ そこを狙え!!」

近くまで来ると、まるで秘境の絶壁のようにそびえ立つ幹だ。

それでも、迷うことは許されなかった。

「カカシ先生！ 樹に触つてなくてもチャクラが吸い取られるから、術は一瞬しか出せねーつてばよ!」

「ああ、わかつてる。だが、それを繰り返すしかない!」

やや上方からのナルトの声。そこにサスケも居ることはわかつていた。

ナナがどんな様子なのか気にはなったが、先ほどの場所よりももっとそう激しく襲い来る樹を避けながら、そこへ向かっている暇は惜しかった。

「神威……!」

カカシは幹の一点に向けて術を発動した。

込める力が、片っ端から抜き取られていく。

が、樹皮は歪み、確かに穴が開いた。

「螺旋手裏剣!!」

それが開ききる前に、ナルトが螺旋手裏剣を放つ。

樹は穴を修復させようとしていたが、ナルトの攻撃は穴をこじ開け

るようにして当たった。

投げた時より、かなり小さく萎んではいた。それでも、カカシの開けた穴を広げる形となった。

さらに、穴は黒い炎に包まれた。

サスケの天照だ……。

その闇の色を目にして、少しだけほっとした。

が、焦げた臭いがそこらを充満する前に、樹は悲鳴を上げつつも己の細胞を操った。

「くそ……！」

ぜえぜえと肺が音をたてていた。眼の奥もズキズキと痛む。

もう一度、神威を……。

焦る気持ちと反対に、チャクラは立っているだけで失われていく。

「くっそー！ もういつちよう!!」

ナルトが再び螺旋手裏剣を放った。

先ほどよりわずかに大きいそれが、ナルトの根性を表わしていた。カカシは大きく息を吸って、神威を発動する。

肺が千切れようが、心臓がパンクしようが、もうどうだってよかった。

「神威！」

「螺旋手裏剣!!」

治癒する間を与えず、傷口を広げる。

我慢比べのようだった。

こちらが一方的に、力を吸い取られながらの、戦いだ……。

「カカシ先生！」

そこに、サイが加わった。

描いたそばから墨に戻る「獣」のうち、ようやく1頭の虎が穴に向かう。

波状攻撃……それが理想だった。

が、分が悪いのは明らかだ。

「ダメか……！」

せめて、動ける者が全員ここに集結してくれば……。

ズキンと痛んだ眼を抑えながら、カカシは後方を見た。

樹の動きはいつの間にか鈍くなっているようだったが、ここら一帯は完全に根や枝に囲まれていた。

サイも、近くの枝の上で膝をついた。今の一撃が、最後の技だったようだ。

が、彼の向こうにシカマルたちの姿が見えた。

彼らがここへ向かっている。

動きを見る限り、彼らもまた樹を避けながら歩みを進めるだけで精一杯だった。

だが、やるしかない。道は一つしかないのだから。

たとえ、数十回……いや、数百回繰り返し返さねば倒せないとしても。

「カカシ先生ー!! もういつちよ頼むってばよ!!」

上の方から、あきらめることを知らない仲間の声がした。

「穴が修復する前に、オレらが攻撃する!!」

「オレら」が、ナルトと誰を指すのかわかるから、また少しほつとした。

カカシは大きくうなずいて、なけなしのチャクラを左眼に集めた。

穴が広がった。

たった直径5メートルほど。向こう側など見えるはずもない。

それでも、ナルトが螺旋丸をそこに撃ち込んだ。

衝撃はあった。地……いや、足場である樹の根が揺れるほどの衝撃だ。

さらに、チョウジもそこへ体ごと突っ込んだ。シノの無数の虫が、木肌を食い破った。サイももう一度、牙をむく獣を描いてそこへ攻撃させた。

そして……聞き覚えのある高い音が鳴った。千の鳥が鳴いたような音だ。

それは他ならぬ自分がサスケに教えた雷切、いや、千鳥だった。

青白い光が空気に吸い取られ、鳥の鳴き声が弱まりながらも、サスケは皆で広げた穴へ向かった。

やはりサスケでも、ナナに近づくんことはできなかつたようだ。それ

でも、ナナを救い出そうと仲間と共に戦っている。  
かつてのように……。

近くで息を整えるナルトも、どことなく嬉しそうな顔をしている。  
カカシの眼には、風をも切り裂くサスケの光が、絶望の中のかすかな  
希望に見えた。

だが……そう思った次の瞬間に目にしたのは、希望などではなかつた。

千鳥は形状を保ったまま放たれた。

サスケは利き腕の左手でそれをぶつけたのだ。樹の穴に……。  
いや……。彼の腕は樹に触れることはなかった。

彼の腕は、ナナの胸を貫いていた。

……一体……何故……？

最初にそう思った。

何故、サスケの前にナナがいるのか。何故、“あの時”と同じ光景  
を、視点を変えて見ているのか。

いや、これは現実なのか……？

雷を喰らった樹の爆音と、樹が焦げた臭いが、ここが現だと主張し  
ていた。

だがそれでも、足を動かすことはおろか、声を出すことさえもでき  
なかった。息をすることさえもままならない……。

何故……？ 何故だ……？

疑問が、全身を雁字搦めになっている。

決して解けない鎖だ。

何故だ。何故、自分とリンがあそこにいる？

脳が麻痺する。

何故、雷切はまたも、愛しい者を奪う？

感情は湧かない。

何故、サスケがナナを……。

初めに動いたのは、ナルトでも、シカマルでもなかった。もちろん、

自分の足でもない。

樹……だ。樹が動いた。

いや、逆だった。その動きをピタリと止めたのだ。

サスケの放った千鳥がナナの身体を突き抜けて、あの穴に滑り込んだ。  
だ。

ナナの血が、そこに飛び散った。

その穴は、結界に縛られたかのように一切の修復活動を行わなかった。穴から麻痺が広がったかのように、樹は動きを止めた。

そして、根や枝の先端や、そこに生えた細かい棘が、徐々に朽ちていく。

かろうじて視界の端にそれが見えた。

が、注意深く観察する余裕などなかった。

まだ、視線はサスケとナナに捕らわれたまま、少しも動かすことはできない。

「ナナ……」

誰かが呟いた。

周囲の喧騒がざわめきが変わって、誰かの呟きが聞こえたのだ。

「サスケ……」

「ナナ……」

乾いた声のどれも、吐き出すのに意思が働いていなかった。

「ナナ……？」

ただ目に映るモノ……それを受けた脳がショートして、勝手に口からこぼれ出る声。

それすらも出せないカカシは、ただひたすら目を見開いていた。

サスケが、ナナの身体から腕を引き抜いた。

かすかに聞こえる、水の音……。

サスケの腕を染める、赤い液体。

そのまま、サスケはナナを抱きしめた。

膝について、そっとナナを横たえて、抱きすくめた。

その背は、震えてはいなかった。ごく自然に、動かなくなったナナを抱いていた。

じわじわとナナの純白の着物が赤く染まっていく。  
残酷な現実を突きつけるように、血の匂いが漂った。



徒花（あだばな）

「ナナ……！」

先ほどよりもはつきりと聞き取れる。まだ戸惑いを含む……が、現実を理解し始めた声だ。

その証拠に、それらの声はどれも震えていた。

「ナナ!!」

「ナナ!!」

知っている者たちだ。

懸命に頭を動かし、感情を押さえつけた者たちが、その足を進める。だが、二人の側にまで寄る者はない。

そこだけ、まるで絵のように切り離された空間のようで……ただ見守ることしかできない。

「サ、サスケ君、診せて！ 私が……！」

サクラが来ていた。おそらく必死に動揺を押し殺しながら、自分の役割を果たそうとしている。

が……。

「サクラちゃん……」

意外にも、彼女を止めたのはナルトだった。

「え……？」

「もう……」

ナルトはうつむいたまま、低い声で言った。

「ナナは……もう……」

決して最後まであきらめぬことを知らないはずの男が、そう言った。

ここでようやく、カカシは息を吐いた。

同時に、何もかもが吐き出されてしまったようだった。

「サクラ……」

ただひとつ、彼らの上司として果たさねばならない義務だけを手に、

「もう、ナナを……休ませてやろう……」  
やつと、そう言った。

見る間に、サクラの目には涙が溢れる。それを、まともに見てはいられなかった。

他の者たちも、その「宣告」を聞いて次々にその場に膝をつく。

チャクラを吸い取られ、力を使い果たし……そしてナナというかけがえのない仲間を失った。

もう、限界だった。

「くそっ……!!」

「なんでナナが、こんなっ……!!」

「ナナ!!」

拳を根に打ち付ける者。頭を抱え込む者。茫然と立ち尽くす者。嗚咽に交じる憤悶。

だがそこに、サスケを責める言葉も感情もなかった。

彼らもわかっていた。

この結果が導かれた理由を……。

ナナの「願い」を直接聞かされたシカマルたちも。動揺もせず、落胆するだけのナルトも。オビトから予測を聞かされていたカカシ自身も。

何故、こうなったのか、本当はわかっていた。

ナナは……自らサスケの雷切の前に飛び込んだ。

かつてのリンのように……。

だから、あの時と同じ光景があんなにも鮮やかに蘇ったのだ。

だが、ひとつだけ違うのは、サスケ自身もそれを悟っていたということ。

突然、目の前にリンが現れたことに狼狽した自分とは違う。

サスケは知っていた……ナナがこうすることを。

『ナナは、とっくに自分で自分の存在を始末しようとしたはずだ……』

オビトの言葉を思い出す。それにまるつきり納得した自分も。

これは、ナナの意志だった。ナナの、最期の願いだった。

救い出せなかったから。守れなかったから。

ナナはこれを望むしかなかった。

そして、それをサスケが叶えた。サスケだけが、ナナの願いを叶えた。サスケの手が、ナナを救った……。

「サスケ……」

ナルトが足を進めた。

だが、どうしてももう一步、踏み込むことができないでいるようだった。

相変わらず、静としたサスケの背。その身体に隠れた、動かないナナ。

そこへ、誰が介入できようか。

「くそ……」

マスクの下でくぐもった、声にならない悪態。

やっと、感情というものを思い出した。

全く動かない両足の代わりに、拳を握りしめる。

力が入る感覚はまだ無かった。

それが悔しくて、憎らしくて、カカシは己の右手を睨みつけた。

この手で、リンの命を奪った。

リンの血の温かさをまだ鮮明に思い出す。瞳から光が消えゆく瞬間も。

同じ術で、自分が教えた千鳥という術で、サスケが同じことをしなければならなかった。

この、呪いのような再演。

ただ動揺していればよかった自分に比べ、サスケは……。

理解しているだけに、その痛みもすでに感じてしまっているのだろうか。

それを思うと、情けなく震える右手がさらに滲んだ。

こみ上げるものを零すまいと、カカシは上を向いた。

この地に覆いかぶさる枝の向こうに、異常に碧い夜空が見えた。明るく、青白い月が、この修羅の場を虚しく照らしている。

梢の蕾は見えない。

が、きつと花開いてはいないだろう……。

ナナとサスケが、*「命がけ」*で守ったのだから。  
キラキラと、遙か彼方で星が瞬いていた。憎らしいくらい、純真と。  
ああ……まるでナナだ。

自然で飾り気のない仕草。清楚な笑み。絶望に突き落とされようとも欠けない心。闇に覆われても消えない光。

ナナが、瞬いている。

そう思った。

その瞬きが……降った。

優しく、密やかに、美しく。キラキラと残酷なまでに煌めく粒が、空から降ってきた。

いや……。

カカシは目をしばたいた。周りの者たちも、吐息を漏らす。

それは、空から降ったのではなかった。

改めて周囲の光景を視界に入れると、先ほどまで暴れ回っていた樹の根や枝は、当然のごとく動きを止めていた。そしてさらに、無駄に伸びたそれらが徐々に朽ちて萎み始めたのだ。

その朽ちた欠片がこの煌めきの正体だった。

木片……というにはあまりに美しすぎる、青白い光の結晶。それらが、悲しみに沈むこの場所に降り注いだ。

「うっ……ナナ……」

「ナナっ……い！」

誰ともなく、嗚咽を漏らす。

このヒカリの正体が、自然とわかっていた。

カカシは手のひらに落ちては溶けるそれを見つめた。

そして、ゆっくりと握りしめる。

先ほどより、己の力を感じた。

心は空洞のまま、だがほんの少し、身体に力が注がれるのがわかった。

ナナの最期の贈り物だ……

化け物のような樹に搾り取られたチャクラを、ナナが取り戻して与えてくれている。

そう感じた。

少しひんやりとして、神々しくも優しい、可憐な光。

それはナナの心そのものだった。

自分の命が尽きる瞬間まで、ナナは皆を想っていてくれた。

いつまでもこの悲しくとも心地よい光を浴びていたかった。ナナをずっと感じていたかった。

が、遂に別れが訪れようとしていた。

サスケが抱きすくめるナナの身体から、同じような光の結晶が生まれ始めたのだ。

「ナナ……」

ナナの身体が少しずつ光りに包まれ、それが煙のように天へ向かって立ち上っていく。

もう、叫ぶ者は無かった。

いつしか周囲を取り巻く忍たちも、ここで起きていることを見守るように、静まり返っていた。

「ナナは……ナナは、どうなっちゃうの……?」

「ナナ……」

「ナナ、お前……まさか……」

チヨウジやサクラ、シカマルが、フラフラと、二歩、三歩進んだ。

だがやはり、サスケとナナの側には寄ることができない。

カカシの足もまだ、萎れた根に張り付いたまま。

「ナナ……お前は……最後の最後まで自分を……」

風影が来ていた。

ナナに特別な想いを抱く者。彼の声にはやりきれない悲しみがにじみ出ていた。

その彼の言葉の続きを、カカシは悟った。おそらくシカマルもわかってしまっただろう。

そして、とつくにサスケは……。

ナナは、最期に自分自身に術をかけていた。

もう二度と、その血が利用されないように。その特別な眼が、奪われないように。己の肉や骨でさえも、この現世に残さぬよう……永別

の術を。

まるで毒だ……ナナ……

あまりの哀しみに、カカシは毒を吐いた。

まるで、忍が捕虜となった時に自決するための毒を、ナナが自ら含んだかのようなだった。

忍としてはこの上なく立派な最期だが、仲間としては残酷な別れでしかないのだ。

その、まだ幼さを残す身体さえ残してはくれないナナを、恨めしくも思う。

この胸に、ナナが含まなければならなかった毒が染み渡るようだった。

「ナナが……消えちやう……」

か細いサクラの声がした。

とても見てはいられなかった。それでも、逃れずに見守るのがナナに対する愛情だった。

皆、同じように思っていた。

若い部下たちも、泣きながら、唇を噛みしめながら、嗚咽しながら、ちやんとナナが逝くのを見守っていた。

ほとんど、サスケの背に隠れて見えないナナの身体。赤く染まったその身体が、もう青白い光の塊になっている。

それでも、サスケはやはり、しっかりとナナを抱きしめていた。

サスケの身体も、ナナの光に包まれている。

「サスケ……」

ナルトが、足を動かした。

そして、誰よりも悲哀に満ちているはずなのに、誰よりもこの事態を受け入れている親友の側に立った。

ナルトの金髪が、立ち上る青白い光に揺れる。

「サスケ……」

ナルトはもう一度そう声をかけ、その手をサスケの肩に置いた。

その時だった。

ナルトの手がサスケの肩に触れた瞬間、光が弾けた。

同時に、降り注ぐ結晶がよりいつそう煌めきを増す。いつそ眩しいほどに……。

カカシは目を細めた。全身に浴びる光が強くなり、まるで自身の細胞と溶け合うような感覚を受けた。

周りの者も息を呑んだ。

そして……。光と共に、風を感じた。優しく、悲しい風。

いや……。それは風ではなく、「想い」だ。

胸が詰まった。

ナナへの想い。深い、情愛。ただひたすら、愚鈍なまでの愛だった……。

飾る物など何もないサスケのそれが、否応なしに伝わり来る。

哀しみさえも超えた愛が……。そこにあった。

かげろう

眠れぬ夜。

近頃は忍者学校アカデミーの演習場になっている林の中を、何とはなしに歩き回ってやりすごすのが常だった。

考え事はしない。ポケットに手を突っ込んだまま、ぼんやりとくだらないことを思い出すのだ。

たとえば、その日の忍者学校でのつまらない授業。退屈な演習。同期生たちのやかましいおしゃべり。ドベのナルトがイルカに怒られる様子。

それから……少し前にやって来た奇妙な編入生のことなど……。

その日も、まだ涼しい春の夜風を頬に受けながら、サスケは暗い林道を彷徨っていた。

ときおり任務帰りの忍者の気配を感じることはあっても、お互い正面から対峙するわけではないから、特に警戒はなかった。

里の内部で敵に出くわすことも無い。

だから、やっとでたあくびを素直に表に出した。

そんなときだった。

今しがた思い出していた奇妙な編入生が、突然目の前に現れたのだ。

林のくぼ地、わずかに開けたところに、編入生……いずみナナが立っていた。

サスケから向かって左の方を向いたまま突っ立っている。こちらに気づいた様子は無い。

とつさに木に隠れて様子をうかがう。

顔を少し上げて、ナナは何かつぶやいている。

視線の先には何もない……いや、「白い煙」が揺らいでいた。

煙といっても、何かが燃えている臭いも火薬の匂いもない。物体の燃焼によって発生した煙でないことはすぐにわかった。

が、それが「何か」はわからない。



息を殺して、注意深くナナの様子をうかがった。

表情は穏やかだ。胸の前で「未」の印に似た形で手を組んでいる。そして「さようなら」とかすかに聞き取れる言葉をつぶやいた。

その途端、ナナは糸が切れた操り人形のようにその場に倒れこんだ。

「なっ……!?!」

身体は勝手に動いていた。

湿った草むらに顔面を強打する前に、サスケはナナを抱き留める。

「お、おい！」

ナナは意識を失ってはいなかった。

が、闇夜でもその顔に血の気が無いのははっきりとわかった。そのうえ、触れた身体が異常に冷たい。

「サス……ケ……?」

ぼんやりとした視線が向けられる。

わずかに安心した途端、ナナの両目は音が聞こえるくらいに見開かれた。

「な、なんで、ここに……?!」

焦った様子で身体を起こそうとする。

が、本人よりもその力のない四肢を抱いているサスケの方が、それが叶わないことを知っていた。

「ま、まだ動くな！」

案の定、ナナはほんのすこし身じろいだけで、すぐサスケの腕の中に崩れ落ちた。

「何があった?!」

混乱する頭を押さえつけ、サスケは状況把握に努めた。

ナナのほうもかなり混乱していることと、そんなナナをこの二か月間で一度も見たことがなかったことが、それを可能にしていた。

「え、ええと……」

言いよどむところも、いつものナナらしくない。

それほど親しいわけでもないが、この編入生が普段どんな受け答えをするのかくらいは知っていた。

「さっき白いのは何だ？」

「み、見えたの!？」

質問を問い返されて、サスケは思い切り眉をひそめた。不快だったからではない。あの白い煙を「見えた」ことに、ナナは驚いている。

ということとは、「見えない」のが普通……なのか。

であれば、その「普通」とは何か。いや、ナナも自分も「普通」ではないということか。

脳裏で思考が目まぐるしく動く。

「あ、あの……」

黙り込んだサスケに、ナナは恐る恐る言った。

「ええと……ね……」

どうにかこの場をやり過ぎそうとしているのが見え見えだった。

「とりあえず病院に連れて行く」

「え？」

「なんでかは知らねえが、低体温症を発症しているだろう」

震えの症状は見られないから、すでに意識水準が低下して寒さを感じなくなっているようだ。だとすれば、表面を保温しても無効なので、できるだけ安静に病院へ運んで加温した輸液を注入するべきである。

……と、忍者学校で医療忍者の講義を受けたことを思い出して判断した。

「ほら、つかまれ」

ナナは大きな目を何度か瞬いた。そして抱き起こそうとするとこゝろを懸命に制した。

「ま、待って、ちがうの!」

「違う?」

「びよ、病院は……行かなくても、大丈夫……」

最後は消えるような声。

今度はその目を思い切りあさつての方へ逸らす。

「大丈夫……だから……」

「大丈夫」……と言われて、サスケはしばし迷った。

いっこうに力が戻る気配のない四肢。生きているとは思えないほど冷たい肌。顔色は……いつも通り青白い。

そして、完全に普段の朗らかさを失った表情。闇の向こうに逸らされたナナの瞳には、驚きと困惑と、明らかな拒絶が滲んでいる。

低体温症の見立てが誤りだったとしても、「大丈夫」であるはずはない。

たとえば、ナナを知らない人間が居合わせたとしても……だ。

これは明らかな「拒絶」だった。あからさまな、とつきの「拒絶」だ。

ナナは、どこか他人の視線や言葉を受け流すようなところがあつた。

それには気がついていた。

幼げで純真な笑顔のわりに、決して本当の心は見せない危うさ……それをサスケは感じ取っていた。

そんな人間が、これほどに動揺と拒絶をはつきりと示している。

いままでの観察結果とこの状況を合わせて考えてみて、サスケはひとつの結論に至る。

この奇妙な編入生は、そう直感した通り「奇妙」なのだ。

あまり深くは考えたことはなかったが、そもそも急に里の外からわざわざ忍者学校に入ることには違和感があった。

来年の春には卒業試験を控えたクラスに、である。

忍法はもちろん、忍規や基礎の手裏剣術でさえ全く「さわった」ことが無い様子のナナが、何故このクラスにいるのか……。

かといって基本的な脚力や体力に劣るわけでもなく、体術はそれなりの域に達していると見ていた。

だから今さらよくよく考えると、おそらく何らかのそうせざるを得ない「事情」を抱えていたのだ。

そしてその事情とは、おそらく里レベルの……火影の意向に関わるほどのものではないかと思えた。

でなければ、忍術の「に」の字もわからないよそ者を、忍の養成所

である忍者学校に編入させるはずがない。

その事情が何かは別として、とにかくこのいずみナナが「普通ではない」のであれば、今はそのつもりで接するべきではないのか……。

「わかった」

思案したあげく、サスケは言った。

「え……？」

もう一度目を丸くするナナに、サスケはきつぱりと言った。

「ウチに連れて行く」

そして有無を言わず、ナナを背負った。

「サ、サスケ……」

「とにかく身体が冷えすぎだ。温めたほうがいいんだろ？」

「う、うん……」

「お前の家よりオレの家のほうが近い」

「で、でも……」

「嫌なら無理やり病院に連れて行くぞ？」

よほど病院が嫌いなのか、それとも何か都合が悪いのか、ナナはようやくおとなしくなった。

冷たい腕が、遠慮がちに回される。

「ちやんとつかまってる」

そうして、サスケは来た道を駆け戻った。

「ほら、これ飲め」

茶などという気の利いたものは無いから、白湯を渡す。

先ほど二枚重ねで包んでやった毛布から、ナナは白い手を出して湯呑を受け取った。

「あ、ありがとう……」

未だ戸惑った様子で、いつもの調子を取り戻してはいないようだ。ベッドの端にちよこんと座ったまま、うつむきがちである。

「ナナ」

ビクンと、毛布越しに肩が揺れた。

「怖いのか？」

「ち、ちがう……」

自身の否定の言葉からも逃げるように、ナナは白湯を飲み乾した。当然、弱った体にその行為は無謀で、ナナは激しく咳き込んだ。

「おい……」

「ご、ごめつ……」

手から湯呑を奪い取り、ため息をつく。背中をさするなんて真似はしなかった。

「サスケ……あの……」

呼吸が落ち着いてしばらくすると、わざと沈黙を保っていたサスケに対し、ナナは言った。

「なんで……、あそこに居たの……?」

咳のせいで、若干声がかすれていた。

「オレの質問には答ええないのに、オレには質問するの?」

ナナは毛布の端を引き寄せながら、「だって」と口を尖らせた。非常に幼い様子だ。

が、やつと「いつも」の様子に戻っていると、サスケは感じていた。「オレはただ散歩をしていただけだ。なんとなく歩き回っていて、たまたまあそこを通りかかった」

「そうなんだ」

何故だかナナは安心したように息をついた。

「で……?」

そして、諦めたような視線をサスケに向けた。

「お前はあそこで何をしていた?」

短い問いに、ナナはもう一度息をついて、観念したように答えた。

「鎮魂……」

「ちんこん……?」

その言葉を知らなかったわけではない。

あまりにも突拍子もなかったから、鸚鵡返しになっただけだった。「あの辺りに、『向こう』に逝けなくて彷徨っていた霊が集まっていたから……それで……」

躊躇いがちなナナの説明は、もどかしかった。

「それで？」

「それで……その魂たちを……送って」た……」

「魂を送る」……それが「鎮魂」であると、サスケは納得せざるをえなかった。

ナナの途切れ途切れの口調では、聞いている側がそうするのが良策だとすでに知っていた。

「何故お前がそんなことをする？」

だから、さらに一歩踏み込んだ。

ナナは少しの沈黙を置いて、囁くように答えた。

「そういう力が……あるから……」

「そういう力」とは、つまり「霊の魂」とやらを「送る」力である。

ナナはあの時、あの場所で、それを行っていた。ということとは、あそこに浮いていた得体の知れない白い影が「彷徨っていた霊」というやつなのか……。

また、サスケはひとりで納得した。

この見解が間違いであるとは思わなかった。やはり、ナナを無理やり問い詰めるより勝手に解釈した方が得策と思った。

「お前、巫女か何かか？」

そういえば初めて逢った時、ナナは巫女のように長い髪を結び、古風な袴を身に着けていた。

里の外から来た……巫女……。そう言われれば、ナナの「奇妙さ」は少し減る気がした。

が、ナナは答えずに唇を噛んだ。青ざめた顔が、またうつむく。

そこに現れた感情に、サスケは戸惑った。

表情を暗くするということは、サスケの問いを否定したうえで「答えられない」ということだろうか。それとも、肯定したうえでその役目を煩わしく思っているからだろうか。

「私……」

答えを見つけあぐねている間に、ナナは瞳を合わせた。

そして、すぐにまた逸らした。言いかけた言葉も飲み込んで、何かを堪えるように目を閉じる。

毛布に包まった身体は、ますます小さく見えた。

「わかった」

思わず、サスケはそう言った。

「え……う？」

「もういい」

何故だか……これ以上、ナナを困らせるのが嫌になった。

「最後に一つだけ答えろ」

ただ、理解する。

勝手な解釈だったとしても、それで納得してやろうと思った。

ナナの、誰にも知られたくない「秘密」ならば。

「なに……う？」

恐る恐る……、上目づかいのナナは少し笑えた。

「その、異常な身体の場合は本当になんともないのか？」

その問いに、ナナは安堵の表情を見せてうなづく。

「しばらくすれば治るから」

あまりに無防備な笑みだった。

「アレをやるたび、毎回そうなるのか？」

「今、一つだけ……」

「いいから答えろ」

「……今日のはちよつと、数が多くて……」

「負かされそうになったのか？」

「……」

「関連質問だ。答えろ」

「だ、大丈夫。ただ……いっぺんに力を使いすぎただけ」

今度の「大丈夫」は、やけに力がこもっていた。

自信……とも違う、当然の響きだった。

「サスケが温めてくれたから、今回は回復が早いみたい」

そして、突然の屈託のない台詞。

ここへきて初めて、サスケは己の行為に気恥ずかしさを覚える。

「べ、べつに……突然目の前でぶっ倒れたクラスメイトを見過ぎてすわけにもいかないだろう……」

ナナは声を出して笑った。

「それもそうだよね」

単純に、「突然目の前でぶっ倒れたクラスメイトを見過ごす」という様子を想像して、おかしくて笑っている。

その頬には、だいぶ赤みが差しこんでいた。

「も、もう休め、ナナ」

「で、でも、帰……」

「いいからそのままそこで寝ろ」

「う、うん……。ありがとう」

ベッドで休むよう促すと、素直に横たわりながらナナは言った。

「ねえ、サスケ。私もひとつ、聞いていい？」

黒い目が、しつかりとこちらを向いていた。

「なんだ……？」

サスケは立ち上がって、電気を消しながら言った。

その背に、ナナは問う。

「あの雨の日に、どうして『サスケでいい』って言ったの？」

耳にあの雨音が響いた。

隣のナナの声をも時折かき消すほど強い雨音が、ナナの家になづくにつれ、徐々に鎮まっていた。

あの時の、不思議な感覚を思い出す。

「何故、そんなことを聞く？」

「だって、女の子たちはみんな『サスケくん』って呼んでるから」

振り返ってナナを見た。

急に暗くなったせいで、その顔は闇に溶けかかっている。

が、ナナの瞳ははっきりと見えた。

そこにはただの疑問が浮かんでいる。サスケの心底を探るでもなく、ただ、謎を解きたいというだけの幼い興味。

サスケはフッと笑った。

ナナは不思議そうな顔をする。

「サスケ？」

「いや……」



そう、ナナが興味を持つほどのことはなかった。……と思う。  
こうして改めて問われて初めて、サスケはその理由を自身に問う程  
度のことなのだ。

あの時、雨の雫を肩に浴びながら、冷たさを感じもせずになんか言っ  
た訳は……。

「演習で……」

「え？」

それを自身に確かめるように、サスケは呟いた。

「オレらが組まされることが多いだろ？」

「うん」

「だから呼びやすいほうがいい」

ナナはおおげさなくらい大きくうなずいた。

「ああ、そっか！」

納得した顔をして、ナナは演習でのことを話し始めた。

まるで糞虫みたいな成りで、だが先ほどより元気な様子だった。

曖昧に返事をしながら、サスケは思っていた。

たぶん「違う」と。

ただ演習の時に呼びやすいから……という理由ではなかった。

それは決して間違いではないものの、あくまで今思いついたもつと  
もらしい理由で……。

あの時の本当の理由はそうではなかった。

では、本当の理由は……？

「……の時も結局サスケが全部の暗号を解いちやったもんね」

「あんなの、どうせパターンは決まってるんだ。慣れればお前にもす  
ぐ解けるようになる」

「ほんと？」

「ああ……。その話はいいいから、いい加減もう寝ろ」

床に横たわりながら、サスケはため息をついた。

（へんなヤツ……）

が、「ウザク」はない。

ほとんどの時間、ナナは誰かの話を聞く側の立場ですごす。

例えばナルトとか、サクラとか、いのとか、キバとか……うるさい連中の話を、楽しそうに聞いていることの方が多い。ヒナタのように誰かの影に隠れているようでもなく、ただ控えめに輪から一步引いていた。

今のように「スイッチ」が入った時だけにぎやかに話すのだ。

それでも、他の女子のようにいちいち同意を求めないし、聞いている姿勢を求めてくるわけでもない。

だから、特に距離を置きたいと思う相手ではなかった。

演習で組んでも、居心地が悪いと感じることは無いし、むしろ他のクラスメイトの誰よりもやりやすかった。

もちろん、ナナの現状の成績ではこちらの負担が重くなるのだが……それでも不快ではなかった。皆、見た目に騙されているようだが、体技や体力方面では足手まといになるようなことはない。

サスケにとつてずいぶん久しぶりの、「敬遠しない他者」だった。

あるいは、逆に居心地の良さを感じるほどに……。

(それはない……)

暗闇の中、目を開けた。

そして、目の前のドアを睨んで今の考えを否定する。

(ただ、少し興味が湧いただけだ)

そう……その「奇妙」な雰囲気、ほんの少し興味があっただけだ。

今夜のアレを見て、ますます気にはなっているが……。

スースーと、寝息が聞こえた。

ちゃんと毛布を着ているのか、立ち上がって確認する。と、ナナはダンゴムシのように丸まって眠っていた。

「いくらなんでも暑いだろう……」

少し笑った。

寝息はとて無防備で、だが身を縮める姿は警戒を保っているようで……ますます「奇妙」だ。

「へんなヤツ……」

もう一度つぶやいた。

とにかく、ナナは他の者たちとは決定的に違うのだ。だから……あの雨の中、出し抜けにあんなことを言ったのだ。

『サスケ』

あれ以来、ナナは律儀にもそう呼んでくれている。

そういえば、それはとても自然だった……。

「窒息するぞ」

サスケは、ナナの顔のあたりの毛布を引っ張った。

「う……ん……」

起きる気配はない。

よほど消耗していたのか、それともやはり、ここで安心していいのか……。

自然と口の端が上がっていることに気づいて、もう一度大きにため息をついた。

とりあえず、明日の朝どんな顔をして起きて来るのか楽しみだ……。

ただ、そう思った。

## 想い降る

二人の過去……。

いや、それではあまりに簡潔すぎる。この「光」の意味を説明するのは。

これは、まぎれもなくサスケの「愛情」だ。

光の一粒一粒に満ちる、ナナへの愛情。それが、この戦場に惜しみなく降り注ぐ。

(そうか……これが最初だったのか……)

と、カカシは否応なしに滲んだ涙を拭った。

サクラは膝をついたまま両手で顔を覆っている。ナルトも、サスケの肩に手を置いたまま、背中を震わせている。

周りを見回した。

我愛羅もシカマルも、チョウジもいのも。ヒナタも、シノやサイでさえ……泣いている。

彼らだけじゃなかった。

この戦場の忍たちが、この「愛情」にうたれて立ち尽くしている。

不思議な光景だった。

サスケとナナのことを知っている者も、知らない者も。ひたすらに、この深すぎる「愛情」に魂を揺さぶられている。

持て余して茫然と立ち尽くす者。感極まって涙する者。憐れむ者。悲しむ者。様々だ。

雨のように、いろいろな想い出が彼らの中に浸み込んでいく。

サスケがどれほどナナを愛していたか……。

カカシにも受け止めきれなかった。

熱くも、冷ややかにも感じるこの光が、どうしようもなく切なかった。

『サスケ君は優しいよね』

『そんなこと、言われたことはないな』

『言われたくもないんでしょう?』

『……………』

『誰も気づかなくなっちゃって、サスケ君は優しい人だよ』

ひとつの傘の下。

『オレがつっこむ』

『私が行くよ。私じゃ、飛んで来る武器に手裏剣を当てられないもん』  
忍<sup>アカデミー</sup>者学校の演習。

『姉が、死んだんだっ……………! 自殺っ、したんだって……………!! 私、あの  
ヒトが何を考えてたかなんて……………全然知らなかった……………!!』

『血が繋がってたって、何を考えて、何を感じて生きてるか、わからない  
い……………』

『サスケは私を知らないクセに……………!!』

『本当にウザいな、お前。いつもいつも、何だかしらねーが……………ヒトリ  
で抱え込んだつもりでいて……………。見ててムカつくんだよ……………っ!!』

『それはサスケの方じゃないっ……………!!! サスケの方が、ヒトリで抱え  
て、スタスタ行っちゃって……………! 見てて腹が立つ時があるよっ……………

!! サスケが独りでいるのなら……………!! 私のことほつといてよっ  
……………!!』

誰も知らない、心を乱すナナの姿。

『私ね、水が嫌いな。水の中は、息ができないから……………。だから、水  
の中は、私の「居場所」じゃない』

『……………じゃあ、お前の居場所はどこなんだよ』

『海の底って、音も光もなんにも無くて……………でも……………凄く透明だから。  
そこまで行き着いたら……………きつと私は、安心する気がする……………。そこ  
が私の「居場所」なのかな……………』

『なんだよ、それ……………』

星が流れて、海に落ちる。

『……………オレは……………満月は嫌いだ……………』

『私も、嫌い』

『……………ナナ……………オレは……………あの月が、怖かったんだ……………』

『サスケ……………もう、大丈夫だよ……………』

里の外れ……かつて、うちはこの集落があつた場所。

『ありがとう、起こしてくれて。……昔の、夢を……みてた……』

波の国、タズナの家。

『サスケ、もう、いいよ』

死の森。

『自分の存在の意味が、誰かの死にあるなんて、悲しすぎるよね……』

中忍試験、最終試験の日。

『……辛いんなら、オレじゃなくても……カカシにでも言えよ』

『……手……つないでもいい……？』

木ノ葉のとある森。

『サスケとアナタも戦わせない。私がアナタと戦う』

イタチを前にして……。

『オレは……ずっとお前が好きだった……』

『……ズルイよ……サスケ』

『……ナナ……すまない……』

『……私は……サスケが……キライだよ……!!』

別れの夜。

『サスケにイタチは殺させない……！ イタチにサスケを殺させない……！』

『……！』  
『それが私の願いだから、叶わなくても止めるのっ……!!』  
『オレはお前の“大切な”イタチを殺しに行く……止めたいなら、今ここでオレを殺せ。今、オレを止めないのなら……。二度とオレの前に現れるな』

『サスケっ……！行かないでっ……!! どうしても行くなら……!! 私を連れて行って……!!』  
『止められなくてもっ……その時“ま”で……一緒にいさせてっ……!!』

初めて、ナナが心をさらけ出した時。

『オレの“前”に立ちはだかるなら……お前も一緒に殺してやる……!!』

思い切り、ナナを傷つけた言葉。

『こんなところを見るために、私は二人に出会ったんじゃないっ!!』  
『お願い……もう……終わりにして……』

とうとう始まってしまった、イタチとサスケの戦い。

『これで満足なの?! これがアナタの望んだことなの?!』

『ねえっ……!! 答えてよ、サスケっ……!!』

復讐の終わり。

『オレはこれから、木ノ葉を潰す。ナナ……お前は……』

『私は行かない……。さようなら、サスケ』

波打ち際で……また別れ。

『二人とも……!! 一回くらい私の話を聞いてよ!!』

暗い森での再会。

『穢土転生は私が止めるから』

『ナナ、駄目だ。お前一人で行かせるわけには……』

『だって……今、ほんのちよつとだけ私の夢が叶ったんだもん。イタチとサスケと私……いつか木ノ葉の里で、三人で遊べたら……って、子供の頃、思ってた。ここは木ノ葉じゃないし、遊んでるわけじゃないけど……。イタチがいて……。サスケがいて……。私もここにいる……』

瑠璃色の、ナナの眼を見た。

『サスケ……!!』

『ナナ……何も言わなくていい。今は……気が済むまで泣いてくれ。今度はオレが……受け止める……』

烈しく、哀れに、泣き続けるナナ。

『ごめんね、サスケ。私は結局、一度もアナタと一緒に行けなかった』

『ナナ……お前は誰にも利用させない。必ずオレが護る。戻ったら、イタチの話をしよう……』

『最期にイタチがくれた記憶の“続き”を……二人で話そう』

火影岩のてっぺんで。

そして……。

『アナタを愛せて……幸せだった……』

最期。

そのひとつひとつが、ここに居る者たちの胸をうった。

決して幸せな想い出だけじゃなかった。どちらかといえば、悲しい想い出のほうが多かった。愛せば愛すほどに、苦しまなければならなかった。

それでも、二人は互いを愛し抜いた。

この結末が必然であったと、一番よく知っているのはサスケだ。

そして、もういないナナ……。

傍観者である自分たちは、まだ少しも理解できずにいる。

この、残されたサスケの愛はどこへ行くのだろう。ナナが遺した愛は、どう受け止めればいいのだろう。

そう思うと、ひどい胸の痛みを感じる。

涙が、止まらない……。一步も動けない。

ああ……これが本当の「空虚」なのか……

何度も味わったはずの感情だった。

が、カカシは強く実感する。

今、感じているものこそ、本物の空虚だ。「胸にぽつかりと穴があいたような」なんて使い古しの言葉じゃ足りなかった。

穴が開いたのは「世界」だ。いや、「未来」が無くなったのだ。

この世界から、ナナがいなくなった。ナナとサスケの想いが永遠に鎖された。二人の未来が、消えてしまった。

理解なんて、納得なんて、できるわけがない……。

だが、無遠慮に大地が揺れた。遠くの方で爆音が起こる。

マダラはまだ生きている。戦争は終わっていないのだ。この世界を終わらせようという脅威は、ここに在り続けている。

これほどの失意にまみれても、まだ、戦わなければならなかった。

ナナが護ろうとした世界だから……。ナナが護ってくれた命だから……。

そしてサスケも……己の想いも未来も、犠牲にしたのだから。

「サスケ……」

ナルトが、やっと声をかけた。

低く、かすれている。



サスケは動かなかった。もう、ほとんど形を無くしたナナの“光”を抱いたまま。

「サスケ……」

苦しげに、ナルトが強く肩をつかむ。

「ああ……」

サスケは静かにうなずいた。

そして、ナナの最期の光が天に登るのを見届けるようにして顔を宙に向けた。

この地上からとうとう光が消え去ったとき、サスケはゆっくりと立ち上がった。

## 第6章 終末編

### 思慕

そこは川のほとりだった。

日暮れ時のような、いや、夜明け前のように薄暗い。

目を凝らすと、向こう岸は森が広がっているようだが、霞がかかっているあまりよく見えない。

振り返って見ると、こちら側も同じように森があつた。木ノ葉の里では見たことのない種類の木々が、整然と立ち並んでいる。

風は無かつた。寒さも暑さも感じなかつた。

そして、痛みもなかつた。

ただ、川の流れる音だけが耳に響いた。

「ごめんね……サスケ……」

そつと呟いた。

自然とうつむいたから、視界には自分の姿が入り込んだ。

丈の短い草を踏みしめる足。草履を履いている。身に着けているのは、いつもの白い装束。布のどこにも汚れた「赤」は無い。

そして、自ら切り落としたはずの左腕もちやんとある。

その手を胸に置いた。

サスケが開けた穴も、そこには無かつた。

だが。

「サスケ……」

どうしてだろうか。

傷はすっかり無くなったのに、まだそこに在り続ける「心」。傷の痛みは消えたのに、胸の奥はひどく痛む。

（ごめん……ごめんね……サスケ……）

涙が流れた。

現世うつしよに置いて来たはずのものが、まだここに在ることが憎らしい。とても悲しい……。

“これ”から解放されなかったことに失望した。  
“これ”を抱えたまま、この先も過ごさなければならぬのか……。

いったいどのくらい？

永遠に続くのだろうか？

もう、決して許されることはないのか……？

その時。

「ナナ……」

絶望に憑りつかれた背に、声がかかった。

「え……？」

ここで“人”に会うとは思ってもよらなかった。ましてや、自分の名を呼ぶ者など……。

ナナは涙を拭って振り返った。

そこに居たのは。

「ナナ、やっと会えたわね」

にこりと笑う、若い女。

彼女を、知っていた。

「お母……さん……？」

過去に飛んだ時に会った、和泉成葉。その人が、目の前に立っていた。

この霞のなかでもはつきりと、その姿が目映る。

「お母さん……！」

記憶と憧憬、そして思慕。それらが一気に混ざり混ざって、ナナの足を動かした。

「お母さん……」

「ナナ……」

しがみついていた。

小柄な、だがナナよりも少し背の高い、母の身体にしっかりと。

「お母さん、お母さん……！」

想いを母の胸に押し付けるように、ナナは何度もそう呼んだ。今まで一度も、口にできなかつたその名を。

『お母さん』って、呼んでくれるのね」

母は嬉しそうに息をついて、しっかりと抱きしめてくれた。  
とても温かかった。

『ナナ』……とても良い名を授かったわね」

もう実体などないはずのこの身体で、母のぬくもりを感じていた。

「ちゃんと……あなたを産んであげられなくて……ごめんね……」

母の手が、頭をなげた。

「お母さん……私っ……」

話したいことがたくさんあった。

母につけられたのではないこの名の由来も、その名を背負いながら  
どうやって生きて来たのかも。

聞きたいことも山ほどあった。

自分がちゃんと産まれなかった訳、母の一生……。母の口から聞き  
たかった。そして何より、父のことを……。

「私、私ねっ……」

だから、まず初めに言う言葉が見つからなかった。

今ここに居る理由を伝えるべきだと思ったのだが、何ひとつうまく  
言葉にならないのだ。

まだはつきりと感じるサスケの愛情が、胸を締め付けているから。  
とても、痛むから。

「わかってるわ、ナナ」

母はなだめるように言った。

「よく……がんばったわね……」

見上げると、母の目には涙があった。

「あなたは、立派に生き抜いたわ……」

その粒が、滑らかに頬を伝った時、思った。

ああ……少しだけ、許された……。

母が認めてくれた。あの自分の決断を、認めてくれた。自分の生  
を、そして死を、母は「立派」だと言ってくれた。

「お母さん……見ていて……くれたの……？」

母はうなずきながら、溢れ出る涙を拭ってくれた。

「辛かったわね、ナナ」

止まらないそれを、何度も何度も、拭ってくれた。

「本当に、よく頑張ったわ」

そして、もう一度しっかりと、抱きしめてくれた。

「おかあさん……！」

それは初めての感覚だった。

与えられるぬくもりに全てを委ねることを、許されると感じるのは。

イタチにさえ、あるがままの心を押し付けることができなかつた。我愛羅にも、カカシにも、シカマルにも、全部を吐き出すことはできなかった。

サスケには、ひとかけらの真実を口にするこことさえも怖気づいていた。

だが、母の前では……。

「私っ……私ね……サスケを……！」

胸を締め付けるどうしようもない塊を、そのまま母にさらけ出した。

「サスケに全部を……背負わせたっ……！」

痛みも、後悔も、懺悔も……。そして、諦めも、少しの誇りも。

「全部、サスケにつ……」

彼への想いも、全部。もてあますほどの想いを、全部。

「ナナ……」

苦しくて苦しくて仕方がなかつた。

こんなところまで来て、こんな痛みを引きずらなければならぬことも、やり場のない怒りだった。

それも、母は受け止めてくれていた。

しばらく黙って、嗚咽をなだめてくれていた。

静かに頭を滑る手が、ほんの少しだけ痛みを和らげていくようだった。

「あなたたち二人は……」

やがて、母は温かい声で言った。

「とても深く、想い合っていたのね……」

慰めるような、優しい、どこか嬉しそうでもある声だった。

「あなたとサスケ君の魂は、とても強く結ばれていたのね」

そして、そうやってナナとサスケのことを表わした。

深く想い合って……。魂はとても強く結ばれて……。

母の口からそう表現されて、まるで初めてわかったような気がした。

自分とサスケ……二人の関係が“何”だったのか。自分がサスケをどう思っ、サスケが自分をどう思っていたのか。自分にとってサスケがどういう存在で、サスケにとって自分がどういう存在だったのか。

そして、自分がどれだけサスケを愛し、サスケもまたどれほど自分を愛してくれていたのかも。

そう……今さら、自覚した。

『アナタを愛せて幸せだった』

サスケに押し付けた台詞が蘇った。

あれは、真実の言葉。

苦しいばかりでも、痛いだけの想いでも、最期は幸せだったと思えたから。

サスケの愛も、今さら心を熱く満たした。

最期の願いを叶えてくれた、ただ一人の人。全部を背負う覚悟で、死をくれた人。

最期の時、サスケの眼に自分が映っているのが見えた。

その顔は満足していた。

「別れ」ではなかった。ただ感謝と……愛を伝えたかった。

サスケを、愛し抜いた……

そんな自分を、自分でも認められた気がした。

「お母さん……」

顔を上げた。

母の優しい微笑に、こう尋ねた。

「お母さんと、お父さんも……そうだった……？」

おそろおそろ……。

父のことをあまり想像すらしなかったから、わからなかった。ミナトと静葉の言葉だけでは、二人を思い描くことができなかった。

そもそも、幸せな夫婦なんて知らない。

だが、自分とサスケがはぐくんだものが「愛」だったのなら、父と母にもそれがあつたのかを知りたかった。

それを知ること、自分とサスケのそれが、より客観的にわかる気がしたから。

「ナナ……」

母は微笑した。

それだけで、答えがわかった。

「もちろんよ!」

その笑みが、とても幸福そうだったから。

「あなたももう知ってると思うけど、私たちの関係は、和泉の里にとっても木ノ葉の里にとっても、あまり歓迎されるものでもなかったの」  
母は遠い記憶を見つめながら話してくれた。

「でもね……、それでもどうしようもないくらい、お互いに惹かれ合っていた……」

ドクンと胸が鳴った。

「まるで、自分とサスケみたい……」と思えた自分に驚いた。

「お、お父さんて……うちはの……?」

サスケの残像が浮かんで、そう聞いた。

「そうよ」

母は楽しげに答えた。

「うちはアケル……。うちは一族の人で、立派な木ノ葉の忍だったわ」  
そしてとても誇らしげだった。

「うちは……アケル……」

父の名をつぶやきながら、今度はイタチの面影が浮かんだ。

イタチとサスケ……二人と同じ一族の男。それが自分の父だった。

だからやつぱり、この身体には彼らと同じ血が流れていたのだと改めて実感した。

もう、この「身体」は実体ではないのだけれど……。

「お母さん……私、お父さんに会いたい……！」

涙を止めて、そう言った。

思い描いたことすらなかった「父」に会いたかった。

「どこにいるの？　すぐに会える？」

久方ぶりに、心が躍動していた。

「こつちですつと一緒だった？」

今になって初めて、自分の「家族」というものを意識した。懐かしい「期待」というものが押し寄せた。

「ナナ」

母は笑った。

そして、漆黒の瞳にほんの少しだけ影を浮かべて、こう言った。

「お父さんに会いに行く前に……まだ、やらなくちゃいけないことが残っているわよ」

「え……？」

思わず母の袖を握りなおした。

「見届けなくていいの？」

「え？」

母は両頬を包んで言った。

「あなたが護ったあの世界の行く末を、見届けなくていいの？」

「あの世界……？」

「そう……あなたが遺して来た人たちの戦いを……」

再び胸がドクンと揺れた。

「わ、私にも見られるの?！」

そして深く考える間もなく、口を突いて出た言葉。

母はそれにうなずいた。

「ここから見られるわ。あなたなら」

見える……。あの世界が。少し前まで、自分がいたあの世界が。

あの後、どうなっただろう。

神樹の暴挙は止めたはず。この命と、サスケの心とを引き換えにして……。



だが、戦争はまだ終わっていない。

マダラはまだ生きていたし、樹に吸われたチャクラを返したとはいえ、忍の皆の力は弱まっている。樹も、完全に枯らせたわけではないだろう。

まだ、マダラの計画は止まっていないのではないか……。

「ナナ……でも、もう終わりにしたのなら、このままお父さんのところへ行きましょう」

母は寛大だった。何も語っていないのに、心の迷いに気づいてくれた。

そして、別の道を示してくれた。

「お母さん……」

「あなたは最期まで立派に戦った。だからもう、終わりにしてもいいのよ」

母が気遣ってくれていることが嬉しかった。

もう、終わりにしたい……。

それを強く思っていた自分がいるのを、知っていたから。だが。

あの後……サスケはどうなっただろう……

そう考えずにいられなかった。

自分が傷つけた彼の姿を見るのは怖い。とても怖いのだ。

だが、せめて彼の戦いを見届けなくてはと、思わないはずもなかった。

まだ、ここには来てほしくないから。

「私……ちゃんと、見届ける」

涙一粒と引き換えに、そう告げた。

「戦争を……サスケを……見届ける」

たとえば、ここからではもう何もできなくとも。

だからこれは使命なんかじゃない。それはもう果たしたはずだ。

ここからは、ただ無責任に覗き見るのだ。遠く離れたこの場所から、ただ傍観するのだ。

せめて、彼らがここに来ることが無いよう……祈ることはできるか

ら。

「お母さんも、一緒に居てくれる……？」

「もちろんよ」

心細さをそのまま表すと、母はぎゅつと手を握ってくれた。

そして、川の方へ歩き出す。

「川の流れば時の流れ……」

まるで呪文のように母は言った。

「あなたのいた『時』も、この川の流れの中にあるの」

促されるまま、つるばみ色の川面を見た。

この川が、何とか知っている。

あの故郷の川と似ているのは、きつと偶然ではないのだ。

「だから、あの世界のことを思い浮かべて、川の流れるに映すようにすればいいのよ……って、これじゃあわかんないわよね」

母は自身の言葉に少し笑った。

が、ナナにはすでにどうすればいいのかイメージができていた。

同じような術を、見たことがあったからである。

そう……姉の琴葉が、終末の谷近くの川に、ナルトとサスケの姿を映し出したあの術だ。

「やってみる」

目を閉じて、少し強く母の手を握った。

そして、思う。あの世界……いや、サスケのことを。

(サスケ……サスケ……)

アタナはまだ、戦っている？

まだ、無事でいるよね？

ナルトと一緒に、戦っているよね？

いろいろな想いが渦巻いて……。

(ごめんね……)

やっぱりそう思った時、川面にはあの戦場が浮かび上がっていた。

## 転生者

「うそ……」

そう、眩いた。

「そんな……」

膝から力が抜け、その場にへたり込んだ。

右の手も、母の手の中から滑り落ちた。

「どうして……」

また、今はもうあるはずのない感情が激しくうねった。

難なく視界に映し出したあの世界。少し前まで居た戦場……そこではまだ、戦いが続いていた。

それは予想ができていた。

自分の死でマダラを倒せたわけではない。決着がついたわけではなかったのだ。

だからまだ、生き延びた忍たちが戦っているはずだった。

しかし……。

その戦いに、もうサスケの姿は無かった。

「サスケ……！」

土煙の中、サスケは倒れ伏していた。

傷はよく見えない。

だが、背中の子丸の中心が危険な場所にある。

それに……ここからでも感じた。彼の魂が、その身体から抜け出ようとしているのが。

「なんで……?!」

反射的にナルトを探した。サスケと共闘していたはずの彼を。

ここからでは、視点を自在に動かせる。

だから、彼を想うだけで彼の居る場所が見えた。

「ナルト……!?!」

ナルトは我愛羅のつくる砂の雲の上にいた。

目をきつく閉じている。あれほど生き生きとしていた彼の顔に、す

でに血の気はない。

サクラが、懸命に蘇生措置を施している。

「どうして……」

「ナナ……」

震える肩を、母が抱いてくれた。そのぬくもりも、乱脈を押し留めることはできなかった。

何があったのか……自分がここへ来て母と話している間に、二人の身に何が起こったのか。

いや、そもそもここでの時間と向こうでの時間は、等しく流れているのか？

この光景は真実なのか？

混乱はすぐ、恐怖に変わる。

「ダメだよ……」

こんなはずじゃなかった。

放り投げては来たけれど、全部を押し付けて来たけれど、それでも、「こんなはずではなかった」と強く思う。

決して、戦いの行く末を楽観視はしていたわけではない。

だが、二人がこんな姿になることは全く想像していなかった。

とても……信じられなかった。

「まだ、ダメだよー」

届くはずのない叫びをあげる。

「こっちに来ちゃ、ダメだよ……」

理不尽に叫ぶ。

せつかく自分が護ったのだから。サスケとの未来を捨ててまで、サスケを怖ろしく傷つけてまで、みんなを護ったのだから。

「生きて……欲しかったのに……」

無意識のうちに、音がするほど激しく首を振っていた。

「私の分まで……生きて……」

「ナナ……」

母は強く抱きしめてくれた。

その細い腕に、力いっぱいすがりつく。

「お母さん……！ サスケと、ナルトがっ……！」

「ナナ……」

やだ、やだ……と、母の腕の中で子供のように駄々をこねる。

「このままだと死んじゃう……！ わかるの……！ わかるから……」

もう、自分で何を口にしていないかわからない。

涙で滲む向こうの景色は……。サクラが必死でナルトを救おうとしている。香燐がサスケに泣きすぎる。

二人の少女の顔を染める、*「絶望」*の色……。

「私は……」

胸がひどく痛む。

「もう……何もできないっ……！」

覆いかぶさるような、無力感。こんなところへ来てまで、こんな気持ちにならなければならぬ憤り。憐れ、情けない、虚しい……そんな言葉が、泉のように胸に湧く。

「ナナ、落ち着いて」

「お母さん！」

母はゆっくりと背中をさすってくれた。

「お母さん！ 私っ……！」

何のために命を捨てたのか。

何のためにサスケの想いを殺したのか。

何のために死んだのか。

「ナナ、こつちを向いて」

「私っ……」

こんなはずじゃなかった。

マダラを倒して欲しかった。

戦いを終わらせて欲しかった。

みんなに生きて欲しかった。

サスケに、幸せになって欲しかった。

「ナナ……大丈夫よ」

母は、声になりきれない想いをわかってくれたように、「大丈夫」と、

そう言った。

少し悲しくて、とても優しい声で。

「ナナ、私の話を聞いて」

「おかあさん……」

母の手が濡れた頬を包み、上向かせた。

母の目は、愛に満ちながらも悲しげに揺れていた。

そして、言った。

「二人は大丈夫よ、ナナ」

何のことだかわからなかった。

それほどに感情が激しく渦巻いていて、母の言葉の意味を理解する余裕を無くしていたのだ。

「二人はまだ『ごん』へは来ないわ」

「え……？」

母はフッと笑って、頬の涙を拭った。

「サスケ君とナルト君……二人には特別な力がある」

思わず目を見開いた。

「あなたも、知っていたんでしよう？」

ぐちゃぐちゃになった頭の中に霧がかかった。

そしてゆつくりとそれが晴れていくと、思い出す……。

「現世」で秘かに感じた、二人の中の「同種の力」。互いに「対」となり、それでいて「二つでひとつとなる力」。まるで、陰と陽のような……。

「お母さん、それって……」

「気づいていたのよね？」

「う……うん……」

母は、あの曖昧な感覚を説明してくれるのだろうか。

そして……。

「も、もしかして……二人の力って……私の中にあつたモノとも……関係……ある……？」

もっとあやふやな予感も。母がここで、説明してくれるのだろうか。

でも、何故……？

「まずは、二人の力のことから話すわ」

母は少し顔を曇らせて、そう言った。

実体の無い身であるはずなのに、ドクンと、確かに鼓動が鳴った。

「ナルト君とサスケ君の中に、『六道の力』があるが見えるの」

初めに、母はそう言った。

衝撃的な台詞とは程遠いように感じた。

「つまり、二人は『六道仙人』の力を受け継いでいるのよ」

その名前もすでに知っている。和泉一族の流れを組み、『忍の祖』と呼ばれる者だ。

そして、尾獣の生みの親でもあることも聞かされている。

九尾を宿すナルトの意識に入り込んだことがあるから、その繋がりを明らかにされても驚かなかった。

「どうして……？」

だから、浮かべる疑問はその程度だった。

どうして二人がそれを受け継いだのか……という理由。

母は、少し躊躇ってから答えた。

「二人はね……六道仙人の息子、『アシユラ』と『インドラ』の転生者なのよ」

急いでいた心が、一気に落ち着いていた。いや、呆けたといったほうが近かった。

「六道仙人の息子の……転生者……？」

母が始めた御伽噺は、この状況にそぐわないように思えたからである。

「兄インドラは六道仙人の力を受け継ぐ天才。そして弟アシユラは、いわゆる落ちこぼれ、だったそうよ」

だが、イメージは容易に浮かんだ。

「落ちこぼれだった弟アシユラは、自身の努力と仲間との繋がりによって、兄のインドラに並ぶ力を手にした……」

インドラはサスケ、アシユラはナルトに……それぞれ転生したのだらう。

そう結果を導くことも、簡単だった。

「だから六道仙人は、自らが開いた『忍宗』の後継者にアシユラを選んだ。それを、インドラは認めることができず……二人の争いが始まったの。それは決して終わることがなく、お互いに何代も転生し続けて……それが、今のサスケ君とナルト君なのよ」

(ああ、だから二人は……)

対の力を持つだけでなく、争うこともまた運命だったのか……。

また、終末の谷の光景が目に見えた。

それを振り払うように、母に尋ねた。

「も、もしかして……サスケとナルトの前の転生者って……」

あまり関係のないようなことだったが、何かを言わねばならない気がした。

が、母はその問いに大ききうなずいた。

「そう。千手柱間様とうちはマダラよ」

その答えは、ナナが思うより重要なことだった。

母は、マダラが転生者を終える前に、この転生のサイクルを「壊す」行為に及んだのだと明かした。

「柱間様の細胞を、マダラは取り込んでしまった。そのことで、六道仙人のチャクラを導き出し、輪廻眼というものを開眼してしまったのだそうよ」

長きにわたる間、何度も何度も転生し、争いを繰り返した兄弟。

その不毛なループが、柱間とマダラの代で崩れた。

「輪廻眼……」

ナナは思わず眉をひそめた。

輪廻眼の性能の恐ろしさは目の当たりにした。そして、マダラの異常なチャクラと強さも体感している。

母はその顔色を見てか、一呼吸おいてから言葉を続けた。

それは、この御伽噺を終わらせて、一気に確信に迫るものだった。「六道仙人は黄泉の国へ逝くこともなく、この争いをずっと見て来たの。何世代も、決して終わらない争いを……。今はきつと、マダラを止めて欲しいと、強く願っているはずよ」



六道仙人、インドラとアシユラの兄弟、柱間とマダラ、そして……サスケとナルト。彼らの存在が、ぼんやりと線で繋がるのを感じた。六道仙人が、今この世代で息子たちの生まれ変わった姿を見ているのなら……それはつまりサスケとナルトを見守っているということであれば。

「じゃあ……今のサスケとナルトのことも、六道仙人は見ているんだよね?」

思ったこと、そして期待をそのまま口にした。

母は微かに笑った。

「きつと今頃、二人の精神世界に現れて、この真実を告げているはずよ」

ナルトの腹の中、九尾の檻、そして、尾獣たちが集まった場所。

あの、不可思議な空間を思い浮かべる。

「そこで話をしているってことは、六道仙人は……」

期待が大きすぎて胸でつかえ、続きを言えなかった。

代わりに母は言う。

「二人に力を与えるでしょう」

よかった……。

言葉にはならなかった。

色々と聞かされたことよりも、今の母の言葉が何よりも重要だった。

「じゃあ……二人は、助かる……?」

チラリと横目で「現世」を見やる。

まだ、動かないサスケ。香燐が傍らで泣いている。

ナルトは……姿が消えている。

探そうにも、彼の魂を感じられなかった。

「お母さんー」

再び湧き上がる焦りと恐怖のまま、母の袖を握りしめた。

「ええ……。六道仙人は、必ずマダラを倒す力を二人に与えると思うわ」

確かな台詞と共に、母の目が紫苑色に煌めいた。

ホクトが時折見せた瞳によく似ていた。

この瞳で、母には何かが見えている。

今さらながらそう思った。

『ナルト君とサスケ君の中に、六道の力があるのが見えるの』

「見える」と、最初にそう言っていたではないか。

母にはきつと、そういう力が備わっているのだ。希代の陰陽師……  
そう言われていたのだから。

「よかった……」

あえて口に出してみた。

できれば二人の精神世界に飛んで、その様を見届けたかった。

六道仙人が本当に二人の前に現れたのか。二人に真実を話したのか。ちやんと、二人に力を与えてくれるのか。

この目で確かめたかった。

が、それはもう叶わない。

「こちら側へ来てしまったから、生きている者の精神と繋がることは叶わないと思った。

「お母さんが言うなら、大丈夫だよね！」

諦めるように潔く、そう言った。

わずかに残る不安は胸の奥でくすぶっていたが、母のまつすぐな瞳が希望を与えてくれていた。

だが。

(あれ……?)

落ち着きを取り戻すにつれ、違和感を覚えた。

母が「見えた」と言ったのは、サスケとナルトの中の六道の力だ。だが、母はその力が備わった理由まで、全て説明してくれた。

『兄、インドラは、六道仙人の力を受け継ぐ天才。そして、弟、アシュラは、いわゆる落ちこぼれ、だったそうよ』

そう……そう言った時からだ。この違和感が芽生えたのは。

「だったそうよ」とは、誰かに聞いたことを別の者に伝えるときに使う言い回しだ。

一体誰に……?

何故、母は全てを知っているのか？  
母の眼はそこまで「見える」のか？

何故、聞き伝えるような言い回しをしたのか？

「お母さん……どうして、この話を知ってるの？」  
簡潔で、他愛もない回答を期待した。

が、母は複雑な答えを示した。

「私は……直接、六道仙人に聞いたの。もちろん、まだ生きている時に」

「あ、会ったの……？ 六道仙人に……？」

それが可能であった母の能力。そして、先見性。

それを、ただ誇らしく思うことができればよかった。

だが、ナナの頭はその先を考えてしまう。

何故、その必要があったのか……。

そうしなければならぬ理由があったのではないのか……。

そしてその予感、いつも悪い方へ矢印を向けているのだ。

「ナナ……」

母の綺麗な瞳が曇った。

紫苑から漆黒へ戻ったというのではない。母の表情には明らかに影が差し込んだ。

(やっぱり……何かが……)

そう思ったが、口をつぐんだ。

ただ母の言葉を待つしかなかった。

「あなたは、自分の力がサスケ君とナルト君……二人の力と関係があるって、気づいているのよね？」

母に問われた瞬間、また鼓動が跳ねた。

そして記憶が蘇った。

『貴様の兄はよくやってくれた。うちの者が自ら一族に手を下してくれたことは、里にとってまさに理想だ』

たしか、そんな言葉だった。二代目火影がサスケに対し、イタチのことをそう言った。

その瞬間、怒り、悲しみ、憎しみ、失望……それらがいつぱんに爆

せて、ひどく目が痛んだ。

つむった目の奥に、確かに見えた。

深い闇に浮かぶ白い眼。そこから発せられるおぞましく強大な力。それが、自分の魂に覆いかぶさるような感覚。

そして、マダラに利用され、神樹と一体化した時にはつきりとわかった。

その力は、この世界をも支配し得る。それを望む力でもある。

それが人なのか、ただの力なのか、尾獣に似たモノなのかはわからなかった。

だが、サスケとナルト……二人の中にある力と同じ「匂い」がした。

二人の力と、根源が同じであるような……同じ性質のよう……曖昧な感覚ではあった。

が、きつと、二人もアレに気づいていたのだと思う。

そして、アレの果てしない大きさ、強さに、絶望したことだろう。自分と同じように。

だから……だから、サスケはアレを葬り去ってくれた。アレに吞まれる前に救ってくれた。

だから自分はここに居るのだ。

少し、身が震えた。

「サスケとナルトの力と関係があるってことは……私の中にあつたあの力も、『六道』の力ってこと……?」

恐る恐る尋ねると、母は両肩に手を置いてくれた。

が、その視線は悲しげなものだった。

「お母さんは、あの力のことも知ってるの?」

そして、さらにその視線を川の方へと逸らす。

「し、白い眼が見えたの……! とても強くて、世界を破壊するような恐ろしい力だった……。私はそれを利用されそうになって……。その力に取り込まれそうになったから、サスケに……」

「サスケの手で殺してもらった」とは、まだ口にはできなかつた。が、躊躇う母に向け、さらに言った。

「ここから見ていてくれたんだよね？ そのときに、あの力のことも見えたの？」

母は目を伏せた。

「あの力は、六道仙人と関係あるの?!」

唇を噛み、それから息を吐く。

「お母さん?!」

母の手をとって強く握りしめた。

と……母はようやく、口を開いた。

「あなたの中にあつた力は……」

初めて目にする、母の苦しみ。

そして告げられたのは……。

「大筒木カグヤ……六道仙人の母親の魂よ……」

## 産まれぬ命

大筒木カグヤ。

その名を、ナナは知らなかった。

だから、母がこれほどまでに言い淀む訳も、あの力の意味も、まだわからなかった。

「あまり、驚かないのね……」

母が憂いた笑みを落とした。

「うん……」

事実、驚愕はしていなかった。

サスケとナルトが六道の力を継いでいるのなら、それと縁があると確信していた自分の力も、その存在に近いものだと予測ができた。

それに、あの時感じていた“どうしようもない恐ろしさ”とその名前が、まだ結びつかなかった。

「その人は、どんな人だったの？」

「六道仙人から聞いたただだから、私も詳しくは知らないの。ただ、和泉一族の流れを組む者……というのは間違いがないようだけれど」

母はため息をつくようにそう告げてから、大筒木カグヤについて知り得ることを話した。

「カグヤは、禁忌とされていた“神樹の実”を食べて力を得たの。この世界を収めるほどの、強大な力を……」

「神樹って、あの……？」

「そうよ。あなたの世界に現れたあの大樹。あれは、チャクラの実をつける聖なる木なのだそうよ」

自然とうなずいた。

すぐに納得できたのは、まさにその神樹に自身の身体が取り込まれかけたからであった。

一部が一体化したとき、その成長によって大地をも揺るがすほどの大樹に備わる力が、どれだけ恐ろしいものか身をもって知った。

それだけじゃない。

自分の中のアレが、神樹の息吹きと確かに呼応していた。

「カグヤはその実を食べて得た力で、乱世を収めた。だけど、その後も自分ひとりの力で世界を支配しようとしたのよ」

アレの……あの白い眼を思い浮かべた。

あの眼に宿る意志は、*“それ”*だったのか……。 「支配」という欲望。力への渴望。深い恨み。そして……。

「だから、あの力があんなに怖かったんだ……」

素直にそうつぶやいた。

母は、そつと頭を撫でてくれた。

「崇められていたはずのカグヤは、力をおごり、人々に恐れられる存在になった……。それを止めたのが、カグヤの二人の息子だったそうよ」

「二人……？ 六道仙人だけじゃなくて？」

「ええ。カグヤは二人の息子を産んでいたのよ」

「その息子たちが、母親のカグヤを止めたの？」

「六道仙人は*“封印”*したと言っていたわ」

脳裏に、またあの白い眼が蘇った。

あの眼光が意味した*“恨み”*は、それが……。

「その、封印されたはずのカグヤが……私の中に転生しようとしていたの？」

深く息を吐きながら、ナナは言った。母に尋ねるといふより、自身に言い聞かせるように。

母は黙ってうなずいた。ナナ自身よりも辛そうだった。

「もう一度、世界を支配しようとしていたんだよね？」

うつむいた母が、こちらを向く。

「私は、それを……どうしても止められなかったの。カグヤの力はとも大きくて、恐ろしくて、私には止められなかった。だから私は……あんなふうに終わらせるしかなかったの……」

今、こうして真実を……あの力の意味を知らされて、自分では「仕方がなかった」と改めて思えた。

きれいごとで終わらせたかったのではない。

本当にああするしかなかったのだと、とつくに事情を知っていた母にわかつて欲しかった。

が、母があゝの選択に満足してくれていることはすでに知っている。最初に出会った時、『よく頑張った』と褒めてくれたから。『立派に生き抜いた』と、認めてくれたから。

だから今、もう一度、あの時の笑みが欲しかった。そうして、安堵したかった。

だが……。

当然与えられるべきその笑みは、母の顔に浮かばなかった。

母はむしろいつそう表情を暗くしながらうつむき、立ち上がった。

そして、ナナに背を向けた。

森の方へ、二歩、三歩と歩み、立ち止まって肩を震わす。

「お、お母さん……?」

困惑した。

自分の中で大筒木カグヤが転生しようとしていた……という真実を聞いた時よりも。

「お母さん、どうしたの……?」

母の背にただ問う。

立ち上がったまま、足が動かなかった。

「ナナ……」

震える声で、母は言った。

「ごめんね……」

母の謝罪は二度目だった。

「あなたを産んであげられなくて、ごめんね……!」

そう……先ほども、そう言っていた。

でもそれは、母の身体が弱かったから。双子の出産に耐え得る身体ではなかったから。

そう思っていたから、特に気にかけてはいなかった。

が、今は違う。

何故か、悲しい風が吹き付ける感覚がする。



「お母さん……」

一歩だけ、母に寄った。

母は袂で涙を拭い、決心したようにこちらを向いた。

そして、言った。

「知っていたの……私」

「え……？」

「あなたを『授かってから』、カグヤがあなたに転生しようとしているとわかったの」

時間の流れが歪んだようで、頭が混乱した。

つまり母は、自分の体内にいる子にカグヤの力を感じ取ったのか？

では、今ここに居る自分ではなく、その前の……転生前の自分にカグヤを見たというのか？

「私は、それに気がついてから六道仙人と会った……。その時に聞いたのが、今話したことよ……」

母の声には、諦めと絶望が滲んでいた。

「感じるままの恐ろしい力に加えて、六道仙人から大筒木カグヤのことを聞かされて、私は……あなたと同じように思ったの」

「同じように……？」

鸚鵡返しに聞いてはいたが、それがどういうことかはわかっていなかった。

つまりカグヤを……。

「カグヤを絶対に復活させてはいけない……って」  
そう。

あの力が絶対に世界に現れないように、『終わり』を願った。新たな身体を差し出すことを拒み、死を選択した。

母も同じだった……？

「だからね……ナナ……」

ぼろぼろと、母の目から雫がこぼれ落ちる。

「私は……あなたがお腹の中にいるままに……封印したのよ……！」

母は嗚咽を漏らした。

苦しい呼吸のなかで、小さく「ごめんね」を繰り返している。

『ちやんと……あなたがあなたを産んであげられなくて……ごめんね……』

再びあの言葉が蘇った。

「ごめんね」と、母は言う。

きつと母は、我が子から生を奪ったことを悔いているのだろう。自らの手で我が子を「殺した」と自分を責めているのだろう。運命に抗えなかったことを、無念に思っているのだろう。

でも、そうすることしげできなかったのは、同じ選択をした自分自身がよく知っている。

その結果、少なくとも世界がカグヤの力に支配されることを免れたのも事実だ。

「お母さん、泣かないで」

今度は、ナナから母を抱きしめた。

“母” と思っではいるが、それでも母はまだ若く、肌の感触はどこか幼さを残している。

「わかってるから。私も……」

「ナナ……！」

「お母さんも、苦しかったんだよね？」

母はひとりで苦しんだはずだった。生前も、死してからも……。ずっと、ひとりで。

その苦しみを思うと、胸が痛む。

そして、母を苦しめたのが自分であることを、強く実感する。

「結局あなたを……当主様があなたの魂を転生させてしまったから……だから、今のあなたにも、カグヤが……！」

しかしまた、母が自分の痛みを半分背負ってくれていたのだと、そうも思えた。

「私は、あなたの命を……幸福にしてあげられなかった……！」

母は両手で顔を覆った。

激しい悔恨。怨嗟。

ナナにもどうしようもなかった。

が、その中に、確かに母からの愛を感じ取ることができた。想像すらできなかった、母の愛情。

母が自分を「殺した」ことを知って、それを強く感じるのだ。

「お母さん、わかってるよ」

もう一度、母に言った。

母の想いは、わかっている。その選択の意味も、ちゃんとわかっている。

「運命は、変えられなかった……」

「ナナ……」

悲しい母の目。

が、ナナは笑った。

「それでも、それを变えようとして、精一杯、戦い抜いたんだよね」

十数年前の母も、つい先ほどの自分も、同じように戦った。

そして同じく「死」を選択した。

だが、それは負けを意味するとは思わなかった。

さつき、自分で思えたように……。

そして。

「お母さんもさつき、私に言ってくれたでしょう？ 『立派に生き抜いた』って」

「ナナ……」

「同じだよ。お母さんも私も」

母も自分も、立派に生き抜いた。

「そして、カグヤの転生を阻止したから……だから、私たちの『勝ち』だよ。ね？」

母は色が変わるほど強く唇を噛みしめ、涙を無理やり引っ込めた。

「そうね……」

そして、かすれた声でそう言った。

「私たち……運命に『勝った』のよね……」

母が口にして、ナナもほっとした。

そうだ、確かに勝ったのだ……。逃げたのではない。戦い抜いたのだ。

(勝ったんだよ……。サスケ……)

再び母に抱きしめられながら、彼を想った。

実感できたことを伝えたかった。きっと彼はまだ、悔恨と怨嗟に塗れているはずだから……。

「見て、ナナ」

その想いを察したかのように、母は涙声のまま川面を指した。

まだそこに映る、戦場の光景。

砂塵の中、サスケがゆっくりと立ち上がったのが見えた。

## 陽に開いて陰に潜む

陽に開いて……

「え？ ナナが……何だつてばよ？」

六道仙人……目の前のその人に、ナルトは聞き返した。

「ワシの母、大筒木カグヤの転生者が和泉菜々葉だ……」

二度目……言われても、理解できなかった。

いや、本当はわかっていた。だが、信じたくない気持ちがあまりに強かったのだ。

自分自身が、六道仙人の息子である『アシユラ』、そしてサスケが『インドラ』の転生者だと聞かされた時よりも、ずっと強い衝撃を受けている。

この偉大な仙人が、さんざんその恐ろしさを語ったカグヤという人物が、どうしてもナナとは結び付かないから……。

「お前も気づいておったのだろうか？ あの娘の中にも、己と同じ類の力が芽生えていることを」

「あ……ああ、なんとなくだったつてばよ……」

思わずうつむいた。

ナナの『死に際』はまだ、鮮明に思い浮かぶのだ。

サスケに、自分を殺せと必死の訴えをしたナナ。何かを悟って、諦めて、それでも戦い抜こうとしていたナナ……。

その傷ついた身体に蠢く、『誰か』の力。

ナナはそれに抗って、死を選んだ。

サスケも知っていたのだ。

自分なんかよりずっと、ナナのことが良く見えていたに違いない。だから、サスケはアレからナナを救ったのだ。

悔しいのは、自分自身が何ひとつ抗えなかったことだ。

何故、あれほどにナナの中の力を恐れたのか。ナナとサスケの選択を「仕方がない」と、「正しい」と思ってしまったのか。

「あのままでは、カグヤが完全にあの娘の魂を乗っ取り、転生を果たし

てしまっていた……。そうならば、あの世界に止められる者など誰一人として無かった。たとえばマダラでもな」

まるで心を見透かしたように、六道仙人は声色を和らげて言った。「あの娘はそれをよくわかっていた。だから、ああすることしかできなかつたのだ。サスケにとつても、惨いことであつたが……」

そして、ため息をつく。

六道仙人までもが、あれを「仕方がなかつた」と思っているのだ。それほどに、カグヤの力は……。

いや、それでも、後悔しないわけではない。納得したわけでもない。怒りはまだ、胸の中いっぱい揺らいでいる。

ナナは……。「運命を共にする」と言ってくれたのに。そうなるはずだつたのに。

こうもあつさりと、別れが訪れてしまった。

一生分の後悔をしても、足りなかつた。

「なんでっ……!」

何故、ナナが……。

「なんで、ナナに……!」

こんなにも残酷な運命を背負わねばならなかつたのか……。

それは全くもって理解できなかつた。

自分とサスケの転生のことはわかる。納得も実感もしている。六道仙人の話では、彼らとの生き方も重なっているようだ。

だが、ナナは……ナナはカグヤとは違うではないか。

「母は……」

六道仙人は、初めて言いよどみながらもこう告げた。

「あの娘の血筋と力こそが……己の転生者としてふさわしいと思つたのだらう……」

まただ……と反射的に思った。

また、ナナの特異な血と力が、浅ましい眼に狙われていたのだ。やり場のない怒りを懸命に抑え、強く拳を握った。

その耳に、六道仙人の憐みに満ちた声が届く。

「ちようどお前とサスケが産まれる年に、あの娘も産まれる予定で

あった。だが娘の母、和泉成葉は、我が子がまだ腹にいるうちに、娘がカグヤの転生者として選ばれてしまったことを知ったのだ。それで成葉は、今のお前のようにこうしてワシを呼んだ。」

「ナナの……母ちゃんが……？」

「ワシは成葉に全てを語った。お前のその腹の子には、大筒木カグヤという恐ろしい者の力が宿っている……とな」

「それで、ナナの母ちゃんは……？」

拳に汗がじつとりと滲むのを感じながら、ナルトは次の言葉を聞いた。

「娘を産まず、腹に収めたまま……自らの魂をもって封印したのだ……」

もう、声も出なかった。

こんなところで、こんな時にようやく知るナナの真実が、心を重くする。

「二年後、和泉の方々、成葉が封印した娘の魂を転生させてしまった。それが、お前たちの仲間であった『和泉菜々葉』……いや、『いずみナナ』だ。だが、そのナナの魂にも、母カグヤはしつこくまとわり付いていたのだ……」

遠い時をぐるりと一周して、戻ったような感覚だった。

ナナが意図的に産み出された理由……課せられた“九尾封印”の使命。ナナが選んだ忍としての道。イタチとの出会いと、サスケへの想い。彼らとの別離……

その中はずっと潜んでいたカグヤという力。

そして、最期の選択。

あまりに悲しすぎたナナの生涯が、今、全て繋がった。

「じゃあ、ナナとナナの母ちゃん……二回、カグヤってヤツの復活を阻止したんだな……」

絶望という暗闇の中、細い光を探し当てようにして、やっとそう言うのが精いっぱいだった。

「二人とも、カグヤから世界を護ったんだな……」

噛みしめるように、つぶやく。

「そうだ……。二人は身をもって、世界を救ったのだ」

六道仙人も、改めてそう言った。

そうだ……。「世界」を……。あの細い肩には重すぎる世界を、ナナは救ったのだ。

その世界を、護り切れなければならない。この、空虚な胸の痛みを抱えたままでも、世界が脅かされている今、前に進むしかないのだ。

サスケは……？

ふと、思った。誰より深い痛みを負ったはずの彼を。

サスケは……。まだ戦えるのだろうか。ナナの居ない世界を護るために、戦うのだろうか。

……陰に潜む

ナナの魂を喰らおうとしていた、おぞましいモノ。

それが『大筒木カグヤ』だと聞かされても、サスケの心は痛まなかった。

ナナの秘められていた出生の真実を知っても、今さら憐れむこともなかった。

残酷な運命に対する怒りもない。心は、さざ波すら立たない静けさだった。

一瞬だけ、こう思った。

「このまま、ナナのところへ逝けるだろうか」……と。

ナナが自らの腕を切り捨てた草薙の剣。まだナナの血が滲むそれで、マダラに心臓を貫かれた時だった。

ナナ……。

意識が遠のく中、乾いた心が潤いを求めるように名を呼んだ。

だが、ナナには逢えなかった。

目の前にいたのはナナでなく、六道仙人という伝説の人物だった。

この意識だけの空間で、六道仙人は語った。

自分は六道仙人の息子の転生者だとか、ナルトが弟の方の転生者だ



とか……そして、ナナとカグヤのこと。  
が、ただ、知って、納得しただけだ。

特段、驚きも無い。真実を知った喜びも、それに対する怒りも、悲しみもない。

すべてが“今さら”……だった。

今さら、ナナが居ないのに……。

ナナを殺した腕をマダラに振り上げることができたのは、やはり、ナナへの想いのためだった。

“向こう”でナナが、もうこれ以上、一粒も涙をこぼすことが無いように。これ以上、自分の姿を見たナナが悲しまないように。

ナナの血が濡らした袖が、まだ乾かぬうちに。ナナの血の“冷たさ”が、まだ肌を冷やしているうちに。

……戦った。

だが、敵わなかった。

そして、ここに居る。

ナナのところへすんなりと逝けるはずもなく……目の前に現れた六道仙人は、全てを語り、そして問う。

「この世界をどうしたいのか」と。

この戦いの果てにある未来。ナナの居ない未来。

その答えを、サスケは言った。

「オレは戦う……」

ほんの少しも迷うことはなかった。

ナナの居ない世界に意味はない。ナナの居ない未来など、価値はない。

それでも……。

ナナを悲しませたくはなかったから。そして、イタチの生を無駄にはできなかつたから。

だから、二人の生きた証を、未来に繋げるために。

「マダラを倒して……、この憎しみと哀しみの世を終わらせる……」

イタチが昇天した後、ナナに告げた決意は今も変わらず胸にある。

マダラの言うように、苦しみや痛みを人々から切り離し、世界を夢

の中に引きずり込むのではない。

偽りの世界になどさせない。

これほどに大切な者を失って、傷ついてもなおそう思うのは……。

ナナが、*「落ちなかつた」*からだ……。

深い絶望に沈みながらも、幻の世界には落ちなかつた。

そこが痛みを忘れさせてくれる場所だと知っていても、そこがどんなに居心地の良い世界かを知っていても……ナナは甘い誘いの手を振りほどいた。

苦しんで、苦しみ抜いて……自身の誘惑と戦った。

マダラの言う世界に対して抱いてしまった憧れに、抗っていた。

ボロボロの身体と、ズタズタの心で。

最期の、さいごまで……。

だから、ナナの戦いを無駄にしないために、自分もマダラと戦うのだ。イタチとナナの死を背負って、ひとり、闇を抱えたまま *「生きる」*のだ。

そして、何もかもを断ち切って、終わらせて……もう二度と、*「こんな絶望」*が生まれない世界を……。

*「それがお前の答えか……」*

六道仙人は、何も言わなかつた。

ただほんの少し、その表情を陰らせたが、彼は *「力」* をくれた。

受け取った左手に、月の文様が浮かび上がった。

その月を取り囲むように、ナナの血が周りに染みをつくっていた。

## 救世主

ナルトとサスケ。

六道仙人から力を託されて、二人は再び立ち上がった。

六道の力を自在に操るマダラに対し、ナルトは六道仙術を開花させ、サスケは左眼にマダラと同じ輪廻眼を開眼した。

そして、幻想世界を創り上げようとするマダラと共に戦った。

共に……この現実の世界を、救うために。

彼らがそれぞれ六道仙人に答えた『理想の世界』は大きく異なっていた。

たとえマダラを倒せても、決して重ならない未来だった。

共に戦いつつも、互いにそれを知る由もない。

だが、抱く痛みは同じだった。

仲間を失い、兄を失い……そして、ナナを失った。

一緒に生きるはずだったナナを。側に居たかっただけのナナを。

失った痛みは同じだった。

ナルトとサスケが、耐えがたい痛みを抱えたままマダラと戦っている……。

少し離れた場所から空気を伝う戦闘の気配に、カカシはそう感じていた。

そちらを向くが、二人の姿も、マダラの姿も、そして最後の戦いを果たしたはずのガイの姿も見えはしなかった。

左眼はすでに光を失いつつあった。

が、反対に『あの光景』はまだ鮮やかなまま……瞼に焼き付いている。

それはまるで呪縛となり、全身にまとわりついていた。身体だけでなく、心にも重い鎖を巻き付けたようだった。

チャクラを使い切った疲労感だけではない、『重さ』……。

こんなものを引きずってあの二人は戦っているのかと思うと、余計

に胸が痛んだ。

(ナナ……お前はそこから、二人を見守っているのか……?)

無理やり重い首をもたげ、空を見上げた。

赤い月に邪魔されて、密やかに瞬く星。

その儂い光は、まだ左の目でもとらえることができた。

(ナナ……お前はもう、苦しみから解放されたのか……?)

だが、その「祈り」を遮るように、突如としてマダラがカカシの目の前に現れた。

「マダラ……?!」

そう認識することしかできなかった。

わずかに身体を動かす間も与えられぬうち、オビトから受け継いだ左眼を彼にむしり取られてしまった。

今さら、その痛みは感じなかった。

肉体的苦痛など、胸の痛みに比べればやり過ぎしやすいのだ。

だから……。

彼の元にサスケが現れ、サクラが異空間から戻って、さらにナルトが駆けつけて……かつての七班が顔を揃えても、やはり眼ではなく心が痛んだ。

ナナが居ない七班の形が、カカシの眼には空虚に見えた。

ナナの居ない第七班……。

その前に、両の輪廻眼を揃えたマダラが現れた。

ナナの居ない第七班と、マダラとの戦いが始まった。

といっても、マダラに向かって行くのはナルトとサスケの二人だけ。

地爆天星、尾獣玉、須佐能乎……。サクラとカカシの理解の範疇ではない戦いが繰り広げられた。

無力感……。それは胸の奥で湧き上がってはいたが、そんなものどうでもよかった。他に感じるものがあまりに大きすぎて、どうでもよかったのだ。

が、自嘲する間は無かった。

ナルトとサスケ、二人とマダラの戦いはそう長く続くことはなく

……突然、月の光がいつそう明るくなったのだ。  
無限の夢を叶えるための、月に映せし眼が開く……  
とうとう、マダラは無限月読を発動させた。

この世界を、全ての人々を、夢の中に引きずり込んだ。  
戦場の忍やサムライたちも、戦いの終わりを知らず、夢に落ちる。  
現実に命を繋いだのは、サスケの須佐能乎に守られた彼らだけで  
あった。

しばしの沈黙の後……、その須佐能乎の中でサクラが言った。

「サスケ君、外は今どうなってるの……?」

対して、サスケの答えはあまりに冷たい。

「聞いてどうする? お前がそれを知ってったところで、何もできな  
いだろう」

その他者を全く寄せ付けない態度に、カカシは当然のごとく間に入  
ろうと発言しかけた。

が。

「カカシ、アンタも黙っている。アンタもサクラと同じ、今できること  
は何もない」

サスケはやはり、すげない言葉を吐く。

以前にもこんなサスケを見た。サクラに対して、本気の殺意を抱い  
て襲い掛かったことがあった……。

『イタチの命と引き換えに笑ってやがる!!』

サスケは激しい憎悪をむき出しにしていた。

『オレの憎しみとナナの悲しみを知れ!!』

彼に刃のような言葉を突き刺されたまま、動くこともできず……。  
自分たちは結局、彼を連れ戻せなかった……。

あの時よりも、サスケの憎しみは増した。悲しみも計り知れない。  
ただ違うのは……、その感情を少しも表さないことだ。

その計り知れない憎しみと悲しみを秘めたまま、彼はこの現状をあ  
くまで冷静に分析する。

たったひとりで……。

いや、彼の着物を染める赤黒い染みだけが、彼に寄り添っているよ

うだった。

もう、サクラも彼に視線を向けることすら躊躇っている。

やがてサスケは、外の月の光が正常に戻ったと判断し、須佐能乎を解いた。

視界の先には、オビト……いや、オビトにすっかりとりついた黒ゼツが居た。

「サスケ！ みんなの幻術を解くにはどうすりゃいい？」

「輪廻眼の幻術は輪廻眼で解くことができる……おそろくな」

ナルトとサスケの会話に、黒ゼツはこう言い放った。

「ソウハサセナイ……才前たちハ今カラ処理サレル」

そして、無限月読を仕掛けた張本人であるマダラも叫んだ。

「世界の『救世主』であるこのオレにな……！」

マダラは「救世主」を名乗った。

彼の額には、もう一つの眼が開眼している。

「オレは地獄を天国へと変えた。理解しろ。もう全てが終わったのだ……！」

ここは天国なのか？

ナナが居ないの？

いや、違う。

ナナが居る夢を見られるのか？

そこが、天国とでもいうのか？

カカシは一瞬だけ自問した。そして、サスケの背を見つめた。

サスケにとって、もう天国などどこにも存在しないのだ。夢の中のナナなど、彼には意味がない……。

その時だった。

次の攻撃に対して身構えていたはずの目標……マダラに異変が生じた。

マダラの胸から黒い手が突き出たのだ。

初め、カカシはマダラが新たな変化を遂げるつもりなのかと思っ

だが、違った。

その手の主は、マダラに言ったのだ。

「違ウゾ、マダラ……オ前ハ救世主デハナイ……。ソシテ、コレデ終ワリデモナイ」

聞き覚えのある声。

それを思いだしたと同時に、マダラの背後に立つ人の形をした黒ゼツが目に入った。

「何を言ってる、黒ゼツ?! お前を作り出したのはこのオレだぞ……! お前はオレの意志そのもののはずだ!」

マダラは明らかに動揺していた。

あれほどの力を持ち、世界すら支配しようとしている者が、身動き一つとれずにわめいている。

「違ウ」

黒ゼツは、そんな彼に容赦なく告げた。

「オレハ……カグヤの意志ダ」

「カグヤ」と、そう聞こえた。

が、カカシはその名を知らなかった。

だからまだこの時は、マダラとその手下であつたはずの黒ゼツの仲間割れなのだと思っていた。

しかし、少し前に立つサスケが言った。

「カグヤだと……?!」

驚きの中、確かに怒りが混じっている。

今まで冷静だった彼の声音に、あの憎しみが蘇っていた。

それに気づくと同時に、ナルトがこう叫んだ。

「どういふことだつてばよ?!」

彼の声も、驚きに怒りが滲んでいた。

そして彼は、カカシに驚愕を共有させるような言葉を続けた。

「カグヤは、ナナが殺したはずじゃなかったのか?!」

耳を疑った。

よく知る名と、聞き慣れない名が同列になることの意味が理解できなかつた。「ナナが殺した」の意味も。

察する力などとうに失くしている。

だから、ただただ忍でない者のように驚愕するしかなかった。

が、ナルトとサスケも明らかに動揺していた。

彼らは何かを知っている。当然、二人に聞かねばならなかつた。たとえ彼らの動揺をさらに煽るようなことになっても。

だが、そんな暇は与えられなかつた。

あれほど勝ち誇つたような態度を取っていたはずのマダラが、苦痛の叫びを上げたのだ。

次の瞬間、地中から何かが噴出した。

一か所からではない。何本も何本も……エネルギーの塊のようなものが地面を突き破って噴き出していた。

「チャクラだ！」

サスケが言った。

「こんな濃いチャクラ……どこから?!」

「無限月読で捕まっているやつらのものだろう」

「十尾どころじゃねーぞ！」

三人ともどうにか足場を見つけて着地するのが、閉じかけた目にもかろうじて見えた。

「チャクラを……きゅ、吸収してるってばよ……！」

チャクラの柱は、マダラの身体に次々と吸い込まれていく。

その身体はすぐにチャクラで風船のように膨らみ、もはや人の原型を留めなくなつた。

「動く前に止めるぞ、ナルト！」

「わかつた！ 膨らんでるうちに止める……！」

ナルトとサスケは、次の「何か」が起こる前にマダラを止めようとしていた。

おそらく懸命に先ほどの動揺を押さえ込んで。



が、〃それ〃に近づくことは叶わなかった。動きを察した何かか〃それ〃から飛び出し、ナルトとサスケの身体を突き飛ばしたのだ。カカシもうかつに動くことができなかった。ただひとり、黒ゼツだけがこの状況の中で冷静だった。

彼は膨張するマダラに取り付きながら、楽しげに語った……。

かつてカグヤは人々に無限月詠をかけた。

が、殺しはしなかった。

カグヤの〃兵〃とするために、生かしたまま〃保存〃しておいたのだ。

それはつまり、人々を〃白ゼツ〃に変えて……と。

彼らがその意味を完全に理解する前に、黒ゼツがオビトの身体を捨て去り、マダラと一体化した。

膨張していたマダラの身体はやがて縮小し、徐々に人の形を取り戻した。

だがそれは、すでにマダラではなくなっていた。

長い髪、二本の角、そして額には眼を持つ……女の姿になっていた。彼女から発せられる強暴なチャクラにおののきながら、彼らは知った。

彼女が、大筒木カグヤなのだ。

カグヤは初めにこう言った。

「何故あの娘ではないのだ？」

カカシは反射的に歯を食いしばった。

サスケとナルトも、同じものを押し殺しているだろう。

「あの娘の身体で蘇るはずではなかったのか？」

カカシはようやくわかりかけていた。

『ナナは、とつくに自分で自分の存在を始末しようとしたはずだ』

あの時のオビトの言葉がまた蘇る。

彼はおそらく、神樹の開花のためにナナがうちはマダラに利用される……そういう意味で〃助言〃した。

ナナ自身もそれを悟り、自分で自分を……と。

だが……本当に悟っていたのは「コレ」ではなかったのだろうか。カグヤが「あの娘」と呼ぶのはナナのことだ。今さらそれ以外は考えられない。

ナナは……このカグヤの復活を阻止するために、自らその命を散らしたのだ。

それを、サスケとナルトもわかっている……。。

(だったら、何故だ……)

同じ疑問を、二人も持っているはずだった。

何故、カグヤがここに居る？

何故、マダラの身体で復活を……。

カグヤはナナが……ナナの命が……。

「ゴメンヨ母サン」

その答えは、カグヤの袖に隠れた黒ゼツが持っていた。

「アノ娘ガ母サンニキツイテ、ミズカラ死ヲエランダンダヨ。ソコニ居ル「ウチハサスケ」ニ自ラヲ殺セルコトデ……」

カグヤは黒ゼツが指したサスケの顔をじつと見た。

その視線にも、無遠慮な黒ゼツの言動に対しても、「不愉快」だとは感じなかった。

ただ驚愕し、絶望した。

「な、なんでお前がここに居るんだってばよ?!」

ナルトが気を振るい立たせて叫んだ。

横目で、かすかに肩を震わすサスケを見ながら……。

「あの娘でなければワラワは完全ではない……。完全となるために、ワラワは何百年も待ったのだ」

「デモ母サン。ソノ身体ハインドラトアシユラノチャクラモ宿シテイルヨ。悪クハナイダロ?」

カグヤと黒ゼツは、ナルトの問いなど無かったことのように話を運ぶ。

「少々不満は残るが……この期に及んで口にしても仕方あるまい」

カグヤは長い髪を揺らし、大きなため息をついた。

そして、サスケとナルトにより鋭い視線を向けてつぶやいた。

「そのの ヲウチハサスケ」とやら、インドラの……。それに、そつちの  
餓鬼はアシユラか……」

彼女の目に力がこもった。

それは、ネジヤヒナタが白眼の能力を使う時とまるで同じだった。  
「ならば……術を渡したのはハゴロモというわけか……」

その表情から、感情は一切読み取れない。

カグヤが次に一体何を口走って、そしてその膨大なチャクラをどの  
ように使うのか予測ができなかった。

が、先手を打たれるよりは……と考えたカカシは、ギリつと足元の  
小石を踏みしめながら口を開いた。

「あなたの目的は何だ?!」

しかしカグヤにはその問いかけも無駄だった。

「この地はワラワの大切な苗床だ。これ以上、傷つけるわけにはいか  
ぬな……」

彼女はそうつぶやくと唐突に言った。

「もう戦いは止めましょう」

ため息のように吐き出された突然の終戦宣言。

それに驚いた瞬間、当たりの景色が一変した。

「ズンズン」ではな

カグヤの声が聞こえると同時に、身体が宙に浮く。そして、急激に  
身体を覆う熱……。

辺りは、下にマグマが流れる洞窟と化していた。

## 戯曲

ナルトから見ても、サスケの戦い方は滅茶苦茶だった。

一見、冷静なようであるが、彼の周囲には怒りが爆ぜていた。足元に広がるマグマよりもふつつつと、感情が滾っているのがわかる。

もつとも、サスケがそんな状態でいなければ、彼自身も同じように無謀な攻撃を繰り返していただけかもしれない。

「サスケ、いったん間をとれ！」

「わかっている」

応えは至極、落ち着いている。

だが何か、堪えていた最後の糸が切れたかのように、その行動には歯止めが効いていなかった。

おそらく、サスケの頭に在るのは目の前のカグヤを「倒す」ことではない。「答え」を得ることだ。

何故、ナナが命を賭して葬ったはずのカグヤがここに居るのか……その答えを急いでいる。

ナルトも同じだった。

六道仙人は、カグヤがナナに転生しようとしていたと言っていた。それをナナが阻止した……運命に勝つたのだと……。

それなのに……。

なぜ……？

しかし、その当然の疑問さえも口にする間はなかった。

落ちれば一瞬でマグマに骨まで溶かされる状況。カグヤのチャクラは膨大で、攻撃は全てはね返された。

さらにカグヤには、空間を自在に「移動」する能力が備わっているようだった。

その目には見えない動きによって、ついにナルトとサスケはカグヤの手に捕らわれる。

顔に冷たい手を添えられたまま、身動きが取れなかった。

そのままカグヤの袖から液状になって伸びて来た黒ゼツに、身体を

侵食されていく。

チャクラが吸い取られている感覚の中、二人はカグヤの白い眼から涙が流れるのを見た。

「カグヤハオ前タチ二人ヲ見テ、二人ノ我ガ子ニ思イヲ馳セテイルヨウダ……」

ズルズルと、それぞれの顔半分を覆いながら黒ゼツが言う。

「黒ゼツ、お前は何者だ?!」

サスケが無理やり叫んだ。

と、

「オレはカグヤの子供だ」

そう宣言すると同時に、急に黒ゼツの口調が変わった。

「母の居ない『時』の全てを記録し、その間の『物語』をオレがつくった。そう……母が復活するための物語だ」

カグヤはかつて、我が子に封印された。

が、いつか復活する日のために、封印の寸前に意志を継ぐ『子』を生み落していた。

その存在こそが黒ゼツなのだという。

「オレは生まれ落ちたその日に母と別れ、それから長きに渡り母の復活のために動いていた。これはハゴロモも知らぬ真実だ」

淡々と、黒ゼツは一から『物語』を語る。

ハゴロモとその息子たち、インドラとアシユラのこと。黒ゼツがインドラを陥れ、アシユラとの争いを仕向けたこと。何度も繰り返しいンドラとアシユラの転生者に接触して、輪廻眼の発現を試みたこと。やがてマダラが現れ、彼の影となって動いてきたこと。マダラを操ってオビトを利用したこと。この戦争のこと。

そして……。

「十尾は『チャクラの実を取り返そうとする神樹の化身』ではない。十尾の本当の正体は、神樹と一体化した母自身なのだ。神樹がチャクラを欲していたのは『母の意志』そのものだ。母は二人の子供に分散

したチャクラを取り戻し、再びひとつにしようとしていた。このことはハゴロモも知らない」

六道仙人すら知らぬ、カグヤの真実。

「ハゴロモは十尾を核とした地爆天星で母を封印した。そしてそれが月となった」

その封印と復活の物語。

「オレは母の復活のために画策してきた。が……神樹と一体化した母が人の世に復活するためには、やはり『器』が必要となる。醜い大木のままであまりに恰好がつかないからな」

そしてカグヤの『器』の話。

「だから母は、人間の身体に転生しようと試みていた。何度も、何世代も……アシユラとインドラが転生する時代に合わせて……」

黒ゼツはようやくここで核心を突いた。

チャクラを吸い取られながら、ナルトとサスケは身震いをする。

遂に『ナナの物語』が、その黒い口から語られた。

カグヤは、見目麗しく特殊な能力に秀でた血筋の人間を選んで転生しようとしていた。

巫女、神官、高僧、尼僧……、もちろん和泉一族の血を引く者もその対象とした。

だが、転生者は己に潜むカグヤの魂のあまりの強さ、凶暴さ、そして冷酷さを悟ると、自身へのカグヤの転生を阻止しようとした。

ある者は自ら命を絶ち、ある者は協力者に己の魂の封印を乞うた。

皮肉なことに、転生者たちはカグヤが選ぶだけあって優秀だった。能力も、人格も、ともに他に並ぶ者の無い存在だった。

だから、カグヤはただの一度も復活を成し得なかった。

が、カグヤは何度でもこの世に舞い戻ろうとした。決してその魂が消滅することはなかったのである。

それほどに、カグヤの力は強かったのだ。

そうして月日は流れ……インドラの転生者としてうちはマダラが現れた。

マダラなら、カグヤの復活のための有力な駒になり得る……そう確信した。

マダラはアシユラの転生者である千手柱間に敗れはしたが、柱間の細胞を取り込んだことで輪廻眼を開眼した。

そこで転生のループが狂うことになったが、それでよかった。次の兄弟の転生者が現れるまではオビトを利用できた。

そのうちに、母が次の転生者を選んだのを知った。

感知できたわけではない。

マダラやオビト、そして木ノ葉隠れの里を見張っているうちに、和泉成葉の存在を知ったからだ。

いつもそうだ。

いつしか現れる才ある人間……さらに、血筋も申し分ない人間に網を張っておけばいい。

そうして網にかかったのが、和泉の才に恵まれた、百年に一人の天才陰陽師と謳われる和泉成葉だった。

初めは、成葉こそが次のカグヤの転生者なのだと思った。

が、彼女の代にインドラとアシユラの転生者は現れなかった。

だが、和泉成葉はうちは一族の男との間に子を宿していた。

それこそが『最高の器』だと直感した。

たとえ和泉一族の純潔種でも敵わない、最高の器だ。

何故なら、カグヤの祖先である和泉一族の純血と、カグヤの子孫であるうちは一族の純血が交わった血を持つ者なのだから……。

だから、その子供が産まれる時代に合わせて、インドラとアシユラも転生すると信じて疑わなかった。

だがしかし、和泉成葉は評判通り、和泉流陰陽道の才を存分に受け継ぐ天才だった。

彼女は我が子がまだ胎児のうちに、カグヤの気配に気づいたのだ。

そして、その存在の一端までもを読み取り、六道仙人を呼び出すに至った。

そこで成葉は、カグヤの存在を初めて知った。

彼女は悩み抜いた末、転生者の子供を産まずに、自身の魂を媒体に

して我が子を封印する道を選んだ。

ここでまた、カグヤの復活は阻止されたのだ。

しかし、最高の器を一度目にした以上、諦めきれなかった。あれほど相応しい器は、この先もう数百年は現れないだろう。

だから、和泉一族の怯弱さはまさに好都合だった。

成葉が死を選んだ年に、オビトが九尾を使って木ノ葉を襲ったが、和泉一族にはその凶事を予知できる者はいなかった。

オビトが木ノ葉に復讐するよう「仕向けた」のだから無理もないが……。

それでも、和泉一族は神聖なる一族の弱体化を実感させられて、極度に外界を恐れていた。

そこで、和泉一族の者に取り付いてこうささやいた。

『和泉一族は九尾襲来を占えなかった挙句、その封印に手を貸すことさえできなかった。これでは、木ノ葉の忍連中や火の国の大名は和泉一族の不義を疑うようになり、果ては一千年続いた栄名も地に墮ちるだろう』

と。

和泉一族は、あからさまに動揺した。

挙句、人柱力が尾獣を抑えきれなくなったとき、その保険となり得る優秀な術者を木ノ葉に提供することを考えた。

無論、自分らの中に該当する者が存在しないことを良く知っていた。

彼らの身体は脆く退化し、人柱力にすらなり得ない。その役目の一旦を、支流の『うずまき一族』に負わせる体たらくだった。

だから彼らは、かつて崇められた優秀な術者を蘇らせることを考えた。

そして当然、最も新しい時代にして名声の名残が強い和泉成葉が選ばれた。

計画は進み、本家の奥方の胎内に和泉成葉を転生させることとなったのだ。

ここで、オビトを介して和泉の人間にシナリオを授けた。



『和泉成葉ではなく、その子供を転生させる』  
と。

転生術に関わる術者ですら写輪眼に操られるほど弱体化していたから、事はすんなり運んだ。

そうして産まれたのが和泉菜々葉だ。

……そこまで辿り着いて、黒ゼツは笑った。

「オビトはあの娘が自分の意図で産み出されたと思い、父性じみたものまで抱きかけていたが、全てはこのオレが仕組んだことだ」

ナルトとサスケに不快感を表わす間は与えられなかった。

「オビトには、マダラは『写輪眼の進化』を期待していたから、和泉とうちの混血であるナナが写輪眼を開眼するのは興味深いことだ……と言いついて聞かせた。さらに、うちの石碑に『神樹の花を開かせるには和泉一族の血が要る』と書き足しておいたから、オビトは神樹を口寄せした後で、必ずナナを呼び寄せるはずだった。そしてその時のために、和泉一族の間を操って、赤ん坊のナナの頭蓋に口寄せの術式を埋め込ませておいたのだ」

立て続けに明かされるカラクリ。

「和泉一族が、ナナが『九尾の器』という己の運命に絶望しても死を選ぶことができないよう、予め術をかけていてくれたことは、『器』自身が母の復活を阻止し続けてきた連鎖を止めてくれた……」

全て黒ゼツが仕組んでいたシナリオ。

「何も知らないナナはうまい具合にうちはイタチと出逢い、木ノ葉の忍になった。それはオレにとって都合だった。ただ里の外れの廃れた神社の巫女として孤独生きるのではなく、忍になって他者と交わってくれたほうが、写輪眼を開眼する可能性があったからな。そして……まさにそうだった。このへんは、お前らのほうがよく知っているな」

それは、懸命に生きていたナナを愚弄し、憐れむようだった。

「あとは予定通り、オビトにこの戦争を起こさせるだけでよかった。オビトは途中、使い物にならなくなったが、マダラは復活し、神樹も

復活した。オレはただ、マダラにナナを口寄せする「式」を渡せばよかった。術をかけた和泉一族の者からもらった「式」だ。だからナナがこの戦場に来なかったとしても、最終局面ではどのみちマダラに呼び寄せられる運命だったのだ」

黒ゼツは小さく、「かわいそうにな」と呟いた。

「しかしサスケ……ナナがお前に自分を殺させようとしたときは焦った。せつかく神樹に封印された母の力と、ナナに転生した母のチカラがひとつになる千載一遇の好機を、お前がつまらぬ同情と正義感でブチ壊すところだった」

この台詞に、サスケの眼球が揺らいだ。

「だが、お前はやはりナナを殺せなかったようだな。哀れナナは……自らお前の千鳥の前に飛び込むことで、懸命にカグヤの転生を防いだのだ」

「黒ゼツ……」

だが、黒ゼツに対しての彼の声は冷静だった。

「お前は、ナナが『自分を殺せ』とオレに訴えた時、オレを阻止するために見張っていたのか……？」

「あたりまえだ。オレと母の数百年にわたる苦勞を台無しにされてはかなわんからな」

答えを聞いて、サスケはフッと笑った。

「どうした？　ここまで周到に仕組まれていたことがおかしいか？」

何も知らなかった己がおかしいか？　だが全てが失敗した訳じゃない。実際、ナナは誰もが予想しなかった行動に出て、カグヤの転生を……」

「そうじゃない」

そして、黒ゼツの流暢な嘲笑を遮る。

「ナナは……知っていたんだ……」

「なんだと？」

「だから、オレを……」

身体を侵食する黒ゼツのうごめきが、止まった。

「サスケ……お前、やっぱり……」

ナルトが、視線だけをサスケに向けて呟いた。

「全部、わかってたんだな……」

「なに？」

黒ゼツは、二人の身体の表面で瞬きをした。

「わかっていただくと？」

「サスケはっ……」

答えたのはナルトだった。

「サスケはナナがそうするって……そうして欲しいって思ってるのを、全部わかってたんだってばよ！ わかってて……わかっててサスケは……！」

サスケは何も言わなかった。

悲愴感すら漂わすこともなく、ただ目の前のカグヤの顔を見据えていた。

「オレが阻止することをわかっていて、お前たちはああいう行動に……なるほど、最期の瞬間までお前たちは互いにわかり合っていたというわけか」

黒ゼツは、嘲笑を止めていた。

素直に悔しさを現し、「そのおかげで母は……」と呟いただけだった。

「でも、転生者のナナが居ないのに、なんでカグヤは転生したんだってばよ?! マダラの身体にも転生できたのか?! なんでだ!？」

ナルトには、「転生者のナナが死んだのに」とは言えなかった。ナナの死を、まだこれっぽっちも受け入れられてはいないのだ。

だがそれでも、この状況に対する情報を得る必要があった。隣で心を殺すサスケの分も、冷静に立ち回らなければと思っていたから。

「ナナは置き土産を残してくれた」

黒ゼツは、若干声のトーンを落としながら言った。

カグヤをナナに転生させられなかったことを、心底悔いているようだった。

「腕……か……」

サスケが異様に静かに言った。

「そうだ。神樹と一体化したナナの一部があった」

サスケとナルトにとって、まだ新しい記憶……。

ナナは、神樹に“喰われた”左腕を草薙の剣で切り落として身体  
自由を得た。そして、サスケの千鳥に突っ込んだのだった……。

「ナナの身体が“昇華”する前にアレを神樹に吸収させ、その神樹を  
マダラに取り込ませたことで、マダラには母の“土台”ができた。も  
ともとインドラの転生者であるマダラには、資格がないと言い切れ  
なかったからな」

黒ゼツがため息をついたとき、ずっと黙って涙を流していただけの  
カグヤが口を開いた。

「口惜しい……あの娘の身体であれば、視線ひとつでこの世界を動か  
せたものを……」

それが、単に人格化した存在の戯言でないことは、ナルトにもサス  
ケにも十分にわかっていた。

肌で感じる、カグヤの未知なる力の恐ろしさ。それに加え、良く  
知っているナナの力。

合わさればどのくらいの影響力を持つのか、わかってしまう気がし  
たのだ。

「物語はこれで終わりだ」

押し黙った二人に対し、黒ゼツが言った。

「さあ最終章だ。オレと一緒に母なる全能の神へと戻るのだ」

その言葉と共に、ナルトとサスケのチャクラがいつそう強く、カグ  
ヤの方へと引き込まれて行った。

## 想いを繋ぐ人

「お母さん……今の……今の話って……」

薄闇の河原に、母娘がたたずんでいた。

「あの黒いのが言ってた事って、本当……?」

恐る恐る聞く娘のナナ。

「ええ……。きつと全てが、本当でしょうね」

ため息のように答える母、成葉。

「じゃあ……私のことって……」

「無駄じゃないわ……!」

成葉はナナの肩をつかんだ。

「あなたはあの時、みんなのことを護ったでしょう?」

そして視線を合わせてそう言う。

「でも!」

ナナは成葉から目を逸らした。

「でも……結局、カグヤは復活しちゃった……」

「ナナ……」

「サスケに、あんなに辛い想いをさせたのに……結局、カグヤと戦わせることになっちゃった……」

ナナの瞳から再び涙がこぼれ落ちた。

「みんなも……無限月読の術にかかっちゃったし。世界は……」

「ナナ。まだよ」

その涙を、成葉は優しく拭う。

そして強い声でこう言った。

「後悔も絶望もまだ早いわ。まだ、結果は出ていないでしょう?」

「結果……?」

成葉は笑った。

「まだ戦いは終わっていない。二人はまだ、戦うことを止めていない」

その視線が川面を向く。そこに映される、懐かしい場所へ。

「ほら……見て……」

促されて、ナナもそれを見た。  
カグヤに捕らわれていた二人が、決意に満ちた眼で、まわりつく  
“黒い影”を引きちぎっていた。

(サスケ……、ナルト……)

自分が今まで居た世界。

そこで繰り広げられる戦いを、ナナは食い入るように見つめた。  
自分がしたことが無駄だったとか、サスケに背負わせたものの重さ  
とか、償いとか……それを今、考えるのは止めにした。

この戦いが終わってから、じっくり考えればいい。  
そう思う。

もう自分には、ただ見守って祈ることしかできないけれど……結末  
を見届けるのだと決意した。

たとえその戦いが、どんなに凄惨なものであっても。どんな結末を  
迎えようとも。

今、世界は無限月読の術に飲み込まれ、カグヤと対峙するのはわず  
かな忍だけだった。

ナルト、サスケ、カカシ、サクラ、そして……うちはオビト。彼ら  
だけが、あの世界を救うために戦っていた。

あの場に一緒にいられなかった悲しさが、ほんの少しだけ胸を刺す  
が、それをそっと押し込めた。

自分はすでに傍観者でしかない。

持て余す感情は、全て “祈り” に変えなければならないと思った。  
あの人も、うちは一族の……?」

だから、隣で手を握ってくれている母の問いに、冷静に答える。

「そうなの。あの人は、カカシ先生の親友だったんだって。あの人も  
四代目様の部下だったの」

「そう……彼もミナトの……」

「お母さん、カカシ先生のこととは知ってるんだよね?」

「ええ。カカシ君はたまにミナトのお使いで和泉神社に来てくれてい

「だから……」

母は懐かしそうな顔をした。

「すっかり大きくなっちゃって、立派な忍になったわね」

過去へ飛んだ日のことを思い出し、ナナは少し笑った。

生意気そうなカカシの態度が蘇ったのだ。

「ミナトはカカシ君のことをよく話していたわ。まだ幼い頃、任務で仲間を亡くして……それから殻に閉じこもるようになって。でも、神社に来た時にからかつたら反応が面白かったから、悪い子じゃないって私は思っていたけど」

たった一日の儂い思い出に、母が肉付けをしてくれる。

「その『亡くなった』と思っていた仲間が、あのオビトっていう人だったの」

「そうなの……。カカシ君も、今までたくさん乗り越えなければならぬことがあったのね」

戦況を見守りながら、母は過去に思いを馳せているようだった。

ナナも、昔のカカシの様子など聞きたいことはあったが、見つめる先はそれほど余裕のある戦いではなかった。

皆、すでに疲弊していた。

身体を酷使しすぎたオビトはもう、立ち上がることもままならぬ。い。

そして、自由に空間を移動したり、させたりできるカグヤの能力によって、サスケはナルトたちとは別の空間へと飛ばされてしまった。

「サスケ……！」

「画面」からサスケが消える。

「お母さん、サスケが飛ばされた場所もここから見られる?!」

「「ここから」なら、どこへでも視点を移動させることができるような気がしていた。」

「待って……。幻術の世界じゃなければ見られると思うんだけど……。現世から離れた空間を認識するのはここからでも難しいわ。ちよつと時間がかかるかも……」

母は神経を集中させるように、胸の前で印を結んで目を閉じた。

川面に浮かぶナルトたちの姿が、わずかにブレる。

(サスケ……！ どこ……？)

ナナも同じように、陰陽道の印を結んで目を閉じた。

最初、この川に現世を映し出した時のようにあの世界のことを想い浮かべるのではなく、ただただ、サスケの姿を想って……。

すると、案外あっさりサスケのチャクラ……いや、魂を感じ取ることができた。

「さすがね、ナナ……」

母に言われて目を開けると、川面にはもう一つぼんやりとした光が浮いていて、そこには砂漠にたたずむサスケの姿が映っていた。

「サスケ……よかった……」

彼の無事に、心底ほっとする。

「ナナの想いが強かったからよ」

「うん……」

母には曖昧に返事をして、二つの空間を交互に見つめた。見逃すところが無いように、注意深く。

ナルトは必死にサスケを探していた。

彼にサスケの居場所を教えたいが、それは叶うはずもなかった。その逆も。

が、しばらくして、オビトとサクラがサスケの居る空間を感知したようだった。

「大丈夫、サクラちゃんならきつとサスケを助ける……！」

まるで自分に言い聞かせるように言った。

固唾をのんで見守る中、限界まで力を出し切ったサクラの元にサスケが辿り着いた。

それを見て、何故だか胸がちくりと痛んだのは、母に気づかれないうようにした。

「頑張ったわね、あの子。サクラちゃんて言うの？ あの子もナナのお友達？」

母は、サスケの無事にほっとしたように言った。

ナナも気を取り直してうなづく。



「うん。サクラちゃんも第七班だよ。医療忍者で、チャクラを扱うのがすごく上手なの」

説明して、ふと違和感を覚えた。

おかげで、先ほどの胸の痛みは治まった。

「仲良くしていたのね」

「う、うん……」

嬉しそうな母の横顔を、じっと見つめる。

「お母さん、サクラちゃんのこと知らなかったの……？」

その問いに、母は顔を曇らせた。

心がざわついた。

今の今まで、母は「全て知っている」と思い込んでいた。ずっと自分を、〃ここ〃から見守ってくれていたのだと信じていたから……。

「カカシ先生と、ナルトとサクラちゃんとサスケと私……第七班のメンバーだよ」

試すように言うと、母はどうとうつぶむいた。

「ごめんね……ナナ」

そして。

「あなたのこと……あなたの成長を見守ることすら……私には許されなかったの……」

そう、告げた。

「そうなんだ……」

初めはその真意がわからなくて、ただうなずくだけだった。

そもそも、〃こちらの世界〃の仕組みなんて知るはずもない。だから母が謝ることのほどではないと思ったのだ。

〃こちらの世界〃に居るからといって、今のように自在に現世を除けるとは限らないのかもしれない。だか

だが、母が「許されなかった」と言ったことに気がついた。

それはどういう意味なのか……。  
考えるより早く、母は話してくれた。

「私はあなたを封印して死んだから……黄泉の国へは渡れなかった」

母の視線は川へと戻る。

いや、その向こう岸へ。

「この川を渡れずに、ずっと『こちら側の檻』の中に居たの」

霞がかつた対岸と、足元を見比べた。

「『こちら側』？　じゃあ……向こう岸が……」

「そう……。この川の向こうが黄泉の国なのよ」

踏みしめているこの場所は『黄泉の国』ではない。

よくはわからないが、まだ半分だけ現世と繋がった場所なのだ。

ということはつまり、ここにいる自分と母の存在は、『あの世』へ

逝けずに彷徨う魂ということになる。

「私は『こちら側の檻』の中で、お腹にいるあなたの魂を抱いていた。

じつと……あなたの中のカグヤを転生させないために」

罪悪感を抑え込むように、母は淡々と話す。

「川の向こうの世界……黄泉の国に逝ってしまったら、カグヤの魂が解放されて、また誰かに転生してしまうから……。だから向こうへは行かず、こちら側に留まって居たのよ。もちろん、『檻』は私自身の封印の術で作られたもの……。誰も封を解けぬよう、自分でさえも出られることはできない強固な『檻』だったわ」

自らを『檻』へと押し込んだ母の決意を、改めて知った。

「それなのに……父上たちがお母さんから『私』を奪い取ったってこと……？」

だから、改めて一族のしたことに怖れを抱いた。

怒りではない、怖れだ。

母の崇高な決意を、自分たちの保身のために打ち砕いた行為が、怖ろしく思えたのだ。

「でも、お母さんの封印の術を破るなんて……」

が、まだ半信半疑だった。

彼らの力が母に勝るとは思えなかったし、事実、一族の者たちの力については良く知っている。

それに、母がわざわざ『黄泉の国の手前』に留まっていたのに、どうやって母を見つけたのか……。

「きつと、たくさんの人たちが力を使ったのね」

母はため息交じりに呟いた。

『和泉成葉』を転生させるため、一族の多くの者が術に携わったことは知っている。もちろん、術に耐え切れずに何人もが死に至ったことも……。

「でも、お母さん……。転生の術って、ふつうは『向こう側』の魂を蘇らせる術なんじゃ……」

だがやはり、一族の者たちの能力を信じ切れなかった。

「そうね」

母は言いにくそうだった。

「でも……当主様はやっぱり、一族の長だったのよ。お力に関係なく……」

「え……？」

言葉を濁すのは、当主に対して憚っているのか。それとも、曲がりなりにも『ナナの父』である者に対する遠慮か。

ナナにはわからなかった。

「お母さん、どういうこと？ 父上には何か特別な力があつたの？」

母は決心した様に言った。

「当主様は、たとえば術を扱うお力を持っていらっしやらなくても、一族の長として和泉流陰陽術の知識を得られていたはずよ」

不意に、本家の敷地にいくつも立ち並ぶ古びた蔵の光景が思い浮かんだ。

あの中に、一族に伝わる数多の術が秘められている。

「じゃあ……お母さんが使った封印術の仕組みを、父上は知っていた？」

「そうだと思うわ。『こちら側』を彷徨う魂を見つける術も、当然

「ご存じだったでしょうね」

不快感を押し殺し、ナナは母を見上げた。

「私の封印の術を破ることができるのは、一族の人たちだけだと思っていたの……。うぬぼれじゃなく、そういう特別な術だったから……」

母の言わんとしていることがわかった。

母は自身に、和泉流陰陽術の封印術をかけたのだ。恐らく、己の魂を媒体とするか、もしくは命と引き換えにしなければならぬほどの禁術を。

それを破れるのは、同じ和泉流陰陽術だけだった。

破るとは、つまり封印を解くこと。

それは……成葉とカグヤに憑かれた腹の子、ふたつの魂の解放を意味する。

しかし母は、一族の者たちがそんなことをするとは全く予想しなかったのだ。

カグヤの存在など、一族が知るはずはない。知っていたとしても、好機とばかりにそのまま永遠に封じられることを願うはずである。

そして、当主が自分を疎んでいることも知っているから、自分の魂にも用は無いはずだ。

だから、どちらの魂にも一族が働きかけることはないと思っていたのだ。

「じゃあ……私が転生した後は、お母さんはずっと檻の中でひとりきりだった……？」

「ええ……」

母の長いまつ毛が、悲しげに揺れた。

お腹の子供を護って死んだはずなのに、それを一族の者たちに抜き取られて……。自分は身動きもとれず、檻のなかでただひとり。子の行く末すら見ることも叶わず……。

死してなお、孤独と戦う苦しみまで味わった母は、哀れだった。

「お母さん……」

ナナは、ぎゅつと母を抱きしめた。

「ナナ……」

母は少し安心したように言った。

「本当に……あなたに逢えて嬉しい……」

その言葉は、ナナにとっても嬉しいかった。

たとえば、母が天国から見守ってくれているという生前の理想が違っていたとしても、自分の名前を知ってもらえたのが今になってでも。

ちゃんと、二人の間に絆を感じ取れた。

だから、母が自分の戦いを知らなくても良かった。

先ほどまでは、母が見守ってくれていたと思つて安堵していたのだが……それが無くても心は揺らがなかった。

これから、母にたくさん伝えればいい……。

そう思えた。

が。

「でも……お母さん……」

まだ疑問は残る。

母は、自分の「最期」を見届けてくれていたはずだ。それを見ていたからこそ、温かい言葉をかけてくれたはずだった。

それに今、母は目の前にいる。母が自らを閉じ込めた「檻」は、どこにもない。

「私の最期の戦いは見ていてくれたんだよね？　「檻」から……出られたの？」

顔を上げると、母は微笑を浮かべていた。

そして、頭を撫でながら話してくれた。

「この河原を通り過ぎる死者の中に、私の「檻」が見える人がいて……その人が封印を解いてくれたの」

その答えにほっとした。

が、ナナが言葉を話すのはまだ早かった。

母は続けて言った。

「その人が、ナナのことを話してくれたわ。ナナと……サスケ君と、ナルト君のこと……」

「え……？」

「時間が無かったから、簡単に……だけどね」

一体誰が……？

その時の光景を想像することすらできず、瞬きを繰り返した。すると、母は嬉しそうに笑いながら言った。

「うちはイタチ君よ」

まだ、声は出なかった。

## 娘

ずっと凍えていた。

この世界には、感覚も感情も存在しないと思っていたのに、大きく当てが外れた。

酷い寒さと、悲しみと、怒り……そして悔恨。長い間、たったひとりですれすれに苛まれて来た。

あれからのどのくらいの時間が経ったのかわからない。

お腹の我が子が……陰陽道の術によって、奪われた時から……。

死者が川を渡り行く光景を何度も見てきた。

その中に、知っている者の顔は無かった。

彼らは皆一様に、白い死に装束を着て無言のまま橋を渡って行く。

現世<sup>うつしよ</sup>への未練を断ち切り、黄泉の国に住まうことになった者の前だけに現れる橋だ。

それは清々と繰り返される儀式だった。

誰も、この「檻」の存在に気づかない。声も届かない。

もちろん、相手に聞こえたとしても、声をかけるような馬鹿な真似はしなかった。

そんな中、遂に現れたのである。

この檻の前に立つ、懐かしい「赤い眼」が……。

「あなたはもしかして……」

「彼」は自分が目にしてある光景に驚きつつも、落ち着いた声で話しかけてきた。

「和泉……成葉さん……ではありませんか……?」

彼のことは知っていた。

いや、実際は彼の顔も名も知らなかった。

知っていたのはその眼と……彼の「姓」だ。

「あ、あなたは……?」

自分のことを肯定する前に聞き返す。

久しく使わなかった声帯は、すっかり干からびていた。

「うちはイタチと言います。木ノ葉隠れの里の、うちは一族の者ですよ。やはり……。」

彼は夫のアケルと同じく、写輪眼を扱えるうちは一族の人間だった。

「ど、どうして私のことを……?」

だが、「イタチ」という名をアケルの口から聞いたことはない。

いや、聞いたことがあるはずはないのだ。

もう自分が死んで何年になるのか……。

この、ここへ来るにはまだ年若いイタチという男が、自分の死後に産まれた存在である可能性は大いにあった。

「ナナ」に、とても良く似ているからですよ」

「ナナ……?」

彼は知らない名前を口にし、懐かしそうな眼差しをこちらに向けた。

「ナナ」という名も、もちろん知らなかった。自分に似ているということは、「ナナ」も和泉一族の人間なのだろうか。

「この封印は誰が……? まさか……あなたが自分で……?」

「え、ええ……」

イタチはあまりに素早い予測をたてると、ため息をついた。

そして急に核心を突いた。

「それは……あなたの子が、うちは一族と和泉一族の両方の血をひいていたせいですか?」

息が止まった。

彼は、思った以上に自分のことを知っている。思わず、腹に両手を置いていた。

「二人目の子は、『産めなかった』のではなく、『産まなかった』のですか?」

答えられるはずはなかった。

カグヤのことは誰も知らないはずだったが、答えてしまえば彼が何かを察してしまうような予感がある。

その聡明さは、アケルを思い出させた……。



「でもその子はもう、『そこ』にはいない……」

彼は目を伏せた。

心が騒ぐ。

彼は何を知っている？ どこまで知っている？

（思わず、柵から後ずさった。）

「この『檻』はもう、必要ないはずですね？」

有無を言わさぬような口調で、彼は言った。

ごくりと唾を呑み込み、ゆっくりとうなずいた。

不思議とそうせざるを得なかった。だが表情は変えなかったつもりだ。

「これは……和泉流陰陽術の封印ですか？」

彼は『檻』の全体を見回した。

どうやら、この『檻』……封印を破るつもりでいるようだった。

その口調も視線も迷いがなく、失敗を予感していることはないようであった。かといって自信家でもなく……冷静で聡明に見えた。

そんなところも、やはり少しアケルに似ている。

「無理よ……。自分自身でも解けない封印だもの」

彼を見て、夫の姿を重ねてしまっている自分に気づいていた。

が、こみ上げる不思議な懐かしさは止めようがなかった。

ここに封じられているがために、彼に会うことも叶わずにいるのだから。

「『天敵』の関係にある自分なら、破れるかもしれません」

「え……？」

「少し、下がっててください」

「な、なにを……？」

イタチは少しだけ思案して、片手の印を結んだ。

忍の印だ……。

またアケルを思い出した時、イタチが術を発動させた。その術は黒い炎を産み、檻をあっという間に焼き尽くした。

「え?! うそ……」

「良かった。天照が効いたようです」

彼は笑った。

ほんのかすかに無邪気さを残す笑み。歳の頃も……初めて会った時のアケルと同じくらいか。

「あ、あの……」

酷く戸惑った。

この「檻」を破れる者の存在など、全く頭になかった。いや、「檻」が見える眼の存在も知らなかった。

もつとも、彼の眼のことは良く知っている。

夫も持っていた、うちは一族に伝わる「写輪眼」という特別な眼。それはとてつもなく強力な瞳術を扱えるのだ。

だが、あの眼にこれ程の力があることは知らなかった。

「出られますか？」

「は、はい……」

イタチが差し伸べた手に、素直に捕まって焼け焦げた檻を出た。

彼の背丈も、アケルと同じくらいだ。

「万華鏡写輪眼といえます。写輪眼が少し進化した眼で……より強い瞳力が備わっています。だからあなたのことが見えました」

イタチは成葉の疑問を少しずつ解消するように、先回りして淡々と答えた。

「写輪眼は御存じですね？」

「ええ……」

「うちの力と和泉の力が、時に相殺することもある？」

「そ、そうだったわね……」

彼の眼は漆黒に変わり、まっすぐにこちらを見つめてきた。

「どうやらオレも、さっさと『向こう』に渡らなければならぬようなので、あまり時間はなさそうですが……。ここであなたに出会えたのなら、どうしても話しておきたいことがあります」

その視線は強く、わずかに熱を帯びているように思えた。

初めて聞こえる川の流れにのって、彼の低い声が耳に届く。

「あなたの娘……『ナナ』のことです」

無意識のうち、また腹に手を添えた。

そこからいなくなつた我が子。一族の者たちの術によって、奪われてしまつた娘。

『ナナ』……」

自分が産むはずだつた子の名を、呟いた。

「あなたがお腹の子供とともに亡くなつた翌年、本家の娘として『和泉菜々葉』が転生しました。オレは『ナナ』と、そう呼んでいました」  
イタチは『ナナ』を語つた。

言葉に感情は込められてはいなかつた。ただ淡々と、『ナナ』の生を伝えるだけ。

が、声からはしつかりと、『ナナ』への想いが滲み出ているのがわかつた。

「そう……だつたの……」

娘の許嫁だつたという彼の話は、強く胸を打つた。そして、真実味があつた。

我が子を一度も抱くことが叶わなかつた自分が、初めてほんの少しだけ母親としての実感が持てた気がした。

「ちやんと、友達もできたのね……」

涙が流れた。

「檻」の中で、どんなに苦しくても、悲しくても、流れなかつた涙は温かかつた。

「辛かつたでしょうに……頑張つて生きて来たのね……」

イタチから聞かされる娘の生き様が誇らしかつた。淡白な事実でも、娘の気持ちがよくわかつた。

そして、語るイタチの想いも。

それから……彼が話してくれた娘の友達……。『ナルト』と、そして『サスケ』という少年たちとの交流も。

「おそろくまだ、『戦争』は終わっていないでしょう……」

イタチは一番近い現世の記憶を語つた。

「ナナは……オレがまたひどく傷つけたので、泣いているかもしれない……」

そして彼は、最後に見たナナの姿を思い浮かべているようだった。「それでもまだ、きつと……ナナは戦うと思います」

彼の『ナナ』を信じる言葉は、『ナナ』の本質を余すことなく伝えてくれていた。

それがとても嬉しく、側にいてあげられなかったことが悲しかった。

「ナナは……」

イタチは霞がかった川面に視線を滑らせながら、呟いた。

「儂く、強く、美しかった……」

イタチの想いの深さに、また涙が流れた。

「オレが知っているナナを、あなたに伝えられてよかった……」

イタチは笑んだ。

「もう行きます。橋が消え始めましたから」

彼には「橋」が見えていた。

もう、現世に未練はないのだ。

その橋も、こちら側に長居をしすぎると消えて行ってしまおうようだ。そうなれば、魂は黄泉へ逝けずに彷徨うことになるのだろう。

「ええ……」

手の甲で頬に伝う涙を拭った。

自分にはまだ、向こうへ渡る橋は見えない。

「できればまだ、ナナがここに来ないといいですね」

「あなたの弟さんもね」

彼が語ってくれた戦争のことは、正直、うまく想像ができなかった。だが、忍の世界の過酷さは少し知っている。

あつけなく奪われる命。「また今度」の約束が、果たせないままに破られることも。

「イタチ君……ありがとう」

川の方へ歩き出した彼に言った。

「娘のことを教えてくれて、本当にありがとう」

イタチは振り返った。

その足はもう、橋にかかっている。

「ナナを……愛してくれて、ありがとう」

返された笑みは、とても穏やかだった。

彼のナナへの愛情が、胸いっぱい広がった。

ゆつくりと、イタチの背は霞に溶けた。

それを見届けてから、もう一度、腹に手を置いた。

「ナナ……」

誰かがつけたその名も、もうすっかり自分の娘の名になっている。

「ナナ……強く生きてくれて、ありがとう……」

残酷な使命を背負わされ、それでも父と同じ忍の道を選び、強く、たくましく生きていた。

和泉一族の者としては考えられないほどたくさんの絆を結び、愛し、愛された……。

今まさに、戦場で戦っているかもしれない娘を想い、手を合わせる。

「ナナ……どうか、無事でいて……無事で……。まだこっちに来ちゃだめよ。まだ……。イタチ君も、まだ再会を望んでいないから……。だから……お母さんもあなたに逢いたいけれど……それはまだ先でいいの……。ナナ……どうか、幸せに……。サスケ君と……。どうか……」

思いつきり願いを詰め込んだ風が、成葉の身体を吹き抜けて川面へと流れ込んだ。

目を開けると、そこに、自分とよく似た娘の姿があった。

隣に

「イタチが……う？」

ナナは見開いた目から、大粒の涙が流れ出すのを実感していた。

「イタチがお母さんを見つけたの……う？ お母さんの『檻』を破ったの……？」

散華したイタチの笑みが、鮮明に蘇る。

「彼は、『ここ』に来るのは二度目だから……『ここ』であなたたちのために何かできることはないのかと……。そう思っ、橋を渡る前に写輪眼を発動させてみたそうよ」

こんなところへ来てまで自分とサスケのことを想ってくれるイタチが、本当に好きだった。

早く、イタチに逢いたかった。

彼の願いを裏切つてこんな早くここへ来てしまったが、イタチはきつと笑顔で迎えてくれると思った。

「イタチ君に、とても愛されていたのね……ナナ……」

母の温かい手が、頭を撫ぜた。

うつむいたままうなずいた。拭つても、拭つても、足元に雫がこぼれ落ちる。

「イタチに……逢いたい……！」

素直にそう言った。

「お父さんにも……逢いたい……」

そして、母を見上げ。

「お母さんも、お父さんに逢いたいよね？」

そう当たり前前の問いを投げかける。

自分のために、母は父の元へ逝く流れを自ら絶ち切った。イタチが来るまで、長い時間を独りきりで過ごしてきたのだ。

「うん。逢いたい」

母は綺麗に笑った。

それは少女のような笑みだった。

「でも……」

ナナは涙を拭いながら、川を見た。戦いはまだ、続いている。カグヤは、鬼神のごとく暴れている。まだ、サスケもナルトも生きている。

その光景があるだけで、“橋”とやらは見えなかった。

(みんな……)

サクラの前に、須佐能乎が現れた。しかしそれは、サスケのもではなかった。

それを操っているのはカカシである。彼の眼に、オビトの写輪眼があった。

「カカシ先生……どうやって……？」

オビトの死は見ていた。カグヤによって、その身体はボロボロに朽ちてしまったはずだ。

もちろん、写輪眼も消え失せた。

「もしかしたら……」

母は静かに、予測を述べた。

「死後の世界から、あの瞳術でカカシ君の居る世界に戻ったのかもしれないわ……」

オビトには、時空間を行き来する力があつた。

死して後も、それを使った可能性があるという。

「今、カカシ君たちがいる世界も、ナナが生きていた現実世界というわけではないから、異空間同士を繋げられたのかも……」

母の言葉を理解するのに、少し時間がかかった。

「じゃあ……オビトがカカシ先生に写輪眼をわたしたの？」

「きつとね」

辺りを見回す。

今居るこの場所が、まさに死後の世界であるはずだ。

だが、オビトはここへ来ていない。

「魂がどこに流れ着くかは、人それぞれなのよ」

母は優しく教えてくれた。

「私も、こつちの世界のことは詳しくないけど……。川の向こうへ渡

る前に、誰かが迎えにきたり、誰かに逢えたりするのもかもしれないわはつとして母を見る。

「ナナと私も、ここで巡り合ったでしょう?」

そして……イタチが母を見つけたのもまた、『縁』というものなのか。

「そっか」

納得して、再びカカシを見る。

何の違和感もなく『親友』の形見であるその眼を使いこなしているようだった。

再び力を得たカカシとサクラ。そしてナルトとサスケが……とうとうカグヤを追い詰める。

ナナは祈った。

どうか皆、死なないで……。

まだここには来ないで……。

お願い、無事で……。

敵を倒して欲しいとか、世界を救ってほしいとか、そういう感情ではなかった。

ただ、彼ら……懐かしい第七班のみんなに無事でいてほしい……そう願った。

そして……哀れなカグヤにも祈った。

可哀想なカグヤ。

力しか信じるものが無くなり、我が子に封印され、望み通りの転生も叶わず……。再び、欲したチャクラを持つ二人……ナルトとサスケに封印されようとしている。

可哀想なカグヤ……。

だが、カグヤの支配は『人』のためには存在してはならない。

だからどうか……このまま再び眠りについて……。

「ナナ……」

思わず、両手を握りしめていた。神に祈ったことなどないのに、祈るようなポーズだ。

それを見た母が、肩に手を置いてくれる。



「お母さん……カグヤはどうなるの……?」

指の骨が軋んだ。

「ナルト君とサスケ君は、六道仙人の力を得ているわ。あの力で、カグヤのチャクラを封印するのよ」

「それって……」

ナナは懸命に頭を働かせて考える。

「六道仙人と兄弟が、最初にカグヤを封印したのと同じこと?」

「ええ……そうなるわね」

眼前の光景がブレた。

荒ましいチャクラの波が、空間を揺らしているのだろう。

「ねえ、お母さん……」

この戦いはもう、最終段階だ。みんなはここで力を出し尽くす。そういう予感がすると同時に、ナナは意図的に肩の力を抜いた。

「ナナ……?」

「ここからあの空間が『見える』ってことは、あの空間と『繋がれる』ってこと?」

「え……?!」

母は初めて驚いた顔を見せた。

無理もない。ナナ自身も、そう言い出した自分に驚いているのだ。

「オビトは……できたんだよね?」

「ナナ……まさか……」

鼓動が高鳴った。

間違いなく、かすかな興奮を覚えている。

「私にも……できるかな……あの写輪眼がなくても……」

「ナナ……」

「もともと、和泉流陰陽術には、転生とか、降霊とか……そういう術もあるもんね」

「あなた……何をしようとしているの?」

母は不安げな顔で見つめてきた。

ほんの少しの罪悪感を覚えながらも、ナナは思ったことを口に出した。

「カグヤの『チャクラ』はナルトとサスケに封印されても……」  
確信はない、ただの予感を。

「カグヤの『魂』は……また『次の器』を探して彷徨うことになるんだよね?」

母の澄んだ両目が見開かれ、そして悟ったように伏せられた。

「そうでしょうか? お母さん。私がそうだったんだもん……。封印されても、カグヤはまた転生するよね?」

口をつぐんでいるが、母のその表情は肯定だった。

「ナナ……あなたは……まだ……」

そして、ナナの中に持ち上がった新たな意志を察していた。

「私にまだ、できることがあるなら……」

本当は、決心したわけではなかった。

そんな強いものではない。

「カグヤが……私なら……」

もう、強い心は向こうへ置いて来てしまった。

今は、ただ……。

「カグヤの魂は、私が連れて逝かなくちゃ……」

まるで我儘を言うように、母を見上げた。

カグヤが自分なら……

いや、カグヤは自分なのだ。説明のつかない感覚がそう告げている。

あの絶望に堕ちた女の姿は、きつと、自分のなれの果て……。勇氣、

正義、その拳句の……欲望、絶望、そして孤独。

こんなにもすんなりと理解ができています。

転生する者とされる者は、いわば同魂なのだ。

「私にしか、できない」

唐突に湧いた確信だった。

「和泉流陰陽術で扱う術は、こちらの魂を現世へと呼ぶ術なのよ?

こちらから現世へ戻る力ではないわ」

「それはわかっている」

「空間を繋げられたとしても、あなたの魂を保ったまま向こうへは行

けないかもしれない」

「でも、やってみる……」

なだめる様に、が、半分は諦めたように、母は懸念事項を並べる。  
「向こうへ行けたとして、あなたの力が使えるかどうかかもしれない……」

「うん……」

「カグヤの魂を封印できたとしても……ここへ戻って来られるとも限らないのよ」

「うん……」

「もうまくいっても、黄泉へ渡り切れるかも……わからない……」

「うん、わかってる……」

全ての言葉にうなずいて、唇を噛みしめた。

もう、母には逢えないかもしれない。カグヤを連れたまま、向こうへ渡れないかもしれない。

向こうへ渡れたとして……カグヤが転生するのを阻止できるかどうかともわからない。

向こうで、父と母、それに、イタチやネジを見つけられるかもわからない。

が、まるで今、カグヤの魂に引き寄せられるように、  
「新たな使命」が頭をもたげている。

悪あがきでも、偽善でも、そして……ただのワガママでも……  
まっすぐ……進みたいと心が動いている。

「ナナ……」

母はため息をついた。

やっと会えた母を、失望させてしまった。

罪悪感がチクリと胸を刺した。

が、母は言った。

「そういう頑張りすぎちゃうところ、お父さんにそっくり」

「え……？」

その顔は笑っていた。

「頑固なところは、私にそっくり」

目の端に光るものを浮かべて、母は笑った。

「さっすが、私たちの娘ね！」

「お母さん……」

母は決心したようだった。

その強さが、ナナにとつて誇らしく嬉しかった。

「まっすぐ、あそこに飛び込みなさい。川に入ったら時空は歪むはずだから、私が……私がここでそれを抑えるわね」

母は別れを覚悟していた。

ナナも改めて、それを思った。

「お母さん、ここから見ていてくれるよね？」

少し心細くなつて聞く。

もちろん、「あたりまえよ」という言葉が返つて来た。

「お母さん、もし私がここに戻つてこれなかったら、先にお父さんに逢いに行つてね。そして伝えて……。私も必ず逢いに行くからって」  
「ええ……」

「それから……イタチにも……」

「わかつてるわ」

最後に、母はしっかりと抱きしめてくれた。

そのぬくもりを、ゆつくりと感じている時間さえ与えられなかった。川面に映し出された光景は、まさに激闘の頂にある。

「行かなくちゃ」

自分を鼓舞するようにつぶやいた。

「ナナ、あなたに逢えてよかった」

「私も、お母さん」

きつとまた逢える……今度は川の向こうで……。もつと、幸せな場所……。

そう思つて、ナナはそれ以上を言わなかった。

母も、もう引き留めようとはしなかった。そういう顔もしていなかった。

大きく深呼吸する。

不思議と、あそこへ行ける自信があった。

あの時空を思い浮かべるとか、強く念じるとか、まして術を発動させるとか、そんな難しいことは必要ない。

ただ、想像ばいいのだ。サスケの魂を……。

「お母さん」

川に足が触れて、最後にもう一度振り返る。

母は強い眼差しを向けてくれていた。

「本当はね……今、一番思ってることは……」

整理のつかないまま、母にただ思うことを告げた。

「私も第七班のメンバーなのに、私だけが一緒に戦えないのが嫌なの」

母は笑ってくれた。

そして、

「そういう意地っ張りなところも私にそっくりよ」と言った。

心に絆を抱いて、川に足を踏み入れた。

目の前に浮かぶみんなの姿が歪む。

が、すぐに修正された。

母の力だ。

知っているから、もう振り返りはしなかった。

意識をあそこへ……。

仲間のもとへ。

サスケの隣へ……。

川の水は冷たくなかった。

心の奥も、冷たくはなかった。

## 溶けた祈り

カカシの雷切が、カグヤの右腕を斬った。

サスケとナルトが、カグヤの攻撃をかわして封印の術にかかる。逃げようとするカグヤを、サクラの拳が抑え込んだ。

サスケ、ナルト、サクラ……三人の力が合わさって、封印の術『六道地爆天星』が発動した。

懸命に……懸命に抵抗するカグヤ。

が、その額の眼は、月が雲に隠れるように閉じられていく。

「おのれ……！」

それでもカグヤは言った。

「わらわは何度でも蘇る……！」

憎しみを込めて。

「何度でも……この世に転生してみせる……！」

呪いのような言葉を。

「そしてまた必ず……チャクラを取り戻す……!!」

だがそのどす黒い声とはかけ離れた一粒の清い光が、彼女の背に瞬いた。

「うわっ……まぶしっ……！」

ナルトはカグヤに触れた手が離れそうになるのを堪えて、それを見た。サクラは思わず目を閉じた。サスケは硬直した。

「私も……一緒に戦う」

光はユラユラと輪郭をつくりながら言葉を発した。

「私も、第七班だもん」

三人が良く知る声。忘れるはずのない声だった。

「ナナ……」

サスケがかすれた声で呟いた。

その瞬間、光は確かに“ナナ”を模る。

「ナナ?!」

「ナナなの?!」

ナナは笑んでいた。

そして……その両手でカグヤを抱きしめた。

「お、お前は……?!」

カグヤが驚いて振り返ろうとした時には、その身体はナナの光に包まれていた。

「ナナ、お前……!」

ナナはサスケを見た。

そして何か言おうとした。が、すぐに口を閉ざした。

代わりに、カグヤに対してこう言った。

「アナタが私で……私がアナタだったなら……」

ナナの光は、彼らをも包み込む。

「一緒にいこう」

「な、なにをつ……?!」

カグヤさえもたじろぐこの時に、ナナは強い声で言い放つ。

「カグヤの魂は、私が連れて逝く」

ナルトもサクラも、息を呑んだ。

サスケはただ、瞳を震わせてナナを見つめていた。

「本当の最後に、みんなと一緒に戦えてよかった」

ナナは笑った。

そのあまりの懐かしさに、三人は完全に言葉を無くす。

「ナナ!」

と、ただ名を呼ぶことしかかなわない。

しかしその叫びさえも、光は和やかに飲み込んだ。

「もう……行くね」

ナナが別れを告げたとたん、カグヤは意識を失った。

「ナナ! あ、あのさ……!」

「ナナ……!」

伝えるべき言葉を見失うナルトとサクラ。

声もなく、手を伸ばすこともできずに歯を食いしばるサスケ。

「ナルト、サクラちゃん、それからカカシ先生……」

ナナは光に溶けながら、仲間たちの名を呼んだ。

「サスケ……」

最後に、サスケの名を。

そして……やはり何かを言いかけて止め、笑った。

「さようなら」

それが、最後の言葉だった。

引き留める間も、返事さえする間もなく、ナナは消えた。

「ナナ……」

疲れ切ったような、悲しみに染まったような、それでいてほんの少し安心したようなサスケの眩きが、そこに残された。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

(ナナ……お前は……)

ナナとの再会……清涼な光の中で、それが果たされた。

だが、もう一度、その肌に触れることは叶わなかった。言葉さえ、交わすこともできなかった。

ただ、すり切れたサスケの心には……少しの安堵と、哀れみ、そして恋慕が滲んでいた。

心も、身体も、全てを削るようにして逝ったのに、ナナはまたしても戦った。希望、未来、全部を捨てて逝ったはずなのに……。

ナナは捨てたはずのそれらを与えてくれた。  
名を呼んでくれた。美しく笑んでくれた。

そして、何か言いかけていた。

何を言いたかったのか、サスケにはわかっていた。

『いめん』



と……ナナはその言葉を飲み込んだ。

自分を殺させて「ごめん」。

また傷つけて「ごめん」。

全てを背負わせて、「ごめん」……と。

そんなことを言つて欲しくないから、それを知っていてナナは口をつぐんだのだ。

そして、同じ言葉をサスケもナナに言いたかった。

護れなくて、救えなくて、本当に……

それをナナが、聞きたくないことも知っていた。

互いに、何者よりもわかり合えているからこそ、言葉は交わせなかった。

擦り切れた心が、今さらまだ痛んだ。刃で切り付けられたように、鋭く痛んだ。

それでも、ほんの少しだけ安堵したのは、ナナの瞳にあつた揺らめきだ。

世界を救う。

みんなを護る。

未来を守る。

カグヤは自分自身だから、自分が連れて逝く……。

そんなナナらしい決意が、光の中いっぱい溶けていた。

だが、瞳に揺らめいていたのはもつと単純な感情だった。

『自分も、第七班だから……』

ナナ自身がそう言った通り、ナナは自分だけ最後の瞬間に居ないとが嫌だったのだ。

だから、死して魂だけになってまでも、戦うことを選んだ。安息の地を離れてまで、またこの浮世に舞い戻った。

そんなナナのむちやくちやな主張が、サスケは嬉しかった。

使命でも、体裁だけでもないナナの意志が、サスケの眼にはつきりと映った。

それが、本当に嬉しかった。

(アイツはあれで、我がままで頑固なところがあつたからな……)

そんなナナの一面を、唯一、無自覚に見せられていたサスケは……少し口を尖らせたナナの横顔を思いだす。

心の痛みが増した。

だが、鋭い痛みが鈍く変わった。

彼にはもちろん、最後にナナが言いかけて止めた言葉もわかっていった。

『どうか……幸せな未来を……』

だが、ナナは結局、何も言わなかった。祈りを光に溶かし込むだけで、言葉にはしなかった。

サスケもまた、そんな言葉なんて聞きたくはなかった。

ナナが願ってくれているのは良くわかつている。ナナの愛は十分、心を満たしている。

けど……。

(お前の居ない未来なんて……)

そう思うから、やはり、言っただけはなかった。

## 革命

カグヤ、そして黒ゼツを封印し、解放された尾獣たちと共に元の場所へと帰り着いた。

そこで待っていた六道仙人や過去の影たち……そして、穢土転生で蘇っていた歴代の火影。

彼らと勝利を分かち合った。

だが、それで全ての戦いが終わったわけではなかった。

全ての尾獣チャクラを宿したナルト、そして輪廻眼を持つサスケ。二人が互いに印を結べば、無限月読の術は解けると、六道仙人が言った。

皆が目覚ませば、全てが終わるはずだった。

が、サスケは主張した。

無限月読の中、五影を処刑するのだ……と。

「革命だ」

そう、サスケは言った。

今の忍世界を「破壊」して、「創り直す」のだと。

そして、誰が阻止する間もなく尾獣たち全てを輪廻眼の力で拘束した。

彼は……その尾獣たちの力を全て持つ者、つまりナルトをも「殺す

”つもりだった。

サスケはナルトとの戦いの場に、「あの場所」を選んだ。

そこへ立ち去ろうとするサスケを、むろん、カカシとサクラは止めようとした。

が、サクラの涙も、カカシの言葉も届かない。

「私はっ……ナナの代わりにとか、ナナみたいにか……そんなこと絶対に無理なのはわかってる。……けど、側に居ることはできるから……、だからっ……！」

サスケはそう泣き叫ぶサクラを幻術で眠らせ、

「お前に殺されかけたこともあるサクラが……今でもお前のことを想

い、涙を流している。それは、お前を心から愛して苦しんでいるからだ！ ナナを愛したお前が何故わからない?!」

諭す力カシにはこう返した。

「その縛りこそが……オレの失敗だった……」

肩越しにそうつぶやいて、サスケは振り向くこともなく立ち去った。

「サスケ……」

ナルトは拳を握りしめた。

サスケにまたも拒絶されたサクラムも、そして否定された力カシも……喪失感に沈んでいる。

ナルトもまた、それを強く感じていた。

だが……。

サスケのそれは比喩物にならないことはわかっていた。

ナナを失ったサスケの喪失……あの目に見えるような心の穴。

サスケの芯にぽっかりと空いたその穴には、確かにサスケの想いがあつた。愛情があつた。

ナナへの、きつと理由すらないような愛が……。

いつからだろう。

サスケの凍てついた背を追いながら、ナルトは思った。

その“愛”の存在を知ったのはいつからだったか……。

いや、今さらながら、知らずとわかっていたような気がする。

気がつけば、サスケがナナを想っていることをわかっていた。そしてそれが、とても自然なことのように思っていた。

他人を寄せ付けないサスケの隣に、ナナだけが普通に立っていた。他者に興味がなさそうなサスケの視線が、いつの間にかナナに向いていた。空気のように周りに溶け込んでいたナナの本質を、サスケだけは見抜いていた。

それは本当に……サスケに恋するサクラムたちが嫉妬する気にもならないほど、あまりに自然で、必然の絆だったのだ。

いや……。

ナルトは“あの時”と同じように、駆けながら思い出した。二人の

想いはつきりと意識した日のことを。

奇しくも、"あの時"もまた、ゴールは同じ場所だった。

今と同じように、その場所…… "終末の谷"へ向かいながら、あの日はそれを強く意識していたのだ。

それは……サスケが木ノ葉を抜けたことを知った朝。

その事実をシカマルから聞かされた時、まさに晴天の霹靂だった。今思えば、サクラとナナは以前から予感していたのかもしれない。激しく動揺したのは、七班の中ではナルトだけだった。

だが、その激しい動揺は、ただサスケの行為に対してのみ起こったことではなかった。

サクラが泣いていた。サスケを引き留められなかったと……泣いていた。

好いていたサクラの涙。

本当の涙、本気の涙……それにはあまり、動揺しなかった。彼女の心はすでに、わかりきっていたから。

それと対照的に、「サスケを引き止めなかった」と告白したナナの……その静かなたずまいに激しく心を揺さぶられていた。

それは、初めて目にした姿で、初めて耳にした言葉だったから。

初めて、ナナの痛みに気づいた。

初めて、ナナの想いを知った。

ナルトの心がそれをとらえた時、二人の絆の形が見えたのだ。

そして時を経て自身も成長するにつれ、皮肉にも互いの想いの深さを理解していった。

「サスケ……」

彼の背中が見えた。

終末の谷……うちはマダラの像の上で、その背は止まる。

ナルトは、千手柱間の像で彼に向き合った。

あの時と同じ場所で、同じように戦う。

が、ナルトの背は、あの時よりたくさんものを背負っていた。

ただ親友を引き留めたかっただけのあの頃とは違う。

今は、世界の未来も、サスケの孤独も、サクラの想いも、そして……

ナナの死も。重く、熱く、冷たいものが背に押し掛かる。

だからここで、サスケに強い意志を告げられても、ナルトの心はブレなかった。

サスケは語った。彼の目指す「火影」が何なのかを。

それを理解することはできなかった。

いや、彼がその考えに至った理由はわかった。

だが、それは明らかにナルトの目指すものとはかけ離れていたのだ。

それでも説得はできなかった。

何故なら、サスケはこう言った。

「オレにはもう、父も母も兄も、一族も誰一人としていない。……そして……」

その冷たい拳を握りしめて、名を告げなかった誰かを想いながら……。

「オレは一人だ。だからもう、全ての憎しみをオレ一人で背負うことができる」

本当に、たった一人になったのだと。

そして、たった一人で忍の世の全ての「憎しみ」を背負うことで、この世の平和を維持するのだと。

サスケは見るからに影を負っていた。

孤独という影。真っ黒い、吸い込まれそうなほどうら寂しい影。

そんなものを背負う者に、言葉が届くはずがない。

が……それでも。

「一人だけじゃできねーこともある！ カグヤの時もそうだっただろ！」

つい先ほどの結末は、確かに協力し合ったからこそ成し得たのだと伝えたかった。

それはナルトにとってのゆるぎない意志だった。

だが、サスケはまたも鋭い刃のような台詞を振り下ろす。

「オレは全ての過去を切り捨てる」

過去……。過去の繋がり。先ほどまでの共闘。絆。親友。兄弟。

そして……。

「イタチのことを全部なかったことになんてできねーだろうが！」

躊躇していたはずの言葉は自然と出た。

「イタチと兄弟っていう絆で繋がって、二人で色々あったから、今のお前になつてんだ！」

「イタチは……もうオレにとつての過去の存在だ。過去の過ち、迷いはここで断ち切る……」

イタチを「過去」と言いきったサスケにも、まだ言うべきことがあつた。

「それでも……！ お前はナナのことはぜつてー過去になんてできねーはずだ!!」

一瞬、風が二人の間を切り裂くように流れた。

サスケはかすかに目を伏せた。彼の着物には、赤黒いナナの痕がある……。

「お前はずつと、これからもナナを……！」

「ナナは死んだ」

それを拭い去るように、サスケは言い放つた。

「オレが殺した。ナナの生を終わらせた……」

一瞬、息が止まった。

サスケのその残酷な「宣告」は、まっさかさまに滝つぼに落下して行くようだった。

「サスケ……」

「アイツもオレにとつてはすでに過去だ」

「う、嘘だ！」

まだ、鮮明に瞼に残るあの場面。

サスケが静かに、息絶えたナナを抱きしめる姿。

あれすらも……あの光に溶けた想いさえも、サスケは切り捨てるといふのか。

「ちがうっ……！」

違う、ちがう、チガウ……！

腹の底から湧き上がる想い。

違う。

サスケからナナが消えることなどあり得ない。

それは確信だった。

まっすぐにサスケを見つめる。

彼の胸にぼっかりと空いた穴。そこからナナが消えたとしても、ナナへの愛はサスケの細胞のひとつひとつに染みついている。

「切らせねえ……」

低く、決意を吐き出した。

それを切ろうとするサスケを止める。そんな無意味なことをして、また自信を傷つけようとしているサスケを止めるのだ。

それは、自分しかない。

イタチにサスケを任された、自分しか……。



## 朝焼け

人間たちが夢に落ちたこの世界が、壊れるほどに激しく揺れ動いた。

サスケの須佐能乎、そしてナルトとクラマ。大地も大気も激震するような戦いが続いた。

ナルトは……クラマと共に戦いながら、その敵であり、親友でもあるサスケのことを想った。

彼の眼に、迷いはなかった。

特別で強力な力を宿したその眼には、強い意思が光っていた。ナルト自身が、決して認められない意志。サスケの望む未来。そこに至るまでの彼の不幸と、深すぎた愛情を想った。

(サスケ……わかってるってばよ……)

一瞬でも気を抜けば、死がほほ笑んだ。

そういう状況で、ナルトは案外冷静だった。

サスケのことが良くわかった。認めることはできないけれど、サスケの心がはつきりと見留められた。

サスケは……本当に、忍の世界を変えようとしている。

五影を殺して、たった一人で憎しみを背負って……平和のための唯一の「敵」という存在になることを望んでいる。

そういう意志を得たのは、サスケが弱いからでもなく、残忍なわけでもなく、まして狂ったわけではなかった。

今まで彼の身に降りかかった数々の出来事が……ナナの死をも含めて……その意志を導き出したのだ。

そして、本気で自分を殺そうとしていることも強く感じていた。

「親友」となった自分を殺すことで、本当に、最後の繋がりを断ち切るのだ……と。

それに……。

サスケは「負けてもいい」とも思っている。

この本気の戦いで負けても……自身が悔いなど残さないことを





が……まっすぐそこを突き刺すように、ナルトは言った。

「お前が……オレの友達だからだ……」

何度も差し出された言葉だ。

お節介にも、彼はソレを何度も何度も差し出して来た。

「お前はいつもそう言うが……、お前にとつて……それはいったい何なんだ?! 何の意味がある?!」

もう声だつてまともに出はしなかった。

が、本当の最後にソレの正体を聞き出したかった。

壊そうと思つても壊れなかった、断ち切ろうとしても切れることはなかった、丈夫で、強くて、しぶといソレの正体を。彼がソレを差し出す訳を……。

今さら……今だからこそ……もう一度……。

『何なんだ』つて言われても……、正直オレにもよくわかんねーよ……」

白々しい月を見上げながら、ナルトはつぶやいた。

「だた……、色々背負つて苦しそうなお前を見てると……、痛てーんだ、オレが」

同じ痛み……。

その時、ようやく知った。

ナルトと同じ痛みを背負っていたのだと。その痛みの意味も、二人……同じだったのだと。

だから『友達』だった。だからこそ、唯一の『親友』だった……。  
(なんだ……、そうだったのか……)

不細工に腫れあがった瞼から、光る物が流れ出たのを見た。

全身から、力も感情も、何もかもが抜け落ちた。

同じように寝転がり、白い月を眺めて……その周りで控え目に瞬く星たちを見た。

彼と同じ光が、両の目から溢れ出るのを、止められはしなかった。



二人が次に目を覚ました時、もう月は姿を消していた。朝の日が、眩しいくらいに照り付けている。

二人の命は消えていなかった。

「まだ……生きてたみてえだな……」

「……しぶとくな……」

二人が自然に言葉を交わし、互いに小さく笑った時、サクラとカカシが現れた。

サクラは血だまりに横たわる二人を見て、何も言わずに治療を開始した。

そのサクラに、サスケは謝罪の言葉を口にした。

二人の腕が失われたのを見て、そしてサスケの言葉を聞いて、サクラは泣いた。

が、彼女がサスケを許さないはずはなく……ナルトとサクラとサスケ、また笑い合うことができた。

「ぎこちなくも、確かに……」

それを見たカカシは、かつての第七班を思い出していた。

心に闇を抱えながらも、まだ、「繋がっていた」サスケ。夢を掲げ、まっすぐ、自分の忍道を進もうとしていたナルト。サスケに恋心を抱きながら、強くなろうと努力していたサクラ。

彼らを、一歩引いた位置でそつと見守っていたナナだけが、今ここに居なかった。

三人のかつての姿が蘇ったことへの喜びと、そこに永遠にナナが加わることが無い喪失感に、カカシは弱く笑って息をついた。

「ナナ……」

朝焼けが眩しかった。

惜しげもなく注がれる明るい光は、あの夢でそつと強いナナの光とは似ていなかった。

だが、そこに確かにナナがいるように思えた。

ナナが光となって、ここに……彼らに……この世界を包んでいるよ

うな、そんな気がしていた。

## 償い

傷も体力もほとんど回復しないまま、彼らは再び戦場だった場所へ戻った。

忍の皆が眠る場所。敵は去ったのに、誰一人として目覚めることは無い、静寂の場所。

丸一日かけて、傷をおしてまでナルトとサスケがそこに戻ったのは、ある目的のためだった。

それは……この状況を作り出したマダラや、それを目的として復活したカグヤを倒してもなお、止まったままの時計の針を進めるため。皆を、眠りから覚ますため。幸福な夢を打ち砕くため。理想の世界を破壊するため。

現実を取り戻すため……だった。

すっかり変わり果てた神樹の枝、幹、根が、地中から突き出て空を覆っていた。

“あの時”とは違い、途中で折れた神樹は眠ったように動かない。そして、そこにぶら下がる無数の“蓑”。その“蓑”こそが、人間たちの寢床になっていた。

彼らは、それらが見回せる荒地に立った。

共に片腕を失ったサスケとナルトが、互いに残る手で印を結んだ。

サスケの輪廻眼。そして、ナルトの尾獣チャクラ。異にして同種の力は、無限月読の術を破った。

乾いた音を立てて、“蓑”は枯れ果てる。

中から生きたままの忍たちが現れて、ついにその目を覚ました。

人間の呼吸が、風に乗る。樹が、朽ちゆく音を立てる。

死の世界から生の世界へ。時が、再び動き出した。

そうして、目覚めた者たちがまだはつきりと状況を理解しないうち、サスケは口を開いた。

「ナルト。もう一度、力を貸してくれ」

やけに低く控えめなサスケの発言に、ナルトはゆっくりと彼を向

く。

カカシとサクラは不安げに顔を見合わせた。

「サスケ、何をやる気だ？」

尋ねるナルトの目に「確信」が浮かんでいることを、サスケは知っていた。

だから彼は、淡白に言った。

「輪廻転生の術を……お前は知っていると言っていたな」

「サスケ……まさか……」

ここで初めてサスケの真意を知って、口を挟んだのはカカシだった。

「印を教えろ、ナルト」

「サスケ……」

「そしてもう一度、『手』を貸して欲しい」

「サスケ！」

カカシが言った。

その術を、カカシも良く知っていたからだ。

「その術で『何』をしようとしているか、お前の気持ちが変わらないわけじゃない！ だが、術と引き換えにお前は死ぬんだぞ?!」

輪廻転生の術は、術者の命を引き換えとする禁術だ。

その術によつてまさに生き返ることができたカカシ自身、そのことを聞かされて思うところがあった。

輪廻眼を持つ『本物のペイン』……いや、綱手の説明では『ナガト』

という男が木ノ葉の皆を生き返らせたらしい。

そして、死んだ。

そこに、ナルトと……ナナも居合わせたことも知っている。

「サスケ君!!」

サクラも叫んだ。

「そ、そんな術……」

「使っちゃ駄目よ」と言いかけて、サクラは口をつぐむ。

「何のために」それを行おうとしているのか、彼女もまた悟ったのだ。



「そんなことをしても……」

わずかの沈黙の後、ナルトが口を開いた。

「ナナは喜ばねーぞ……」

すでに、諦めたような声色だった。

「親友」である彼が、サスケの意志の強さを最も良く理解していた。

「ああ、わかっている」

サスケはかすかに吹いた乾いた風に目を細めながら、静かに言った。

「だが……、アイツは死ぬべきじゃなかった……」

重苦しい言葉だった。サスケの後悔と慈愛が、周囲の風を変えていた。

「アイツは生きるべきだ……。お前たちが居れば……。アイツはまた笑える……」

ゆるゆると、ナルトは握りしめていた拳をといた。

代わりに、サクラが言う。

「ダメよ、サスケ君！　そ、そりゃあ私だってナナは絶対に死ぬべきじゃなかったと思うし、戻って来て欲しいけど……。でも代わりにサスケ君が居なくなるなんて、そんなの……。ナナが悲しむだけよ！」

サスケは、静かに視線を虚空に向けながら答えた。

「悲しむだろうが……。それでもアイツは強い……」

「サスケ君……！」

「きつと『オレの分まで』……。生きてくれるはずだ」

「そ、そんな……」

「だが、オレにはできない」

「……………」

「オレには、『アイツの分まで生きる』ことなんて……。できない……」  
灯っては風に消されるろうそくのように、サクラは懸命に想いを伝えた。何度も、それを繰り返した。

だんだんと、目覚めた者たちが彼らの元へと集まり始める。皆、なんとなく……彼らがこの戦いを終わらせたのだと気づいていた。

「サスケ君……！」

「サスケ、本当に……それが〃ナナにとって〃一番最良の選択だと……お前は思うのか？」

「ああ……」

「それこそが、ナナにとっては残酷だとは思わないのか……？」

サクラの絶望を受け止めるように、カカシが問う。

サスケはゆっくりとうなずいた。

迷いはなかった。ナナを語るサスケに、間違いがあるとは思えなかった。

だから、サクラはいよいよ口をつぐんだ。

もう、その頃にはすでに、周囲の者たちにもこのやり取りの状況がつかめていた。

特にナナのことを良く知る者たちは、サスケの言葉と想いを知って、一樣にうなだれた。

彼らには、何ひとつできることはなかった。サスケに対する言葉も、何も持ち合わせてはいなかったのだ。

ざわめきだしたはずの〃元戦場〃に、奇妙な沈黙が押し寄せた。彼らを中心として、まるで波紋が広がるかのごとく。

目を覚まし、混乱し、再会を喜んでいた者たちが、彼らの発する空気に呑まれたのだ。

「ナルト……たのむ」

静寂の中、再びサスケは言った。

ナルトは静かに左手をサスケの前に突き出した。

「ナルト！」

最後の抵抗とばかりに、サクラが叫ぶ。

だが、静かに制したのはナルトだった。

「サクラちゃん……こいつってば頑固だからさ。もう何言っても無駄だってばよ」

「ナルト……」

「オレらが何を言おうと、サスケにとっては綺麗ごとでしかねえんだ……だから……」

ナルトは伏せていた目を、サスケに向けた。

「サスケはオレが今断ったとしても、無理やり幻術かけて、術の印を聞きだすつもりだってばよ……」

その台詞が終わるや否や、サスケはナルトの左手に己の右手を合わせた。

ゆつくりと、左眼にチャクラを溜めていく。

「勝手ですまない……。が、これがオレにとっての償いだ……」

そうつぶやいたきり、もう、彼からの言葉はなかった。

彼への言葉もまた、無かった。

サスケとナナを知る者も、知らない者も……この状況を理解している者も、いないものも……皆、息をひそめて二人を見守った。

泣いている者がいた。

サクラやいの……ナナとの再会を期待しながら、何よりサスケの命を惜しむ者。

複雑な表情を浮かべる者。

それは、我愛羅やシカマル……ナナを想いながらも、彼女の「サスケのいない未来」を案じる者。

苦しげに顔を歪める者もいる。

二人の間で、師だったカカシ。

そして未だ戸惑うのは、かつてのナナとサスケと縁を持った者たち。

誰もが、何ひとつの行動も起こせぬままに、この「儀式」を見守っていた。

ひとつ、ふたつ……ナルトの導きで印が結ばれた。

そして異様な静けさの中、不意に風が吹いた。

この荒地に不似合の、春の風のようなだった。

サスケとナルトを囲む者たちは皆、ナナがその空気をまとっていたことを知っていた。

どんなに傷を負っても、泣き崩れても……柔く控えめな、春の風だった。

だが、その時だった。

まだ印を結び終わっていないにもかかわらず、風は確かに何かを運んで来た。

キラキラと瞬く光の粒だ。

それが、丁度サスケとナルトの間に、空から降るようにして現れた。

「駄目よ……この術は……」

そこから発生られた声を、そこに居た者たちは確かに聞いた。

「あの子がそれを望んでいないから」

そしてサスケとナルトは、結ぶ手に誰かが触れるのを確かに感じた。

印が途絶えた。

その瞬間だった。

彼らの目に、“人”の姿が映った。

「な……成葉さん……?」

その“人”を見て、初めに口を開いたのはカカシだった。

ここに居る者のうち、彼だけがその姿を知っていた。

君の居ない世界で君の居ない未来を

「カカシ君、ずいぶん大きくなったわね」

成葉と呼ばれたその「人」は笑った。

ゆらゆらと金色の光の粒をまとっていたが、確かに人間の形をしていた。

そしてその顔は……ナナによく似ていた。

だから、名を知らない者もすぐに悟った。成葉という彼女が、誰であるのかを。

「ね、ねーちゃん……ま、まさかナナの……」

息を切らすように言うナルトの左手を、サスケの右手からゆつくりと放して、成葉は笑った。

「あなたがナルト君ね。ほんと、ミナトとクシナにそっくり」

ナナに良く似た朗らかな笑みに、ナルトはそれ以上の言葉を失う。

そして成葉は、サスケに向き合った。

「サスケ君……」

だらりと垂れ下がった右手は、ぎゅうと強く握られていた。

「あの子は戻っては来ないわ……」

それを視界の端で捉えたまま、成葉は告げた。

「あの子……カグヤの転生を止めようとしているの」

サスケは目を伏せたまま、その言葉に何の反応も示さなかった。

「カグヤの転生を……」  
「止める」……？」

「止める」ってどういうことだっばよっ？」

代わりにその詳細をたずねたのは、カカシとナルトだった。

成葉はサスケを見つめたまま静かに答えた。

「死者の魂はね、『あの世』と呼ばれている『黄泉の世界』へ行くんだけど、そうなれば『黄泉がえり』する可能性があるの。例えば、今あなたたちがしようとした転生術とか、魂自身の執念みたいなものでね……」

ナルトとサクラは顔を見合わせた。彼らにとっては、その言葉の意

味が抽象的すぎたのだ。

だから、そのことがナナを呼び戻せない理由と結び付くとはまだ考えなかった。

「この世に未練を残すカグヤは、これまで何度も現世の人間に転生してきた。つまり、『黄泉がえり』してきたということよ。私の娘にもね……」

成葉はなるべく簡潔な言葉で説いた。

「このままカグヤの魂が黄泉へ逝つても、また転生を繰り返す……。その連鎖を、あの子は止めようとしているの」  
ここでようやく、ナナの目的が理解できた。  
が。

「ど、どうやって止めるんですか？」

それでもまだ疑問が消えたわけではない。

カカシは単純に問う。

ふうとため息をついて、成葉は答えた。

「カグヤの闇を晴らすのよ……わかりやすく言えば、『説得』ね」

「説得？」

「そう、カグヤを説得するの」

ナルトは眉をひそめた。

カグヤから噴き出すように感じた「闇」は、身体の細胞がまだ鮮明に覚えている。

嫉妬、怨嗟、欲望、そして絶望……まるでマグマのように、無限で強大だった。およそ「人」の手には負えないような領域の、実体の無いモノだった。

ナナはあれを消しさろうというのか？

「説得」で？

「あの子……自分がカグヤの生まれ変わりなら、カグヤは自分自身だって思っているみたい」

成葉は呆れたように、だがどこか誇らしげに言った。

「だから、カグヤの闇を払って転生を止めるのは、自分しかないって……そう言ってたわ」

「ハハ……」

ナルトの口から、干からびた笑いがこぼれた。

「たしかに、そんなこと言ってたってばよ……」

死してなお、ナナがまだ戦いを続けていることを知って、それを「ナナらしい」と心から思ったのだ。

だが成葉は、その場を覆い尽くす悲愴感を一掃するように、まるで少女のように笑った。

「もう十分がんばった……って言ったんだけど、聞かなかったのよ。まじめで頑固なんだから。そういうところはあの子の父親にそっくり！」

つられて曖昧な笑いを浮かべる者、懐かしんで涙ぐむ者たちがいた。

彼女に言われなくとも、誰よりもナナのことを知ってしまったているサスケは、全く表情を変えなかった。

「ナナのかーちゃん……それを……伝えに来てくれたのか？」  
ナルトがため息をつくように言った。

成葉の金色の輪郭が揺れ、彼女はナルトに向き合った。

「そうよ。サスケ君の命を無駄にするわけにはいかないもの」  
軽い口調だった。

だが、そこには確かに想いが込められていた。

「ナナのためにも」

そんな想いが。

「それとね」

成葉は光に包まれながら言った。

「こんなにもあの子のことを想ってくれているみんなに、母親としてどうしてもお礼を言いたかったの」

周囲を見回して、成葉は感謝の言葉を述べた。

そして。

「私は……事情があつてあの子の誕生も、成長も、見守ってあげることができなかつた……。でも、今ここへ来てよくわかるわ」

少しの涙をにじませた。

「あの子は、こんなにもたくさんの人たちと繋がって……想い、想い合って生きてんだって……」

その粒が金の光と混ざると、成葉はカカシを向いて言う。

「カカシ君、あの子の先生になってくれたんだってね」

「は、はい……」

「ミナトの弟子のあなたが、私の娘の先生になってくれて、本当に嬉しかったわ」

「でも、オレは……ナナに……何もしてやれませんでした……」

成葉はカカシの贖罪を遮った。

「あの子を守ってくれてありがとう」

「成葉さん……」

「私の分まで、護ってくれてありがとう、カカシ君」

カカシは言葉を失くした。

湧き上がる後悔と成葉の言葉の温かさが、彼の胸に悶<sup>つか</sup>えていた。

「ナルト君」

そして成葉は、ナルトの肩に手を置いた。

その実体の感触はなくとも、ナルトは確かなぬくもりを感じて唇を噛んだ。

「私ね、ミナトにはとっても良くしてもらったの。クシナにもよ」

「と、父ちゃんと母ちゃんに？」

ナルトは思わず顔を上げた。

「和泉の里から逃げるように木ノ葉に来た私に……ミナトはまるで兄のように接してくれた。クシナもとっても明るい人で、私のことを色々と気にかけて面倒をみてくれたわ。ちよつと口うるさかったけどね」

戦いのさ中で巡り合うことができた父と母。

二人のことを実際に知る人から改めて聞かされ、ナルトは照れくさく笑った。

「私が最後に二人に会った時……、あなたが産まれることをとっても喜んで、楽しみにしていたわ。そしてとても幸福そうだった」

「へへへ……」



成葉はナルトと一緒に笑い、そして改まって言った。

「ナルト君。九尾のことであの子と繋がっていたのに……それ以上の本当の友達として、絆を結んでくれてありがとう」

ナルトはかすかに喉を震わせた。

「オレのほうこそ、ナナと出逢えて良かった……ナナで良かった……ナナにはいっぱい、感謝してるんだってばよ……」

その目に、光るものが浮かぶ。

「オ、オレってば……ナナに伝えたいことがもつと……すんげえあるのに……ぜんぜん……出てこねえってばよ……!」

「いいのよ、ナルト君」

成葉は震える肩をポンポンと叩いた。

「あの子は全部わかってるから。ちゃんと、伝わってるから」

母親というにはあまりに若い姿なのに、その言葉には母性が滲んでいた。

「あのさ、ナナの母ちゃん……! ナナは……ナナは……」

ナルトは頬を伝う涙をそのままに、成葉を食い入るように見つめた。

「あのさ! ナナは……」

「あの子は後悔なんてしていないわ」

言いよどむナルトの先回りをして、成葉は涼しげに答える。

「『向こう』で最初に会ったとき、あの子は寂しさと、あなたたちを傷つけてしまった悲しさで泣いていたわ。でも……自分の選んだことを後悔してはいなかった。嘆いてもいなかった」

そしてゆつくりと視線を移した。

「あの子は、そういう生き方をしてきたんでしょう?」

母である自分よりも、娘のことを理解しているサスケへと。

「そ、そうだってばよ! ナナはいつも……いつも、強くて、まっすぐで……」

押し黙ったままのサスケの代わりに、ナルトが声を詰まらせながら言う。

「自分のことより周りのことばっかり考えて……す、すんげえ優しく

て強いヤツだったってばよ……！ な！ サスケ！」

同意を求められても、サスケのうつろな視線は少しも揺れ動きはしなかった。

だが、成葉はそれを見つめて言った。

「サスケ君……」

その時、成葉の細身が風に吹かれて歪んだ。

「ナナの母ちゃん?!」

「成葉さん?!」

輪郭が空気との境を徐々に曖昧にした。身体の透明度も増している。

「もう時間が無いわね。禁を犯して来てるから、もう戻らなくちゃ」

成葉は肩をすくめた。

その仕草がナナによく似ている……そう思った者たちが、その場には大勢いた。

「サスケ君……」

初めて悲しげな笑みを浮かべ、成葉は告げた。

「私の娘を、愛してくれてありがとう」

一瞬、成葉がまとう光が強さを増したように見えた。

わずかに目を細めたナルトは、サスケがゆっくりと顔を上げるのを見る。

「あの子のこと、心から愛してくれていたのね」

「ああ……」

サスケは初めて口を開いた。

「サスケ君……」

彼の素直な肯定に、成葉は小さく息をつく。

が、またまっすぐにサスケを見つめてこう言った。

「だから、サスケ君……生きて……」

サスケは虚ろな眼を成葉に向けた。

「こんな術で生き返っても、あなたが居ないんじや、あの子は泣くわ」

その身体の輪郭が、一段と風景に溶け込んでいく。

「そんなふうに『生きたい』なんて、あの子は思っていない。そうでしょう?」

二人の間に、風が流れた。

輪郭を歪めた成葉は、ずっとサスケを見つめ続けていた。

「全部、わかってる」

低い乾いた声が、吐き出された。

「輪廻転生の術でアイツの魂を呼び戻そうとしても、どうせアイツは拒否するとわかっていた……」

サスケは、成葉が告げたことを最初から「全部わかっていた」のだと言った。

この術が成功しないということも、そして……。

「オレと同じで、『片割れ』の魂でこの世界を生きることを、アイツが『恐れて』いることも……」

ナナの強さも、弱さも、全部……「わかっている」と。

輪廻転生の術は、術者の命を引き換えとする術だ。つまり、術が「成功」すればサスケは死ぬはずだった。

が、サスケは術が「失敗」とすると断定していた。術の失敗……それもまた、サスケの死を意味するのだ。

どちらにせよ……。

「サスケ、お前、まさか最初から……」

ナルトは思わず勢いよくサスケの眼を覗き込んだのだったが、視線が合わさることは無かった。

「失敗すれば、オレが死ぬだけだ」

サスケはきつぱりと、そう言った。

「サスケ君……あなたには……」

成葉も息を呑んだ時、どこかを見つめたまま、サスケはぼそりとつぶやいた。

「一緒に逝けるなら……それでいい……」

彼の声は、乾いた空気に染み渡るようだった。

彼の立ち枯れた希望を聞いた者たちは、息を呑んだ。

「でも、サスケ君……!」

だが、成葉はぼやけた輪郭をさらに歪めるのもいとわず、首を左右に振った。

「あなたには聞こえていたわよね? あの子の最期の言葉……。あなたには聞こえていたはずよ、サスケ君」

その言葉に、「ナナの最期」を知る者たちは、自然とその壮絶な場面を思い出す。

雷切の青光りと、ナナの鮮血。そして、昇天の光。

まだ鮮明に浮かぶその光景に、皆涙ぐむ。

そして本当の別れを知る者たちのまぶたには、最期の笑みが蘇る。ナルトはぎゆうと目をつむった。

確かに、カグヤを連れて逝く時に、ナナは何か言いかけた。そして止め、別れの言葉だけを言って去った。

あの時、ナナは何を……?」

「ああ……聞こえた……」

やはり、サスケはあの“声”を聞いていた……。

「だったら……」

成葉は懇願するようにサスケに言う。

「だったらお願い、あの子の最期の願いを叶えてあげて……!」

この世に舞い降りてから、成葉が語った言葉は多いとは言えない。だが目の前でそれをひとつひとつ聞いていたナルトにとって、この成葉の言葉が最も強く響いた。

「どうか、幸せになって……サスケくん……」

それを聞いた途端、ナルトの脳裏にナナの最期の笑みが広がった。まばゆい光に包まれて、どこか温かい風に吹かれながら、ナナが言

いかけてつぐんだ言葉。

あれは……ただ……サスケの幸せを願う言葉だった。  
それを、知る。

「ナナっ……」

ナルトの隣で、サクラが顔を覆った。

カカシも、苦しげに名をつぶやいた。

ナナの母親から聞かされて、ナルトもサクラもカカシも、あの時の  
ナナの声が聞こえた気がしたのだ。

それはとても自然に思えた。

自身を犠牲にしながらも、ナナが最期に愛する者の幸せを願うのは  
当然だった。サスケの未来を願うのは当然だった。

あの笑みに添うのは、それしかなかった。

「こんなこと、今のあなたには言われても辛いだけだと思っわ。でも  
……覚えておいてほしいの。あの子が……ナナがそれを願っていた  
ことを。そしていつかきつと、幸せになってほしい」

心からそう訴える成葉の声は、ナナに良く似ていた。

ほんの少しの間を置いて、サスケはため息をつくように言った。

「いつかきつと……か……」

止まっていた風が、流れ始めた。

「サスケ君……」

「……わかった……オレは生きる……」

そして遂に、サスケがそう言った。

ナルトが一步、踏み出す。

「じゃあ、転生の術は……」

サスケはさして間を置かず、言いきった。

「やめる」

とうとう、その決断を……。

その意味を、成葉もナルトも、他の者たちもちゃんと理解しないう  
ちに、サスケは続ける。

「カグヤの始末をつけようとするアイツを、オレが邪魔するわけには  
いかないから……」

まるで、独り言のように。

が、成葉は安堵の表情にはならなかった。

何故ならサスケがその口元に、虚ろな笑みを浮かべていたからだ。

「だが……」

サスケは、やつと成葉を向いた。

「アイツの『願い』を叶えるのは無理だ」

サスケは自嘲するでもなく、苛立つでもなく、そして嘆くでもなく、ただこう言った。

「アイツが居ないのに、『そんなもの』はもう存在しない」

ナナの願った、「サスケの幸せな未来」……。その存在を、サスケは否定した。

「サスケ君……」

「サスケ……」

「サスケ……」

ピリリと、空間が張り詰める。成葉を覆う光の粒も、火花のように散った。

しかし、その空気を風いだのサスケだった。

「だが、アイツが心配するような生き方はもう二度としないと誓う。幸せなど無いからといって、べつに好んで不幸になるつもりもない。ちゃんと未来を生きる。アイツを泣かせるようなことは、もうしない……」

ただ淡々と、サスケは誓いを述べた。決意と言うには、あまりに整然としすぎている。

サスケの言葉に、嘘はない。

が、感情もない。

その意味に、彼の仲間たちも、成葉も、気づいてしまった。

「サスケ君……あなたは……それほど……あの子のことを想って……」

静まり返ったその場所に、成葉の声が途切れ途切れに漂う。  
サスケの掠れた声は、それをそっと打ち消した。

「傷つけてばかりじゃ、〝それ〝も意味がない……」

ナルトが何か言おうとした。  
が、口をつぐんだ。

魂を半分削られたような親友に、かける言葉を見つけれなかった。

「だが、心配はするなと伝えて欲しい。オレは〝ちゃんと生きる〝  
……と」

サスケの視線が、何かを探すように宙を彷徨った。

「サスケ君……」

成葉の原型をきちんと留めなくなったその頬に、涙の粒が伝い落ちた。

彼女だけではなかった。

ずっと唇を噛みしめて彼らを見守っていたサクラは、とうとう嗚咽を漏らした。ナルトは歯を食いしばっていたが、流れる涙は止められなかった。カカシも首が折れるほどにうつむいた。

さらに外側の……ナナの仲間だった者たちも、肩を震わせていた。

「サスケ君……ありがとう……」

成葉は揺らめきながら言った。

「ナナを……これほど深く愛してくれて……、本当に……、本当に、ありがとう……！」

言葉の最後が淀んでいた。

「そろそろ……行かなくちゃ……」

成葉は涙を拭って顔を上げた。

その仕草さえ、もう曖昧になっている。

「ナナの母ちゃんー！」

彼女との……ナナの母親との別れを悟り、ナルトは滲む彼女の姿に向かって叫ぶように言った。

「サスケのことは心配すんなってナナに伝えてくれればよ！ オレたちがいるから、サスケは大丈夫だつて！ 伝えてくれればよ!!」  
恐らく、ナナが一番心残りであることを……それを、少しでも軽くするために、ナルトは言った。

「ええ……ええ……、伝えるわ……!」

成葉は嬉しそうにうなずいた。  
すると。

「もうひとつ、伝えてくれ」

おもむろに、サスケが口を開いた。

「いい加減、他人のことばかり考えていないで……」

先ほどまでと全く同じ、静とした表情のまま……。

「さつさと生まれ変わってオレの前に現れろ……と」

彼の願いを、口にした。

「サスケ……!」

ナルトの目には、成葉の向こうにはつきりとサスケの全身が見えていた。

左腕を失くしても、背筋を伸ばしてしっかりと立ち、そして何より……決して揺るがない想い。

彼の身体じゆうから、ナナへの想いが香っているようだった。

「ええ……そうするわ……!」

成葉は震える声で応えた。

そして改めて、皆を見回した。

「みんな、今まで本当にありがとう」

彼女の光はいつそう強くなり、動くたびに輪郭が崩れていく。

「どうかこれからも、あの子のことを想ってあげて」

それは醜くもなく、悲しげでもなかった。その光は朝日のように美しく、清々しかった。

カカシもナルトも、大きくうなずいた。

そして、成葉は最後に、サスケを向いた。

もう、彼女の顔がどこかわからなかったが、彼らにはそう見えていた。



「サスケ君……」

声……ではなかった。

もう、直接耳の奥に響くような、抽象的な音だったが、彼女の言葉ははつきりと理解できた。

「これから……あの子を愛してあげて……」

それが最後だった。

成葉の姿は完全に光の塊となり、それが流砂のように細かく光って空へと昇っていく。

まるで、あの時のナナと同じだった。

あの時と同じ美しさと、哀しさが、彼らの胸を占めていた。

彼らはただ黙って、それを見送った。

が、ナルトにはちやんと聞こえていた。

すぐ側で、同じように立ち昇る光を見つめながら、つぶやいたサスケの声。

「……それが、オレの生きる証しだ……」

彼はそう、成葉に答えていた。

## 天藍（てんらん）

まだ明るい空に、金の星が瞬いていた。

成葉の光は、それに引き寄せられるように天へと昇っていく。

我愛羅の操る砂粒よりも、もつと細かい金の粒。キラキラと輝きながら、音もなく、煙のように立ち昇る。

ナルトは、自然と頬を伝う涙を拭い、息を吐いた。

サクラのすすり泣く声が、隣から聞こえる。少し離れたところで、イノやヒナタも同じように泣いている。

他の者たち……この状況を把握していないはずの輪の外側の者たちまでもが、何故だか厳かに空を見上げていた。

可憐な光が、空に昇っていく様を。

その理由が、ナルトにはわかる気がした。

“あの時”、サスケの腕をすり抜けて天に舞い上がった光。そして、皆の肩に優しく降り注いだ光……。

あの光と、今立ち昇るこの光が同じ輝きをしていることに、皆も気づいているのだ。

（ナナ……！）

“あの時”と同じように天を見上げながら、ナナを想った。

ナナは天から降り注ぐ光になって、この地上を見守ってくれているのだろうか……。

いや、今はカグヤを『説得』して『あの世』に連れて逝くのだと、彼女の母が言っていた。

だからやっぱり、ナナは今もどこかで戦っている最中なのだろう。

サスケが言ったように、カグヤのことは適当に片をつけて、生まれ変わってくれないだろうか。

成葉はちやんと、ナナに伝えてくれるだろうか……。

グスリと鼻をすすって、もう一度涙を拭う。

少しずつ身体を這いずる疲労感に改めて気がついたとき、ナルトはサスケを見た。

同じ痛みを、いや、誰より酷い痛みを負っているはずのサスケの横顔は……とても、静かだった。

祈っているようでもない。諦めているようでもない。

悲しんでいるのでも、後悔しているのでも、絶望をしているというわけでもない。

サスケはただ顔を上げて、黒い瞳で、光の行く末を見つめていた。彼の表情から、感情を読み取れるとしたらひとつだけ……。

最後の言葉を、ちゃんとナナに伝えてくれるよう、ただ成葉に願っているだけだった。

大きいため息をついた。

と同時に、その場には終焉の風が吹いた。

戦いの幕切れに対する達成感、疲労感。亡き者たちへの哀惜。自身への悔恨。そして新たな時代への期待、希望。

それらが入り混じった風だった。

それは、傷つき、疲れ切った忍たちの、張り詰めていた気を和らげた。

ナルトは、遠くの輪の外側のほうが、徐々に形を崩していくのを感じた。

奇妙な静寂が終わり、生き残った者たちの声が放散し始める。

彼自身も息を深く吐き、周囲を見回した。

サクラは涙を拭っている。カカシもため息をついていた。シカマルたちは互いの状態を確認し合い、我愛羅はまだ物思いにふけっていた。

さらにその向こうには、歓喜と嘆きの混在した表情が見え始めた。だが、その時。

すぐ近くで、息を呑む声が聞こえた。

誰もが緊張感から解き放たれつつあった。

が……隣でサスケは。

「サスケ……？」

彼はまだ、天を仰いでいた。名残惜しむかのように、消えきらない光をまだ見つめていたのだ。

その彼の、もどかしいほどに静としていたはずの瞳が、揺れ動いた。  
「サスケ……？」

つられるようにして、ナルトは空を見上げた。

霞のように漂う、金の粒。それは風にかき消されるでもなく、ユラユラと宙でくゆる。

そして、天に向かっていたかと思っていたそれが、頭上に留まっっているのに気がついた。

「こ、これってば……」

もう誰も視線を向けなくなった最後の光が、徐々に輝きを取り戻すかのようだった。

少なくとも、ナルトにはそう見えた。

ごしごしと目をこする。

疲労した眼球のせいではなく、確かに光は粒子の数を増していた。

それは煙のように漂いながら、だんだんと“形”を形成し始める。

一体何が起きているのか。

これは錯覚なのか。

疑問で胸をざわつかせながら、ナルトはサスケの判断をうかがった。

サスケは……戸惑いを隠そうとしないまま、フラフラと右腕を伸ばした。まるでその光を、受け止めるかのように。

「サスケ……？」

ナルトは彼の横顔と、光を見比べる。

「サスケ君？」

「サスケ？」

サクラとカカシも、彼の行動に気づき首を傾げた。

そして、彼の視線の先を目にしてハッとす。

その様子に、ナルトは自分の見ているものが幻でないことによややく気がついた。

と同時に、サスケに見えているものを知った。

「サ、サスケ……！」

高鳴る鼓動をそのままに、ナルトは弾かれたようにサスケの隣に立

ち、彼と同じように左腕を伸ばした。

光はそれに呼応するように、粒を増していく。小さな金色の蝶が、天藍の空に乱舞しているようだ。

それはとても美しかったが、そんな感想を持てるほど、ナルトに余裕はなかった。

同じように動揺を……いや、*“予覚”*に揺れるサスケを感じながら、光の行く末を食い入るように見つめた。

光は*“気配”*を持っていた。

そしてゆつくりと、凝縮しながら二人の腕に降りて来る。

最初にそれが触れた時、じんわりとした温もりが伝わった。心地の良い湯に身体を浸した時のような感覚だった。

だが、肌は濡れてはいない。

「サ、サスケ……、な、なあ……！」

光の粒は、少しずつ重量を増した。

徐々にその*“重み”*を腕に感じる。

「サスケ……こ、これつてば……」

大きさはちようど二人で受け止められるほどになり、ぼんやりと輪郭が生まれ始める。

「も、もしかして……こ、これ……」

それは*“人”*の形になった。

「サスケ……！」

ナルトは喘ぐように言っていた。自分でも何を言っているのか、完全に理解しきれないまま。

周りの者たちも口々に何かを叫んだりつぶやいたりしているようだが、言葉は耳に入らなかった。

サスケはただ、黙っていた。息を震わしながら、強い視線を光に向けていた。

懐かしい風が吹いた。

その時、光が弾けた。

と同時に、腕にはつきりとした重みを感じた。

ずしん……という衝撃。

二人の腕が受け止めたのは、人の身体だった。  
人……。

白い袴。白い羽織。白い肌。  
黒い髪。

これは……。

その質量を実感するかのようには、二人はゆっくりと膝をついた。

そして、目の前に横たわる姿を凝視した。

白い着物……あれほど赤く染まっていたそれは、綺麗な純白に戻っている。左腕……自ら切り落としたそれも、ちゃんとある。

まつ毛が揺れていた。

間違いない……、間違いなくナナだった。

「な……」

何故……？

という言葉すら、出てこなかった。

激しく渦巻く疑問とともに、沸き立つ期待と、それが裏切られた時の絶望までもが、ナルトの中で無秩序に暴れ回っていたのだ。

目の前のこの「ナナ」は、本当に「ナナ」なのか……。今、現実に

「ナナ」を見ているのか？

助けを求めるように、サスケを見た。

誰より先に、この「ナナ」の気配を感じ取ったサスケを。

そして今、誰よりも狼狽しているはずのサスケを。

「サスケ……」

痛ましいほどに見開かれたサスケの瞳は、しっかりとナナを見つめていた。

彼は唇を震わしながら、右腕でナナの肩を抱き起す。

そして。

「ナナ……！」

その名を呼んだ。

風が、ナナの前髪を揺らした。

「ナナ……！」

もう一度、サスケは呼んだ。

ナルトは瞬きもせずナナの顔を見つめた。  
そして、もう一度、サスケがその名を呼んだ時……。

「ナナー！」  
ナナの瞼が、静かに持ち上がった。

いつの間にか固唾を呑んで見守っていた周囲の者たちが、いち早く  
歓声をあげた。

「ナナー！ お、お前っ……！」  
ようやくナルトも声を出す。

喉の奥が乾ききっていたので、少しむせた。

ナナはまだ、夢かうつつか……まどろんでいた。  
だが徐々に、漆黒の瞳は光を浮かべる。

「ナナー！」  
サスケは、想いを弾けさせるようにその名を叫んだ。

「……………」

自分の名前を思い出したかのように、ゆるりと、ナナは首を回す。  
その頼りない視線は、足元のナルトを通り過ぎ、千切れたサスケの  
左腕を通り過ぎ……遂に、サスケの顔を向いた。

「ナナ……………」  
先ほどとは打って変わって、恐れを滲ますサスケの声。

ナルトには、この友の心境が痛いほど良くわかった。

だから、黙って見守った。左の拳を握りしめて、ナナの唇が動くの  
を願った。

と……。

「…………サスケ…………」  
聞き慣れた声で、聞き慣れた名を呼んだ。

サスケは安心するどころか、驚いた顔でナナを見つめ返す。

「ナナ…………お、お前は…………」  
情けなく震える声。

サスケが言いたいことはわかっていた。

『お前は生き返ったのか？』

と単刀直入に聞いてしまえばそれでよかった。

だが、サスケにはそれができない。

もちろん、ナルトにも……息をひそめる仲間たちにも。ただ、ナナを見つめるしかなかった。

が、ナナの唇は確かに動いている。

サスケを見上げながら、瞬きをしている。

頬は青白いが、ほんのり血の通う色が見て取れる。袖の中の指先も、かすかに動いた。

ナナは……確かに生きて……

ナルトはそう確信したにもかかわらず、それでもまだ言葉を発せず口をつぐんだ時だった。

この状況を、本当は最初からわかっていたかのように、ナナは囁いた。

「生きて……って……」

その顔に、感情はなかった。

夢と現実の狭間に居るような、呆けた顔をしていた。

「お母さんが……」

それでもサスケだけを見つめて、ナナは自然と出て来たような言葉を囁いた。

「サスケと……生きて……って」

自分で言った言葉を、ナナ自身が噛みしめるように、ゆっくり瞬きをした。

サスケもその意味を、即座には理解できてはいなかった。

当の二人が、この現実を受け止めるのに時間を擁していた。

「サスケ……！」

先にそれを理解したナルトは、嗚咽がこみ上げるのと同時に、サスケの肩に手を置いた。

周りの者たちも、今度は正真正銘の輪をつくる。

空気が揺れ、サスケもやつと……身体を動かした。

「ナナ……！」

言葉もなく、ただ、しっかりとナナの身体を抱きしめる。

片腕でも、離れようがないほど、強く。



ナナの顔色も、変わった。

初めは少し、驚いたように瞳を開き……そして、震えるサスケの肩に気づくと……、やっと、かすかな笑みを浮かべた。

「サスケ……」

ナナはようやくやく、消滅したはずの「未来」の存在に気がついたようだった。

そしてそれを祝う声など聞こえないままに、躊躇いながらサスケの背に腕をまわした。

「サスケ……」

それ以上、言葉はなかった。

強すぎる想いに、答える言葉など要らなかった。

遠慮がちにサスケの汚れた着物を掴むナナは、喜びに満ちたというより、安心したような顔をしていた。

ふとナルトが顔を上げると、仰ぎ見た藍色の空には小さな星がひとつ……綺麗に瞬いていた。

## 最終章 風花

また、今度

真新しい木の香りが漂う廊下を、カカシはのんびりとした足取りで歩いていた。

今朝は久々に用事が入っていなかったから、かわいい教え子たちの見舞いにでも行つてやろうという気になったのだ。

新築の木ノ葉病院の一室に、ナルトとサスケが入院していた。

ナルトが側でサスケの監視をするという名目で、幽閉というような形をとられてはいたが、実際のところはただの入院生活だった。

病室に鍵は無く、見張りも置いていなければ、見舞いも自由。

外に出るなどというお達はあったが、それはナルトとサスケの両者に対してであり、まだ完全に回復しきれていないからという理由であった。

その二人の病室から、回診を終えたサクラが出て来た。

「それじゃあ、午後にまた来るから。ナルト！ おとなしくしてんのよ!!」

いつも通りの態度を示し、扉を閉める。

が、その後にサクラは物憂げにため息をついていた。

「サクラ？ どうした？」

まさか二人の回復が思わしくないのだろうか。

特に、互いにもぎ取られた腕の傷口は、火影も顔を曇らせるほどで

あったが……。

「あ、カカシ先生」

サクラは顔を上げた。

案外、ふつうの表情をしている。

「二人はどうなの？」

「順調よ。腕の怪我も他の部位には後遺症がなさそうだし」

声も明るい。

物憂い……というより、何か他に釈然としないものを抱えているような感じだった。

「そ。じゃあ何が気にかかるんだ？」

サクラは一瞬びっくりしたような顔をして、大きくため息をついた。

「カカシ先生、今日はナナに会った？」

若干、声を潜める。

なるほど……と、カカシは悟った。

「いや、ただだけど」

「さつき病室に来て、ほんの一瞬だけ二人の様子を見て……すぐに仕事に行っちゃったのよ」

サクラの台詞のどこにも、おかしな点はない。

だが、サクラは気にしているのだ。

「木ノ葉に帰ってから、ナナとは全然話す時間がとれなくて……」

カカシはうなずいた。

確かにナナは、朝から晩まで里の中を走り回り、雑務から極秘任務までをこなしている状態だ。

それにはいくつか理由があった。

まず、ナナの身体はどこにも異常が無かったし、あれだけのことが起きたにも関わらず、精神的にも安定して見えた。

戦争で疲弊した忍たちの誰よりも元気だから……と、ナナは自ら進んで精力的に働いている。

今や火影はナナに対して厚い信頼をおいているため、負傷者が多い現状では医療班のほうにかかりきりになるシズネの代わりとでもいうように、ナナを側に置いていた。

火影だけではなく、すでに他の影たちからも一目置かれる存在となったナナは、各里の間に立って「緩衝材」のような役割を担うようにもなっている……と、カカシは見ていた。

それに、何よりもナナは先の戦争の中心人物の一人であった。

「和泉」の名のこともある。

五影すら知り得ないことを説明できる人間であるからには、必然的

に重要な役割を担うのもうなずける。

だから、ろくに見舞いの時間もとれないほどに、ナナは多忙を極めていた。

が、カカシも同様に火影の側近としての実務をこなしているから、ナナとすれ違つてばかりということはなかった。

ナナも同席しての会議が多かつたし、一緒に資料をまとめる機会もあった。

ナナの様子には、サクラが心配するようなことはなかった。

カカシ自身もかなり注意深く観察をしたのだが、ナナは疲れを見せないどころか、常に明るく振る舞つた。

もちろん、そういうことができるのがナナであつたのだが、カカシがナナの瞳の奥に“影”を探そうとしても、見つけられることはなかったのだ。

「心配するな。ナナは元気にやってるから」

カカシはありのままを伝えた。

「ひと段落したら、お前たちともちゃんと話す時間ができるさ」  
できるだけ、客観的に。

「そうよね」

サクラはまだ、何かもの言いたげだった。

だが、気を取り直したようにいつもの口調で言う。

「カカシ先生とナナも次の五影会談に行くんでしょ？ その時にナナとたくさん話して来てよね！」

「ハイハイ、わかつたわかつた」

サクラは強気な笑みを残して、カルテを片手に去って行つた。  
その後ろ姿を見届けて、カカシは窓の外に視線を彷徨させた。

数週間前の、あの奇跡の日。

ナナが……蘇つた。

成葉に別れを告げ、どうすることもできずに、天に昇る光を再び見送つて……。

とうとう全てを諦めた時、つと、ナナが現れた。

ナナがここに居る。  
ナナが戻って来た。

視覚から入るその情報を、脳が「現実」だと判断した瞬間、カカシの両目から涙が流れた。

その理由はわからないままに、ただ現実を知っただけだった。

だが当然、仲間たちも喜びの声を上げて、泣いた。

何故、ナナとの再会が叶ったのか。何がそれを成したのか。誰の導きか……。

そんなことはどうでもよかった。

直前まで戦場だった荒野の中、希望の風が吹いていた。

サスケとナナの周りを、優しく撫ぜるように。

ナナとそう親しくない者たちも、疑問を口にしながら、これを「奇跡」と受け止めた。

そして忍たちの輪の外側にまでこの「奇跡」が伝えられたとき、ようやくサスケは身体を離れた。

サスケは確かめるように、ナナの双眸を見つめる。言葉はなかった。

ナナはまだ眠たげな様子で彼を見つめ返し、柔く笑んだ。

それにやっと安堵したかのように、サスケは息をついた。

「ナナ！ お、お前、もう……だ、大丈夫なのか?!」

それが何かのスイッチだったかのように、ナルトが声を上げる。

サスケの肩にぶつかりつつも、押しつけるようにしてナナの手を握りしめた。

「う、腕もちゃんと……あ、あるよな?!」

失ったはずのナナの細腕を、ナルトが片手で掴んでいた。

そこに、血が通っていることがカカシにもよくわかった。

「うん」

ナナは笑った。

「大丈夫!」

まごうことなき、あの「ナナ」だ。

春風のように清らかで、夢げで、だが芯が強くて……そんな「ナナ」

だ。

「ナナ!!」

「お、お前、 “戻った” んだな?!”

堰をきったように、仲間たちがナナに駆け寄った。

「よかった、あつたかい……!」

「い、生きてるんだよな?!」

「ナナのお母さんが生き返らせてくれたってことなのよね?! そうよね?!」

誰もが、血と泥と涙とで、ぐちゃぐちゃの顔だった。

「ナナ……よ、よかった……。あんな……!」

「あんな……あ、あんな死に方……するから……!」

サクラといのはろくに台詞も言えないほど号泣していた。

「どこか痛むところはないのか?!」

我愛羅などは目を赤くして、ナナに半ば詰め寄る。

カカシは何故だか、彼らを一步引いて見守った。

涙を見られたくなかったのもある。だが、彼らに対するナナの様子を冷静になって見ていたかったのだ。

「みんな……」

そんな彼らにナナが言った最初の言葉は。

「ごめんね」

やはり、謝罪の言葉だった。

だが、それ以上はなかった。少し困ったように笑むナナの表情には、全てが滲み出ていた。

あんなふうに死んでごめん……とか。最後まで一緒に戦えなくてごめん……とか。「自分を殺してくれ」なんて頼んでごめん……とか。

ナナはそれらを口にはしなかった。

言われなくてもわかるから、言わなくてもよかった。言わないで欲しいと、カカシも思った。

ナナが謝る必要などなにもない。

ナナは立派に戦った。誰にも真似ができない戦いをした。

その死はあまりに理不尽だった。

そしてついさつき、彼女の母親に、ナナが死してまで戦おうとしていたことを告げられたばかりだ。

「ナナ……」

わかっているから……。

目が合って、それが伝わったようだった。

ナナはうなずく代わりに、口の端を綺麗に上げた。

「私……」

そして、皆が今、一番聞きたいであろう言葉を言ってくれた。

「生きてるみたい」

少し目が覚めたかのように笑って、肩をすくめる。

懐かしい仕草に、体中が安堵感に覆われた。

それは他の皆も同じだった。ほぼ同時に、皆がその場にへたり込む。

「あー、なんかすっげー疲れが押し寄せて来たってばよ……」

それを代弁するようにナルトが言った。

カカシもやつと、深く息を吐きだした。

ナナに聞きたいほどは山ほどあった。

六道仙人が語ったことが真実だったのか……。ナナ自身もそれを知り、受け止めたのか。カグヤはどうしたのか。

いや、そんなことじゃない。

今、喜びは感じているか？

この再会を、喜んでいるか？

サスケに抱きしめられて……。その想いを突き付けられて……。あんな別れ方をしたけれど、今は未来が繋がった。

それで、ナナは今、何を思う……？

それら、ひとつも言葉にならなかった。

目の前に、ぬくもりを持ったナナが存在していること。きっと明日も、側に居てくれること。今までよりもっと、笑っていること。

それだけで今は、言葉すら要らない気がしていたのだ。

カカシはナナの肩を抱いたまま、ひと言も話さないサスケに視線を移した。この幸福感を、共有しているはずのサスケへと……。

サスケはナナを見つめるでもなく、視線をひび割れた地面へ落としていた。少しやつれた顔をしていたが、瞳に影はなかった。

その顔は、喜びや興奮を表わす他の誰よりも、触れる存在に安堵しているのがわかった。

「……良かったな、サスケ……」

ナルトも同じようにサスケを見て、絞り出すようにそう囁いた。聞こえていたはずだが、サスケは何も返さなかった。

疲れもある……が、急速に緩和した心がまだ、安定していないのだろう。

こんなふうに取り乱すサスケの顔を見るのは、初めてだった。

やがて、次々と「ナナ」を確かめに集まる者たちをかき分けて、雷影が現れた。

続いて、水影と土影……そして火影もナナの側に膝をついた。

「ナナ！ お前……」

これまで仲間たちが表現したのと同じことを、火影もしていた。言葉をすっかり失った彼女の代わりに、勢ぞろいした他の影が口を開く。

「いずみナナ……生き返ったか」

「本当に……」

「まさに奇跡……」

ナナは火影をなだめる様にしながら、彼らに挨拶した。

五影の中心にいても、もちろん臆する様子はない。

雷影がナナと、ナルトとサスケを見て……それからカカシを向いた。

「ワシらが眠らされていた間のことを知る者は？」

カカシはやつと、自身の脳が正常に動き出そうとするのを感じた。

「全てご説明します」

と答える。

そして、

「結論から言いますと……無限月読を解除したのは、そこにいるうず



まきナルトとうちはサスケです」

と、告げた。

五影たちは何も言わずにナルトとサスケを見下ろした。

「よくやってくれた」

雷影が代表して礼を述べる。

ナルトは少し照れくさそうに、その視線を受け止めた。サスケは、やはり何の反応も示さなかった。

「いずみナナ……お前も、よく戦った」

次いで、雷影はナナにもそう言った。

通常運転を始めた脳みそでは、雷影がナナを特別な目で見ていることがわかった。

水影と土影もそのようだ。

もちろん、すでに彼らはいずみナナが “どういふ存在であったか” を知っている。

それに加え、尾獣をオビトから引き抜く時のあの力を目の当たりにしたことで、一目置いているようだった。

彼らに対し、ナナは曖昧に返答した。

まぎれもなく、一度ならず二度までも皆を救ったはずなのに、それを忘れて遠慮しているようだった。

「我ら五影で今後について話し合おう。戦後処理というやつだ」

雷影は三人を改めて一瞥すると、他の影たちに言った。

「そうですね。このまま解散と言っても、釈然としませんし……、何より自分の里へ帰り着く体力が残っている者などいませんわ」

水影の言うとおり、無限月読で眠っていたにも関わらず、戦闘の疲れが癒されたわけではないようだった。

最後まで戦い続けたナルトとサスケに至っては、まともに動けないほど血を流しすぎている。

カカシ自身も多少なりとも身体は休めてはいたものの、疲労困憊といった状態であることを自覚していた。

「拠点を置くにも……ここは何も無くなってしまったぜよ」

土影はふわふわというより、ふらふらと宙に浮きながら辺りを眺め

た。

戦闘で荒らされ、神樹に食われていた大地は、まさに荒涼としていた。

「ひとまず、向こうの平地に『本部』を置こう。動ける者は、水場を探して補給に回す」

火影が側に控えていたシズネに合図した。

シズネは軽くうなずき、すぐに走り去る。

「そうだな。それと、各隊の隊長は被害状況を調べて報告しろ」

雷影も同意し、ダルイに命じた。

そして。

「大蛇丸たちだが……もうすでに逃げた可能性もあるが、見つけ次第拘束しよう」

雷影は冷静に判断を下す。

マダラやオビトが去って、暁が消滅しても、ここには味方だけが存在しているわけではなかった。

カカシの背に、久方ぶりの緊張が走った。

「それとうちはサスケは……」

今さらながら思い出す。サスケはどちらかといえば忍連合の敵であった。あの『暁』に所属していたのだから。

そしてサスケは、五影会談を襲撃し、目の前の雷影の腕を落とした真犯人でもある。

いくら結果的にこの戦争の功労者になったからと言って、未だ『指名手配犯』のままだ。

どんな理由があれ、『指名手配犯』は拘束され、投獄されて尋問される……それが忍界のルールだった。

もちろん、すぐにナルトが何かを言いかけた。が。

「うずまきナルト、お前が見張っておけ」

ナルトが口を挟む前に、雷影がそう言った。

「その様子じゃ、どうせしばらく動けんだろう」

雷影は「拘束」を命じはしなかった。

「わかったってばよ！」

ナルトは雷影の気が変わらないように……とでも言うように、即座に威勢よく答えた。

「ただし、身体が動くようになるまでの話だ。その後のことは、これからワシらで話し合って決める。いいな？」

「ここでようやく、サスケはおもむろに顔を上げた。

「ああ……すまない……」

疲れ切ったような彼の声に、雷影はため息をついた。

「お前たちも意義は無いな？」

そう他里の影に尋ねながらも、雷影の視線がほんの一瞬ナナに向けられたのを、カカシは見逃さなかった。

ナナはまだ眠たげに、ただ黙って雷影の言葉を聞いていた。

この状況に対しては、何の感情も動いていないようである。

傍観を決め込んでいるのか、諦めているのか、それとも投獄が決まれば抗議の声を上げるのか……カカシには、ナナの心境がわからなかった。

「拘束するにも、人手が足らんぜよ」

「ひとまずは、監視をつけるだけにしておきましょう。本当に酷い怪我のようですしね」

「ナルトに任せよう……」

他里の影たちは、それだけ言った。

火影は険しい顔を保ちながらも、礼を述べる。

「寛大な措置に感謝する」

「礼を言うのはまだ早い。本来なら、指名手配犯は投獄の身だ」  
「わかっている」

火影と言葉を交わしながら、またも、雷影はちらりとナナを見た。  
「まあいい。そんなことよりやらねばならんことがたくさんあるからな」

彼の言葉尻、「ナナに免じて」……と隠されていることを、カカシは予感していた。

「なんか、牢屋に入れられるってことはなさそうで良かったってばよ

！ サスケ！」

「ああ……」

奇妙な沈黙で見守っていた周囲の緊張をほぐすようにナルトが言った時、

「感謝する……」

サスケは呟くように答えた。

カカシは深くため息をついた。とにもかくにも、安堵したのだ。もうこれ以上、何も失いたくない。

サスケの自由が奪われることはもちろんだが……それによってナルトが憤るのも、サクラの涙も、見たくはなかった。

そして何より、ナナが苦しむ姿はもうたくさんだった。

やっと、今は見えなくなつたナナの瞳に浮かんでいた影……。それをもう、見たくはなかつたのだ。

「はたけカカシ。状況説明をしろ」

「は、はい」

再び一度も口を挟まないナナの様子を確かめたとき、カカシは会談への同行を命じられた。

無限月読が発動して以降のことを全て「客観的に」説明できるのは、カカシしかいなかった。

そして。

「いずみナナ、お前の話も聞かねばならん。一緒に来い」

雷影はナナの同行も求めた。

反射的にナナを見る。

と……。

「はい、わかりました」

ナナはどこか呑気な口調で答えた。

臨時、というか緊急の五影会談とはいえ、そこに参加することに気負いはないようだ。

「よいしょっと」

ナナはすぐに立ち上がろうとする。

それと同時に、まるでナナの身体の一部かのように、今まで状況を

ただ傍観していたサスケも同じ動きをした。

と、ナナはフラリとよろめいた。

「ナナー！」

それに対しても特に動じないサスケの代わりに、身体を支えたのはサクラだった。

「ナナ、一度綱手様に診てもらった方が……」

「ごめんごめん、大丈夫！　なんか、ちよつと……」

ナナは左手を袖から出して、握ったり開いたりと繰り返した。

「身体がフワフワするっていうか……ヘンな感じがするだけ」

その表情は明るかった。

「どこも怪我してないみたいだし……」

さらに、おもむろに着物の襟を広げて、胸のあたりを覗き込んだ。

「ちよ、ちよつとナナ……！」

「穴も塞がってるし！」

ナルトとサクラは顔を見合わせていた。そして二人は同時に、サスケを見た。

周りの心配をよそに、少し眠たげで、だが悠長に笑っているナナを、サスケは黙って見つめていた。

その顔に、不安は無い。

だから、二人も安心したようだった。

カカシも、そんな第七班の姿に安堵した。また、涙が出そうになるほどに……。

「歩けるか？」

「はい、大丈夫です」

「では行くぞ、ナナ」

火影と風影に促され、ナナは歩き出す。

カカシも、ナナに何かあつたときにすぐに支えられるよう、隣に並ぼうとした時だった。

ナナの足が立ち止まり、振り返った。

その視線の先には、当然、サスケとナルトが居る。

「ねえ二人とも」

ナナはまるで、明日の天気でも聞くかのように二人に尋ねた。  
「ところで、その腕、どうしたの？」

そのあまりの気軽さに、カカシは思わず目をしばたいた。  
ナルトも、急に「核心」を突かれて驚いた顔をした。  
だが。

「へへ、ちょっとサスケとケンカしたんだってばよ！」

左手で頭を掻きながら、幼い少年のように笑った。  
するとナナは、

「なーんだ。結局「また」ケンカしたんだ」

ただ呆れたようにそう言った。

そして、笑う。

ナナはわかっていたのかもしれない……と、カカシは思った。

ナルトとサスケ……避けられない二人の闘い。忍道の衝突と命の  
削り合い。そして、和解。

二人の結末がこうなることを、ナナはずっと前から予感していたの  
かもしれない。

いや、望んでいたのかもしれない。

そう思った。

その時。

「後で……」

初めて、サスケがナナに対して口を開いた。

周囲のざわめきが、一瞬で止まったようだった。

「ちゃんと、話す」

サスケはナナに向かって、そう言った。

「必ず」

サスケの隣で、ナルトが嬉しそうに鼻の下をこすって笑った。

ナナは……。

「うん……じゃあ……」

少し首を傾けて、言った。

「『また、今度』……ね？」

サスケはその言葉に何かを悟ったように、表情を変えた。

「ああ」

サスケは小さく、だが確かに笑ったのだ。

この長かった戦いが終わって初めて……というよりも、彼が里を出てから初めて見る顔だった。

ナナが蘇ったことを、彼はようやく実感したのだろう。

サスケの笑みは、ナナよりもずっと幼げに見えた。

ナナは満足げにほほ笑んで、再び歩き出した。

ナルトは少し目をこすった。サクラはまた両手で顔を覆った。い  
のとチョウジも盛大に鼻水をすすっている。シカマルは安堵した様  
にため息をついた。面倒くさそうに。サイは先ほどからずっと、微笑  
んだまま表情を変えない。リーはボロボロの腕に滝のような涙を浸  
み込ませ、テンテンは女の子らしく胸の前で手を組んでナナを見つめ  
ていた。ヒナタは指で何度も目元を拭い、シノは不自然な咳払いを繰  
り返す。キバはふてくされたように足元の小石を蹴ったりしていた  
が、目には光が浮かんでいた。

カカシは、彼らのそんな姿を目に焼き付けると、ナナの後を追った。

願わくば、この「繋がり」がもう二度と途切れることがないように  
……。

彼らの世代だからこそ祈れることを、カカシは心に強く想ってい  
た。

## 枯野に咲く

「ナナ、本当に大丈夫なのか？ どこか痛いところはないのか？」  
歩き出すとすぐに、我愛羅はナナにそう尋ねた。

彼の気持ちはカカシにも良くわかった。

本人がやけにのんびりとした様子であることが、逆に不安をあおるのだ。なぜならば、ナナが痛みを笑みで隠すことを知っているからである。

「大丈夫！」

ナナはあくまで朗らかに言った。

「たぶん私、ここに居る人たちの誰よりも元気だと思う」

生き返った……いや、生まれ変わったことを面白がってでもいるのか、ナナはクスクスと笑いだす。

「まだちよつと、しつくりこない感じなんだけど……」

そして、我愛羅とカカシを交互に見上げて問う。

「私のこの身体って、どうなったの？」

カカシは思わず、我愛羅と顔を見合わせていた。

ナナの質問の意味が、即座に理解できなかったのである。

というより、それを聞きたいのはこちらの方だった。

「安心しろ」

代わりに、前に行く火影が振り返りながら答えた。

「お前は『無』から現れた」

それを聞いても、まだ理解はしきれなかった。

が、次にナナがホツとした声で言ったことで、ナナの質問が何だったのかわかった。

「良かった！ 誰かに『もらった』んじゃないんですね」

『穢土転生』……ナナが憎んだその術を、今さらながら思い出す。

ナナはあの術と同様に、自分の魂が他の誰かを贄にして蘇ったのではないかと懸念していたのだ。

「成葉さんが帰る時、光になって……その光から、お前が現れたんだ」



だからカカシは、その時のことをナナに伝える。とはいっても、見たままのことしか言えなかったが。

「やっぱり……お母さん、〝ごつち〟に来てたんだ」

「知っていたのか？」

「うん……正直『なんとなく』……なんだけど」

ナナは首を横に傾けて、曖昧に言った。

だが、その『記憶』は温かいものだったらしい。彼女は何かを思い出し、そして嬉しそうにほほ笑んだ。

だからそれ以上、カカシは詳しく聞こうとしなかった。

今はまだ。

ただナナが蘇ったことの喜びを、ただ感じていたかった。

急ごしらえのテントの中で、戦後処理を話し合うための五影会談が開かれた。そこにはもちろん、ミフネの席もあった。

初めに事実確認が行われた。

広域の戦場で分散して戦っていたため、五影といえども状況を把握しきれてはいなかった。

敗戦者はすでに亡き者となったため、責任の追及などはできないが、どこでどんな戦いが行われていたのか知る必要があった。

もちろん、犠牲を把握することは最重要だった。

特に、無限月読がかけられてからのことは、カカシしか語る者がなかったなので、なるべく要点をまとめて漏れないように話した。

その中で、ナナにも質問の矛先は向けられた。

ナナがしたこととナナの力は、ここにいる全ての者にとって未知だったから、いくらカカシでも代わりに答えてやることは不可能だった。

ナナは投げかけられる質問に対し、ひとつひとつ丁寧に答えていた。

もともと言葉足らずの彼女であったが、それでもできるだけわかりやすく伝えようとしているのがわかった。

ナナの語るカグヤの話は、いくら彼女が淡々と、そして軽やかな声

音で話したとしても、その場を静まり返らせた。

「だからサスケに殺してもらったんです」

とつくの昔に終わった、ちよつとしたできごと……とでもいうように、ナナは滑らかに語る。

カカシの胸が、性懲りもなくズキンと痛んだ。その場の者たちもいつせいに口をつぐんだ。

一時は夢の中にいたとはいえ、皆、まだ「あの光景」を鮮明に思い出せるのだ。

あの時に降り注いだ「サスケの想い」を強烈に感じ取ったからこそ、あの光景はいつそう残酷な記憶だった。

だがナナは、沈黙をなんとも思っていないのか、続けざまにその後のことを淡々と語った。

あの世の「手前」とやらで母親に会ったこと。母に、自分がカグヤの転生者であると告げられたこと。現世の様子を見守っていたこと……第七班がカグヤを封印する際、思わず飛び出して行ったこと……。

死者でありながらこの世に舞い戻るという「禁」を犯したことに ついて、幼げに肩をすくめる様は、まるで彼女の母親と同じだった。

「たくさんの人が亡くなったのに、私だけ生き返っちゃって……」

ナナはわずかに顔を曇らせた。

が、こちらが恐縮するような感じではなかった。決して悪びれるわけではなく、悪い言い方をすれば「他人事」のようだった。

もちろん、その件に恨みごとを述べる者はなかった。

誰もが、ナナの死を理不尽なものと理解していることを、カカシは知っていた。

そして、「何の術で生き返ったのか」などと、その仕組みについても聞く者はなかった。

我愛羅はともかく、影たちは皆『和泉の力』というものに一線を置いていた。そして、ナナ自身を色々な意味で『特別な存在』であると認めているようだった。

「それで……お前が、その、『説得』……をしようとしていたカグヤはどうなった？」

説明の最後、言いにくそうに尋ねたのは我愛羅だった。

「私は……」

ナナは涼しい顔で語った。

自分がカグヤの生まれ変わりならば、カグヤを変えるのは自分しかないと思ったこと。実際、カグヤの魂と真正面から向き合ったこと……。

そして。

「でも、母が来てくれたんです。その役目は『自分が代わる』って」

ナナは深刻な気配を出すことも無く言った。

「私に、『生きろ』って……」

まるで、母との楽しい思い出のように。

「それで、私に命をくれました」

皆、黙りこくっていた。

ナナの語る話は単純ではあったが、その力を『神秘』とでしか知らない人間にとっては、壮大な物語にしか聞こえないのだ。

「これって『ことわり』を歪める『禁』を犯したことになるんですけどね」

しかしナナは愉快そうに笑った。

それも自嘲ではなかった。うしろめたさもないようだった。

少なくとも、冷静沈着に他者の心理状態を分析することに長けた者たちからは、そう見えた。

「そうか……よかった……」

我愛羅はため息のようにつぶやいた。

主観が入ってはいいたが、誰も気にはしなかった。

長い説明と確認の末、やっと『後始末』の話へと移った。

その頃にはもう日が落ちていて、カカシとナナの声は半ば掠れていた。

それでもナナは、疲れた顔を一切見せず、影たちが進める戦後処理

の対応について真剣に聞いていた。

そしてある程度の指針が決められると、率先して動くことを申し出た。

「ナナ、お前は少し休んでいたらどうだ？」

我愛羅は当然のことながら、つい先ほどまで死んでいた者の身体を氣遣った。

それが影響なかったとしても、その前には文字通り命を削って戦ったのだ。

「私、本つ当に大丈夫なの！」

カカシの隣に座るナナは、本当に元気そうに見えた。

いや……以前と同じく血色が良いとは言えなかったが、浮かべる笑みに陰りは無かった。

そうだ……彼が良く知っている、瞳の中の闇……あれがすっかり消えているのだ。

「そうか……」

安堵と悦び、そしてかすかな喪失感を胸に感じたような複雑な表情で、我愛羅はうなずいた。

そして最後に、雷影はサスケの処分について意見を求めた。

ナナはそれでも、表情を変えなかった。何か意見をする様子もなく、皆の話をただ聞いていた。

「とりあえず、木ノ葉の連中と一緒に帰すぜよ。この辺りに幽閉する場所もないからの。それとも、ここから一番近い雲隠れに投獄するかの？」

年長の土影が、最初に口を開いた。

試す……というより、確かめる様にナナを見るが、ナナは彼と視線を合わさなかった。

「水影はどう思う？」

意見を求められた水影は、少し考えてから、彼女もまたナナを見て言った。

「怪我が治るまでは、木ノ葉で監視するのがよろしいかと」

「責任は持つ」

間髪入れず、火影が宣言する。

カカシはほつとしつつ、横目でナナを見た。

「その後の身の振り方については、戦後の処理がひと段落してからとしよう」

ナナはそこに居る者たちに何気なく視線を向けられて、「ありがとうございます」と何気なく言っただけだった。

翌日から、重傷者だけをその地に残して、忍やサムライたちは各里への帰還を始めた。

木ノ葉隠れの忍を率いる火影は、他里の長と今後とも継続して話し合いを行うことを取り決めていた。

カブトは木ノ葉の忍に拘束され、里まで連行されることとなったが、大蛇丸はうまく立ち回ってその場から逃げおおせた。

香燐、重吾、水月がそれに続いて立ち去った。

ナナは、帰還準備の間じゅう、里の垣根を越えて元気に走り回っていた。

補給物資の調達から、疲弊しきった者たちへの配給、そして医療忍者の手伝い。それから、数名の忍を連れてアッコの救出に向かったり……。

連合軍の本部「跡地」まで赴いて、ナナにしかできない『送りの儀式』を慎ましやかに رفتたり。

戦場跡で急ぎよ開かれた合同葬儀を、祈祷師として司るようになると雷影からの依頼は丁重に断ったそうだが……それでも、そこに彷徨う魂がないように、何かしら自分たちにはわからない力を使っていたようだった。

そして何より、五影たちから直々に小用を預けられることが多かった。

ナナが実に自然に里の柵を感じさせずに動いていたので、五影たちは他里への連絡事項をナナに言いつけるようになったのだ。

だからナナは、帰還が始まるまで、一度も仲間の元へは戻らなかった。そればかりか、サスケの様子をうかがいに來ることもなかった。

木ノ葉への道中も同じだった。

ナナは常に医療班のサポートにまわり、行く先々での補給を担当した。

本当に、仲間たちの目から見ても、ナナは元気だった。本人が言った通り、誰よりも……。

汚れひとつない、一見して異様ともとれる純白の羽織袴を身にまとい、颯爽と動いていた。

怪我をしている部位も、表面上は見当たらない。

その姿はまるで、枯野に咲く一輪の花のようだった。

ナルトとサスケの見舞いを終えると、緊急の呼び出しがかかった。

片腕をつつた中忍が、院内を走り回って探しに来たのである。

(ガイんところは午後でいいか)

ナナや怪我をした者たちが懸命に自分の役割を果たそうとしているのに、自分がのんびりとしているわけにもいかなかった。

ガイの見舞いを後回しにして、火影の執務室へ足を向けた。

そこで火影に言うつもりだった。

カカシ自身も、「自分の役割」を果たす決意を固めた……と。

里に戻って直後に火影から打診され、返答を曖昧にしてきたのだが、やっと今、決心がついたのだ。

七班の皆は何というだろうか。

一度は火影の座に就きかけたこともあったが、あの時とは「状況」も「心情」も違った。

そして……自分自身にも、今はオビトの意志を受け継ぐ決意がある。

七班の皆や、他の仲間たち、それに、里の住民たちの未来を背負う覚悟もようやくついた。

(ナナ……お前は、オレを認めてくれるか?)

一番、気にかかるのはナナの応えだ。

この決意を固めてくれた強くて優しいナナが、『火影』を認めてくれるのかはわからなかった。

ただ、ナナにはこう言うつもりだ。

(オレは火影として、イタチのような忍を二度と産み出さないと誓うよ。お前と、サスケに……)

## 桜紅葉を揺らす風

「血圧は問題ないわね。午後にもう一度診に来るわ」

ナルトとサスケの診察を終え、サクラが立ち上がった時、トントンというノックの後に病室のドアが開いた。

「ナナ！ オッスー！」

そこへ向けて、元氣よく左手を振ったのはナルトだった。

「みんな、おはよう」

ナナはにこやかに現れて、ふたつのベッドを交互に見回した。

「調子はどう？」

「もうバッチリだつてばよ！」

包帯だらけで、まだ里を走り回る元氣などないはずなのだが、ナルトは左手の親指を立てて見せた。

「そうなの？ サクラちゃん」

クスクスと笑うナナに、サクラは順調に回復していることを告げる。

「だからって騒がないでよね、ナルト！ まだ微熱があるんだから！ 悪化したときに治療するこっちの身にもなってほしいわ！」

「わ、わかっているってサクラちゃん……しばらくおとなしくしてるってばよ……」

毎回のように入れ交わされるこの会話に、ナナは声を上げて笑っていた。

「二人とも、昔とおんなじ……！」

その言葉に、サクラとナルトは顔を見合わせた。

かつての第七班……ナルトが騒いでサクラが怒る。それを面白がるナナと、全く素知らぬ顔のサスケ。その構図が、今再現されているのだ。

サクラはサスケを見た。

ベッドの上に、気だるそうに起き上がっている彼の目は、あの時ほど冷たくはなかった。



だが、想い出に浸ったのはほんの一瞬だった。

「じゃあ、私、そろそろ行くね」

たったこれだけのやり取りで、ナナは部屋を出ようとする。

「もう行くの？」

聞いたのはサクラだった。

「うん。五影会談の資料の準備、手伝わなくちゃいけない」

ナナはそう言うと、手をひらひらと振って扉に手をかけた。

「二人とも、お大事にね」

「おう！ がんばれよー！」

静かに扉が閉まる。

結局、ナナはサスケと一言も交わさずに行ってしまった。

「ナナ、忙しそうだな」

ナルトが頭の後ろで手を組みながら、あくびまじりに言った。

確かに……と、サクラは思う。

ナナの「日常」は忙しいどころの話ではなかった。

木ノ葉に帰って以来、いや、戦後すぐからずっと、ナナとはろくに

話をしていない。

もちろん、ナナが里にとっていかに重要な存在になったか、サクラ

は理解している。

風影は除くとしても、他里の影やその側近がナナに対して絶大な信

用をおいていることは端から見ても良くわかったし、当然のこと

だとも思った。

だから、五日後に開催される五影会談への同席を火影が決めるまで

もなく、他里から依頼されていることをサクラは耳にしていた。

それだけではない。

ナナには「名」があった。『和泉』という、絶対的不可侵の名であ

る。

秘匿されていた存在であったにも関わらず、木ノ葉の忍として生き

ていることについても、おそらく五影の間で話し合われるべきなのだ

ろう。

今後のことと、和泉一族への対応を。

だが、釈然としない気持ちでサクラの中にあつた。ちらりとサスケを見る。

擦り傷や打撲の痕はまだ残るものの、相変わらず端正な顔立ちだ。彼には殺されかけもしたし、いろいろと傷つけられたが、それでもやはり……「好き」だった。

理由は無い。気がついたときにはもう好きになつていたし、「好き」の意味が変わつても想いの強さが増すだけだった。

彼の心の闇を払つてあげたかつた。

彼を護りたかつた。

幸せにしたかつた。

彼の側にいたかつた。

いつか、心からの笑顔を見せて欲しかつた。

彼に……愛して欲しかつた。

そんな普通の欲求を、ずっと持っていた。

だから当然、サスケが自分の命と引き換えにナナを蘇らせようとしたとき、本気で止めようとした。

そんなことをしてもナナは喜ばない……とか、それだけじゃなく。

サスケを失いたくなかつた。そして、ナナを失つたサスケの傷を、今度こそ自分が癒したいと思つた。

かといつて、ナナが蘇つたことを残念に思つたわけではない。

ナナを精一杯抱きしめるサスケの想いが伝わった時、心の底から「良かった」と思つた。

もともと、あの二人の絆が、想像もつかないほど強く結ばれていることは気づいていた。それだけに、つけ合つた傷が絶望的に深いということも。

が、二人が結ばれるのが最善である……とは思ふのだ。

全く心が痛まないとは、正直言い切れない。言い切る必要もないと思ふ。

とにかく、サスケにはいい加減、せめに人並みには幸せになつてほしい。

それを強く思う。

ナナにも、もうひとりで全部を背負わないで、心から笑える日々を送って欲しいと願っている。

だから、怪我人というのにベッドの上で騒ぐナルトの横で、ぼーつと窓の外を眺めるサスケを、サクラは少しだけ睨んだ。

「せつかくナナが生き返ったんだから、さっさとくつついちゃってよね！」

……と叫びたい気持ちを抑えつける。

が、それはため息に変えた。

「サクラちゃん？ どうしたんだってばよ？」

今度はナルトを睨みつけた。

サスケの「親友」で、ナナとは特別な繋がりがあつたはずのナルトは、こちらの気も知らず、毎日を能天気にごっこしているように見えた。「べつに、何でもないわよ！」

書き終えたカルテをパタンと音を立てて閉じると、ようやくサスケの視線がこちらを向いた。

どこか気だるい……、鋭さを失くした視線に氣勢が削がれた。

「それじゃあ、午後にまた来るから。ナルト！ おとなしくしてんのよ!!」

出て行きざまに、言い捨てる。

ナルトはいつもと変わらず笑って手を振っていた。サスケはまた、窓の外へと視線を戻した。

「はぁ……」

扉を閉めると、自然とため息が漏れた。

恋の終わりなどどうでもいい。

サスケとナナの未来が見えないことに、ただ鬱々とする自分に気づいていた。

その夜。

ナルトとサスケの病室には、同期の仲間のほとんどが集まっていた。

二人の様子を見るためと、日頃の仕事ぶりについての報告である。ここ数日、この光景が彼らの日常になりつつあった。

その中で、サスケは相変わらず無口だった。

ナルトやサクラ、そしていのがサスケに話しかけることはあっても、短い返事を返すばかりだ。

とはいえ、それはもともと……である。

声や視線に鋭さがなくなっただけを、サクラだけでなく、いのもまた少なからず喜んでいた。

サスケは木ノ葉に帰還してから、初めて病室に皆が集まった時、改めて謝罪した。

多くは語らなかつた。

が、自分の身の上と、思い描いていた思想を語り、それを自身で否定した。

皆を裏切ったこと、傷つけたことに対して頭を下げ……そして、再び里へ迎えてくれたことに礼を言った。

その生き様の元……彼の“兄”の話も、少しだけしてくれた。

サクラは少し泣いた。いのも泣いていた。

キバたちはまだわだかまりを抱えているようだったが、何も言わなかつた。

シカマルが一言、「とりあえず世界を救ってくれたことに、オレらからも礼を言う」と彼らしく面倒くさそうに言った。

皆、全てを水に流すことなどできないだろう。

それでもサスケを憎もうとしないのは、サスケの痛みを理解したからだ。

一族のこと、兄のこと……サスケは断片的にしか語らなかつたが、成長した自分たちにはその真実が見えた。

そして、サスケが真の悪に染まつていなかったことを十分にわかっていた。

それはあの時、皆が浴びた光が証明していた。

温かくて、痛い……ナナへの深すぎる愛。自分たちなどは持て余してしまうほどの、溢れんばかりの愛。

里を抜けて大蛇丸の元へ去っても、暁に入って騒乱の渦中に身を投じても、仲間を殺そうとしても……サスケには心があった。

なにより……皆が思うのは、ナナの困った顔を見たくないということだった。

だから、サスケに対する思いをため息と共に吐き出すことにしたのだ。

シカマルも、キバも……。

しかし、その場ではニコニコと笑っていたナナが、今夜は姿を見せなかった。

サクラはサスケの方を横目で見ながら、誰かナナに会った者はいないか尋ねた。

「昼頃、火影邸ですれ違ったぜ。書庫に行くとか言ってた」

シカマルがそう言うと、チョウジが続けた。

「午後に商店街を走っているとところを見かけたよ」

その後の目撃証言はなかった。

「ナナ、働きすぎよね！」

サクラは思わず言った。

視界の隅のサスケは、何の反応も示さない。

「ま、元気なんだから心配ねえってばよ！」

相変わらず、ナルトはあっけらかんと言う。

まるでどこかの遅刻魔の上忍のようだ。なんとなく無責任のように思えて、サクラはナルトを睨みつけた。

が、思いがけずリーがナルトに同調した。

「昨日の夜、一緒にご飯を食べましたけど、本当に元気そうでしたよ！」

色々な仕事を頼まれて楽しいと言っていました！」

それを聞き終えるやいなや、サクラはすかさずリーの首を絞めに回り込んだ。

「ちよつと！　なんで私たちがろくにナナと話もできないってのに、リーさんなんかが食事してんのよ！」

「ぐっ、ぐるじいです……サクラさん……！」

サクラは憤慨していた。

自分は探しても見つけられないのに、何故リーが……と。

「まあまあサクラ、タイミングっていうのがあるから」

サイが冷静になだめるのも、逆に苛立ちがつのる。

「ナナも次の五影会談に呼ばれてんだろ？ いきなり重鎮だなおい」

「仕方ねーだろ。ナナには『一族』の問題もある。今回の戦争で一般の忍たちも『和泉一族』が存在していることを知っちゃったから、早いうちにそのことについて対処しなくちゃなんねーんだ」

心配そうに眉をひそめたキバに対するシカマルの冷静な発言で、サクラもようやくリーから手を離れた。

やはり彼もそのことを案じていたのだ。

「でもさー。あの戦争で、あたしら一般人に『伝説の和泉一族が実は今も存在してる』って知れ渡ってからはしばらく経つけど、べつに何事もないわよね？ 第一、ナナの親戚？ 和泉一族っていうのがどこに住んでるのかも知らないし……」

いのがもつともな疑問を口にした。

確かに、ナナは中忍試験後に一度「故郷」へ戻ったが、その時もその「故郷」が何処にあるのかは聞いていなかった。

木ノ葉に帰って来た時も、そのことを聞きそびれていた。

……まああの時は、すぐに姉との再戦があったり、ダンゾウに拉致されていたり、ペインの襲撃があったりと、立て続けに事件が起きていたから、とても落ち着いて話す機会などなかったのだが。

だから、きつと誰も知らないのだろう。

興味を持って調べたくとも、未だ『和泉一族』はただの『伝説』でしかないのだ。

だいたい、ナナはまだ木ノ葉に居続けている。一族の里と連絡を取っているのかもしれないが、今も変わらず木ノ葉の忍として動いているのは間違いなかった。

「邪魔するぞ」

そこで突然、ドアが派手な音を立てて開いた。

「けっこうな人数が揃ってるな。お前たち、こんな時間に病院で騒ぐんじゃないよ」

入って来たのは火影だった。  
後ろに力カシの姿もある。

「ナルト、サスケ、調子はどうだ？」

「ぜんっぜん元気だつてばよ！ だから明日はちよこつとだけ外出許可を……」

「問題ない」

ナルトとサスケがそれぞれいつものとおりに答えると、火影は皆を見回した。

「ところで、ナナはまだ来ていないのか？」

サクラはとつきに問う。

「師匠のところに行ったんじゃないんですか？」

てつきり、今もナナは火影の命でどこかへ行っていると思つていたので。

が、火影は首を振った。

「午後の仕事を片付けてからは見ていない。ここへ来るように伝令を出したんだが……まだ見つからないのか」

「え！ ナナ、どっか行っちゃったの？」

いのが余計な心配をあおる。

嫌な予感がして、サクラは探しに行くことを提案しようとした。

その時。

「綱手様はこちらですか？」

開いていたドアから、ナナが顔をのぞかせた。

「ナナ！」

「どこへ行っていたんだ？」

ナナは病室に大勢の人間がいたことに驚いた顔をして、くすりと笑った。

「すみません、ちよつと『里』から使者が来ていたので」

ナナの緩い笑みとは対照的に、サクラだけでなく、他の仲間たちの表情がいつきに引きつった。

「例の件か？」

「はい、そうです」

どうやら火影は、その事情を知っているようだ。

「……その話は明日聞こう」

少し思案し火影がそう言った。

サクラにとつてはそれが意外だった。

てつきり『和泉一族』の事情は、木ノ葉にとつても重要な問題であると思っていたのだが、急を要するものではないらしい。

自分たち部外者を憚ったのでもないようだ。

ナナに緊張感が無いのはいつものことだが、火影がそれを見せなかったことで、サクラは少なからず安堵した。

隣のいのと顔を見合わせて、互いに口をつぐむことを確認し合った。

「こちらの要件だが……第七班以外の者がけっこういるが、まあいいだろう。どうせ明日の朝には告示するからな」

火影はもう一度皆を見回した。

そして少しもつたたいぶって、こう言った。

「次の五影会談で、『六代目火影』にはたけカカシが就任することを報告して来る」

ここでもっとも大きなリアクションをしたのはリーだった。

意外にも、いつも真つ先にうざったく騒ぎ出すはずのナルトは、察していたような顔で誇らしげに笑った。

「そういうワケだから、お前たちよろしくネ」

カカシは諦めたというか、流れに乗ったというか……やる気が無いわけではないのだが、いつものとおりどこか気が抜けた様子で片手を上げた。

サクラも驚きはなかった。

一度は火影になるはずの人物であったし、火影がこの戦後の区切りがついたタイミングで、世代交代を測ろうとしているのも理解できる。

というより、師匠である彼女の性格を考えると、この機に面倒事を早く引き継ぎたいという気持ちもあるのだろう。

「大勢の実力ある忍がこの戦争で殉職した。これからは特に、お前た



ちのような若い忍の活躍が期待される」

火影は少し胸をそらし、かしこまって皆に言う。

「カカシを支えるのはお前たちなんだからな。気を引き締めていくように！」

「ま、お手柔らかに頼むネ」

相変わらずのんびりした担当上忍に苦笑しつつ、周りの皆と共に祝いを述べる。

ナナも嬉しそうにカカシを見上げていた。彼女はすでに、このことを知っていたようだった。

そのナナに火影は言った。

「前に言っていたとおり、我々は明日、この件で大名の承認を得るために一足先に里を出る。二日後に時雨山で合流して五影会談に向かう。詳しいことは明朝言い渡すから執務室に来てくれ」

「はい、わかりました」

ツナデの言葉はすっかり重役に対するそれなのだが、ナナ自身はのんびりとした返事を返している。

五影会談とは、厳戒態勢の中で開催され、緊迫感を持って臨むもの……というイメージがあったから、サクラは若干拍子抜けであった。

もともとナナにはこういうところがある。

それが見られてうれしい気持ちもあるのだが……同時に、アカデミー忍者学校時代の親心のようなものを思い出して心配だった。

それでも、その思いが少し懐かしくもあって笑えた。

最後に、ツナデはナルトとサスケの腕の状態を診た。

その表情は、順調な回復を認めているようだったが、何か思案しているような素振りもあった。

だが、彼女は特に何も言わずに出て行った。

そこで何となく、皆も解散することとなったのだが……。

病院を出るなり、サクラは早速ナナの腕を取った。

「ナナ、夜ご飯まだでしょ？一緒に行きましょう！」

チヨウジやキバがすぐに賛同する。

が、

「ごめんね、これからちよつと用事が……」

街灯の下で、ナナは困った顔でこちらを見た。

「なにより、まだ仕事？」

「五代目は何も言っただけでなかったぞ？」

ナナは小さく首を振り、言った。

「ヒナちゃんの家に行く約束があつて……」

サクラはまたもイノと顔を見合わせた。

この場にヒナタの姿は無かつたが、ナナがわざわざ彼女に会いに行く理由が見当たらない。

「ヒナタに用事？」

そう尋ねると、ナナは曖昧に首を傾げる。

「ヒアシ様に用事ですか？」

そして、そのリーの問いにうなずいて答えた。

「ネジ君のこと……話さなくちゃいけないと思つて……」

急に、皆押し黙つた。

あのネジの最期を見た者は多い。ナナの死と同じく残酷な光景が、まだ瞼に焼き付いているのだ。

だが、あの場にナナは居なかつたはず……。

「リーさんとテンテンにも、また今度、ちゃんと話すね」

ナナはただ、二人にそれだけを言った。

「また、今度」……そのナナの言葉を、つい最近どこかで聞いたような気がしたとき。

「じゃあみんな、また明日！」

ナナは元気よくそう言つて去つて行つた。

その走り去る後姿を見て、あの荒涼とした光景と、その時のサスケの綺麗な笑みを思い出した……。

あの笑みで、全てが元通りに……いや、最初から止まっていた歯車が、遅ればせながらゆっくりと動き出した。

そう、感じていた。きつと、親友のいのもそうだろう。

他の仲間たち、ナナとサスケを知る者たちも、同じように思つて異なるに違いない。

だが……。

ナナが消えた闇を見つめて、思った。

そんな簡単なことじゃない。

そんなふうに、周りが思うほど単純に運ぶことではないのかもしれない。

二人がどれほどの深い傷をつけ合ったのか……。

同じ第七班で、サスケばかり見つめてきた自分にも想像がつかなかった。

自分の気持ちだけじゃなく、もつと二人の抱える問題や、想いに気を配っていれば、もう少し理解できたのかもしれない。

二人がどれだけ深く想い合って、それだけに、深く傷つけ合ったかと。

うちはイタチのこと、和泉一族のこと……色々ありすぎて、自分などではとても立ち入る隙間はなかったのだが、それでもちゃんと向き合っていればよかったと少し後悔している。

下忍の頃、一緒に過ごした日々でさえ、二人は重いものをそれぞれに抱え込んでいた。

いや、もつと以前……忍者学校の頃からそうだったのだ。

ナナは朗らかに笑っていたし、サスケはいつも憧れの存在でいたから、気づけなかった。

好きなものを好き……と言えない生き方をしてきたナナ。好きなものを捨てきれない苦しみを抱えてきたサスケ。

そんなサスケに恋い焦がれ、自身の中にあるナナへの嫉妬すら見過ごして来た……。

だから……。

サクラはその夜、一晩中考えた。

もちろん、これが初めてではない。だが、もう一度、ちゃんと、考えることにした。

ナナの使命と、サスケへの想い。

サスケの生き様と、ナナへの想い。

自分の、サスケへの想いと、ナナへの想い。

今、サスケが何を思うのか。

ナナが今、何を思っているのか。

自分が、これからどうすべきなのか。

この中に染みついた想いを、どう処理すべきなのか……。

明け方、鳥の声を聞いてようやく心が落ち着いた。

が、部屋に差し込む朝日のように、それは清々しいものではなかった。

サスケはまだ、ナナを愛している。

自分もまだ、サスケに恋している。

本当は、ナナに嫉妬している。

自分はまだ、サスケの側に居たい。

サスケに必要とされたい。

サスケを癒し、愛したい。

だが、それはもう……叶わない。

あんなふうには、未来を望まない生き方をしようとしたサスケを見てしまったから。

ナナの居ない世界を、「生きよう」としなかったサスケの意志を、知ってしまったから。

サスケは、ナナじゃなきやダメだった。きっと、最初から……。

ここまでわかってすつきりしないのは……、この世に蘇ったナナの想いがわからないから。

サスケと再会したナナが、何を思うのかわからなくなっているから。

そして、サスケはナナに何を求めているのか……それもわからなかった。

だから、モヤモヤとしたままにいる。

自分の気持ちに決着をつけたいから、二人の関係をはつきり示して欲しい……だなんて、都合が良すぎる要求だ。

だから、それは言わない。言わない……が……。

二人ももし、皆の解釈と違ってまだ『止まったまま』でいるのなら……。

その理由はわかる気がしていた。  
そう……自分でも耐えられない。ナナが、あんなふうに死んだから。

サスケはナナを殺した。

たとえナナの望みであつたとしても、あの瞬間の痛みは、自我をも破壊するようなものだっただろう。

最愛の人を、その手で殺さなければならなかった己の無力さ。

ナナの運命の残酷さを呪い、まさに絶望の底の底へ……。

そして、ナナも。

それをわかっているから、サスケと向き合えないのかもしれない。

自分自身がサスケにつけたその傷の深さが、ナナには見えているはずだから。

冷酷な要求。全てをサスケに押し付けての逃避。

その罪悪感を払拭するには、何が必要なのかもわからない……。

自分にできることなどなかった。

だからといって、決してこの機会にサスケを振り向かせようなどとは、もう思わない。

気づかないふりをするのも、傍観しているのも、もうしたくはない。

だから、ナナとちゃんと向き合おう。話をしよう。

そういう結論を出した。

ナナの想いを聞いて、ナナを傷つけるかもしれない。自分も、傷つくかもしれない。

だが、曖昧にしてきた関係には、もううんざりだった。

色々と重たいものを抱えたナナを、今度こそちゃんとつかまえて。腕をとって、顔を見て、想いを伝えよう。

そして……。

今、言いたい言葉はこれだった。

あの、残酷な光景は、すでに過去。

二人は、それを乗り越えた。

そして、再会を果たした。

だから、前に進んで欲しい……そうしても、誰も咎めない。

どうか、幸せに……。  
涙を流さず、そう、伝えたかった。

## 星孔雀

終戦後、改めて正式に開かれた五影会談でのナナの態度は、実に落ち着いたものだった。

我愛羅自身、若くして風影となり、他の里長とは経験値が明らかに異なるとはいえ、少なくとも砂隠れの里が彼らに侮られないような振る舞いはしてきたつもりだった。

だが、ナナはそんな気負いや気迫は一切なかった。

にもかかわらず、五影は改めてナナの纏う、明らかに他者とは異なる雰囲気を感じていた。

いや、むしろ圧倒されたと言っても言い過ぎではないだろう。

ナナが持つ、他には無いモノ。

それは血と……そして名だ。

これは、血統と家名がそのまま実力と結びつく忍の世界では、未だ重みがあった。

しかも、ナナが持つそれは、究極の武器となり得るそれである。

『和泉』と『うちは』……。

前者だけでも神話の域に達するというのに、後者は忍の世界に轟く名であり、恐れられる力を伴っている。

加えて、ナナはそれに相応しいというか、それを持っても余りあるほどの器だった。

我愛羅はそれを知っていた。

ずっと前から……彼女がまだ、幼い少女だった頃からそれを知っていた。

だが、今の彼女を見て、改めて他の里長たちと同様の衝撃を受けていた。

今のナナには、『経験』の二文字ではあまりに味気ない、計り知れない絶望と希望の果てに身に着いた『風格』があった。

柔らかな笑みで人を気圧すほどの……かといって、威圧ではない。

ナナが醸す空気は、依然として優しく涼しげな、春風のようなもの

だった。

『地上の神』と……、神話の中の和泉一族はそう言われている。

それが、ひどく納得できた。

その一族の話を、ナナはどこにでも存在する人間のように話をした。

彼らの里が、自らがつくった結界に囲われ、火の国のある山奥にひっそりと存在すること。自分たちの血を狙う輩から身を隠すため、げかい外界との関係を断っていること。

そのくせ、各国の大名や豪商たちからの依頼を高値で受け、取るに足らない陰陽術で尊厳を保とうとしていること。

そして、木ノ葉隠れの里とは秘密裡に手を結び、相互扶助の関係を築いて来たことは、木ノ葉隠れにとってもおそらくは最重要機密のはずであったが、ナナは火影の顔色をうかがうこともなく、さらりと言っただけのけた。

ナナがそうしたように、今さらナナが語ることは「秘密」ではなかった。

だが、改めてその渦中の人間から明かされると、やはり衝撃を受けざるを得ないというものである。

そして何よりも、ナナがその一族の里の出身でありながら、そこに今も存在するという里長に対して少しの敬意も自尊も無いことに、多大な違和感を持った。

自分たちにとって、伝説の一族の長とはほとんど神に近い存在だった。

実際、どこの国にも存在する神話や伝説、おとぎ話の中では、彼らは『地上の神』として描かれていたのだから当たり前なのだ。

その幼き頃から刷り込まれていた心象と、ナナが語る現実はあまりにかけ離れていた。

ナナはむしろ彼らを軽蔑していた。

おおよそ、ナナはそんな感情を持ち合わせていないと、我愛羅は勝手に思い込んでいたのだが、一族を語るナナの声の端には、明らかにそれが感じ取れた。



同時に明かされたナナの出生の秘密を知ってしまったのは、それも納得せざるを得ないのだが、それにしても、口元に笑みを浮かべながら整然と語るナナを見てみると、空恐ろしさすら覚えた。

我愛羅は己自身のことを思い出した。

自分も父親を軽蔑していた。

父よりも力があつたから、父を恐れなかった。

望まぬうちに力を持つて産み出されたというのに、父からも、周囲からも畏怖の目で見られていた。あからさまに嫌悪されていた。

それでも自分を抑え込めない無能な父らを、軽蔑していた。

そうか……。

と彼は思った。

ナナは自分と同じ……いや、自分がナナと同じだったのだ。

ナナの真実を知らされて、あの日受けたナナのぬくもりを、もつと深く知った。

あれはナナが生まれ持った博愛の心だけではなかった。

自分と同じ……そう思っていたから救ってくれたのだ。

他里の忍であり、自分の住む里を破壊し、仲間を殺そうとした自分を、ナナは慈愛と共調の心で救ってくれたのだ。

だからこそ、察することができた。

ナナが和泉の里で、どれほどの重いものを背負わされてきたのか。

そして、あのナナにこんな声音を出させるほど、今はまだ語られない辛い記憶が確かに存在するということを。

「では、いずみナナ……まずはお前の提案を聞こう」

『歴史』と『実態』を聞き終えて、雷影が口を開いた。

ナナとは正反対の、非常に重い口調である。

無理もなかった。

どの影も、付き人も、サムライ頭も、皆一様に困惑した表情を隠さない。

普通は、表情を隠すのが忍の務めではあるが、この件に関してはどこも対等の立場だった。全ての忍やサムライにとって、未知の領域と

言っても過言ではないと思えた。

そんな中、やはり唯一、涼しげな顔をしたナナが、すらすらと言葉を述べた。

「まず、木ノ葉と和泉の秘密の関係ですが……特に両者の利益になるようなこともなかったもので、できれば不問にしていただけではないでしょうか。先ほどお話した『うちは一族と和泉一族が共謀したクーデターの件』は、木ノ葉側で関わっていたのはうちは一族の一部だけです……」

ナナは全く悪びれないといった様子でいた。珍しく、このような場に適した言い回しを使いこなしている。

我愛羅はその顔を注意深く見つめた。

組んだ腕に、熱が籠るのを自覚する。

ナナは今、木ノ葉が「抜け駆け」のような形で和泉一族の存在を把握し、その益を得ようとしていたことを、他里に対して「見逃せ」と言っただけだ。

いや、それは良い……。

先ほどの説明だけでもナナの心境を察して胸が痛むというのに、『クーデター』の件をこうもあっさりと再び口にするとは……。

それはつまり、ナナとうちはイタチの「婚約」を意味するのだから、ナナにとっては間違いなく最も辛い過去の事実であるはずだった。

「何度も申し上げますが、和泉一族は忍里ができた頃にはもうとつくに衰退していました。だからこそ、忍の力に守ってもらおうと木ノ葉と取引をしたんですが……。実際は、九尾の襲来を占うこともできなかつたし、ましてやそれを抑えることもできなかつたんです。力を持つ者が「分家」には何人か現れたようですが、それでも木ノ葉を救うことは無かつた……。だから、苦し紛れに私が産み出されることになつたんですけど」

そしてナナは改めて、一族の、特に自分の属する『本家』の無能さをにじませた。

「だいたい、今回の戦争にも、何の手も貸そうとはしませんでしたし、できなかつたというのが事実です」

冷たい言葉に、疑う余地はない。

「木ノ葉が秘かに和泉一族をかこつて得た利益は、いずみナナのみというわけか……」

雷影がおもむろに自慢のひげをさすった。

ナナはそのつぶやきに肯定も否定もせず、微笑を浮かべた。

美しくも、逆らえない笑みだった。

「木ノ葉が和泉一族と組んで事件を起こしたという事実がない以上、追及しても時間の無駄になりそうですわね」

最初に水影がその笑みに屈した形になった。

「木ノ葉だけじゃなく、和泉の方を追及するということもあると思いますが」

ナナは無邪気に言った。

それがまた、この場の室温を一度くらい下げたのだった。

「触らぬ神に祟りなし……ぜよ」

その空気に促されるように、土影がぼそりと言った。

言い得て妙だ。

今まで知らなかった手の届かない『神』のような存在を、わざわざ探すことも無い。

それこそ藪から蛇だ、と思う。

「一応聞くが、五代目火影はその歴史を知っていたのか？」

「ああ……」

火影はひとつ咳払いをして、難しい顔で質疑に答えた。

「木ノ葉の奥地に、『和泉神社』という神社がある。そこに和泉一族の方が住み、我々と一族とのパイプ役になっていた。そのうちの一人がナナの母親……和泉成葉だ」

ナナが一瞬、懐かしげな瞳をしたのを、我愛羅は見た。

「実を言うと、私自身はそこに行つたことはないし、一族の方には会つたことがない。交流があつたと思われるのは、歴代火影と人柱力だけと思われる。和泉の里から『ナナ』を受け入れる話を取り決めたのは、三代目火影だそうだ。今の木ノ葉の重役も、何か知っているかもしれないが……」

火影がちらりとナナを見ると、ナナはコクリとうなずいた。

「それ以前には、四代目火影が成葉殿に九尾のことで相談をしていたようだ。それ以外は知らん」

そう答えた火影の言葉に、嘘は無いようだった。

だいたい、ナナのこの態度を見せつけられては、和泉一族が木ノ葉の忍を利用しようとしたことの想像すらできなかった。

イメージできるのは、ただ火の国のどこかの山奥で、威光を飾りつつ外界に怯える弱き「人」の姿だ。

「問題ない」

ここで、我愛羅は口を開いた。

ナナの視線を感じつつ、思った言葉を述べる。

「結果的に、いずみナナが木ノ葉の忍になり、和泉一族の力と忍の力を使つて戦いに貢献した。それだけでも、木ノ葉の『抜け駆け』を見逃す理由になる」

私情はたつぷりとある。

が、全くの正論だとも言いきれぬ。

「ワシはもともと和泉の力にはさほど興味ない」

「木ノ葉の人柱力が代々うずまき一族で……そのうずまき一族が和泉の支流とあらば、特に繋がりが強いのも至極当然ぜよ」

「土影様のおっしやるとお思いますわ。うちは一族もまた、和泉一族が祖先ということですし……」

他の影も、あっさりとなびいた。

火影とカカシはほっとした様子だったが、ナナは礼を言うだけで表情を変えなかった。

「して、これからはどうするか」

「今まで通り、和泉一族は秘匿された存在でなければなりませんよね？」

問われて、ナナは火影と視線で確認し合ってから話し始めた。

「力は無くても、『血』が利用される危険があります。この数百年で結界が破られそうになったことは無いそうですが、それでもやっぱり、結界の中で暮らすのが『世界にとっての安全』と思います。それに、一

族の者も外界と関わろうとはしていません」

その声から異様な冷たさは消えていたが、やけに事務的な口調だった。

「私は戦争の後、当主に事情を説明し、今後の意向を聞きました」

「当主」ということはつまりナナ自身の父親ということを示すのだろうが、あまりにその言い方が冷たすぎたため、皆、かすかに身構える。

「一族の扱いはこれまでどおり……と、そう希望しています」

ナナは作り笑いを浮かべて言った。

「ただ、一族の存在が知れ渡った以上、その力が求められることがあると思うので、望まれれば協力する……だそうです」

また、冷ややかな声音に変わった。

まるで、「協力」などできるはずがないと悟っているようだった。

「まあ、私のせいで、一族の特殊な能力や術について知られてしまったので、仕方なくそう宣言したんだと思いますけど」

「確かに、忍の力でないものも、戦いに必要になることがあると、ナナが証明しましたわね」

「特に封印術や結界術は、忍が使うものよりもはるかに優れているよ  
うだ……お前自身の能力もあるのだろうか……」

雷影が言うと、ナナは謙遜することなく、自身の考えを述べた。

「和泉の力が必要な場合は、私が承ります」

それはとても軽薄な意見に聞こえた。

が、ナナの考えは的を射ていた。

「任務状況によって私が出られない場合は、里へ『術師要請』の連絡を入れます。木ノ葉の和泉神社に常駐していた一族の人間は、高齢のため里へ帰すことにしたので、他に連絡方法を確立します。ですから、  
“何か” あれば木ノ葉へ依頼を出すということにしてくださいただけませんか？」

今、最も懸念されるのは、和泉一族の存在を知った者たちが、その力を求めて各々が暴走することだ。

そうならないために、こうしてナナを呼びつけてしたくもないであ

ろう話をさせている。

だからナナの言う通り、公式のルートを設定しておくことで、『掟』を定め、均衡を保つことができるのだ。

そしてナナの言う「何か」とは、他里の協力を得てまで遂行しなければならぬ重大な事を指す。

つまり、そのくらい的大事でなければ、和泉一族の力を頼るな……という意味にもとれる。

「うーむ」

雷影は腕を組み直した。

我愛羅自身はもちろんナナの意見に賛成であったが、彼の気持ちも良くわかる。

先ほどは「和泉の力に興味が無い」と言った雷影ではあるが、この機は雲隠れと和泉の外交を開始するチャンスではあるのだ。

ナナに、「雲隠れから直接和泉の里と連絡を取りたい」と、要求することができるとは思わなかった。

他の里も同じだ。岩隠れも霧隠れも、サムライだってそうだ。

和泉の力を利用したいのなら、木ノ葉を通さず、直接交渉する機会を得たいに違いなかった。

「忍術の基盤は陰陽術……と、忍になるものは誰もが習う……」

不意に、土影が口を開いた。

「我らが扱う忍術の根源を知りたいと思う者は、少なくともないじやろう。お前の力を目にし、その力を持つ一族がどこかに存在していると知った今は、特にな」

ナナは土影をじつと見つめていた。

「それでも……」

土影はその視線を受け止め、皆を見回しながら言った。

「やはり我々にとつて和泉一族は神話の一族であり、その力も犯すべき領域の類で無いと思う」

水影が小さくうなづく。

「それに、ナナの言う通り一族の力が衰えているのであれば……まあ、実際に世界に混乱を起こすことも、混乱を鎮めることも不可能な事態

と知らされてはいるのじゃが……まさに『触らぬ神に祟りなし』としておくのが最善の処置ぜよ……」

結論の言葉は彼から出た。

尊敬すべき長年の経験から吐き出される、深い声だった。

「だいたい、我らにはナナが居る」

皆の視線が、ナナを向く。

「和泉の力が必要とあらば、必ずお前を頼る」

影たちの目が、伝説の一族の最強の術者へ向けられる。

「ありがとうございます」

謙遜も気負いもなく、ナナは礼を述べた。

その細い肩に、一族の命運と、世間の調停とがのしかかっていたのだが、ナナの背は真っ直ぐに伸びていた。

「相変わらず」だな……と我愛羅はこっそり苦笑した。

どれほど冷めた声で話しても、周囲が懸念するほど緩く笑んでいても、結局、ナナは「背負う」ことを放棄しないのだ。

ただ、今回ばかりは、「秘かに」と「孤独に」の二つが伴わないことが安心だった。

「では、当主にそのように伝えます」

「承諾していただけるのか？」

「はい、大丈夫です」

ナナは確信を持って言った。

最後に、ふと、ナナがこちらを見た。

それはあまりに唐突で、ナナがやっと椅子に腰かけるタイミングだったのだが、ナナは確かに笑みをよこした。

瞬間、「ありがとうございます」と聴こえた気がした。

まるで、この議題が始まってからずっと、腹の奥に感じていた痛みを知っていたかのように思えた。

我愛羅は微笑を返す。

これからまだ、話し合わねばならない頭の痛い議題が残っている。

まだ、礼を言われる立場には無かった。

が、ひとまずは安堵した。

ナナ自身がひとりで抱える荷だけは、ここで下ろさせることができたのだから。



## 月兔耳

それから数時間、少しの休憩を挟んで会議は続いた。途中、ナナと各里の付き人は席を外すことになった。

木ノ葉からは火影の他に次の火影に就任するはたけカカシが残ったが、それ以外は里長のみの会合である。

もちろん、我愛羅の付き人であるカンクロウもナナたちと共に部屋を出た。

その里長に限られた中で話し合われた議題は、戦犯の処遇であった。

マダラとオビトはすでに存在しないので、会議にかけられるのは「大蛇丸」、「薬師カブト」、そして……「うちはサスケ」であった。

三人とも木ノ葉の抜け忍で、カブトとサスケは現在、木ノ葉で幽閉されている。

彼らの処分をどうするか……戦後、数週間を経てもまだ、影たちは決めかねていた。

午前から始めた会議が、全ての話し合いを終わる頃には真夜中を過ぎようとしていた。

我愛羅が他の影たちと共に部屋を出ると、控えの間が異様な雰囲気だった。

そこには各里の忍たちが控えていたのだが……常識的にはあり得ないほどの和やかな空気が流れていたのだ。

普通、別間で控える付き人たちは、互いを監視しながら緊張感を保った状態で主の戻りを待つはずだった。

それが、どうやら先の戦争の話を互いに報告し合っていたようなのだ。それも、仲良くひとつのテーブルを囲んだ状態で。

我愛羅はカンクロウを見た。ナナの隣で、少し照れくさそうに笑っている。反対隣のダルイでさえも、初対面の時の精悍な様を剥ぎ捨てて、気だるそうに肘をつきながらナナを見ていた。

我愛羅は呆れたように息をついた。他の影たちも同じだった。まあ、当然といえばそうなのだ。

今までの歴史は変わり、忍たちは里を超えて協力し合った。その縮図が、目の前の光景なのだ。

が、衝突し合った長い歴史を思うと、彼らの順応力の高さには苦笑せざるをえなかった。

「やーっと終わったんすか、雷影様」

「待ちくたびれたじゃん」

「ほんとにさー、先に休ませてくれりやーよかったのに」

今の今まで楽しそうに話していたくせに、悪態をつくダルイ、カンクロウ、クロツチである。

「み、みなさんお疲れ様です！」

長十郎が真面目腐って言うのと、

「お疲れ様でした」

その中心にいたはずのナナがペコリと頭を下げた。

影たちと、自然と目を合わせた。

これで良かった……。

誰もがそう思っていた。

こうやって「会議」の中ではなく、人と人との「会話」の中で語られることこそ、後世に残っていくものである。

彼らは長い待ち時間の間に互いをけん制するのではなく、戦争の話からただの世間話までを語り尽して親睦を深めたようだった。

それでまた、里どうしの絆も深まるというものだ。

「お前たち、一休みしてから里へ帰れ」

雷影の申し出を、皆はありがたく受け入れた。

戦いの疲れよりも話し合いの疲れのほうが忍の身体には堪えるということ、改めて知った。

それは雷影自身も同じようで、しきりに肩を回している。土影も先ほどからずっと腰痛を訴えていた。

「さて……と」

おもむろに、火影がこちらを向く。

「私は疲れたからもう寝る。風影、ナナにはお前から話しておいてくれ」

そして、乱暴にそんな突拍子もないことを言い出した。「は？」

と聞き返した時には、彼女は首を左右交互に倒しながら控えの間を出て行くところだった。

「じゃ、そういうことでよろしくお願いします、風影さま」

ナナの上司であるはずのカカシまで、大きく伸びをしながら火影の後を追って行ってしまった。

他の里の者たちも、付き人たちを連れてさっさと退室して行く。

「よっほど大変だったんだね」

ナナはこの状況を不思議とも思わず、二人の上司を見送りながらただ笑った。

あげく……。

「オレも疲れてねみーじゃん。警護疲れてヤツだ」

警護などしていなかったはずのカンクロウまでもが、

「報告は明日聞かせてもらおうじゃん」

あくびまじりに言い残して去ってしまった。

部屋に残されたのは、我愛羅とナナ。

我愛羅は大きいため息をついた。

いった誰が何の気をまわしたのか……。

通常、五影会談中の、特に長だけで話し合われる機密性の高い議題は、定められた範囲だけを信頼できる部下のみに話し伝える。いや、長の胸の内だけに収めて部下には一切語らない話もある。

それは、いくら里長としての経験が浅いといえども常識的なことと心得ていた。

が、火影は他里の長に対して、自分の部下にその内容を語っておけると言うのだ。

それについて他の影がとやかく言うこともなく、自分の付き人であるカンクロウまでもが側を離れる事態である。

普通に考えて異常な状態だ。

だが……。

それはそれとして、ナナと話せることには素直に喜んでいた。終戦直後の会談の後には、もちろん事務的なこと以外を話す暇などなかった。だから、これは我愛羅に与えられた好機だった。

「ナナ、疲れたか？」

「我愛羅……じゃなくて、風影さまこそ本当にお疲れ様！」

ナナは疲れた様子もなく、そう言った。

それから……「我愛羅も先に休んだら？」とか、「明日ツナデ様に聞くから今じゃなくても」とか、「クマが濃くなっちゃってるよ」とか、笑みを浮かべながら顔を覗き込んでくる。

こちらの気も知らないで……と、小さくため息をついた。

「我愛羅……？」

「ナナ」

窓際のテーブルについた。

綺麗な物腰で向かいに座るナナを見て、やはり、損な役回りを押し付けられたかと自問する。

ナナに話したいことはたくさんあった。その順番すら整理できないほど、たくさんあった。

だが、火影が言った「ナナに話さなくてはならないこと」が、その順番の一番最初にあるのだ。

『風影様』じゃなくて『我愛羅』でいいよね？ 誰も居ないし」

無邪気に笑うナナの顔を、曇らせる話……。

「ナナ、サスケの件だが……」

付き人たち、特にナナの居ないところで話し合われたことのひとつ。

その結果を、我愛羅は伝えた。

「結局、今回の会談では無罪放免とする決定には至らなかった」  
「そっか」

案外あっさりとなナが相槌をうったので、肩透かしをくらった気分になった。

が、ナナが自分の感情をたやすくコントロールできる忍だということ

とを思い出し、ひとつ咳払いをして続ける。

「薬師カブトもそうだが……、やはり五影全員での尋問を行うのが適切だろうということになった。だから、次の五影会談は『戦犯』への尋問を兼ねて木ノ葉で行うことになる」

「尋問……ね。まあ、当然だよね」

我愛羅はナナの表情を注意深く見ていた。

その白く薄い肌の色の変化や、筋肉の動きの細部まで、いぶかしがられることも覚悟で凝視していた。

だが、ナナの涼しげな表情はいつさい変わらなかった。

「ナナ、サスケが追及されることになるが……平気か？」

我愛羅はあえてストレートに問うてみた。

ナナが感情を伏せるのなら、こちらがそれを出し惜しみしては先へ進めない気がしたのだ。

「だって」

ナナはその感情を受け取ってくれた。

「ビーさんを襲って、五影会談をめちゃくちゃにして、雷影様にお怪我を負わせて……いくらなんでも簡単に許されていいわけじゃないでしょう？」

はぐらかすことはなく、あくまでこちらの心配を取り払うように明るく言う。

「普通に考えたら、今、投獄されてないのが不思議なくらいだよね？」

漆黒の双眸で、まっすぐに視線を向けて来た。

「いや……」

我愛羅はそこに虚勢がないことを悟った。

だから、先ほど誰もが難しい顔で述べた意見をそっくり話した。

「マダラと、カグヤとの戦いにおける功績を考えると、今のサスケの状態によっては、無罪放免でもいいという雰囲気だった。オレ自身もそう考えている。だが……」

ナナは静かに耳を傾けていた。

「だが、オレたちがそう判断をしても他の多くの者たちがそうだとは限らない。『無限月読』の中に居たせいで、皆、カグヤとの戦いを知ら

ない。サスケがオレたちと共にマダラと戦ったところは見ているはずだが、それでもサスケは『暁』のメンバーとして戦争に加わった……、という印象が強いのが事実だ」  
ときおり、小さくうなずきながら。

「正直、風影としては、砂の中に『投獄』が妥当と考えている者がいることを把握している。だから……オレたちも慎重にならざるをえないんだ。サスケのためにもな」

我愛羅は、言葉を選びながら、決して簡単には進まないサスケへの制裁についての話を伝えた。

それでも、ナナの顔は陰らなかつた。本当に、「仕方がないこと」として受け入れているようだった。

本当に……？

「ナナ、お前の希望はないのか？」

言い終えて、我愛羅は単刀直入に尋ねた。

「お前の声なら……届くかもしれない」

そしてそう言ったのは、私的な感情だけではなかつた。

客観的に見回しても、ナナの意見を聞き入れる者は各里の上層部に少なくないだろう。

今回の『奇跡』を目の当たりした者は多いし、戦後まもなくのナナの働きも多くの者たちが知っている。

まさか……と、ここで我愛羅は内々に疑問をもった。

まさかナナは、そういう立場を構築するためにあれほど精力的に動いていたのだろうか。皆の信頼を得て、影響力を得る、いや、影響力を高めるために……？ 全てはサスケのためなのか……？

「それはもちろん……」

ナナはその答えが出ないうちに、あくまで軽い口調で言った。

「拷問とか、写輪眼や輪廻眼を奪われるとか……、傷つけられることになるんだったら、そうならないようにお願いするつもりだよ」

もともと決まっていたかのようには、残酷なこともすらすらと。

「でも、これでも一応客観的に考えてるつもりだから。みんなの気持ちを思うと、とことん取り調べを受けてから五影様たちに判断しても

らうのがいいと思う」

それはとても大人びた答えだった。

若干ひっかかるのは、ナナ自身「客観的」と言ったことが、わずかに「他人事」とも取れる気がしたことだ。

今までのことがある……。

ナナとサスケの間にあつた隔たりを目にしてきただけに、そう思わざるを得ないのだった。

が、その疑問をぶつけようかと迷っている間にナナが続けた。

「今のサスケは大丈夫だよ。ナルトがいるから！」

それはサスケというより、ナルトに対する信頼だった。

それならば我愛羅にも解せる。

だから、つられて笑った。

「ナナ、お前も……大丈夫そうだな」

口をつけて出たその言葉に、ナナは大きくなずいた。

「うん、私は元気だよ！」

まだ少し、不安はあつた。

ナナの言葉を鵜呑みにしては危険だという意識もある。だがそれでも、ナナの笑みには安心感を覚えた。

「我愛羅……」

しかし、その安堵のため息を吐き出すことは許されなかった。

「ナナ？」

「ありがとう、我愛羅」

ナナは無邪気な笑みを引っ込めて、あれから初めての「影」を瞳に浮かべた。

「いつも……ずっと……私を心配してくれて、本当にありがとう」

ナナがその目でそう言った時、「あの夜」から胸に住み着いた終わらない後悔が、密やかに揺らめいた。

## 月下美人

（空気の乾いた午後だった。）

ようやく慣れ始めた風影としての日常業務をこなしている最中、突然、里に侵入者が現れるという騒ぎが起こった。

里の防衛ラインをいともたやすく突破した、白袴にキツネの面を被った者。その正体は「木ノ葉のいずみナナ」だった。

それはあまりに滅茶苦茶な再会だった。

忍五大国のひとつで、砂漠という絶対防御を得た立地にある砂隠れの里に、たったひとりで侵入を果たすとは……。しかも誰一人として傷をつけずにである。

大勢の精鋭を相手にしたナナ自身も、軽いかすり傷程度だった。

……ナナと最後に会ったのは、サスケ奪還作戦の援護に就いて木ノ葉へ赴いた時だった。

サスケを追っていたナナが、死んだはずの姉とやらに襲われて……。あの死人のような姿は未だ鮮明に覚えていた。

ひと目で深い怨恨とわかる胸の傷は、〃人の恨み〃を肌で知っていた我愛羅にとつても、背筋が冷たくなるほど恐ろしいものだった。

命の危機……。だった。

シカマル、キバ、ネジ、リー……。共に戦った仲間たちの顔から、すっかり血の気が失せていた。

彼らの気持ち、我愛羅も理解した。

これが「心配」という感情。自分でない他の誰かのことを案じる感情なのだ……。と。

死なせたくない、と思った。

恩人だったから。自分を救ってくれた人だったから。

それだけじゃない。

ナナは人の優しさを教えてくれた。いや、思い出させてくれた。幼き頃に想像していた母や、夜叉丸のような愛情を……。

だから、任務が終了した後もナナの無事を確かめるまで木ノ葉に滞



在したのだ。

そしてその大切な命が助かったことを知って、心が震える感覚に陥った。

テマリとカンクローウが、珍しく素直に喜びの言葉を出していたのを横目に、我愛羅自身は言葉を見つけられなかった。

長い滞在を終えて木ノ葉を去る時に、見送りに来てくれたナナの姿は、再会までの三年間で忘れたことは無かった。

絶対安静を言い渡されているはずのナナが、身も心もボロボロに擦り切れたはずのナナが……、弱々しくも美しく微笑んでいた。

『我愛羅、カンクローウ、テマリ……ほんとうにありがとう』

あの笑みを思い起こすたび、我愛羅はナナの心の深部について考えた。

断じて親しい間柄とはいえない。だが、尾獣を通じての特別な交流はある。

そう……ナナには尾獣を操る特別な力があった。

そして、自分が倒したかったうちはサスケとナナは同じチームだった。

そのサスケを奪還することができなかった。それどころかナナは、姉の亡霊に絶望的なまでに打ちのめされた……。

ナナにとって何が一番辛いのか。

端的な事実を繋ぎ合わせて、何度も、何度も、考えた。そのことで、自分に足りなかった他者への感情が備わっていったのも事実だった。

だが結局、愛情、恩、哀別、怨嗟、力……それらがどういふものか知ることができただけで、ナナにとって何が一番辛いのかという答えには辿り着けなかった。

……そんな中での思わぬ再会だった。

直後に砂で『烈風』という異名をつけられたように、まさに烈しい風を巻き起こし……だが本人は『烈女』とは正反対の穏やかな様子であった。

いや……。

穏和というには、あまりに表現が呑気だ。

あれは……あの時のナナは、警戒と防備の二重の鎧をまとっているようだった。

それは何だったのか。

ひとつは、一尾を狙っている『暁』という組織に対しての警戒。もうひとつは、他里の領域に踏み込んでいる状態での当然の防備。

そして……己の心に触れるモノへの警戒と、己の心の防備……だった。

そうして幾日か経った夜。

ナナはぎこちなく話し始めた。

自分が和泉一族の人間であること。その血がもたらした特別な力のこと。それを持つがゆえに与えられた使命のこと。

姉との戦いのこと。

うちはイタチとの関係。

そして、サスケへの想い。

「私、逃げるために木ノ葉を出たんだ」

話し終え、ナナはそう自嘲した。

「みんなには『姉を倒すため』なんて言ったけど、本当は逃げるためだった」

強烈に『孤独』が香った。

それは嗅ぎ慣れた香りだった。

だからナナが『逃げた』訳も、今『ここ』でそれを語った訳も、わかるような気がした。

「ナナ、『ここ』ではお前はひとりじゃない」

だから、そんなセリフがおのずと流れ出た。

会話が噛み合っていないことは承知だった。

だが、ただだだも打ち壊してやりたかった。背負いきれないものに潰されることもなく、三年間たったひとりで過ごしてきたナナに付き纏う『孤独』の影……それだけでも打ち壊してやりたかった。

今、この瞬間はヒトリじゃないと、そういう時を与えたかった。

「私、アナタに会えてよかった」

ナナはそう応えた。

「〃〃〃〃〃〃は……なんだか居心地がいい」と。

言葉は出なかった。

本当にナナの『孤独』を打ち壊せたという自惚れはなかった。が、胸が詰まったのだ。

窓の外を見上げるナナの横顔が、あまりに美しく壊れそうだったから。

「砂漠の月は、綺麗だね……」

月など見られなかった。ただナナを見ていた。

そして、こみ上げて来た感情が自然と言葉になった、

だが……それすら口にはできなかった。

「我愛羅……、私、アナタを護りたい……」

ナナが先にそれを言った。

そうしてこちらを見た。その目に浮かぶ光は、儂くも強かった。

「オレも護りたいんだ、お前を」

立場が逆だと笑うナナに、ちゃんと言葉を贈った。

「オレはお前の心も護りたいんだ、ナナ」

壊れそうな心を。それでも負けない心を。慈愛に満ちた穢れのないその心を。

「だったら……今、私はアナタに護られてると思う……」

くれたのは、心そのものだった。何も纏わず、素直な心を返してくれた。

胸が熱くなった。何か溢れ出しそうに……。

だが決して、それを今溢れさせてはいけないような気がして……、そつと蓋を落とした。

『静』でいることが、ナナにとっては良かった。

変幻自在の砂のごとく……整然と広がる砂漠のごとく……。  
きつとナナは安心したのだ。

凍結させた空気をすっかり融解させ、まどろんだ。月光と蠟燭の灯火に溶けてしまいそうな細い身体を、こちらに預けて来た。

触れ合う肩から伝わるもの。それは等しくナナにも伝わっている。

今、ナナが最も必要とするものだ……。そう思った。そして自分も……。

この夜のことは、一生忘れないだろうと思った。一粒も残さず、心に留め置かれるだろうと。

月の明るさ、灯火の色、クッションの柔らかさ、絨毯の手触り、ナナの寝顔、そして朝日の眩しき。情景と触感と、己の感情。

全てを、死ぬまで忘れないだろうとわかっている。

ナナの心を癒せた……。そんなものではない。与えただけではない夜だった。

だからこそ、幸福で満たされただけではなかった。温もりの中に少しの悲しみがあつたのも事実。

その中で二人の心を通わせ合つたことが、何より深い思い出となつて刻まれている。

そんな危うくも幸福な日々が長く続くはずもなく……。その後、結局自分は暁に捕らわれることとなつた。

里と、それからナナを護ることができたのだから悔いは無かつた。里の行く末は心配だったが、風影はなにも自分じゃなくても良いと思つた。

ただひとつ、ナナの心に傷を負わせてしまったことが哀しかった。だが、チヨバアのおかげで、再びこの世界に舞い戻ることができた。ナナも喜んでくれると思つた。

だが……。ナナは『烈風』となつて現れた日よりも、もつと擦り切れた表情をしていた。

自分が死の淵にあつたとき、ナナの身に何があつたかは知らない。どうしてそんなにも極限まで追い詰められたような顔をしているのかも、何故、それを隠すすべきさえも失ってしまったのかもわからなかつた。

ナナの周りには木ノ葉の仲間が集つていた。自分を救いに来てくれたナルトたちだった。

彼らとナナとの再会は明るいもののはず……だった。

が、そこには目に見えない「隔たり」が確かに存在していた。

それを、自分は見て見ぬふりをした。

いや……。それを知っていて、ナナの手を離した。ナナの望みを

知っていて、叶えることを拒否した。

ただ一方的にナナにもらったものを並べて見せて、『ちゃんと護ってもらった』と告げた。

勝手な想いを、苦しむナナに押し付けた。

身を斬られるような思いだった。

死と直面した時よりも、もっと……もっと辛い……。

「私はただ、アナタにすぎただけ……!!」

ナルトたちとはなく、自分の目の前に居るナナが、そう言った。

「だから……そんなふうに言わないでっ……」

逃げ出したい、どこへも行けない、「ここ」にいたい、消えてしまいたい……。そんなふうになられたナナの心が見えた。

だから、反対に自身の心は静かだった。

強がりではない。胸を裂くような強烈な痛みを自覚しながらも、いたって冷静でいられた。

熱くもなく、強くなく、そつとナナを抱きしめることができた。

「すぎることは、傷つけることじゃない……」

だからこそ残酷に、ただナナに必要な言葉だけを言うことができた。

「誰かにすぎることを、恐れるな」

後悔、痛み、混乱……。背負いきれないそれらに押し潰されそうになっっているナナに、言うべき言葉だけを。

腕の中のナナは、消え入りそうな声でつぶやいた。

「我愛羅……私……ここに……いてもいい……?」

その震えた声を耳にして、やはり衝動がなかったと言える嘘になる。

砕けてしまった心を手離したくはなかった。身体を離れた瞬間に、床に散らばって溶けてしまいそうで怖かった。このままずっと、もっ

と強く抱きしめていたかった。

だが、自分がどうすればよいのかの答えは出ていた。

どんなにナナを支えたくても、頼られたくても、どれほどナナを愛しても……、この砂の籠には捕らえられない。

ナナがどうしたいのかも、ナナがどう生きればよいのかも、よくわかっていた。

それほどまでに……、ナナはもう、心から大切な存在になっていたから。

だから、

「オレは、ナナとここで過ごせて、ナナを愛することができてよかったと思っっている」

と、愚かなほど冷静に言った。

「これからお前が望むなら、ここで共に生きよう」

陳腐な条件を。

「だが……、ちゃんと別れを告げて来い。『木ノ葉の忍』に。自分自身も含めて……」

ナナが進むべき道を。

「それができたら、ここにきてくれ、ナナ」

少しの祈りを密かに込めて。

「ナナ。お前が何を選んで、オレはずっとお前を『護る』」

そして、本当の約束を……。

ナナは失望を隠しもしなかった。青ざめた頬に冷たい雫が流れた。

衝動はいっそう強くなった。が、ナナの答えを奪うことはできなかった。

だから、苦し紛れに涙を拭いて、誓いのつもりでナナの指先に口づけた。

そんなやり方が格好良かったとは思わない。むしろ名残惜しさを隠しもできず、哀れで愚かだったと思う。

だが、ナナがこれ以上後悔を重ねないように……、自分がそうさせるわけにはいかないから……、立ち尽くすナナを置き去りにして部屋を出た。

ドアは己の砂が閉めた。わざわざそうしなければならぬほど、今にも取って返してナナを抱きしめたかった。

後悔していない訳じゃなかった。ナナに相応しい道を選べた自分を誇りに思うことで、情けない自分を押し殺した。

身勝手だったと思う。冷たい男だと思う。

何度も思った。もう一度あの瞬間に戻れるのなら、開口一番『ずっとここにいろ』と言うのだ……と。

だが、時を戻すことなどできるはずもなく。

それでも無様に後悔だけして生きて来たわけじゃないのは、やはり、ナナの本当の望みを知っていたからで……。それが知ったかぶりだとか強がりだとかではなく、真実だと自信を持てたからで……。

つまりはそれほど、ナナのことをよく知ることができたという証だった。

その証こそが……。今、目の前に咲く和らかな笑みだと、そう思えた。

## 仙人掌

同じ記憶が存在しているのだろうか……。ナナは伏し目がちにほほ笑んだ。

「すぐがることは傷つけることじゃないって、我愛羅は言ってくれたよね」

そして、この先何があっても決して消えることのない後悔を生んだ夜のことをつぶやいた。

「あの時、私はアナタにすがって……。何もかもから逃げたかった」

その声は、まるで窓の外の闇に溶けるようだった。

聞くつもりは無かったのに、ナナのほうからあの時に遭ったことを語ってくれた。自分が暁に捕らわれた後の出来事を。

それはまた、冷たく、優しい、ナナだけの秘密だった。

ボロボロのナナの前に現れたうちはイタチ。彼のもつで「見た」という自分の死。全てに失望し、遂に……。イタチと一緒に生きたいと願ったこと。告げられた彼の想い。そして、交わした約束。

『私……。ここに……。いてもいい……。？』

あの時、そう言わざるを得なかったナナの境遇が、本人の口から語られた。洗いざらい、全部……。

それは、自分が生き返ったあの時に、喜んでくれているナルトや里の者たちと不自然な距離を置いていたことの「答え」だった。

ナナは驚きと戸惑いを……。いや、困惑の表情を浮かべていた。

何故ならナナは、死んだ自分を送って、それまでの自身にけじめをつけるはずだった。そして翌朝には、うちはイタチの元へ旅立とうと心に決めていたのだ。

それが……。送る。はずの人間がチヨバアの術で蘇ってしまった。そして木ノ葉の仲間たちと再会してしまった。

ナナは、やっと選り取った道をあの時にまた見失ってしまったのだ。

だからナナは混乱していた。あからさまに、木ノ葉の連中を避けて



いた。彼らとの適切な距離感を見失い、接し方に戸惑っていた。だから、あの台詞を言ったのだ。

『私……ここに……いてもいい……？』

あのナナの瞳に浮かんだ濃い闇の理由を悟って、今思う。

やはり、ナナを砂の中に閉じ込めて、護ろうとしなかったことを後悔している。

だが、あの選択が間違いだとも思わない。

別れの後のことも、ナナは話した。

屋敷を飛び出して辿り着いた庭で、日向ネジに会った。彼は『自分で選べ』と言ったそうだ。

彼らしい……と、我愛羅も思う。

が、その時のナナはさらに輪をかけて取り乱したという。

もうわからない……選べない……と。

そこでネジは、ごく当たり前のことを言った。

『迷う必要はない……。お前の心の“一番奥”を、見つめればいいだけだ……』

あの全てを見据えた白い瞳を、我愛羅も思い出していた。

「私は……」

ナナは彼を悼むように目を伏せて、その時導き出した答えを口にした。

「サスケに逢いたかった……」

我愛羅はほっと息をついた。

絶望の淵で見出したナナのその答えに、自然と満足できたのだ。

「お前の一番奥にあったのは、やはりソレだったんだな」

納得もできた。

自分がそれに気づいていたことが、少しだけ誇らしかった。

そしてやはり、あの選択が間違っていなかったことが嬉しかった。

「サスケに逢いたかった……。何もかもを捨てて、逢いに行きたかった……」

ナナはゆっくりと、だが淀みなく、あの夜の痛みを明かした。

「でも、やっぱりできなかつた」

我愛羅自身も、一睡もできなかつたあの夜。夜が明けたら、もうナナの姿が無くなつて居ることを予感していた夜。

「なぜ、できなかつたんだ？」

あの時の、清々しさと紙一重の空虚を思い出しながら問う。

ナナは初めて、口をつぐんだ。

だが、我愛羅は沈黙に耐えて待った。ナナが必ず、その答えを吐き出すことを知っていた。

「だって、私は……」

窓ガラスが耳障りな音を立てた時、ナナは再び口を開く。

「どうすれば良いのかわかっているくせに、全部が怖かつたから」

案外、しつかりとした声だった。

「木ノ葉の忍として、姉を倒すこと。ナルトの側に居ること。それが、私が進むべき道だつてわかつた。我愛羅も、わかつてくれたんでしよう？」

そう問われても、うなづくことなどできなかつた。

それこそが、ナナを突き放した理由であり、言い訳でもあつたから。「でも……木ノ葉に帰るのは辛かつた。いろんな秘密を抱えたまま、優しいみんなと過ごすのが怖かつた。サスケを……連れ戻そうとするナルトやサクラちゃんたちと……関わるのが怖かつた」

だから、ゆつくりと、だがしつかりとした口調で話すナナの口元をみつめた。

「アナタの側に居ることも……『逃げ道』だったから、後できつと苦しくなるつてわかつた。アナタは優しくて強かつたけど、アナタにすがつたら私は、もう戦えなくなつちやうと思つた」

あれほど弱々しかつたナナの強い芯の部分が、言い訳のように流れ出る。

それはとんだ皮肉だった。

「サスケのところへ行くのは……一番望んでいても、一番怖かつた」

ナナの目を見た。

視線が、まっすぐ律儀にこちらへ向いていた。

「その結果、木ノ葉の忍を辞めることになつて、みんなを裏切つちやう

ことも。使命とか、姉のこととか、全てを放り出すことも、全部が怖かった」

その底知れぬ恐怖感乗り越えた、強い光がそこに在った。

「何より、サスケが受け入れてくれないと思つて……それが、本当に怖かった」

その光が、美しく揺れる。

ナナは照れたように笑った。

「だって、私はイタチのことをサスケに黙っていた負い目をずっと抱えていたし、サスケが里を出るのを止めもしなかった。イタチを恨むサスケを憎んだし、サスケが殺したいイタチのことが大切だった。ずっと、それで……ちゃんとサスケに向き合えなかった」

痛みを全部さらけ出し、笑った。

「ナナ……」

あの時、無残に血を垂れ流していたその傷は、もうカサブタになつたのか？

その問いは、声にはならなかった。

「だから……結局、イタチと一緒に行くのが、私にとって一番楽な道だった」

ナナの全てを知る者。ナナの大切な者。

彼と一緒になら、ナナは全てを捨てられたのだ。使命も、戦いも、仲間も……。

彼と一緒になら、捨てた苦しみを味わわなくてすむと知っていたのだ。

うちはイタチだけが……あの、傷つき果てたナナを包み込むことができたのだ……。

だがナナは、あの夜、その選択を捨てた。一番楽な道を……ナナは歩こうとはしなかった。

その理由は、ナナが言わずとも我愛羅にはわかっていた。

「一番楽な道を捨てられれば、一番辛い道を歩けると思つたの」

滅茶苦茶な理由だ。あまりに極端で、軽率な結論にも聞こえる。

だがやはり、ナナらしい。

「わかる？」

「ああ、わかる」

一番楽な道を捨てる痛み……それを乗り越えられたのなら、一番辛い道の痛みを受け入れられる。

そんな、屁理屈のような理由……。

が、ナナはそれを実行した。

どれだけ泣いたのか……翌朝、皆の前に現れたナナの目は真っ赤だった。

その姿はまるで、踏み倒されても、懸命に咲き続けようとする、名もなき花のようだった……。

それを見て、前夜のことを密かに後悔していた。

もし、あのままナナを抱きしめていたら。ナナの問いかけに、素直にうなずいていたら。

いや。もし、暁の襲撃を返り討ちにしていたのなら……。ナナが傷ついて、うちはイタチに会うことはなかった。

だとしたら……。

「もし……」

ナナは、心を読み取ったかのようにつぶやいた。

「あの時、暁を倒せていたら……」

その言葉は、やけにゆつくりと耳に届く。

「私は、あのままアナタの側に居させてもらったかもしれない……」  
驚かなかった自分に、心なしか驚いた。

「砂隠れの里に行ったときは、ただ姉を倒すっていう意志だけで……サスケのことは考えなくなかった。だから、サスケを連れ戻そうとする木ノ葉のみんなと向き合うのが怖かった。だから、まっすぐに木ノ葉へ帰ろうとしなかった。そんな自分が、臆病で卑怯で、嫌だった……」

ナナは強い眼差しをくれた。

「だから……アナタが話を聞いてくれて、側に居てくれて、私が護るはずなのに護ってくれて……嬉しかったの」

必死で、想いを伝えようとしてくれているのがわかった。

「アナタはすごく、あたたかかった……うまく言えないんだけど、あたたかかったの……」

砂漠の月に照らされた儂い笑みを、鮮明に思い出す。

青白い頬も、昏い目も……。

「アナタの側は、とても心地が良かったから……優しいアナタに甘えて、すがって……全部から逃げたかった……」

そうだ……。

きつと、この「答え」がわかっていたからこそ、だ。

だからこそあの夜、ナナの手を放すことができたのだ。

「だからもし、アナタと離れることがなかったら、きつと……」

ナナは、たとえ一刻だったとしてもこの腕の中で確かに安息の時を過ごしていた。

だから、自分がナナを癒せる存在であることを確信し、それで満足だった。

そして結局、逃げられないナナの弱さと強さを愛しているのだと、実感できた。

「だけど……アナタが最後に突き放してくれたから、私はもう一度戦えた」

あの選択に、ナナは勲章をくれた。

「姉とちゃんと戦うことができたし、もう一度木ノ葉の忍になれた。

それに……何より、『イタチとサスケの戦いを止める』っていう、一番持たなくちゃいけなかった意志がやっと持てたの」

それはこの上なく、光り輝いている勲章だ。

「我愛羅……」

ナナは少し言葉を詰まらせ……そして満開の笑みで言った。

「私を導いてくれて、ありがとう」

「導き」という名の勲章が、胸で光る。

少し重く、冷たく……だが、誇らしかった。

「オレはお前を愛していた」

唐突に、その奥底にしまい込んでいたはずの言葉がこぼれ出た。

だがやはり、そんな自分に驚くことはなかった。

「我愛羅……」

ナナは唇を震わせた。

「お前を愛せて良かったと思っっている」

テーブルの上にあるナナの手を、そつと握る。

冷えた手の、温度を変えぬくらいの強さで。

「お前はオレに『すがった』というが、オレもお前に大切なものをもらった」

ナナは視線を合わせたまま、その手を柔く握り返した。

「オレはかつて、お前やお前の仲間たちを本気で殺そうとした。敵”  
”だったはずだ。にもかかわらず、お前はオレの命を助けてくれた。 ”  
無償の愛情” というものを教えてくれた」

そして微笑した。

この話は、砂漠の夜に伝えていた。

あの時の穏やかな時間をナナも思い出したのだと思った。

「それに、誰かを愛するという気持ちも、お前がオレに教えてくれたんだ」

照れくさい台詞だが、躊躇することはなかった。

全てが本当のことだった。

「だから、ナナ……」

そして今、伝えなければならぬ本当の想いがある。

「これからも、オレはお前の友として在り続ける」

カタチは変わっても……ナナとの距離は同じだと思ふ。

これからも、ずっと。

この想いはきつと、永遠に枯れることはないのだ。

「うんー！」

ナナの頬に赤みがさした。

「ずっと……ずっと、大切だからね！」

それは今まで見たどの表情よりも、綺麗だった。

胸がかすかに痛んだ。

が、それを喜びで覆い隠す。

ナナはこれから、未来を生きる。もう使命も秘密の過去も無い。初

めて未来を見つめて、自分で選び取った道を歩いていくのだ。

その細い背に、自由の羽を……。

それを、ナナの「一番近く」で見守ることができたことが、至高の喜びだった。

そして自分も。新たな道を歩もう。

あの時交わした言葉も、ぬくもりも……互いに本当の思いだった。それをこうして確かめることができたから、この先へ進むことができる。

「これからは、もっと笑って生きろ、ナナ」

「うん、そうする！」

ため息のように零した願いを、ナナはしっかりと受け止めてくれた。

恋……というには歪だった。

愛……というには足りなかった。

だが、ナナにとって自分が特別な存在であったこと……それはとても幸せだった。

「我愛羅、ありがとう」

そつと指先に力をこめるナナに、ありったけの感謝を……。

「オレのほうこそ……」

ありがとう……ナナ……。

## 倒景

晴天の早朝。

なんとなく早く目を覚ましてしまったシカマルは、あくびまじりに里の墓地へと入って行った。

手ぶらではあるが、里への帰還後は毎日、時間を見つけてここへ来ていた。

ずいぶんと……顔を出す墓石が増えてしまった。あの戦争での犠牲者も、その前の戦いも……。父も、師も、仲間も……冷たい石になってしまった。

「シカマル君？」

そのひとつ、日向ネジの墓石の前には、すでにヒナタが居た。

どうやら彼女も頻繁にここへ通っているらしい。

「おう」

適当な挨拶を交わす。

今さら感傷に浸るわけではないので、「日向ネジ」の名をただ見つめた。

くつきりと彫り込まれた、真新しい文字。その手前には、まだ朝露をつけた可憐な白い花が揺れていた。

「シカマル君、このお花……」

ヒナタはそれを指して、ちらちらとこちらを見た。

「花がどうした？」

「こんなに朝早く、誰が来てくれたんだろうって……」

彼女が供えたのではないようだった。

ヒナタが知らないということは、身内ではないのだろうか……？

他にネジと親しかった者といえば、チームメイトのテンテンとリーが思い当る。キバやチョウジも、あのサスケ奪還任務依頼は友として接していた。

が、早朝に摘みたての花を供えるような者は誰も思い浮かばなかった。



シカマルはもう一度よく、その花を見た。

「いのちゃんのお店には売っていない花だよね？」

ヒナタが先回りをして言う。

何かもの言いたげだったのはそのためか……。

確かに、営業を再開したいのの家の花屋には並んでいなかったような気もした。

「私……ネジ兄さんのお墓参りに来てくれるような人、あまりわからなくて……」

ヒナタは目を伏せた。

あー……とシカマルは呟く。

「色んなヤツとつるむような感じじゃなかったからな」

人当たりが良くなったのは最近で、それでも、好んで交友関係を広げるような性格ではなかった。

「オレらの知らない上忍とかじゃねーのか？」

彼は同期の中で唯一の上忍だった。だから、彼にしかない繋がりがあつたのだろうと予測する。

だが決して、それが「特別」な繋がりだとは思えなかった。

こんな朝っぱらから……花屋に売っていないような花を供えるような特別な人が存在するとは、ネジには悪いが想像がつかなかったのだ。

ネジが「特別な想い」を抱いていた人物は知っているのだが……。

「きつと、そうだね」

ヒナタはうなずいた。

が、シカマルはもう一度、花を見た。今度はかがんで、ちゃんと間近で……。

「シカマル君？」

「いや……」

その花卉の朝露に指で触れた時、ふと笑いが込みあげた。

「これはオレらが良く知ってるヤツが供えた花だ」

そして、断言できた。

「え？」

ヒナタは白い目をパチクリとする。

「戻って来て、ネジも喜んでるんじゃないかねーか？」

予定より一日遅れの戻りだった。

会談の話し合いが難航することは予測していたから心配はしなかったが、それでも、「彼女」が無事に帰ったことに安堵した。

いや……。

多忙な日々の中でも、ネジの墓に供える花を摘んで来た「彼女」の心に……安堵した。

朝食後すぐに火影邸へ呼び出されたので、シカマルはまたもやあくびまじりに通りを歩いていた。

すると、向こうからいのとサクラが走って来る。

どうやら自分を見つけて駆けて来るようだ。

少し嫌な予感がしたが、あえてポケットに手を突っ込んだまま立ち止まる。

「シカマル！」

「ちようど良かった!!」

ただでさえセットだと騒々しくなる二人が、今朝はさらに声のトーンを上げている。

「なんだよ、朝っぱらから」

わざとのんびり言うのと、いのは唾を飛ばす勢いで言った。

「今夜8時、第二演習場に集合よ!!」

それは突拍子もないことに聞こえた。

時間、場所……今さらそんな時間に演習をするわけがないし、任務に向かうには里の出入り口から遠すぎる。

その理由を聞く前に、今度はサクラがなかば怒ったように言った。

「ぜったいに来てね！」

きつとここで「理由」を聞いて欲しいのだろう。

自分の話に興味を持って欲しいのが、女という生き物だ。

「そこで何があんだよ」

だから手っ取り早く結論へ辿り着くために、敢えてお約束の展開に

した。

と……。

「ナナが、話があるってー!」

二人が同時に言った。

急に、胃のあたりがキュウとすぼまった気がした。

「ナナが?」

「さつき五影会談から帰って来たのよ!」

「いや、それは知ってるが……」

「今夜、『みんなに話したいこと』があるから、どこかに集まれるかって!」

「話したいこと……?」

「大戦の時の話よ……」

また、だ。

胃が締め付けられる。

シカマルの脳裏には、まだ海に沈んで消えたナナの姿が鮮明に焼き付いている。腕には、脈拍と体温を失っていく肌の感触が残っている。

あの“偽物”のナナ……。

そして、青い写輪眼で青白い星に浮かび、青い光で尾獣を操った姿も。サスケに胸を貫かれた光景も。天に昇る光も。

全てをはつきりと思い出せる。

なにより、「自分を殺せ」と叫ぶナナの……あの血走った眼を。

その全てを、ナナは語るといえるのか?

いや、どれかひとつでも“そうだった理由”を自分たちに話してくれるのか?

「シカマル!」

不覚にも立ち尽くしていたのだろう、いのが肩を揺さぶった。

「あ、ああ……わかった」

幼馴染の目は、期待と不安に揺れる心を見透かしてくる。

常に側にいた彼女には、この不安が……いや、恐怖が理解できるのだろうか。

「とにかく、同期のメンバーに声かけてるから」

「シカマルも誰かに会ったら伝えておいて！」

二人は慌ただしく来た道に戻って行った。

その姿が横道に逸れて見えなくなると、シカマルは大きいため息をついた。

収縮した胃が、無理に拡張するような痛みを感じる。

(話、聞いたところで……)

ナナの語ることを、理解できるかどうか自信が無かった。ナナの身に起きていた事柄を聞かされて、受け止めきれかわからなかった。想像はしていた。

ナナの行動と言動から、ナナが何を背負っていたのか……考えてみないはずはなかった。

だが、やつとナナ本人の口から「答え」が告げられると知って、今さら怖気づいていた。

シカマルの中で象られた想像が、あまりに残酷だったからだ。

「八時か……」

呟いて、再び火影の屋敷へと歩き出す。

指定の時間までに、里へ戻ったというナナに会える気はしなかった。

その時間、その場所に到着するまで、あえて聞かされることの予測は立てないようにしていた。

そんなもの、考えるだけ無駄だった。

普段ならこれから起こることの予測をし、前もって対策をたてるのが自分の性質であった。動揺をできるだけ回避し、効率よく物事を進め、最終的に勝利を得るためだ。

だが、今回ばかりは勝ちのパターンをなぞることができないほど臆病になっていた。

だから、同じように神妙な顔をした仲間たちを見た時は少し安堵し

た。

知らされることは、皆、同じ。受け止める重さも、きつと同じだろう。

だから……つくづく仲間の存在のありがたみを噛みしめながら、のんびりと空を眺めた。

星は無かった。月は朧に、雲間に見え隠れしている。

誰かが、用意した行燈に灯をともした。

その時。

「みんな、集まってくれてありがとう！」

里に帰って来たという確信があったのにもかかわらず、今日一日、その姿を見せなかったナナが現れた。

「ナナ！」

誰ともなく、その名を呼ぶ。

中には、本当に久方ぶりに彼女の姿を見た者がいたようだった。

「ごめんね、みんな。こんな時間に」

ひととおり、挨拶と互いの体調を確認し合った後、ナナはすまなそうに言った。

「何言ってるのよ！ アンタの話しなら、みんな何があっても駆けつけるに決まってるでしょー！」

いのがそう言った。

最後に、「ずっとナナの話を聞きたかった」という台詞を呑み込んだのを、シカマルは知っていた。

「そうよ！ それにアンタのほうが忙しいんだから、私たちに気を使うことないわよ」

続けてサクラが言う。

笑って返すナナの顔色は、頼りない灯りでは良くわからなかった。だが、少なくとも疲れている様子ではなかった。

もちろん、そう見せていないだけかもしれないが、表情は明るいように思えた。

「じゃあまず……戦争の時のことから話すね。私が、何をしてたのか」  
ナナは皆を改めて見回して、話しを始めた。

決して面白くもなく、結末だけは知っている物語を……。

## 燦爛（さんらん）

ナルトの監視と保護。それが、忍界が戦争に突入する時点で火影よりナナに下された命令だった。そしてナナ自身を護るための措置でもあった。

それはシカマルも知っていた。旅立ちの前夜、ナナに会っていたのは自分だった。

あの時のナナは、負った傷が深すぎて、まるでその輪郭までもを失いそうだった。

うちはイタチ、サスケ、ナルト、ダンゾウ、里の重役たち……色々な人間との関わりがナナを苦しめ、よってたかつて絶望の淵に突き落としていたようだった。

そんなナナの最後の願いを、あの夜、はっきりと聞いた。

『お前は……サスケに殺されるつもりか？』

『それが……私の最後の願い……』

あの、星の瞬きのように澄んで儂いナナを……胸の痛みを押し殺して見送った。

確かに予感した“永遠の別れ”。

もう未来を望めなくなったナナの、せめて“その時”までは生きようとしてくれることだけを願っていた。

だが……ナナはたったひとり、戦渦のただ中に現れた。見慣れた木ノ葉の額当てを、しっかりと絞めて。

戦うことを辞めたはずのナナが、戦場で戦った。

そして……幻の死。

今でもまだ、思い出すと気が狂いそうになるほどの記憶。喉から手が出るほどに答えを知りたかった「あのナナ」の正体。

それが今やつと、ナナの口から語られた……。

「じゃあ、ええと……。ボクたちのところに現れたナナは『影分身』みたいなもので、『本体』はナルトのところに行ったんだね？」

ナナが言った「ホクト」という存在の意味を理解しきれなかったのか、チヨウジはあのナナを「影分身」と表現した。

「ホクトは、私が産まれた時に現れたつていう『三尾の白ギツネ』なの」

「さ、三尾？」

「ギツネ？」

ナナは至極難解で神秘的な説明をした。

「あの時にも言ったけど、私は和泉の当主と奥方の間に『和泉成葉の子供』を転生させて産まれたの。だからこれは私が勝手に思ったことなんだけど……、きつとホクトは、当主と奥方の間に『もともと授かった子供』だと思うの」

皆の反応を面白がるかのように、ナナは笑みを浮かべていた。

「だからね、ホクトと私の『存在』は同じでも、『魂』が違うと思うんだ。だから、ホクトは『もうひとりの私』なの」

シカマルも、この説明に対しては曖昧な解釈をするにとどまった。

ナナはあくまで「ホクト」を「もうひとりの自分」と主張するが、あの時のナナの自我がまぎれもなくナナ本人だった以上、それを理解することは困難だった。

「服を取り換えてたから、ややこしくなっちゃったと思うんだけど。戦場へ行くのに一族の家紋が入った白袴姿じゃ大変だもんね」

何より、そう茶目っ気さえ出して言うナナ自身も、「そんな気がする」という程度という印象だった。

「だからあの時、『私』は面の男に殺されたけど……亡くなったのは『ホクトの命』だった」

ぽかんと突っ立つ自分たちを見回し、最後にシカマルに視線を合わせ、ナナはそう言った。

ほんの少し、腕に残るナナの冷たさが薄れた気がした。

ナナはそれを確かめたかのように、そのまま話を続けた。

「本体」の方のナナも、その頃にはナルトとビーとともに戦場に向かっていたということだった。ナルトのヤツがそうそうおとなしくしているとは思えなかったから、この一連のナナの動きは理解ができ



た。

戦争のことを察知して、頭に血が上った状態で監禁場所を抜け出すナルトと、その一歩後ろについて行くナナが想像できて、少し安心した。

が、その気持ちも束の間だった。

途中、ナナは穢土転生で黄泉がえったうちはイタチと遭遇したのだという。

ここは誰からもちゃんと知らされていなかったから、大いに緊張が昂った。自分もアスマと「再会」をさせられたから、ナナの気持ちの半分くらいは理解できるつもりだった。

だが、ナナは口調も表情も変えずに、穏やかな調子のまま語った。

イタチと暁の男……彼ら二人とはナルトとビーが戦って、ナナはイタチの魂を送り返すための術を準備していたという。

聞き流せば普通のことだが、その時のナナの心境を想像すると息が苦しかった。

死に別れたイタチと再会して、再び自分の手で別れをもたらさなければならぬ苦痛。

それでも、それが務めと自分を保って、ナナは懸命に術を施そうとしたのだろう。

だが、イタチは己の力で穢土転生の術者の支配から脱したのだという。

死者の身体はそのままに、自分の意志で動くことを可能にしたという才覚は、さすがは「うちは」という印象を持たざるを得なかった。

ともかくそれで、ナナがイタチと戦わずとも良くなったことに、再び安堵した。

「それからイタチは、穢土転生を止めるために、術者のところへ向かったの」

そしてまた、未知の話は闇へと向かう。

「私は……火影様の命令を破って、イタチについて行った」

その時、ナルトとナナの間で何が話されたのかは考えずともわかった。

だが、そう決意したナナの心境を思うと、また胸が詰まるのだ。

従順なナナが火影の勅命を破ったことに驚くわけではない。ナナは「サスケに殺されること」だけを願っていたはずだった。だからこそ、戦場には『ホクト』が現れた。

そんなナナが、最後の願いさえ捨ててしまうほどの強烈な「想い」がそこにあつたはずだ。

しかし……。

「私はもう、イタチを独りで戦わせたくなかったから」

ナナはそれらを、馬鹿正直にさらけ出す。

「イタチが穢土転生を止めて、イタチ自身が消えちやうつてことになっても、私はそれをちゃんと見届けたかったの」

誰も、何も言わなかった。

実際、この中で自分よりもナナとイタチの関係を認識している者はいないだろう。

チョウジとキバとリーは、受け止めきれないような表情をしている。女子たちは、何かを察した様に顔を切なげに曇らせる。サイとシノの表情はわからなかった。

「ごめん」

彼らの顔を見て、ナナは笑った。

「イタチのことも、ちゃんと話してなかったね」

抱えてきた秘密を、本当にもう全て吐き出すつもりのようなようだった。ナナは改めて口にした。

幼少の頃、一族どうしの思惑でうちはイタチと許嫁の間柄になったこと。うちはと和泉は、婚姻によって深く結び付くことで、木ノ葉の上層部に対抗しようと考えていたこと……。

たとえそういうふうに引き合わされても、当人同士は心を許し合ったこと。イタチが秘かに、和泉の里まで会いに来てくれて……それが修業漬けで孤独な毎日において唯一嬉しかったこと。

そして、ナナにとってイタチだけが大切な存在だったこと……。

包み隠さず明かされた二人の事情は、清廉なものだった。

「二族殺しの抜け忍」というイタチに張られたレットルを、綺麗に剥

がしてしまうほどの想いと想い出が、ナナの可憐な口から語られたのだ。

「ずっと、黙っててごめんね」

ナナには重大な秘密が多すぎた。

それは決してナナ自身の責任だけではなく、故郷の里や木ノ葉の意図も絡み合っているはずなのだ。何より、それをサスケに言えなかったナナの心の重みは計り知れない……。

が……ナナはそんな自分に半ば苦笑して、先を続けた。

「それで、ナルトと別れて、イタチと二人で術者のところへ向かったんだけど」

ナナはさりげなく、「その術者ってカブトだったんだけど」と挟んでからこう言った。

「途中でサスケに会ったの」

ナナとイタチの言葉で表すことができないような関係と、その秘密を抱えたままサスケの側に居たナナの心境にまだ想いを馳せていたところ、さらなる衝撃が訪れた。

皆が一斉に息を呑んだのか、空気の揺れを肌で感じた。

戦争が終わってから、サスケとナナが途中で行動を共にしていたことをなんとなく知らされていたが、そんなタイミングで遭遇していたなど、想像もしなかった。

「サスケはイタチと話したがって、でも、イタチは急いで穢土転生を止めなきゃって言って……また兄弟げんかを始めたから、私が二人を足止めしたの」

そんな想像しがたい状況のことを、ナナは軽い口調で話す。

「私が穢土転生を止めるから、二人でちゃんと話し合って……ってね」  
それに対し、リアクションをとれるものなど自分を含めて誰一人居なかった。

「結局、私がカブトと戦ってる最中に、二人とも私の術を破って来ちゃったんだけど」

ナナは固まる自分たちにはお構いなしに、晴れやかに笑った。

「初めて二人で一緒に戦う姿を見られたのは、すごく嬉しかったんだ」

とても幼げな笑みが燈火に映えた。

その光景が本当に……ナナにとって幸せなものだったのだろう。たとえ、ほんの束の間だったとしても。

「最後はイタチがカブトに術をかけて穢土転生を止めたけど……私、本当はもう少しこのままでいたいって思っちゃった」

少し申し訳なきように言うナナを、誰が責められよう……。

「でも、そんなことが許されるはずなくて……。イタチはまた、消えちゃった。それを、サスケと二人で見送ったの」

その時の光景を想像して、うら悲しさにゾツとして……。同時にある光景を思い出した。

それは自分が見たものではなく、感じたものだった。

腕の中で、しがみついて慟哭するナナ……だ。

自分ではない、サスケが見た光景だ。

そしてそのナナを、哀れにも愛おしく抱きしめるサスケの深すぎる想い……。光となつて戦場に降り注いだサスケの想いが、胸に蘇っていた。

「私はまた思いっきり泣いて、ワケがわからなくなって……。それでも、考えることを止めにしたの。サスケが、もう考えなくていいって言ったから」

ナナは肩をすくめた。

自嘲しているようだったが、それには同調できなかつた。あのサスケが受け止めたナナの哀絶を知ってしまったから、皆、一樣にうつむいた。

ナナはそれでも、流暢に語り続けた。

そこでサスケの仲間だった水月と重吾が登場したこと。彼らは歴代火影の口寄せの術式を手に入れていて、それを見たサスケが大蛇丸を復活させたこと。サスケが歴代火影と話をするため、木ノ葉へ進路

をとったこと。

それらを……ナナは人形のように意思なく傍観し、ただサスケについて行ったこと……。

木ノ葉に戻って、初代から四代目までの火影たちを大蛇丸が穢土転生させ、サスケは彼らと語ったという。

その内容を話していたナナが、その流れを急転換させた。

「その二代目様の言葉に思わずカチンと来ちゃって、そうしたら急に力がこみ上げて来て……その時に初めて『私の中の力』に気づいたの」

それは、任務の途中で思いがけずトラップにかかるのと同じ感覚だった。

「え？」

「どういうこと？」

久しぶりに、誰かが口を挟んだ。

「写輪眼が進化した『万華鏡写輪眼』っていうのを開眼したみたいで……、それで力が解放されたからかな。自分の中に、自分だけじゃない力があるっていう感覚が……ってよくわからないよね！」

誰も理解はできなかった。

だが、ナナに聞き返すこともせず、隣の者と顔を見合わせるだけにとどまっているのは、やはり、『心当たり』はあったからだ。それこそが、あのナナのめっちゃくちゃな主張と、理不尽に思えたナナの死の「答え」なのだ。

「私はその力が、戦争で利用されることを恐れたの」

その断片を、ナナはすぐに口にした。

「自分でもその時ははつきりわからなかったけど。マダラが戦場でホクトに、『お前は必要ない』って言ってたから、私を初めから戦争に利用しようとしていたことはわかってたし……」

そして、再び嫌な記憶を呼び覚ませた。

「だから、サスケが火影様たちの話を聞き終えて『戦場に行く』って決意をしたとき、私は行かないことにした」

マダラに刀で貫かれたナナの姿を押し込めた時、今度は記憶ではな

く想像が浮かんだ。

今夜はやけに、脳味噌が素直に働いてしまう。ナナの言葉のひとつひとつを、そのまま思い描いてしまっている。

だからわかった。

ナナとサスケの、何度目かわからない別れの光景がどんなものだったのか。

「サスケ君は、何て言ったの……？」

それを、サクラはナナの口から聞きたがった。

彼女なりのこだわりなのだろう。気持ちはわかるから、それを止めなかった。

「わかってくれたよ。力のことになんともなく気づいていたみたいだし、特殊な眼のこともあるし。だから……」

ナナはサクラの食い入るような視線を、正面から受け止めた。

サクラだけじゃない。いのもまた、両の拳を握りしめてナナを見つめている。

シカマル自身も、息を止めてナナの言葉を待っていた。

「私を誰にも利用させないっ……て。安心して『待ってろ』って」  
懐かしそうな声だった。

「全てが終わったら……二人でイタチの話をしようって……」

憂いも愉楽もない、ただ温かい声だった。

サクラといのの肩から、安心した様に力が抜けていくのが見えた。そして自分も、溜めていた息をそっと吐きだした。

別れを告げたナナと、そのナナに再会を約束したサスケの姿……。それは確かに、満足のいくものだった。

が、結末を知っている今、それがハッピーエンドには結びつかないことも知っている。

皆もそうだ。だからまだ、口をつぐんで続きを待っているのだ。

「だけど私は、またサスケに嘘をついた」

重い石の塊が、腹の底に沈んでいく。

いたたまれなくなったのか、チョウジが言った。

「そ、それって、サスケにもう会うつもりは無かったってこと？」

感情を押し殺すのがそろそろ限界に達したかのように、キバも早口でそれに続く。

「じゃあお前、その時からすでにもう……!」

ナナは優しくうなずいた。

「本当に怖かったから、『自分がどうなるのか』が。だから……私はその時に、自分を終わらせることにした」

空気の質量が、今までで一番重く感じられた。

キバが奥歯を噛みしめる音が聞こえてきそうだった。ヒナタが両手を握り合わせる音が聞こえてきそうだった。

死を訴えたナナの姿がまた……死神のように奥の闇から浮かび上がって来そうだった。

「それで私は、里の外れの和泉神社っていうところに行つたの。そこには一族の人が居て、母の形見を守っているはずだった。それを受け取りに……」

ナナはかまわず話し続けた。

「その形見は一族に伝わる短刀なんだけど、それには特殊な術式がかけられて……、それで魂を封じれば、あとから転生したり、させられたりすることがないはずだった。だから私はそれで自分を終わらせようとしたの」

シカマルは思わずうつむいて、両目をつむつた。

こめかみがズキズキと痛んだ。

その特別で残酷な「短刀」は今、自分が預かっているのだ。あれ以来……冷たい刃をそつと閉じ込めたまま。ナナに返すことを恐れて、誰も知らない場所にしまっている。

「でも……その短刀は私を刺してはくれなかった」

あの時に言った言葉を、ナナは繰り返した。

「自分じゃ始末をつけられないように、私の身体は誰かに術をかけられていたの。たぶん、父だと思うけどね。私が自害して“使命”を放棄しないようになっていう保険だったんだと思う」

憤りを感じる間もなく、ナナは続ける。

絶望を感じ、『終末の谷』でひとり泣いていたこと。どうやってでも

死にたくて……死ななければならぬと思いつめて……死にきれないことの恐怖に冒されていたこと。

そしてそこに……。

「ネジ君がね……来てくれた」

「ネ、ネジが……ですか?!」

「うん。そう。ネジ君が」

ほんの少しだけ、温かい風が流れた。

「ヒナちゃんにはこの間話したけど……、戦場で亡くなったはずのネジ君が、魂だけになって私のところへ会いに来てくれたの」

「魂だけになって会いに……ということだが、どんなものかは知らなかった。単純に、ネジの幽霊がナナの前に現れたところを想像するしかなかった。

が、それを不思議には思わなかった。滑稽とも思わなかった。

ネジの想いは知っていたから、それはシカマルにとっても、とても自然なことだった。

「私は……ネジ君に『連れて行って』って頼んだ。一緒に、黄泉の世界へ逝きたかった」

その思いを聞かされてネジがどんな顔をしたのかも、容易に思い浮かべることができる。

「でも、『ダメだ』って。ネジ君……優しいから」

ナナは今、そのネジを想って慈しんでいた。

どこかでネジがこの様子を見守っているのなら……、彼は満面の笑みでも浮かべているのだろう。

そう、思えた。

「ネジ君がひとりで逝くのを見送って……、私はネジ君に勇気をもらったから、誰かに短刀を託そうともう一度立ち上がった。その時に……」

その時に、九尾に呼びかけられたのだという。

ナナは九尾のことを、「クラマ」という名で呼んでいた。

クラマがそれを成し得たのは、ナナの中にクラマのチャクラが残っていたからということだった。



何故、ナナの中にクラマのチャクラがあったのかは察しがついた。が、「残っていた」と表現したように、その特殊な繋がりが断たれていた経緯は知らなかった。

だが、そんなことを聞き返す余裕はなかった。もうすぐ先で、自分たちが知っている記憶と結びつく。

「クラマに、『十尾から尾獣を引き抜け』って言われたの。最初は、戦場に行ったら『利用される』から怖くて行けないって言った。逃げたいっていう気持ちもあった。私の力が通用する自信なんてなかった。でも、クラマが……」

ナナが言うクラマという名は、とても親しげだった。

その存在に、自分の存在が苦しめられてきた者とは思えないほどだった。

「私はみんなを見捨てることなんてできやしない……って言ってくれて……。だから私、その瞬間になって初めて、自分の『忍道』を見つけられたの」

ナナの視線が、今までで一番強くなった。

「まっすぐ、自分の言葉は曲げねえ」と豪語する、誰かの目に似ていた。

「たとえ『その先』がどうなろうとも、目の前の『できること』に背を向けない……」

そして、初めて聞かされたナナの忍道は、まっすぐに胸に刺さった。「クラマが信じてくれたから、私はもう一度戦えた」

ナナは嬉しそうに笑った。

友愛と、誇りと、半ばヤケクソ……。あの時、星となつて浮かぶナナがそれらを抱えていたことを知って、少しだけ力が抜けた。

「そのあとは、みんなが知っているとおり」

あの時のことは、ナナは簡潔に話した。あの痛みを繰り返されたくなかったから、それでよかった。

だが、ナナは謝罪した。あの時、皆を傷つけてすまなかったと。何度もそう言った。

そして、しっかりとシカマルに向き合つて。

「本当にごめんね、シカマル」

この胸の痛みにもそっと触れた。

「いや……」

ロクな台詞が出てこなかった。

本当は、ナナがこんな顔でそう言うのがわかっていたから、返す言葉を考えていた。いつものように面倒くさそうにして、「もういいつて、べつに」とか言うつもりだったのだ。

が……やはり。声は出なかった。

ナナも目を伏せたのがわかった。

仕方がなかった。

「でもよ。結局お前は、マダラに捕まったんだろ？」

気を使ったのか、それとも先を急いだのか……キバが言った。

その声には、やりきれなさが滲んでいる。

「うん……。私はマダラに、口寄せされた」

「口寄せ……」

「産まれた時に、一族の誰かが私の頭蓋骨に口寄せの式印を刻んでたらしいの。その『式』を、あの白いゼツっていうのが持つて……マダラに渡したみたい」

「またも重ねられた残酷な運命に、キバもまた押し黙った。」

「キバ」

その彼にも、ナナは静かに言った。

「私を守ってくれたのに、消えちゃってごめんね」

応えは無かった。

それもまた仕方のないことだったのだと、この場に居る者全員が知っている。

ナナはここで初めて息をついた。自分の行いに対する、深い悔恨のため息だった。

だが、それを慰める言葉も、否定する言葉も、誰一人見つけられなかった。

ナナは続けた。

「全てがマダラの計画だったらしいの。神樹の花を咲かせるには、和

泉一族の人間の血が必要だって、うちは一族の碑石に記されていたんだって。だから、和泉の人間を神樹の前に口寄せするために、口寄せの式印を一族の「誰か」に埋め込むことを、ずっと昔に計画していた」

また、ナナは肩をすくめた。

「それがたまたま「私」だったんだけど」

実際に、そう仕組まれたのはマダラ亡き後……つまり、実行したのはオビトだったという。

そして「ついで」のように、和泉成葉ではなく、和泉とうちはの血を引くその「娘」を転生させるように、オビトが一族の人間を仕向けたとも語った。

「それじゃあ、オビトは初めから、お前が和泉一族とうちは一族の混血であることを知っていたのか？」

珍しく、シノが口を開いた。

無理もない。吸収するばかりのナナの情報で、脳がパンク寸前なのは皆同じだ。

そしてナナがためらいもせずに肯定すると、口々に質問が吐き出される。

「オビトはお前の写輪眼を狙ってたってことなんだろう？」

「だいたい、ナナ自身はそれを知っていたの？　自分がうちは一族の血も引いてるって」

「そんなこと、下忍の時も言っただわよね？」

「だったら、写輪眼はいつ開眼したの？」

ナナは漆黒の眼に皆を映しながら答えた。

「私はもともと、自分は『和泉成葉の転生者』だって聞かされてたから、自分が和泉一族の純血だって疑わなかった。当主と奥方の娘だって……でも……最初にサスケとイタチが戦った時に、イタチの口から知らされたの。私は和泉成葉とうちは一族の男との間にできた子供の転生者だって。だから、うちはの血を半分引いているって」

「そんな……」

その状況をいち早く想像したサクラが、声を詰まらせた。

「でも……自分では全く信じられなかったの」

「サ、サスケ君も……知らなかったのよね？」

恐る恐る尋ねる彼女に、ナナは優しい眼差しでうなずいた。

「オビトが仕向けた『転生する魂の変更』は、一族の人間さえ誰も知らなかったみたいだから。きつと今頃、あの人たちもびっくりしてるはず」

サクラが黙り込むのと同様に、ナナも息をついた。

優しい瞳に、悲しげな闇が浮かんだ。

「でも写輪眼を開眼して……、私自身、そこでやっと実感した」

聞くつもりはなかったのに、ナナは写輪眼を開眼する『条件』まで話して聞かせた。

『喪失』『失意』……それらを深く感じた心の作用で、開眼が果たされるといふ。そんな悲しい条件を。

「最初にイタチが死んだ時に写輪眼を……それから、二度目にイタチが死んだことで万華鏡写輪眼を開眼したみたい。色が青いから、なんかちよつとヘンだけどね」

思わず、ナナの漆黒の双眸を凝視した。

視線が合わさる恐れを、この時は忘れ去った。

その眼はどれほど深い悲しみの情景を映したのか……。あんなに悲壮なイロに変わるほどに……。

だが、ナナの生に対しての衝撃と憐みを処理する間もなく、ナナは言った。

「私が写輪眼を開眼したことも、マダラにとって都合が良かったみたい。和泉の血も引いていて、まさに一石二鳥だと喜んでいたと思う」  
そう、笑みさえ浮かべながら……。

それが悲しい自嘲なのか、虚しい強がりなのか、それともうちへの血を引く誇りなのか、喜びなのか……シカマルにはわからなかった。「そういうわけで、マダラは戦場で計画通り私を口寄せして、私の『血』を使って神樹の花を咲かせようとした。……あの時、サイも居たんだよね」

ナナに見つめられ、サイは唇を引き結んだ。

そんなサイの表情を見たのは、シカマルも初めてだった。

「サイもナルトもサスケも……みんなが私を助けようとしてくれたけど、ダメだった。だって……私自身、マダラじゃなくて神樹に捕らわれちゃったから……」

神樹がまるで意志を持った生き物のようにその身に喰らい付き、成長を始めたのだとナナは言った。

あの、地の底から迫り来る馬鹿デカイ神樹の根が、その話を裏付けていた。

大地を割って暴れ回り、悪魔のようにチャクラを吸い取る巨大樹。空にはナナの目の色と同じ、青の月。

“人外のモノ”に触れることの恐怖を、改めて感じた瞬間だった。

「樹と、身体の一部が一体化して、私ははつきりわかったの」

ナナはその記憶に重ねる様に、こう告げた。

「私の中に在る力は、『怖ろしい誰か』のもので……、それを神樹が欲しがっているんだって」

沈黙が流れた。

そう長いものではなかったはずだが、最高潮に張り詰めた空気が息苦しかった。

「お、『恐ろしい誰か』って……」

サクラが口を開いた。

答えを知っていて、尋ねているような口ぶりだ。彼女はその「恐ろしい誰か」と実際に戦ったと聞いている。

「その時はわからなかったけど……、それが『大筒木カグヤ』だった」やはり、答えはそれしかなかった。

ナルトやサクラから聞いていたから、この話の流れは知っていた。知っていたが、納得ができずにいた。

“ソレ”を見ていないからということもある。カグヤという存在を想像するのは難しかった。

が、それだけじゃなく……。

「なんで、カグヤがお前に？」

「そうよ、なんでなの？」

皆が口々に言った。

皆も納得ができていないのだ。

ただその話を聞いていただけなら、ナナの運命を理不尽だと憂い、憤ることに留まる。だが、今はその感情すら受け入れられない。

何故なら……あの光景を見ている者がいる。必死で己の死を願うナナの姿を、その声を……。

「私が産まれる前から……」

皆の気持ちを汲んでくれたのか、ナナは言いにくそうに告げた。

「カグヤの転生者として選ばれていたから」

まただ……。また、〃ナナの生〃が闇に覆われる。

この時初めて、ナナは母親のことを語った。

無限月読から目覚めた時、サスケとナルトの前に現れた、ナナによく似た人。光に包まれて、優しい眼差しを浮かべていたあの人のことを、ナナの母親だと信じないわけはなかった。

そして、彼女がしたということも……理解できない訳は無かった。残酷だが、愛があった。

世界を護ろうとする人間の愛。そして、娘を思う母の愛。愛を持って、ナナの母はナナを産まず、共に世を去った。

ナナの口調で、それが十分に伝わった。

だから残酷なのは、その想いを台無しにした和泉一族の人間と、マダラ、オビトという輩だ。

彼らのせいでナナは……。

「私は、カグヤを止められないことはわかっていて。私だけじゃなくて、誰の力も及ばないと……そう思っていた。だって、自分のことは自分自身が一番よくわかるでしょう?」

だから、ナナは……。

「だから、シカマルにあんなお願いをした……。ネジ君にも……」

また繰り返す、胸の痛み。

ナナの言葉は、あの時抜いた冷たい刃のようだ。

「神樹は私の血を吸って、カグヤの力と同調して……世界を壊し始めた。みんなのことも、傷つけ始めたでしょう?」

じわりじわりと、後悔が押し寄せた。

あの時とつた行動に対してや、己の無力さに対してではない。この残酷な物語を、ナナの口から聞きたがったことへの後悔だった。

だが、ナナは決意をしていたのだ。今夜、仲間である自分たちに、本当に全てを話すのだと。

だから、耳をふさぐことはしなかった。

うつむいていた顔を上げて、ナナを初めてしっかりと見つめた。ナナが打ち勝ったものから、逃げてはいけないと思った。

「だからもう……」

ナナは少し安心したような顔をしながら、言った。

「サスケにお願ひするしかなかった」

その言葉を、ちゃんと正面から受け止めた。

そして、痛みに鈍る脳で考えた。

死を願うナナを前にしてサスケは……自分と同じ心境だったのだろうか……と。

「みんな、一生懸命に神樹を倒そうとしてくれてたみたいだったけど、ごめんね」

ナナは詫びた。

「私は、それ以上みんなを……傷つけたくなかったから」

わかっていたはずのナナの想いが漂った。

「私の力でみんなを傷つけることは、死ぬより辛いことだったから……」

自分はそのナナの優しさに背を向けたのだ。願いを思い切り撥ね付けた。

だが、サスケは……。

「だから、サスケに殺してもらった」

荒れ狂う神樹。うなる千鳥。光る稲妻。

そして……胸を貫かれたナナ。

ほんの一瞬の光景が、何故だか脳裏にはつきりと焼き付いている。

突然のことで、訳もわからず茫然と……ナナの死を受け入れられなかったはずなのに。倒れ込むナナを、慌てふためきもせずにとっつきしめるサスケ……その光景を、しっかりと覚えているのだ。

あの時、サスケは……。

「サスケは知ってたのか？」

思わず、声になった。

あの時からずっと、憤りと無力感と喪失感が渦巻く心の中で、かすかに存在していた“疑問”が。

皆の視線が集まるのを感じた。

「お前はサスケの千鳥に飛び込んだ……。お前がそうすることを、サスケは知っていたのか？」

ヒナタとテンテンが息を呑んだ。サクラといのが勢いよくナナを見た。チョウジとキバは思い切り眉を寄せていた。

「た、確かに……サスケはまるで、わかっていたようだった……」

サイが同意した。

「そ、そうなんですか？ ナナ！」

リーが答えを促す。

だが、皆、ナナの答えを急いでいながら、それに対して怯えてもいるようだった。

何故なら……その答え次第では、あの光景がもっと悲しいものになる。

「うん」

そこに吐き出されたのは、この上もなく簡潔な答えだった。

あの光景をさらに残酷に色付けしながら、ナナは言う。

「『黒いの』が私を……ていうか、私の中のカグヤを狙っていた。転生者である私を死なせるのはマズイと思ってたみたい。だから、あのままサスケが私を殺そうとしても、『黒いの』に阻止されると思っ



た。サスケもそれに気づいてくれて……。だから神樹に穴を開けるフリをしたサスケの前に、私が飛び出して行ったの」

ナナが言った「黒いの」とは、黒ゼツのことだろう。サクラが、アレが黒幕だったと言っていた。アレこそが、ナナの中のカグヤを呼び覚まそうとした張本人……。

「ちようと近くにサスケの刀が落ちていたから、神樹に捕らわれた方の腕を斬って動くことができたの」

その自分で切り捨てたという腕は、今は確かにナナの身体に存在している。

全ては過ぎたことだ……。終わったことだ……。

だが、ナナの話はあまりにも悲惨すぎる。

「私の中の力がみんなや世界を壊さずに済んで、良かったと思ってる」それでもナナは、凜と立っていた。己の運命を呪う言葉も、恨みごとも無い。

そう……。

「後悔はしていないの」

ナナは己の決断に、微塵も後悔していなかった。

「みんなのこと、傷つけちゃって本当に申し訳ないけど……」

ただただ、優しさだけを引きずっている。

「ごめんね」

ナナは許しを乞うていた。

ひとりひとりに視線を向けて、自分がつけた傷跡を確認し、そこにそつと薬を塗っているようだった。

「ごめんもなにも……」

「そ、そうよ……」

サクラといの何かを言おうとしたが、言葉は続かなかった。

少し、沈黙が流れる。

シカマルは、無意識に拳を思い切り握りしめていたことに気づいた。じつとりとした汗を、手のひらに感じながら、息を吐きだす。

ナナの強さと優しさを持って余してうなだれる皆を代表して、ナナに言わなければならぬことがある。それはとづくに、ちゃんとした台

詞になっている。

もうずっと前から……。

「ナナ」

ナナの両目が見開かれた。

自分でも驚くほど、しつかりとした声だった。

「正直、オレらはお前の死に……お前が死を願ったことに納得しちやいなかった」

再び、皆の視線が集まった。

大丈夫。みんなの言いたいことはわかっている。ちゃんと今、この口でナナに伝える。

「戦争が終わって、ナルトやカカシ先生たちに事情は教えてもらったが、それでも理不尽な結末に対する怒りを抱えてた。その元凶だった『黒ゼツ』や『カグヤ』ってヤツと、直接やり合ったサクラでさえな」  
サクラが視界の隅で目を伏せた。

「ただの説明なんかじゃあ、あの時のお前の『台詞』と、あの時の『光景』を拭い去ることなんてできなかった。お前が生き返って、目の前にちゃんとお前が居るにしてもだ」

今度はナナも、目を伏せた。

「だが……」

言葉を吐き出すことで、胸の痛みは徐々に和らいでいた。

怒りも、憤りも、やるせないさも……声と共に宙に溶かせるような気がした。

きつと、みんなも……。

「今、お前の口から事情を聞くことができ、なによりお前が後悔してねえってことを知って……」

それぞれが、ゆっくりと顔を上げていた。

その目で、ナナを見つめていた。

「やつと、前に進むことができそうだ」

ナナの頬に、灯りがともった。

ただ単に篝火の炎が揺らめいただけかもしれないが、シカマルにはそう見えた。

「シカマル……みんな……」

心から安心したような笑顔を素直に見せたナナに、皆、口々に同じような言葉をかける。

泣いている者が多かった。シノでさえも、サングラスの奥で目を潤ませていたようだった。

そして、ナナも涙を浮かべていた。

「みんな……ありがとう……」

心の繋がりが……『絆』というものが、この場に居る全員の間にはある。それがいつそう太く、深く、強くなつたような想いだつた。

そしてシカマルは、今この時に改めて、本当に心の底からナナがここに居ることの喜びを感じていた。

「よかつた。これで色々スッキリしたわ！」

「話してくれてありがとう、ナナ」

サクラといのが、涙を拭きながらいつもの調子を取り戻し始めた。

「まあ、『理不尽だった』ってことには変わりねえけどよ、とにかくお前が生き返つたから良しとしよう……って気にはなれたぜ！」

キバも、これまでの彼に似つかわしくない悩ましげな表情をやつと崩し始めている。

「もつと早くに話したかつただけ……、許可をもらうまで時間がかかつちやつて」

ナナはまた、すまなそうに肩をすくめた。

「許可……」

そこでようやく、シカマルは当然の事情に思い当つた。

何故気がつかなかつたのか……。ナナが話した内容は、里にとって、いや、忍連合にとつての最重要機密事項ではなかつたのか？

ナナの転生についても然り、オビトやマダラのことも然り、黒ゼツやカグヤのことも然り、和泉一族のことも然り……。

だから、『今夜』だつたのだ。

二度目の五影会談を終え、五影に対しての全ての報告が済んだ。そこでようやく、自分たちにも事情を説明しても良いという許可を得るに至つたのだ。

シカマルは心の中でナナに詫びた。

自分の痛みと鬱積に惑わされて、周りが見えなくなっていた。立場と状況を考えて、冷静に、だが忙しく行動していたナナのことを、わかってやれなかった。

「火影様や他の里長の方たちも、和泉のことも、私と木ノ葉との関係も、それから……カグヤのことも『信頼できる仲間』になら話しているって言うてくださったから」

ナナは嬉しそうにそう言った。

「信頼できる仲間」と改めて言われて、嬉しかったのはこちらの方だった。

「それでね、カグヤとかのことなんだけど……」

皆の表情がようやく和らいだ。

ナナはそれに気づいて、安心した様にまた話し始めた。

正式に許可を得た今でも、おそらく重要機密である内容を。惜しげもなく、包み隠さず、流暢に。

そこで語られた六道仙人やカグヤの話は、抽象的なイメージしか持てなかった。

悠久の時の中で繰り返された『転生』の話も、正直、物語のような感覚で聞いていた。ナルト、サスケ、ナナ……そこに繋がる初代火影とマダラの話も、おとぎ話でしかなかった。

だが、全てが真実だった。

ナナが話す物語が、全て真実だと信じられたから、すんなりと受け止めることができた。

その中で、ナナと和泉成葉の話は唯一心が温まる想いだった。

もちろん、成葉が選んだ道は残酷で悲惨なものだった。が、『黄泉の手前』というところで、母親と出逢ったというナナの話は、確かな母子の愛を知らしめた。

ナナも、母を想って幸福そうだった。

あの、光から現れた優しいで快活そうな女性の……ナナへの想いを改めて感じた。

「ずっと気になってたんだけど……」

言いにくそうに口を開くのは、やはりサクラだった。

「ナナのお母さんが、ナナのことを生き返らせてくれたってことなの？」

和泉成葉は、己の命と引き換えにナナを蘇らせようとしたサスケを、「向こうの世界」から止めに来て……「ナナが望んでいないから」とサスケを説得した。そして、ナナの最期の願い……「サスケの幸せ」を願って去った。サスケに「これからもナナを愛して欲しい」と言い残して。

光となつて、天に昇つたナナの母。まるで、娘のナナと同じように去つて逝つた。

一部始終を、聞いていた。

互いに片腕を失くしたナルトとサスケの一番近くに居たのは、ここにいる仲間たちだ。

枯れ果てたようなサスケの想いも耳にした。

それが究極に深すぎて、哀れにもならなかった。

気がつけば、彼に対する怒りや恨み言は消えていた。

あつたのは、ほんの少しの同情と、憤りと、共感……だった。

その時、急に諦めがついたのを覚えている。

薄情にもナナの死を受け入れた。そして、ナナへの想いを終わらせることを決めた。

サスケがナナの生を諦めたのだから仕方なかった。サスケのナナに対する想いが、あまりに必然だから諦めた。

ナナが「想い出」になつた時だった。

だが、その瞬間に奇跡が起きたのだ。

新たな道へ向けたはずの首を振り向けてみれば……そこにナナが居た。両の眼を開いて、息をしていた。

永遠の別れを受け入れた直後の、奇跡の再会。

何が、どうして、そうなつたのか……。喜びが疑問を遥かに凌駕したから、あまり考えもせず、それがナナの母の「贈り物」なのだとして解釈をしていた。

それが、自然だった。恐らく、ここにいる者たちにとつても。

ナナは少し斜め上を見て、曖昧に、だが、嬉しそうに告げた。  
「あんまりよく覚えてないんだけど……。私、カグヤを連れて『川』  
を渡ろうとしていたの」

現世から連れ出したカグヤの魂を、ナナは離さなかったのだという。

カグヤの手を引いて、無理やりに『黄泉の世界』へ逝こうとした。  
カグヤは抵抗したが、力はもう無かった。だから引きずるようになり、冷たくもない川へ入り、速い流れに足を取られそうになりながらも懸命に渡り切ろうとした。

その時に。

「母が来て、『カグヤを連れて行くのは自分の役目』って言ったの」

ナナはかすかに視線を彷徨わせた。その時の母親の姿を見つめているようだった。

「カグヤが私なら、カグヤは自分の娘ってことだから……。って」  
そうして、成葉はナナの手をカグヤから引きはがし、『現世』へ戻るように言ったのだという。

ナナはやはり、それには抵抗したと告白した。自分じゃなきや駄目だから、自分しかできないから……。と。

「でも、母が……」

ナナは幼げな笑みを口元に咲かせた。

「一度くらい、母親らしいことをさせて……。って言うから」

ただ守られるだけの幼い子供のように、ナナは言う。

「自分の分まで生きてって……。そうやって『親孝行』してって言うから……」

娘を想うナナの母親の表情を、鮮明に思い出した。

優しい、温かい光に包まれて、ナナのために『禁』とやらを犯して自分たちの前に現れたナナの母……。

彼女の願いが、わかるような気がした。

「それで私は、母に命をもらったの」

少しでも照れくさそうに言うナナと、彼女は本当によく似ていると思う。

「産まれなかった私」の命を……母はくれたんだと思う」

ナナのその言葉を聞いて、最後の一手が決まった時のような、すつきりとした感覚を覚えた。

たしか、成葉は最後にこう言っていた。

『さつさと生まれ変わってオレの前に現れる……』

そう伝えて欲しいと言うサスケに。

『ええ……そうするわ……！』

「そうする」とは、「ナナにサスケの言葉を伝える」ことの意味表示ではなかった。「さつさと生まれ変わらせる」ということを意味していたのだ。

だから……『これからも、あの子を愛してあげて』と、サスケに言い残したのだ。

何故、成葉がそうしたのか。

ナナの意志を尊び、サスケにナナの居ない世界で幸福になって欲しいと願うのではなく、ナナをこの世に生き返らせた訳……。そう考え直した訳。

今さらながら、その理由がわかる気がした。

サスケの言葉、視線……ひとつひとつを思い起こせば理解できる。

あんな……立ち枯れた人間を目にして、未来もなにもあつたものじゃない。

あの愚鈍なまでにナナを愛したサスケの正直な想いが、成葉の意図を変えたのだ。

娘の英断も、世の理も、サスケの諦観も……全てがどうでも良くなった。サスケとナナの間に存在する愛に比べれば、そんなものは存在しないも同然だった。それら全部を捨て去るほどの価値が、二人の愛にはあつた……。

成葉はそう感じたのだろう。

彼女の気持ちもまた、十分に理解できた。

そして彼女のしたことこそが、英断だと思った。

その母の決断によって蘇ったナナが、今は「もらった命」……い

や、〃本来の命〃をその身体に留めている。

持て余してはいない。拒絶も無い。後悔もしていない。ちゃんと、笑っている。

母の願いを、ちゃんと、受け容れている。

「もう一度、生きたい……って思った時、私はココにいた」

ナナが未来を向いて歩き出した……。

それを見留めて、今までで一番深い安堵を感じた。

「だから……」

ナナは皆を見回した。長い語りの中で、最も鮮やかに光り輝く笑みで。

「これからも、よろしくね、みんな！」

それに応える声は、夜の森を騒がせた。

あの時のように、胸の奥から勢いよくあふれ出す喜びではなかった。じわじわと、心地よく染み渡るような喜びだった。

驚嘆と歓喜ではない。安堵と悦楽がこの場所に満ちていた。

ふと、足元を見下ろした。

灯りに揺れる薄い影が、ゆらゆらと頼りなげに揺れている。

目をこすつてもう一度見た時……己の影はくつきりと、足元に張り付いていた。



## 星彩

「シカマル」

つい先ほど別れたはずのナナの声がした。

振り向くと、にこりと笑ったナナ本人が立っていた。

「もう少しだけ、話……いいい？」

わずかに首を傾げる。

その仕草に、思わず身構えた。いや、怖気づいた。

「じゃあボクは先に帰るね」

並んでいたはずの親友は、この怖れを知っていたかのように、自分を置いて先へ行く。

「バイバイ、ナナ」

「また明日ね、チョウジ。今日はありがとう」

手を振るナナに聞こえないように、チョウジがささやいた。

「ちゃんと、話し聞いてあげなよね」

親友の後押しで、やっと……覚悟が決まった。

二人で近くの公園に移動した。

子供の頃、チョウジとよく遊んだ公園だ。

もつとも、ペインの襲撃でここも破壊されてしまったから、今はただの荒地になっている。壊れた遊具は撤去されているから、一時よりはずいぶんましな様子だが、馴染みの場所が瓦礫の山と化した光景は胸が痛んだ。

が、今でもここは好きな場所だった。

ここは少し高台になっていて、里を流れる川の流れを見下ろせる。昔から、ここのベンチに寝そべて雲を眺めるのが好きだった。

宅地の復興が優先で公園は後回しになっているが、できればまた、この場所を子供たちが集まる公園にして欲しいと願っている。

その場所へ、ナナを連れて来た。

ナナと向き合う覚悟を決めて、なんとなくこの場所を選んだ。

誰かが気をきかせて設置した古ぼけたベンチがひとつ、荒れた地面の片隅に置いてある。

そこへ、並んで座った。

「ねえ、シカマル……シカクさんのこと……」

ナナが躊躇うことなく先に口を開いた。

その横顔を見る。街灯はまだ無いが、優しい横顔が良く見えた。

「作戦本部、十尾にやられちゃったんだってね。いのちゃんのお父さんも……」

「ああ……。真っ先に組織の“頭”が狙われるのは仕方ねえ」

声を出したのが、久しぶりのように感じた。

「私、知らなくて……」

「お前が参戦する前の話だ。気にすんな。それより……」

「知らなかった」とナナは悲しげに言うが、終戦直後にカカシか誰かにそのことを聞いていたようだった。

忍連合軍の解散前、雷影が主となって即席の追悼式を執り行った。

その時、ナナは雷影から“祈り”の役目を依頼されたらしい。

それをナナは断った。

もともと、和泉流陰陽術は宗教とは違う。死者とか魂とか、そういったものに関わってはいるが、特に自分はそういった『本格派の陰陽師』としての修業はしていないから……という、自虐的かつ生真面目な理由で。

それでもナナは、式では自分たちと同じ列に加わりながらも、誰よりも熱心に祈りを捧げているように見えた。

ネジ、父親、いのの父……親しい者たちの安らぎを、ナナが祈ってくれているのは、なんとなく安心できた。

だからきつとナナは……こうして自分に直接“お悔み”を言う機会が遅れたことを、気にかけているのだろうか。

だがもちろん、そんな必要はなかった。

「お前、親父の墓にも花を供えてくれたんだろ？」

ネジの墓前にあったのと同じ花が、父の墓の前でも可憐に揺れていたのだ。

「うん、だって……」

ナナは少しうつむいて、懐かしそうな顔をしながら言った。

「シカクさんは私の……、ええと……『保証人』になってくれたから  
そういえば……と、シカマルも今さらながら思い出す。

中忍試験が混乱の中で中止になったにもかかわらず、二人だけが中  
忍昇格と認められたのだ。

あの時は、本来ナナに付き添うはずであった上司のカカシが伏せて  
いた。

だから父がその役目を買って出たのだ。

今思えば、父はナナの事情を良く知っていたのだろう。

アレでも一応、三代目に信頼されていた上忍だった。きっとナナの  
ことを知っていたうえで、保証人役を名乗り出たのだ。

そう……ああ見えて情に厚い男だったから、ナナのことを放ってお  
けない気持ちがあったのだろう。

「あの時、カカシ先生は寝込んでたしね」

あの時の思い出を、ナナは積極的に語り出した。

そこで……止めるべきだった。今、目の前のナナに意識を合わせず  
ぎでいて、あの頃のナナを思い浮かべることが失念してしまった。

「イタチにやられちゃってたから」

ナナはただの思い出話のようにそう言った。

次々と、あの時のことが蘇る。

カカシが里に現れたといううちはイタチと戦って臥せていたこ  
と。後を追ったサスケもまた、イタチによつて重傷を負わされたこ  
と。ナナはサスケの見舞いにも行かずに、河原でひとり、膝を抱えて  
いたこと……。

「あの時……」

あの時、ナナが泣くこともできずに、胸の痛みを持て余していたそ  
の理由が、今夜、はっきりとわかった。

「お前がどういう状態だったのか、やっとわかった」

ようやく、わかることができた。

『私……、どうしたらいいのか、わかんなくて……』

消えてしまいそうなほど、弱々しい声音。

『サスケには、サクラちゃんがいるから……』

孤独に染まった台詞。

『だけど、私は……あんなふうには、まっすぐではいられない……』

背負ったモノの重さで、押しつぶされたような姿。

『……あの人も……やっぱり優しくして……』

「あのひとイタチ」と「サスケ」の狭間で、振り回される存在。

『それをつ……私は……信じないことなんて、できなくて……』

あの時のナナは、初夏の陽気とは正反対の、どす黒い空気に覆われていた。それに包まれ、飲み込まれ、まるで……奈落の底に落ちて行くようだった。

ナナを護りたい……。

あの時に、はつきりと意識した。

ナナを救いたい。助けになりたい。

そんな思いで、言ったのだ。

『お前が道に迷ったときの休憩所くらいには、なつてやるよ……』

打算も予測もない言葉に、ナナは唇を噛みしめながら両腕でしがみついていた。

ナナを襲う問題を、解決してやることも、助言することも、わかってやることすらできなかったあの時。

あのもどかしさが、今、やっと解消されたのだ。

「イタチは……カカシやサスケを傷つけて、ナルトを狙って……でも、私はやつぱり、イタチを憎むことができなかった」

ナナは懐かしそうに、宙をみつめて微笑んだ。

あれから数年……。見た目はあまり変わらないが、その表情はずいぶんと大人びて見えた。

「あの時シカマルは……」

みとれていると、ナナが言った。

「私が道に迷ったときの『休憩所』になってくれるって言ったよね。面倒くさくなったら、いっしょにのんびりしようつ……て」

自分の過去の想いをなぞられるのは恥ずかしかったが、ナナから目

を逸らせなかった。

「あ、ああ……言ったな」

「嬉しかった」

ナナは笑った。

今度は一転、あどけない笑みで。

「イタチのことは誰にも話せないことだったから……、あんなになってもまだ、私はアナタに話すことができなかつた……」

ナナの事情はわかっている。

和泉とうちはが秘密裡に手を組んでクーデターを企んでいた。証人「こそが、イタチとナナの関係だった。だから、ナナの口から「うちがイタチ」の名が出てはいけなかつた。

だがそれは、決して和泉の里を守るためじゃない。

ナナ自身が……話すことを恐れたのだ。

和泉の人間としての罪や、里からの罰を恐れていたわけじゃなく……ただ、サスケに知られたくなかつたのだ。サスケに知られれば……拒絶されてしまうから、恐かつた……。

「何にも言えなかつたのに、アナタは許してくれた」

ほんの少し、後ろ暗かつた。

真実を知つたわけじゃないのに、偉ぶって、強がつて、言つた言葉。心からの本音ではあつたけれど、ナナの全てをわかつて贈つた言葉ではなかつた。

が、ナナは嬉しそうに笑う。

「私が……『サスケに殺してもらおう』ことだけを願つていたことも、アナタは……」

かすかにはにかみながら、無慈悲に笑う。

「アナタだけが、それを許してくれた」

それしか選択肢がなかつたことを知つてか知らずか……。

「だから……」

ナナの漆黒の瞳が、あの時の星空のように煌めいた。

「だから、アナタに頼んだの」

同時に、胸がチクリと痛んだ。

辟易するほど、感じすぎたあの痛み。

「サスケやナルトでもなく。カカシ先生やサクラちゃんでもなく……シカマルに」

悲痛な叫びも。血走った眼も。真っ青な頬も。全身に纏う死の影も。

全部、鮮明に覚えている。

あの「願い」は、自分にしか頼めなかったとナナは言う。

本当に、残酷に。

だが、心からの信頼が伝わった。

「酷いことをお願いして、本当に……ごめんなさい」

「もう……」

かすれた声が、無様に闇に漂った。

「……お前の『ごめん』は聞き飽きたぜ」

それが滑稽で、少し笑った。

「シカマル……」

「結局オレは、お前に対して何もできなかった」

思いのほか、なだらかになった心のままを吐き出す。

「お前の願いを、何ひとつ叶えてやれなかった」

ナナの心の「休憩所」になることも。サスケに殺されたいとしか願えなくなったナナを導くことも。寄り添うことも。助言することも。最期の望みを、この手で叶えることも……。

何ひとつできなかった。

だから、こんなふうには、わざわざナナから言葉をもらう資格などなかった。

特別に気にかけてくれなくても良い。「ごめん」も要らない。

だが……。

「でも、ありがとう」

ナナは熱を込めた声を響かせた。

「私、なんていうか……」

コドモみたいな、オトナみたいな表情で、とっておきの台詞をくれた。

「この世界で一番、シカマルのことを信頼してる」

それは突拍子もない言葉だった。

が、意外と面食らうことはなく……反射的に嘔き出した。

「なんだよ、いきなり」

「いきなりじゃないもん」

ナナは両の拳を力いっぱい握りしめて言った。

「たとえば自分自身すら信じられなくなった時でも、きつと……シカマルの言葉なら信じられる！ シカマルは私にとって、そういう存在なんだもん」

視線にも、声音にも、偽りはない。

あのナルトですらたじろぐかと思われるほどの、まっすぐな想いが向けられている。

「ナナ……」

「シカマルは頭がよくて、絶対に一番正しい答えを知ってて、すごく仲間思いで、それに……」

だんだんと、忘れていた感情が蘇る。

「お、おい、ナナ……」

「それに、一緒にいて落ち着くし、ちゃんと怒ってもくれるし」

だがナナは、本気で恥ずかしくなるような言葉を容赦なく零し続ける。

「なにより……」

「ナナ、も、もういいって」

ナナは一度、口を引き結び……それからフツと笑った。

「シカマルは、私の側に居てくれた」

わずかに息を呑んだ。

まるでとどめの一刺しだ……。

身動き取れずに固まる自分に向かって、ナナはそう古くもない記憶をさらさらと辿る。

最初はそう……やはりあの河原だ。

イタチとサスケのことで、やり切れない想いを持って余していた時。膝を抱える情けない自分の隣に、そっと寄り添ってくれたとナナは言う。

それから、サスケが里を抜けた朝。

「サスケがキライ」だと言ってサクラにぶたれ、頑なにサスケ奪還作戦の任務を拒否したあの時。突き放さずに側に居て、「逃げるな」「負けるな」と叱ってくれた……と。

そして。

サスケの手による死を願う自分を許し……朝まで一緒に居てくれた……と。

もちろん、全てを鮮明に覚えている。

だが、それらが正しい行動だったのかはわからない。

もつと何か言えたはず……もつと何かしてやれたはず……。ナナの事情”を言い訳にして、手をめいっばい差し伸べられなかった後悔は否めない。

それでもナナは、無邪気に笑い、礼を言う。

本当に嬉しかった。全部が大切な想い出だ。全ては、その時に必要だった……と。

その信頼の証が……あの最期の願いか……。

ようやく実感する。

カカシでも、サクラでも、ナルトでも……サスケでもなく。自分にあの短刀を押し付けたナナの想いを、やっと、本当に素直に受け止めることができた。

恋じゃない。愛じゃない。

ふと、思い浮かんだ。

これが、”信頼”という絆……。

「ねえ、シカマル。だから……」

ナナは初めて言いよんどんで、下を向いた。

「いつか、あの時のこと……」

親の許しを請う幼い少女のように、ナナは言った。

「わかってほしい」



聞き終えたその瞬間……胃の底に在ったモノが、スーツとその下の下まで落ちて行くようだった。

ずっと抱えていた、痛み……。迷い、戸惑い、憤り、嫉妬、もどかしさ、後悔、そして……無力感。

それらが、身体から抜けていくような感覚だった。

「はーっ……」

その感覚に身を任せ、ため息をついた。

「シカマル……」

不安げな顔をしたナナの不安をあおるように、もう一度、ため息。

「お前なあ……」

この感覚の正体は、まぎれもなく『呆れ』だった。

正直、拍子抜けした。

わざわざ会合の後に呼び止めて、さんざん気恥ずかしいことを珍しく熱く語って、とびきり嬉しい言葉をくれて……その最後が『それ』か……と。

そして、そんなナナが好きだったのだと、改めて気づいた自分にも呆れてしまったのだ。

『『いつか』っつーか、もうわかったから』

「ほ、ほんと……っ？」

「許して欲しい」でもなく、「ごめん」を重ねるでもなく、これからも仲間であってほしい……でもなく。「いつかわかってほしい」だなんて、本当に『ナナらしい』と思った。

人一倍情が深くて、人とは少し違う空気を持っている。

だから……。

「っーかお前、そんなふうにおレのこと想っててくれたんだな」

こくりとうなずいたナナはまだ、こちらの心情をうかがっている。

必死で世界を救おうとした結果、自分なんかを傷つけたことをナナがいつまでも後悔しているのは、割に合わない。

かといって、これからナナに「もう気にするな」とか、「もう平気だから」とか言っても、意味はない。

ナナにはそんな言葉じゃ意味がないのだ。

「ナナ。オレたちは……」

だから、それがわかるまで寄り添えたナナの心に、光を差す。

「これからも、『親友』だ」

星明りのように控えめで、だけど、確かな想いを……。

「シカマル……!」

ナナの顔が輝いた。

(ああ……ずっと……こんな顔が見たかった)

「ありがとう!」

自然と、その頭に手を置いた。

ナナは嬉しそうに笑っている。

そのナナに気づかれぬように、秘かに息をついた。

この距離感が、とても自然であることが不思議だった。

自ら「親友」という言葉を使ったとおり、この先のナナとの絆が、心地よいものを感じられた。

だからこそ、今まで聞けずにいたことが流れ出た。

「ナナ、ひとつ聞いていいか?」

「うん、なに?」

自分だけでなく、他の仲間たちが聞きたかったこと。ナナの口から聞きたかったこと。皆がずっと、聞きそびれていたこと……。

それを封じることがもうなかった。

「お前、生き返って幸せか?」

答えに身構えることも、もうなかった。

「うん!」

ナナはすぐにうなずいた。

その瞳に影はなく、清らかな光が浮かんでいた。

「私だけ生き返っちゃって申し訳ないとは思うけど……でも」

その目をこちらにまっすぐ向けて、ナナは言った。

「また、みんなに会えて本当に嬉しい」

安堵はしなかった。

自分にはもう、ナナの答えがちやんと理解できていた。

「オレも他のヤツらもみんな、同じ気持ちだ」

そして、ナナに必要な言葉も。

「私、ちゃんと『生き直す』から」

「ああ。そうしてくれ」

もう一度、頭を撫でた。面倒くさそうに。

その仕草が「いつもどおり」だと、ナナは苦笑した。そしてナナ自身もいつもどおり肩をすくめてこう言った。

「でも、それに疲れた時は、シカマルが『休憩所』になってくれるんでしょう?」

二人で、声を上げて笑った。

あの夜より季節が進んで肌寒いはずの風が、優しく吹き抜けていく。あの夜より透き通った空気が、二人を包んでいる。

空の星は……いつのまにか、あの夜よりずっと明るく、颯然と瞬いていた。

## 飛花の残影

次回の五影会談が木ノ葉隠れの里で開催されることとなり、サクラたちもますます多忙を極めた。

回されるのは雑務ばかりだったが、戦争で人手が不足している現在、いくらこなしても仕事は無くならなかった。

自分たちがこんな調子だから、ナナはどれだけ里の内外を駆けずり回っているのか想像もつかなかった。

しかも、おそらくナナに任されているのは重要な任務……例えば五影会談開催中の警備に関する準備とか……であろう。

だからやつぱり、あの皆で集まった夜以降、ナナとまともに話す機会は無かった。

あの夜にナナが話をしてくれたことで、心の“つかえ”がほとんど消えてしまったとは感じている。

疑問が解消されたことで、わだかまりや憤りが消えた。理由が解明されたことで、不安も和らいだ。

なにより、『ナナが話してくれた』という事実にあぐらした。だが、ただ一点、まだ“つかえ”が残っている。

それは……やはり、ナナとサスケのことだった。

あの夜はナナの過去を知ることができた喜びで、そのことは後回しになっていた。受け止めなければいけない情報と答えがたくさんありすぎて、頭も心も飽和状態だった。

しばらくして冷静になると、やはり“つかえ”は残っているのだ。相変わらず、ボーっと外を眺めたままのサスケと、病室にいないナナ。

ナナは生き返った時、確かに「サスケと生きろ」と母に言われた……そう呟いていた。

寝起きのように焦点が合っていなかったから、無意識に呟いたのかもしれない。

が、それは母の願いのはずだった。

蘇った今、ナナを覆っていた影は消え去ったように見える。

あの夜、本人ははつきりと口にしなかったが、ナナ自身、再びこの世で生きることが喜んでいと確信がもてた。だからこそ、木ノ葉の忍として精力的に任務に就いているのだと思った。

それでも……、今のナナは母の願い通り、「サスケと生きて」いるようには見えなかった。

それだけが、あの夜を超えても残る胸の「つかえ」だ。

だが……ナナが全てを話してくれたことで、自分も前向きになれていた。

誰にも口にしなかったその「つかえ」を、親友であるいのに話したのだ。

いのもまた、ナナとサスケの距離に違和感を覚えていた。

彼女も昔から周囲の人間関係には敏感だったし、同じくサスケを好きだったから、最初から気づいていたのだろう。

わかり合えた者同士、答えが出るはずもないのに二人で長々と話し合った。

サスケのことではいがみ合ってばかりいたのに、初めて冷静に、そして素直に話し合うことができた。

その結論は、あっさりとしたものだった。

見守るしかない……。

結局はそれしかなかった。

サスケの精神状態も安定していて、ナナは任務に積極的だ。

今はそれ以上、とやかく言う必要は無いように思えた。

何よりも……。

あの残酷な一瞬を……すぐに打ち消すことなどできないのだ。

当の本人どうしであればなおさら。深く想い合っていればなおさらだった。

だからしばらくは……せめてサスケの処遇が決まって落ち着くまでは、このままでもいいのかもしれないと思った。

少なくとも自分たちの目には、「サスケがナナを拒んでいる」とか、「ナナがサスケを避けている」とか、そういう「影」が見えないのだから

ら。

だが……その「影」が見え隠れし始めたのなら、今度は迷わずに二人と向き合うつもりだった。

いのも、きつとシカマルたちも。

もう、見過ごさない。気づかないふりもしない。理解できないと言  
い訳もしない。

二人の仲間として、これからは……ちゃんと逃げずに向き合うこ  
と。

それを、いのと誓い合った。

ふと、火影岩を見上げた。

綱手の顔の隣がブルーシートで覆われていて、そこからはやかまし  
い音が鳴り響いている。頂上からつり下がって作業する職人の姿も  
見えた。

今、あの場所には六代目火影となるはたけカカシの顔岩が彫られて  
いるのだ。

その業者の手配をナナがしたというのだから驚きだった。

綱手は初め、業者のリストを渡して交渉を頼んだ程度だったそうだが、ナナは自分で波の国のタズナのツテを頼り、あつという間に工期  
を決めてしまった。

もちろん、見積もりやら人件費やらはノータッチらしいが、作業員  
の宿舍の手配などもナナがこなしてしまったらしい。

それでは、自分たちと語り合う暇などないはずである……。

『あいつには人にものを頼む才能が有るらしい』

そう、綱手が誇らしげに言っていた。

それを聞いて自分も嬉しかったが、同時に感心と呆れも感じてい  
た。

「おー、サクラか」

盛大にため息をついたとき、後ろから聞き慣れた声があった。

「シカマル！」

どうやら彼も、綱手から同じ任務を言い渡されたようだった。



ナナは眉を八の字に寄せながらも、口元にはいたずらめいた笑みを浮かべて言った。

「ケイビケイカクシヨ作るの手伝って！」

一瞬、角ばった文字の羅列にピンと来なかったが、すぐに意味を理解した。

「警備計画書？」

「そう！ 五影会談の！」

道端で立ち止まる自分たちに、通行人がちらちらと視線をよこす。

それは自分たちが邪魔だからというわけではなく、「噂の人物」が登場したからだ。シカマルは気づいていた。

「綱手様がね、シカマルに手伝ってもらってもいいって！ だからシカマルの今日の任務の報告は夜まで待つって！」

ナナはその視線に気づいていないのか気にしていないのか、彼女なりにまくしたてる。

シカマルの耳には、「やっぱりそうよ、あれが『ナナ』よ！」などとひそひそ話す声が聞こえていた。

「だからお願い！」

ナナはもう一度、パンと手を合わせて頭を下げた。

「わ、わかったわかった。火影命令なんだろう？ つーか、そんなに必死こいて頼まなくても手伝うって！」

「ほんと?!」

顔を上げたナナは嬉しそうに笑い、いきなり腕をとった。

「ごっちー！」

そしてシカマルが今来た道を、戻り始める。

周囲の視線はやはり、ナナに集中していた。

ぽりぽりと頭を搔いて、状況把握に努める。

任務内容を「警備計画書の作成」とナナは言ったが、どこかへ連れて行くつもりらしい。

詳細はゆっくり順を追ってうまいこと聞き出すとして、やはりナナはそんなに重要なことまで任されるほど火影から信頼されているのだと、改めて悟る。



少し急いではいるが、とりあえず楽しそうだから心配することはない。そして周囲から興味深げに見られていることも、全く気にする様子はなかった。

視線の主はほぼ全員が忍でない里の住人で、『和泉菜々葉』のことは知らないはずだった。

だが、噂と言うものはいくら秘匿性のある忍里でも存在するようで、先の戦争でナナが活躍したことは、彼らも耳にしているようだった。

「おいナナ、みんながお前を見てるぞ」

面白がって言ってみた。

と、思いもよらぬ答えが返る。

「慣れてるから平気」

横顔を確認するが、涼しい顔をして前を向いていた。

そして聞いてもいないのに、まるで面白がるように過去を語る。

「『あつち』に住んでた頃、たまに里に下りると、一族のみんなが物陰から私を見てたの。『怖い』とか『憎い』とかいう顔でね」

畏怖と嫌悪の目に晒される、幼いナナを想像してみた。

同族からの冷たい視線にも、ナナはきつとこうやって顎を上げて歩いてきたのだろう。

「あれに比べたら、こういうのは全然平気！」

ナナはそう言って肩をすくめた。

確かに、浴びせられる視線は好機に満ちて無遠慮ではあったが、畏怖と嫌悪はなく、どれも尊敬を込めたまなざしであった。

逆に……この浮足立ったような視線の間を通り抜けても堂々としていられるナナは、やはり『そういう』立場の人間なのだ、なんとなく納得した。

「それでね、私たちの担当は、砂隠れの人たちの宿舎の警備なの」

「へえ、砂か……」

ナナは周囲にかまわず、楽しげに話を進めた。

「里の門から宿舎までの警備と、宿舎から会談の会場までの警備、それと宿舎の出入り口とかお部屋とかを警備する人たちの配置……を、考

えて報告するようにつて、綱手様が」

「要するに、砂の一行の里内の動線の警護と、宿泊施設内の警備の計画案を練れつてことだな」

「……うん！　そうー！」

ナナは、こちらで要点をまとめて言つた台詞を脳内で一周させたように一拍おいてからうなずいた。

こういう仕草を見られたことに、シカマルはふいに安心感を覚えて笑つた。

「んで、その宿舎つてどこの宿だ？」

「んーと……もうすぐ」

ナナはきよろきよろしながらいくつか角を曲がり、「あそこー」と指をさした。

ナナの指の先には真新しい旅館があつた。三階建てのこじんまりとした雰囲気のいい宿だ。

「女将さん、こんにちは」

ナナは扉を開け、快活に女将に挨拶をする。

どうやらすでに、顔見知りのようだ。

「警備の件でお邪魔します」

「はいはい、よろしくお願ひしますね」

「こちらは一緒に計画書を作る、奈良シカマルです」

「どーも」

ひととおりの挨拶がすむと、女将が自ら内部を案内した。

廊下、部屋、窓、出入り口、従業員専用通路……ナナは女将と世間話をしながら歩いているが、自分はしっかりと内部構造を頭に叩き込む。

そう広くはないが、再建して最新の設備を整えている。

構造も複雑で、なるべく客どうしが顔を合わせなくて済むような造りになっているようだ。それだけ防犯性も高く、風影を泊めるのには合格点を与えても良い場所であつた。

「それにしても、あの砂の忍の方が、まさか風影様になるなんてねえ」

女将はしみじみとつぶやいた。

「我愛羅……じゃなくて風影様も、いろいろと努力なされたようですから」

「ご立派になられて……。最近じゃ、この宿も『出世宿』なんて常連さんから言われてねえ」

「繁盛するといいですね」

「風影様の宿舎にお選びくださった火影様と、推薦していただいたナさんのおかげですよ」

「我……風影様が前に、木ノ葉では女将さんにお世話になったっておっしゃってたので」

「まあ、そうですね」

我愛羅たちが木ノ葉に滞在した機会は二度。

初めは中忍試験の受験のため、二度目は……サスケ奪還任務の時だ。

任務失敗という結果が出た時点で砂へと帰還する予定だったのだろうが、彼らは怪我人の搬送と木ノ葉への報告、そして……ナナの回復を見届けるために木ノ葉に滞在していた。

おそらくこの女将は、その時に彼らに宿を提供したのだろう。

「こちらが図面です」

「では、お借りします」

建物内をくまなく回り、最後に女将が設計図をナナに手渡した。

「実際に警備の忍が入るのは、風影様がいらっしゃる前日の夜からになりますから」

「はい、わかりました。前日は午前でお客様が全てお帰りになられますので、いつでも……」

「計画書ができたらまた来ますね」

ナナは宿舎のスタッフとのコミュニケーションと、宿泊先の点検、そして今後の明確な予定の伝達と、全てにおいてそつなくこなし、女将と別れた。

だがいよいよ警備計画を立てようと、宿の屋上へ来ると……。

「シカマル、よろしくー」

図面を広げるなり、ナナはまた目の前で手を合わせた。

「このマークとか、全然わかんない……!」

どうやらナナには、設計図の記号などの見方がよくわからないらしい。

自分もその専門ではないのだが……、こういうことはナナよりは向いている自信があった。

「つたく、お前、最初から丸投げかよ……!」

全然かまわないのだが、面倒くさそうに言ってみる。

「うーん。どこに警備を配置したらいいとかは、なんとなくならわかるんだけど……!」

『計画書』を作るとなるとまとまんねーってか?」

「そう!」

平面の作業が苦手なのは、忍者学校の頃から変わらないらしい。

ナルトとナナがそろって居残っていたのが懐かしかった。

「しよーがねー……!」

ぶつくさといつものように振るまって、図面とのにらめっこを始めた。

すでに構造は頭に入っているから、隙のできない配置を考えて、その中でも最も安全な部屋を風影の部屋と決めれば良かった。

あとは口うるさいテマリが同行することも考慮して、適当に便利さに配慮してやればいいだけだ。

「来週になれば南側に映画館がオープンするだろ。こっちの通りを歩く人が増えるとすると……!ここに二人ずつでどうだ?」

「さすがシカマル!」

「さすが」と言われるほどのことでもないのだが、この調子では思いのほか早く片付きそうだった。

だからあくまで作業を続けながら、口調を変えずに「世間話」を初めてみる。

「お前、ここが前に我愛羅たちが泊まった宿だって、自分で調べたのか?」

「そうだよ。我愛羅もここが気に入ってたみたいだし、そのほうがい

いと思って。建物は変わっちゃったけどね」

風影を親しげに「我愛羅」と呼ぶナナを、改めて観察した。

ナナが短期間だが砂隠れに滞在していたことは、ナルトやサクラから聞いていた。

そこでナナがどんな様子だったのか、ちゃんと教えてくれたのは……ネジだった。

もつとも、彼自身の感情や詳細は語ってはくれなかったが、ナナにとっての我愛羅という存在がどんなものだったのかは自分なりに想像ができたつもりだ。

何よりも、戦場や戦後の焼け野原で彼がナナに向けるまなざしは特別なものだった。

だから……というのもあるのだろう。

せつかく親しい我愛羅が木ノ葉に来るのだから、できるだけくつろげるように取り計らいたいとナナが思うのも納得できる。

が、現状の忙しい身でそれだけのことをこなしていたのかと思うと、やはり少し呆れざるを得なかった。

何故なら……、ナナは先ほど我愛羅たちの中忍試験時の宿舎がどこだったか「自分で調べた」と言った。

それが、今の木ノ葉では多分に手間がかかることだとシカマルは知っていた。

以前であれば、資料室ですぐに調べはついただろう。が、暁の攻撃の後、地下にあった資料室も例外なく倒壊し、内部の資料は瓦礫に交じって散乱していたのをシカマルも見ている。あの中から目的のモノを探し出すのは、かなりの手間がかかるはずだった。

だから、「呆れ」と少しの「嫉妬」を認めつつ、ため息まじりに言った。

「お前なあ、そんなことくらいオレらに頼めつつーの」

ナナは手にしていたシミュレート用の駒を握りしめたまま、少し驚いた顔をした。

「だって、シカマルだって忙しいでしょう？ カカシ先生もシカマルのことすっかり頼りにしちゃってるし」

ナナの言う通り、父親の代わり……とまではいかないが、上層部からは一中忍に任せる内容ではない仕事も少々言い使っている。だから単独での任務が多くて忙しい……というのは事実だ。

が、それを言うならば、やはりナナのほうが多忙であることは明らかだった。

「あー……わかった、わかった」

意外に頑固なこの「親友」は、理屈や口実を並べても素直にならないのを知っている。

だから、シカマルはのんびりとした口調でこう言った。

「こっちはオレがやつとくから、お前はサスケの見舞いにでも行つとけ」

ごくごく自然に空気に溶けたこの台詞に、ナナは素直に目を見開いた。

「え？　なんで？」

その顔を見えますます呆れた。

出てきそうになったため息をそのまま吐き出し、包み隠さず現状を告げる。

「お前がサスケを避けてるんじゃないかって、みんな心配してる。サクラなんか、まるでサスケが里を抜ける直前の時みたいだってな」

「ああ……あの時……」

「まあ、今回もお前とサスケはあんなことがあったんだし……、他にもイタチのこととかいろいろあるんだろ。だから無理もねえが……。だが、様子を見るくらいなら会つてもいいんじゃないか？」

ナナは大きく瞬きをした。

表情に陰りはない。

そのことに、今さらながら安堵した。

「私、またみんなに心配かけてたんだ」

じわりと心がほどけて、苦笑した。

「お前、気づいてなかったのか？」

「やつぱりダメだな、私。そういうの、だいぶ人並みに気づくようになった気でいたんだけど」

ナナは困ったように、そして照れたように笑った。

「べつにサスケを避けてるっていうのじゃなくて、ただサスケは今ほもう『大丈夫』だから、心配してないだけなの」

また、肩をすくめる仕草をする。

「サスケの隣にはナルトがいるから、もう、大丈夫。ひとりでどっかに行っちゃうことはないから」

細い肩とはうらはらに、しっかりとした強い想いをナナは語る。

「それにね、今はちゃんとサスケに考えて欲しいから!」

ナナはその視線を、空に……いや、*“想い”*に向けていた。

「今までのこと、一族のこと、イタチのこと、みんなのこと、里のこと……これからのこと……ちゃんと考えて欲しいの。でも、私が側にいると、どうしても『あの時』のことを考えちゃうでしょう?」

それが何を指すのかはすぐにわかった。

胸に鈍痛を感じたが、黙ってナナの言葉を聞いた。

『あの時』のことばかり考えないでいて欲しいから、だからあんまり会いに行かないの」

「そっか」

ナナが告白した理由に、納得がいった。

それは、誰よりもサスケを理解するからこそその願いであり、サスケを信じている証しでもあった。

加えて、ナルトへの信頼も……。

「心配かけちゃってたみたいで、ごめんね!」

ナナは身を乗り出した。

手元の駒が、カチャリと鳴る。

「でも、サスケがイタチにやられて入院してたあの時とは違うから!

あの時は本当に、サスケと向き合うのが怖くて避けてたけど……今は違うから! 毎朝ちゃんと様子見に行ってるし」

「ああ、わかった。ま、今のお前なら大丈夫だと思ってたけどよ、ちゃんと話聞かせてもらって安心したぜ。サクラたちにも会ったらフオロー入れておく。だからお前も気にすんな」

この言葉に、ナナも安心したようだった。

あの時の……何かに怯え、誰かを拒絶し、ひとりで河原にうずくまっていた頃のナナは、もう居ない。

切り刻まれた心を、自分できっちり貼り合わせて、笑っている。

「さ、コレ並べちゃおう！ あと8人配置できるんだよ」

「ああ、そうだな。最重要ポイントは固めたから、あとは……。つつかお前、今更だけどこの駒どうした？」

「これ？ 陣取りゲームの駒だよ」

「いや、それは見りゃわかるけど、どっからこんなもん持って来た？」

「ああ！ あのね、ハナビちゃんに借りたの」

ナナは自分なりに駒を置いてみながら、この間ネジのことを話して日向家を訪れた際、ヒナタの妹のハナビと仲良くなったのだと言った。

「図面を見て配置を考えるのに便利だと思って、すぐにゲームの駒は思いついたんだけど、まだゲームを持ってそうな年下の子がハナビちゃんしか思いつかなくて……。お屋敷は壊れちゃったけど、瓦礫の中から出てきたから、とっておいたんだって。それを貸してもらったの」

馬鹿丁寧な説明と、そんなことにまで時間を割いて里を駆けずり回るところが、本当にナナらしかった。

「とりあえずお前、任務楽しそうだな」

何気なく、そう言った。

心から出た、安堵と喜びと、少しの呆れの言葉だった。

「私、決めたから」

ナナは手を止めることなくうなずいた。

「一生、木ノ葉の忍として生きるって、決めたから」

思わず凝視したナナの口元は、間違いなく笑んでいた。

「私、産まれた理由が “アレ” だから、自分が生きる意味がわからなかったの」

凝結するような心と対照的に、ナナは穏やかに話し出す。

「一族が大キライだったから『和泉』の名が嫌だった。それでも、一族の術を使わなくちゃならなかった。だから木ノ葉に来て、なりたかつ



た忍になれたけど……、いつも『忍』になり切れていないような気がしてた」

「ナナ、お前……」

「そんな中途半端な自分がずっと……キラ伊だった」

そんなふうに思っていたのか……と、つぶやくこともできなかった。

忍者学校の時のナナ、下忍の時のナナ……あの頃のナナが、例の『使命』や『秘密』だけじゃなく、そんな『葛藤』をも抱えていたということを、改めて知らされた。

「でも今は、ちゃんと自分が『木ノ葉の忍』だって言いきれの」

ふいに、ナナが視線を向けた。

心が裏返るのを懸命に抑え、言葉の続きを待つ。

『和泉』の名は……母から受け継いだから、キラ伊じゃなくなった。それに、和泉の術はどうあがいたって私の一部だから、それに誇りを持つことにした。私は和泉の力も、忍の力も使って、『木ノ葉の忍』として生きるの！」

その声は格別に澄み切っていて、力強かった。

「『向こう』で母に会って、初めて私は母から愛されてたってことを知った。母と父とが愛し合って私が産まれたってことを、初めて知ったの。だから……陰陽師の『和泉』の名も、忍の『うちは』の名も、どちらも私のものだから……」

そしてナナは、幼子のようにはにかんだ。

やっと自分を見つけて、進むべき道を見つけられた幸福が、今のナナの輝きなのだ……そう思った。

「じゃあお前、和泉に帰ったりはしねーんだな」

「するわけないじゃない！ 私はずっとここに居るよ！」

「ずっと」……その言葉が、二人の間に緩く流れた気がした。

「それに、私の『夢』は『火影になったナルトを支えられる忍になること』だから！」

ナナの決意も、想いも、夢も、後悔でさえも、彼女の進むべき道を強く示している。

そう思った。

「お前、これから……」

強欲にも、その未来への確信をさらに強めようと口を開いたときだった。

「ナナ、ここだったか」

「あ、コテツさん！」

先輩の中忍であるコテツが現れて言った。

「五代目から緊急の呼び出しだ。会談の会場へ急げ」

直々にナナをこの任務に就けたにも関わらず、火影はさらに急を要する任務を彼女に入れ込んできたようだ。

「行けよ、やつとくから」

「ごめんね、シカマル。じゃあ、よろしく！」

ナナは手に残っていた駒をこちらに手渡すと、慌ただしく去って行った。

激しく動いた空気は、涼やかで爽快だった。



「そっか……じゃあ、問題ないわけね」

シカマルからナナの様子を聞かされ、サクラは少なからず安堵した。

ナナがサスケに対する想いを実直に語ったというのには、驚きを禁じ得なかった。

が、ナナの言葉は納得ができたし、「あの頃」と比較したうえでの理由が存在しているのなら、その「変化」を喜ぶことができた。

それに、ナナ自身のことを口にしたことも心強い。

きつと、ナナはちゃんと充実した毎日を送っている。

心に引つかかるものがすぐに撤廃できるものではなかったが、それでも、懸念は減った。

シカマルの横顔も、眠たそうでいつもどおりだ。

彼の表情のようにのんびりと……。ゆっくり時間をかけて進めば

いいのだと、改めて思う。

目の前には「未来」がある。もう、哀しい別れはないのだから。しかし、やつとそう思えたサクラの心が、再び激しく掻き乱れることとなる。

それは、数日後……火影会談の前日のことだった。

## 花嵐に散る涙

火影会談を翌日に控え、サスケの居る病室で打ち合わせが行われていた。

サスケに書かせたこれまでの全行動に関する報告書の回収と、会談中に行われる彼への『尋問』に対する対応について話し合うためである。

この場に自分が呼ばれたことを、サクラは心から喜んでいた。

が、その喜びはサスケの平坦で突飛な言葉に、無残にも打ち砕かれた。

「オレは……木ノ葉を出て世界を旅することを願い出る」

一瞬で、指の先まで冷たくなった。

確か、綱手の「これから先の身の振り方」について希望を聞かれたその答えだった。

サスケは今、何と答えたのか？

「た、旅に出るって……？」

それは、すんなりと受け止めきれるものではなかった。

これからずっと彼が「ここ」に、この里に居るのだと……、彼は木ノ葉に「帰って来た」のだと思っていた。

憂慮すべきは、五影たちによつてサスケの罪に厳罰が下され、彼が投獄されてしまうことだったはずだ。彼の自由が奪われることを、恐れていただけのはずだった。

それなのに……。

「ど、どうして……」

サスケは一度、視線をくれた。

やっと自分を見てくれた……そう思ったのも束の間、彼の言葉がわからなくなった。

旅の目的を、彼は淡々と皆に説明していた。

「世界を見たい」とか、「罪を償う」とか、「忍の未来」とか……。

それらは耳に入っては抜けて行き、とても理解できるものではない。

かった。

いや、理解などしたくはなかった。

「願いはあったのだ。五影会談が終わった後、サスケは許されて木ノ葉の忍に復帰する……と。そうしてまた第七班として、ナルト、サイ、ナナ、サスケ……みんなで日々を過ごしたい、と。」

甘い考えなのは認めるが、五影が理解を示してくれないとも限らなかった。

希望はあると思っていた。ナルトとナナ、二人の「功労者」が嘆願すれば、叶わぬ願いではないと思っていた。

だが。

「それがお前の望みってわけか」

「ま、理解はできるけどネ」

サスケの意志を聞き終えて、綱手も力カシも、最初の驚きを引つ込めた。そして質問などはせず、ため息のようにそう言った。

そこで初めて、サクラは周囲に気をやった。

サイは遠慮してここに来なかったが、ナルトとナナ……まだ二人も仲間がいるではないか。

「そ、そんなの駄目よ、サスケくん！　せつかく帰って来たのに！」

うまく言葉が出て来はしなかったが、自分だけでそれを言うのではないと思った。ナルトもナナもきつと、自分に同意をしてくれるはずだから。

「だからよー、オレも何度もそう言ったんだけど……。どうしても、それが『最善』だって曲げねーんだ。コイツってば」

ナルトがふてくされたように言った。

彼は事前に、サスケからこのことを聞かされていたのか……。

「また一緒に任務できると思ったんだけどよー……」

そして、半ば説得を諦めてもいるようだった。

「そんなんっ……」

サクラは勢いよく視線を別方向に投げかけた。

この乱れ狂う心を、共有しているはずのナナに……。

「ナナ！　ナナからも説得してよー！」

ナナはじつとサスケを見ていた。

彼女は今、初めてサスケからこの意志を聞かされたようだった。だからきつと、動揺している……そのはずだった。

が、不意にナナは笑った。

「いいと思う」

強がりとか、やせ我慢とか、投げやりとか……ではなかった。

そうでなかったのが明らかにわかってしまったから、サクラは言葉を失った。

「サスケの言ってることは納得できるし、サスケにしかできないことだと、私も思う」

……あの時とは違った。

サスケが里を抜けた時。

ナナはうつむいて、頑なに、サスケを追いかけようとはしなかった。引き留めることもなかったと、自ら告白した。

あの時感じた、どうしようもない怒りは湧かない。

それだけに……心に涼しい風が吹き抜けた。

変わってもなお……ナナが選ぶ「答え」は同じなのだ。

「でもよー、ナナ……。ちよつとくらい木ノ葉に居てもよくなーか？」

「まあ、そうだけど……。サスケが言う『戦争の直後である今』じゃないと、見えないモノもあると思うしね」

ナルトは頭の後ろで手を組んでナナに同意を求めているのだが、彼自身もサスケの意志とナナの意見を変えられないことはわかっているようだった。

「せつかくまた第七班で任務できると思ったのによー……」

口を尖らせるナルトに同調する台詞を、サクラは必死で探した。

うつむけていた視線を上げ、まっすぐにサスケを見る。その、途中で削がれた左腕を……。

「綱手様が、柱間様の細胞で義手を作れるかもしれないって、この間おっしゃったでしょう？　せめてそれができてからじゃ駄目なの？」

サスケはこちらを向いてくれた。

かつてないほど、淀みなく、冷たくもない目で。

「この身体だからこそ、見えるものがあると思っっている」

「で、でも……」

「すまない、サクラ」

謝罪の言葉が胸に刺さった。

彼からのやさしい言葉が何より嬉しいはずなのに、今はただ、痛いだけだった。

その目が、「心配をしてくれてありがとう」と素直に言っているような気がして、思わず目を伏せた。

「本当にいいんだな？ ナナ」

低い声で綱手が問う。

ナナは、間髪入れずにうなずいた。

「じゃあ明日の会談では、サスケの意見を認めてもらえるよう、お前も嘆願するってことでいいんだな？」

「はい、そうします」

諦めたようなカカシの声にも、ナナはさすがしく答える。

会談では、ナナがサスケの赦免を「嘆願」できる機会があるという。

それにも関わらず、サスケが「里を去る」ことを嘆願しなければならぬことが、もどかしくもあり、歯痒くもあつた。

自分なら……「一緒に行く」と、この場で言うのに。

暴発しそうな想いを必死で押し込めて、ため息をつく。

いくら未来が広がっていたとしても、重ならなければ意味がないではないか。

そうやって、この期に及んで「強く」いられるナナが、やっぱり、歯痒かった。

せめてこの苛立ちに似た感情を少しだけ表に出してみようかと思つた時、部屋の扉が遠慮がちに叩かれた。

向こうから名乗ったのは、シズネだった。

綱手の許しで扉が開くと、シズネは奇妙な表情でナナを見た。

「あのー……。和泉の……。なんていうか、お使いの人……。？ が来るのよ。なんか、怖いのが」

「はあ？ 何をいつているんだシズネ」

めつたに見かけないシズネの歯切れの悪い様子に、綱手のみならずサクラも驚いた。

「ああ、式神ですね」

「そ、そうなの？ そのシキガミっていうのが、『迎えの者が間もなく木ノ葉に到着します』って」

得体の知れないモノを見て、シズネはよほど戸惑っているようだ。

「『迎え』とは例の件だな？」

「あ、はい。行ってもいいですか？ 綱手様」

「本当にここへ迎えなくていいのか？」

「はい。非公式でとのことなので。それに、『火影様』も会わないままのほうが、いろいろと都合がいいですよね？」

「そうか……」

綱手は少し考えて『行く』ことへの許可を出した。

「里長たちの到着は明日の早朝だ。出迎えはできるか？」

「それまでには戻ります。里門で待機ですよね？」

そう言うと、ナナは皆に挨拶をして、いつもの調子で朗らかに去って行ってしまった。まるで、今まで話していたことの『重さ』など、感じていないかのように……。

その姿は、鬱々とした感情を持って余す自分とは、まるつきり正反対だった。

「師匠、『例の件』で何なんですか？ 式神ってことは、和泉の里の関係ですよ？ ナナはどこへ行ったんですか？」

それを少しだけぶつけるように、師に問うてみた。多少のイライラは隠しきれない。機密だと言われても、食って掛かるつもりだった。

今している話より、ナナにとって重要なことがあってたまるか……という気持ちなのだ。

「ああ……。和泉神社の巫女が、近々、和泉の里へ帰られることになったんだが。けっこうなお年寄りらしくてな。和泉の里から迎えの方が来ることになっていたんだ」

綱手はあつさりと内容を答えてくれたのだが、困ったような顔をし



ていた。

「もともとは、ナナが送って行くってだけの話だったんだが……。恐らくは和泉の里からの『目付け役』ってところだろう」

その理由を言ったのはカカシだった。

「和泉神社にも、和泉式陰陽道に関する文献とかがあるだろうからね。それが木ノ葉に渡らないかとか……。まあ、そんな懸念を持っているんだろう」

秘せられた一族への畏怖と、一族のことを語ったときのナナの冷たい声が蘇った。

同時に、ナナはもともと『和泉神社の巫女として生きる』はずだったというのを思い出した。

それを、どうしても忍になりたくて忍者学校アカデミーに入ったのだと。

その理由は、一族への反発と自立心。そして、うちはイタチへの憧れだった……。と、ナナは言っていた。

だからこそ、今もナナは木ノ葉の忍として精力的に働いている。

誰もが認める、木ノ葉になくてはならない忍にまでなった。その名を里外にも轟かせ、里長たちの信頼も得ている、特異な存在だ。

きつと、これからも……。

それがナナの生き方なのだろうと、そう思った。

自分は……。

やっぱりまだ、全てを捨ててでもサスケを選ぶ気持ちがあった。

たとえ木ノ葉の忍であることを放棄しても……。サスケと一緒にいたいと、そう思っていた。

## 石蓮花

朝霧の向こうにそびえ立つ、木ノ葉隠れの里の門。

この門をくぐるのは、三度目のことだった。

故郷とは違う湿気の多い空気に悪態をついていた姉も、その門を見とめて機嫌を直したようだ。

「暁にやられたっていうけど、あの門は無事だったんだね」

そう言つて、霞の中に立つ人影に向けて手を上げた。

「アイツ……わざわざ出迎えてくれてるじゃん」

心なしか、兄の声も少し弾んだようだった。

「遠いところお疲れ様でした!」

靄を吹き飛ばすような、爽やかな風のような声がかけられた。

「木ノ葉へようこそ!」

門からこちらへ駆けて来て、ナナは笑った。

「今日は、よろしくお願いします!」

出迎え役としての台詞を勢いよく述べる。

彼ら一行も訪問者として挨拶をすると、ナナは里の中へと案内した。

「昨日はどこに泊まったの?」

「笹飾り村だ。静かでなかなか良いところだったよ」

「隣の短冊街には土影一行が泊まってみたいじゃん」

「そうなんだ! 短冊街なら近いから、次にお見えになるのは土影様たちかな」

「私たちが一番乗りかい?」

「ついさつき水影様が到着されて……。ちようどご案内して戻ったところだったの」

カンクロウ、テマリと話すナナは、とても元気そうだった。早朝の薄明りでも、ナナの笑顔は映えている。

「ナナ、元気そうだな」

ふと、思ったことがそのまま口に出た。

兄と姉からの視線が気になったが、それらは自分を向いてはいなかった。どうやら二人も、ナナの様子をうかがっているようだ。

「うん、元気だよー!」

朝露が跳ねるようなその声音に、心から安堵した。

本当は、まだ心配事はのこっていた。

これから行われる五影会谈の一部で、うちはサスケへの尋問が予定されている。

そこでは当然、彼が木ノ葉を抜けて大蛇丸の元へ下り、さらに暁に組みした経緯を話させることとなる。

それはつまり、その原因……原動力となった、“うちはイタチ”のことについても彼の口から語られることになるのだ。

そして、サスケの話を裏付けるためには、ナナにも話さなくてはならない。戦場に現れるまでのサスケの行動を知っているのはナナだけだ。

だから、ナナもイタチのことを皆の前で証言しなくてはならない。

きつとナナは、平然とした顔ですらすらと……一族の話をしたときのように語るのだろう。

それを思うとやはり、ナナの感じる痛みを懸念せざるを得なかった。

「我愛羅は元気だった? ずっと忙しかったでしょう?」

だがナナは、澄んだ瞳をまっすぐこちらに向けて来る。まるで、これから起こる憂鬱な出来事を知らない子供のようだった。

「ああ、まあな。相変わらず慌ただしい毎日だ」

実際、目の回るような日々が続いていた。

砂隠れの里は、雲隠れや木ノ葉に比べれば、暁や戦争の被害が甚大というわけではなかった。戦後の混乱は、すでに表面上は落ち着いている。

だが、見た目にはそうであっても、多くの者が死んだという影響は多方面に出ている。

単純に、里の運営における人手不足。そして、仲間の死に直面した者たちの心理的な打撃。

それら全てをケアしなければならぬのが、里長としての務めだった。

だがそんな日々でも、ナナのことを考えない日はなかった。

心によくやく栄養を得たような姿を目にしてはいたものの、今日のこの日のことを考えると、やはり不安だったのだ。

「ナナ」

だから、先んじて尋ねた。

「お前も参考人として呼ばれると思うが、大丈夫か？」

愚かな問いである。忍に、「この任務が受けられるか？」と問うようなものである。

自分自身を安心させるための自己満足でもあった。

が、ナナは力強くうなずいた。

「私は平気！　ちゃんと話すから」

意図を察しないような、鈍感な人間では決してない。

それでも、ため息はこぼれ出た。

「サスケのことを証言するのなら、うちはイタチのことも話さなければならぬんだぞ？」

ナナは表情を少しも変えずにいた。

そして、こう言う。

「本当は、イタチのことを話すのはすごく辛いけど……、特にサスケの前で話すのはね。私たち、イタチの話をしたことなんて一度もないから」

胸の痛みを明け透けに告げられて、やはり我愛羅の胸も痛んだ。

「正直、まだ、イタチのことを思い出すと悲しくなっちゃうのかな……」

だが、ナナの瞳にあの影は浮かばなかった。

哀れにも美しいあの影の代わりに、淡い慕情を浮かべている。

「でも、私がちやんとイタチのことを話せば、五影様たちにはイタチがどれだけ立派な忍だったかって、わかってもらえると思うの」

そこに一瞬、強い意志が煌めいた。

「忍の歴史に、『うちはイタチ』の名前が『悪者』として刻まれてても

……今の五影様たちの心に、イタチがしたことが残ってくれば、それでもいい」

「ナナ……」

「きつとサスケも、そう思ってる」

そう言ったナナの晴れ晴れとした顔を、清々しい朝の日が照らしていた。

次にナナの姿を見たのは、会談の昼休憩の時だった。

無骨だが、木の香りの心地よい円卓が置かれた議場に、ナナは満面の笑みで現れた。

早朝からの会議の疲れと、思いのほかはかどらない議事進行に、少々重たくなっていた空気が一気に和らいだ。

「昼飯はナルトが勧めたものにした。口に合うかどうか……」

火影が少々不安げに皆に言う。

だが、ナナは自信ありげにその品を運んで来た。

「ナルトのお勧め、『一楽ラーメン』です！」

そして、岡持ちから注意深くどんぶりを取り出す。

なんとも言えない、食欲をそそる香りが部屋中に漂った。

「ナルトのたつての希望だな。五影の皆が木ノ葉に来るのなら、ぜひともこのラーメンを食べて欲しいと……」

「ほんつとうにおいしいですから！ 召し上がってみてください！」

他の木ノ葉の忍とともに、ナナは円卓をまわってどんぶりを配って行く。

「風影様は『とんこつ』だって、ナルトが」

ラーメンに色々な味の種類があることは知っていたが、どうやらナルトの自分へのお勧めは「とんこつ味」だったらしい。

理由はわからないが、とにかくうまそうだった。

「水影様は『しょうゆ味』をどうぞ……。土影様は『みそ味』で……」

と、そこへ……。

「全部、チャーシュー大盛りにしてもらったってばよ！」

親指を突き立てて、うずまきナルトが登場した。

「コラ、ナルト！ 休憩中とはいえ、五影会談の最中だぞ！」

と、火影に叱られるが……。

「いやあ、お客に料理を出すときは料理の説明がつきものだろう？ オレが一番うまく一楽の味を説明できるってばよ！」

へこたれる様子もなく、議場に足を踏み入れた。

どんぶりを配り終えたナナが、後ろでくすくすと笑っている。

「ナナ……お前が呼んだな？」

「えーと……なんのことでしよう」

火影の睨みを緩やかに交わすナナの様子は、なんだか新鮮だった。

「ナルト、具合はいいようだなー！」

まあいいじゃないかと言って、雷影がナルトを呼びつける。

「ワシのは『とんこつ』か。ちゃんと説明しろよ」

「オツスー！」

ナルトは跳ぶように円卓を回って雷影の側へ行き、ラーメンについての説明を始めてしまった。

「しかたないヤツだ……」

火影は大きいため息をついて、こう弁明をした。

「サスケのところには暗部をつけて見張ってあるから、皆、安心してくれ」

ナルトは、サスケの見張り役を任されていた。

それを、火影のこの言葉を聞くまですっかり忘れてしまっていた。

「ワシら五影が勢ぞろいしている目と鼻の先で、そうそう悪さをするヤツはおらんぜよ」

土影が豪快に笑い、レンゲでスープを飲む。

「麺が伸びてしまわないうちにいただきませう」

水影も、さして気にはしていないようだった。

「はい、風影様、お水どうぞ」

ニコニコしながら水を注ぎ足すナナに促されるように、我愛羅もラーメンに手を付けた。

たしかに、わざわざ五影会談で振る舞うほどうまくいった。砂の里に

はない味だ。

午前の重苦しい雰囲気は嘘のように、場はそれぞれのスープが共演した良い香りと、なごやかな空気に包まれている。

何といっても、太陽のように明るい男がこの場を「議場」からただの「食堂」へと変えてしまっていた。

「そんなこと言ってワシらの機嫌をとったところで、サスケの差配は変わらんぞー！」

本気なのか冗談なのか、雷影がナルトに言った。

我愛羅の箸を持つ手が一瞬止まったが、ナルトは照れくさそうにこり返す。

「そこをなんとか！ 頼むってばよー！」

単純明快な彼の仕草は、緊張どころか笑いを誘った。

「こんなに馬鹿正直に真正面から交渉する忍など、他におらんぜよ」

「ったく、少しはおとなしくできんのか、ナルト！」

「だってよー」

ナルトは左手だけで、拝むようなポーズをとって皆を見回した。

「サスケのやつ、ちゃんつと反省してつから、なんとか牢屋にぶち込むのだけは勘弁してやってくれてばよー！ な、ナナ！」

面白そうにうなづくナナを横目に、今度は水影が口を挟む。

「なるほど。それで今朝、わざわざ門のところで私たち全員を出迎えたのですね」

ナナは肩をすくめた。

「そうなんです。私たち、ええと……アレです。ゴマをすってるんです！」

これに嘖き出したのは、今まで忍たちのやり取りを黙って見守っていたミフネだった。

ばつが悪そうに、火影が大きいため息をつく。

「もういいお前たち。さっさと片づけて出ていけ」

こんなあからさまな策など、かえって逆効果だと言いたいようだ。

もつとも、通常ならばそれが正論である。

「でも、みんなうまそーに食ってくれてよかったってばよー！」

「テウチさんに無理言ってお願ひしたかいがあったね、ナルト」  
二人が、片づけながら小声でそう話しているのが聞こえた。  
彼らがそう深刻そうにしていなかったことは、我愛羅にとっても救いだった。

気が重かったのは、自分たちのほうだったのかもしれない。

二人は楽観的というより、あれはきつと……どんな結果を宣告されても、受け容れる覚悟があるのだろうかと思っただ。

たとえば「投獄」という結論を突き付けられても……それでも二人は変わらずサスケの側に在り続けるのだ。

これからはもう、離れることはなく。いや、たとえ離れていても……。

「これでサスケの件はバツチリだってばよ！」

「うまくいくといいね」

「雷影のおっちゃんもゴキゲンだったからよ、大丈夫だってばよ！」

「聞こえているぞ、お前たち!!」

火影の怒鳴り声に、二人は戸口で肩をすくめた。

「ほ、ほらほら、もういいから早く行って……！」

二人の背中を押し出そうとするのは、火影の側近のシズネだ。

「そ、それじゃあこのへんで、しつれーしまーっすってばよー！」

「失礼します！」

同時に言っただい角度で頭を下げる様は、まるで双子のようだった。

そしてさらに二人は、同じ視線をこちらによこす。

その意図はすぐにわかった。

(サスケをよろしく)

あからさますぎて、とうとう我愛羅も噴き出さざるを得なかった。

「ほんつとに困ったヤツらだ。会谈の緊張感が台無しじゃないか！  
ただでさえ進行が遅れまくってるのに……！」

火影が、こちらを横目で睨みつけながらぼやく。

苛立ちと呆れが頂点に達しているようで、いつになく眉間の皺が濃くなっていた。



「まあまあ、こんなことで懐柔されるワシらでもあるまい」  
意外にも、彼女をなだめたのは土影であった。

「し、しかし……」

「火影様、今は会議も休憩中ということでしたし、二人の元気そうな姿を見られて安心したので良かったではないですか」

「いやいや、懐柔されてもおかしくないほど美味しいラーメンだったぞ！」

雷影までもが、そんな冗談を言って笑っている。

「お前たちはアイツらに甘すぎだ！　ウチの里の若い忍を甘やかしやがって……！」

「ま、そのほうが我々には都合が良いということ……」

「カカシ、お前まで何を……！　だいたい二人ともお前の部下ではないか！　お前がちゃんと躰けておかんからああいう……」

「つ、綱手さま、後片付けも終わりましたので、そろそろ会議の再開を……！」

シズネの言葉で、ようやく火影は椅子に座り直した。

我愛羅はもう一度、誰にもわからないように笑ってみた。

今日のこの日……最も緊張感を高ぶらせているのは木ノ葉の連中なのだ。

それを、“当事者”とも言えるナルトとナナがあの様子では、火影が怒るのも無理も

はない。

拍子抜け……というか、こちらの気も知れず……という苛立ちか。

「長」と呼ばれる立場であるからこそ、火影の気持ちも飲み込めた。が、きつとナルト……はどうかかわからないが、ナナは当然、そういう状況も全てわかったうえで、あのような振る舞いをして行ったのだろう。肩の力が全く無いのは、強がりではなかった。

これから予定されている“証言の時”になっても、きつとナナはまっすぐ前を向いて言葉を並べるだろう。

今までの五影会談のように。

午後9時。

我愛羅たちはようやく宿に入り、遅い夕食をとっていた。

とはいっても、達成感は少しも無い。

というのも、明日の早朝に木ノ葉を出る予定が変更になっていたのだ。

今回の五影会談は、早朝から会議と尋問を初めて、この時間に決議まで至るはずだった。

そもそも里長どうしの会合は、たいていが短時間……長くて一日というのが常識である。

里長がそう長く里を開けていられるはずもなく、ましてや他里に入り込んでいる状態を数日も続けられることなど考えられなかったのだ。

忍の里の歴史が始まって以来、一泊の宿を他里に提供するようになったのは、忍連合を結成してからなのである。

今回も、今までの数回の会談と同様に、十数時間の話し合いの末、木ノ葉が用意した宿で少し休憩をとってから、それぞれの里へ帰って行くという予定になっていた。

それで十分なはずだった。これまでの会談である程度の道筋は立てて来たし、それぞれの里の意図も擦り合わせができていた。

カブトとサスケの尋問はいわゆる「最終確認」であり、最後の決断を下すための足りないピースを埋めるための「儀式」という認識だった。

我愛羅だけじゃない。他の長たちもそう考えていたはずだ。

だが、そううまく事は運ばなかった。

カブトとサスケから語られる「重要事項」があまりに多すぎたのだ。

何故なら、二人は大蛇丸という重要人物と関連していた。それも、とびきり深い関わりだ……。

二人から情報を引き出すことも、尋問の目的のひとつに掲げられてはいたのだが、その情報量は想定外に膨大で、予定を大幅に超える時間を擁してしまったのだった。

ただ、心配していたことが今日中に滞りなく片付いたのは良かった。

それはもちろん、「ナナの証言」である。

ナナはやはり、冷静に、淡々と、うちはイタチとサスケのことを語った。

ナナの声を聞きながら、また胃の底のほうが痛んだ。

彼女がどんな想いで、触れられたくもない話をさせられているのか……そうさせてしまっている一人として、罪悪感もあった。

が、ナナはちゃんと、我々に「痛み」を見せてくれていた。

無理矢理に悲しみを押し殺して、強がりやヤケクソで話をするのではなく、ちゃんと……悲しみを乗り越えようとしている姿を見せてくれた。

言葉でも……。

『この話をするのは、まだ辛いんです』

傷ついた笑みで肩をすくめ、そう言った。

だから本当に安心したのだ。ナナはもう……「ひとり」ではない。彼女自身がそのことを知っている。

ひとりで全部を背負い込むことは、もう無いのだ。

「それにしても、木ノ葉は飯がうめーじゃん！」

「昼に出されたラーメンも、砂じゃあ口にできない味だったね」

こちらの気を知ってか知らずか……いや、きっと察したうえでのことなのだろう。

兄と姉は、会談のことはいっさい口に出さず、ときおり給仕する女将や仲居と談笑しながら食事をしている。

ふと、以前の滞在を思い出した。

サスケ奪還支援後の滞在ではない。あれは辛すぎる……。中忍試験で初めて木ノ葉を訪れた時のことだ。

あの時の自分たちは、周囲の全てが敵だった。他者との関わりを好まなかった。宿の者とは最小限の会話しかしなかったし、高圧的な態度で接していたように思う。

自身も、姉兄とこうして食卓を囲むすら考えられなかった。

が、今は……笑顔を浮かべながら親しげに女将や仲居と話す二人を見て、大きな変化を感じていた。

きつと女将たちも、こちらの変貌に驚いているだろう……。そしてきつと、殺気を漂わすだけだった自分が風影になり、彼女らのもてなしにくつろいでいることに、心底驚愕していることだろう。

そんなことを考え、ようやく緊張感がほぐれたのを実感した矢先……。ふすまの向こうから、来客を告げる仲居の声がした。

「みなさん！ こんばんは！」

「お邪魔しまーす」

「つたく、返答も待たずにいきなり開けんな！ ヘタすりや殺されるぞ」

ここは風影の宿泊所。最上級の警備が手配されていることをこの目で確認した。

それなのになぜ、「来客」が……。

などと考える暇もなく、ふすまは勢いよく開かれた。

「お、お前ら……！」

カンクローとテマリも、無遠慮に入って来た者たちを見て目を丸くする。

「差し入れをお持ちしましたよ！」

そこには、菓子やら飲み物やらを手にした、リー、シカマル、そしてナナが居た。

「ごめんね、食事中に」

「ご飯はみんなで食べたほうがおいしいですからね！」

決して狭くはない座敷だったが、一気に室内の温度が上がったような気がした。

「い、いや……」

「別にかまわねーけど……」

戸惑いを見せるカンクローとテマリに答えるかのように、シカマルが言った。

「一応非公式ってことで……。接待つーより、ただ『中忍試験』の同期のよしみで、ちよつと話そうってカンジだったんだが……」

一応、すまなそうな、言い訳のような態度ではあったが、彼もさつさと持参した飲み物を開けている。

「せっかく木ノ葉に来てくれたんだから、いいよね」

ナナが言うと、カンクロウとテマリも笑った。

「ナルトは連れて来られなかったの。昼間の件で綱手様が怒っちゃって」

この期に及んで、彼女はまたうずまきナルトをサスケの監視役からはずそうとしていたようだった。

しかしそれは、サスケのためでないことはわかっている。ナルトのためだけでもない。

我々、砂の一行のため……それを考えてくれているのだ。

だから、この五影会談と直接的に関わりが無いであろうリーを連れて来てくれた。

「五影会談の内容は一切聞かぬーし、もちろん『ゴマすり』もなしだ。ただ、馴染みの面子が木ノ葉で揃ったってコトで、まあ、楽しくやろーぜ」

シカマルが、念を押すかのようにそう言った。

こちらの懸念を、彼はちゃんと飲んでくれている。暗に、責任のありどころも自分たちにあるとも言おうようだった。

「そうですね！ 里や立場は違えど、ボクたちが培ってきた友情は熱く燃えているじゃないですか!!」

「シカマル、『ゴマ』は擦っちゃいけないの？」

「ナナ……お前、その単語、気に言っただろ……」

この様子には、さすがに笑いがこみ上げた。今までのナナを案じていた重い気分が、ふわりと浮いた感覚だった。

それは、ナナ本人が元気そうにふるまっているだけでは感じる事ができなかつただろう。

ナナの友人たちもまた、不安の影を見せない様子なのが、この安堵感を引き出してくれたのだ。

「そんなに擦りまくらなくても、サスケの件は我愛羅がなんとかするじゃん」

酒に酔っているのか、それとも場の雰囲気には酔っているのか、カンクロウが調子の良いことを言った。

だが、テマリは咎めなかった。

自分も何も言わずに、ナナに差し出されたみたらし団子を頬張った。

「それにね、明日、会談が終わってもお見送りができないから、今日のうちにたくさん話しておきたかったの」

このナナの言葉に、カンクロウがすぐさま反応した。

「はあ？ お前、まさか明日、任務が入ってんのか?!」

「うーん。任務ってどうか……」

顔を見合わせるテマリとカンクロウに、ナナはゆっくりとした口調で説明した。

「前に話したでしょう？ 木ノ葉の和泉神社の巫女が、里に帰ることになったって。明日出発だから、念のため私が送って行くの」

このことを、自分は火影から聞かされていた。それは付き人たちが席をはずしていた時であったため、二人は知らなかったのだ。

だから、二人はナナに自分が火影にしたのと同じ質問をした。

「ど、どうしても明日じゃなきゃだめなのかい?」

「今さらお前が護衛じゃなくてもいいんじゃないよ?」

困ったようなナナの代わりに、答えたのはシカマルだった。

「木ノ葉の和泉神社に、和泉一族の人間が居たってことは、広く知られたわけじゃねーけどよ、道中、悪意を持った何者かに狙われないとも限らねえだろ。情勢もまだ安定してねえしよ。だから、世間が五影会談に目を向けてるこの機に、うまく『脱出』させようってワケだ」

「まあ確かに、今最も危険なのは、『移動中』の五影だからね」

「それによ、和泉の里の『場所』が秘匿されてる以上、関係ねー人間が護衛に就くわけにもいかねえだろ。だからナナなんだよ」

「それはわかるけどよ……」

「それにね、私はよくわかんないんだけど、和泉式陰陽術で『星の巡り』を占うと、明日が一番日取りが良いんだって」

もう一度、カンクロウとテマリは顔を見合わせた。そして、こちら

を見た。

二人の懸念事項は手に取るようにわかっている。

「けどよ、明日は『サスケの判決が下る日』なんだぞ？」

「そうだよ。アンタがいなくちゃはじまらないんじゃないのかい？」

たまりかねたように、二人は直接それをぶつけた。  
が。

「ああ、大丈夫！　結果が出たらサイが知らせてくれることになってるから」

肩透かしを食らわせるように、ナナはあっけらかんとそう言った。

二人は、結果がナナに迅速に伝わらないことを心配しているわけではない。そんな重要な日に、その結果を「待つて」いなくて良いのかと聞いているのだ。

五影のナナに対する印象はすこぶる良かったが、それでサスケの件を楽観視するほど、ナナは愚かではない。

自分はともかく、五影たちは鼻肩目など一切持たず、サスケの尋問の続きを行つたうえで然るべき判断をくだすはずだ。

サスケの罪を許して木ノ葉の忍に戻すことを認めるのか……それとも、罪を重んじて投獄するのか。

善か悪か。害か益か。

複雑な事情を抱えた人間を裁くのは難しい……。

「ナナ、オレは公正に判断しても、最初からうちはサスケには恩赦を与えるべきだと思つている。今後、再び木ノ葉の忍として尽すのが、サスケにとつての償いにもなるし、木ノ葉や世間のためにもなる。だが、他の影たちはオレよりももっと多くの人間を見て来た経験者だ。だからこそ、サスケへの差配は今回の会談まで先延ばしになった。だから……」

特段、改めて言う必要もなかった。そんなことを言わずとも、ナナは良く知っている。

だが、どうしてももう一度ちゃんと伝えたかった。

いや……、この「不安」をナナに共有して欲しかった。  
明日、サスケがどうなるか……。

彼には特別な共感があったから、風影としても、個人としても、彼にはもう一度のチャンスを与えて欲しかった。彼がこれから先、光の道を歩けるような結果を望んでいた。

自分自身が、闇から救われた身だからでもある。

それに第一、ナナの悲しむ姿を見たくはなかった。

ナナの悲しみも、ナルトの失望も、この戦争で疲れ切ったままの精神では、受け止めきれぬ自信がなかった。

この「不安」を、ナナと分かち合いたかった。ナナがそれを押し殺しているのなら、友である自分に見せて欲しかった。

だが、ナナはじつとこちらの目を見つめて言った。

「明日、サスケがどうなったとしても、私は平気だから」

さらりと、露が葉を伝うように。

「五影様たちがサスケにどういう判断を下されても、私は平気」

「またも、強がりや冗談には聞こえなかった。」

嘘ではない、これが今のナナの真実なのだろう。

「ナナ……」

が、困惑はした。

そういう表情も、表に出ていると自覚している。

「心配しないで、我愛羅」

それを、ナナも知っている。

だからきつと、この困惑を風ぐのように、ナナは思い切り笑みを見せるのだ。

「私はもう、ちゃんと自分の生き方を見つけたから」

「今までもずっと、〃ちゃんと〃自分の足で棘の道を踏みしめて来た者が、そう言った。」

傷ついて倒れそうでも、顔を上げ、歯を食いしばって歩いて来たくせに……。



だがこの笑みは、その痛みや後悔の上に立って浮かんだものなのだ。

陰のある笑みは好きだったが、今のナナにそれはなく……ただ未来への希望に満ちている。

それを確かめるべく、彼女の隣に居るシカマルを見た。この想いを保証するかのように、彼はそつとうなずいた。

だがこの時、我愛羅はまだ知らなかった。

尋問の最後、サスケが口にする “望み” を……。

## 何度別れを繰り返しても

クチナシ色の月が、木ノ葉隠れの里を照らしていた。

五影会談が無事に終了し、緊張から解放された里内は静けさに包まれていた。吹き抜ける風は穏やかで少し暖かく、埃と木材とペンキの匂いを漂わせている。

その、無人の通りを駆け抜ける者が居た。

たった今、一族の者を送り届ける任を終えて帰還したいはずみナナである。

本来であれば、火影に首尾を報告するはずだった。

だがこの時間はさすがの火影も休んでいる頃だったし、予定よりも早い帰還だったから、報告は急務ではなかった。それに、火影から言い渡された木ノ葉の忍としての正式な任務でもない。

ナナはそう判断し、非常灯だけが灯る火影邸を横目に裏手の崖を上った。

そこは、〃あの場所〃へ続く道だった。

ここへきてようやく、ナナは足の運びを緩める。乱れた息の整え方は十分に心得ていた。

急勾配をやり過ぎ、雑木林を抜け、草地に出る。月の光を浴びた下草が、さわさわと揺れながらナナを迎えた。

そして……。

「サスケ」

そこに、彼女を待っている者が居た。

「いいの？ ひとりで出歩いて」

ナナは茶化すように、彼に言う。

五影会談で「サスケの希望」が通ったことは知っていたが、同時にそれが施行されるまでは現状通り事実上の「幽閉」が言い渡されたことも伝え聞いていた。

「ナルトのヤツが気を効かせてくれた」

二人は微妙な距離を開けて向き合った。

「ずいぶんと早かったな」

「静葉様が途中で『もう帰っていい』って言うてくださったから」

「……そのことを報告に行かなくていいのか？」

「予定より早いし、『任務』ってわけでもないから明日にする。綱手様も、もう寝ちやってると思うしね」

「だったら……」

少し溜めて、サスケは問う。

「何故……、家に帰らないんだ？」

ナナは笑った。その問いが、「わざとらしい」とでもいうように。

「サスケがここで待っていてくれる気がして」

その言葉に、サスケは驚かなかった。全く表情を変えないまま、ただ立っていた。

「サスケの方こそ、なんで“ここに”に？」

サスケは一度目を逸らし、そしてまたまっすぐにナナを見つめて言った。

「オレも……今夜、“ここに”でお前に逢える気がした……」

この二人の必然を憂慮しているのか、それとも祝福しているのか……、細い葉たちがざわざわと震える。

「お前に……話したいことがある」

「私も、サスケに話がある」

同じ言葉を差し出し合い、それから一呼吸置いて、自然と口を開いたのはサスケの方だった。

「もう知ってるんだろうが……、五影たちから正式にオレの要望が認められた」

「うん、聞いたよ。良かったね」

「お前やナルトが五影たちに掛け合ってくれたおかげだ」

「綱手様とカカシ先生もね」

「ああ……。感謝している」

二人が交わす言葉は、時を惜しむかのようにとてもゆっくりと流れた。

「それで、いつ出発するの？」

「一週間後だ」

「そう。じゃあ、急いで準備を始めないとね」

サスケは一瞬、瞑目した。

そして再び零した言葉は、しっかりとした道を踏みしめる覚悟を決めた人の、ゆるぎないものだった。

「オレは……。罪を償う旅をする」

闇に生き、闇しか見てこなかった自分が、光の方へと救い出された。己の過ちに向き合い、それを認めて後悔している。

自分が傷つけたモノ、自分を傷つけたモノ。それが何であったか、戦いの果てに知ったつもりだった。

そしてそれが、この世には無数に存在することも思い知らされた。無限の闇、無数の痛み、果てしない連鎖……。それが、この忍の世界には存在するのだ。

それを、〃この目〃で確かめたいと思った。自分が堕ちた闇の力たちを、〃この目〃で見たいと思った。

そして、自分に何ができるのか。忍に何ができるのか。救いとは何なのか……。

それを知らなくてはならないと思った。

もしその答えが見つかるのなら……。あまりに勝手かもしれないが、それが償いになるかもしれない。

そういうカタチで、自分が忍の世界に貢献できるのなら……。。

「それでいいと思う」

サスケの意志を聞いて、ナナは軽い調子でそう返した。

数日前に初めてそれを聞かされた時と、全く同じ口調だった。

「それは『今のサスケ』にしかできないことだし、忍の未来にとって必要なことだと私も思う」

ナナはあの日よりもはつきりと、尊重の意を示した。

「きつとそれが『償い』の意味を持つってわかってくれたから、五影様たちも許してくれたんだと思うよ」

サスケは小さくうなずいて、目を伏せた。

ナナはそれを柔い眼差しでじつと見つめ、彼の次の言葉を待つ。

自分が「話したいこと」を、まだ閉まっただまま。

まるで示し合わせたかのような、少しの沈黙。

そして……。

「ナナ……」

先に語り始めたサスケが、言葉を続けた。

「オレは……」

ナナの目を見つめ返して、こう言った。

「今もお前を……愛している……」

そう……唐突に告げられても、ナナの表情はまるで変わらなかった。

「お前がいなければ、息をすることも億劫になるほど……。それを『あの時』に、思い知らされた……」

反対に、サスケの瞳が苦しげに歪む。

「お前をさんざん傷つけて、『あんなこと』をしたオレが、今さら言えたことじゃないのはわかっている……。だが、この想いは今も……少しも変わらない……」

躊躇いながらこぼれ出るサスケの言葉は、夜風をも黙らせた。

「だから……ナナ……お前には……幸せになって欲しい……」

この突然の告白を、ナナはまるで最初から知っていたかのように、驚きもせずに聞いていた。

「だから、オレは考えた……。お前がもう一度得た命で、どうしたら幸

せに生きられるのか……」

穏やかな笑みを口元に浮かべて、言いよどむサスケの言葉をゆるりと受け止める。

ナナはただ、彼の声を浴びて、その意味を飲みほしながら、立っているだけだった。

「その答えは、案外、すぐに出た」

その「答え」を突き付けられても、なお……。

「この里で、ナルトやカカシ……仲間たちとともに生きるのが、お前にとっての幸せな未来だ……」

ナナはやはり、肯定も否定もしなかった。

サスケも同意を求めなかった。それが彼なりの真の「答え」であつたし、その思いに揺るぎはなかった。

「だからオレが去つてもきつと……お前は“ここ”で、幸せに生きられるはずだ……」

最後は眩きだった。

彼にしては珍しく、細い声。

だが、そこに迷いはなかった。

「そう言うと思った」

サスケが息をついた時、ナナはやっと口を開いた。

「ナナ……」

「サスケはきつと、私にそう言うと思った」

先ほどよりも、いつそう愉快といったように。

「ナナ……」

「まるで、あの時みたい」

ナナは楽しげにそう言うが、『あの時』が思い出すだけで息もできないほど苦しい記憶であることは、二人とも同じはずであった。

『オレはこれから、木ノ葉を潰す。ナナ、お前は……』

『私は行かない。さようなら、サスケ』

あの波打ち際の別れを、二人で一緒に思い出していた。  
「もつと前に、ググでも同じようなことがあったよね」  
さらに遠くへと、ナナは誘う。

『オレは……ずっとお前が好きだった……』

『……私は……サスケが………キライだよ……!!』

この夜と同じ場所で、サスケが去って行ったあの日。

二度の別れと同じだと、ナナは言う。

「今までも……サスケは私のことを考えて、『お別れ』を言っていたんだよね」

そして今夜も……。

「今回も、サスケが私に『お別れ』を言うって、わかってたよ」

「ナナ……」

「サスケはまだ、私のことを想ってくれていて……、だから、『みんなと一緒にのほろが幸せになれる』からって……、きっとサスケはそう言ううと思ってた」

「ナナ……」

「だから、私は……」

「ナナ、待ってくれ」

淀みなく、すらすらと流れるナナの言葉を、サスケは遮った。

「サスケ？」

サスケは難しい顔をしていた。

それが迷いなのか、後悔なのか、ナナにはわからなかった。だからナナは、初めて顔色を変えた。

「続きがある……」

うめくように言うサスケに、ナナは後ずさるほどに身構えた。

「オレは……」

サスケは意を決したように、漆黒と紫苑の眼でナナを見つめた。

「それがお前にとって幸せだとわかっていながらも、迷っていた……」

「え……？」

「それは…… “あの時” に誓ったからだ」

「誓った……？」

ナナは両目を瞬いた。

サスケの次の言葉を、もう予測できなくなっていた。

「 “あの時” ……お前が、生き返った時……。オレは、誓ったんだ……」

一歩……サスケは足を踏み出した。

そして、言う。

「オレはもう二度と、『お前を泣かせない』……と」

簡単な言葉だった。

だがナナはそれが理解できず、何の応えも示さない。

「ナナ……」

サスケの足が、もう一歩、ナナに近づく。

やっと手を伸ばせば届く距離になって、サスケは一度、奥歯を噛みしめた。

そして……、人形のごとく立ち尽くすナナを見つめて、まわりつく迷いの粒を振り払うように、言った。

「オレがまたお前に別れを告げたら……お前が『泣く』ように思うのは……オレの自惚れだろうか……」

互いに揺らく瞳を見つめ合って、時が止まった。

そこから発せられたのは、呆けたようなナナのかすれ声だった。

「……え……？」

サスケはもう一度、躊躇いを押し留めて口を開いた。

彼らしくもない、自信の欠片もない声音で。

「だから……ナナ……。一緒に……来てくれないか？」



ナナは息を呑んだ。

「もちろん……それは『間違い』だとはわかっている……。お前にとつて、木ノ葉の忍として仲間と一緒に生きることが幸せだと理解しているのに、『一緒に来てほしい』と……そう願うのは、どうしようもなく愚かなことだ……」

ナナの双眸が、ゆっくりと開かれる。

「お前が木ノ葉だけじゃなく、他里からも必要とされる忍であることも知っている。そんなお前を、オレが奪うことは罪だ……。『償い』どころじゃない……」

ナナの吐息が、徐々に震え始める。

「何よりお前自身が……『木ノ葉の忍』になることを、ずっと昔から望んでいたことも知っている……。その夢を奪うことも、許されることじゃない……」

ナナの姿をまつすぐに見つめながら、己れの身から何かを引きはがすようにして、サスケは懸命に言葉を繋いだ。

「だが、どうしても……何度考えても、オレがまた別れを告げたら……お前が泣く気がするんだ……」

「今……」

ナナの掠れた声が漏れ出た。

「ナナ……っ？」

「今……『一緒に』って……っ？」

「ああ……」

「『一緒に来て欲しい』って……言ったの……っ？」

戸惑いというより混乱を、ナナはあからさまにさらけ出した。

「お前がもし、まだオレを許してくれるなら……オレは……そう望む」  
二人の間の空気が揺れた。

同じように震える心が、互いの目に映る。

「だから……」

わずかに黙した後、口を開いたのはやはりサスケだった。

「……一度だけでいい。考えてみてくれないか？」

「サ、サスケ……」

「もちろん……オレの自惚れかもしれない……」

「サスケ」

「ただのオレの思い過ぎしでも……、オレは……」

「行くよ！」

今度、言葉を遮ったのはナナ、息を呑んだのはサスケの方だった。

「一緒に行く！」

ナナは息を切らしながら、戸惑うサスケにもう一度言った。

「私、サスケと一緒に行く！」

一瞬間の間。

そして、ナナの言葉を理解したサスケはやつと首を振る。

「だ、だめだ、ナナ。ちゃんと考えて……」

「考えたよ！」

彼の言葉を、ナナは綺麗に遮った。

「もう決めてるの……！」

「だが……」

想いをぶつけるように、ナナは言う。

それをサスケは、当惑しつつも押し返した。

「お前はすでに、火影の側近といってもいいほどの忍だ。それに、カカシが火影になった時には、誰よりもお前を必要とするはずだ。他の里の長たちの信頼も厚いことを、オレも知っている。だから……」

「それはよくわかってるけど、もうとっくに決めてたの！」

ナナは怒ったような顔で言った。

「決めていた……？」

「サスケが旅に出るって言ったあの瞬間に、もう決めてた……！」

「だ、だが、お前は……」

それでも食い下がろうとするサスケの想いを、またもナナは乱暴に

遮断する。

「シカマルとサクラちゃんにはもう言っている」

「シカマル……?」

「ここに帰って来る途中、我愛羅にも会って伝えて来た」

ナナは無言を言わさぬ態度でまくしたてた。

「カカシ先生はお願いすれば絶対にわかってくれるはずだし……、一緒に綱手様を説得してくれると思う。それに、ナルトはきつと最初から私の気持ちを知ってる……!」

サスケはとうとう口をつぐんだ。

鬼気迫るほどのナナの「決意」を持って余し、彼はまだ戸惑いを隠せずにいた。

「私も……同じだから……」

ナナは一度、強く唇を噛みしめた。

猛り狂う様々な感情を、懸命に制御するかのよう

「ナナ……」

「私……」

サスケに促されるようにして、ナナはことさらゆつくりと、言葉を選んで話し始める。

「本当は……生き返るのが、怖かった……」

それは、哀しくも温かい、必然の想いの記憶……。

「『あんなこと』をさせて、すごく傷つけたサスケに……どんな顔で会ったらいいのかわからなかったから……」

今度はサスケが、唇を噛んだ。

「今までのことも……。生き返ったからって、忘れることなんてできないし……」

沈むようなナナの言葉は、月をも覆い隠す。

「それに……イタチのこと……」

互いに、うつむいた。

足元に広がる、同じ闇……。

「それでも……お母さんに『サスケと生きて』って言われて……私はやっぱり、もう一度アナタに逢いたかった。どうしても……逢いたかった……。だから、命をもらったの」

だが、その闇はもう、底なしの深潭ではなかった。

「でも……怖がることなんてなかった」

ナナのその葛藤はもう、晴れていた。

「だって……もう一度、アナタに逢った瞬間に……」

月はまた、優しく二人を照らす。

「サスケ……、私を……抱きしめてくれたよね……？」

ナナの瞳から零れた涙が、月の光に煌めいた。

「あの瞬間にわかったの……」

「ナナ……」

「あの時……サスケも感じたよね……？」

“あの瞬間”のぬくもりを、互いにしっかりと覚えている。

それは、無遠慮な夜風にも消されることはない、確かなもの……。

「私たち……ずっと……『繋がってた』って……」

「ナナ……」

「何度『お別れ』を繰り返しても……ずっと……」

「……ああ……オレも、感じた……」

「だからサスケは誓ってくれたんだよね……？」

永遠の別れを超えてもなお、繋がっていた想いを、あの瞬間に感じた……互いにそれを確信したのだと、二人は知った。

「私も……同じ」

「ナナ……」

「あの瞬間、私も誓ったの」

ナナは顎を上げ、サスケに揺るぎない想いを突き付けた。

「私……今度こそ絶対に……『サスケと生きる』って……」

サスケは口を引き結んだまま、うなずいた。いや、うなだれた。

「許し」を得て、これまでの後悔が彼の胸を強く絞めつけていた。

「ナナ……」

「新しい命で、私は……『サスケと一緒に生きる』って決めたの。今までできなかったことを、ちゃんとやり直そうって……。それが……。それだけが、〃向こう〃でした後悔……。だったから……」

二人の額が触れ合った。

「だからね……。サスケ。サスケが何と言おうと、私……。アナタと一緒に行くから」

「ナナ」

「つて、それを伝えに……。ここに来たはずなん……。だけどっ……」

「ナナ、何故、泣く……？」

あふれ出すナナの涙を、サスケはそっと拭う。

「だって……。びっくりして……」

ナナは声を震わせた。

「サスケが……。『一緒に来てほしい』なんて……。言うと思わなかったから……！」

絞り出したその台詞は、少し、怒っているようでもあった。

「ナナ……」

サスケはナナを上向かせた。

ナナはぼつが悪そうに目を逸らす。

「サスケの言葉……。予想が外れたのは……。初めてで……」

そうつぶやいたナナを見て、サスケはやっと小さく笑った。

「本当に……。いいのか……？」

ナナはただうなずいた。

その頬にサスケが手を添えると、ナナは不安げな眼で彼を見上げる。

「ナナ……」

その視線に返す言葉を、サスケは知っていた。

「一緒に……。生きよう、ナナ……」

ナナはその言葉を噛みしめるように瞬きを二つする。

ポロポロとこぼれ落ちる雫を気にも止めず。

「ずっと……？」

「ああ……ずっとだ……」

その想いを確かめる、ナナの強い視線。

サスケはそれを、じっと受け止める。

そして。

「ずっとね……」

ナナは笑った。

また、新しく産まれた雫がつつたうのを見届けて……サスケはナナを抱きしめた。

二人の吐息が重なったとき……。

「片腕でも……必ずお前を護る……」

サスケは決意を吐き出して。

「私がサスケの左腕になってあげる」

ナナはサスケの背に腕を回した。

しっかりと、二人の身体は添う。

「サスケ……私……」

ナナはサスケの肩口で、嗚咽を漏らした。

「私ね……」

「ナナ、泣くな。オレの誓いがもう破られることになる……」

「だって……私……」

サスケはゆっくりと、ナナの髪を撫ぜた。

そして、涙に濡れるナナの顔を見つめて、言った。

「ナナ……オレはお前を愛している」

与えられた柔らかい声と、穏やかな表情に、ナナは嗚咽を引っ込めた。

「サスケ、私……」

「今は、〃それ〃だけでいい……」

サスケの親指が、開きかけたナナの唇に触れる。

「オレはこれから一生をかけて、お前への『償い』をするつもりだ……」  
「……………」

「お前と、お前の母と……イタチに誓う……」

そしてそこをそつとなぞり……ゆつくりとした動作で口づけた。

「サスケ……」

ナナはサスケにしがみついた。

「私のこと……キライじゃないなら……もう、私に背中……向けないで……！」

悲しみに、怒りと恨みを混ぜ込んで、ナナは深淵の傷をさらした。

「ああ、約束する」

サスケの右腕が、ナナの細い肩をきつく抱き込む。

ナナの本音を持て余すことは、もう無かった。

「お前を『キライ』になることなんてないから……この約束は“一生”だ……」

彼が確かな声音でそう囁くと、ナナは涙声で笑った。

## 羽化

火影岩を朝日が照らした。

代々の火影たちが左から並ぶ、その右端。どの顔よりも鮮明なそれは、はたけカカシのものだった。

数時間後には、この新しい火影岩の完成式典が開かれる。

就任式はまだ先の話だが、工事に携わった関係者だけで完成を祝おうというのだ。

その主役たるカカシは、火影岩に背を向けて里のはずれに来ていた。

元部下の二人を、送り出すためである。

数日前……それは五影会谈終了の翌朝。

てつきり、まだ身内を故郷に送り届けている道中だと思っていたナナが、アパートのエントランスに立っていた。

「先生、おはよう！」

疲れた様子もなく、元気に笑う。

そして、予定を早めて帰って来たことの説明をし、これから火影の元へ出勤するのに同行すると言った。

もちろん、ナナが火影邸への道筋を知らないわけじゃない。自分が同伴しなければ火影と面会できないわけでもない。

こうしてナナが自分を待っていたのには、理由があった。

「先生に、話したいことがあるの」

身構えるより早く、ナナはそう切り出す。

「少しだけ、時間、いい……?」

こちらが先にサスケの件を話し出す機会は奪われた。

ナナはおそらくサイの知らせで「知っている」はずなのだが、ナナが今からそのことを話すのかどうか、まったくわからなかった。



だから……。

ひと気のない建物の屋上で、ナナがこう言った時、思わずナナの顔を凝視した。

「私、サスケと一緒にいこうと思って」

一点の曇りもない、晴れやかな表情だった。

「カカシ先生……許してくれる？」

その顔のまま、ナナは問う。

許可を得るための発言ではあるが、その答えを求めてはいなかった。こちらの答えなど、取るに足らないとでも言うように。

「私ね、サスケと生きるって決めたの」

その言葉もまた、決意というにはあまりに緩やかにナナの口からこぼれ出た。

「ナナ……」

冷静にナナの様子を観察しながらも、思いがけず言いよどんだ。

正直、面食らっていた……。

ナナが自ら、「サスケと一緒にいく」と言い出すことなど予想もしていなかったのだ。

事実、サスケの望みを聞いてからずっと、『サスケを送り出したナ』にどう向き合うかばかりを考えて来た。

むろん、サスケをなんとか木ノ葉に留まるように説得できないか……とか、どうにかしてサスケとナナが長期間離れ離れにならない方法は……とか、単純な思考も働いた。

だが、上司として二人を知るうえで、現実的にはやはり……『旅立つサスケ』と『彼を見送るナ』の光景が見えてしまっていたのだ。

その先の二人が、どうなるのかはわからなかった。

そこで二人の想いが途切れるのか……あるいは互いに断ち切るのか……。それとも、離れていても二人はずっと繋がっているのか

……。

カカシにはわからなかった。

だからこそ、『サスケを送り出したナナ』に対する正しい接し方を考え続けていたのだ。

だから、その正解を導き出さぬうちにナナが全く別の未来を示したことに愕然とした。

恐らくもなく、上司らしくもなく、また自分らしくもなく、言葉を詰まらせるほどに。

「先生、ごめんなさい。勝手なこと言って」

マスクの下で口を引き結んだ自分に、ナナはそう言った。

その目に、あの影はない。陰を秘めつつも、強い輝きがあった。

「でも、私……」

「ナナ」

やっと、声が出た。それは、長年の経験からくる術などではない。

ただ単に……。

「お前のその言葉を聞けて、オレは嬉しいよ」

そう……、込み上げる喜びがそのまま声になっていた。

「カカシ先生……」

「正直、今……ものすごくビックリしたけどネ。お前がそう言い出すとは思わなかったから」

正直に戸惑いを口にする、ナナは困ったように笑った。

「いや、でも……」

それを見つめて、己の感情を噛みしめる。

驚き、戸惑い、それが過ぎ去れば……在るのはただただ、喜びの感情だけである。

ナナが去ることへの寂しさも、六代目火影としてナナを頼れない不安も、そそくさとなりを潜めた。

ナナが自分から自分自身の幸福に手を伸ばしたことが、それほどに喜ばしかった。

「後のことは心配しなくていいから、サスケと行っておいで」  
少し照れくさい想いを、上司らしい言葉で隠す。

「サスケと生きる、ナナ」

ナナは目を輝かせた。

それが先ほどとうって変わって幼げだったから、カカシはやつと、いつもの調子を取り戻せた。

「ナナ、お前……オレが反対なんてしないって、わかってたでシヨ？」  
わざと意地悪く言ってみると、ナナは「だって」と笑った。

そして生意気にも、こう対抗してくる。

「先生は私のこといつも甘やかすから！」

凶星だったが、言い訳はしなかった。

本当はずっと知っていた。

ナナは他の同年代の忍に比べて、体躯も、仕草も、言葉も、幼いところがある。それに加えて素直だから、つい面倒をみてしまうところはあった。

だが、「甘やかす」のはそれだけじゃなかった。

ナナは他のどの忍よりも、忍耐強く、聡明で、慈悲深かった。ナナは自分なんかよりずっと強く、優れた人間性を身にまとわせる者だと知っていた。

だから、「甘やかす」には尊敬の念も含ませていたようにも思うのだ。

「でも、先生。綱手様にお許しをいただかないと」

「五代目にはオレも一緒に頼んであげるから」

「本当?!」

「こんなやり取りにも、〃ナナらしさ〃を感じている。

「お前ネ……最初からそのつもりだったんでしょ?」

「ふふ、バレちゃった?」

ナナは初めから自分が反対しないことを知っていた。たとえナナの言葉を想像だにしなかったとしても……。

それはもちろん、ナナが自分を軽んじているわけではない。ナナは自分を、心から信頼してくれているのだ。

たとえば、ただの上司として以上に……。

「ま、五代目もお前の頼みならきつと聞いてくださると思うけどね」

「うーん、どうかなあ」

「反対されても行くつもり？」

「うん」

即答だった。

火影に反対されても里を出るということは、いわゆる『抜け忍』になるということなのだが、ナナは迷わずうなずいた。

が、自分で言ったとおり、きつと綱手もしかめ面をしながらも承諾するのだろうかと思った。

ナナに期待をかけているだけに、ナナ不在の痛手を痛感して小言を漏らすくらいはするだろうが……。

当面、シズネとともに「八つ当たり」の矛先になることを覚悟せねばと思った。

だが、綱手はおそらくそうなるとして……。

「他のみんなには話したの？」

自分が持て余す部分は否めない。

それをナナにぶつけてみた。今のナナなら、ちゃんと話してくれる気がしていた。

「えーとね、シカマルとサクラちゃんはわかってくれた」

その二人の名前には納得ができた。

シカマルはナナを想い、サクラはサスケを思い続けていた。

二人とはここ数日、ちゃんと顔を合わすことがなかったら、ナナの決意を聞かされていたことは露ほども知らなかった。

いったいどんな気持ちでいるのだろうか……。

ふと、そう考えていると。

「あのね、先生、実は……」

ナナは申し訳なさそうな顔をして、こう告白した。

「二人にはけっこう前から話してたの。サスケが『旅に出たい』って言い出した日に……」

一瞬、それがどんな日だったのかわからなかった。

五影会談を挟んだことで、その日がやけに遠く感じたのだ。

「たしかお前は、病室でその話をした時、途中で抜けたよね？」

「うん、そう。あの日の夜、二人に……」

あの日……サスケの意志を聞いて、失望と納得という曖昧な感情を  
持て余したことを思い出す。

そして、事前に知っていたであろうナルトの、納得してはいなくても  
諦めたような仏頂面。 サクラは……当然のことながら、動揺し、  
反対した。

あの時ナナは。

『いいと思う』

そよ風のようにそう言っただけだった。

だが、ナナがサスケの意志をその時初めて聞いたのは確かだった。  
反射的に目視したナナの表情は、確実に驚きを浮かべていたのだけ  
ら。

それから一瞬でサスケの望みを認めたのは、動揺を押し殺していた  
わけではなかった。

持ち前の心の強さを発揮したわけでもなく……ただ……瞬間的に  
この「答え」が出ていたからなのだ。

だからこそ、その日の内にナナは告げた。

自分を思ってくれているシカマルと、サスケを想っているサクラ  
に。

そしてたぶん、自分を後回しにしたのは……ナナが自ら言った通  
り、自分がナナの願いを認めることをわかっていたからだけじゃな  
い。五影会談の前にナナの意向を聞いていたとしたら……おそらく  
サスケの希望を嘆願することに複雑な心境になっていたことだろう。  
きつと……いや、絶対に、ナナはそこまで考えていたはずだ。

それがあの、確信的な笑みに秘められていたのだ。

「あとね……、我愛羅にも会って話したの……」

名前を付け加えながら、初めてナナはうつむいた。

他里の者に事前に話していたことを申し訳なく思っているのだら  
う。

『『会って』って……いつ?』

「昨日。木ノ葉に帰って来る途中で」

聞けば、和泉静葉を行程の途中まで送ったところで、静葉本人がナノを木ノ葉へ帰したのだという。

それでナノは、五影会談を終えて帰路につく風影を道中で呼び止めた。

そして、この予め決意していたことを風影に話したのだそうだ。

それも、「良かった」とカカシは素直に思った。

順番が後回しになったことは気にならなかったし、風影……我愛羅にとつて、ナノが特別な存在であることはすでに知っていた。

そして、ナノもまた彼に厚い信頼の眼差しを向けていることにも気づいていた。

ナルトやシカマルに向ける視線とはまた違った……どちらかというとなら、ナノが直接彼に会って己の気持ちを伝えられたことは、本当に良かったと思えた。

「そうか……」

もう一度、「良かった」……と噛みしめた。

今度は我愛羅に向けて。

会談の時、風影として必要最低限の台詞しか吐き出さなかった我愛羅が、最後の最後にこう発言した。

『うちはサスケと、二人で話す時間をくれないか?』

サスケの差配が決まった直後だった。

『今さらヤツと会って何を話す?』

ようやく話がまとまって緩みかけた気が再び張り詰めた。その場に緊張感が漂ったのを肌で感じたのだ。

だが、警戒するような雷影の問いに、我愛羅は全く動じずに答えた。『オレは、うちはサスケとは中忍試験で特別に縁ができた。だから個人的に、新たな未来に向けてと、ナノのことを話したい』

我愛羅を睨んでいた影たちの視線が、一斉に火影へ向いた。

もちろん、火影が許可を出せることではない。

火影もカカシも、困惑しながら黙りこくっていた。  
すると、ため息交じりに雷影が言った。

『これからどこぞへ旅立つ。『いち忍』に風影が接触したところで、何の危害もないわ』

彼は警戒を解いた。

次いで、土影が……。

『それに……どっちも』 正当な理由ぜよ』

含み笑いをしながら、そう言った。

五影の中でもその座に長く就いている二人が軽口を叩いたことで、ミフネも水影もあっさり同意した。

火影は面会の場を用意すると遠慮がちに言った。

あの後……実際に、我愛羅とサスケが何を話したのかは知らない。

「サスケの旅のこと」それから、「ナナのこと」。

我愛羅が何をサスケに聞いて、何を願って、何を約束させたのか……。

考えるまでもない……と、その時は思っていた。

だが今、思い返すとわからなくなった。

サスケはあの時にその意志を我愛羅に伝えたのか？

我愛羅はナナの意志を予測していたのか？

そして、改めてナナに会って意志を聞かされて……何を思った？

「で、みんなは話を聞いて何て？」

我愛羅も、そしてサクラもシカマルも、今の自分と同じ気持ちになつたのだろうか。

ナナに対する感情はそれぞれ違う。

シカマルと我愛羅は似ているようで、どこか別の角度からナナに接しているように思う。サクラは、親友であり忍術や恋のライバルでもあるという関係だ。

いずれにせよ、『上司』という枠組みに当てはまる自分とは、彼らの受け止め方が違うと思えた。

「みんな、びつくりしてたけど……」

若干の不安を抱える自分に対し、ナナはまっすぐこちらを向いて答

えた。

「カカシ先生と同じ。『良かった』って、みんな言ってくれた」

祝福を受けた……にしては、少し陰りのある笑みだった。

だが、以前よりそれが薄れているということは、やはりナナは変わったのだろう。

他人を傷つけることを極端なまでに恐れていたナナは、その弱さに気づいてきつと変わったのだ。

自分の想いを、まっすぐぶつけられるほどに。

「そっか」

あえて、短く返す。

ナナはおそらくその胸中に、ひとりひとりの顔と言葉を思い浮かべながら、幸福そうに笑った。

半分、肩の重荷が降ろせた気分になった。

が、まだ、半分ある。

それを、口にした。

自分もまた、変わらなければと思ったからだ。

「サスケは反対しなかったの？」

今まで見て見ぬふりをしてきた、ナナの一番隠したいコト……その穏やかな笑みの影に隠してきたナナの核心へ触れた。

「サスケには昨日の夜、話したの」

ナナは逃げなかった。

「昨日……？」

真っ先に話さなければならぬ相手であるはずなのに、順番は……  
4番目……。

てつきり、「他のみんな」にはカウントされず、一番最初に想いを伝えていたと思っていた。

だから意外だった。

それをまた素直に口にしてみる。

「サスケも『後回し』だったのか？」

「だって、サスケが何て言うかわかってたから」

ナナは悪びれずにそう言った。



「……ま、アイツなら反対するだろうね」

罪を償う過酷な旅に、大切な人を連れてなど行けない……。

本当は誰より愛情深いサスケが、そういう想いでいることはカカシにさえもわかった。

問題はそれでサスケが「終わり」にするのかどうか、ということだったのだ。

が。

「私もそう思った。サスケが考えてることはわかるって自信があったから」

「お前たちは昔から、言葉にしなくてもわかり合ってた部分があったからね」

過去の話をしても、ナナの視線は揺るがなかった。

こちらにも、すでに「答え」が出ていることの安心感があった。

だから、さらに先へと話を進める。

「どうやって説得したの？」

だが、ナナは突然、面白そうに笑いながら首を振った。

「違うの、先生……！」

そして、ほんのわずかに頬を赤らめて言った。

『一緒に来てほしい』って、サスケが言ったの」

それはとても意外なことだったと、ナナは言う。今までのサスケならば、そんなことは絶対に口にしなかった……と。

もちろん、カカシもそう思った。

ついさつき、ナナの意志を聞いた途端に思い描いた光景は、『ナナの木ノ葉での幸せを願うサスケ』と、『それでも一緒に行くと行って譲らないナナ』である。

サスケは……最初、ナナに「別れ」を告げたのではないかとさえ思っていた。

旅立つ自分を、「待っていないなくていい」……という決別。愛するが故の別離。

自分ならそうする気がした。

だからナナの決意は、そのサスケの想いすら否定する強いものだった

たと……。

だが……。

「私が生き返った時に、『もう私を泣かさない』って誓ったんだって。だけど……、『木ノ葉に残れ』って言ったら私が泣くと思っただって……。それで、『一緒に来てほしい』になったんだって」

そのはにかみながらの説明が、カカシの腹の底にストーンと落ちた。最初から、奇跡にして運命の再会を果たした二人には「別れ」の選択肢など存在していなかった。

光の中から産まれたナナを、しっかりと抱きしめるサスケの背が思い浮かんだ。

あの瞬間に、もう、二人には新たな未来が始まっていたのだ。

「木ノ葉に帰って来てからわりとすぐに、『自分がどうするべきか』の意志は固まったんだけど……『私に何て言うか』をずっと悩んでたんだって。バカでしょう？ ウスラトンカチだよね？」

病室で、無気力というか、なかば抜け殻のように過ごすサスケを見て来た。

誰の問いにも生返事で、ぼうつと窓の外を眺めていた。彼が何かを考えているのはわかっていたつもりだった。

己自身の罪に対する反省や、今後の身の振り方についてとしか思わなかった。もちろん、ナナを殺めたあの時のことも含めての……。

しかし、あの彼らしくない表情の裏では、ずっとナナのことばかりを考えていたのだ。

ナナにとつての幸せと、正しい選択。ナナの想いと、ナナへの想い。日々、揺れ動いていたのだろう。

あんなに静としたたたずまいの中に、混んとする想いを秘めて。

「ナナ」

改めて、若き部下を見つめた。

秘密の中に秘密を抱えて、それでも穏やかに笑っていた日から数年……。

傷ついても抗って、命をも削って、今は……。

「必ず、幸せになれ、ナナ」

その入り口に立っている。

「うん！」

自分の未来なんて望まなかったはずのナナが、そこに向かって歩き出そうとしている。

「でも、先生、ごめんなさい。火影になるのに、傍でお手伝いできなくて」

だから、そんなことはどうでも良かった。

「里を出ていても、木ノ葉の忍でしょ？」

「うん、もちろん！」

「じゃあ、ピンチの時は助けてもらうから、そのつもりでいてくれればいいよ」

小さな傷がたくさんついた額当てが、ナナの額で鈍く光る。

「定期的に連絡は入れること」

「はい！」

「変わりがなくてもちゃんと伝えてよ。サスケと仲良くやってるってことをネ」

「うん、わかった！」

一息ついて、ナナの頭を撫ぜた。

くすぐったそうに笑うナナの姿は、今までと変わらなかった。

が……やはり、どこか違うのだ。

今まで一族や里が作った囲いを、自らの手で壊したナナは……例えば、さなぎが蝶になったように。

「でもその前に、やっぱり綱手様にお許しをいただかないと！」

「ああ、そうだね。ま、でも大丈夫でしょ」

走り出すナナの背を見て、カカシは思った。

この胸の中心にある温かくてちよっぴり尖った塊……これが、親心……ってやつなのか……と。

木ノ葉の門前。

旅支度をして現れたナナは、あの日よりも少しだけ大人びて見えた。

心配事も厄介ごともしづけて、義理も果たして……すつきりとした顔をしていた。

ナナと話しをした後、火影の執務室で予想通り盛大なため息を浴びた。

火影もシズネも、ナナの言葉には心の底から驚いていたようだった。

そして困惑していた。

だが結局、火影も自分と同じだった。

動揺が去ってみれば、それが一番良い形だと思える自身に気がついたのだ。

だからあつさり、ナナの願いは受け入れられた。

相当渋い顔をしてはいたが……。

その後でまた二人になると、ナナはこうつぶやいていた。

『もし許可が下りなかつたら、「サスケの監視役」とか「和泉の人間が木ノ葉に居たら迷惑になる」とか、色々理由を考えてただけだよ……』

その時はやはり、苦笑が漏れ出た。

そんな子供じみた言い訳も出さぬうちに、自分も火影も安々と陥落したのだから。

「毎晩この薬を塗って、包帯を替えてあげてね。痛みが出るようだったらこっちの薬を2錠飲ませて」

「うん、わかった。ありがとうサクラちゃん」

「サクラ、色々とすまない」

目の下にクマをつくったサクラが、ナナに医療道具一式を手渡して説明している。

彼女の心中を思うと胸が痛むが、それでも……晴れやかなナナの姿は喜ばしかった。

そして、サスケも……。

サスケとは、昨日までにじっくり話をした。

こんなになく長く話をするのも今まで無かった……などと思いながら、情報伝達の方法や暗号の方式、差し当たったの目的地を話し合った。

隣でムスツとしながら聞いているナルトも含め、こちら側の不安要素を取り除くくらいには至ったと思う。

もつとも、サスケは終始落ち着いていて、すでに先のことまで良く考えていたようだった。

だから、上司として彼に言うことはひとつだけだった。

『ナナを泣かすんじゃないよ』

サスケは真摯な眼でこちらを向いた。

『ああ……。約束する』

それは単に部下としてではなく、ひとりの男としての約束に聞こえた。

「サスケ」

もう、鬼胎はなかった。

「これからはあまり無茶しないでよ。オレの責任になっちゃうから」  
それでも、そう言ってみる。

「ああ……。すまない」

何度も口にした言葉を、サスケは言った。  
繰り返しても、決して薄っぺらには聞こえなかった。

そしてその隣では、ナナが清らかに笑んでいる。

それを見て、ずつとむくれていたナルトが、意を決したかのようにサスケに向かって左腕を突き出した。

「ん……………」

その手には、汚れた額当て。

「お前、まだ持ってたのか……………これ……………」

木ノ葉のマークに、真一文字の傷……………。

サクラがそつと息を呑む。

「返す……………」

ナルトは低く言った。

その額当ては、かつてサスケが身につけていたものに違いなかった。

「もう失くすんじゃないぞー！」

「……ちゃんと取っておく」

「約束しろ！」

「ああ……約束する」

サスケの右手がマントからずりりと出て、それを受け取った。

瞬間……風が吹いて木ノ葉が二人の周りを舞った。

その涼しくて清らかな風は、まるでナナからの祝福のようだった。

「サスケ君、ナナをよろしくね……。ちがった……」

二人の絆を見届けて、サクラは言った。

「ナナ、サスケ君をよろしくね……！」

涙をこらえているのがわかった。

彼女が、それを敢えて隠そうとはしていないことも。

「サクラちゃん……」

それは、サクラ自身も前へ進もうとする言葉だった。

ナナもサスケも、それに気がついていた。

サクラが言葉にするのは、もうサスケへの想いではない。

大切な友へ、それを託したのだ。

「もう、サクラちゃんを悲しませるようなことしないから。サスケも、私も」

ナナはそれに応える。

「私も約束する」

「うん」

サクラはナナを抱きしめた。

二人を見つめて、ナルトの表情がほんの少しだけ和らいだ。

そしてサスケも……。

「サクラ……ありがとう」

温かい声はサクラの決意を鈍らせるはずだったが、彼女は気丈にはほほ笑み返した。

「ナルト」

最後にナナが、ナルトに向き合った。

一蓮托生……運命を共にするはずだった二人は、静かに見つめ合った。

「クラマによろしく」

ナナはそれだけ言った。

その名前こそが、二人の絆そのものだった。

「ああ」

ナルトは腹に手を当てて、こう返した。

「サスケにはわりいが、オレたちには特別な繋がりがあるってばよ！」

ナナは面白そうに笑い、サクラは呆れたようにため息をつく。サスケはフンつと鼻で笑い飛ばした。

懐かしい、第七班の光景だった。

思いがけず、熱いものがこみ上げる。

そして。

「それじゃあ、カカシ先生。サクラちゃん。ナルト……」

本当に嬉しそうに皆を見回して、ナナは言った。

「行ってきますー！」

先に広がる未来への期待というより、ナナの「今」この瞬間に心底満足しているようだった。

「連絡は欠かささないでネ」

それだけ言った。

今さら手向けの言葉はいらなかった。サクラの言葉で、もう十分……。

ナルトもまた、何も言わなかった。

まだきつと、サスケの意志に納得しきれていないのもあるのだろうが、それよりも。木ノ葉の忍として二人と共に過ごせないという失意でいっぱいのようにだった。

それがまた、二人を大切に想うナルトらしくもある。

「行って来る……」

サスケが最後にチラつとナルトを見て、別れの言葉を言った。

それはもう、決別ではなかった。

再会を約束した、旅立ちの言葉……。罪深き男の、希望に照らされた贖罪の旅へ。

林の向こうに消えていく二人は、程よい距離で肩を並べていた。

これまでずっと、傷つけ合って、苦しんできたことが嘘のように。まるで最初から、こうして光に包まれて、同じ方向を向いてきたかのように。

「あーあ、行っちゃった……！」

サクラがわざと、大きくため息をついた。

「サスケ君ったら、綱手様の『研究』の見通しが立つまで待てばよかったのに！」

そして、悪態づく。

ナルトは答えなかった。

「さてと。式典の準備を手伝いに行こうつと。カカシ先生、今日だけはぜーったいに遅刻しないでよー！」

「はいはい」

サクラは自分とナルトに別れを告げて走り去った。

見られたくないモノが、込み上げていたのだろう……。

「身体の調子もだいぶ戻ったし、オレも修業すっかなー」

ナルトが左腕を前に突き出した。

断ち切れない想いを無理やり振り切って、気合いを入れているように見えた。

「あんまり暴れると、後でサクラに怒られるよ」

「わかってるってばよ！　じゃあカカシ先生、後でなー！　遅刻すんなってばよー！」

ナルトもまた、さっさと立ち去る。

彼もきつと、左の袖で顔を拭っているに違いないと思った。

「さーて、オレも新たな門出と行きますか」

捕らわれていた過去から脱却し、やつと未来を見据えた二人。親友、想い人、運命共同体、恋敵、……との別離を乗り越えようとしている二人。



自分も、若い彼らに負けては居られなかった。  
冷たい冬の空気を吸い込んで、前を向く。  
巨大な自分の顔が、悠然とこちらを見下ろしていた。

## 残花

『サスケ君ったら、綱手様の“研究”の見通しが立つまで待てばよかったのに!』

綱手が柱間の細胞を使った人体組織の再生方法について研究を始めた。

それが成功すれば、失った手の代わり……限りなく自身のものに近い“義手”を作ることができるかもしれない。

……と、サスケには何度も伝えた。

義手が完成するまで、いや、せめてその研究の成果が出始めるまで、旅立つのを思い留まってはくれないかと。

だがそれは、淡い期待だった。

彼の意志は揺るがなかった。というより、初めから“そんなもの”を必要とはしてくれなかった。

『この身体のほうが、今の世界が良く見える』

やんわりと拒絶した顔は、ずいぶんと大人びていた。

文字通り彼は、自分を置いてずっと遠くまで行ってしまったのだ。

ナナと共に……。

だが……これが最善の結果だった。

むしろ、せいせいした。

初めから一本に違いないのに、複雑に絡み合っていた糸が、やっとほどけたような感じがした。

戦争終結後……木ノ葉隠れの里に戻ってから、やることはたくさんあった。

負傷者の手当だけじゃなく、火影であり師匠でもある綱手の意の通り、こなさなければならぬ任が多かった。

そんな中でも、頭の大半を占めていたのはやっぱりサスケのこと

だった。

木ノ葉の抜け忍であり、暁の元メンバーであり、大蛇丸とも関わりがある彼が、どんな処分を下されるのか……。

普通に考えれば、強制的に投獄される身。

うちはマダラと大筒木カグヤを討伐した「英雄」ということを差し引いても、忍の世界ではどちらに比重があるかはサクラにもわかっていた。

だからずっと、五影によって彼が赦免される奇跡を願い続けていた。

どうか戦争終盤でのサスケの働きが認められ、その特別な力が必要とされ、ナルトやナナの嘆願が聞き入れられて……許されること。償いとして、誠心誠意、里の任務に就くことを約束し、それでまた一緒に……。

だが、当のサスケがその願いを打ち砕いたのだ。

『オレは……木ノ葉を出て世界を旅することを願い出る』

その言葉を聞いて、理解して、素っ頓狂な声を上げたのを覚えている。

彼が語る意志など耳に入らなかった。

当然、皆も同じだと思った。彼は己の罪を気に病むあまり、そう言い出したに過ぎないのだと。

だから、彼の希望を認めるわけがないと。  
が……。

あの場でサクラは孤独だった。

ナルトは納得していないようだったが、すでに諦めているようでもあった。綱手とカカシは嘆息しながらも、サスケの意志に理解を示した。

そして、ナナは。

『いいと思う』

すんなりと受け入れた。

その顔は陰りが無く、心からサスケの意志を支持しているように見えた。

(ああ……まただ……)

とつさにそう感じていた。

「最初の時」も、ナナは去りゆくサスケを引き留めようとしなかった。

怒りと悲しみを押し殺して、「大キライ」だなんて口にして……あの時は思わずぶったけど、それは……本当はナナが誰よりもサスケを「大スキ」だと知っていたからだ。

あれからかなりの時間が過ぎていても、新しい命になったとしても、ナナはまた同じ選択をした。

今度はもう……その心に怒りも悲しみも存在しないかのように。だから、その夜は思い切り泣いた。

何に対して……というのは、今となってもわからない。

サスケと離れたくない。サスケに行つて欲しくない。どうしても行くなら、今度こそ一緒に行きたい。

でも……サスケが愛するのはナナ、ただひとり。

それなのにナナは、サスケの背を追おうともしない。

ナナにはいつだって、自分が進むべき道がちゃんと見えている。ナナはそれを違わぬ強さを持っている。

自分には無い強さを。

でも、自分はやはり……。

色々な感情が混ざり合つて、爆ぜ合つて、そう……自分の想いではどうにもできない世界に絶望したのだ。

だが……。

夕食もとらずに、布団にもぐりこんでいたあの夜。玄関から母親が無遠慮に自分を呼ぶ声がした。

ぎゆうとシーツを握つて無視を決め込んだ時。

『サクラってばー！ ナナちゃんが来たわよー！』  
瞬間的に飛び起きた。

乱暴にドアを開け、廊下を走り、寝間着姿の母を押しつけて玄関のたたきを凝視する。

『遅くにぐめんね、サクラちゃん』

ナナが申し訳なさそうに立っていた。

『どうしても、今すぐに話したいことがあって』  
声が出なかった。

話したいことがあったのはこちらのほう。聞きたいことがあったのはこちらのほう……。

苛立ちに似た衝動のままナナの手をひつつかみ、部屋に戻った。

「ナナ……は、話って……」

部屋と玄関の往復だけで息が上がっていた。

情けなくどもる自分を、ナナはいつもと同じ、柔い笑みで見つめる。

「あのね、サスケのことで……」

そんなことはわかっていた。むしろそうでなければガツンと言つてやるところだった。

そこまで失望させられずにホツとした。

だが次の瞬間には……奥歯を食いしばった。

『私、もうサスケを想うのは、やめにする』

そんな言葉が……。

『もう、終わらせたんだ……』

穏やかすぎるナナの声が……。

『サスケを嫌いになったわけじゃないけど……私たちの間には辛いことが多すぎたから……』

嫌というほど見せつけられてきた、ナナの痛みを包み隠す笑顔が……。

『だから、これからは……サスケをよろしくね、サクラちゃん』

“一番、見たくなかった結末”が見えた気がしたのだ。

そう……そんな二人の結末など“見たくなかった”。そんな言葉は絶対に聞きたくなかった。

自分が何を望んで、本当は何を望まなかったのか……今さらながらに思い知る。

相反する願い。矛盾した己の心。惨めな不合理……。

それを、こんな時になって自覚してしまった。

だが、幸運なことに「最悪の結末」は訪れなかった。  
ナナは躊躇いの欠片もなく、ただただ明瞭に言った。

「私、サスケと一緒にいくことにする」

澄んだ声が、狭い部屋に響いた。

「え……う？」

ナナから視線が逸らせなかった。

その瞳には、久しぶりに影が浮かぶ。

だが、今はそれを隠そうとはしない。

「私ね、これからは……」

まっすぐに、実直に、こちらを向いている。

「『ちゃんと』サスケと生きる」

誰かに喉を掴まれた感覚がした。

胸が痛い。目の奥が熱い。奥歯が震える。感情が、動いている。

「ああ……そっか……」

自分自身につぶやいた。

ナナの台詞を聞いて、驚いた。予想もしていなかった言葉だった。  
だが、それでも不思議と反応しているのだ。

なぜならば、心のどこかにその台詞が存在していたから……。

「うっ……」

全身の力が抜け、流しきったと思った涙がまた溢れ出た。

その場にへたり込んで顔を覆う自分の側に、ナナが寄り添う。

「サクラちゃん、ごめんね」

その声に、媚びている気配は無かった。

「サクラちゃんは、本当にサスケのことが好きだったんだよね……でも……」

情けなく震える肩に、ナナの手が触れる。

温かくも冷たくもない、小さなナナの手はただ優しくかった。

「私も、サスケが本当に好きなんだ」

そして、残酷だった。

「だから、これからはサスケと生きることにする」  
歯を食いしばった。

まだ、言葉を吐くのは無理だった。

「私、ずっと……サクラちゃんのことをうらやましかった」  
代わりにナナが、柔い吐息を零し続ける。

「いつもまつすぐで、『好き』って気持ちを言葉にできて、ちゃんと伝えられて……」

ナナの言葉はいちいち痛くて、とても優しい。

「私は、言い訳しながら逃げてばかりだったから」

自嘲でも偽善でもない、ナナの本当の心。弱くも強い心。

(うらやましいのはこっちだったの……！)

無理矢理に顔を上げた。涙はまだとめどなく流れ出る。

が、ひっくり返りながらも、声を絞り出した。

「まったく……！」

「サクラちゃん……」

「私に『サスケ君を任せる』とか言いに来たら、『あの時』みたいにまたひっぱたいてたところよ！」

小さく苦笑したナナは、あの時とは違う。

「今さらなによ！ 遅すぎるのよ！ 今日までずっと心配かけて……！」

悪態づく自分は、本当に変わったのだろうか。

「最初からわかってたわよ！ サスケ君の心にアンタ以外は入り込めないって！ なのにアンタは……！ サスケ君もっ……！」

焦げ付いた感情を、こんなふうに吐き出して……。

「納得なんてできないわよ！ だって……だって私のほうが、アンタの何百倍もサスケ君に好かれる努力をしてきたし、サスケ君だけを見て……サスケ君を護ろうとしたのに……！」

それでもナナは、困った顔もせず、いちいちうなずきながら静穏に受け止める。

「私がサスケ君を幸せにしたかったけど……そんなのアンタにしかできなかつたし……！ それなのにアンタは逃げてばかりで……!!」

ナナの眼は、逃げずにちゃんとこちらを向いている。

「い、今さらっ……簡単に想いを捨てることなんてできないわよ！」

その綺麗な漆黒に、恨み言が溶かされて行く気がして……。

「私はずっと、本気でサスケ君を好きだったんだから……！」

それに甘えて、全てを吐き出した。

「だからっ……」

そして、「だから」……。

「だから……ぜったいに……」

願うことも、虚飾なくうったえた。

「ぜったいに、サスケ君を幸せにして！」

涙が弾けた。

心が……散った。

「うん」

ナナはその様を全部見届けて、確かにうなずいた。

「約束する」

悔しいくらいに、綺麗だった。

とことん傷ついて、本当の強さを得た友。やっと幸せを掴んだ友。

いや……。

「それと……！」

ひっくり返る声にもかまわず、もうひとつ、願いを押し付けた。

「アンタも、ちゃんと……サスケ君と幸せなんなさいよ……！」

それをナナが望まなかったことが、もっとも憤ろしいことなのだか

ら。

「サクラちゃん……」

最後の願いは、ナナにとって意外なようだった。

だが、今のナナにはちゃんとこの苛立ちの意味が伝わった。

「ありがとう」

そしてナナは誓ってくれた。

「もう……サクラちゃんを悲しませるようなことはしないから。ぜっ

たいに」

「二人ぶん」の幸せを。



「また……またサスケ君をひとりにしたら、一生アンタを許さないからね……!」

「うん」

「絶対、離れないでよ!」

「うん」

「私のっ……こんな情けない姿と決意、無駄にしないでよね……!!」

「うん」

絞り出した憎まれ口が情けなく震えた時、ナナの手が右手に触れた。

こんな時には、女の子同士で『握手』じゃないでしょうが……と思った時、少し笑えた。

「サクラちゃん……」

「もういいの……!」

半分吹っ切れて、半ばヤケになって、このちょっとズレた親友を抱きしめた。

「私は大丈夫だから……!」

「サクラちゃん……」

「綱手様の研究を手伝わなくちゃならないし、カカシ先生が火影になったら色々と手伝わされるし、これからすっごく忙しくなるから。それに、私だってもっと修業してアンタみたいに強くならなくちゃ」

涙はまだ、止まったわけじゃない。

だけど……。

「だからきつと、すぐには無理だけど……そのうち、ちゃんこの痛みは消えるから……」

いつかきつと、並んで笑い合うサスケとナナを見て……こう思う日が来る。

「サスケを好きになって良かった」。

「ナナの親友でよかった」。

「二人の仲間でよかった」。

「二人が幸せになってくれ、本当に良かった」。

そして、今日のこの日の自分を誇れる日がきつと来る。

ナナが、約束を守ってくれたなら……。  
そう願った時。

「約束する」

ナナはこれまでで一番強く、抱き返して……。もう一度言ってくれた。

あの夜のことを思い出して、また泣きそうになった。  
そういえばあの時、ナナは帰りがけにこう言い出した。

「サスケには五影会談での差配が決定してから告げる……と」。

その理由がよくわからなくて驚いたのだが、ナナは『サクラちゃん  
とシカマルに、先に話したかった』と言って笑った。

意図はすぐにわかった。それは素直に嬉しかった。

自分の想いをナナがちゃんと受け止めてくれていることが、証明さ  
れたような気がした。

今までの歯痒さが、嘘のように消えた瞬間だった。

だからこそまた、泣きそうになるのだ。

いつそナナがすごく嫌な奴だったら、こんなふうに苦しまずに済ん  
だと思う。

ただ悪態づいて、「二人の幸せを喜べるようになるう」だなんて、苦  
しい決意をしなくても良かったのだ。

だが、ナナはやっぱり大切な友だった。

大切な想い人だったサスケに……。やっぱりお似合いだった。

「……よしっ……いっ」

去って行く二人の、目にも見えるような絆を思い出して、まだ胸が  
痛んだ。

「私もがんばらなきゃ！」

それでもこうして強がれるのは、自分の長所だと胸を張る。

「まっすぐ、まっすぐ……いっ」

『私、ずっと……。サクラちゃんのことがかうらやましかった』

大好きだったサスケを託した親友が、そう言ってくれた。

『いつもまつすぐで、「好き」って気持ちを言葉にできて、ちゃんと伝えられて……』

嫉妬するほど強くて、憧れた親友がそう言ってくれたから。

「なーんか、ナルトみたいでちよつとイメージ悪いけど……!」

だから、これからもまつすぐに生きるのだ。馬鹿みたいに。

そう決意して、サクラは晴れやかな顔で涙を拭った。

## 天涯

同刻。

式典会場の隅でシカマルは大きな欠伸をしていた。

何か手伝うことでもあればどここへ来たのだが、あいにく自分に回って来るような仕事は無かった。

(あいつら……そろそろ出発した頃か……)

せわしなく働く会場設営係の者たちを横目に、空を仰いだ。

(もうちょっと寝てればよかったぜ……)

澄み渡る空は眠気を覚ましてしまうようで、彼はもう一度、大きな欠伸をしばり出した。

五影会談を翌日に控えた夜。遅い夕食をとった後だった。

突然ナナが現れて、「話したいことがある」と言った。

その時すでに、『サスケの要望』のことはいのから聞いていた。ナナがあつさりと賛成したのだということも。

五影会談が終了するまでの機密事項なのだろうが、恐らくはサクラの判断でその日のうちに同期の仲間だけにだけは告げられたようだった。

だから話を聞いてからずっと、ナナのことを考えていた。

『一生、木ノ葉の忍として生きるって、決めたから』

そう言ったナナが今、何を思うのか。

『私はずっとここに居るよー!』

自分を安心させてくれたあの言葉は、今も変わらないのか。だとしたら……。

ナナはどんな想いでサスケとの別れに賛成したのか。

だが、目の前に現れたナナを見た瞬間、膨張し続けていた憂慮が、嘘のように消え失せた。

「シカマルっ……遅くにごめん……!」

「いや、まだ9時だし……。つっつかお前、走って来たのか？」  
「うん……。和泉神社から……。！」

息をきらし、顔を上気させたナナの姿は珍しかった。そしてとても  
晴れやかだった。

だから、懸念は吹き飛んだ。

ナナは……。もう大丈夫だ。ちゃんと、新しい命を大切にしている。  
感情を忍ばせることに長けたナナであったが、その表情を見て瞬間  
的にそう確信した。

「ちよつと待ってろ、上着取って来る」

「うん！」

急激に頭が冷えて、至極冷静に振る舞えた。

いつものペースで歩いて部屋へ戻り、愛用の上着を羽織る。そして  
天井の隠し戸を開き、屋根裏からある物を取り出して懐にしまった。  
母親に出かける旨を伝えて、再びナナの前に立つ。

「寒くねーか？」

「うん、走って来たから暑い！」

外灯の下で、ナナは笑った。

「少し歩くか」

「あの場所？」

「ああ」

ナナはすぐに理解してくれた。

数分の道すがら、和泉の里から来た人はどんな様子だったか……。と  
か、和泉神社の後始末は順調に行えそうか……。とか、そんなことを話  
した。

そうしてあの公園跡地で、ナナは里の外れから駆けつけてまで、わ  
ざわざ今夜中に「話したかったこと」を話し始めた。

「シカマル、サスケのこと聞いた？」

「ああ、恩赦が出たら旅に出るって話だろ？」

「うん。そうなんだって」

ナナはまるでそれが冗談かのように笑った。

「んで、お前はどうすんだ？」

だから、肝心な事を淡白に問う。  
ナナは言った。

「私、サスケと一緒に行く」

ナナにもやはり、躊躇いなどなかった。

「そうか」

ふうっと息をついた。

それは落胆のため息ではなかった。自分でも驚くほどに、安堵したのだ。

「どう思う？ シカマル」

顔を覗き込んで問うナナは、この状況を楽しんでいるようだった。

「もう決めてんだろ？」

「うん」

「つつーか、もうとつくに決めてたってカンジだな」

ナナはまっすぐに視線を向けて答える。

「私ね、サスケと生きるって決めたの」

その無邪気でいて凜とした姿を眼前にし、今までのナナの振る舞い全てが、面白いほど腑に落ちた。

「だからか……」

「え……？」

思わず笑った。

それを、ナナは不思議そうに見る。

だが、笑わずにはいられなかった。今までのナナに対する懸念は、ただの杞憂だったのだ。

「戦争が終わってからのお前が、何の迷いもなくまっすぐ生きてるよ  
うに見えたのは、『ソレ』をとつくに決めてたからか」

サスケに会いに行かないことも、他の仲間と会う機会が少ないこと  
も、心配する必要などなかった。

ただ夢中で任務をこなしているのは、気を紛らわせるためなどではなかった。何かを避けているのでも、ましてや何かから逃げているのでもなかった。

サスケの意志を聞かされて賛成したのは、想いを捨てたからではなかった。諦めや、悲しみを隠しているからでもなかった。

ただただ、生き方が決まっていたから、目の前のやるべきことをひとつひとつこなしていったただけだったのだ。

「決めたの。『現世』に帰って来た瞬間に」

ナナは幸福そうに肩をすくめた。

「いろいろあったから……、後から考えたら、生き返ったとしてもどうやってサスケと向き合ったらいいのか迷うはずだよ。でも……目を覚ました瞬間にサスケの想いが伝わったから。一瞬で、これからどうやって生きていきたいのかわかったの」

ナナが再び目を開いたその刹那、サスケはナナを抱きしめた。ナナはまどろみながらも、それに応えていた。

あの情景が、そのまま未来に繋がっていたのだ……。

本当に、よかったと思った。

今までのナナの苦しみを、すぐ側で見てきたという自負がある。

だから……本当に、『幸せに生きよう』とするナナを前にして、泣けるほどに嬉しかった。

「でも、私……」

返事が涙声になりそうで黙っていると、ナナが言った。

『一生、木ノ葉の忍として生きる』っていうのも本当だから……！」「さきほどよりずっと、力を込めて。」

「里を離れることになっても、絶対に綱手様やカカシ先生の役に立つように努めるし、もちろん木ノ葉がピンチのときは、どこからでも駆けつける。それに、いつでも木ノ葉の忍っていう気持ちはかわらないし……。だから……」

だがほんの一瞬、ナナの瞳が揺らいだ。

それを見逃さなかった。

そして友として、どんな言葉を引き継いでやればいいのかわかった。

「どこにいても……」

ナナは小さく、息を呑んだ。

「お前はオレたちの仲間だ」

初めて、ナナは唇を噛んだ。

「シカマルっ……!」

彼女が欲しかった言葉を与えられたことに満足した。

「ありがとう!!」

その満開の笑みにも満足した。かすかに潤むナナの瞳は、とても綺麗だった。

「い、いや、そんなのはあたりえだろ……!」

急に気恥ずかしくなって目を逸らした。

『お前がどこにいてもオレたちの仲間だ』だなんて、今さらながら恥ずかしすぎる台詞だ。

「でも、そんなふうに思ってくれてありがとう」

「オレだけじゃねえ、みんな思うに決まってるって」

「うん、そうだとうれい……」

「だ、だけだよ」

照れくささを押し込めて、代わりに皮肉を言ってみる。

「よくあのサスケが同意したな」

「え?」

「アイツなら、『お前のためにならない』とか言って強がって、お前を突き放すのかと思っただぜ」

この台詞にナナは驚いた顔をした。

が、傷ついたようではなかった。その証拠に、すぐに笑って首を振る。

「サスケはぜったいそう言うよね」

今度はこちらが驚かされる番だった。

「はっ」



「サスケはそう言うに決まってるよね。私もそう思う」

ナナは同じ言葉を繰り返す。

が、言い直したのは最初の声が聞こえなかったからなどではない。

「お前、サスケにはまだ言ってるの？」

まるで当然のこのように、ナナはうなずいた。

「なんでだ？」

「だって……」

そして、また同じ台詞を重ねる。

「サスケは私にお別れを言うに決まってるから」

「い、いや、そういうことじゃなくてよ」

ひとつ咳ばらいを挟んで、ナナに問う。

「普通、サスケに一番に伝えるだろ」

自分の生き方を語るなら、一緒に生きると決めた相手に最初に伝えるべきだ。それが定説だと思う。

だが、この普通とは少しズレた……というか、普通に生きること許されなかった親友は、あっけらかんとこう言った。

「いいの。どうせサスケが反対しても、今度は私が押し切る番だから」

「い、いや……」

「今までずーっとサスケに振り回されてきたから、今回は私が決めるの」

「だからそういうことじゃ……」

それが成長して身に着けた強さなのか、子供のような我儘なのか……、判断に迷ううちに、ナナはこちらの眼を覗き込んだ。

「それに、シカマルが一番最初に話したかったから」

一番最初……ナナはそう言った。

それはつまり、サスケどころか相談すべき上司よりも自分が優先されたことになる。

何故……？ という疑問を、すぐにナナは解消してくれた。

「あの時、『一番最初に言う』って約束したでしょう？」

約束……というほど、確かなものではなかったはずだ。

だが、一瞬である時の風の匂いも、空の色も、星の明かりも、ナナ

の眼も……全て鮮明に思い出せるほど、心に残っている。

『今は、思い出すことも辛くて……苦しくて……。言葉にするくらいなら死んだ方がましだけど……。でも……もし、これから話せる時が来たら……。その時は、今の思いが消えてても……聞いてくれる？』  
サスケに殺されることだけを願って息をしていたナナが……。そう言った。イタチとサスケのことを、問いただした時だった。

必然的に、あの時の胸の痛みが蘇った。

「イタチのこととか、サスケのこととか、一族のこととか……それに、自分のこととかは、この間、『みんなへの報告』っていうカタチで話しちゃったけど」

あの時に、ずいぶんと儂げだったナナは……。今、その目に強い光を浮かべている。

「でも、〃これからのこと〃は、一番最初にシカマルに聞いて欲しかった」

無垢で無慈悲な笑み……。

「つたく……」

ため息をついて、複雑な感情を整理する。

「そういう問題じゃねーだろ」

「だって、約束したし」

「んなこと気にすんじゃないよ」

「だって……」

「だって」を二度繰り返し、ナナは首をわずかに傾けた。

「シカマルはきつと、〃また〃許してくれると思ったから」

〃また〃……。

「〃また〃甘えちゃってごめんね」

「あの時と同じように、また」……か。

「いや……」

わかっている。

これは〃甘え〃じゃなく〃信頼〃だ。

きつと、〃友〃というより少し厚いカンジの……。

「んじや、あとは五代目をどう説得するかだな。つーかお前まさか、そ

れもオレに協力しろとか言うつもりかよ」

「あはは、バレちゃった？」

じんわりと胸のあたりが温かくなるのを感じながら、忍者学校の時のように話をする。

「カカシ先生は説得できるとして、綱手様には何か上手な口実を考えないとね」

「ナナ……お前、カカシ先生のことナメてんだろ……」

「ち、ちがうよ。カカシ先生は優しいからきつと賛成してもらえるかなって……！」

「あーまあ、カカシ先生はお前に甘いからなあ……」

「そ、そういうんじゃないってば……！」

「ま、とにかく一人と、あと……五影たちにもうまいことゴマすんねーとな」

「え？ なん胡麻を擦るの？」

「いや、だから『ゴマをする』ってのは、機嫌をとって気に入られることとでうまいことを話を運ぼうとするって意味だ」

「ああ、そうなんだ！」

こうやって「普通」のことを楽しく話すのは、本当に懐かしかった。

「んじやとりあえず……『和泉一族の人間が忍として木ノ葉に居る』つてのが広まったら、木ノ葉が狙われる危険性がある……とか言ってみたらどうだ？」

「ああ、それね！」

「あとは……『サスケの監視役が必要』とか……これはちよつと苦しいか……」

「うん、わかった！ さすがシカマル！」

ナナは頭に書き留めるようにうなずいて、こう言った。

「でも、とりあえず五影会談で許可が下りないと意味がないんだけどね！」

その様子は、五影会談の結果を憂慮してはいないようだった。だからシカマルの中にあつた気がかりも、自然と掻き消えた。

「なんとかなんだろ」

「うん、そう思う。がんばってゴマすらなくちゃ」

どんな結果になろうとも……今のナナであれば大丈夫だ。

今なら、ちゃんと“それ”を大切にしてきているから……。

「ナナ」

「なに？」

それを敢えて口にする。

「ひとつ、約束してくれ」

あの、ナナにまわりついてきた影が……ナナの足元に広がる奈落が、もう二度と、“それ”を奪わぬように。

「これからは……『自分の命を大切にする』ってよ……」

サスケに殺されることが最後の願いだった、悲しいナナも。皆を救うために「自分を殺せ」と訴える、残酷なナナも。

もう二度と……。

「うん。約束する」

目がくらむような、星の瞬きだった。

それはきつと、輝き続けるのだ。この先、何があろうとも。

心から安堵した。

きつと、ナナは数日後にサスケと一緒に旅立つことになるだろう。

五影会談の結果はどう転ぶかわからない状況ではあったが、不思議とそう確信した。

それは、世界の情勢とか、五影たちの思惑とかは関係なく……ただ、

自分とナナとの未来を予感していた。

「明日は朝から五影の出迎えだろ？　もう帰って休め」

「うん。そうする」

夜風を冷たくは感じなかったが、寒そうに上着の襟元を寄せて見せた。

里のはずれから走って来たというナナも、そろそろ体温が下がっている頃だろう。

「あ、シカマル……」

だが、ベンチから立ち上がった時、ナナはくぐもった声で呼び止め

た。

「もうひとつ、相談が……」

「なんだ？」

ナナは少し間を置いて言った。

「サクラちゃんにも、言っておこうと思うんだけど」

一瞬、その意図がわからなかった。

というのも、ナナがそういった気遣いを見せるのが意外だったからである。

ナナが日ごろから鈍感だとか、無神経だとかいうのではなく……ナナの生い立ちから考えると、およそ『恋愛ごと』に関する知識が無に近いと思っていたからである。

「なんとなく、五影会谈の結果が出る前に話しておいたほうがいいんじゃないかと思って……」

しかし、ナナにもようやくそういう常識が身についてきたようだが、自分自身は決して積極的ではないが、疎い方ではないつもりなので、それが理解できた。

「ああ、早い方がいいと思うぞ」

「そうだよな？ でも今日はもう遅いかな……」

ナナは真剣に悩んでいるように見えた。

言葉で説明はできなくとも、サクラに対する『義理』を強く感じているらしい。

「いや、今からでも行って話して来い」

「でも……」

「忍の任務なんて二十四時間いつ入るかわかんねーんだ。お前の話でたたき起こされたって、迷惑するわけねえって」

「そうかな……」

「つーか、まだ寝てる時間じゃねーだろ」

だから、客観的にちゃんとしたアドバイスをしてやる。

『親友』として。

「いののことは任せとけ。けど、サクラにはちゃんと話せ。今すぐ」  
「うん、わかった」

ナナは納得したようだった。そして少し、ほっとしていた。彼女なりに「義理」と「常識」の間で悩んでいたということか……。

「じゃあ今から行ってみる」

「ああ」

きっとサクラもわかってくれる……という言葉を言いかけてやめた。

サクラの気持ちが変わらないわけじゃない。自分よりも辛い痛みを抱えることになるのだろう。

だがそれでも、それをわかっていたとしても……今のナナは目を逸らさずに想いを口にするのだ。

そしてそれこそが「自分たち」の望んだ姿だった。

「ありがとう。シカマル」

「ああ」

ナナは決意を固め、立ち去ろうとした。

こちらにも十分……満足、だった。

そしてふと、思い出した。

「あ、ちよっと待て、ナナ」

今日ここで、ナナに渡そうとしていたものの存在を。

「お前に渡すもんがある」

安堵と感傷で忘れるところであった。

秘かに自嘲し、上着のポケットから「それ」を取り出す。

「これ、返す」

ナナの前にそれを……ナナの小刀を、差し出した。

「それ……持っていてくれたんだ……」

あの時とは逆の形だった。

「悪いな、返しそびれちゃってた」

握ったそれは、まだとても冷たい。

ナナは手元をじっと見つめていた。

あの時の自身の言葉を思い出しているのだろうか……。

「シカマル……」

小刀を握る手を、ナナは両手で包んだ。

だが、そつと力を込めただけで、刀を引き取ろうとはしなかった。

「これ、シカマルが持つてて」

「い、いや、なんでだよ……?」

思いがけぬ申し出だった。

「さっきの『約束』の証……!」

短い言葉を元気よく言つて、ナナはまたギュつと手を握る。

「やくそく……」

「私、これからはちゃんと『自分の命を大切にして生きる』から」

さつき交わした約束……いや、自分の最後の『願い』を、ナナはちゃんと受け止めてくれている。

「だから、コレ……シカマルが持つてて」

だから、惹かれるのだ……。

「まったく……」

そんな薄情で愛おしいナナと、情けなくも未練がましい自分に悪態をつきながら、約束の小刀を受け取った。

「わかったから。絶対にコレをよこせて言いに来るんじゃないぞ」

「うん。約束する!」

最後にまたうつすらとした痛みを覚えながら、サクラのところへ駆けっていくナナを見送った。

もう一度ポケットにしまった小刀は、さつきよりも少し重みを増していた。

「はあ……明日はオレも早朝から雑用か。めんどくせーな」

自分らしい独り言を言つて、自宅に足を向けた。

夜風の冷たさと胸のカサブタは、ほんのり心地がよかった。

もう一度、無理やり欠伸をして空を仰いだ。

門出に相應しい、澄み渡った空……。

会場設営の騒々しさがなければ、このまま昼寝……いや、朝寝をし

てしまいそうだった。

「シカマル、もう来てたのか！」

やはり家に帰ってもう一休みをしようと思った時、豪快な声がかかる。

「あ、おはようございます五代目」

「暇ならちよっと手伝え」

「なんスか？」

「酒が足りなくなりそうなんだ。買い出しに行つて来い」

「足りなく……つて、それ、五代目が飲んでえだけじゃないっすか？」

「馬鹿者！ 作業員に振る舞うんだよ！ いいから行つて来い！」

「へいへい」

木ノ葉へ帰還して以来、最も雑に言いつけられた任務ではあったが、素直に街へ向かうことにする。

きつと火影も、手持ち無沙汰な自分を見て気を回してくれているのだろう……。

いや、火影自身が気を紛らわせたいのかもしれない。

「さーてと、チョウジ誘つて荷物持ちでもさせつか……！」

大きく伸びをして、もう一度空を見上げた。

「視界の端に薄い雲がひとつ、漂つて行く。」

風向きは、里の外……。

ずいぶん出来すぎな光景だと思いながら、のんびりと歩き出した。



## 風花

木ノ葉から伸びる道からは逸れたが、時おり商人や旅人とすれ違った。

サスケの左側で軽やかに歩を進めていたナナが、首をかしげる。

「こんな人通りのあるところを歩いてて大丈夫？」

サスケは落ち着き払って答えた。

「逆に、忍はこんなところを歩かないからな」

ナナはすぐに納得する。

「ああ、そっか。忍の世界じゃ有名人だもんね、サスケ」

「それはお前もだろ」

「あはは、そうかもね」

サスケはチラリとナナを見た。

「それに、もう少し行けば林業の作業員しか入らない道に入る。今は木材の伐採が禁止されている期間だから、そいつらと出くわすこともないだろう」

「禁止期間なの？」

「ああ、木ノ葉隠れの里の再建ラッシュで、木材をギリギリまで採りきったららしい」

「そんなこと、いつの間に調べてたの？」

「いや……カカシに聞いた」

ふーん、とうなずくナナは、どこか嬉しそうだった。

やがて、二人はサスケが話していた林道に入った。

まだ二人並んで歩けるほどの道幅はあったが、もうすれ違う者は無かった。

ナナの足取りはますます軽やかで、吹き付ける寒風にもかまわず、なかばサスケよりも先にたって歩いていた。

「ナナ、楽しそうだな」

思わず……サスケはそう話しかけた。

「あたりまえでしょう？」

ナナは立ち止まらずに振り返る。

「だって、これからずーっとサスケと一緒に居られるんだから」

さらりと出された言葉に、サスケは照れるでもなく苦笑する。

「そんなに嬉しいのか？」

「うん、嬉しい」

ナナはあつさりうなずいて、だがこう皮肉った。

「でも、まだ実感が無いかな」

離れていた時間の「重さ」をサスケに突き付けて、やり込めたという顔をする。

「そうだな……」

サスケも、素直に同意した。

ナナは笑って、歩みを緩める。

二人の肩が、また並んだ。

「本当に……」

マントが触れ合う布ずれの音に紛れて、サスケは言った。

「後悔していないのか……？」

もちろん彼は、ナナが一度決意したことに対して後悔などしないということを良く知っている。

だがそれでも……体中を覆う罪悪感が、その問いを出させた。

「まさか！」

ナナは大人びた目つきでサスケを見上げた。

「後悔なんてするわけないでしょう？ だいたい、サスケが『決める』

前に、私はとつくに『決めてた』んだから！」

それに関して、サスケは何も言い返せなかった。

ナナはあの時、「サスケの言葉が予想外でびっくりした」……と泣いたが、サスケのほうもナナの決断に驚いていた。

自分より他者を、私より公を重んじるナナが……サスケが初めて意志を伝えた途端に自分との道を選んだのだ。

誰に相談することもなく……。

「ナナ……」

「なに？」

サスケは、あの時ほんの少しだけ感じてそのままにしておいた「違和感」をナナに問う。

「お前……あの時オレと話す前に、サクラとシカマルと、我愛羅に伝えただって言ってたな」

「そうだよ」

「サクラはわかる……が、何故シカマルと我愛羅なんだ？」

「……ああ……！」

ナナは、サスケの問いの意味を知って納得したように声をあげ、すぐに答えを示した。

「二人は……私を想ってくれてたから」

その目は先ほどよりも、優しい眼差しになっていた。

「そのうちちゃんと話すけど、今はこれだけ言っておくね」

二人は同時に立ち止まった。

「戦場で、『私の始末』を最初にお願ひしたのは……シカマルなの」

サスケは黙って、ナナの言葉を聞いた。

「それと……もし砂隠れの里が暁に襲われた時に『勝てて』いたら、私はいろんなものから逃げて……ただ我愛羅に守られて生きていたかもしれない」

寸刻の沈黙。

ナナの実直な想いをサスケは受け止め、サスケの複雑な心境をナナが受けとめた。

「そうか……」

ナナの至極簡潔な説明で、彼女と彼らの想いを全て飲み込んだサスケは、小さくうなずいた。

それ以上、問うことなど無かった。

「アイツの言っていた本当の意味がわかった」

再び歩き出そうとしたナナの足が止まる。

「アイツって？」

「我愛羅だ」

「我愛羅がどうしたの？」

「五影会談の後、アイツがひとりで現れて……少し話をした」

「え？ そうだったの？ 我愛羅はなんにも言っていなかったけど……」

ナナは真剣な眼差しをサスケに向けた。

「何を話したの？」

『二度と、お前の大切なものから眼を逸らすな』……と、約束させられた」

わざわざ自分のところまで来て、それを約束させた我愛羅の想いを完全に理解しながら、サスケは呟くように言った。

「アイツの言う『大切なもの』は……お前のことだったんだな」

ナナはゆっくりと瞬きをして、フツと笑った。

そして、深まる罪悪感と、増す愛情と、少しの嫉妬に揺れるサスケを促す。

「行こう、サスケ」

先へ……。

「こんなふうには、これからは辛かったことも、嬉しかったことも、二人で話そうね」

「ナナ……」

再び、二人は肩を並べて歩き出す。

「ちゃんと、話そうね」

「今までのように、ひとりで抱え込まず」……と、ナナは眼で言った。

「ああ、そうだな……」

「一緒なら、大丈夫」だよね」

二人の視線が程よく絡む。

「痛みは消えないかもしれないが……和らげることがはできるはずだ」

サスケのその言葉に、ナナは心底嬉しそうに笑った。

「一緒にいられるんだもんね」

「ずっとな」

正面から突風が吹き付けた。

今度は二人同時に髪を直す。

今、もしサスケに左腕が存在していたら、二人の身体は触れていただろう。が、布が柔くこすれ合うだけだった。

「やっぱり風が冷たいね。ねえサスケ、これからどんどん寒くなるのに、どうしてわざわざ北に向かうの?」

「目的がある」

「その目的はいつ教えてくれるの?」

「向こうに着いたらな」

「向こうってどこ?」

「北の方だ」

「ふーん」

サスケの曖昧な答えをさして気にも止めず、ナナはあっけらかんと言った。

「べつにいいけど。しばらくはサスケについて行くだけだから。私はサスケの『監視役』だもんね」

「ああ、そうだな」

サスケは苦笑しつつ、ふいにこう言った。

「ナナ、右側を歩け」

当然、ナナは聞き返す?

「え? なんで?」

「そっちの方が都合がいい」

「どういう意味?」

「いいから、右に移動しろ……ほら」

「だって、いつ敵が来るかもわからないだし、一応サスケの左側を私がカバーしたほうが良いに決まってるじゃない」

ナナの言い分は正論だ。

だが、サスケは頑なだった。

無理やり、ナナの後ろに回り込もうとする。

「いいから」

「もう……! なんで?」

とうとう、いぶかしがるナナの左側に強引に割り込んだ。

「サ、サスケ?」

そして、唐突に右手でナナの左手を掴む。

「え……?」

サスケはしつかりと、その手を握った。

「たまには……こうして歩いてもいいだろう……」

止まりかけたナナの足が、引っ張られてやっと動く。

「サスケ……」

かすかにつぶやくナナの顔を見たサスケは、慌てて前方に視線を戻す。

「い、今さらそんな顔をするな……!」

「サ、サスケだって照れてるじゃない……!」

少しの間、枯れ草を踏みしめる音だけがした。

そして、互いに赤らんだ顔を見て……笑い合った。

「たまにはいいよね」

「たまにはな」

サスケが手を握り直すと、ナナは少し歩を速めて距離を縮めた。

確かに互いの体温を感じ合う。

この手はもう二度と……離れることはない。

そう確信した二人を祝福するように、空から風花が舞い降り始めた。

〈完〉